

原町市埋蔵文化財調査報告書第 29 集

県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ

泉廃寺跡 荒井前遺跡 荷渡遺跡

2002年3月

福島県相双農林事務所

原町市教育委員会

原町市埋蔵文化財調査報告書第29集

県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ

泉廃寺跡 荒井前遺跡 荷渡遺跡

2002年3月

福島県相双農林事務所

原町市教育委員会

序

文化財は、わが国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることのできなかった先人の生活の様子や文字がなかった時代の人々の生活や文化について私たちに多くの情報を与えてくれます。

近年、原町市内では広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつあります。その一方、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況のなか、教育委員会では開発によって失われてしまう埋蔵文化財について、図面や写真などによる記録保存のための発掘調査を実施しております。

本報告書は、高平地区ほ場整備事業に伴い失われてしまう泉廃寺跡の一部、荒前遺跡、荷渡遺跡について実施した発掘調査の成果報告書です。

調査の結果、泉廃寺跡では古代の行方郡役所に伴う掘立柱建物跡などの遺構、荒井前遺跡では古墳時代前期の住居跡と方形周溝墓、平安時代の小鍛冶遺構と大溝に投棄された多量の土器などが発見されました。

おわりに、調査にあたってご協力いただきました、福島県相双農林事務所、高平ほ場整備施行委員会、地権者の皆様に深く感謝するとともに、調査及び報告書刊行にあたってご指導、ご協力いただきました各位に衷心より謝意を表します。

平成14年3月

原町市長

鈴木 寛林

例 言

1. 本報告書は、平成6年度から平成12年度にかけて県営高平地区農業基盤整備事業に伴って実施した発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、福島県相双農林事務所からの委託を受けて、原町市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査に係る経費は、福島県相双農林事務所、原町市が負担した。
4. 本報告書に係る調査組織は、以下のとおりである。

調査主体 原町市教育委員会
 調査担当 原町市教育委員会文化財課文化財保護係
 係 長 堀 耕平
 主 査 二本松文雄（旧姓鈴木）
 文化財主事 荒 淑人
 発掘調査員 藤木 海

事務局 下表のとおり。








	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度
教 育 長	渡部 秀夫	渡部 秀夫	井 村 寛	千葉良則	鈴木清身	鈴木清身	鈴木清身	鈴木清身
教育次長・事務局長	中田 幸夫	横山 英夫						木幡新一
生涯学習部長・事務局理事			中善寺敏行	中善寺敏行	佐藤一男	佐藤一男	渡部紀佐夫	渡部紀佐夫
生涯学習部次長・事務局次長			佐藤禎一	佐藤一男	渡部紀佐夫	阿部敏夫	阿部敏夫	阿部敏夫
文化課長・文化財課長	佐藤一男	佐藤一男	佐藤一男	大内勝	阿部敏夫	阿部敏夫	阿部敏夫	阿部敏夫
主幹兼市史編纂室長				高倉一夫	高倉一夫	高倉一夫	高倉一夫	高倉一夫
係 長	佐藤一男 鈴木吉久	佐藤一男 高田毅	佐藤一男 高田毅	大内勝 高田毅	小田幸夫 山家正勝	小田幸夫 堀耕平	小田幸夫 堀耕平	堀耕平
係 員	平田良親	木幡雅巳	木幡雅巳	木幡雅巳	木幡雅巳	山内茂樹	山内茂樹	渡辺芳信
	堀耕平	鈴木文雄	鈴木文雄	鈴木文雄	鈴木文雄	鈴木文雄	鈴木文雄	二本松文雄
	斎藤直之	堀耕平	堀耕平	堀耕平	堀耕平	荒淑人	北山淑英	北山淑英
	館岡るみ	館岡るみ	荒淑人	荒淑人	荒淑人	佐藤祐太	荒淑人	荒淑人
			館岡るみ	網川裕子	安達訓仁	岩谷こずえ	藤木海	藤木海
					久松舞子	狭川麻子	狭川麻子	狭川麻子
				網川裕子	網川裕子	小林美枝子	小林美枝子	
					小林美枝子			

5. 本文の執筆は、第2・3編を二本松文雄が、第1編は堀 耕平・二本松文雄・荒 淑人・藤木 海が分担して行った。第1編については文末に文責を記した。
6. 本報告書に掲載した遺構図は堀、二本松、荒、藤木、安達、久松、佐藤、岩谷が作成し、遺構図の製図は狭川麻子、太田正子、遠藤和子、遠藤美恵子、新川幸子、寺内美智子、古谷洋子、山本恵子が行った。
7. 本報告書に掲載した遺物の実測図は、狭川、新川、安達、久松、佐藤、岩谷が作成し、実測図の製図は狭川、新川、古谷、山本が行った。
8. 本報告書に掲載した遺構、遺物の写真は、堀、二本松、荒、藤木、安達、久松、佐藤、岩谷が撮影した。
9. 発掘調査および整理において、以下の項目を委託した。
 空中写真撮影：新日本航測株式会社・有限会社東邦企画
 自然科学分析：パリノ・サーヴェイ株式会社（樹種同定・珪藻分析）
 保存処理：(株)ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石文化財保存処理センター
10. 調査の期間中及び報告書作成にあたって次の機関及び個人から協力を得ている。
 記して感謝の意を申しあげる。

文化庁文化財部記念物課、福島県教育庁文化課、福島県立博物館、岩手県盛岡市教育委員会、秋田県教育庁払田柵跡調査事務所、秋田県仙北町教育委員会、秋田県秋田市教育委員会、磯村幸男・坂井秀弥・榎宜田佳男（文化庁）、光谷拓実（独立行政法人奈良文化財研究所）、平川 南・仁藤敦史（国立歴史民俗博物館）、日下部善喜・寺島文隆・長島雄一・小林雄一（福島県教育庁）、森 幸彦・荒木 隆・青山弘樹（福島県文化財センター白河館 まほろん）、安田稔・飯村均（福島県文化センター）、松田隆史・菊地芳郎（福島県立博物館）、玉川一郎（福島県立富岡養護学校）、岡田茂弘・桑原滋郎・高野芳宏（東北歴史博物館）、村田晃一（宮城県教育委員会）、中島広顕（東京都北区教育委員会）、千葉孝弥・鈴木孝行（多賀城市埋蔵文化財調査センター）、佐藤敏幸（矢本町教育委員会）、長島栄一（仙台市教育委員会）、高橋誠明・大谷 基（古川市教育委員会）、嶋村一志（泉崎村教育委員会）、川田 強・佐川 久（小高町教育委員会）、熊谷公男・辻 秀人・佐川正敏（東北学院大学）、宮本長二郎（東北芸術工科大学）、三上喜孝（米沢女子短期大学）、大平 聡（宮城学院女子短期大学）、佐藤正人（尚綱女学院）、酒寄雅志（國學院大学栃木短期大学）、猪狩忠雄（いわき市教育文化事業団）、伊藤博幸・佐藤義和（水沢市埋蔵文化財調査センター）、藤沢 敦（東北大学埋蔵文化財調査センター）、鈴木 啓、福島県相双農林事務所、原町市土地改良区、高平ほ場整備施行委員会、泉地区行政区、高平地区行政区、菊地辰夫、佐藤光夫、横山 賢、横山元栄、鈴木健司、佐藤忠俊、石橋哲夫、佐藤美保子、渡辺正幸、遠藤忠清、青田光収、斎藤幸一、玉木義博、高橋 徹、木村 静、玉木 誠、松浦秀昭、斎藤典良・遠藤 行、鈴木勝夫、木幡祝夫、佐藤恒明、玉木義博、佐藤サトイ、青田光彦、新妻晴一、新妻達夫、高橋研一、遠藤裕男、佐藤光政

11. 調査で得られた資料は、原町市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 遺構平面図中の方位は、国家座標の北を示す。
2. セクション図に付された H= で示した数値は水系レベルの海拔高度である。
3. 掲載した遺構・遺物実測図の縮尺は、各挿図に示した。
4. 遺構・遺物実測図における網掛けによる表現は、表示のないものについては以下の方法に従っている。これ以外のものについては、各図にその内容を示した。
 (遺構)  = 地山  = 柱痕跡  = 焼土  = 旧表土
 (遺物)  = 須恵器断面・墨書  = 黒色処理  = 赤彩
5. 土層断面図における土層番号は、基本層位を L I・L II…、遺構堆積土を 1・2…と表記した。
6. 本文並びに図作成に際しては、以下の記号・略号を使用した。
 T：トレンチ、SB：建物跡、SI：竪穴住居跡、SD：溝跡、
 SK：土坑、SX：古墳・方形周溝墓または性格不明遺構
 P：ピット、PG：ピット群
7. 写真図版の縮尺は不同である。
8. 掲載した遺物については観察表にその内容を示した。観察表は各章末にまとめた。

目次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
図版目次

第1編 泉麿寺跡	
第1章 遺跡概要	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査地区と調査経過	4
第1節 調査地区	4
第2節 調査経過	4
第3節 調査要項	9
第3章 第1次調査	13
第1節 調査に至る経過	13
第2節 調査の方法	13
第3節 調査成果	14
第4節 まとめ	28
写真図版	
第4章 第3次調査	31
第1節 調査に至る経過	31
第2節 調査の方法	31
第3節 調査成果	32
第4節 まとめ	83
写真図版	
第5章 第5次調査	88
第1節 調査に至る経過	88
第2節 調査の方法	89
第3節 調査成果	89
第4節 まとめ	102
写真図版	
第6章 第7次調査	104
第1節 調査に至る経過	104
第2節 調査の方法	107
第3節 調査成果	107
第4節 まとめ	125
写真図版	
第7章 第7次調査(糠塚)	128
第1節 調査に至る経過	128
第2節 調査の方法	128
第3節 調査成果	129
第4節 まとめ	190
写真図版	
第8章 第9次調査	195
第1節 調査に至る経過	195
第2節 調査の方法	196
第3節 調査成果	196
第4節 まとめ	211
写真図版	
第9章 第15次調査	215
第1節 調査に至る経過	215

第2節	調査の方法	216
第3節	調査成果	217
第4節	まとめ	221
写真図版		
第2編	荒井前遺跡	223
第1章	調査に至る経過	223
第1節	調査経過	223
第2節	調査要項	229
第2章	調査の方法	230
第3章	調査成果	232
第1節	古墳	232
第2節	竪穴住居跡	242
第3節	掘立柱建物跡	252
第4節	溝跡・ピット群・土坑	255
第5節	近代井戸跡	299
第6節	遺構外出土遺物	300
第4章	まとめ	305
写真図版		
第3編	荷渡遺跡	315
第1章	調査に至る経過	315
第1節	調査経過	315
第2節	調査要項	315
第2章	遺跡の概要	316
第1節	位置と地形	316
第2節	周辺の遺跡	316
第3章	調査の方法	319
第4章	調査成果	319
第5章	まとめ	319
写真図版		
付編	自然科学分析	320
付章1	下北高平館跡・泉廃寺跡・泉平館跡から出土した木材の樹種	320
付章2	泉廃寺跡1号溝跡最下層の珪藻分析	323

挿図目次

第1編 泉廃寺跡

図1	泉廃寺跡関連遺跡分布図	2	図13	瓦類(2)	26
図2	泉廃寺跡グリッド・調査区配置図	5	図14	瓦類(3)	27
図3	泉廃寺跡全体遺構配置図	11	図15	瓦類(4)	28
図4	第1次調査トレンチ配置図	15	図16	第3次調査区グリッド配置図	31
図5	遺構検出トレンチ平面図	17	図17	基本土層図	32
図6	寺家前地区遺構配置図	18	図18	古代遺構配置図	33
図7	1号礎石建物跡	19	図19	1号掘立柱建物跡	36
図8	1号掘立柱建物跡	20	図20	2号掘立柱建物跡	37
図9	1～3号溝跡	22	図21	3号掘立柱建物跡	38
図10	1号土坑	23	図22	1号柱列	39
図11	第1次調査出土土器類	24	図23	2号柱列	40
図12	瓦類(1)	25	図24	1号溝跡	42

図 25	2号溝跡	43	図 83	土坑	114
図 26	1号溝跡跡出土遺物	44	図 84	B地区平面図	116
図 27	土坑(1) 1号土坑	45	図 85	出土遺物(1)	117
図 28	1号土坑出土遺物	45	図 86	出土遺物(2)	119
図 29	土坑(2) 2~5・6号土坑	46	図 87	出土遺物(3)	121
図 30	土坑(3) 7~9号土坑	47	図 88	出土遺物(4)	122
図 31	土坑(4) 10~12号土坑	48	図 89	出土遺物(5)	123
図 32	1号不明遺構	49	図 90	出土遺物(6)	124
図 33	1号不明遺構出土遺物(1)	50	図 91	第7次調査区(糠塚)位置図	129
図 34	1号不明遺構出土遺物(2)	51	図 92	第7次調査(糠塚)全体図	131
図 35	1号不明遺構出土遺物(3)	52	図 93	糠塚測量図・トレンチ配置図	133
図 36	2号不明遺構	53	図 94	10・11号溝跡	135
図 37	3号不明遺構	54	図 95	糠塚土層断面図	136
図 38	2号不明遺構出土遺物	54	図 96	1号溝跡遺物出土状況図	137
図 39	中世遺構全体図	56	図 97	糠塚出土遺物(1)	138
図 40	3号溝跡	58	図 98	糠塚出土遺物(2)	139
図 41	4号溝跡	59	図 99	糠塚出土遺物(3)	140
図 42	土坑(5) 13号土坑	60	図 100	土塁土層断面図	142
図 43	土坑(6) 14~16号土坑	61	図 101	23号掘立柱建物跡	144
図 44	土坑(7) 17・18号土坑	62		土層断面(1)	
図 45	土坑(8) 20~23号土坑	63	図 102	23号掘立柱建物跡	145
図 46	土坑(9) 24・25号土坑	64	図 103	23号掘立柱建物跡	
図 47	土坑出土遺物	65		土層断面(2)	146
図 48	土器・陶磁器(1)	67	図 104	24号掘立柱建物跡	147
図 49	土器・陶磁器(2)	68	図 105	24号掘立柱建物跡土層断面図	148
図 50	土器・陶磁器(3)	69	図 106	25号掘立柱建物跡	150
図 51	土器・陶磁器(4)	70	図 107	26号掘立柱建物跡	151
図 52	土器・陶磁器(5)	71	図 108	28号掘立柱建物跡・36号土坑	152
図 53	土器・陶磁器(6)	72	図 109	28号掘立柱建物跡	
図 54	石製品・土製品(1)	72		土層断面(1)	153
図 55	石製品・土製品(2)	73	図 110	28号掘立柱建物跡	
図 56	瓦類(1)	74		土層断面(2)	154
図 57	瓦類(2)	75	図 111	29号掘立柱建物跡	155
図 58	瓦類(3)	76	図 112	29号掘立柱建物跡土層断面図	156
図 59	瓦類(4)	77	図 113	30号掘立柱建物跡	158
図 60	瓦類(5)	78	図 114	30号掘立柱建物跡土層断面図	159
図 61	瓦類(6)	79	図 115	31号掘立柱建物跡	160
図 62	瓦類(7)	80	図 116	31号掘立柱建物跡土層断面図	161
図 63	瓦類(8)	81	図 117	32号掘立柱建物跡	162
図 64	瓦類(9)	82	図 118	32号掘立柱建物跡土層断面図	163
図 65	瓦類(10)	83	図 119	33号掘立柱建物跡	
図 66	瓦類(11)	83		10号柱列・16号土坑	164
図 67	第5次調査区位置図	88	図 120	33号掘立柱建物跡土層断面図	165
図 68	第5次調査区全体図	90	図 121	34号掘立柱建物跡、	166
図 69	1号掘立柱建物跡	91		16号土坑土層断面図	
図 70	2号掘立柱建物跡	93	図 122	9号柱列	168
図 71	3号掘立柱建物跡	94	図 123	5~9号溝跡	170
図 72	4号掘立柱建物跡	95	図 124	12・13号溝跡、6・35号土坑	171
図 73	5号掘立柱建物跡	96	図 125	14号溝跡	172
図 74	1号溝跡	97	図 126	15号溝跡、12・13号土坑	173
図 75	土坑	100	図 127	溝跡出土遺物	174
図 76	出土遺物	101	図 128	5・7・9・10号土坑	176
図 77	第7次調査区位置図	104	図 129	11・15号土坑	177
図 78	第7次調査区全体図	105	図 130	14・37号土坑	178
図 79	1号掘立柱建物跡	108	図 131	17~25号土坑	179
図 80	柱穴掘方	109	図 132	17~24号土坑土層断面	180
図 81	溝跡1	111	図 133	26・29号土坑	181
図 82	溝跡2	112	図 134	31~33・38・39号土坑	182

図 135	土坑出土遺物 (1)	183
図 136	土坑出土遺物 (2)	184
図 137	遺構外出土遺物 (1)	185
図 138	遺構外出土遺物 (2)	186
図 139	瓦類 (1)	187
図 140	瓦類 (2)	188
図 141	瓦類 (3)	189
図 142	第9次調査区位置図	195
図 143	第9次調査区全体図	197
図 144	1号溝跡	198
図 145	土坑 (1)	199
図 146	土坑 (2)	201
図 147	土坑 (3)	203

第2編 荒井前遺跡

図 1	荒井前遺跡位置図	224
図 2	トレンチ配置図	225
図 3	保存範囲	228
図 4	グリッド配置図	231
図 5	荒井前遺跡全体図	233
図 6	1号墳	235
図 7	1号墳遺物出土状況図	236
図 8	2号墳	238
図 9	2号墳遺物出土状況図	239
図 10	1号墳出土遺物 (1)	240
図 11	1号墳出土遺物 (2)・ 2号墳出土遺物	241
図 12	1号住居跡	243
図 13	1号住居跡土層断面	244
図 14	1号住居跡出土遺物 (1)	245
図 15	1号住居跡出土遺物 (2)	246
図 16	2号住居跡	247
図 17	3号住居跡	249
図 18	4号住居跡	250
図 19	3・4号住居跡出土遺物	251
図 20	1・2号掘立柱建物跡	253
図 21	3号掘立柱建物跡	254
図 22	1号溝跡	256
図 23	2号溝跡	257
図 24	2号溝跡土層断面	258
図 25	2号溝跡遺物集中箇所	259
図 26	2号溝跡中央部分	260
図 27	2号溝跡、42・58～67 土坑	261
図 28	2号溝跡出土遺物 (1)	262
図 29	2号溝跡出土遺物 (2)	263
図 30	2号溝跡出土遺物 (3)	264
図 31	2号溝跡出土遺物 (4)	265
図 32	3号溝跡	266
図 33	3号溝跡出土遺物	267
図 34	4・5号溝跡	268
図 35	4・5号溝跡、1号ピット群 10・11・13号土坑土層断面	269
図 36	4・6号溝跡、 15～18・20号土坑	270

図 148	出土遺物 (1) 土師器	204
図 149	出土遺物 (2) 土師器	206
図 150	出土遺物 (3) 土師器・須恵器	208
図 151	出土遺物 (4) 瓦	209
図 152	出土遺物 (5) 瓦	210
図 153	出土遺物 (6) 鉄鏃	211
図 154	第15次調査区位置図	215
図 155	第15次調査区 グリッド配置図	216
図 156	第15次調査区遺構配置図	217
図 157	1号溝跡	218
図 158	2・3号溝跡、1号土坑	220
図 159	第15次調査区出土遺物	221
図 37	4・6号溝跡、15～17号土坑 土層断面	271
図 38	4号溝跡出土遺物	271
図 39	5号ピット群	272
図 40	7号溝跡、70号土坑	274
図 41	8号溝跡、9号土坑	275
図 42	1号ピット群出土遺物 (1)	276
図 43	1号ピット群出土遺物 (2) 2・3号ピット群出土遺物	277
図 44	8号遺跡出土遺物	277
図 45	4号ピット群、8号土坑	278
図 46	1号土坑	280
図 47	4・12・21・23・33号土坑	281
図 48	7号土坑	282
図 49	7・11・12・15・17号土坑 出土遺物	283
図 50	24・35号土坑	284
図 51	24・40・41号土坑出土遺物	285
図 52	34・43号土坑出土遺物	286
図 53	35号土坑出土遺物	286
図 54	38・40・52号土坑、近代洗い場	287
図 55	41・50号土坑	288
図 56	38・40・41・50・52号土坑	289
図 57	43・44・45・49号土坑	290
図 58	44～48・50・51号土坑 出土遺物	291
図 59	51・62・68号土坑	292
図 60	52～54号土坑出土遺物	293
図 61	56～58・64・67号土坑 出土遺物	294
図 62	67・69・70号土坑出土遺物	295
図 63	71号土坑	296
図 64	71号土坑出土遺物 (1)	297
図 65	71～73号土坑出土遺物	298
図 66	74・77号土坑出土遺物	299
図 67	1・2号井戸跡	300
図 68	B 8-92遺物出土状況図	301
図 69	27T・B・Cグリッド出土遺物	302
図 70	Cグリッド出土遺物	303
図 71	Dグリッド出土遺物	304

第3編 荷渡遺跡

図1 荷渡遺跡位置図 316
 図2 荷渡遺跡トレンチ配置図 317

図3 荷渡遺跡基本層序 318

図版目次

第1編 泉麿寺跡

図版 1 第1次調査
 図版 2 第1次調査 町池・塚越・宮前・町地区
 図版 3 第1次調査 寺家前地区
 図版 4 第1次調査 遺物 (1)
 図版 5 第1次調査 遺物 (2)
 図版 6 第3次調査 遺構 (1)
 図版 7 第3次調査 遺構 (2)
 図版 8 第3次調査 遺構 (3)
 図版 9 第3次調査 遺構 (4)
 図版 10 第3次調査 遺構 (5)
 図版 11 第3次調査 遺物 (1)
 図版 12 第3次調査 遺物 (2)
 図版 13 第3次調査 遺物 (3)
 図版 14 第3次調査 遺物 (4)
 図版 15 第3次調査 遺物 (5)
 図版 16 第3次調査 遺物 (6)
 図版 17 第3次調査 遺物 (7)
 図版 18 第3次調査 遺物 (8)
 図版 19 第3次調査 遺物 (9)
 図版 20 第5次調査 遺構 (1)
 図版 21 第5次調査 遺構 (2)
 図版 22 第5次調査 遺構 (3)
 図版 23 第5次調査 遺構 (4)
 図版 24 第5次調査 遺構 (5)
 図版 25 第5次調査 遺構 (6)
 図版 26 第5次調査 遺構 (7)
 図版 27 第5次調査 遺構 (8)
 図版 28 第5次調査 遺物
 図版 29 第7次調査 遺構 (1)
 図版 30 第7次調査 遺構 (2)

図版 31 第7次調査 遺物 (1)
 図版 32 第7次調査 遺物 (2)
 図版 34 第7次調査 遺物 (3)
 図版 35 第7次調査 遺物 (4)
 図版 36 第7次調査 遺物 (5)
 図版 37 第7次調査 (糠塚) 全景 (1)
 図版 38 第7次調査 (糠塚) 全景 (2)
 図版 39 第7次調査 (糠塚) 全景 (3)
 図版 40 第7次調査 (糠塚) 全景 (4)
 図版 41 第7次調査 (糠塚) 遺構 (1)
 図版 42 第7次調査 (糠塚) 遺構 (2)
 図版 43 第7次調査 (糠塚) 遺構 (3)
 図版 44 第7次調査 (糠塚) 遺構 (4)
 図版 45 第7次調査 (糠塚) 遺構 (5)
 図版 46 第7次調査 (糠塚) 遺構 (6)
 図版 47 第7次調査 (糠塚) 遺構 (7)
 図版 48 第7次調査 (糠塚) 遺構 (8)
 図版 49 第7次調査 (糠塚) 遺構 (9)
 図版 50 第7次調査 (糠塚) 遺構 (10)
 図版 51 第7次調査 (糠塚) 遺物 (1)
 図版 52 第7次調査 (糠塚) 遺物 (2)
 図版 53 第7次調査 (糠塚) 遺物 (3)
 図版 54 第9次調査 遺構 (1)
 図版 55 第9次調査 遺構 (2)
 図版 56 第9次調査 遺構 (3)
 図版 57 第9次調査 遺物 (1)
 図版 58 第9次調査 遺物 (2)
 図版 59 第9次調査 遺物 (3)
 図版 60 第15次調査 (1)
 図版 61 第15次調査 (2)

第2編 荒井前遺跡

図版 1 荒井前遺跡 遺構 (1)
 図版 2 荒井前遺跡 遺構 (2)
 図版 3 荒井前遺跡 遺構 (3)
 図版 4 荒井前遺跡 遺構 (4)
 図版 5 荒井前遺跡 遺構 (5)
 図版 6 荒井前遺跡 遺構 (6)
 図版 7 荒井前遺跡 遺構 (7)
 図版 8 荒井前遺跡 遺構 (8)
 図版 9 荒井前遺跡 遺構 (9)
 図版 10 荒井前遺跡 遺構 (10)
 図版 11 荒井前遺跡 遺構 (11)
 図版 12 荒井前遺跡 遺構 (12)
 図版 13 荒井前遺跡 遺構 (13)
 図版 14 荒井前遺跡 遺構 (14)

図版 15 荒井前遺跡 遺構 (15)
 図版 16 荒井前遺跡 遺物 (1)
 図版 17 荒井前遺跡 遺物 (2)
 図版 18 荒井前遺跡 遺物 (3)
 図版 19 荒井前遺跡 遺物 (4)
 図版 20 荒井前遺跡 遺物 (5)
 図版 21 荒井前遺跡 遺物 (6)
 図版 22 荒井前遺跡 遺物 (7)
 図版 23 荒井前遺跡 遺物 (8)
 図版 24 荒井前遺跡 遺物 (9)
 図版 25 荒井前遺跡 遺物 (10)
 図版 26 荒井前遺跡 遺物 (11)
 図版 27 荒井前遺跡 遺物 (12)
 図版 28 荒井前遺跡 遺物 (13)

第3編 荷渡遺跡

図版 荷渡遺跡

付編 自然科学分析

図版 1 木材 (1)

図版 2 木材 (2)

図版 3 木材 (3)

図版 1 珪藻化石

表目次

第 1 編 泉麿寺跡

表 1	S B 1 柱穴計測表	18	表 41	5 号溝跡出土遺物観察表	192
表 2	第 1 次調査区出土 土器類観察表	30	表 42	9 号溝跡出土遺物観察表	192
表 3	第 1 次調査区出土瓦観察表	30	表 43	11 号溝跡出土遺物観察表	192
表 4	S B 1 柱穴計測値	35	表 44	12 号溝跡出土遺物観察表	192
表 5	S B 2 柱穴計測値	35	表 45	5 号土坑出土遺物観察表	192
表 6	S B 3 柱穴計測値	37	表 46	6 号土坑出土遺物観察表	192
表 7	S A 1 柱穴計測値	38	表 47	9 号土坑出土遺物観察表	192
表 8	S A 2 柱穴計測値	39	表 48	12 号土坑出土遺物観察表	192
表 9	古代土坑計測値	44	表 49	14 号土坑出土遺物観察表	193
表 10	中世土坑計測値	59	表 50	17 号土坑出土遺物観察表	193
表 11	1 号溝跡出土土器観察表	85	表 51	20 号土坑出土遺物観察表	193
表 12	1 号土坑出土土器観察表	85	表 52	23 号土坑出土遺物観察表	193
表 13	1 号不明遺構出土 土器観察表	85	表 53	25 号土坑出土遺物観察表	193
表 14	2 号不明遺構出土 土器観察表	85	表 54	28 号土坑出土遺物観察表	193
表 15	13 号土坑出土 土器・陶磁器観察表	85	表 55	29 号土坑出土遺物観察表	193
表 16	19 号土坑出土 土器・陶磁器観察表	85	表 56	32 号土坑出土遺物観察表	193
表 17	21 号土坑出土土器観察表	85	表 57	35 号土坑出土遺物観察表	193
表 18	23 号土坑出土土器観察表	85	表 58	G 7 グリッド出土遺物 観察表	193
表 19	24 号土坑出土土器観察表	85	表 59	G 8 グリッド出土遺物 観察表	193
表 20	第 3 次調査区出土土器・ 陶磁器・瓦観察表	86	表 60	G 8 ピット群出土遺物 観察表	193
表 21	第 5 次調査区出土 土器観察表	103	表 61	G 9 グリッド出土遺物 観察表	194
表 22	第 5 次調査区出土瓦観察表	103	表 62	2 号トレンチ出土遺物 観察表	194
表 23	第 7 次調査区出土 土器・陶磁器観察表	127	表 63	3 号トレンチ出土遺物 観察表	194
表 24	第 7 次調査区出土瓦観察表	127	表 64	4 号トレンチ出土遺物 観察表	194
表 25	S B 2 3 柱穴計測値	141	表 65	5 号トレンチ出土遺物 観察表	194
表 26	S B 2 4 柱穴計測値	143	表 66	6 号トレンチ出土遺物 観察表	194
表 27	S B 2 5 柱穴計測値	143	表 67	第 7 次 (糠塚) 調査区 出土遺物観察表	194
表 28	S B 2 6 柱穴計測値	147	表 68	第 9 次調査区出土土器 観察表	213
表 29	S B 2 8 柱穴計測値 1 期	149	表 69	第 9 次調査区出土瓦 観察表	214
表 30	S B 2 8 柱穴計測値 2 期	149	表 70	第 15 次調査区出土 土器・陶磁器観察表	222
表 31	S B 2 8 柱穴計測値 3 期	149	表 71	第 15 次調査区 出土瓦観察表	222
表 32	S B 2 9 柱穴計測値	150			
表 33	S B 3 0 柱穴計測値	157			
表 34	S B 3 1 柱穴計測値	157			
表 35	S B 3 2 柱穴計測値	165			
表 36	S B 3 3 柱穴計測値	167			
表 37	S B 3 4 柱穴計測値	167			
表 38	S A 9 柱穴計測値	167			
表 39	土坑計測表	173			
表 40	糠塚出土遺物観察表	192			

第2編 荒井前遺跡

表 1	S I 1	ピット計測値	242	表 28	34号土坑出土土器	観察表	311
表 2	S I 2	ピット計測値	242	表 29	40号土坑出土土器	観察表	311
表 3	S I 3	ピット計測値	248	表 30	41号土坑出土土器	観察表	311
表 4	S I 4	ピット計測値	248	表 31	43号土坑出土土器	観察表	311
表 5	S B 1	柱穴計測値	252	表 32	44号土坑出土土器	観察表	311
表 6	S B 2	柱穴計測値	252	表 33	45号土坑出土土器	観察表	311
表 7	S B 3	柱穴計測値	252	表 34	46号土坑出土土器	観察表	312
表 8	S D 2	ピット計測値	255	表 35	47号土坑出土土器	観察表	312
表 9		土坑計測表	279	表 36	48号土坑出土土器	観察表	312
表 10	1号墳	出土土器観察表	307	表 37	50号土坑出土土器	観察表	312
表 11	2号墳	出土土器観察表	307	表 38	51号土坑出土土器	観察表	312
表 12	1号住居跡	出土土器観察表	308	表 39	52号土坑出土土器	観察表	312
表 13	3号住居跡	出土土器観察表	308	表 40	53号土坑出土土器	観察表	312
表 14	4号住居跡	出土土器観察表	308	表 41	54号土坑出土土器	観察表	312
表 15	2号溝跡	出土土器観察表	308	表 42	56号土坑出土土器	観察表	312
表 16	3号溝跡	出土土器観察表	309	表 43	57号土坑出土土器	観察表	312
表 17	4号溝跡	出土土器観察表	310	表 44	58号土坑出土土器	観察表	313
表 18	8号溝跡	出土土器観察表	310	表 45	67号土坑出土土器	観察表	313
表 19	1号ピット群	出土土器観察表	310	表 46	69号土坑出土土器	観察表	313
表 20	2号ピット群	出土土器観察表	310	表 47	70号土坑出土土器	観察表	313
表 21	3号ピット群	出土土器観察表	310	表 48	71号土坑出土土器	観察表	313
表 22	7号土坑	出土土器観察表	310	表 49	72号土坑出土土器	観察表	313
表 23	11号土坑	出土土器観察表	310	表 50	73号土坑出土土器	観察表	313
表 24	12号土坑	出土土器観察表	310	表 51	74号土坑出土土器	観察表	313
表 25	15号土坑	出土土器観察表	311	表 52	77号土坑出土土器	観察表	314
表 26	17号土坑	出土土器観察表	311	表 53	27号トレンチ	出土土器観察表	314
表 27	24号土坑	出土土器観察表	311	表 54	Bグリッド	出土土器観察表	314
				表 55	Cグリッド	出土土器観察表	314
				表 56	Dグリッド	出土土器観察表	314

第1編 泉廃寺跡

第1章 遺跡概要

第1節 地理的環境

遺跡の所在する高平地区周辺の地形は、阿武隈高地から派生し東西に連なる低丘陵と、原町市北部を東流し太平洋に注ぐ新田川の氾濫によって開析された沖積低地とで構成されている。泉はこの新田川の河口にほど近い位置にある。遺跡は新田川左岸の河岸段丘上に立地し、低丘陵を背後に控え、新田川を南に望む。従って遺跡の乗る地形は南へ向かって緩く傾斜している。遺跡は東西に連なる丘陵の裾に貼りつくように横に長く広がり、また遺跡の南側では試掘調査の際に広範な泥炭層が確認され、低湿地が広がっていたものと考えられる。現在、遺跡の範囲は東西約1 km、面積約120,000 m²と推定されている。

遺跡の現況は大半がこの丘陵裾から沖積低地を利用した水田であり、東西に走る丘陵の南側裾や微高地に貼りつくかたちで宅地や畑が営まれるとともに、南へ傾斜する地形を棚田状に造成した水田がひろがっている。

第2節 歴史的環境

本節では、泉廃寺跡に遺された遺構・遺物のうち主要な部分を占める古代および中世後期から近世に至る歴史的環境について、泉周辺地域を中心として述べることとする（図1）。

（1）古代

原町市周辺は、古代の国郡制下においては陸奥国行方郡に属する。『倭名類聚抄』によれば、行方郡は吉名・大江・多珂・子鶴・真野・真敏の6郷からなる下郡であり、その範囲は現在の原町市・鹿島町・小高町・飯舘村を合わせたほどの範囲と推定されている。

『続日本紀』宝亀5（774）年7月20日条には、「陸奥國行方郡災。焼穀類二万五千四百餘斛」と記述され、行方郡家の正倉院が火災に遭っていたことが記されている。同条の記事は行方郡家そのものについて記述された唯一の文献史料であり、泉廃寺跡から出土する炭化米との関連が推定されている。

行方郡家と同時代の遺跡をみると、泉廃寺跡の南約6 kmに位置する大甕には、泉廃寺跡に瓦を供給した京塚沢窯跡がある。同窯跡は泉廃寺跡出土の軒先瓦のなかで量的に主体となる花葉文軒丸瓦や細弁蓮華文軒丸瓦、釣針文軒平瓦を生産した瓦窯跡と考えられ、泉廃寺跡を主な供給地とした窯跡であったと考えられる。また、泉廃寺跡から新田川を約4 kmほど上流に遡った

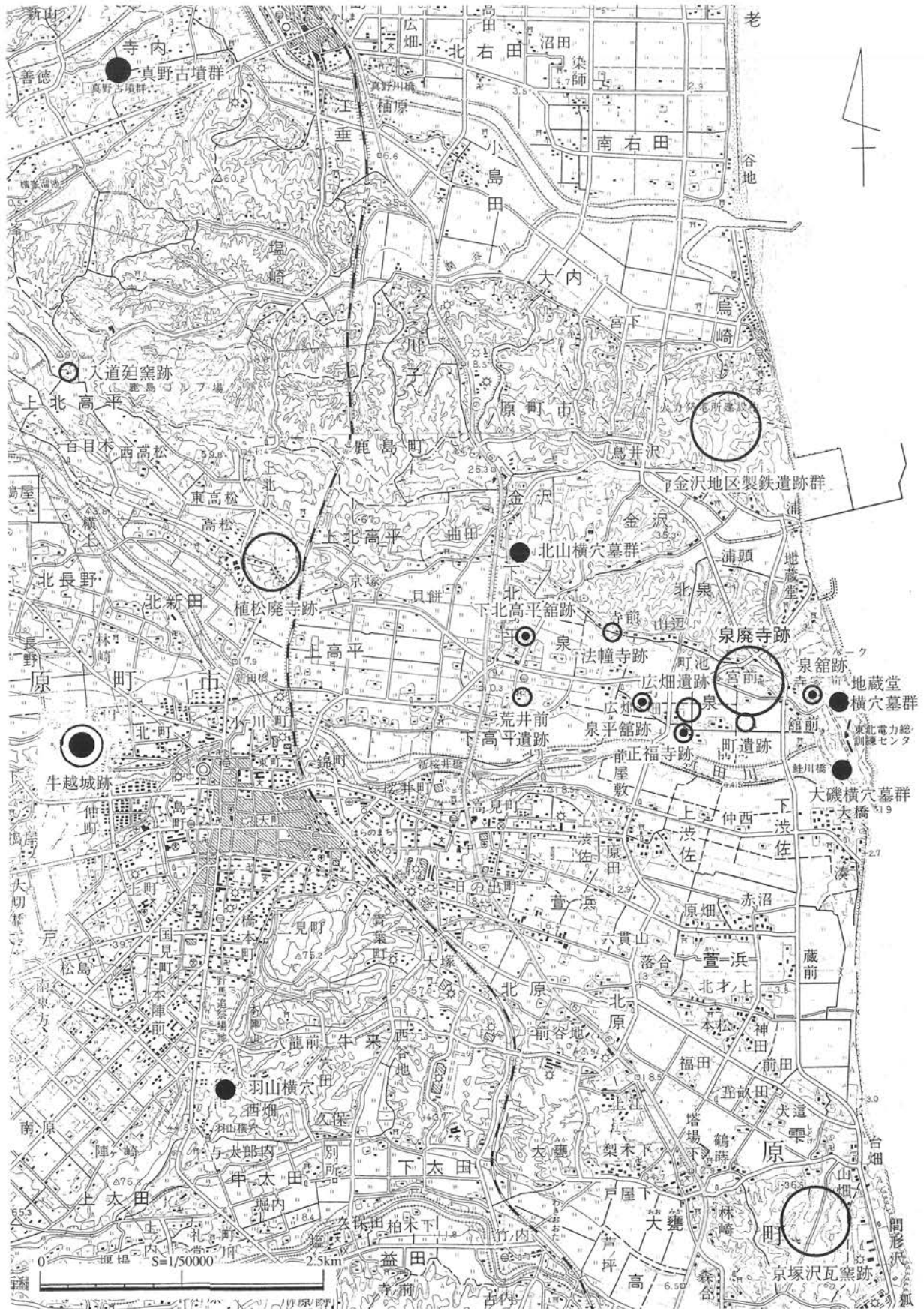


図1 泉廃寺関連主要遺跡分布図

同一丘陵上に位置する植松廃寺跡でも瓦が出土しており、寺院・官衙関連遺跡と推定されている。植松廃寺に瓦を供給したのは、新田川をさらに2.5km遡った同一丘陵上に位置する入道迫窯跡である。

泉周辺地域に目を向けてみると、南西約250mの位置に、平安時代の集落遺跡である広畑遺跡が所在する。当事業に伴って行われた第3次調査では、同規模の掘立柱建物跡4棟が直列に配置された施設が確認され、この建物跡を切る溝跡からは、「厨」と記されたものをはじめとした多量の墨書土器が出土している。また、南約100mの地点には平安時代に属する竪穴住居跡・掘立柱建物跡が確認された町遺跡、西約1kmの同一丘陵上には平安時代の竪穴住居跡と小規模な掘立柱建物跡が確認された法幢寺跡が位置している。

泉廃寺跡の北約1.5kmの北泉には、製鉄炉123基・木炭窯151基・鍛冶炉20基などが確認された金沢地区製鉄遺跡群が位置している。炉跡の調査数は国内最大で、膨大な廃滓量から知られる圧倒的な物量と合わせ、国家的な事業として生産が行われた一大製鉄地帯と考えられる。

(2) 中・近世

中・近世において当地域は、奥州中村藩の領内に属することとなる。その領主である相馬氏については、『奥相志』をはじめとする豊富な文献史料が残っている。

埋蔵文化財についてみると、牛越には慶長2(1597)から同8(1603)年までの間に相馬氏の居城となった牛越城跡が所在している。また上渋佐等市内一円には、寛文6(1666)年以降に築かれた野馬土手の一部が残っている。野馬土手は、相馬氏が野馬追のために野生馬の保護を奨励した結果、増殖した野生馬を囲い込むことを目的として築かれたもので、相馬氏によって伝承されてきた相馬野馬追に関する唯一の考古学的資料として重要な意義をもつ近世遺構である。

泉周辺地域をみると、当遺跡の東約500mには相馬氏の一族であった泉氏が築いた山城である市指定史跡泉の館跡が位置している。また、当事業によって発掘調査が実施されることとなった泉平館跡は、相馬氏の重臣であった岡田八兵衛宣胤が慶長2(1597)年から同16年までの間に居住した方形館である。下北高平には、金沢氏の居館とされる下北高平館跡が位置している。当館跡も堀と土塁に圍繞された方形館と考えられ、周囲には低湿地が広がっている。泉平館跡と同じく当事業に伴って発掘調査が行なわれ、武須川の旧河道に護岸のための杭やシガラミが残っていた。また、泉平館跡の北約500mの地点には、岡田氏の菩提寺であった岡田山法幢寺の墓地跡が確認されている。ここでは、19世紀前葉から幕末頃と推定される160基を超える土坑墓が確認され、銅銭や大堀相馬焼を中心とした豊富な副葬品が出土している。一方、町畑に位置する正福寺跡では28基の火葬墓が確認されている。

これら中世末～近世の遺跡は、原町市に有形・無形の文化財を遺すこととなった相馬氏や、その支配下に置かれた農村の実態を今日に伝えるものである。

第2章 調査地区と調査経過

第1節 調査地区

泉廃寺跡は、原町市泉の字町池・宮前・寺家前・町・館前にまたがる約 120,000 m²の広がりをもつ。このうち礎石の分布する字宮前と寺家前の一部約 49,000 m²が昭和 30 年に県指定地となっている。「泉廃寺跡」の遺跡名は、もともとはこの県指定地を指し、その後、発掘調査の進展にしたがって、それまで町池遺跡・館前遺跡ないし館前廃寺などと呼ばれていた各地区でも行方郡家に関連する遺構・遺物が確認され、これらも泉廃寺跡に含められることとなった。

現在は、泉廃寺跡を小字名にしたがって町池・宮前・寺家前・町・館前の 5 地区に区分し、調査地点を設定している。これに従えば、今回報告するもののうち、第 1 次調査区は遺跡全域に広がり、それ以外の第 3・5・7・9・15 次調査区は全て町地区に属することとなる。

また、発掘調査を行うにあたって、遺跡全体に調査グリッドを設定することとした（図 2）。調査グリッドは、建設省告示に定められた平面直角座標（いわゆる国家座標）第 IX 系に準拠し、X=183.600m、Y=103.850m を原点とする 50m 四方の方眼を大グリッドとした。大グリッド番号は原点から東へ順に 0・1・2…、南へ順に Y・Z・A・B・C…とした。南北方向が A から始まらないのは、グリッドを設定した当初には、Y・Z とした部分に遺跡は広がらないと推定されていたためである。さらにこの大グリッドを一辺 5m の 100 の小グリッドに分割し、北西隅を 00 として西から東へ平行に進んで南東隅のものを 99 と番号を付した。小グリッドは「大グリッド名-小グリッド名」（例：A1-00 グリッド）で呼称することとし、発掘調査での遺物の取り上げや、調査報告編集の際に遺構の絶対的位置を表記するにあたっては、この大・小グリッド名を利用した。各調査区の位置は、図 2 のとおりである。

第2節 調査経過

泉廃寺跡は建物跡の礎石が残存していることや、古瓦・焼米が出土することで古くから知られており、昭和 30 年には約 49,000 m²が福島県の史跡指定を受けていたが、遺跡の内容を明らかにするための調査は、昭和 40 年に福島県立原町高等学校郷土史研究クラブによって行なわれた礎石・根石の分布調査を除いて実施されておらず、遺跡の性格や遺構の広がりについてはほとんど判明していない状況にあった。

平成 5 年になると、昭和 30 年の耕地整理で約 10 a の区画整理が行われて以来、耕地整理が行われていなかった原町市高平地区について、福島県相双農林事務所と高平地区ほ場整備施行委員会により、「低コスト化水田農業大区画ほ場整備による担い手育成基盤整備事業」の計画が策定されることとなり、原町市土地改良区から事業計画予定地における埋蔵文化財の有無について照会が提出された。原町市教育委員会は上記照会に対して、福島県指定史跡泉廃寺跡を含む 5 遺跡（後の調査で 9 遺跡となる）が所在しており、開発行為に際しては発掘調査が必要であると回答した。以後、平成 6 年度から面整備工事が開始され、発掘調査はこれと平行して進

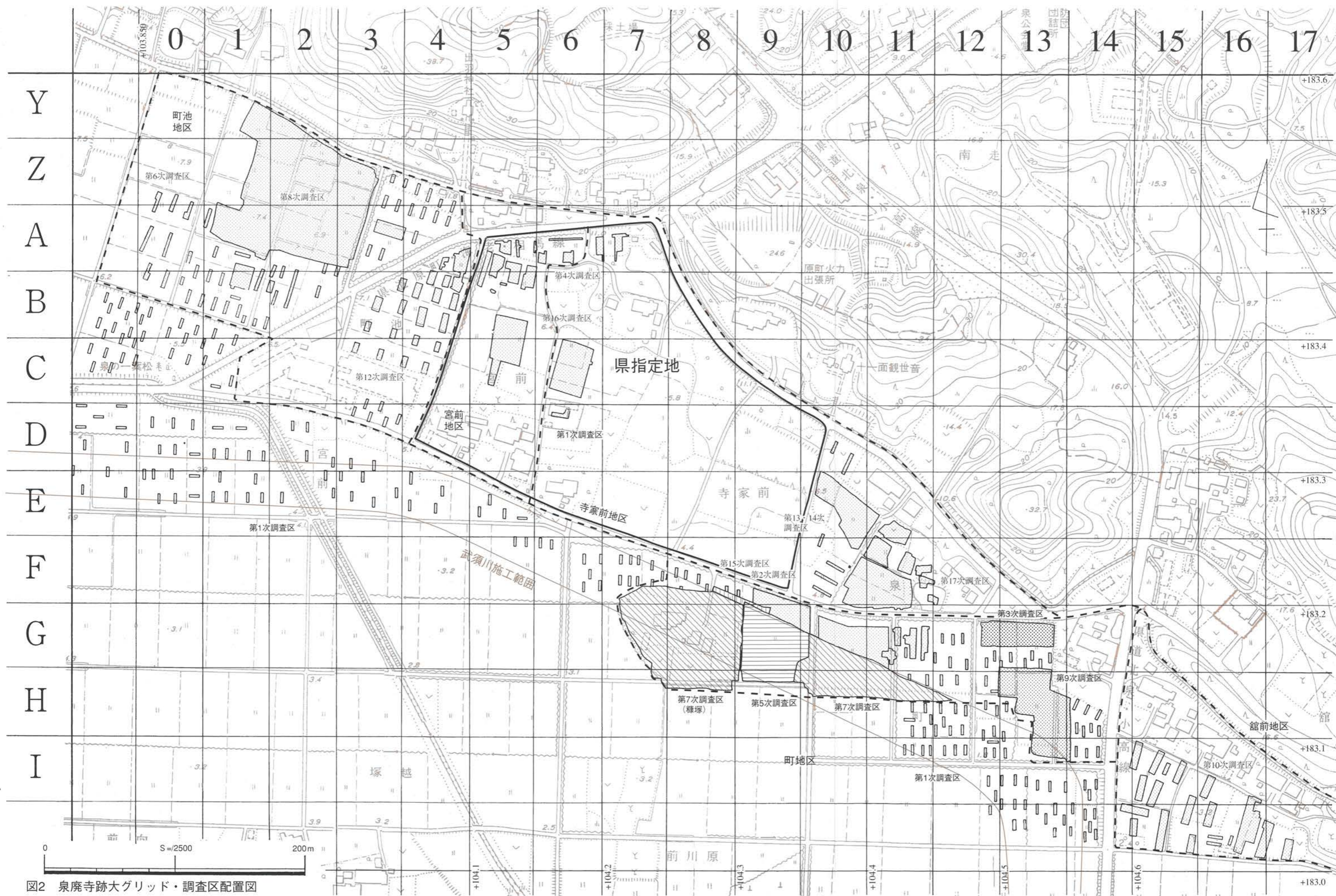


図2 泉廃寺跡大グリッド・調査区配置図

められることとなった。

泉廃寺跡の発掘調査は、平成13年現在までに17次を数え、このうち第1・4・6・10・11・12次調査は遺構の有無を確認することを目的とした試掘調査、第2・8・13次調査は遺構の内容を確認し保存協議の資料を得るための確認調査、第3・5・7・9・15次調査は記録保存のための本調査である(図3)。また平成12年度以降、泉廃寺跡保存整備のための確認調査として第14・16・17次調査を実施している。これらのうち第1・3・5・7・9・15次調査は、調査経費を原因者である福島県相双農林事務所と原町市が負担している。それ以外は国および県からの補助金の交付を得て実施したものである。今回報告地点は、原因者負担で発掘を行なった第1・3・5・7・9・15次調査である。

ほ場整備の当遺跡における施行計画は、大きく農業用河川武須川の改修と水田の面整備とに分けられる。武須川は当初、県指定地の南側に接する位置を通過する市道の南に沿うかたちでの路線が計画された。泉廃寺跡の発掘調査は上記開発事業に対し、遺跡の範囲確認および保存協議のための資料を得ることを目的として、平成6年から開始された。第1次調査は、県指定範囲外にも関連する遺構が広がっているか否かを確認するために行われた試掘調査である。ここでは主として武須川計画路線、すなわち県指定範囲から市道を隔てた南側に接する水田について、県指定地を中心とした東・西にそれぞれ約200mほどの範囲を対象として、合計293本のトレンチを設定し、遺構の有無の確認を行なった。したがって調査対象範囲は字町池・塚越・宮前・町にまたがる東西約850mの範囲に及んだ。調査の結果、県指定地の外側からも多くの遺構が確認され、遺跡は県指定範囲約49,000㎡を遥かに超える広がりをもつことが明らかとなった。この第1次調査の成果から、福島県相双農林事務所(相双農地事務所)において、ほ場整備事業全体の計画見直しが検討され、泉廃寺跡周辺地域における施工内容が立案されることとなった。また、県指定地内字寺家前に設定したトレンチでは礎石建物跡と掘立柱建物跡が確認され、周辺における礎石の群在や古瓦・炭化米の散布と合わせ、この部分に郡家正倉院跡が広がっていることが推定された。このことから、当遺跡が古代陸奥国行方郡家跡であることが確実視されるようになった。

翌平成7年には武須川改修予定地内における遺構の内容を確認し保存協議の資料を得るため、国庫補助事業による試掘調査(第2次調査)が行われ、一本柱列とこれに連結する掘立柱建物跡が確認された。またその西側でも掘立柱の側柱建物跡や総柱建物跡の存在が明らかとなり、付近には非常に官衙的色彩の強い建物群が存在していたことが明らかとなった。特に一本柱列による区画は官衙の政庁院にあたる可能性が指摘され、当地区の保存協議が行われた結果、武須川の法線の一部南に変更することで、この一本柱列による区画が確認された部分については保存することが決定された。しかし、その他の部分については、工法対応は困難であると判断されたことにより、以後、記録保存のための本調査が実施されることが決まった。また、武須川が通過する部分には民家が所在しており、民家は武須川の改修に際して移転することとなったため、平成8年度にはこの移転先にあたる部分についても本調査が行われることとなった(第3次調査)。

平成8年度には、県道原町・海老・相馬線の拡幅工事に伴って、国庫補助事業による試掘調査が行われた（第4次調査）。この第4次調査では大溝と掘込地業が確認され、これらは第1次調査区検出の礎石建物跡とともに、行方郡家の正倉院を構成する遺構であると推定された。

平成9年度には、先の第2次調査に基づく保存協議の結果をうけて、路線変更後の武須川開削部分にあたる地区、すなわち第2次調査地のうち西側部分について、記録保存のための本調査が実施された（第5次調査）。また、翌平成10年には、同じく武須川改修地について、この第5次調査区西側・東側にそれぞれ隣接する部分についての本調査が実施された（第7次調査、第7次調査(糠塚)）。平成9年度には、面整備予定地となっていた県指定地西側に位置する字町池について、国庫補助事業による試掘調査が実施された（第6次調査）。翌平成10年度には、この地区に存在する遺構の保存協議の資料を得るため、第6次調査範囲のうち掘立柱建物跡が確認された部分を中心に、面的な確認調査を行なうこととなった（第8次調査）。また、この第8次調査区の北側を通る市道下北高平・泉線の改良工事が計画されたため、これに伴って第8次調査区の北に接する部分の発掘調査を合わせて行なうこととなった（第11次調査）。この第8・11次調査の結果、八脚門を伴う板塀に区画された掘立柱建物群が確認され、その重要性からこの地区については盛土工法により保存されることとなった。

一方、同じ平成10年には遺跡南東部、すなわち第3次調査区の南側に位置する水田の面整備計画に対する本調査が実施されることとなった（第9次調査）。第9次調査は、この部分の面整備工事が発掘調査を行なう以前に開始されてしまったため、急遽開発側との保存協議を行い、開発行為を一時停止したうえで実施した調査である。

また同年、この第9次調査区から県道北泉・小高線を隔てた東側に位置する部分の面整備計画に対し、当該地区における遺構の有無を確認するため、国庫補助事業による試掘調査が行われた（第10次調査）。調査の結果、2棟の掘立柱建物跡と多量の古瓦が出土し、付近に行方郡家に伴う寺院跡の存在が推定された。保存協議の結果、この地区については、現地形の掘削を行わずに畑地として利用することで保存が決定された。

平成11年には、県指定地の東側に隣接する部分の面整備に対し、遺構の有無を確認するため、国庫補助事業による試掘調査が行われた（第13次調査）。この部分は、先の第2次調査において官衙の政庁院の存在が指摘された部分から市道を隔てた北に隣接する位置にあり、政庁院の中心部にあたる遺構が確認されることが予想された。調査の結果、一本柱列による区画の延長部分や、その他多数の柱穴群が確認されたため、保存協議の資料を得るための面的な確認調査に切り替えた。面的に行なった調査によって、一本柱列に区画された多数の掘立柱建物跡が確認され、この部分が行方郡家の郡庁院であることが確実となった。協議の結果、当地区については、ほ場整備事業の地区除外地域とされ、遺構の保存が決定された。

また同年には、先に行われた第8次調査区と、その東側に位置する県指定地との中間にあたる部分の面整備に対し、遺構の有無を確認するための試掘調査（第12次調査）が行われたが、この部分では遺構は確認されなかった。

一方、前述したように、武須川の改修は、当初は遺跡内を通過する市道の南に沿うようなか

たちで路線が計画されていたが、第2次調査において郡庁院の遺構が確認されたため、計画路線が一部変更された。このため、武須川計画路線の変更に伴って、市道についても武須川の北に接する位置を通るよう付け替えを行なう計画が持ち上がった。このことから、平成12年に、この市道付け替え部分について本調査が行われることとなった（第15次調査）。

この第15次調査をもって、県営ほ場整備事業にかかる当遺跡の発掘調査は終了するが、これらの調査成果から、当遺跡が古代陸奥国行方郡家に比定される遺跡であることが事実となり、またその内容が具体的に明らかとなったことにより、遺跡の重要性がこれまで以上に高く評価されるようになった。そして以後、泉廃寺跡の発掘調査は、それまでの調査で保存が決定した部分も含めた国指定史跡への格上げを目指し、また史跡整備を将来に見据えた「泉廃寺跡保存整備のための試掘調査」に引き継がれることとなった。平成12・13年に行われた第14・17次調査では、郡庁院の規模・建物配置構造・変遷過程の全容が解明されることとなった。また同年に県指定地内で行われた第16次調査では、正倉院を区画する溝跡や掘込地業が確認され、正倉院の構造と変遷についても徐々に明らかになりつつある。（藤木）

第3節 調査要項

遺跡名 泉廃寺跡

所在地 原町市泉字寺家前・宮前・町池・町・館前

調査面積 第1次 4,640 m² 第3次 1,034 m² 第5次 2,500 m² 第7次 17,000 m²
第7次（糠塚）6,400 m² 第9次 2,100 m² 第15次 250 m²

調査体制 調査主体 原町市教育委員会

調査担当 生涯学習部文化課

担当者 第1次：堀 耕平・斎藤直之 第3次：堀 耕平 第5次：荒 淑人
第7次：荒 淑人 第7次（糠塚）：鈴木文雄 第9次：荒 淑人
第15次：堀 耕平・藤木 海

事務局体制

平成6年度	平成8年度	平成9年度
教 育 長 渡部 秀夫	教 育 長 井村 寛	教 育 長 千葉良則
教 育 次 長 中田 幸夫	生涯学習部長 中善寺敏行	生涯学習部長 中善寺敏行
文 化 課 長 佐藤 一男	生涯学習部次長 佐藤 禎一	生涯学習部次長 佐藤 一男
文化財保護係長 鈴木吉久	文 化 課 長 佐藤 一男	文 化 課 長 大内 勝
文化財主事 平田良親	文化振興係長 高田 毅	主 幹 高倉 一夫
文化財主事 堀 耕平	主 査 木幡 雅巳	文化振興係長 高田 毅
学 芸 員 斎藤直之	副 主 査 鈴木文雄	主 査 木幡 雅巳
事務補助 館岡るみ	主任文化財主事 堀 耕平	副 主 査 鈴木文雄
	文化財主事 荒 淑人	主任文化財主事 堀 耕平
	嘱託職員 松本 弘	文化財主事 荒 淑人
	事務補助 館岡るみ	事務補助 綱川裕子

平成10年度

教 育 長 鈴木清身
生涯学習部長 佐藤一男
生涯学習部次長 渡部紀佐夫
文化課長 阿部敏夫
文化振興係長 小田幸夫
発掘調査係長 山家正勝
主 査 木幡雅巳
主 査 鈴木文雄
主任文化財主事 堀 耕平
文化財主事 荒 淑人
発掘調査員 安達訓仁
発掘調査員 久松舞子
事務補助 綱川裕子

平成12年度

教 育 長 鈴木清身
生涯学習部長 佐藤一男
生涯学習部次長 阿部敏夫
文化課長 阿部敏夫
文化振興係長 小田幸夫
発掘調査係長 堀 耕平
主 査 山内茂樹
主 査 鈴木文雄
文化財主事 荒 淑人
発掘調査員 藤木 海
整理調査員 狭川麻子
事務補助 小林美枝子

発掘補助員 青田猪一郎・青田光収・青田 翠・青田博子・阿部定雄・荒 洋子・五十嵐フミ子・岩井幸夫・
岩井百合子・稲村丑治・岩本 等・宇佐見實・宇佐見茂子・遠藤紀子・遠藤キミ子・大石潤二郎・
大石房子・大内スミ子・押野己之助・大竹裕一・小川美紀子・落合和弘・大野敏雄・加賀田勇一・
菅野秀雄・北原 洋・北原 廉・北山八重子・北山 睦・清信 厚・草野ヤイ子・国分孝徳・
木幡春江・今野一子・今野文英・今野アヤ子・紺野昭義・紺野弘子・相良英樹・佐藤順厚・
佐藤紀美子・佐藤一男・佐藤 昭・佐藤 整・佐藤昭子・佐藤セイ・佐藤フクイ・佐藤紀美子・
佐藤敏雄・佐藤時雄・佐久間三雄・佐藤文江・佐久間政好・志賀セツ子・志賀秀夫・志賀とも子・
志賀愛了・新開光了・杉浦桂子・諏佐忠男・鈴木時江・鈴木伸子・鈴木清身・鈴木シケ・
鈴木令子・鈴木康雄・平音次郎・武志正信・滝沢輝雄・高橋キイ子・立川正綱・高野勝子・
高玉 親・高井孝子・高野賢喜智・玉木セツ子・但野十九・館内ミヨ子・寺島日出雄・寺島博喜・
中田幸一・中島チヨ子・新妻順子・新妻孝子・西 幸吉・西 敏子・藤田正司・星 祐教・星アキヨ・
堀川清隆・松本武雄・松本充博・益山富士子・宮林イエ子・三坂サダイ・門馬竹子・門馬 誠・
門馬正光・門馬トミ・山田英子・山本邦己・山口千恵子・山田春雄・横山 賢・横山キミ子・
吉田陽一・渡辺トヨ・渡部トシ子・渡部和子

整理補助員 阿部路代・遠藤和子・遠藤美恵子・太田正子・木幡君子・新川幸子・寺内美智子・古谷洋子・
山本恵子・狭川なつみ

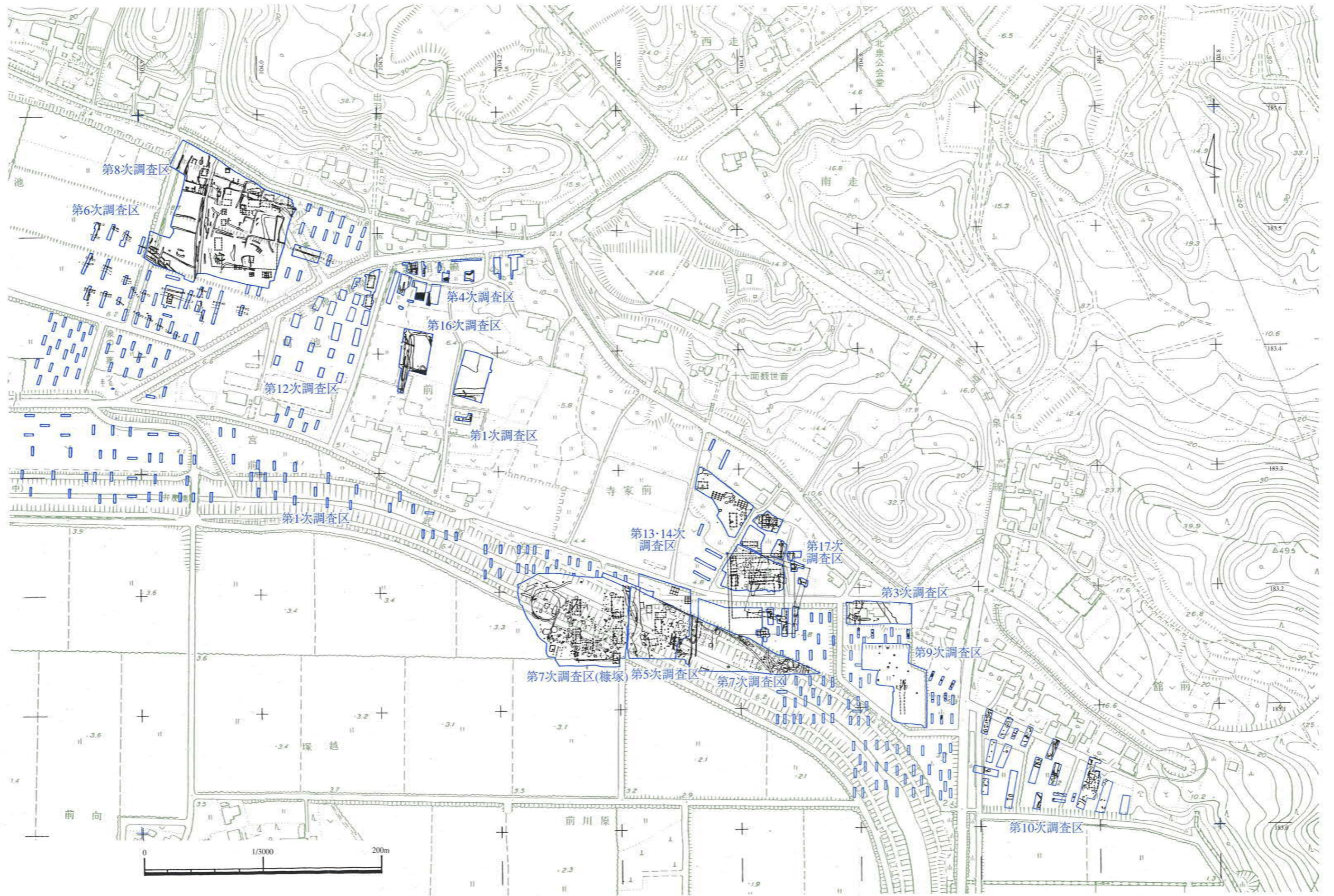


図3 泉麿寺跡全体遺構配置図

第3章 第1次調査

第1節 調査に至る経過

平成5年、原町市土地改良区からの、県営ほ場整備高平地区内に所在する文化財の有無の照会に対して、原町市教育委員会は、泉地内の福島県史跡泉廃寺跡の所在と、当該県史跡を施工範囲から除外するよう福島県教育委員会から指導があった旨を回答した。しかし、地元地権者からの強い要望により、この時点で、県史跡泉廃寺跡は施工範囲に含まれることとなった。

一方、この泉廃寺跡は、昭和30年の県指定以来、発掘調査等がなされていなかったため、遺跡としての範囲は不明確であった。そこで、県営ほ場整備事業の実施に先立ち、遺跡範囲の確定を目的としたトレンチ調査（第1次調査）を実施することとなった。

第2節 調査の方法

調査は、県史跡泉廃寺跡から東西及び南へ約200mまでを対象としたが、調査による遺構の確認状況に合わせてトレンチの設定範囲を拡張あるいは短縮することとした。また、調査体制の限界もあり、本次調査は、県史跡の南端を東西に走る市道から南側を中心に行い、県史跡の東西の隣接地については、後年度に確認調査を実施することとした。その結果、東西約800m、南北約150m、対象面積約60,000㎡に対し、293本のトレンチ調査を実施した。

トレンチは、原則として幅2m×長さ8mの大きさで、地形の傾斜に合せ南北方向に設定し、表土剥ぎ及び遺構検出は人力で行い、埋め戻しは重機を使用した。遺構検出にあたっては、調査を必要最小限に留め、遺構の有無が判断できる深さまで掘ることとし、それ以上の発掘作業は行わなかった。しかし、多くのトレンチでは、遺構確認面まで深く掘ることについて、地権者の同意を得ることができなかつたため、遺構の有無を十分に把握することができない側面のある調査であった。

調査の記録は、トレンチ内の遺構検出状況を簡易遣り方により平面図作成を行い、トレンチの全体配置については測量業務を委託した。また、写真撮影を適宜行った。

本次調査は、小字では西側から、県指定天然記念物「泉の一葉松」の北側の町池地区、同松南側の塚越地区、県史跡南側の宮前地区、同史跡南東にあたる町地区と県史跡地内で宅地建て替えのあった寺家前地区において実施した。 (掘)

第3節 調査成果

本節では、調査成果について、範囲確認調査を実施した県史跡地外の町池地区・塚越地区・宮前地区・町地区と、県史跡地内の寺家前地区に分けて記述する。

第1項 町池・塚越・宮前・町地区

本地区には計290本のトレンチ(T)を設定した(図4)。このうち23本のトレンチで遺構が検出された。その範囲は、南西の塚越地区(50、54T)と調査範囲の中央から東側の町地区(128、152、154、157、158、159、160、166、167、168、210、211、212、213、215、217、221、268、271T)である(図5)。

塚越地区の50、54Tからは、溝跡が1条検出された。ロクロ使用の内面黒色処理を施した土師器杯が出土しており、平安時代頃の遺構と捉えることができる。

町地区では、溝状遺構、土坑等を検出し、特に271Tでは、一辺が1mを超える掘方をもつ掘立柱建物跡が検出された。検出遺構の中には、地権者の強い意向で掘る深さが制限されたため、形状を明確に把握できないものも多かった。遺物は石製模造品、土師器、須恵器、瓦等が出土しており、古墳時代から平安時代の遺構と予想された。

また、遺構は河岸段丘上に構築されていて、宮前・町地区の南側へ行くにつれ新田川の氾濫により形成された沖積地の泥炭層を含む低湿地となっており、この部分が遺跡の南限となっていることも判明した。

県指定地西側の町池地区からは、遺構・遺物ともに検出されなかった。(堀)

第2項 寺家前地区

当地区は、県史跡指定地内の宅地において行なった調査である。調査着手当初は2.5m四方の試掘坑を計4箇所設定し掘り下げを行なった。その結果、以下に報告する礎石建物跡など遺構の一部が確認されたため、調査区を拡張した(図6)。

1号礎石建物跡(図7)

A区東端で基壇と根固めの一部を確認した。1号掘立柱建物跡と重複し、これより新しい。また、3号溝跡を切っている。遺構は大部分が調査区外にかかるため、全体規模は不明であるが、平面方形を呈する基壇の北西隅部および西側柱列に伴う根固めと推定される。

基壇は上面に後世の削平を受けているが、縁辺は確認した部分で東西1.2m、南北4.5mを測る。調査区東壁に合わせ南北方向に設定したサブトレンチで部分的な基壇の断ち割りを行った結果、残存する基壇の厚さは0.49mと判明した。基壇積土の堆積状況を調査区の壁で観察すると、黒褐色土・暗褐色土・黄褐色粘土を2~18cmで積み重ねた版築を確認できた。版築層は下層部分ではやや厚いが、根固め付近より上層は細かい版築が行われている。

根固めは2基を確認した。調査区外に一部がかかるため不明な点もあるが、径5~25cm程度の川原石を直径約1.2mほどの範囲に据えている。土層断面では基壇積土の一部が北側の根固

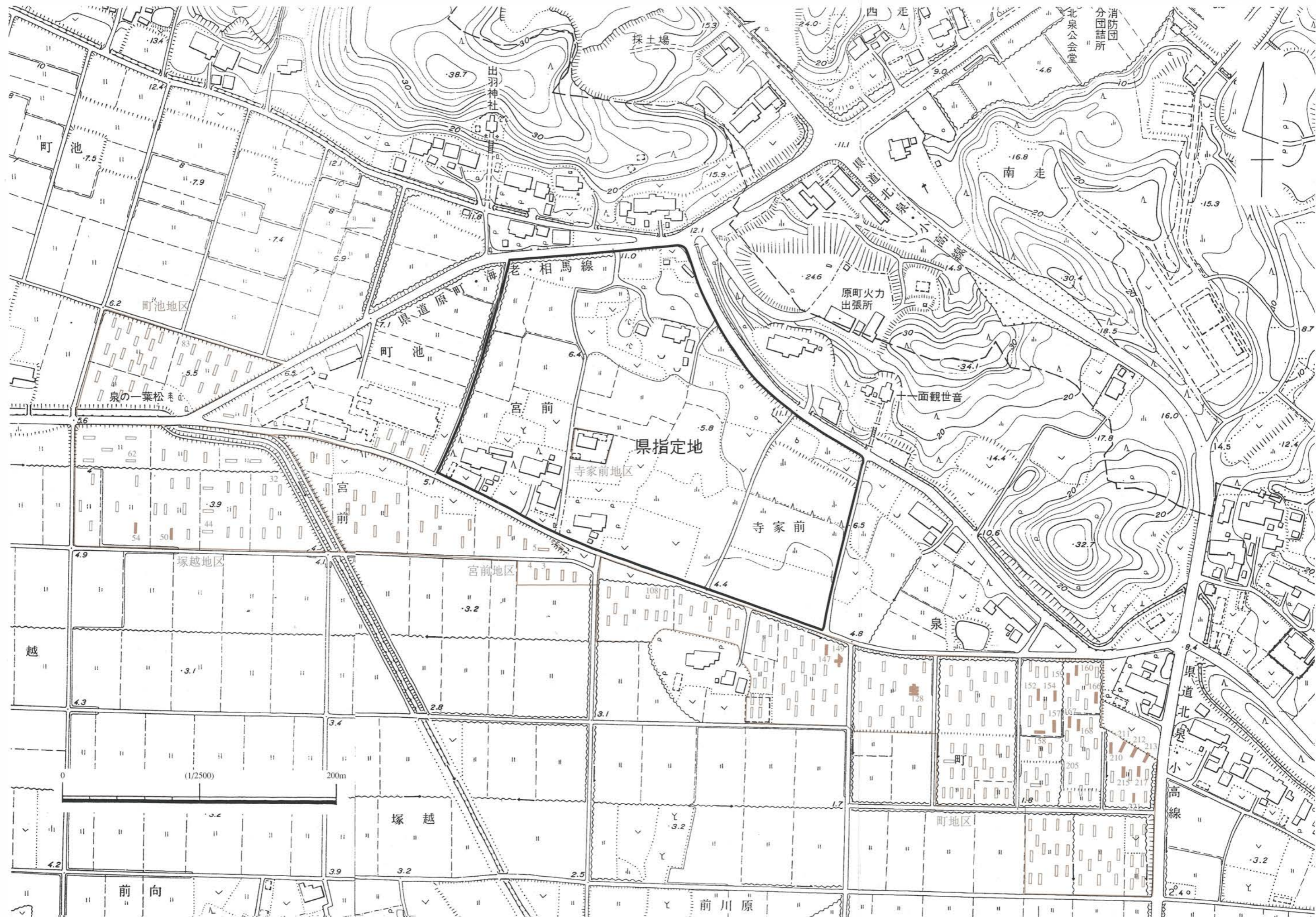


図4 第1次調査トレンチ配置図

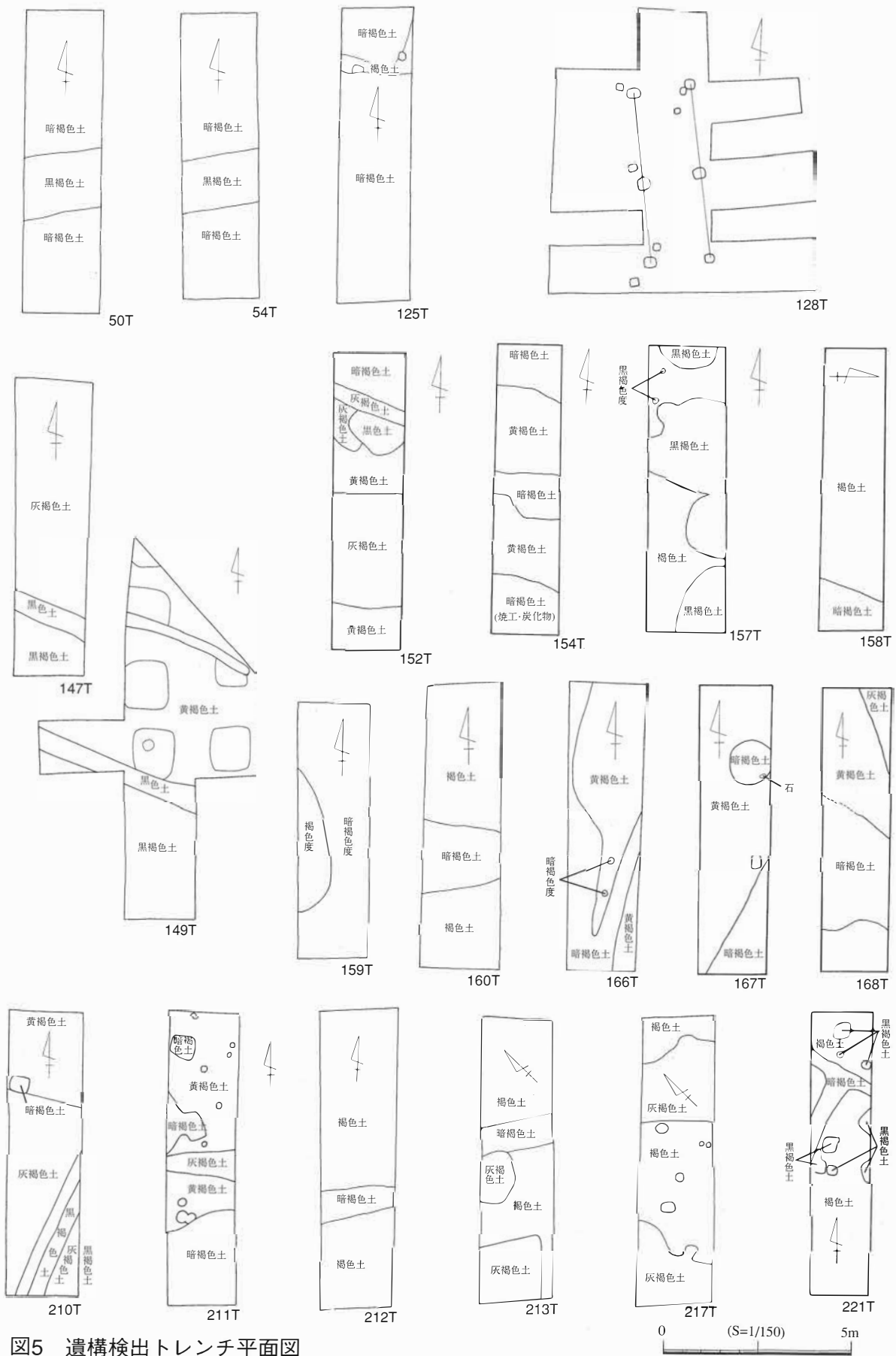


図5 遺構検出トレンチ平面図

めに向かって窪んでいる状況が観察され、礎石の据え方と考えられる。

根固めは2基が確認されたのみであり、建物規模は不明であるが、根固めの中心で計測すると柱間は3.0mを測る。また、根固め位置から基壇縁辺の距離は、西辺はNo.1根固めから0.9m、No.2根固めから0.8mである。北辺は1.2mを測り、北辺の方が基壇の出はやや広い。主軸方位は、基壇縁辺や根固めの位置から推定してN-7°-E前後である。

なお、当建物跡の北に位置する3号溝跡は、遺構検出当初は当建物跡に伴う雨落溝の可能性が考えられたが、調査区の壁で土層断面を観察した結果、当溝跡が基壇の掘り込みに切られている状況が明らかとなったため、この溝は建物跡には伴わないものと判断した。

1号掘立柱建物跡 (図8)

A区において、基本土層LⅢ層上面で確認した掘立柱建物跡である。1号溝跡・1号土坑に切られる。東西に並ぶ柱掘方3個を確認しているが、調査区西端では掘方は確認されず、建物はこれより西側へは延びない。東側にはさらに延びる可能性が

表1 SB1柱穴計測表 (m)

	長軸	短軸	深さ
No. 1	2.49	2.28	0.56
No. 2	2.02	1.48	—
No. 3	2.08	1.53	—

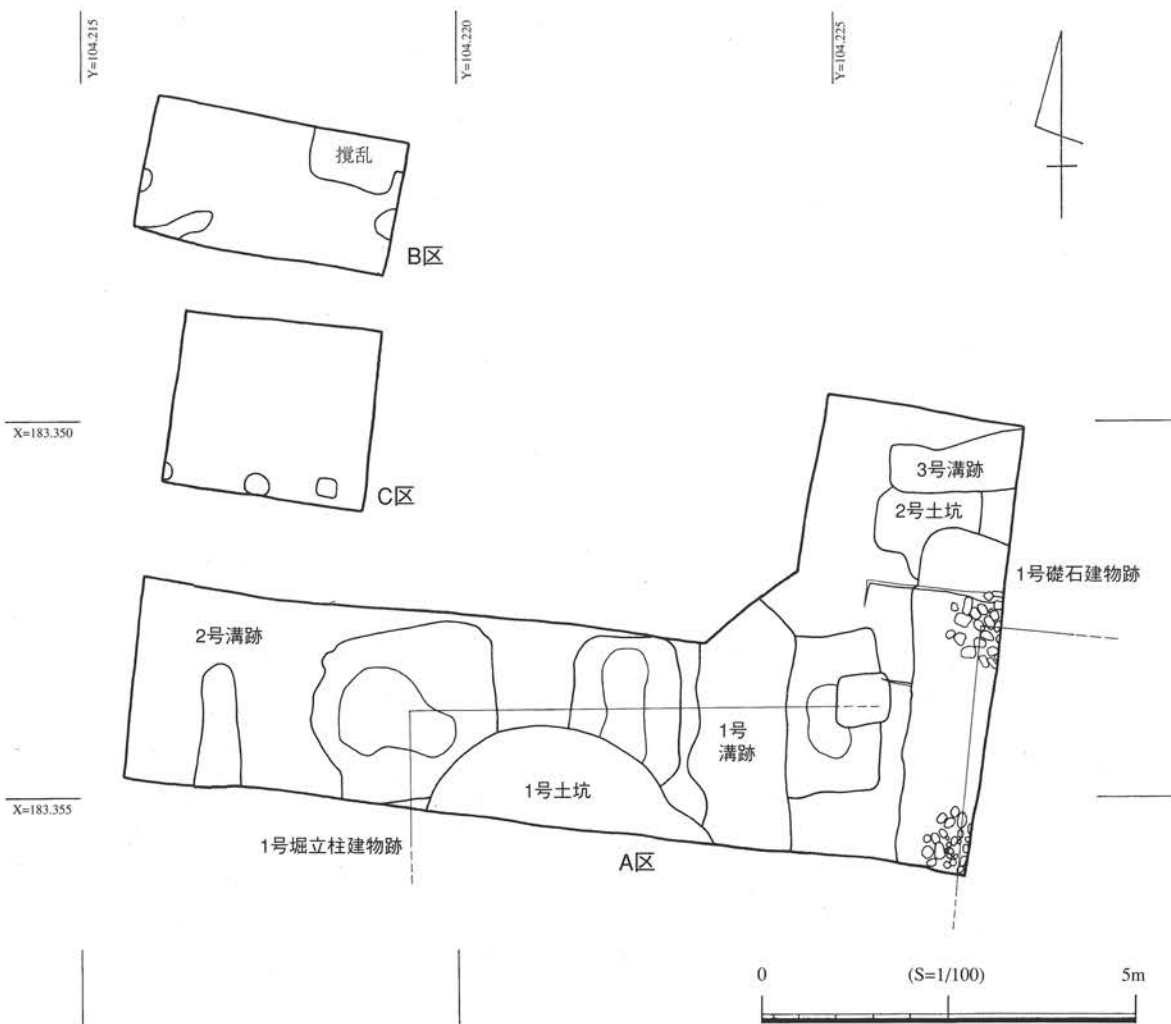


図6 寺家前地区遺構配置図

ある。また、東端に位置する No. 3 掘方の北側にも掘方は存在しない。従って確認された掘方は建物の北側桁行の一部と推定される。

確認された掘方は平面隅丸方形ないし隅丸長方形を呈し、検出面では黒褐色土を主体とする埋土を確認している。また、柱は抜き取られており、暗褐色土主体の柱抜き取り痕跡が確認された。また No. 1 掘方を半截し、土層断面を観察した。掘方埋土は黒色土主体層と黄褐色粘土主体層の互層であり、版築が認められた。また掘方埋土下層から底面にかけて径 5～25cm ほどの礫が出土している。礫は主に掘方東側付近に特に集中している。柱があたっていたと推定される位置は掘方底面が深さ 14cm ほどの円形に掘り窪められており、柱の据え方と推定される。据

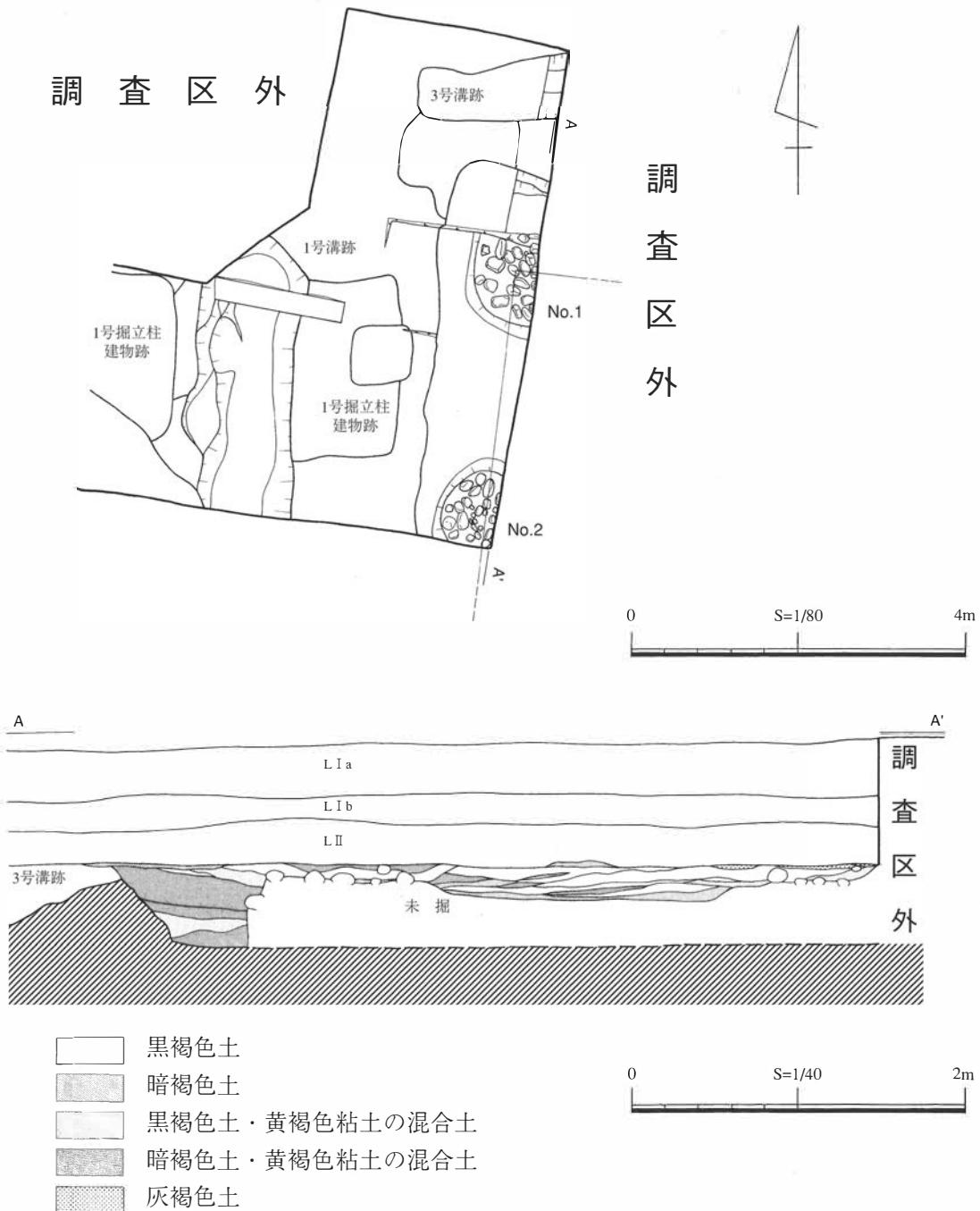


図7 1号礎石建物跡

え方の径は約 60cm である。掘方埋土下層に突き込まれた礫は、この柱据え方の位置には入らず、柱を囲むように分布していることから、柱の下端を掘方底面に据えた後、柱の周囲をこれらの礫によって固めたものと推定される。

建物の規模は、調査区が狭小であるため不明であるが、半截したNo.1 掘方の柱据え方の位置を基準として他の柱位置を復元すると、柱間 2.7m 等間で 2 間以上（総長 5.4m 以上）の建物と

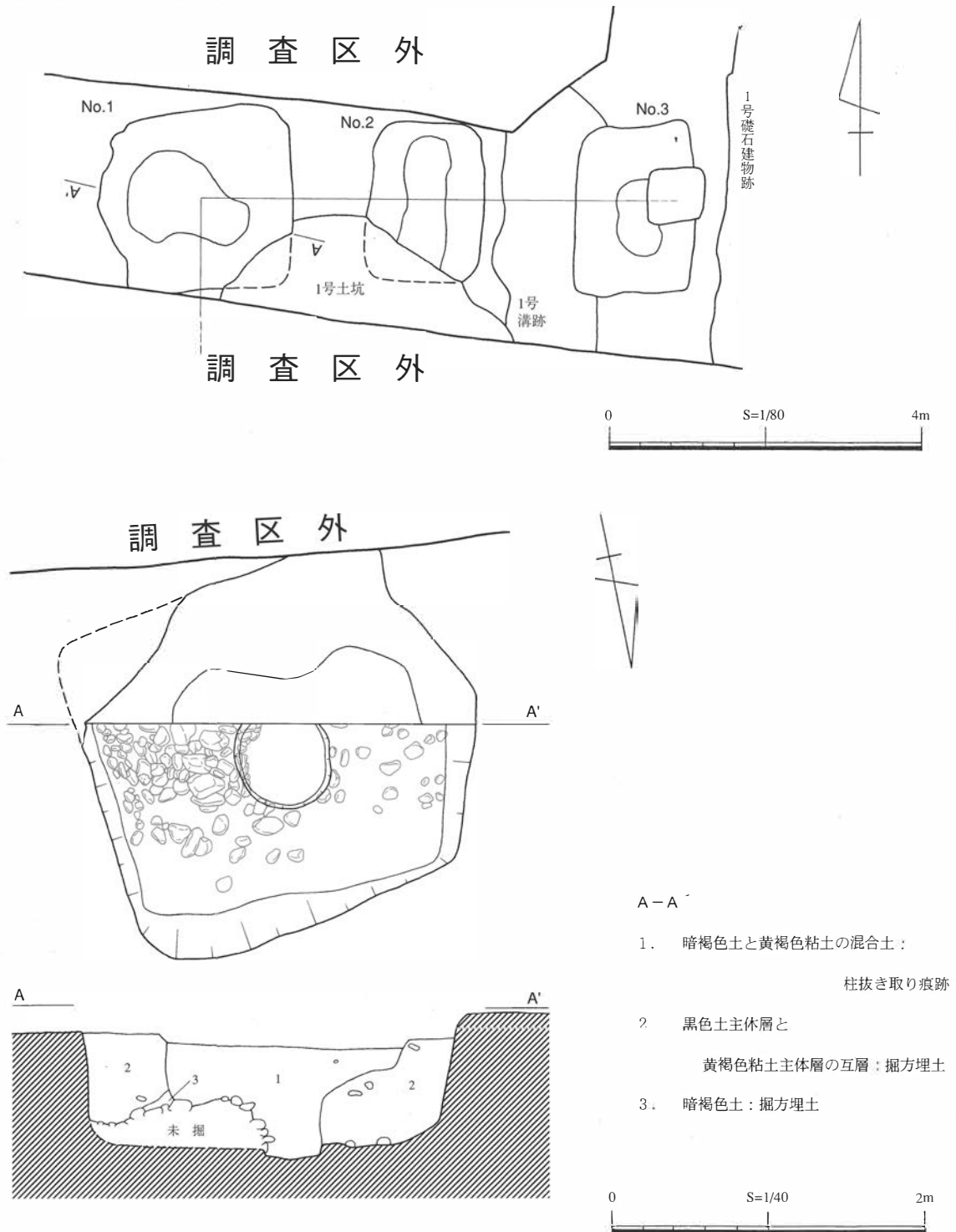


図8 1号掘立柱建物跡

推定される。主軸方位はN-0°を指す。調査区内で2間分を確認したのみであり全体規模は不明である。東にもう1間のびていると考えた場合、掘方の規模から考えて調査区東端でその掘方の一部を確認できるはずであるが、この部分には1号礎石建物跡が位置しており、掘方は確認されなかった。当建物跡と1号礎石建物跡は近接することから同時期に並存したとは考え難いため、両者は時間的な先後関係にあるものと考えられる。掘方の規模は、北東隅柱と考えられるNo.1掘方が他に比して大型で隅丸方形の平面プランをもつものに対し、No.2・3掘方はこれよりやや小型の隅丸長方形を呈する。コーナーの掘方だけがやや大きく作られたと仮定すれば、建物はさらに東へのびていくものと考えられる。その場合、掘立柱建物跡が礎石建物跡に切られているものと解釈できる。

1号溝跡 (図9)

A区中央東寄りに位置し、基本土層LIV層上面で検出した南北方向に走る溝跡である。主軸はほぼ真北を向いている。調査区内で約3.3m分を確認した。南端は調査区外に延びるが、北端は途切れる。1号掘立柱建物跡を切り、1号土坑に切られている。覆土は自然堆積による。溝幅は確認面で計測して1.15~1.3m、深さは0.4~0.5mほどである。形状は、東壁が緩やかな傾斜をもって掘り込まれているのに対し、西壁はテラス状の平坦面をもつ。底面は緩やかな皿状を呈する。

2号溝跡 (図9)

A区西端に位置し、基本土層LIV層上面で検出した南北方向に走る溝跡である。主軸方位はほぼ真北を向いている。調査区内で1.6m分を確認した。南端は調査区外に延びていくが、北端では途切れており、B区やC区ではこの溝の延長部分は確認されなかった。覆土は黒褐色土による自然堆積である。溝幅は0.4~0.6mを測る。断面形は、溝底面を確認していないため不明確であるが、壁が緩やかな傾斜をもつ浅い皿状の溝と推定される。

当溝跡は部分的な検出であるため不明な点が多いが、ほぼ真北を向くこと、1号掘立柱建物跡の北西隅柱の掘方より北へは延びないことから、1号掘立柱建物跡に伴う雨落溝の可能性がある。

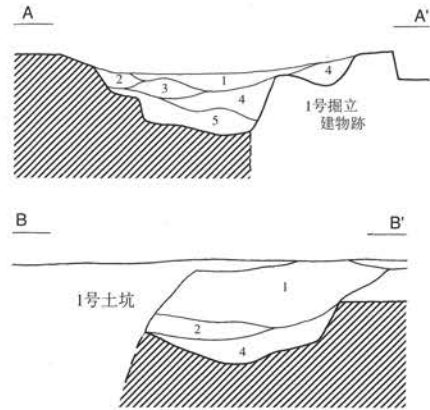
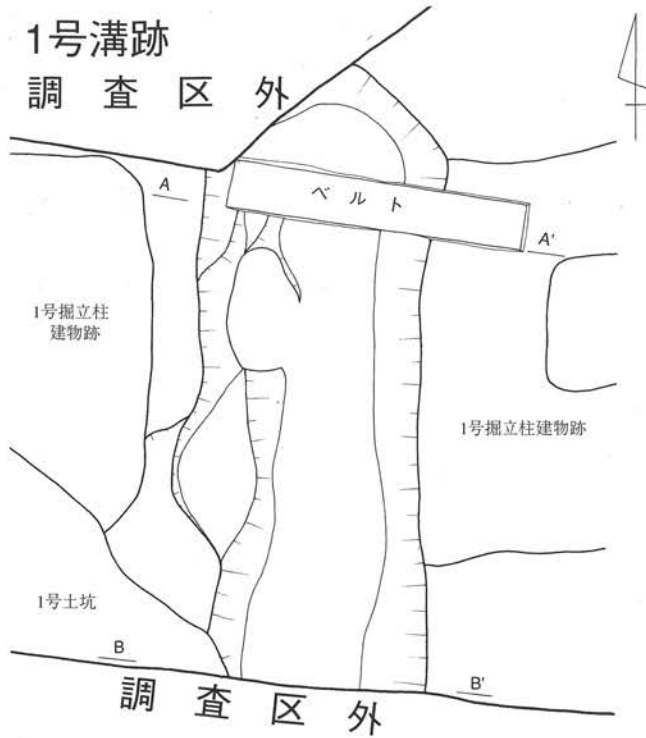
3号溝跡 (図9)

A区北端に位置し、LIII層上面で検出した東西に走る溝跡である。主軸方位はW-5°-S前後である。調査区内で1.7m分を確認した。東端は調査区外にかかるが西端は調査区内で途切れる。覆土は自然堆積による。溝幅は確認面で計測して0.55~0.8m、深さは0.43mを測る。溝の形状は、壁の傾斜が緩やかな浅い皿状を呈する。

1号土坑 (図10)

A区中央で確認した土坑である。LIV層上面で検出した。大半が調査区外にかかるが、調査区内で東西3.8m、南北1.35mを確認している。平面形は円形と推定される。プランを確認したのみであるため、深さや断面形等については不明であるが、壁の傾斜がやや急な掘り込みである。覆土は上層部についてみる限り自然堆積による。

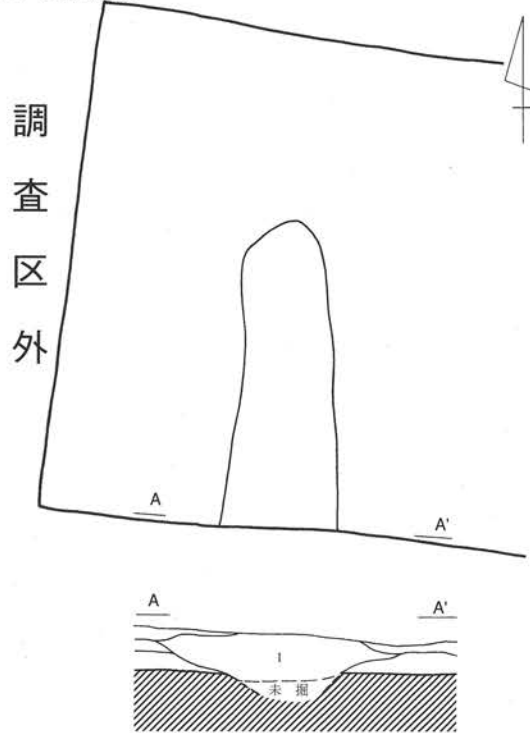
(藤木)



A-A' · B-B'

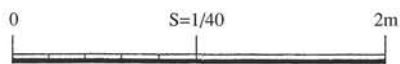
1. 暗褐色土
2. 黒褐色土
3. 暗褐色土：黄褐色粘土粒少量含む。
4. 暗褐色土：黄褐色粘土・黒褐色土を含む。
5. 暗褐色土：黄褐色粘土を多量に含む。

2号溝跡

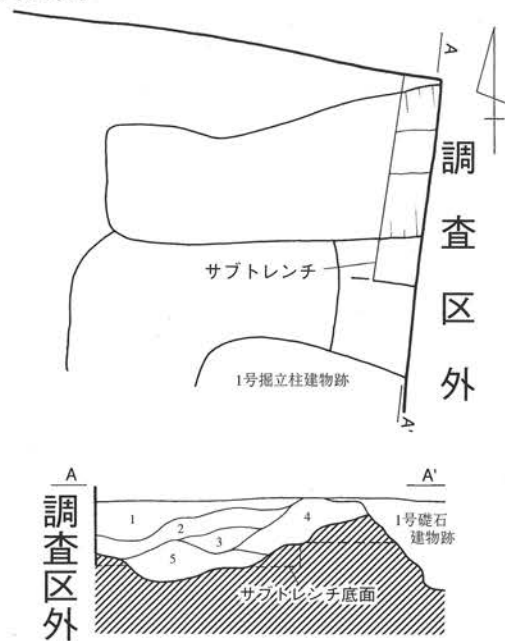


A-A'

1. 黒褐色土



3号溝跡



A-A'

1. 黒褐色土：黄褐色粘土少量含む。
2. 黒褐色土：黄褐色土を含む。
3. 黒褐色土：黄褐色粘土少量含む。
4. 暗褐色土：黄褐色粘土を含む。
5. 暗褐色土：黄褐色粘土を多量に含む。

図9 1~3号溝跡

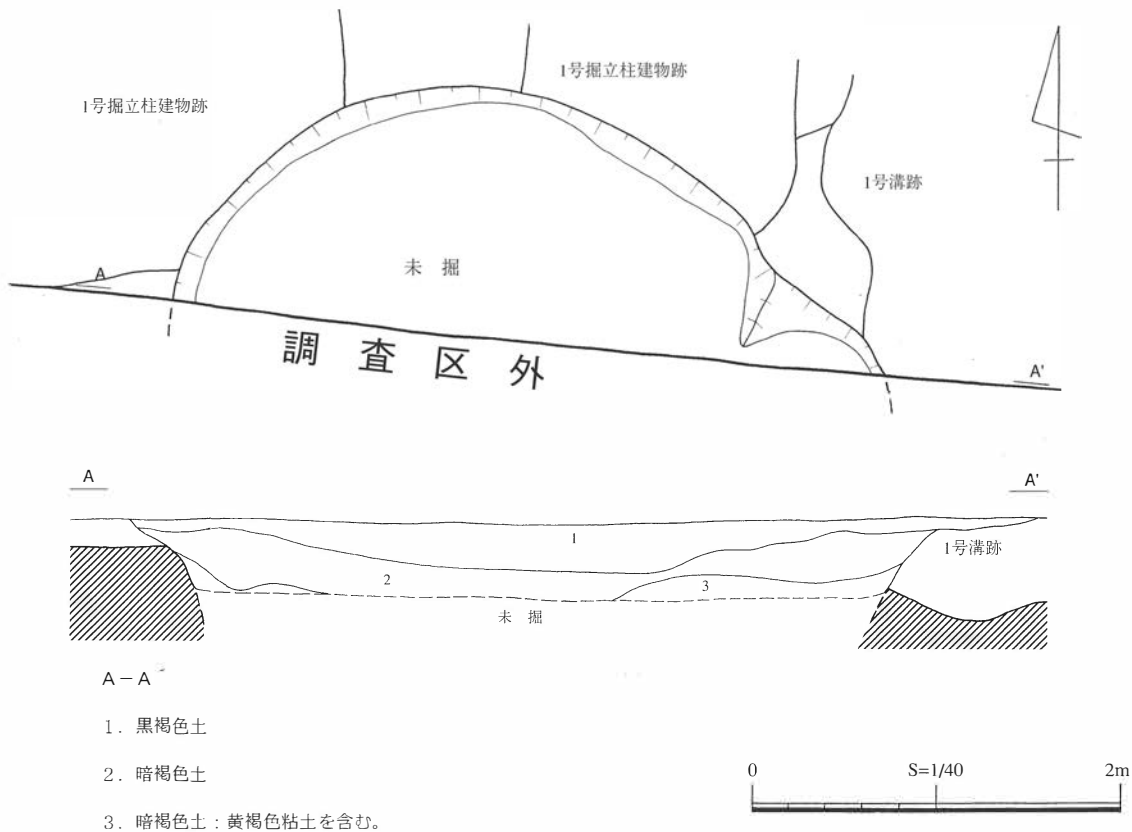


図10 1号土坑

第3項 出土遺物

(1) 土器・陶磁器類 (図11)

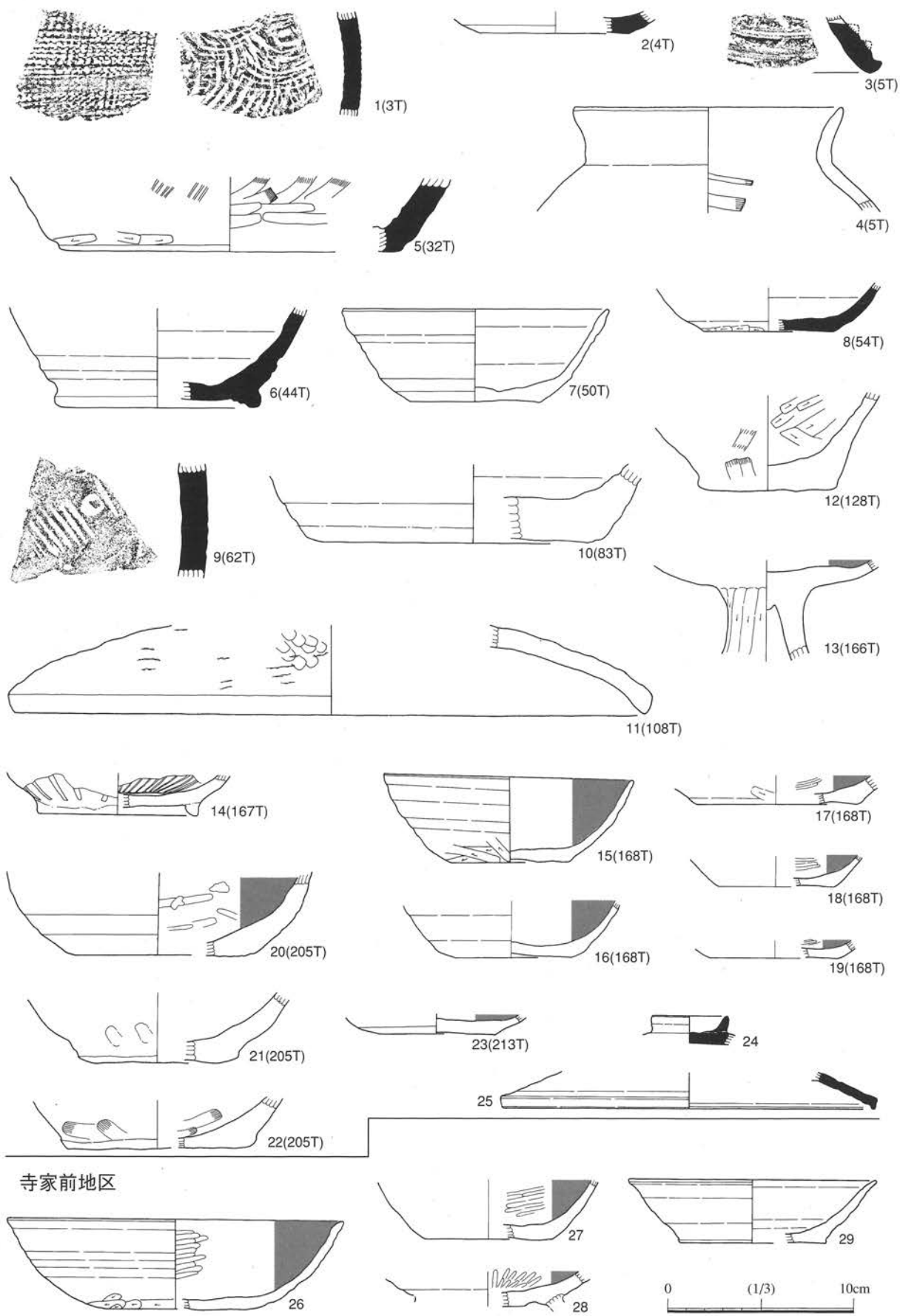
13は土師器高杯で杯部内面は黒色処理とミガキが施されている。4・12・21・22は土師器甕で、12にはハケメが施され、21・22の底部には木葉痕が残る。これらは、ロクロ不使用で古墳時代後期の栗圀式期に属する。15～19・23・26・27はロクロ使用の土師器杯で、このうち、15・23・26・27の底部切り離し技法はいずれも回転系切りである。再調整は23は回転ヘラケズリ、15・26は手持ちヘラケズリである。28は高台杯、20は鉢であろう。20は体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。15・23・26は表杉ノ入式期に属し平安時代初頭頃の所産であろう。7・29は赤焼土器、須恵系土器、土師質土器と呼ばれる土器群で、7は杯で回転ヘラケズリ再調整が施されている。これらは平安時代の9世紀後半頃に推定される。

11は蓋と考えられる。時期不詳である。2・8は須恵器杯で、2は体部下端に回転ヘラケズリ、8は手持ちヘラケズリ再調整が施されている。24・25は須恵器蓋、6は須恵器瓶、1・5・9は須恵器甕である。3は透かしがあることから器台か高杯の脚であろう。

14は青磁皿、10は常滑の甕である。

(2) 瓦類 (図12～15)

第1次調査出土の瓦は、小片のため図化しなかったものを含めると78点を数える。内訳は、軒丸瓦1点、丸瓦12点、平瓦59点、塼1点である。



寺家前地区

図11 第1次調査出土土器・陶磁器類

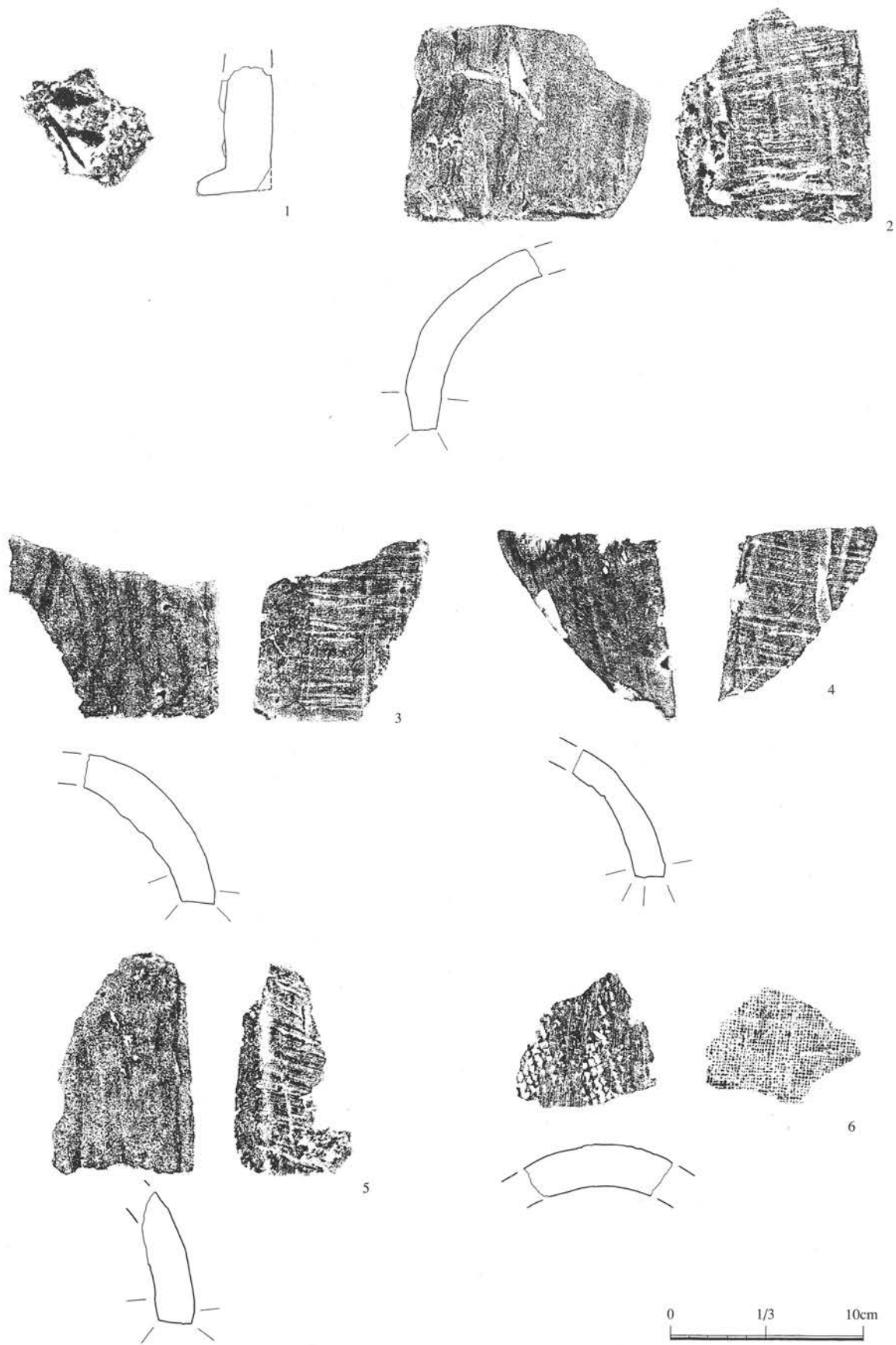


图12 瓦類 (1)

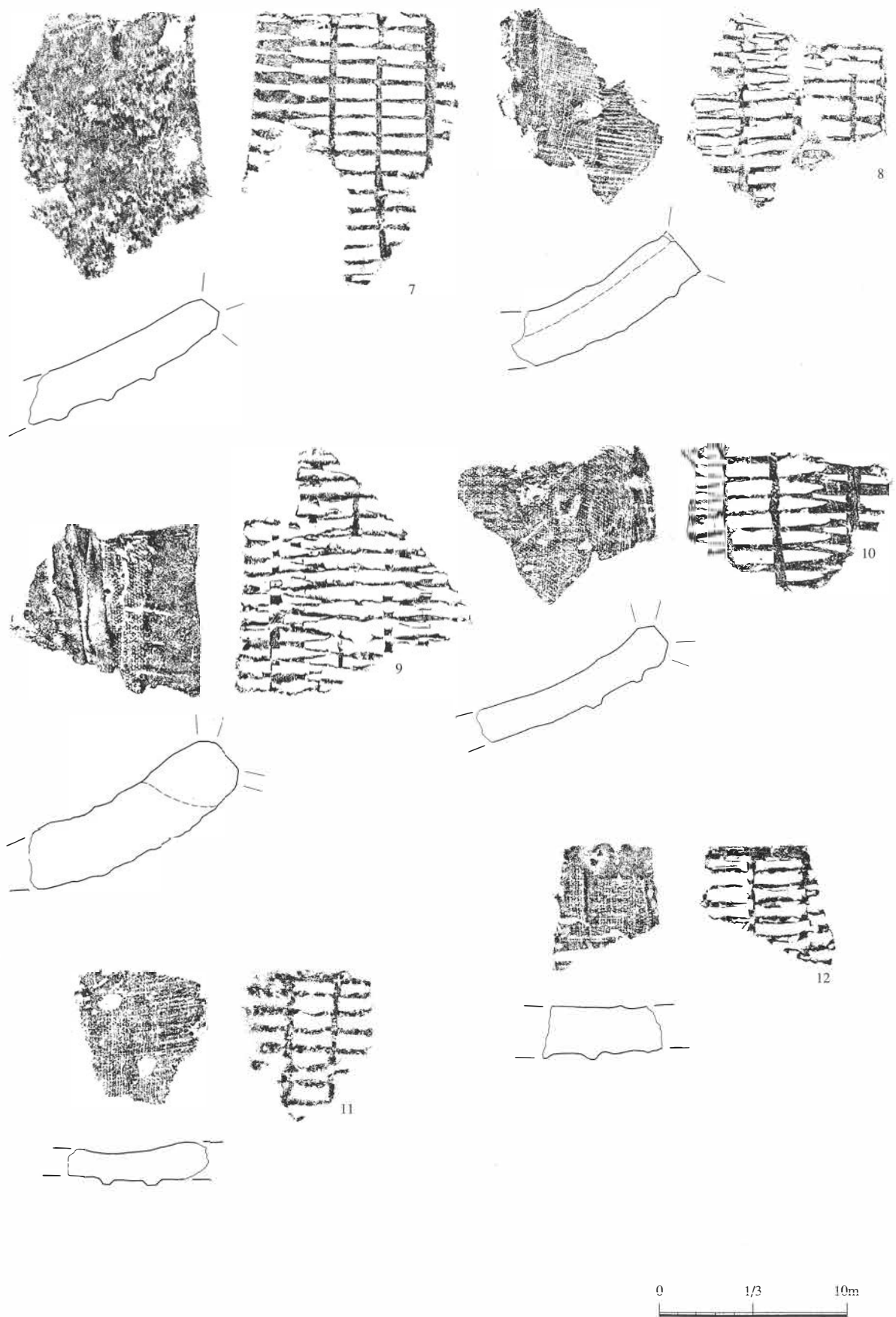
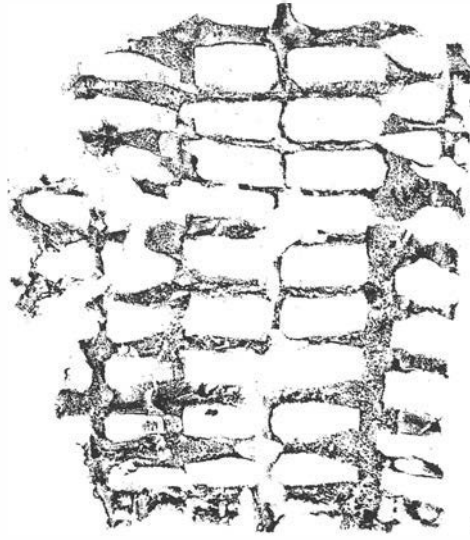
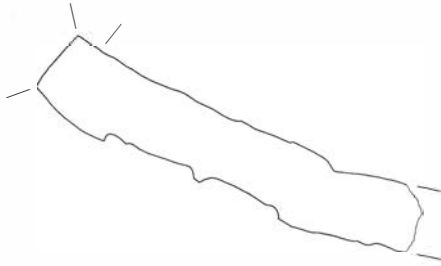


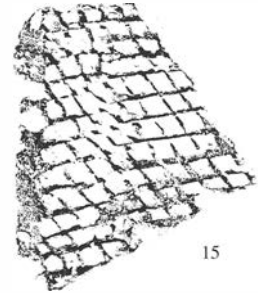
图13 瓦類 (2)



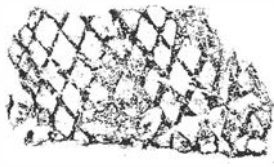
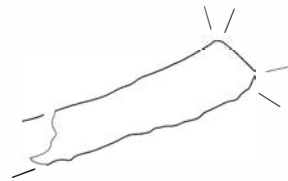
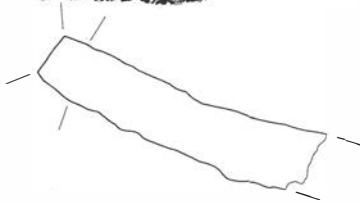
13



14



15



16



图14 瓦類 (3)

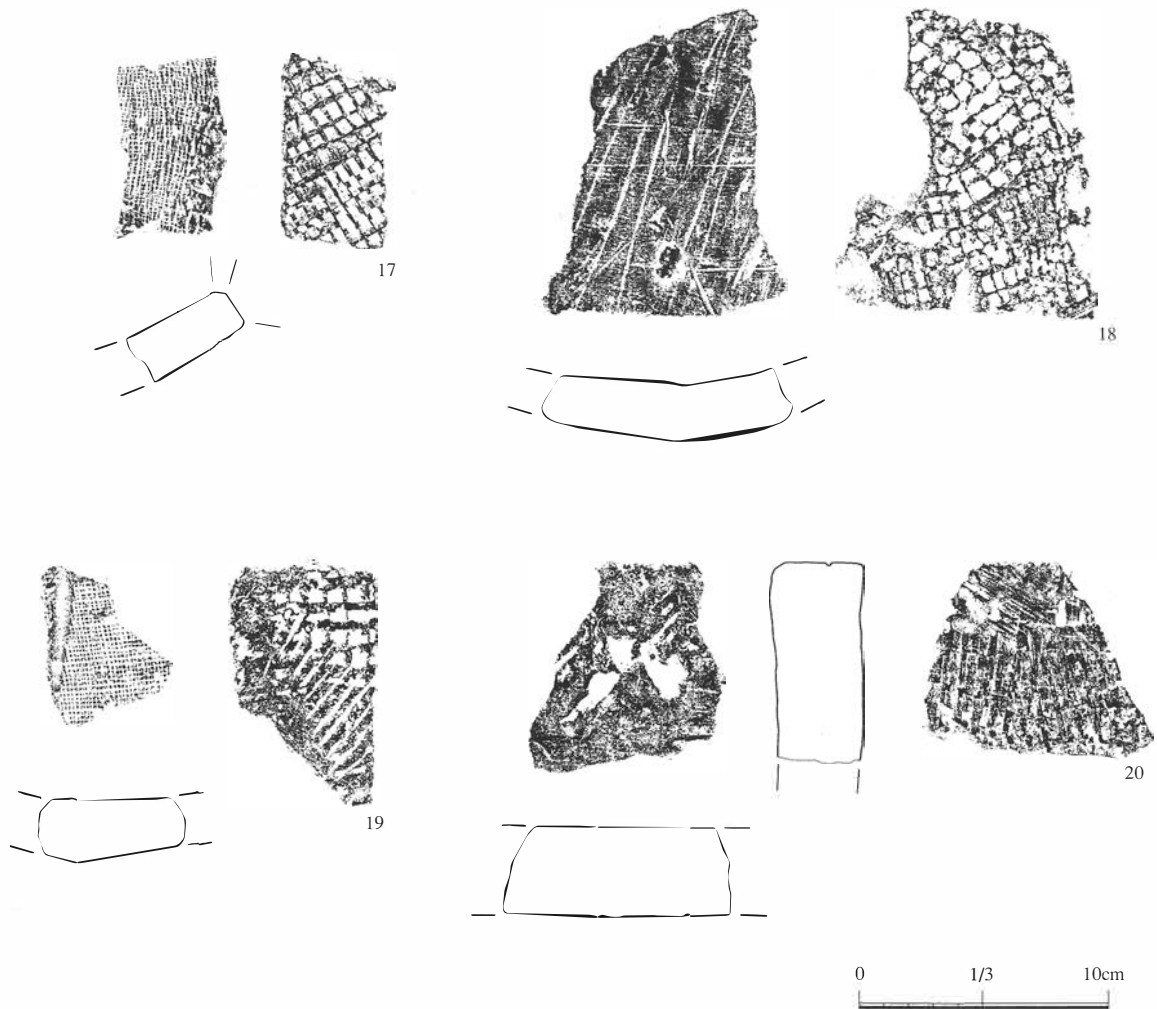


図15 瓦類 (4)

第4節 まとめ

第1項 町池・塚越・宮前・町地区

本次調査により、泉廃寺跡の遺跡としての範囲は、県の史跡指定地から南東側の町地区に少なくとも約 250m 拡がり、今回試掘調査の対象としなかったさらに東側の館前地区まで伸びることが予想される結果となった。また、遺構は河岸段丘上に構築され、宮前・町地区のうち、それより以南は、泥炭層を含む低湿地となり、遺構が構築される可能性は低いと判断された。

50・54Tで溝跡を検出した塚越地区では、両トレンチと県史跡泉廃寺跡との中間は、低湿地状態で遺構・遺物の検出が無かったことから、泉廃寺跡との関連はあるものの、別の遺跡として認知することとした。(後に広畑遺跡の範囲として平成 10 年度に発掘調査を実施し、平成 11 年度に発掘調査報告書を刊行した)。

塚越地区の北側で県史跡泉廃寺跡の西側にあたる町池地区には、31本のトレンチを設定したが、遺構・遺物ともに検出されなかったため、泉廃寺跡の範囲はこの地区までは及ばないと予想された(後に平成 8 年度の泉廃寺跡第 4 次調査、平成 9 年度の第 6 次調査の結果、遺構・遺物が検出され、泉廃寺跡の範囲は西側に延びることが判明した)。

以上より、この時点で、泉廃寺跡は、少なくとも東西約 550m、面積約 10ha の遺跡であることが判明した。(後に第 6 次調査及び平成 10 年度の第 10 次調査の結果、東西約 1 km、面積約 12ha の遺跡であることが明確となった。)

(堀)

第 2 項 寺家前地区

当遺跡の範囲のうちで県の史跡指定を受けている部分は、建物の礎石の存在が早くから知られており、周辺から出土する瓦や炭化米の出土と合わせ、この部分に行方郡家の正倉院が広がっていたものと推定される。第 1 次調査区のうち寺家前地区で検出された遺構は、礎石建物跡 1 棟、掘立柱建物跡 1 棟、溝跡などである。調査区が狭小であるため、確認された遺構の全体像については不明な点を残すが、根固め石を良好な状態で残す 1 号礎石建物跡は、行方郡家の正倉院の一部を構成する正倉建物であると考えられる。また、礎石建物跡は掘立柱建物跡と重複すると考えられ、掘立柱建物は礎石建物に先行する可能性が高い。その場合、特に東日本の郡家正倉の建物では相対的に新しい時期に礎石建物が導入されるといった傾向(註 1)とも符合する。

当遺跡の正倉院の内容については、早くから県指定となっていたため大部分が未調査であり不明な点が多いが、現在までに第 4 次調査と第 16 次調査で正倉関連の遺構が確認されている(註 2)。第 4 次調査では県指定地北東部の発掘が行われ、東西に走り西端で折れ曲がる大溝と、掘込地業が検出された。またこの第 4 次調査区に南側に位置する第 16 次調査区では、第 4 次調査区で南へ折れ曲がった大溝の延長部分と、それに区画された掘込地業が検出されている。確認された大溝は正倉区画溝と考えられ、その内部に造られた掘込地業はいずれも正倉建物のものと推定される。

正倉院の建物配置や変遷過程については、その内容を解明するための発掘調査を、平成 14 年度以降にも継続して行なっていく予定である。

(藤木)

《註》

註 1 山中敏史「第 4 節 正倉の構造と機能」『古代地方官衙遺跡の研究』1994 年 塙書房

註 2 堀 耕平ほか『原町市内発掘調査報告書』2 原町市埋蔵文化財調査報告書第 15 集 1997 年 原町市教育委員会、荒 淑人ほか『原町市内発掘調査報告書』7 原町市埋蔵文化財発掘調査報告書第 28 集 2002 年 原町市教育委員会

表2 第1次調査区出土土器類観察表

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量	調 整	地区
				口径/器高/底径		
1	3T L II	須恵器	甕	長 5.6/厚 1.0	内面：体部青海波文 外面：体部網目状タタキ	宮前
2	4T L I	須恵器	杯	-/(1.2)/8.0	内面：口~体部ロクロナデ 外面：口~体部回転ヘラケズリ	宮前
3	5T L III	須恵器	硯	-(3.0)/-	脚部内外面：ロクロナデ	宮前
4	5T L III	土師器	甕	14.4/(5.6)/-	内面：口縁部ナデ 体部ヘラナデ 外面：口~体部摩滅のため不明	宮前
5	32T L I, II	須恵器	甕	-(3.9)/18.4	内面：体部ハケ目、指ナデ 外面：体部平行タタキ、ヘラケズリ	塚越
6	44T	須恵器	壺	-(5.3)/10.4	内外面：体~底部ロクロナデ	塚越
7	50T 溝	土師器	杯	14.2/5.0/7.0	内外面：口~体部ロクロナデ 体~底部回転ヘラケズリ	塚越
8	54T L I, II	須恵器	杯	-(2.4)/6.8	内面：体~底部ロクロナデ 外面：体部手持ヘラケズリ 底部回転系切り	塚越
9	62T L I	須恵器	甕	長 6.1/厚 1.5	内面：体部ヘラナデ 外面：体部タタキ	塚越
10	83T L I	陶器	甕	-(4.3)/12.2	内面：体~底部ロクロナデ 外面：低部回転系切り後ヘラケズリ	町池
11	108T L I	土師器	蓋	34.0/(4.7)/-	内面：摩滅のため不明 外面：指ナデか？	町
12	128T L I	土師器	甕	-(5.2)/7.4	内面：体~底部ヘラナデ 外面：体部ハケ目	町
13	166T L I	土師器	高杯	-(5.5)/-	杯部内面：ヘラミガキ、黒色処理 脚部外面：ヘラケズリ	町
14	167T L I	磁器	台碗	-(2.3)/8.6	内面：ロクロナデ、ヘラ描き文様 外面：体部ヘラ描き文様 底部ヘラケズリ	町
15	168T L I	土師器	杯	13.4/4.8/6.3	内面：口体部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体部ヘラケズリ 底部回転系切り	町
16	168T L I	土師器	杯	-(3.0)/6.0	内面：体~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：底部ヘラケズリ	町
17	168T L I	土師器	杯	-(1.5)/8.6	内面：体~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体~底部ヘラケズリ	町
18	168T L I	土師器	杯	-(1.65)/6.0	内面：体~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体~底部ヘラケズリか？	町
19	168T L I	土師器	杯	-(0.9)/6.6	内面：体~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体~底部ヘラケズリか？	町
20	205T L I	土師器	鉢	-(4.5)/10.0	内面：体~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体~底部回転ヘラケズリ	町
21	205T L I	土師器	甕	-(2.6)/9.8	内面：体~底部指ナデ 外面：体部ヘラナデ 底部木葉痕	町
22	205T L I	土師器	甕	-(3.8)/8.6	内面：体~底部摩滅のため不明 外面：体部指ナデ？ 底部木葉痕	町
23	213T L I	土師器	杯	-(1.1)/6.2	内面：体底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：底部回転系切り後回転ヘラケズリ	町
24	L I	須恵器	蓋	4.0/(1.5)/-	内外面：ロクロナデ	
25	表面採集	須恵器	蓋	20.0/(1.9)/-	内外面：ロクロナデ	
26	SK01 上層	土師器	杯	17.8/4.9/7.6	内面：口~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：底部回転系切り後ヘラケズリ	寺家前
27	2T	土師器	杯	-(3.2)/6.8	内面：体~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ 底部系切り	寺家前
28	2T	土師器	高台杯	-(1.9)/3.8	内面：体~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体~底部ロクロナデ	寺家前
29	SK01 L II	赤焼土器	杯	13.2/3.6/7.8	内面：口~底部ロクロナデ 外面：口~体部ロクロナデ 底部回転系切り	寺家前

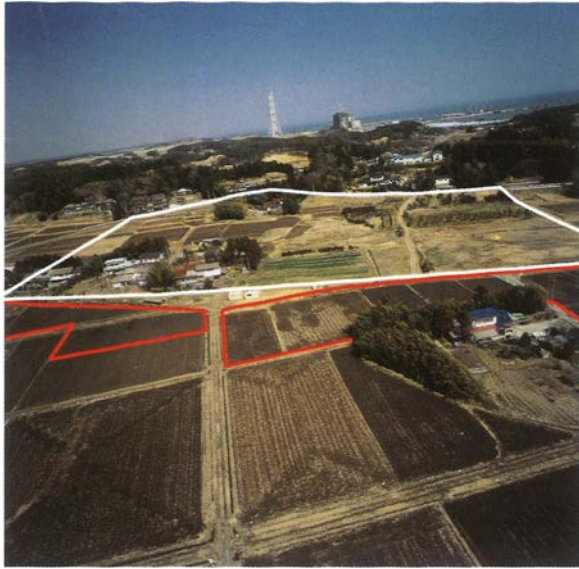
表3 第1次調査区出土瓦観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	調 整		重量	厚さ	備 考
				凸 面	凹 面			
12	1	146T L I	軒丸瓦	瓦当文様：花葉文		90	2.6	瓦当側面ヘラケズリ、
12	2	152T L I	丸瓦	ヘラケズリ	布目痕、模骨痕	370	2.1	凹側縁指ナデ
12	3	2T L I	丸瓦	ヘラケズリ	布目痕、模骨痕	250	2.1	凸側縁ヘラケズリ
12	4	2T L I b	丸瓦	ヘラナデ	布目痕、模骨痕	150	1.7	側面、凹凸側縁ケズリ
12	5	2拵T. SK01	丸瓦	ヘラナデ	布目痕、糸切痕？	120	1.8	側面、凹凸側縁ケズリ
12	6	2拵T. SK01	丸瓦	正格子タタキ・ナデ	布目痕	110	2.0	
13	7	1T L I	平瓦	簾状タタキ	ヘラケズリ	530	2.6	凹凸側縁ヘラケズリ、側面ケズリ
13	8	172T L I	平瓦	簾状タタキ	布目痕、模骨痕	360	2.8	側面分割まか？
13	9	155T~ 158T	平瓦	簾状タタキ	布目痕、ヘラナデ	620	3.4	側面、凹凸側縁ケズリ
13	10	4T L I	平瓦	簾状タタキ	布目痕	220	2.1	
13	11	17T L I	平瓦	簾状タタキ	布目痕	130	1.9	
13	12	5T L I	平瓦	簾状タタキ	布目痕	140	2.6	凹凸端部ヘラ削り
14	13	159T L I	平瓦	雨垂れ状タタキ	布目痕、模骨痕	1,340	2.5	凹側縁ケズリ
14	14	159T L I	平瓦	雨垂れ状タタキ	布目痕、ヘラナデ	320	2.8	凹側縁ケズリ
14	15	表探	平瓦	斜格子タタキ	布目痕、ヘラケズリ	250	2.4	凸側縁ケズリ
14	16	165T L I	隅切瓦	斜格子タタキ	布目痕、模骨痕	200	2.5	端面三面ヘラ削り、凹側縁ケズリ
15	17	18T L I	平瓦	正格子タタキ	布目痕	100	2.0	凹側縁ヘラケズリ
15	18	表探	平瓦	正格子タタキ	布目痕、ヘラケズリ	380	2.8	1枚作りか？
15	19	表探	平瓦	正格子タタキ・ナデ	布目痕	170	2.6	
15	20	127T L I	塼	格子タタキ、平行タタキ	布目痕	60	2.2	

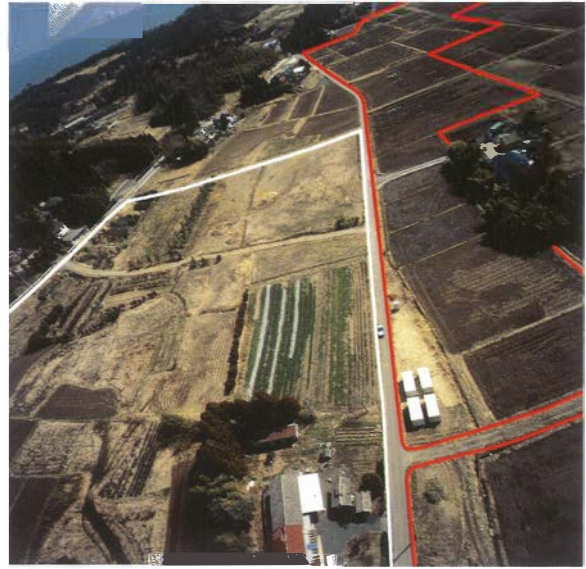
図版1 第1次調査範囲全景



図版2 第1次調査 町池・塚越・宮前・町地区



1 調査区近景 (南から)



2 調査区近景 (西から)



3 158 T (南から)



4 211 T (南から)



5 217 T (南から)



6 271 T (南から)



7 128 T (西から)



1 1号礎石建物跡（西から）



2 1号掘立柱建物跡（東から）

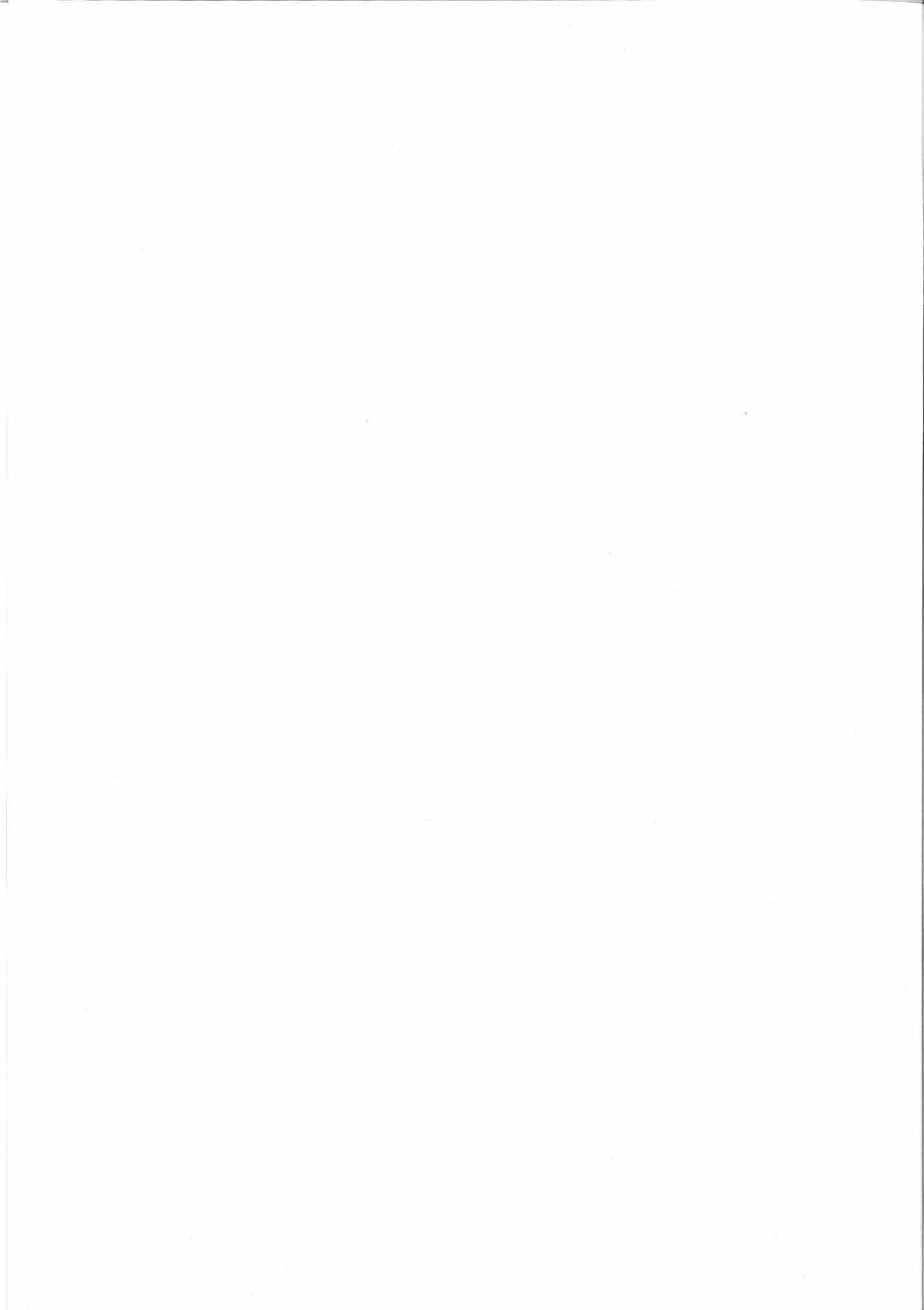
図版 4
第1次調査
遺物 (1)



第1次調査出土遺物 土器・陶磁器類



第1次調査出土遺物 瓦類



第4章 第3次調査

第1節 調査に至る経過

第3次調査区は、遺跡東部にあたるG13グリッド付近に位置する。第3次調査は、農業用河川部須川の計画路線上に位置していた宅地が移転されることとなったため、この移転先の宅地造成に伴って行われた本調査である。当調査区の西約60mの地点には郡庁院の遺構が確認された第17次調査区が、県道をはさんだ南東約100mの位置には多量の瓦が出土し、付近に郡家に伴う寺院跡の存在が想定される館前地区（第10次調査区）が位置している。

第2節 調査の方法

まず耕作土である表土をバックホーで除去した後、遺物包含層あるいは遺構検出面であるⅡ層以下に到達した段階で人力により掘り下げ、遺構検出作業を行なった。掘り下げは、調査区内に一辺5mの小グリッドを設定し（図16）、グリッドの境界線上に土層観察用のベルトを適宜残して行なうこととした。後述するように、遺構検出面は中世以降と古代とで数枚に分かれるが、実際には調査区内の各部分によって土層の遺存状況は異なっていた。従って、小グリッドを単位として掘り下げ及び遺構検出作業を行ない、遺構を検出した際に適宜実測・写真撮影を行なっている。遺物は出土層位・小グリッド名を記録して取り上げ、特に必要と思われるものについては出土状況図および写真撮影を行ない記録したうえで取り上げた。遺構平面図は

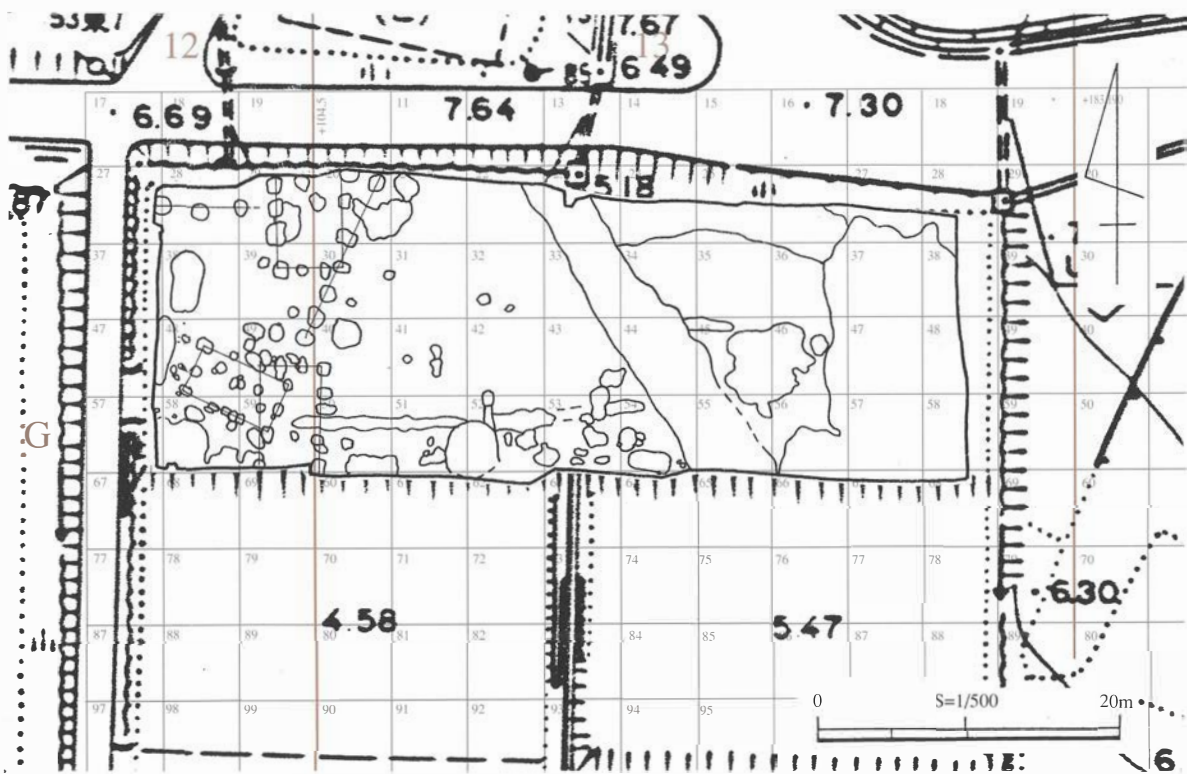


図16 第3次調査区グリッド配置図

グリッド杭を基準として平板実測により作成した。セクション図の基準は海拔高度を利用した。写真撮影は 35mm カメラを使用した。フィルムはフジカラーSUPERIA100 (カラープリント用)、フジクローム Sensia II (カラーリバーサル) を使用した。

第3節 調査成果

第1項 基本層序

当調査区で確認した基本層序は以下のとおりである。(図 17)

- L I 層…暗褐色砂質土 (表土)
- L I b 層…灰褐色土 (表土=水田土壌)
- L I c 層…灰色土 (表土=水田土壌)
- L II 層…灰褐色土
- L II b 層…黒褐色土 (炭化物・遺物含む)
- L II c 層…暗褐色砂質土
- L II d 層…黒褐色土
- L III 層…黒色土
- L IV 層…黄褐色土 (ローム層)

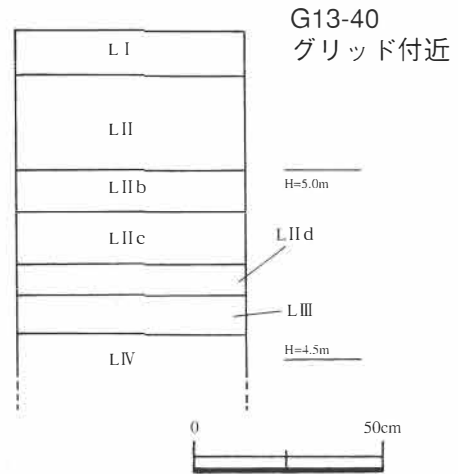


図17 第3次調査区基本土層柱状図

遺跡の乗る地形は、もともとは南へ向かって緩く傾斜するものであるが、水田造成によって水平に削平を受けている。調査区で検出された基本土層のうちL I・L I b・L I c層はこの水田土壌である。旧地形を棚田状に造成しているため、調査区北寄りの部分が特に著しく削平を受け、この部分ではL I c層直下にL III層が位置している。一方、南へ行くにつれて層の残りが良くなり、調査区中央部から南端ではL I層の下でII層・II b層が確認された。

遺構検出面は、中世以降と思われる遺構についてはL II b層上面でピット群を、L II c層上面で3・4号溝跡や20号土坑などを確認している。また、古代に属する遺構はL III層を確認面としたが、セクションベルトの検討の結果、2号掘立柱建物跡や2号溝跡などの遺構はL II d層から掘り込まれていることが明らかとなった。

このように遺構検出面が複数に分かれるため、第2項における遺構の記述は、大きく古代・中世に分けて行うこととする。

第2項 遺 構

1. 古 代

出土遺物や検出層位などから古代に属すると推定される遺構は、掘立柱建物跡3棟、溝跡2条、土坑12基、性格不明遺構3基である(図18)。

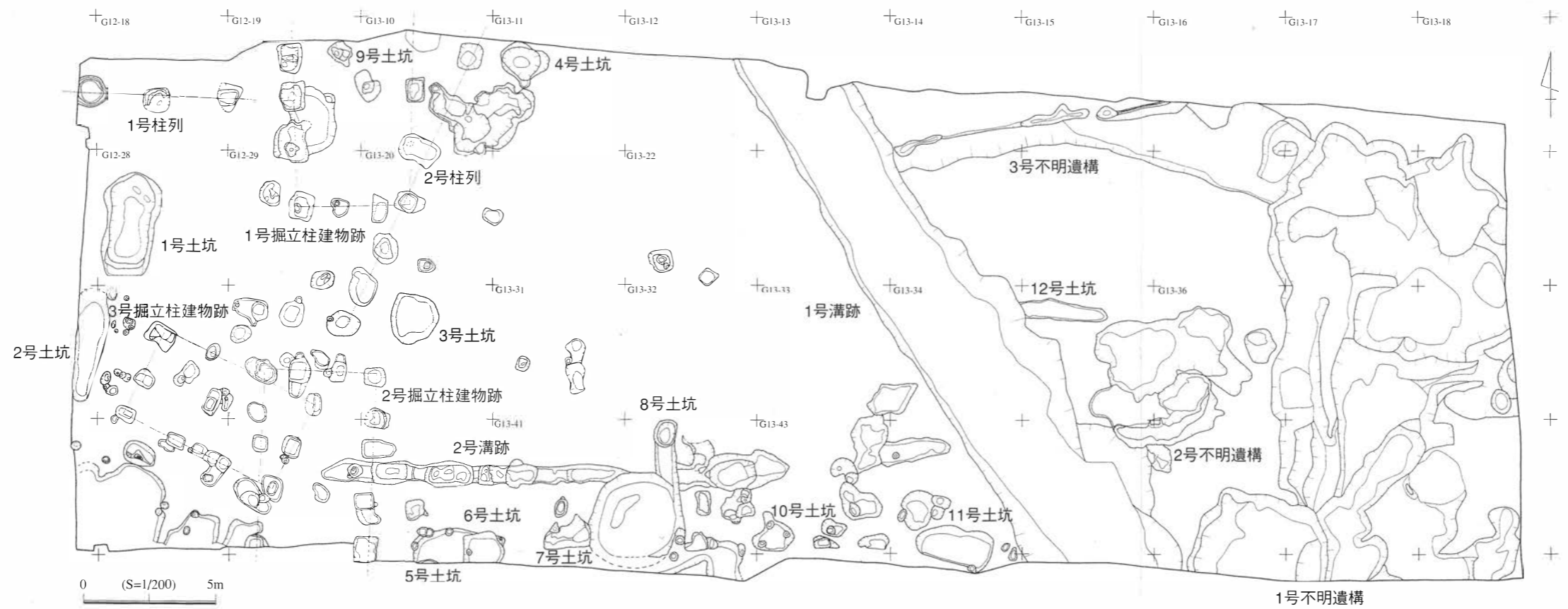


图18 古代遺構配置図

(1) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (図 19)

位置 G12-29・39、G13-20・30 グリッドに位置する。北側は調査区外にかかる。**重複関係** 2号柱列と重複し、これより新しい。**主軸方位** 西側桁行柱列で計測してN-1.5°-Wを示す南北棟建物である。**平面形式** 北側は調査区外にかかるが、桁行3間以上×梁行3間の

側柱建物である。**規模** 各柱穴で柱痕跡を確認していないため不明確であるが、柱穴のほぼ中央で計測して規模を復元すると、桁行総長5.7m以上、梁行総長4.2mである。柱間寸法は、西側桁行が北から1.5m+1.8m+2.4m、東側桁行が北から不明+2.1m+2.1m、梁行は西から1.65m+1.5m+1.05mである。**柱穴** 9個を確認した。掘方は長軸1.5~0.7m、短軸0.6~0.9m、深さ0.15~0.5mほどの隅丸長方形を呈する。埋土は黒色土と黄褐色土の互層であり、版築が認められた。No.1・2・3・8・9柱穴では掘方底面に礎板が遺存していた。**出土遺物** 土師器の小片が少量出土したが、図化できる遺物は出土しなかった。

表4 SB1柱穴計測値 (m)

	長軸	短軸	深さ (絶対標高)
No. 1	0.86	0.74	0.44 (4.62)
No. 2	1.01	—	0.52 (4.62)
No. 3	1.12	0.76	0.46 (4.56)
No. 4	1.16	0.92	0.45 (4.66)
No. 5	1.08	0.96	0.46 (4.60)
No. 6	1.54	1.28	0.27 (4.58)
No. 7	1.02	0.96	0.36 (4.42)
No. 8	0.72	0.68	0.16 (4.60)
No. 9	1.02	0.61	0.22 (4.57)

2号掘立柱建物跡 (図 20)

位置 G12-49・59、G13-40・50 グリッドに位置する。部分的に削平を受けているが、No.1~5掘方はL II d層上面から掘り込まれていることがセクションベルトから観察された。**重複関係** 3号掘立柱建物跡と重複し、これより新しい。**主軸方位** N-3°-Eを示す。**平面形式** 南側は調査区外にかかるが、桁行4間以上×梁行3間の側柱建物である。**規模** 各柱穴

で柱痕跡を確認していないため不明確であるが、柱穴のほぼ中央で計測して規模を復元すると、桁行総長6.6m×梁行総長4.2mである。柱間寸法は、西側桁行が北から1.65m+1.2m+2.1m+1.65m、東側桁行が北から16.5m+1.2m+1.95m+1.8mである。梁行は西から1.35m+1.5m+1.35mを測る。**柱穴** 12個を確認している。掘方は長軸1.6~0.8m、短軸0.9~0.5m、深さ0.6~0.4mほどの隅丸長方形、楕円形を呈する。No.6・7柱穴で礎板が遺存していた。**出土遺物** なし

表5 SB2柱穴計測値 (m)

	長軸	短軸	深さ (絶対標高)
No. 1	0.85	0.74	0.66 (3.93)
No. 2	—	0.72	0.57 (3.98)
No. 3	1.29	0.69	0.50 (3.98)
No. 4	0.63	—	0.38 (4.13)
No. 5	—	0.94	0.54 (3.91)
No. 6	1.05	0.61	0.62 (3.92)
No. 7	1.68	0.81	0.48 (4.06)
No. 8	1.80	0.93	0.66 (3.83)
No. 9	0.80	0.66	0.48 (3.98)
No.10	0.64	0.53	0.54 (3.90)
No.11	1.60	0.88	0.46 (3.99)
No.12	—	0.88	0.39 (3.98)

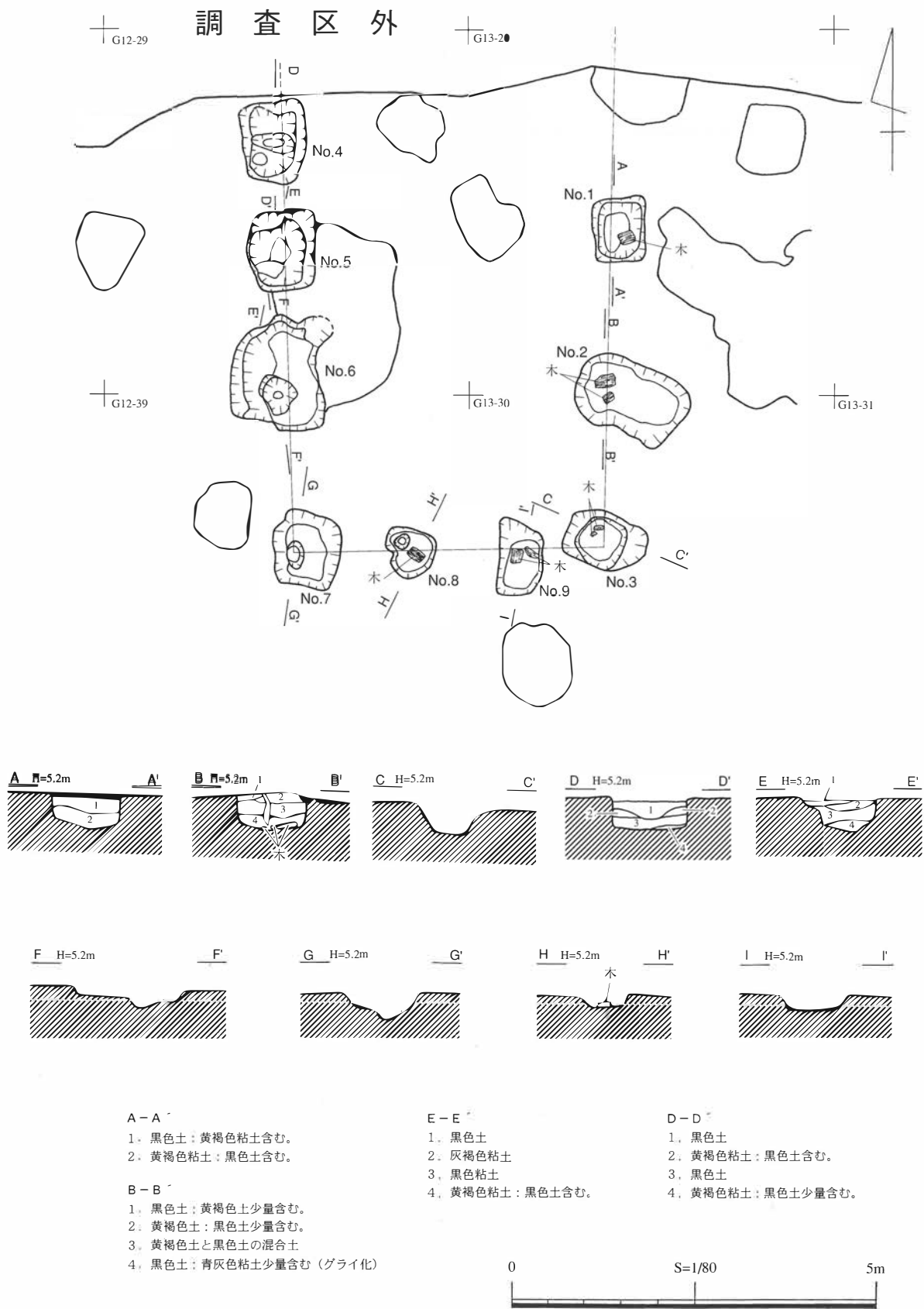


図19 1号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡 (図 21)

位置 G12-48・49・58・59 グリッドに位置する。
重複関係 2号掘立柱建物跡に切られる。
主軸方位 W-26.5° - N (N-63.5° - W) を示す東西棟建物である。
平面形式 桁行3間×梁行2間の側柱建物である。
規模 各柱穴で柱痕跡を確認していないため不明確であるが、柱穴のほぼ中央で計測して規模を復元すると、桁行総長 6.3m×梁行総長 3.5mである。柱間寸法は、南側桁行が 2.1m等間、西側梁行が北から 2.0m+1.5m、東側梁行が 1.75m等間である。**柱穴** 10

表 6 SB3柱穴計測値 (m)

	長軸	短軸	深さ (絶対標高)
No. 1	1.10	0.85	0.61 (3.68)
No. 2	0.71	0.49	0.33 (3.95)
No. 3	1.82	0.93	0.64 (3.68)
No. 4	0.83	0.60	0.63 (3.77)
No. 5	0.76	0.66	0.75 (3.44)
No. 6	0.78	0.66	0.51 (3.74)
No. 7	0.78	0.52	0.51 (3.58)
No. 8	0.72	0.51	0.26 (3.95)
No. 9	0.54	0.48	0.49 (3.76)
No. 10	0.92	0.82	0.48 (3.79)

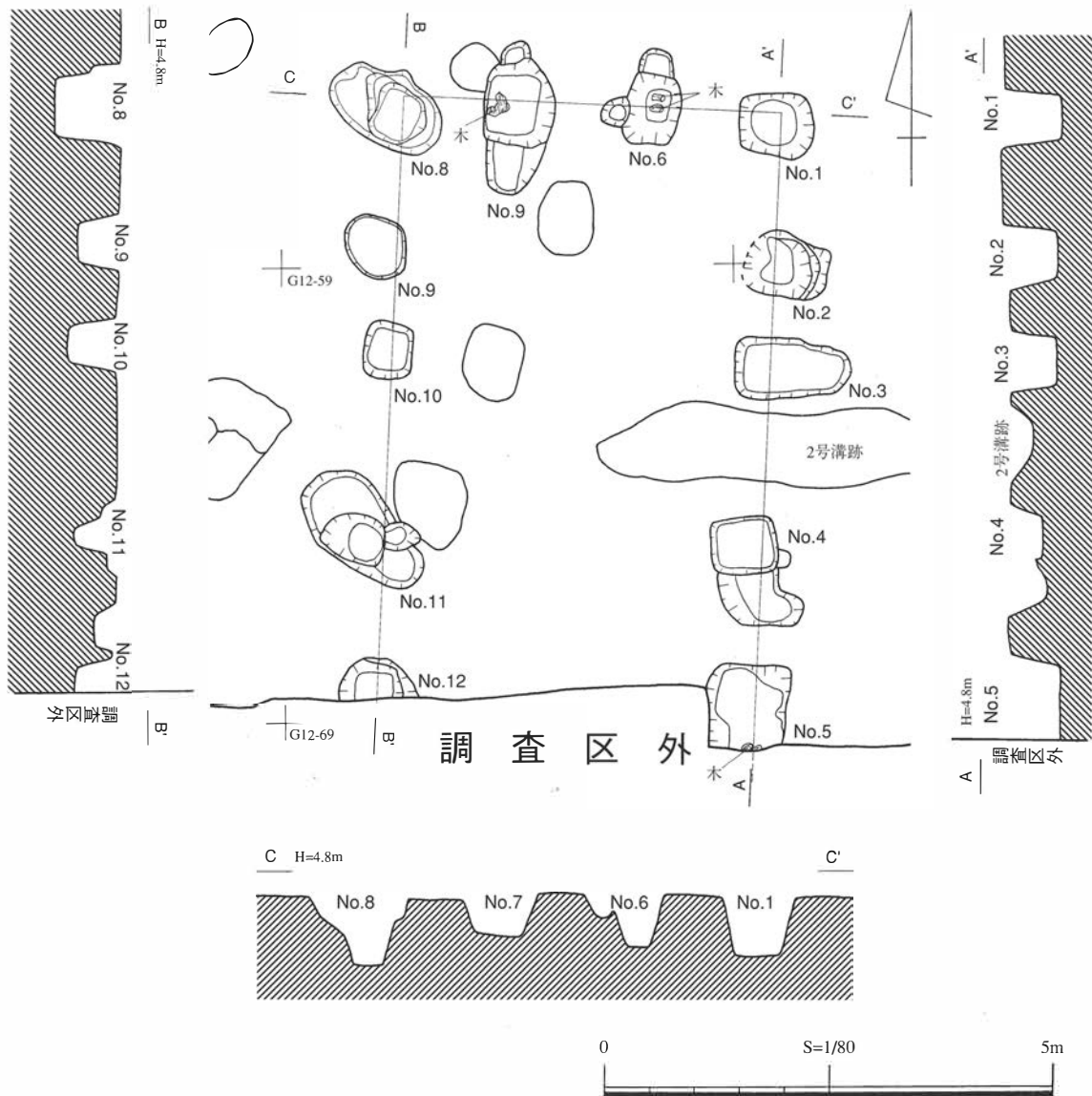


図20 2号掘立柱建物跡

個を確認している。掘方は長軸 1.1~0.5m、短軸 0.85~0.5m、深さ 0.65~0.25mほどの隅丸
 方形・隅丸長方形・楕円形を呈する。

(2) 一本柱列

1号柱列 (図22)

位置 G12-28 グリッドに位置する。重複関
 係 なし 主軸方位 W-2.5° -Nを示す東
 西柱列である。規模 当調査区内で2間分 (総
 長 5.1m) を確認した。柱間寸法は西から 2.7m+2.4mである。柱穴 3個を確認した。掘方

表7 SA1柱穴計測値 (m)

	長軸	短軸	深さ (絶対標高)
No.1	1.16	—	0.22 (4.64)
No.2	1.02	0.92	0.16 (4.65)
No.3	1.03	0.89	0.18 (4.68)

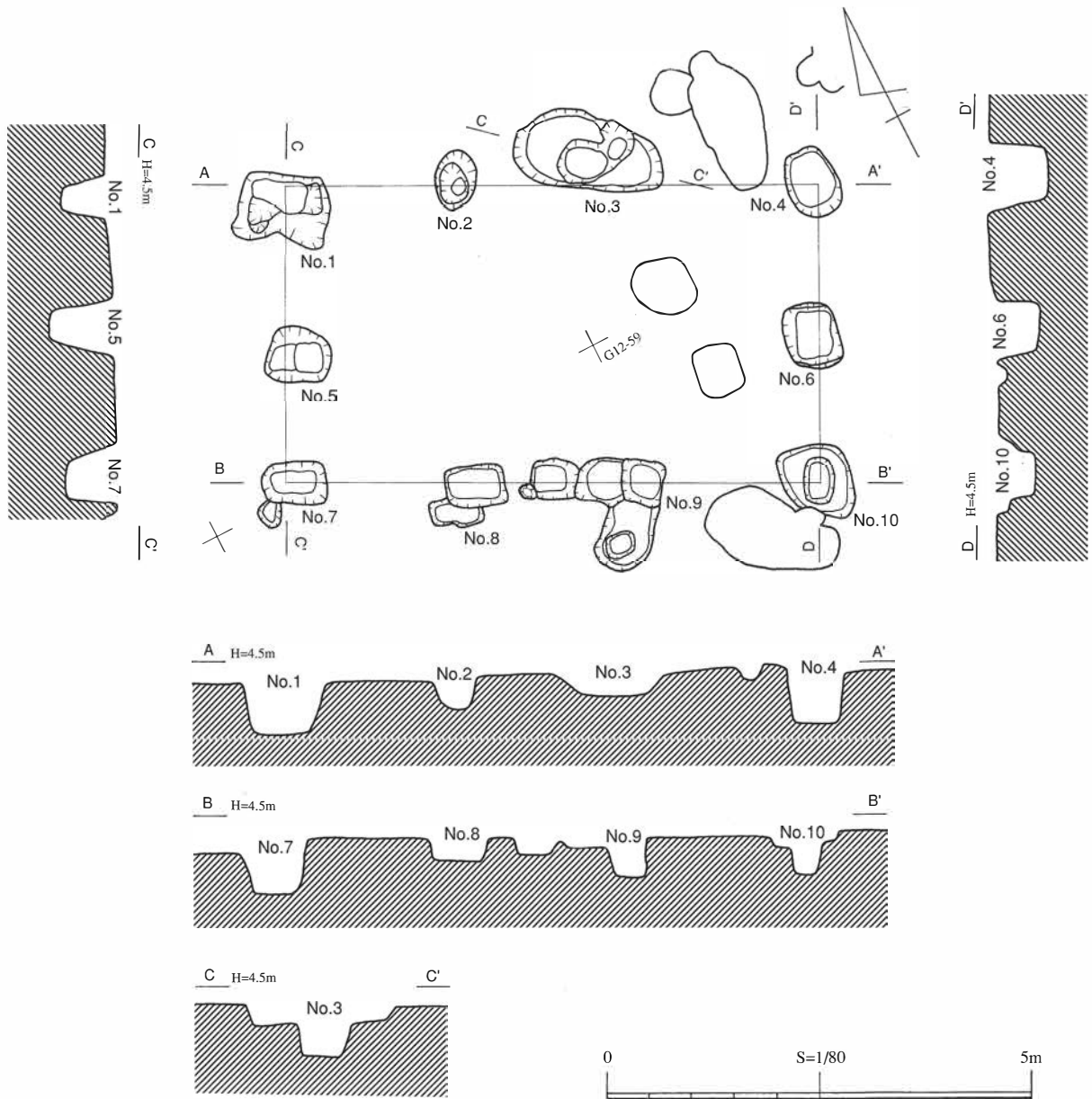


図21 3号掘立柱建物跡

は、長軸 1.1m、短軸 0.9m、深さ 0.2m 前後の不整形ないし隅丸方形を呈する。掘方は底面部分が遺存するのみであり、埋土の状況は不明確であるが、No. 3 掘方では、黄褐色土と黒色土により埋め戻されている状況が観察された。**出土遺物** なし **備考** 本柱列跡は、北側調査区外に広がる掘立柱建物跡となる可能性があるが、削平が著しく、掘方底面近くが遺存してただけであり、詳細は不明である。

2号柱列 (図 23)

位置 G13-20・30・40 グリッドに位置する。

重複関係 1号掘立柱建物跡と重複し、これより古い。**主軸方位** N-26.5° -Eを示す南北一本柱列である。**規模** 調査区内で6間分(総長 10.9m)を確認した。柱間は北から 1.8m + 2.1m + 1.8m + 2.0m + 1.8m + 1.4m である。

柱穴 6個を確認した。掘方は長軸 1.25~0.9m、短軸 0.75~1.00m、深さ 0.65m~0.30m ほどの隅丸長方形ないし不整円形を呈する。No. 4 掘方は、1号掘立柱建物跡の南東隅の掘方と位置が重複する。**出土遺物** なし

表 8 SA 2 柱穴計測値 (m)

	長軸	短軸	深さ (絶対標高)
No. 1	0.98	0.85	0.65 (4.53)
No. 2	1.03	—	0.34 (4.60)
No. 3	0.94	—	0.28 (4.53)
No. 4	1.10	0.76	0.42 (4.36)
No. 5	1.14	0.94	0.40 (4.34)
No. 6	1.26	1.04	0.32 (4.32)
No. 7	1.24	0.98	0.48 (4.14)

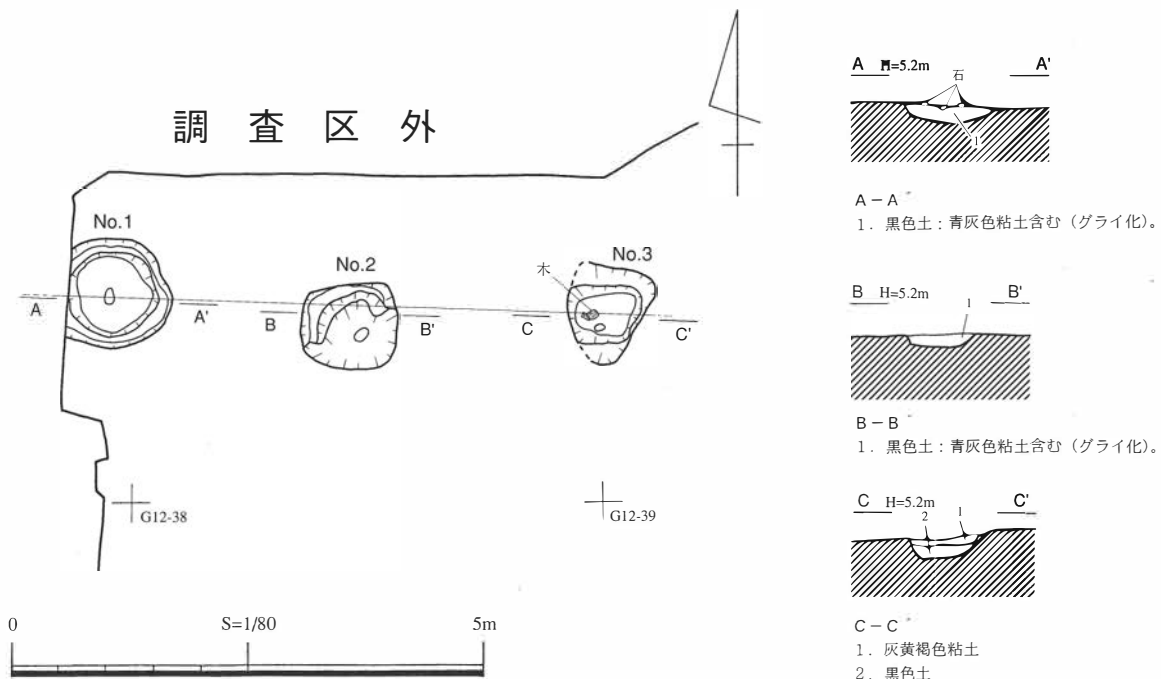


図22 1号柱列

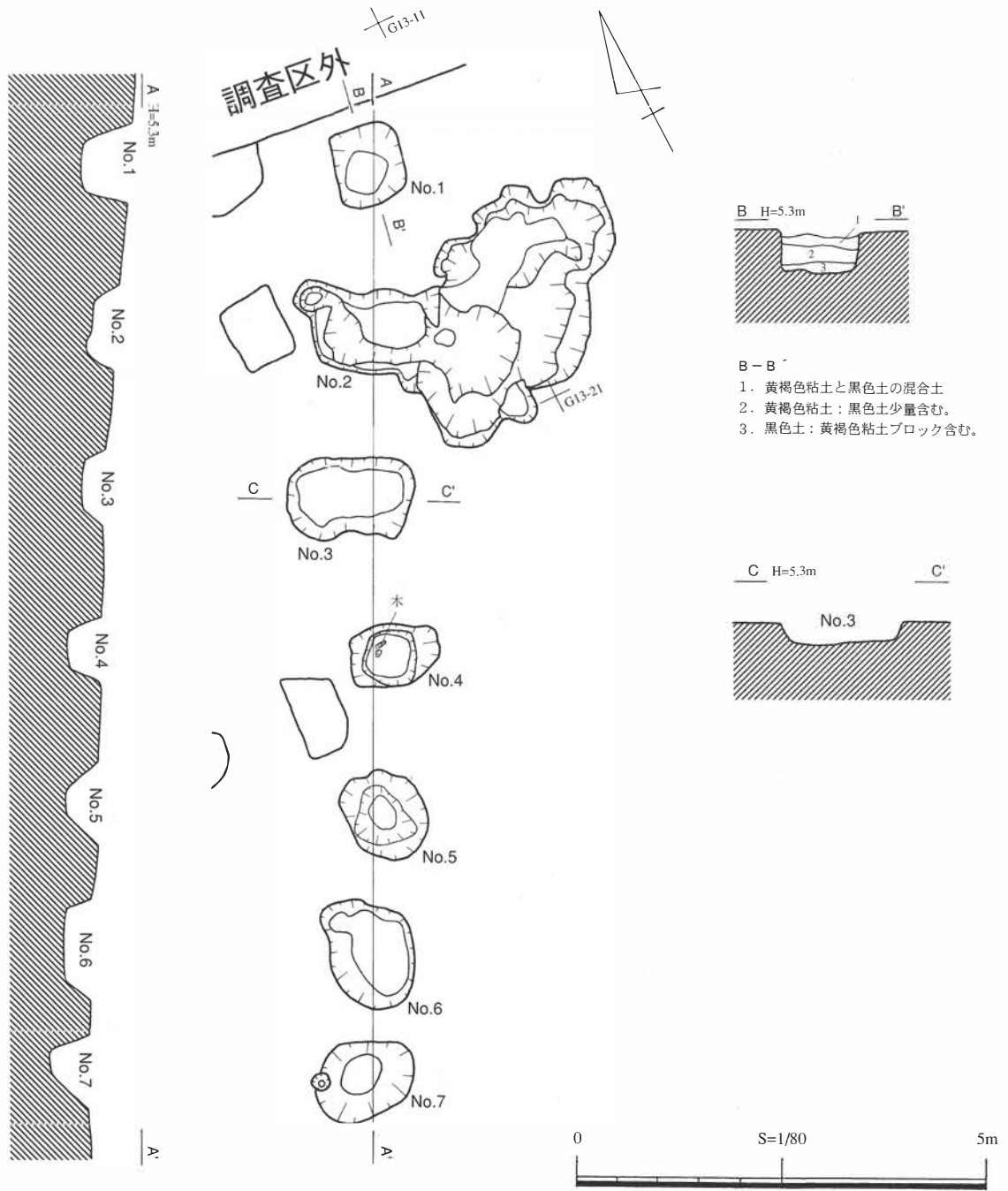


図23 2号柱列

(3) 溝 跡

1号溝跡 (図 24・26)

位置 調査区内を北西―南東方向に横断する南北溝である。調査区内で 21.5mを確認しているが、北・南側ともに調査区外へ延びている。L II c 層上面で検出した。**重複関係** 12号土坑、3号不明遺構と重複するが、先後関係は不明である。また、中世以降の 13号土坑に切られる。**主軸方位** N-33°-Wを示す。**規模** 上幅 4.96~3.32m、下幅 36.8~24.8m、深さ 0.82~0.50mを測る。**形態** 調査区内を直線的に走っている。上幅と下幅の値が近く、壁の傾斜が急で底面の平坦なハコ堀状の溝跡である。調査区北端部分と南端部分とで底面の標高を比較すると、北側が約 20 cmほど高い。遺跡の立地する地形の制約によるものと推定される。**覆土** 暗褐色土・黒色土の自然堆積による覆土。最下層に一部灰色砂質土が薄く堆積していた。**遺物** 覆土から土師器杯・高杯・蓋・甕が出土した (図 26)。1は口縁部と底部との境界に稜を有する丸底の杯で、栗圀式期のものである。外に開く口縁部は弱く内湾している。口縁部外面にヨコナデ、底部にヘラケズリが施され、内面はミガキ・黒色処理が行われている。2~4は高杯である。2は大きく横に開く浅い杯部と短い中実の脚部からなる。杯部内面はミガキ・黒色処理が施されている。杯部外面は口縁部にヨコナデ、杯部底から脚部にかけては縦位のヘラケズリが施されている。3は比較的長い中実の脚部から脚裾部が大きく横に開く。外面には縦位のヘラケズリが施されている。脚部との接合部分のみが残った杯部は内黒である。4も中実の脚部で、外面に縦位のヘラケズリが施されている。5は蓋で、天井部のみを残す資料である。外面の天井部中央に平坦面をもつ。内・外面とも密なミガキ・黒色処理が施されている。6・7は甕で、いずれも胴下半から底部をのこす資料である。6は胴部外面に縦位のハケメ後ヘラナデ、底面は外周をヘラナデにより調整するが中央部は木葉痕を残す。7は内・胴部外面・底面はヘラケズリ、内面はヘラナデにより調整されている。**備考** 大規模に掘削された溝跡であるが、官衙関連の建物群とは方位が一致せず、性格は不明である。当調査区の南に位置する第9次調査区では、削平のため不明確ながら、やはり大規模な溝跡が確認されており、本溝跡はこれに続いていく可能性がある。

2号溝跡 (図 25)

位置 調査区南端付近、G13-50~54 グリッドに位置する東西溝である。L II d 層上面で検出した。**重複関係** 7号土坑と重複するが、先後関係は不明である。**主軸方位** 西側部分では W-0° を示すが、東側ではやや北に振れ、W-6°-Sを示す。**規模** 西端はG12-59 グリッドで途切れ、東端はG13-54 グリッドで途切れており、総長 23.5mを測る。また、G13-53 グリッドで一部途切れる。幅 1.35~0.55m、深さ 0.77m~0.38mを測る。**形態** 底面が部分的に深く掘り込まれており、溝内に土坑状の掘り込みが数単位並ぶ。この部分では溝幅もやや広い。土坑状の掘り込みの間の部分は浅く掘り残されている。断面形は底面が緩やかにカーブするU字形を呈するが、形状は部分によって異なる。**覆土** 上層部に暗褐色土、下層部はグライ化し、灰黒色土が堆積している。**遺物** 土師器の小片が少量出土しているが、図化できるも

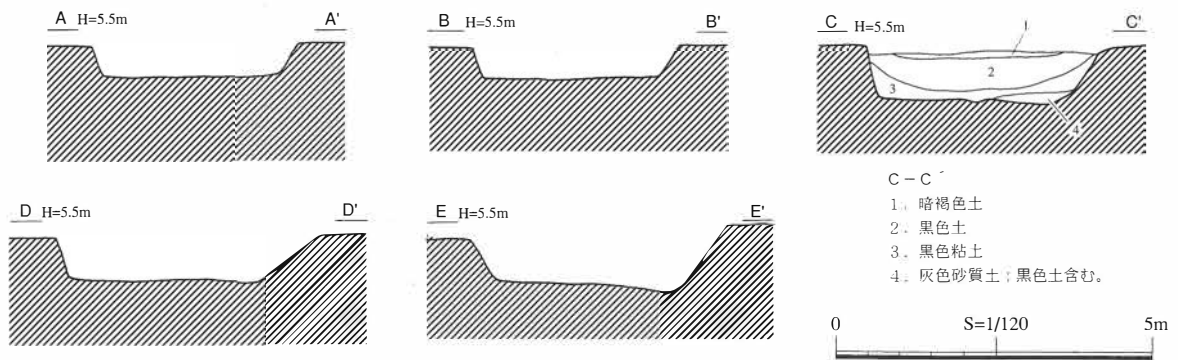
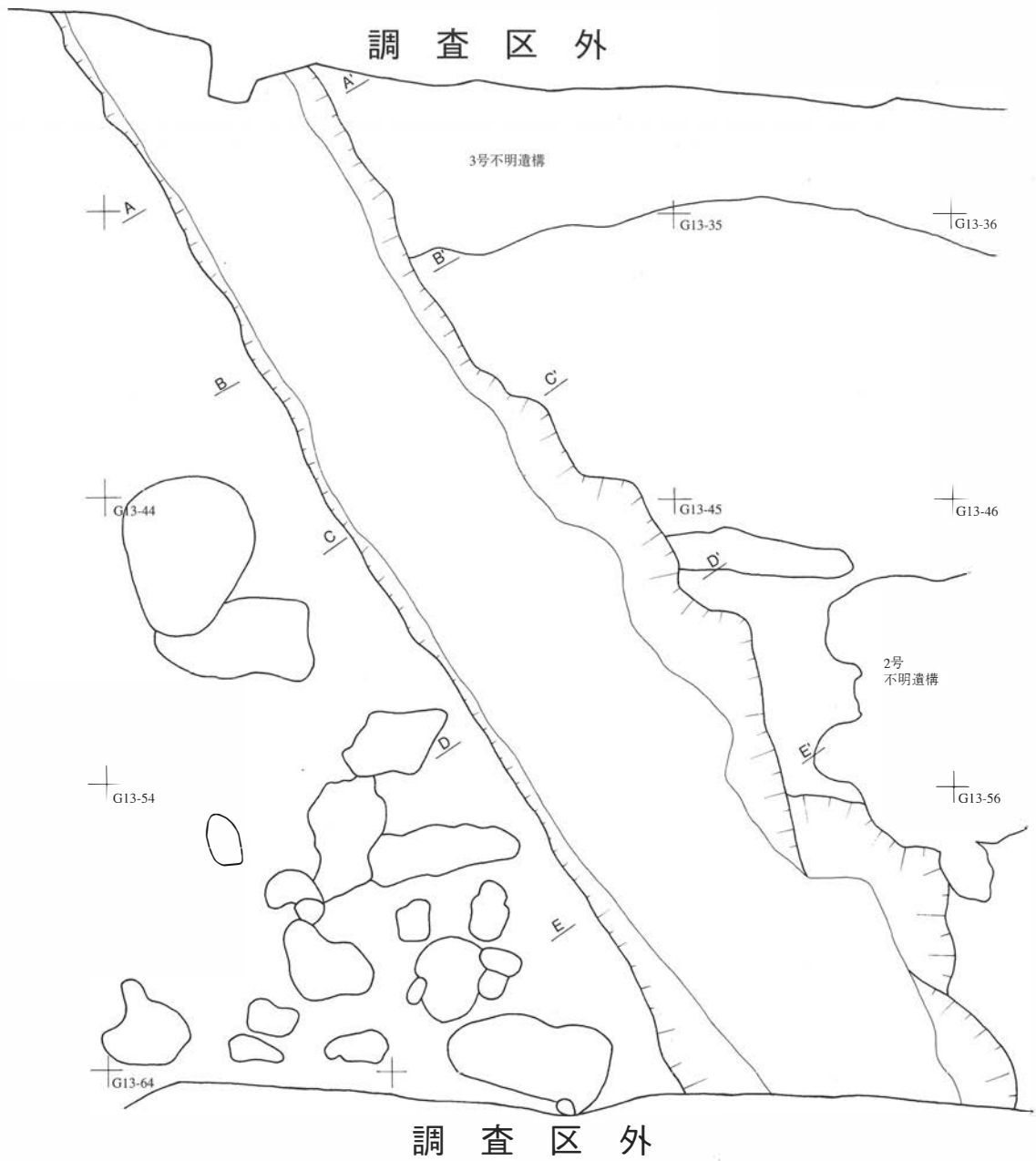


図24 1号溝跡

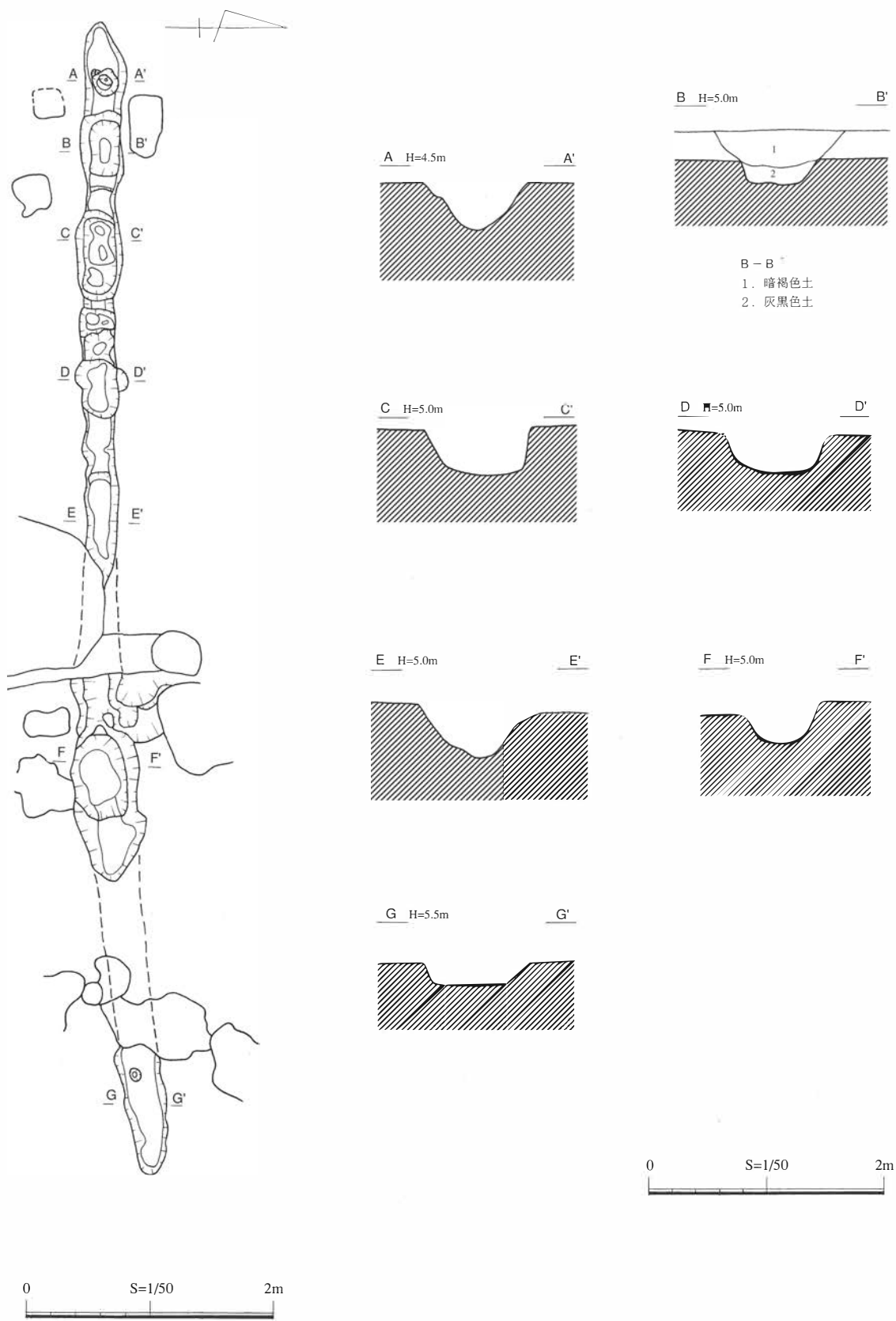


图25 2号沟迹

のはなかった。**備考** 本溝跡は、溝内に土坑状の掘り込みが並ぶ形状であることから、柵列の布掘り状の掘方である可能性があるが、覆土その他の特徴からは、その性格を特定するだけの知見を得られなかった。しかし、方位は真東西を向き、1・2号掘立柱建物跡や1号柱列と同じ方位をとることから、真北方位をとる官衙施設に伴って掘削された区画施設である可能性が高いものと推測している。

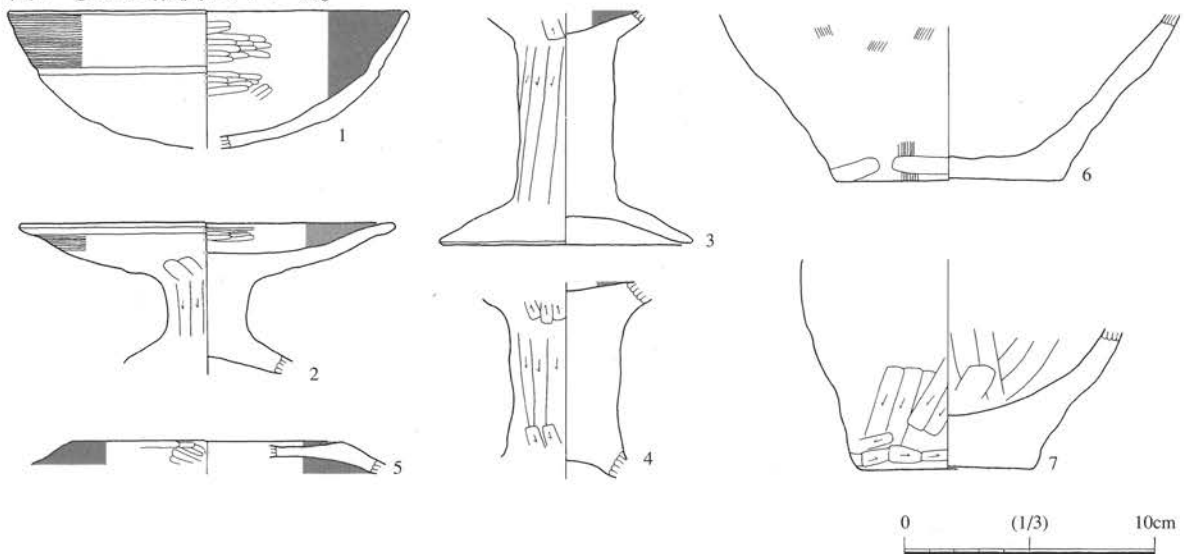


図25 1号溝跡出土遺物

(4) 土 坑

古代に属する土坑は12基である(図27~31)。表9に計測値をまとめた。

表9 古代土坑計測表

遺 構	位 置	平 面 形	規 模 (m)	遺 物	備 考	挿 図 号
			長軸×短軸×深さ			
1号土坑	G12-38	長楕円形	3.82×2.14×0.54	須恵器甕		27・28
2号土坑	G12-47・48	不整長円形	4.22×1.14以上×0.22	なし		29
3号土坑	G13-30	不整円形	1.84×1.80×0.10	なし		29
4号土坑	G13-21	不整形	1.79×1.28×0.48	なし		29
5号土坑	G13-67	不明	2.5m以上×1.26以上×0.10m	なし	6号土坑より新しい。	29
6号土坑	G13-50	不明	1.50×1.11×0.26	なし	5号土坑より古い。	29
7号土坑	G13-52	円形	3.62×3.18×0.84	木片	2号溝跡と重複有り。	30
8号土坑	G13-52	隅丸長方形	1.00×0.82×0.37	なし		30
9号土坑	G12-29	不整形	0.86×0.71×0.15	なし		30
10号土坑	G13-53	平面不整形	1.56×1.54×0.06	木片		31
11号土坑	G13-54・64	卵形	2.82×1.54×0.63	なし		31
12号土坑	G13-45	溝状	3.46×0.72×0.12	なし	1号溝跡と重複有り	31

1号土坑

調查
区
外

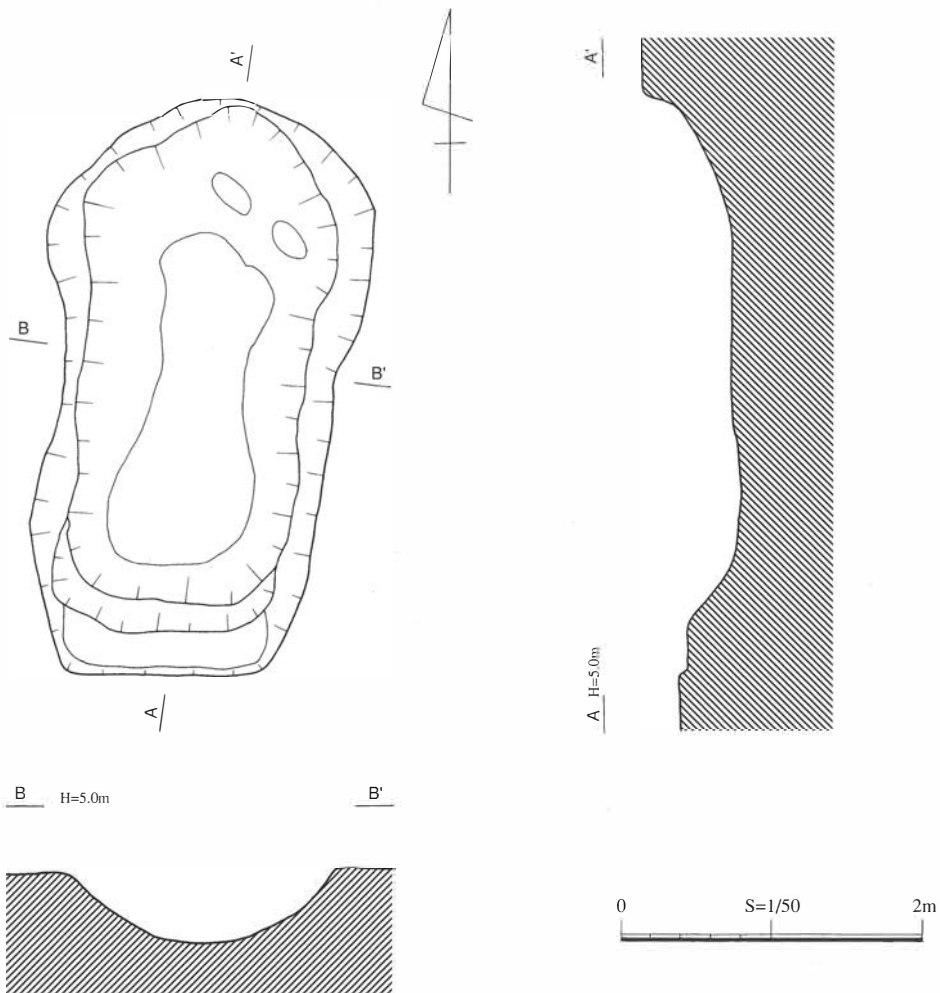


图27 土坑 (1)

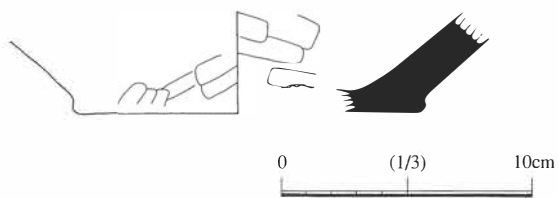
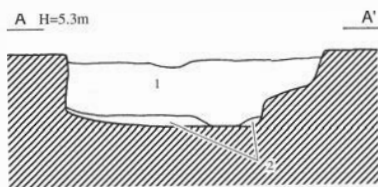
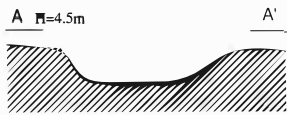
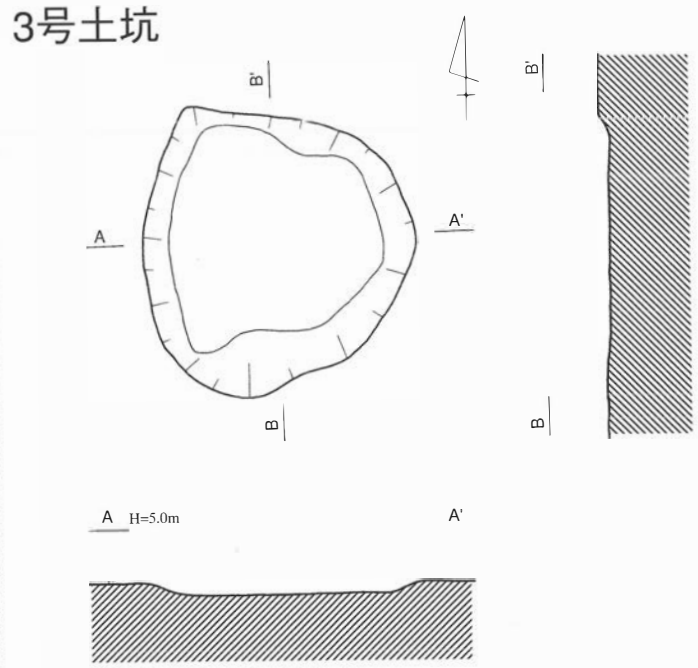
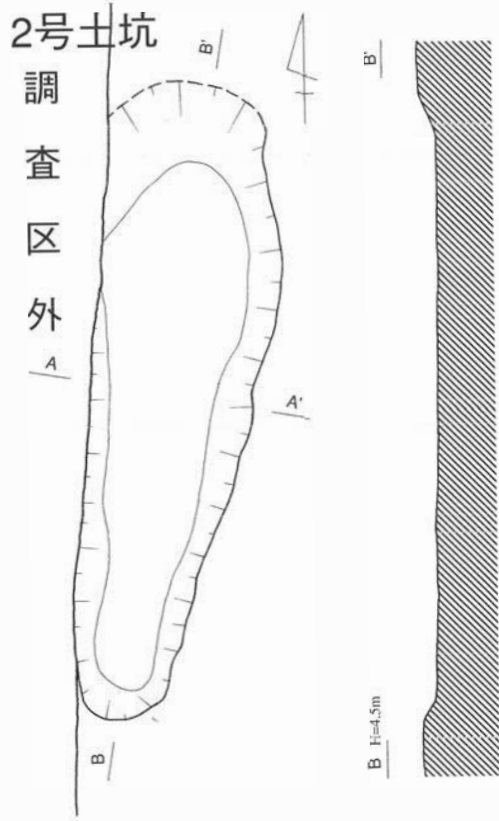


图28 1号土坑出土遺物



- A-A'
1. 黒色土：にぶい黄褐色粘土少量含む。
 2. 灰褐色土

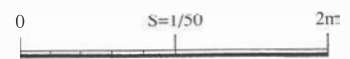
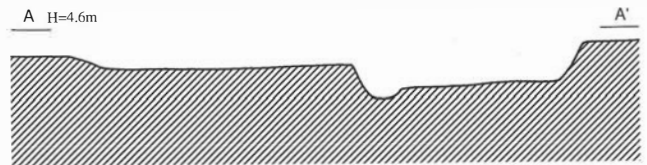
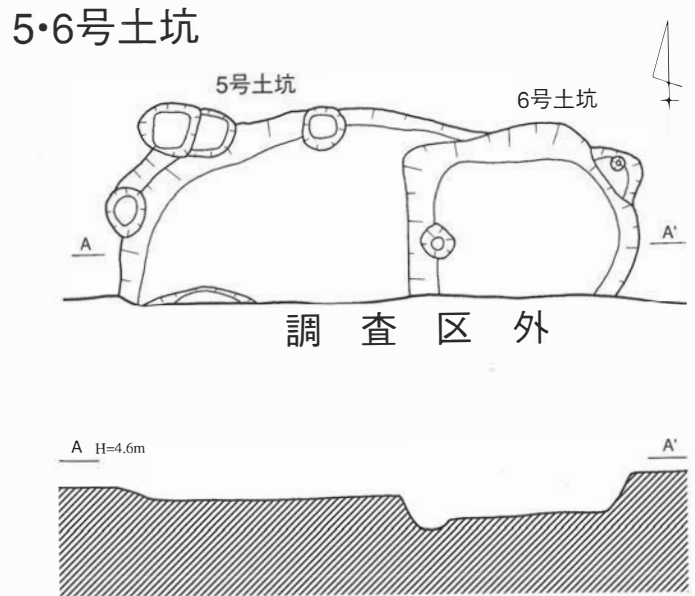
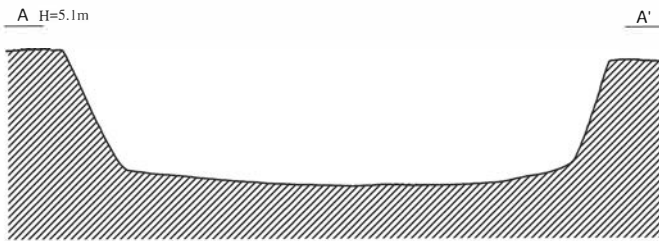
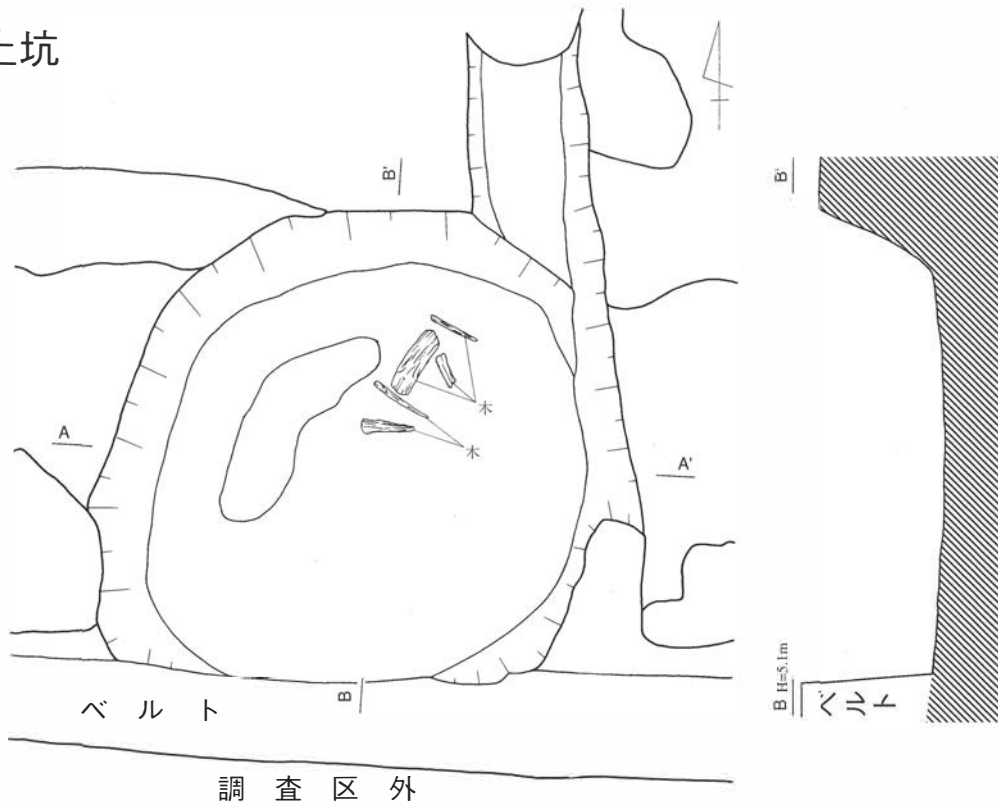
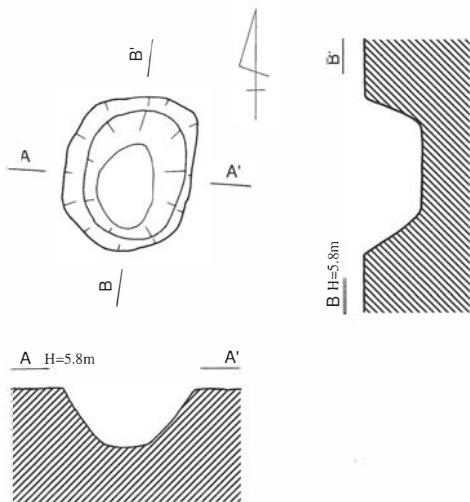


図29 土坑 (2) 2~5・6号土坑

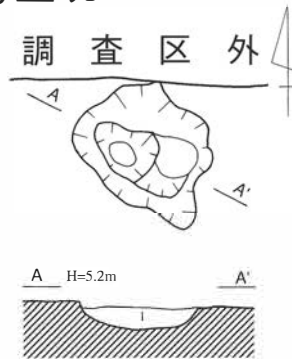
7号土坑



8号土坑



9号土坑



A-A'
1. 黒色土：黄褐色土少量含む。

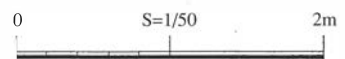
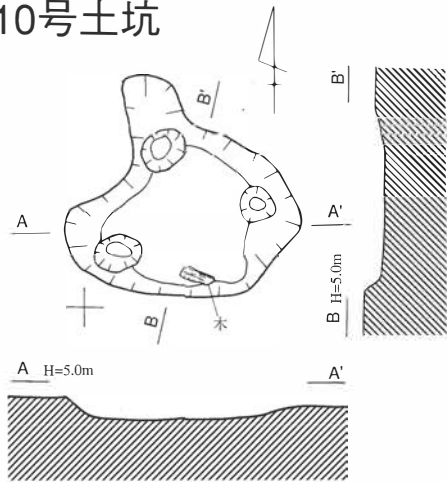
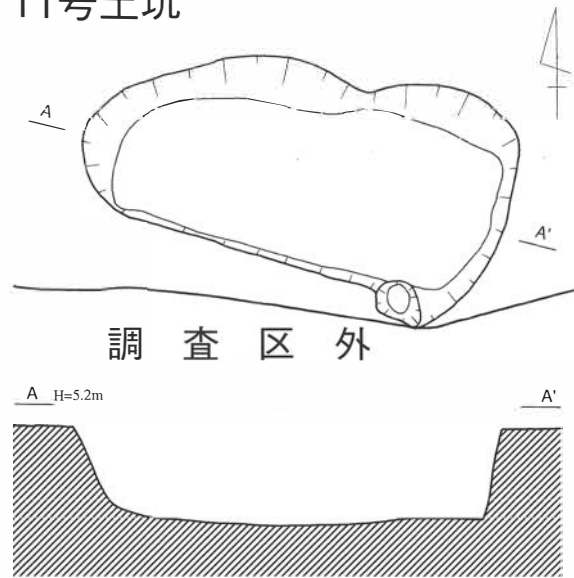


図30 土坑 (3) 7~9号土坑

10号土坑



11号土坑



12号土坑

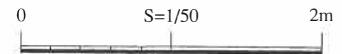
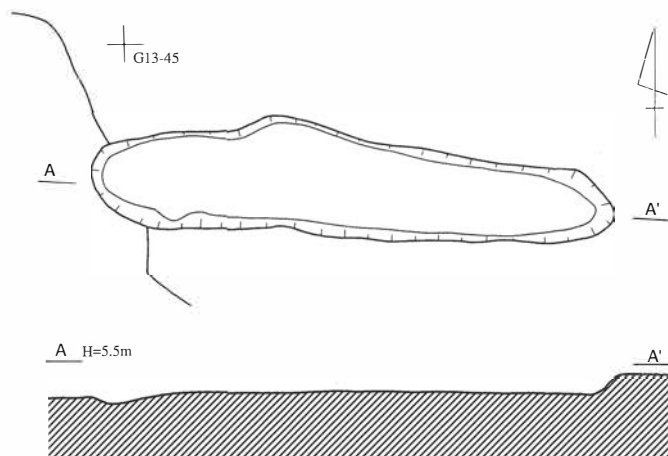
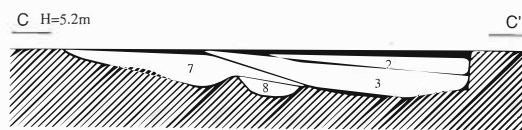
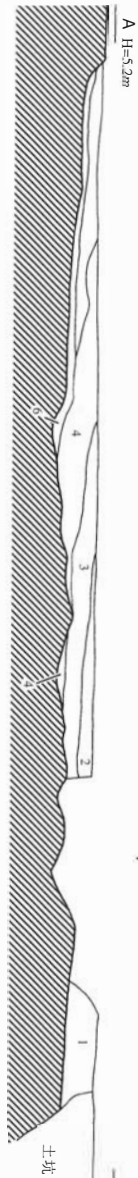
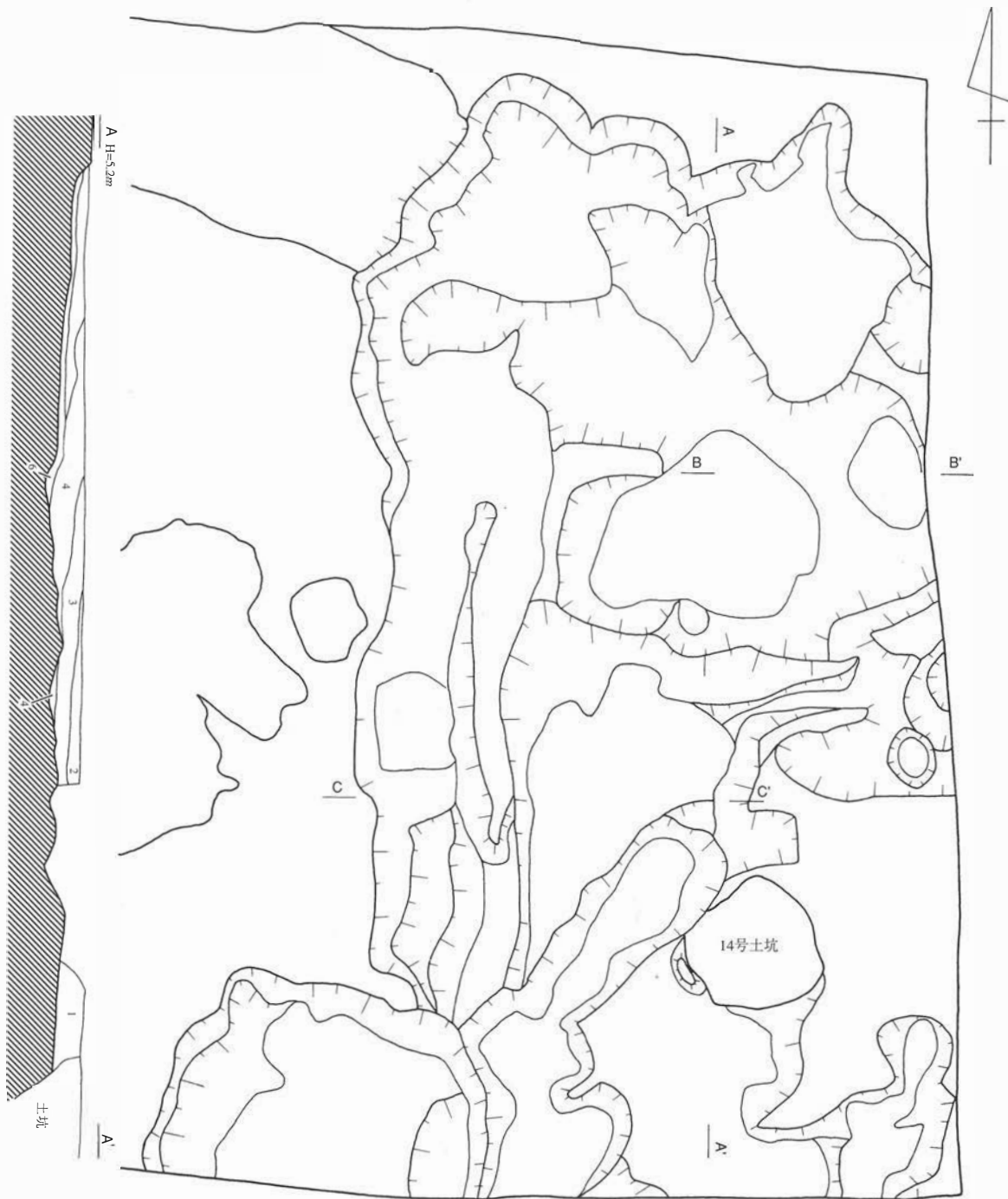


図31 土坑 (4) 10~12号土坑

(5) 性格不明遺構

1号不明遺構 (図 32・33・34・35)

位置 調査区東端に位置する。北側・西側は掘りこみの際を確認したが、東側・南側は調査区外へ広がる。**重複関係** 3号不明遺構と重複するが、先後関係は不明である。規模 東西9m以上、南北17m以上に広がる。**形態** 平面不整形の掘り込みで、明確な底面をもたず、複雑な凹凸がみられる。深さも一定ではない。**覆土** 土層断面を観察すると、A-A'セクションでは北から南へ、C-C'セクションでは西から東へ土が流れ込んでいる状況が観察された。覆土は掘り込みの外側から内側へ向かって流れ込んだ自然堆積によるものと判断される。



A-A'・B-B'・C-C'

1. 暗褐色土：黄褐色粘土ブロック含む。
2. 灰褐色砂質土
3. 黒色土と灰褐色砂質土の互層
4. 暗褐色土：灰黄色粘土含む。
5. 灰褐色砂質土と黒色土の互層
6. 黒色土：灰黄色粘土含む。所々に砂層あり。
7. 暗褐色土：黄褐色土含む。
8. 黒色土：黄褐色土含む。

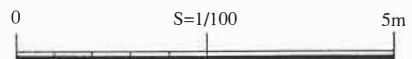


図32 1号不明遺構

遺物 覆土から土師器・須恵器・石製品が出土している。図 33 に示したのは土師器である。1・2は土師器の蓋で、両者とも両黒の土師器である。口縁端部が下方へ短く折れ、天井部外面の中央に平坦面をもつ器形である。これらは、同じく両黒の高台付杯である3とセットになるものと考えられる。3は高さ1cmほどの短い高台をもち、外へ開く底部が上方へ折れて口縁部へ向かう器形で、全面に密なミガキが施され、黒色処理が行われている。4～6は杯である。4は非ロクロ整形の杯で、口縁部外面にはヨコナデを施し、以下底面まで手持ちヘラケズリによる調整が行われている。内面には密なミガキ・黒色処理が施されている。なお、内・外面とも口縁部から体部にかけて黒色の光沢をもつタール状の付着物が認められる。これは油煙と推定され、本遺物は灯明皿として使用されたものと考えられる。5・6はロクロ整形の杯である。両者とも内面にミガキ・黒色処理が施されている。また、体部下端～底面に回転ヘラケズリが施されている。なお、5には外面の体部と内面の一部に赤褐色の付着物がみられる。6は底面に手持ちヘラケズリが施されている。7は高台付杯の底部である。ロクロ整形で、内面にミガ

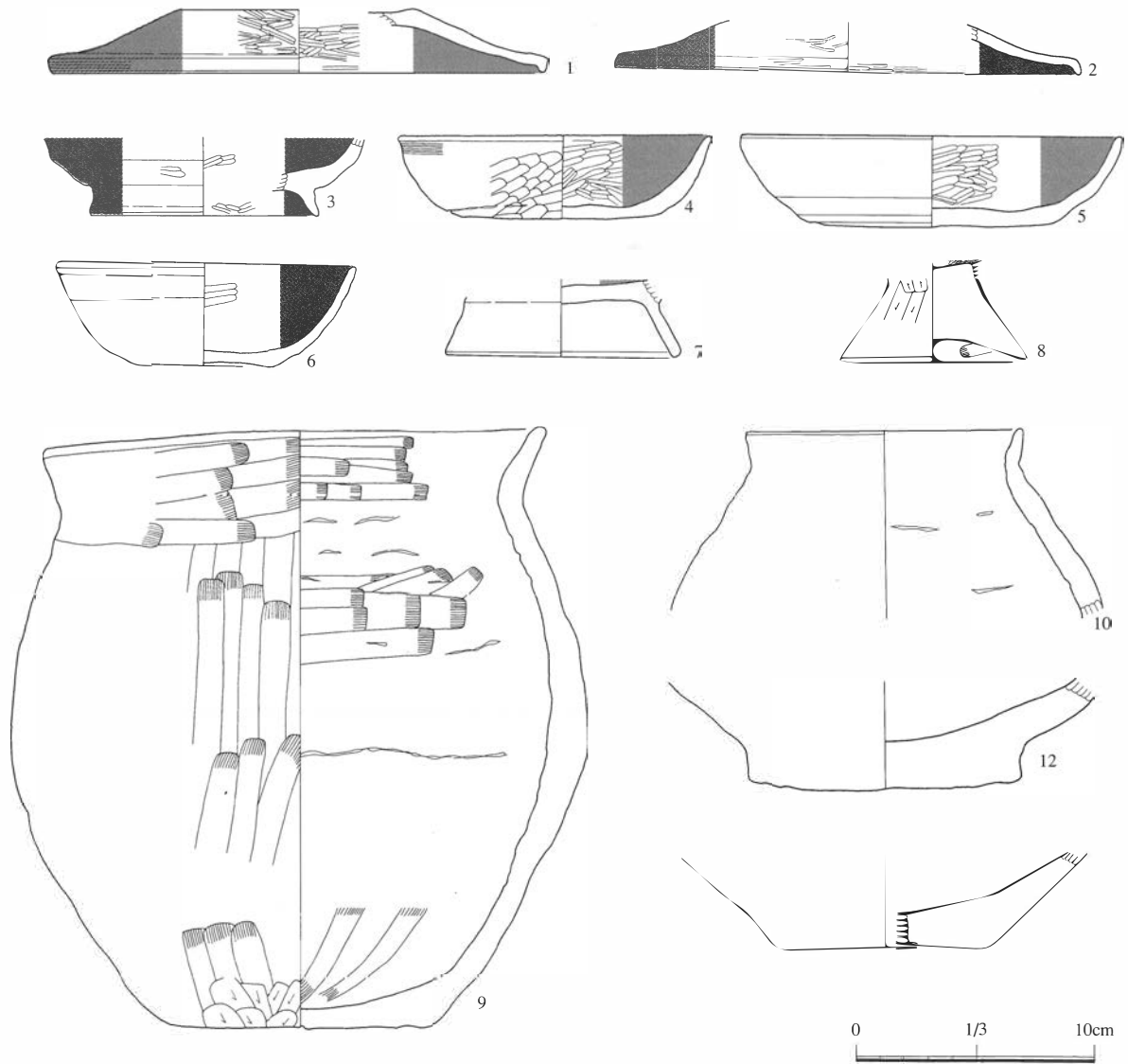


図33 1号不明遺構出土遺物 (1)

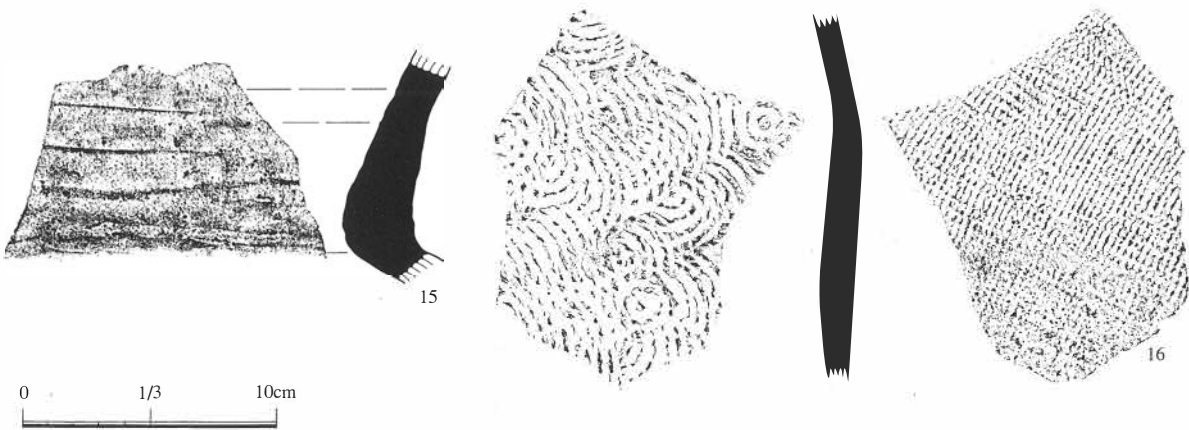
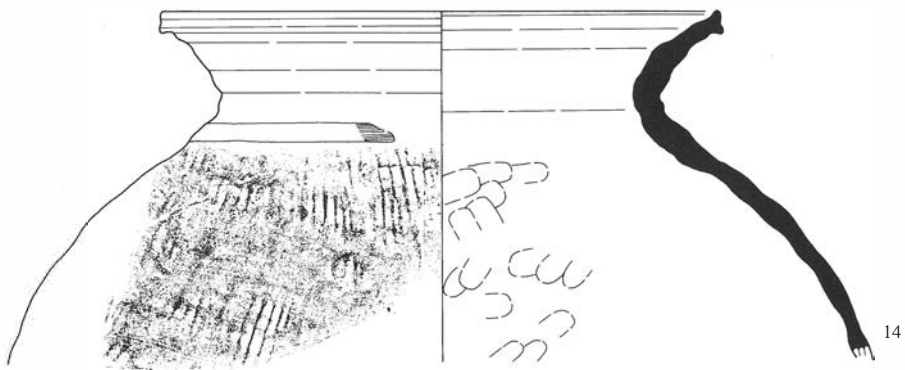
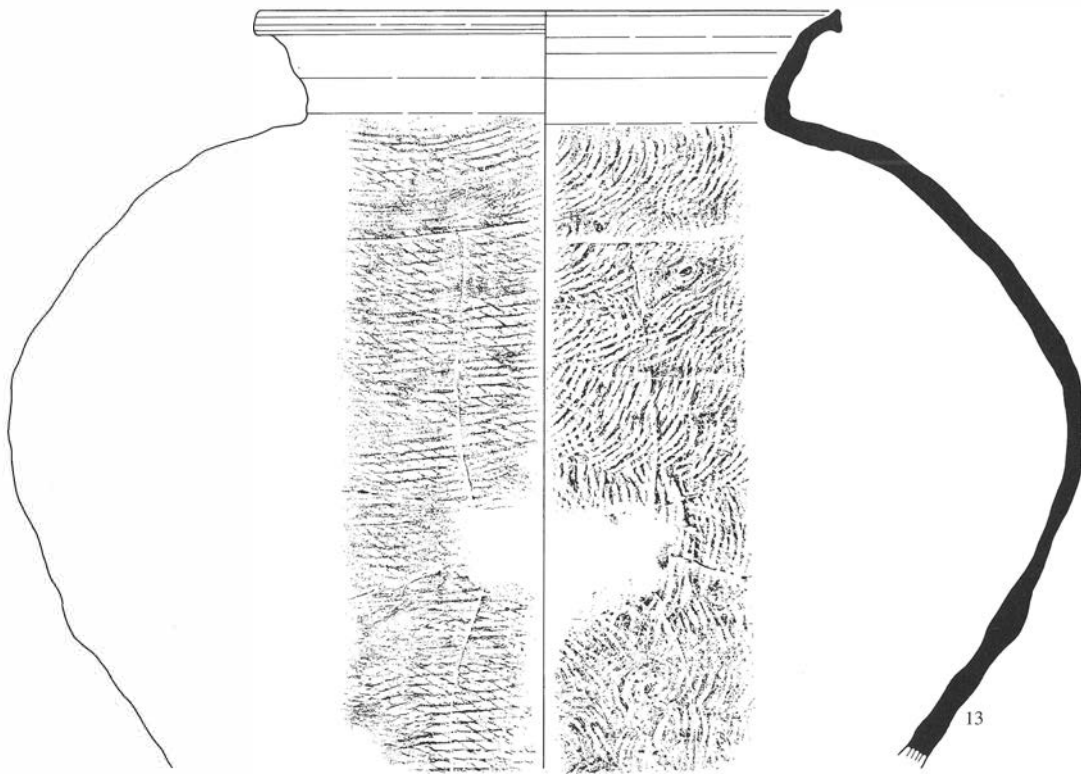


图34 1号不明遺構出土遺物 (2)

キ・黒色処理が施されている。
8は高杯の脚部である。高さ
3 cm前後の短い脚部で、柱状
の部分はほとんどなく、杯部
との接合部分からまっすぐ外
へ開いてそのまま裾部に至る
器形である。杯部内面にはミ
ガキ・黒色処理が認められる。

図 34 に示したものは須恵
器で、いずれも甕である。13

は胴部外面には斜格子タタキ

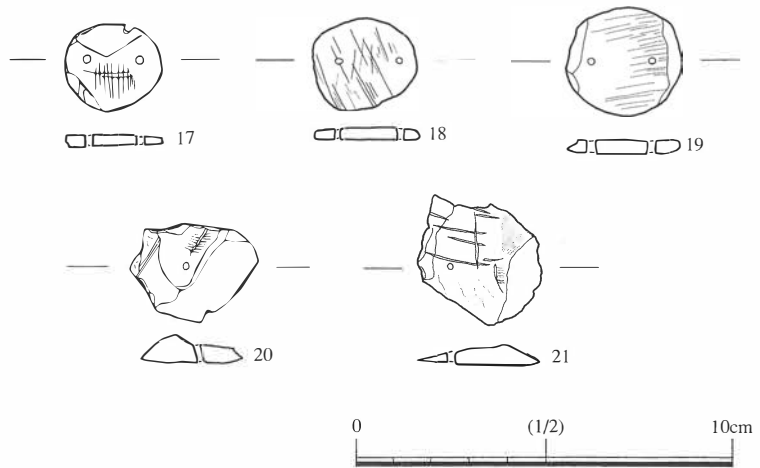


図35 1号不明遺構出土遺物 (3)

目、内面には青海波文当て具痕が残る。頸部から上はロクロナデによる調整が施されている。

14は胴部外面に平行タタキ目、内面には指頭押圧痕が残る。頸部から上はロクロナデにより調整されている。15は頸部の資料である。器厚が 1.5~2.5 cmと厚く、大型の甕と推定される。

16は体部の資料である。外面に目の細かい格子タタキ目が、内面には青海波文当て具痕が残る。

図 35 に示したものは石製模造品である。17~19 はいずれも孔を 2 個あけられた有孔円板である。表面・裏面・側面とも研磨痕が認められる。20・21 は 17~19 と同じ材質の石片で、孔が 1 個あけられており、17~19 とほぼ同じ大きさであることから、粗割りした段階の有孔円板の未製品と推定される。

備考 本遺構は、低部が複雑な凹凸をもち、明確な単位を持たず乱雑に掘り込まれていることから、粘土採掘坑や土取り遺構である可能性がある。時期は出土遺物から 8 世紀後半頃の年代と推定される。

2号不明遺構 (図 36・38)

位置 G13-45・46・55・56 グリッドに位置する。**重複関係** 13号土坑と重複し、これより古い。**規模** 東西約 6 m、南北約 47mの範囲に広がる。深さは 0.35~0.12mを測り、一定ではない。**形態** 平面形は不整形。掘り込み内部には、不整形を呈する大小の平坦面があり、これを底面とした数単位の掘り込みが重複しているものと推定される。**遺物** 覆土から須恵器杯が出土している。ロクロ整形、体部下端及び底面に回転ヘラケズリが施されたものである。

備考 本遺構は、近接する 1号不明遺構と特徴が類似しており、1号不明遺構と同様、粘土採掘坑ないし土取り遺構の可能性はある。

3号不明遺構 (図 37)

位置 調査区北端、G13-23・24・25・26 グリッドに位置する。**重複関係** 1号溝跡・1号

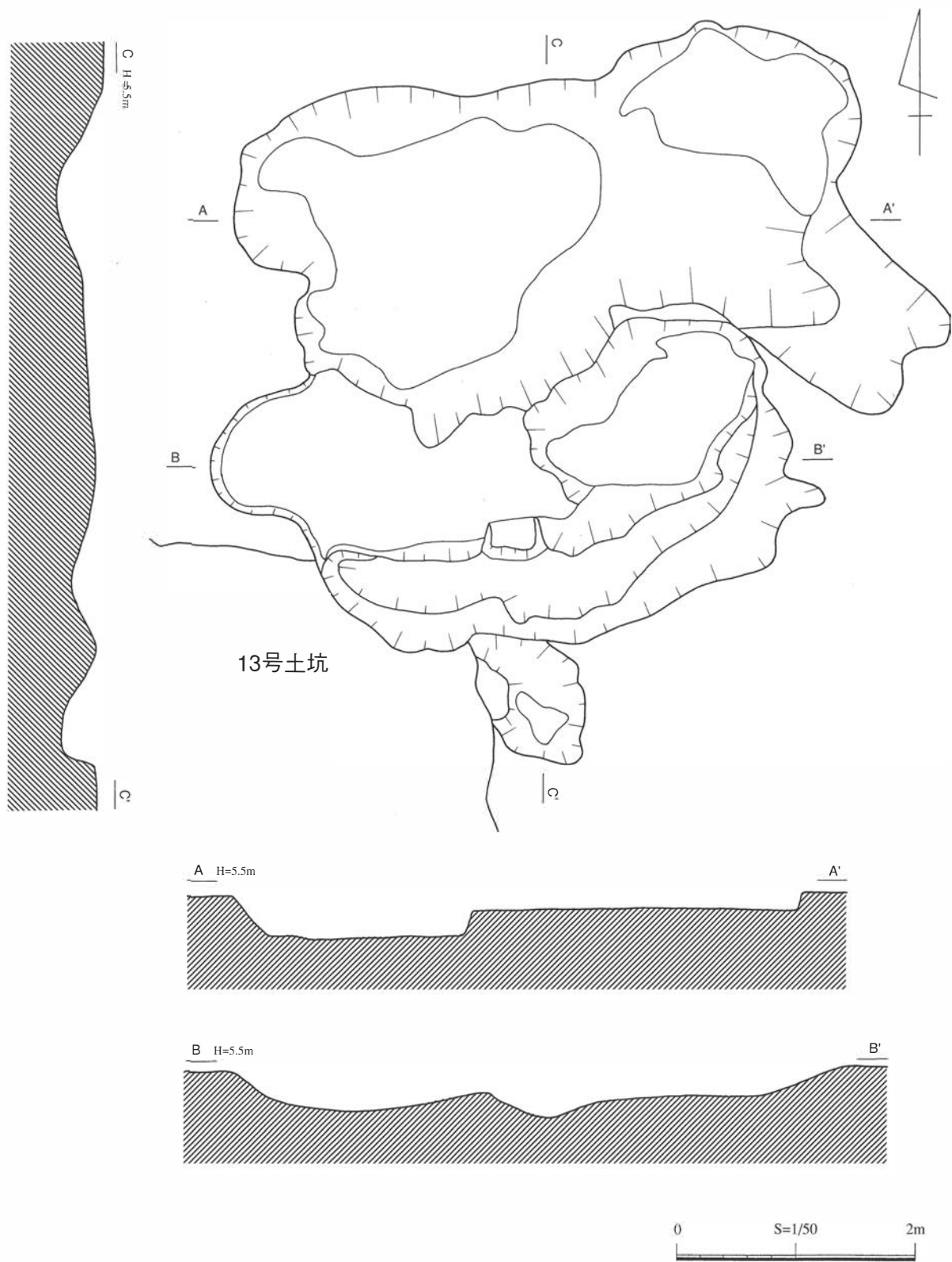
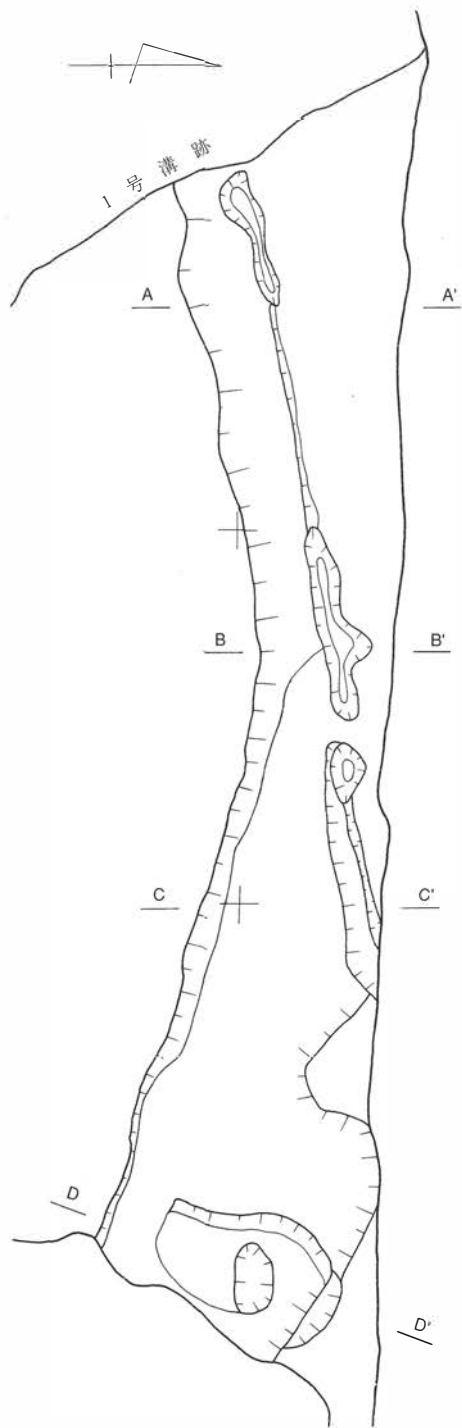


图36 2号不明遺構



調查區外

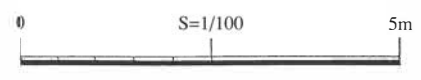
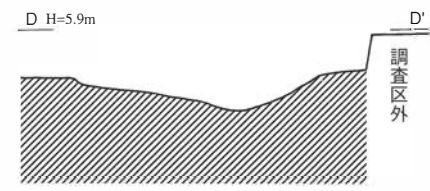
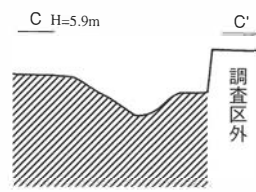
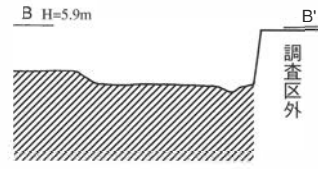
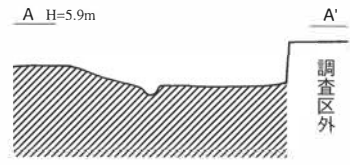


图37 3号不明遺構

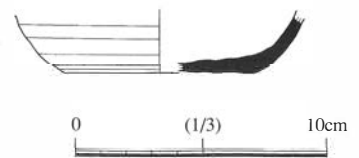


图38 2号不明遺構出土遺物

不明遺構と重複するが、先後関係を明らかにすることはできなかった。**規模** 北側は調査区外にかかり、東・西側では他の遺構と重複するため全体の形状・広がりには把握できない。東西 16 m以上、南北 3 m以上、深さ 0.46～0.21 mを測る。**形態** 大半が調査区外にかかるため、平面形は不明。壁は緩やかに傾斜し、底面は平坦であるが、部分的に小規模な溝状の掘り込みが認められる。**覆土** 暗褐色土。最下層にロームブロックが混じる。自然体積による覆土。**遺物** 図化できる遺物は出土しなかった。

2. 中世以降

中世以降と考えられる遺構は溝跡 2 条、土坑 13 基、ピット群などである (図 39)。ピット群は基本土層Ⅱ b 層上面で確認した。ピット内からは柱根と推定される木材や礎板と推定される礫が出土したのがあり、建物に伴う柱穴と考えられたが、建物を復元するには至らなかった。3・4号溝跡や 20号土坑などはⅡ c 層上面で確認している。

(3) 溝 跡

3号溝跡 (図 40)

位置 G12-38・39、G13-40・41 グリッドに位置する。調査区西部を東西に走る溝跡である。Ⅱ c 層上面で確認した。**重複関係** 東端付近に土坑状の掘り込みが重複している。**主軸方位** 東半部は W-13° - S を指し、G12-39 グリッド付近で緩やかにカーブして以西は W-7° - N を指す。**規模** 全長 13.3 m、幅 0.95～0.30 m、深さ 0.13～0.08 m を測る。**形態** 断面形は U 字状ないし浅い皿状を呈する。**遺物** 出土しなかった。

4号溝跡 (図 41)

位置 調査区西端、G12-38 グリッドで確認した南北に走る溝状の遺構である。Ⅱ c 層上面で確認した。**重複関係** なし **主軸方位** N-24° - E **規模** 南側で消えてしまうため全長は不明確であるが、調査区内で約 4 m を確認している。幅は幅 0.90～0.70 m、深さ 0.28～0.14 m を測る。**形態** 断面形は浅い皿状ないし U 字形を呈する。底面にピット状の掘り込みがみられる。**遺物** 出土しなかった。

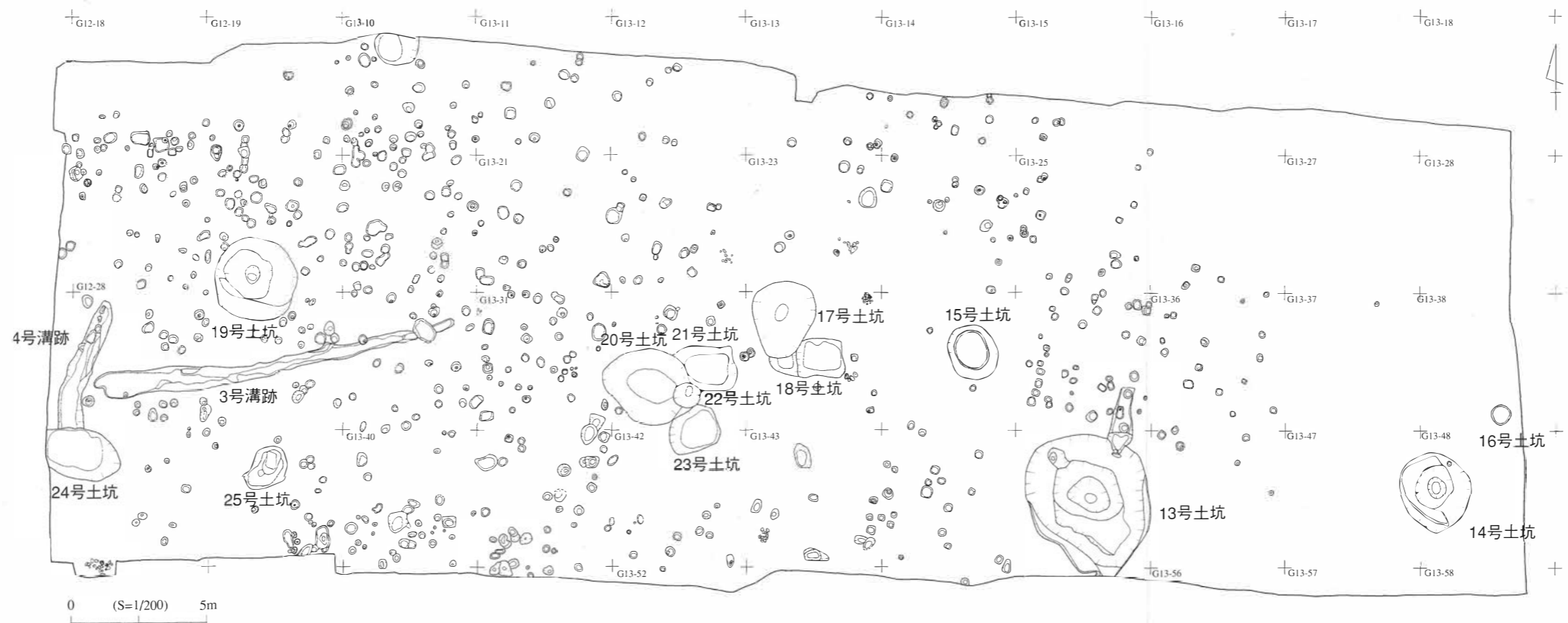


图39 中世遺構全体図

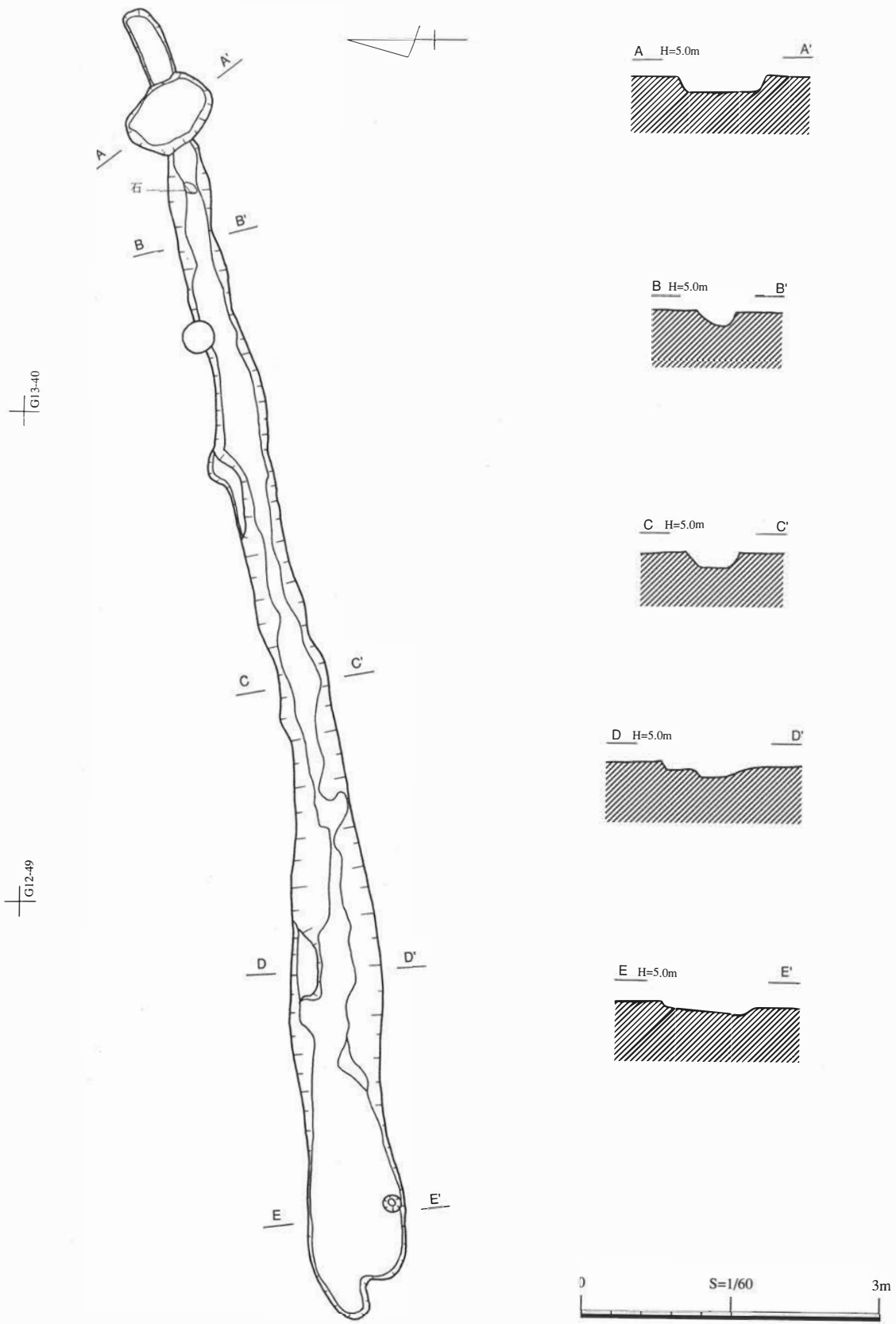


图40 3号沟迹

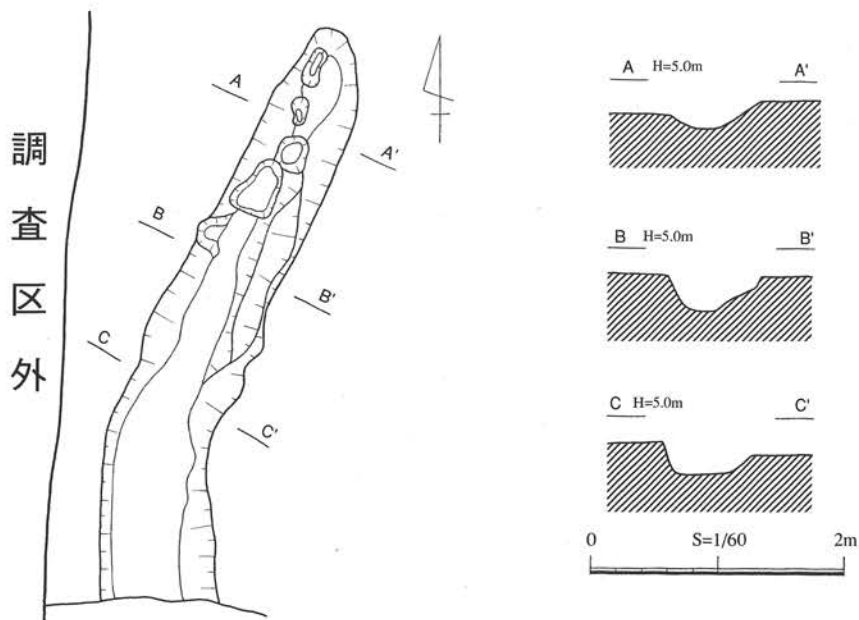


図41 4号溝跡

(5) 土 坑

中世以降に属する土坑は13基である(図42~46)。表10に計測値をまとめた。また、出土遺物を図47に示した。

表10 中世土坑計測表

遺 構	位 置	平 面 形	規 模 (m)		遺 物	備 考	挿 図 番 号
			長軸×短軸×深さ				
13号土坑	G13-55	不整円形	5.23×4.58×1.30		土師器・須恵器・陶器		42
14号土坑	G13-58	円形	2.92×2.65×1.26			SX1を切る。井戸跡	43
15号土坑	G13-44	楕円形	2.0×1.79×1.6以上		なし	SX1を切る。井戸跡	43
16号土坑	G13-48	円形	0.72×0.7×0.88		なし	SX1を切る。井戸跡	43
17号土坑	G13-43	卵形	2.77×2.34×0.94		なし	SK18と重複。先後不明。	44
18号土坑	G13-43	不整長方形	2.69×1.34×0.34		なし	SK17と重複。先後不明。	44
19号土坑	G12-29・39	不整円形	3.04×2.93×1.34		陶器・土師器		44
20号土坑	G13-42 L II b層下面	卵形	不明×2.72×0.33		なし	SK21を切る。SK22と重複。先後関係不明。	45
21号土坑	G13-42	楕円形	不明×1.62×0.14		土師器・須恵器	20・22号土坑に切られる。	45
22号土坑	G13-42	楕円形	1.06×0.85×1.52		なし	SK20・21・23と重複。先後関係不明。	45
23号土坑	G13-42・43 L II b層下面	卵形	1.88×1.56×0.27		土師器	SK22と重複。先後不明。	45
24号土坑	G12-58	楕円形	2.8×1.86×0.76		陶器・赤焼土器		46
25号土坑	G12-49	不整形	1.84×1.34×0.96		なし		46

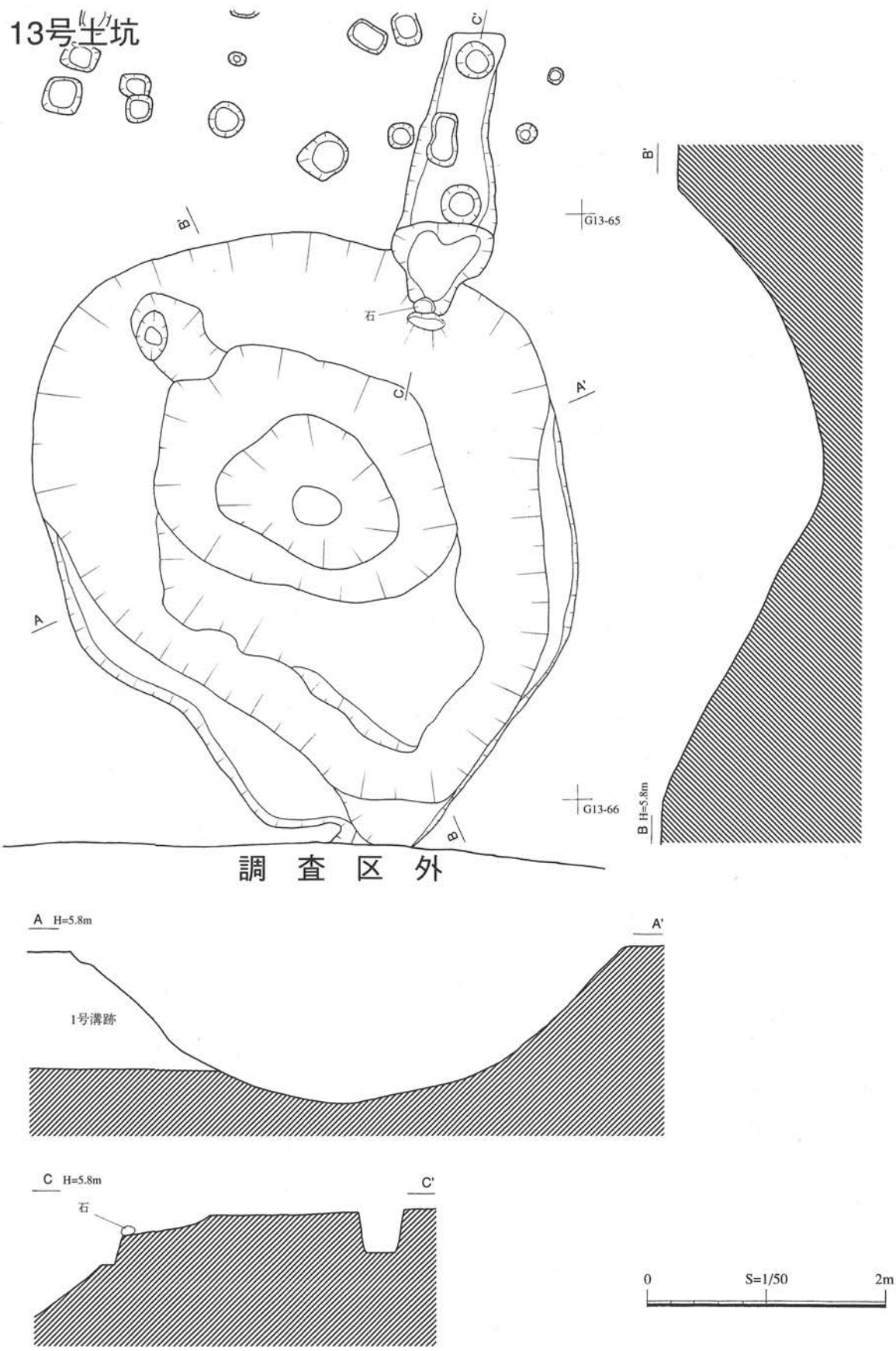
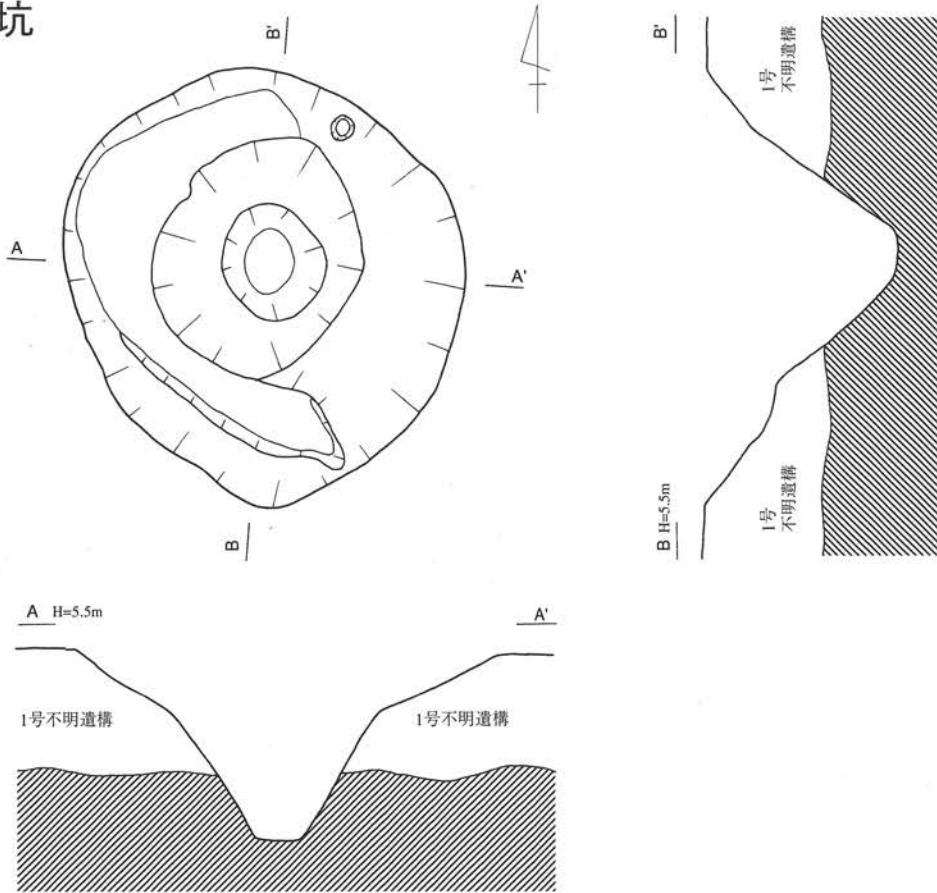
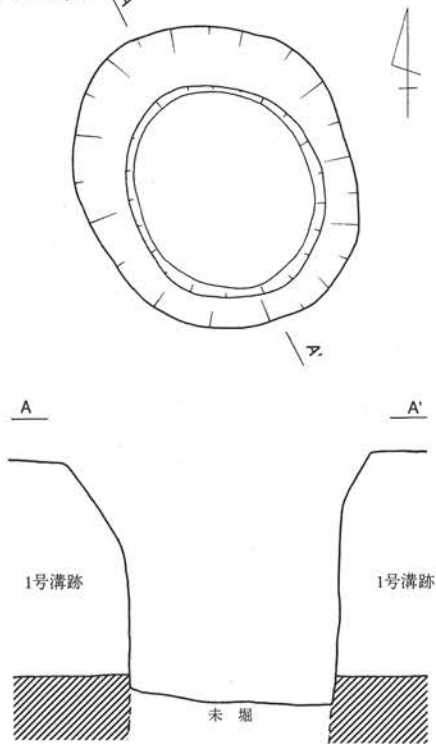


图42 土坑 (5) 13号土坑

14号土坑



15号土坑



16号土坑

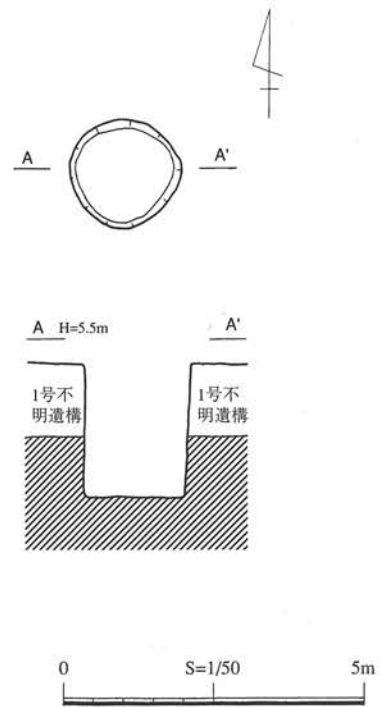
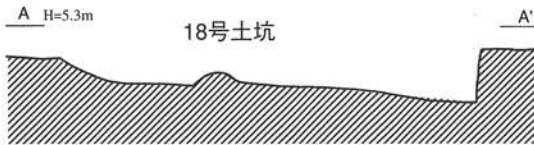
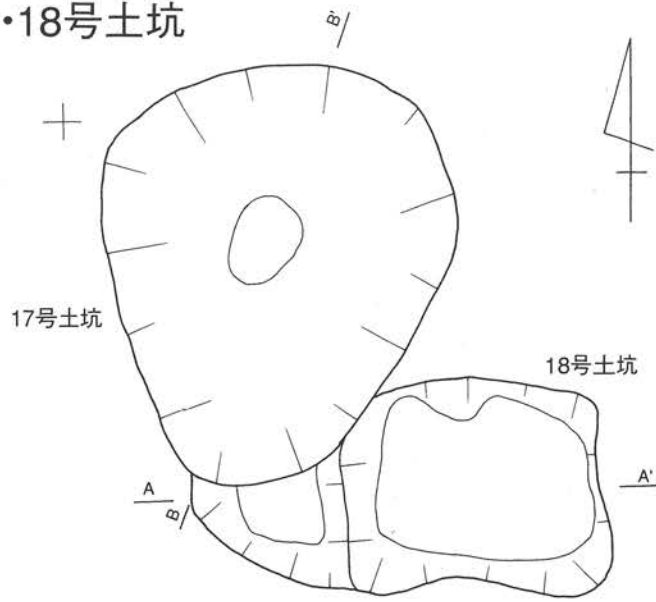


图43 土坑 (6) 14~16号土坑

17·18号土坑



19号土坑

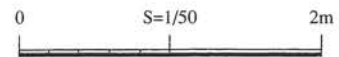
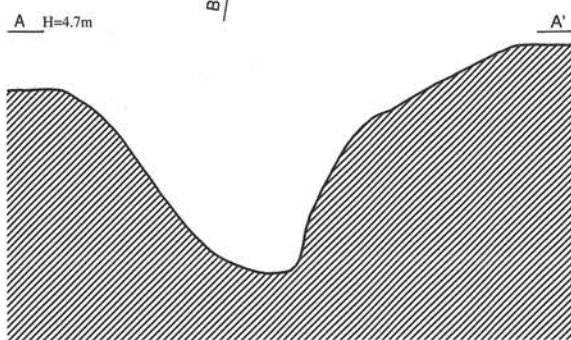
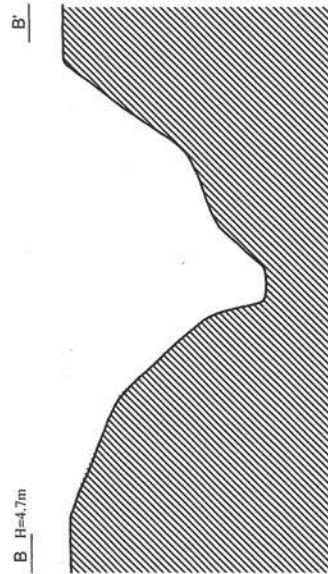
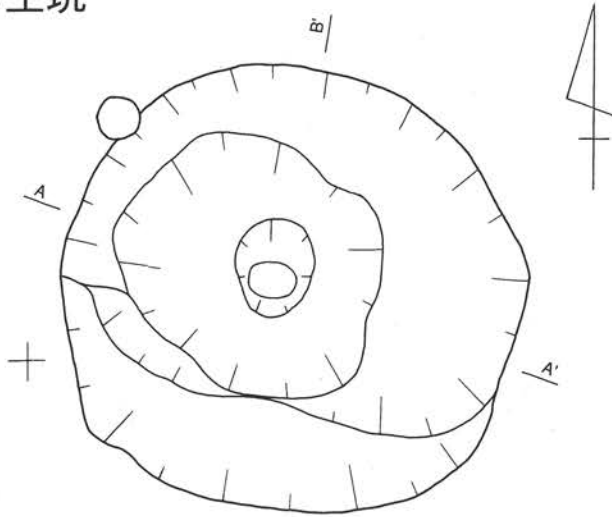


图44 土坑 (7) 17~18号土坑

20·21·22· 23号土坑

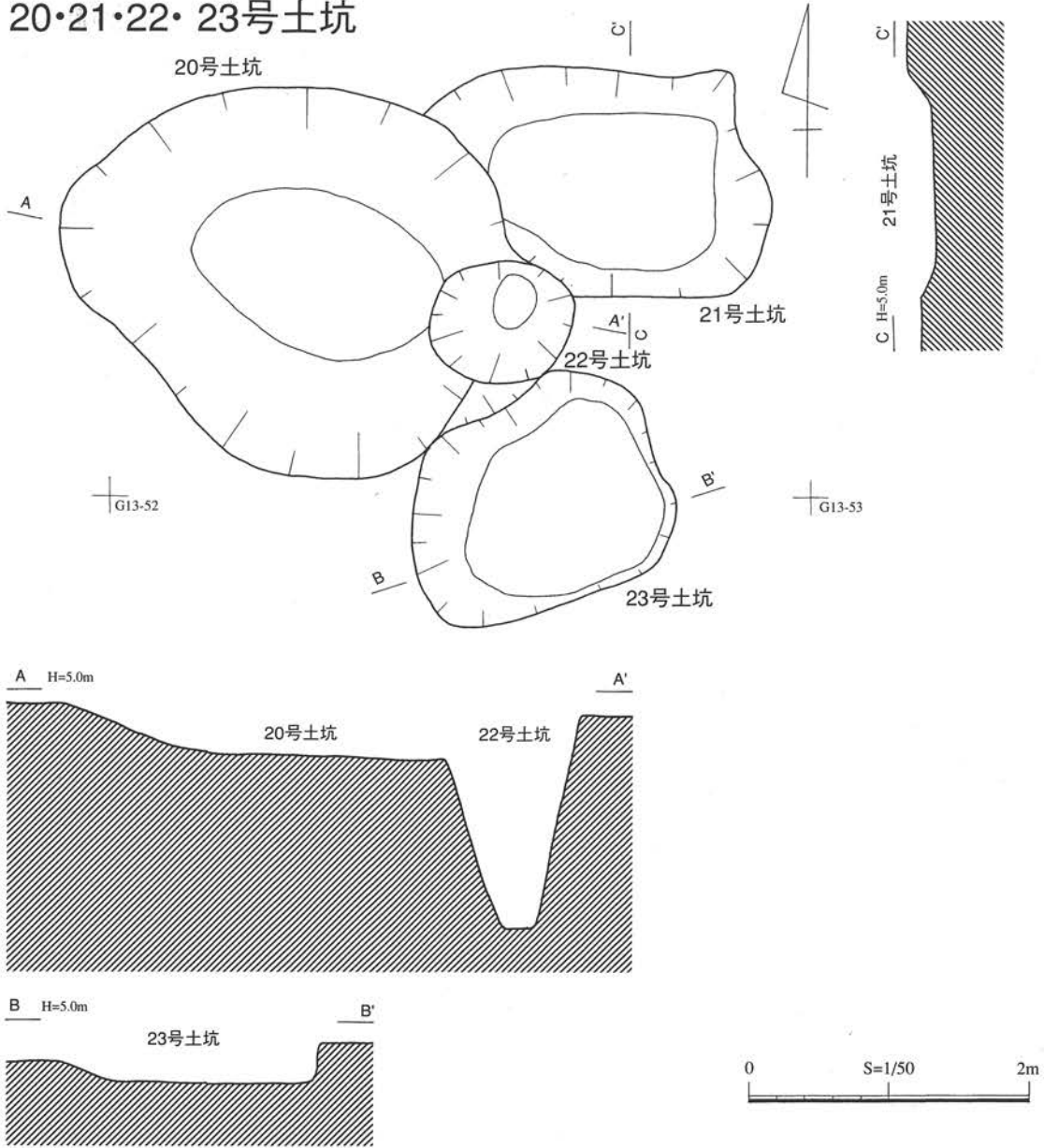
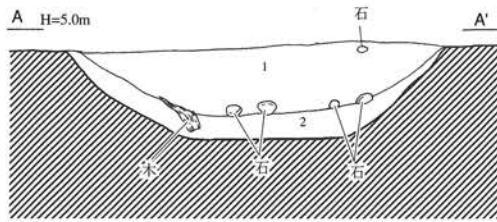
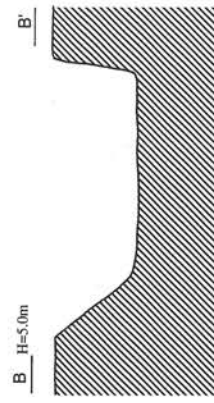
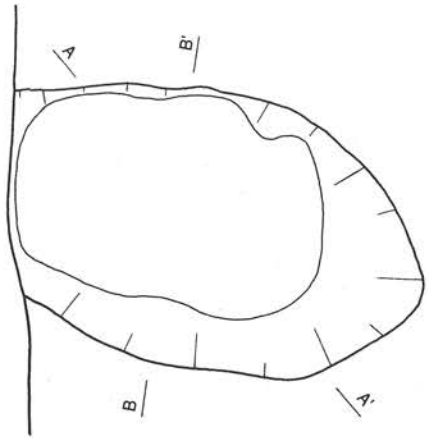


图45 土坑 (8) 20~23号土坑

24号土坑

調查
区
外



A-A'
1. 黑褐色土
2. 黑色粘土

25号土坑

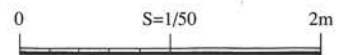
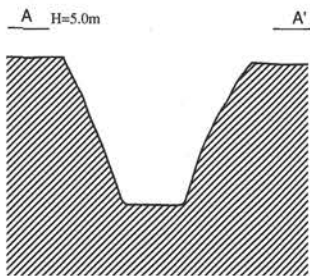
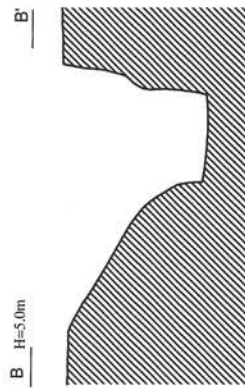
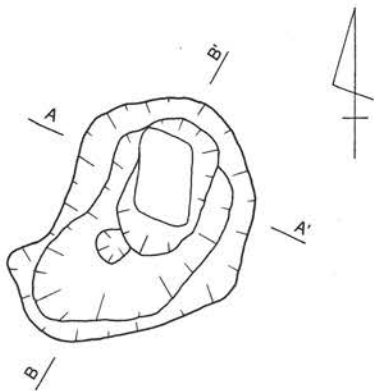
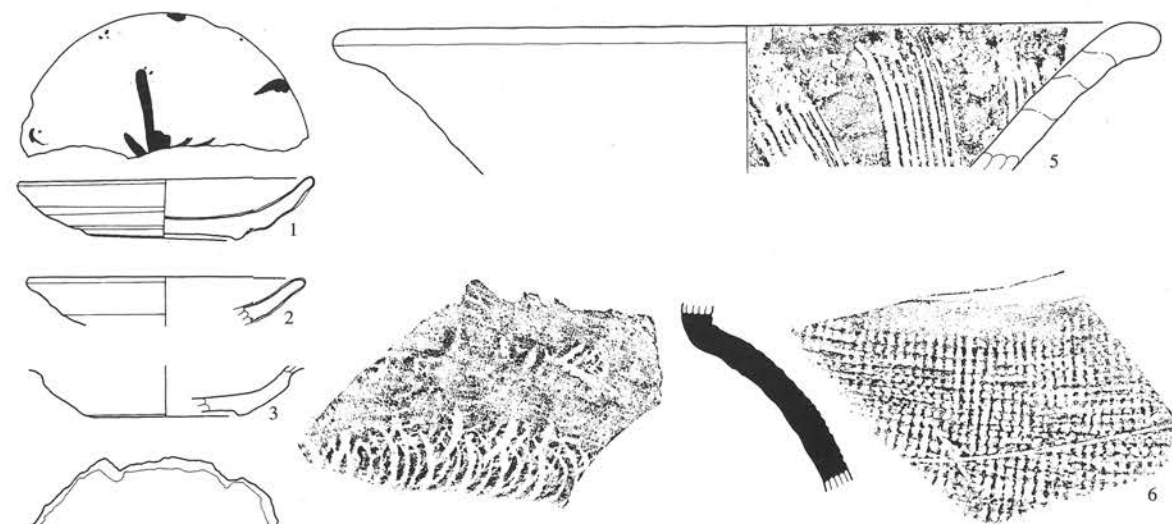


图46 土坑 (9) 24·25土坑

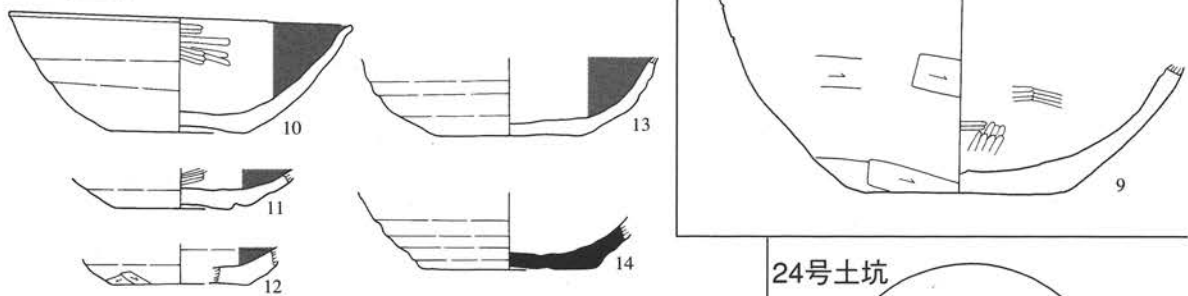
13号土坑



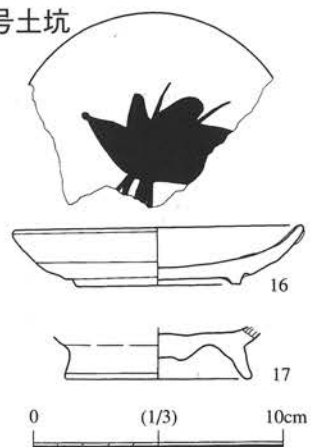
19号土坑



21号土坑



24号土坑



23号土坑



图47 土坑出土遺物

第3項 遺構外出土遺物

1 土器・陶磁器類 (図 48~53)

第 48~50 図に示したのは土師器および赤焼土器である。1・2 は高杯である。1 は杯部~脚裾部が残り、全体の器形がわかる資料である。栗圀式期の高杯と考えられる。2 は脚裾部のみを残す資料である。

3~6 は蓋である。いずれも内・外面にミガキ・黒色処理が施された両黒の土師器蓋である。これらと同様のものは 1 号不明遺構出土遺物のなかにもみられ、器形は同時期の須恵器蓋の忠実な模倣によるものと考えられる。

7~11 は非ロクロ整形の内黒の杯である。7 の底部には焼成後の穿孔が認められる。内面全面及び外面の大部分には液状の物質が固まった付着物がみられる。付着物は色調から褐色を呈するものと黄褐色のものにわかれ、前者は杯内面の全面をほぼ覆い隠すように広がり、その上から後者が径 11cm ほどの円形に付着している。後者は一定方向に掻き取られたような状態で残っている。また、両者は所々にコブ状に固まっている部分もある。これらの付着物は漆の可能性が高く、円形に付着した黄褐色のものは、漆容器に杯が被せられた際に、漆容器口縁部の形に漆が付着したのと考えられる。従って本遺物は杯を転用した漆容器の蓋と考えられ、底部にみられる穿孔もこれに関連した通気孔と推測される。容器は付着物の径から長頸瓶と考えられる。

8 は口径 13cm ほどのやや小型の杯である。平底の底部から内湾する体部が立ちあがり、そのまま口縁部に至る。調整は口縁部外面にヨコナデ、底面及び体部下端にヘラケズリが施され、両者の間には指頭押圧による未調整部分を残す。内面は全面にミガキが施され、黒色処理は行われていない。外面の一部には緑灰色を呈する液状の物質が固まった付着物が認められる。

9・10 は丸底の底部からそのまま口縁部に至る半球状の杯で、国分寺下層式期のものである。

11 は平底化の進んだ丸底の杯で、口縁部外面に幅の狭いヨコナデ、以下にヘラケズリが施されている。ヘラケズリは底部と体部を分けて行われているため、平底風の器形となっている。内面にはミガキ・黒色処理が施されている。

12~17 はロクロ整形の内黒の杯である。12 は底面~体部下端に回転ヘラケズリ、13・15 は底面~体部下端に手持ちヘラケズリ、14 は磨滅のため不明、16 は切離しの糸が上位に入ってしまったために再度切離しを行い、底面はヘラナデにより調整している。16 の内面には赤褐色の付着物がみられる。17 は底面~体部下端にかけて手持ちヘラケズリが施されている。

18~20 は大型の杯ないし碗とすべきものである。18・19 は、体部下端及び底面に回転ヘラケズリが施された底径のやや大きいもの、20 は底径の比較的小さいものである。20 は磨滅が著しく底部の調整は不明である。

21~23 は赤焼土器の杯である。21 は回転ヘラ切り後、底面に弱いヘラナデが施されている。内面には暗褐色の付着物が残る。22 は底面に手持ちヘラケズリが施されている。24 は磨滅が著しく調整は不明である。

29~40 は土師器の甕で、いずれも非ロクロ整形のものである。

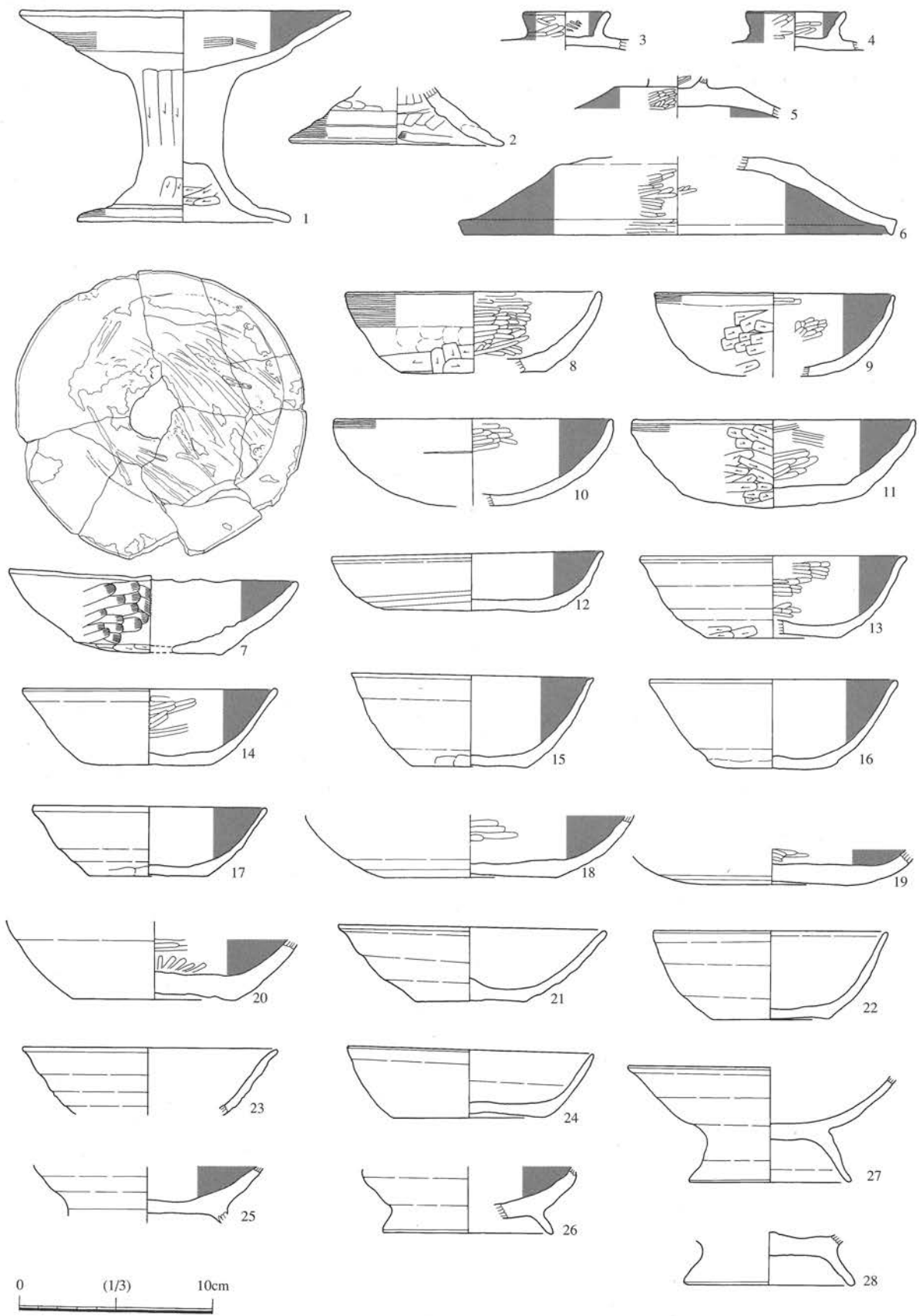


图48 土器・陶磁器類 (1)

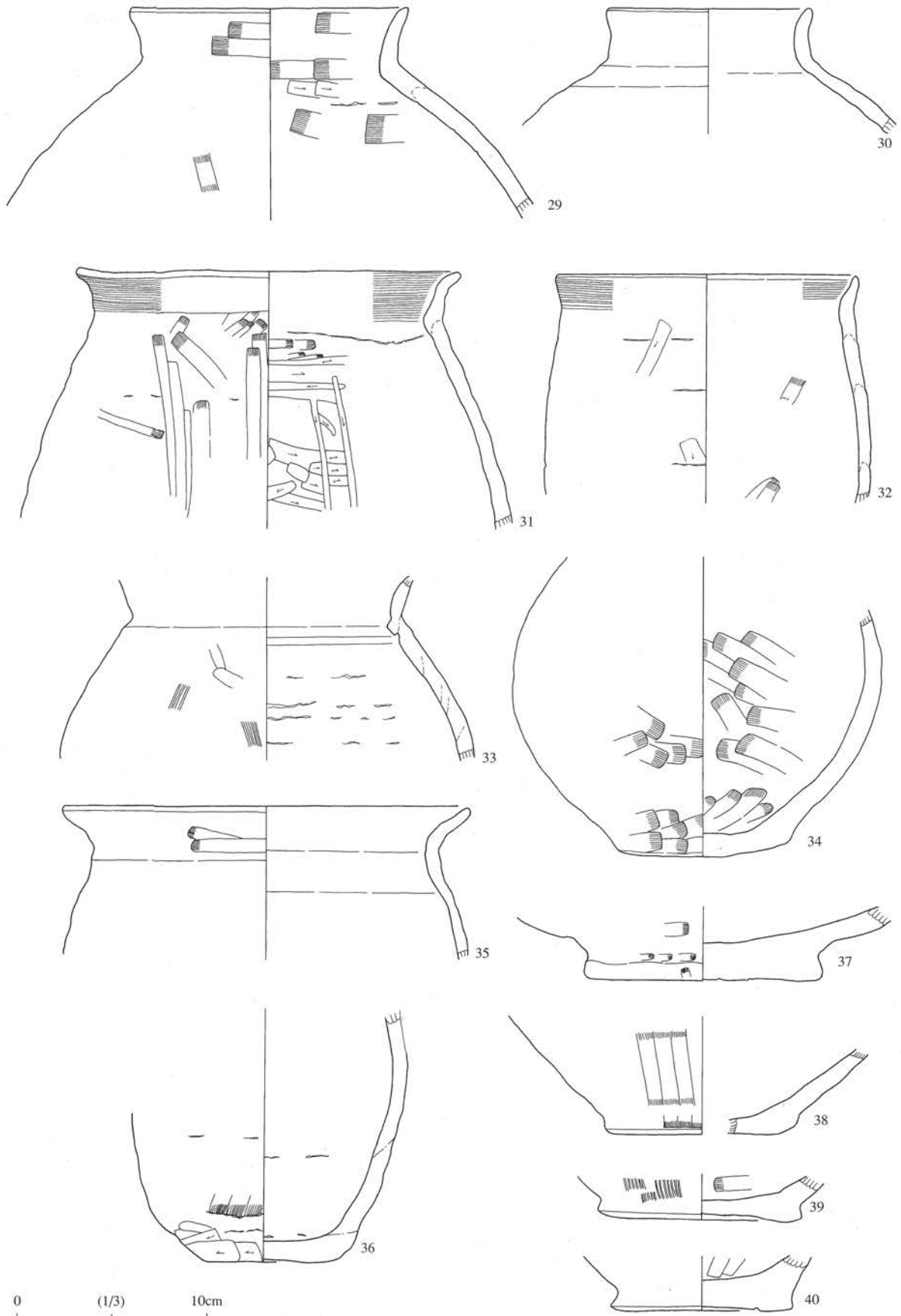


图49 土器・陶磁器類 (2)

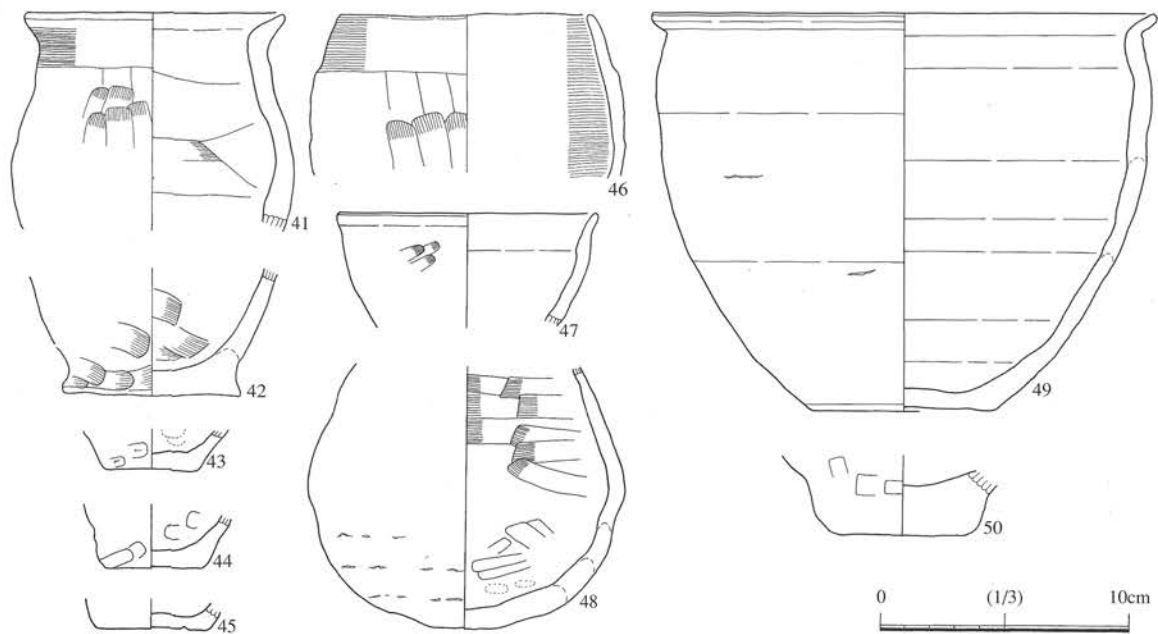


図50 土器・陶磁器類 (3)

46・47・49は鉢である。46・47は非ロクロ、49はロクロ調整のものである。

48はフラスコ状の小型の壺と推定される。50は甕の底部で、内・外面にヘラナデ、底面に木葉痕を残す。

図51・52に示したのは須恵器である。

51～57は蓋、58・59は高台付杯、60～66は杯である。67は底径が大きく、また全体として厚手の作りであり、鉢とすべきものである。68は平坦で大きな底部から大きく開き内湾する体部が立ちあがる、皿状の器形に高台ないし脚がつくもので、大型の盤または高杯と推定される。

69は小型の鉢、70～72・75は長頸瓶である。73・74・76は口縁部の破片資料であるが、器種は器形の特徴から鉢ないし甕と推定される。77は器種は不明であるが、壺のような貯蔵形態の土器の底部とみられるものである。輪積みにより成形された体部に円盤状の粘土を接合して底部としており、外面はロクロナデによる調整により接合痕を残さないが、内面には接合痕が段差をもって明瞭に残っている。78・79は硯である。78は圈脚円面硯で、脚部には「+」形と推定される透かしの上部が見られる。また硯面の外周には一部にヘラ描きの鋸歯文が認められる。79は風字硯の硯面の破片で、裏面に密なヘラケズリが施されている。80～86は甕である。

図53には中世以降のものとみられる陶器・カワラケを示した。

87～89は陶器の皿である。87は丸形の小皿で、全面に乳白色の釉がかけられ、内面には鉄絵の唐草文が描かれている。88も丸形の小皿で、乳白色の釉が全面にかけられ、見込みに鉄絵の花文が大きく描かれている。89は口縁部を欠くが、やはり小皿と考えられる。全面に乳白色の釉がかけられ、内面に鉄絵の文様が描かれている。90は端反形の小皿で、全面に乳白色の釉がかけられているが、文様は見られない。92～95はカワラケである。

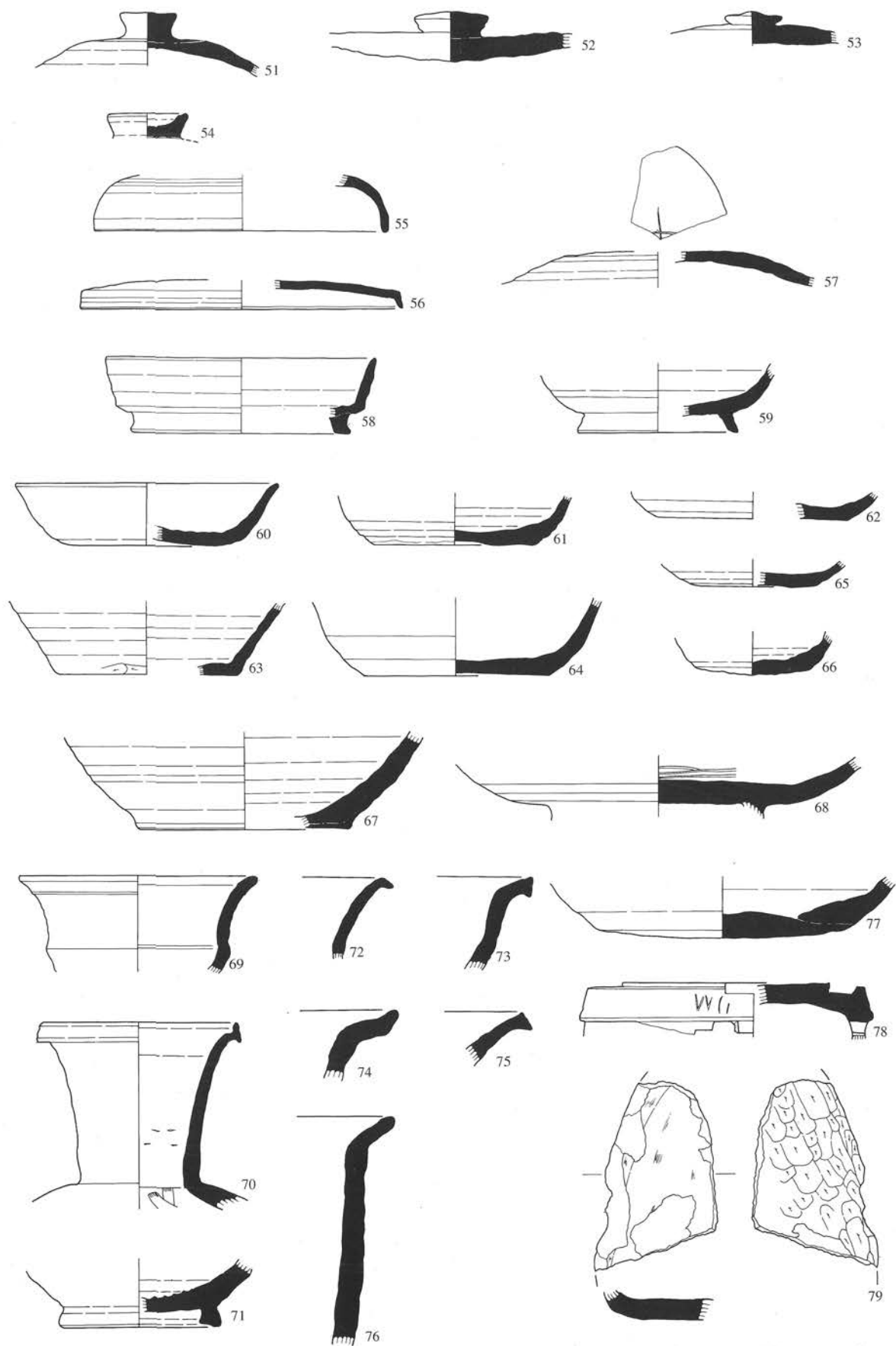


图51 土器・陶磁器類 (4)

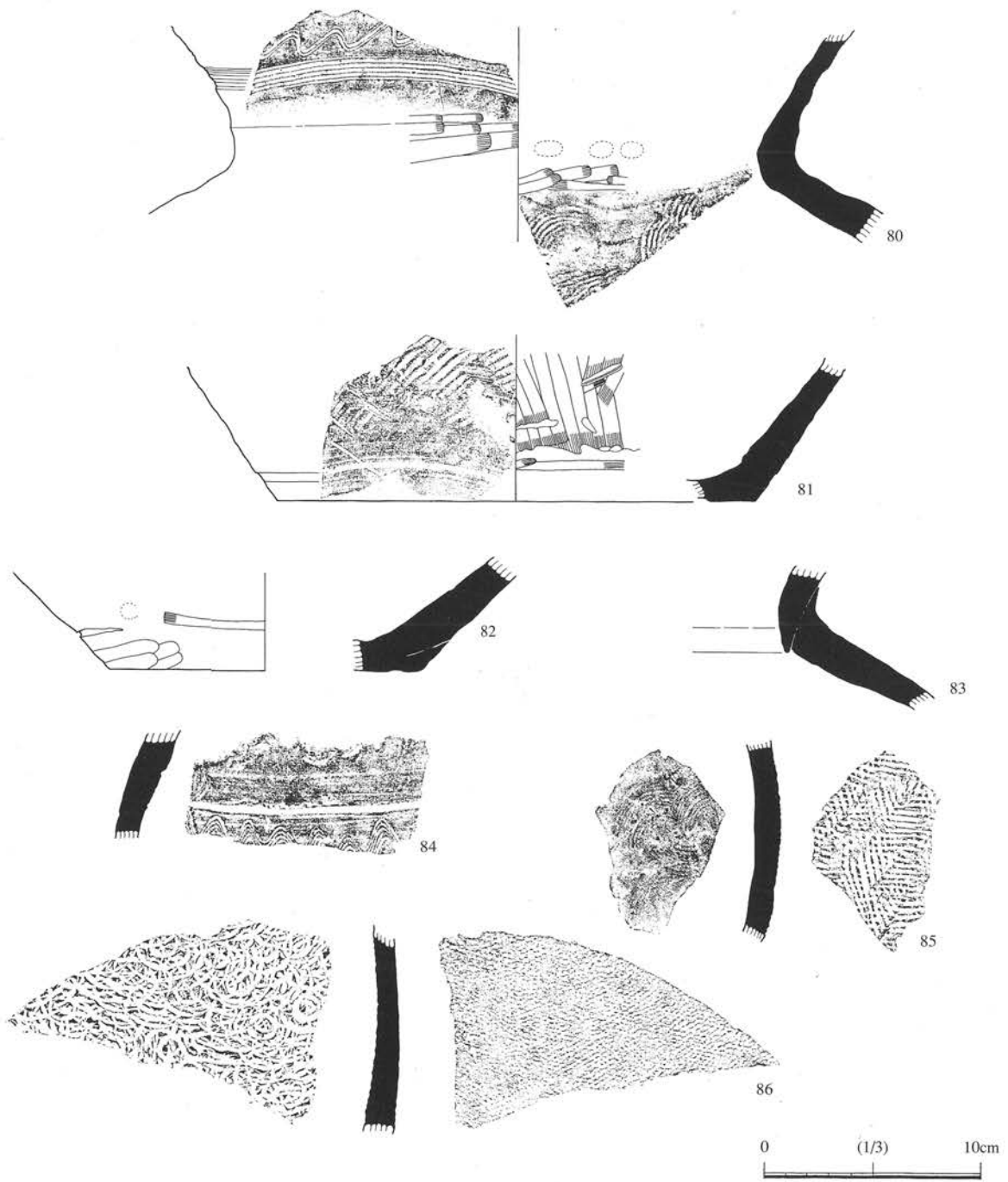


图52 土器・陶磁器類 (5)

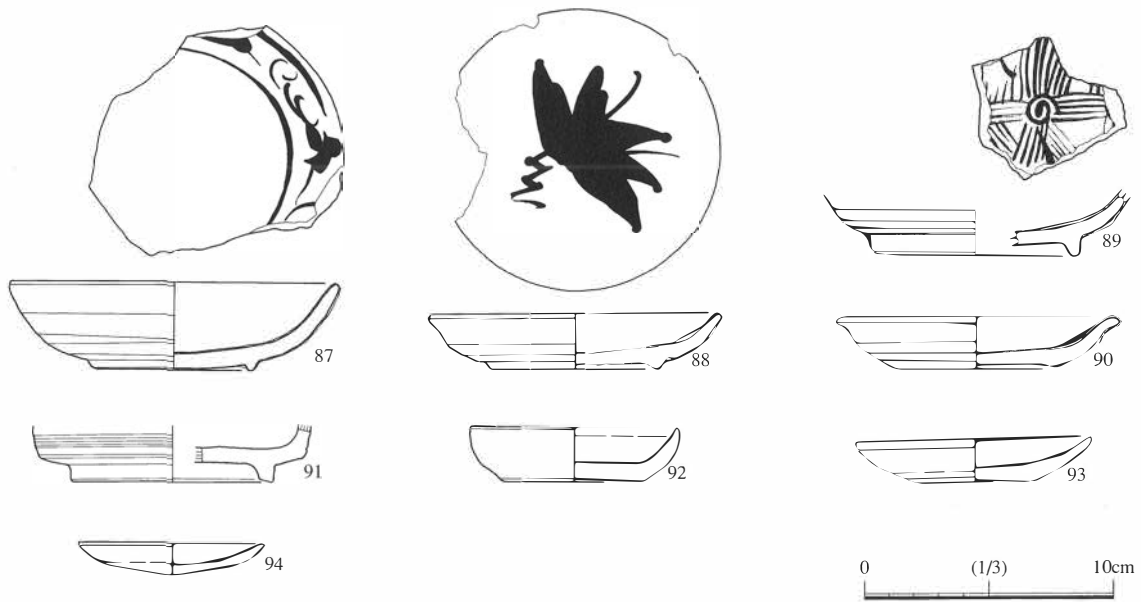


図53 土器・陶磁器類 (6)

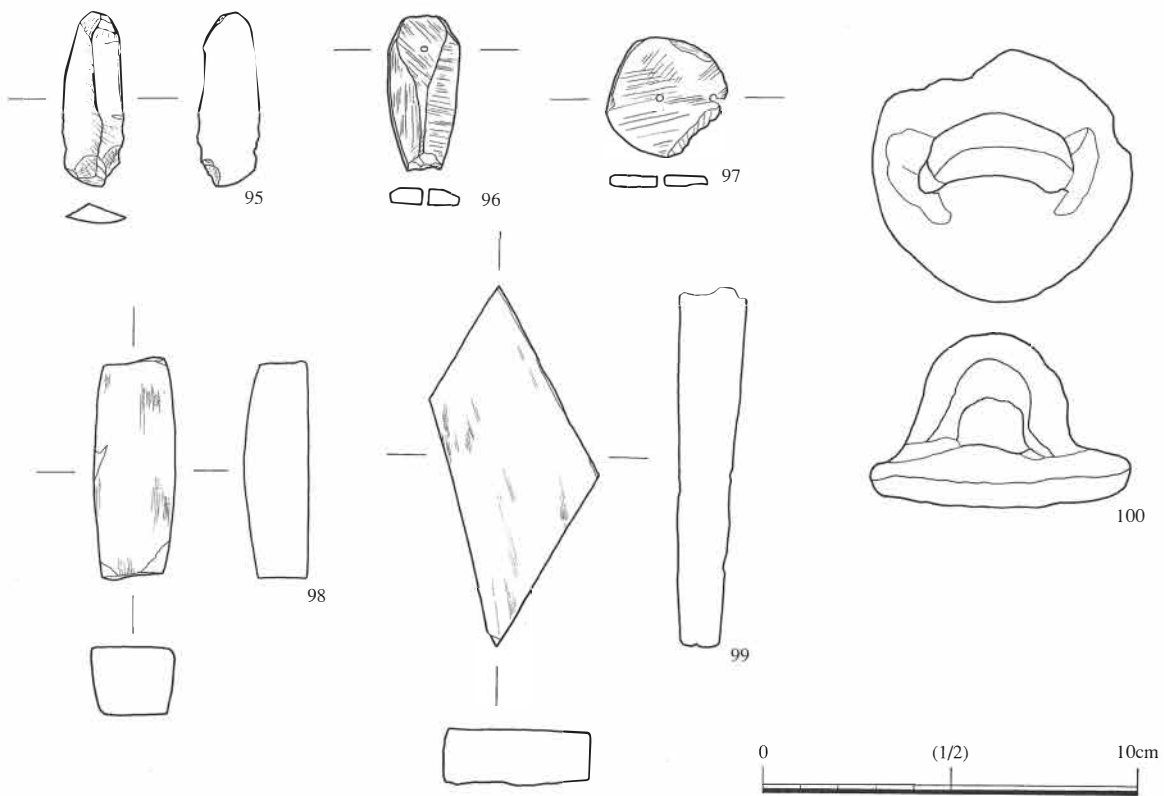


図54 石製品・土製品 (1)

2. 石製品・土製品

図54・55には石製品・土製品を示した。

95は縦長剥片、96・97は石製模造品の剣形品と有孔円板、98・99は砥石である。100は円盤状の粘土に把手をつけた用途不明の土製品である。101は粉挽き臼の上臼である。

3. 瓦類 (図 56~66)

第3次調査区は、今回報告の他の各調査区と比較して瓦の出土が多い。出土した瓦は、図示しなかった小片も含めれば総点数119点、うち軒丸瓦2点、軒平瓦2点、丸瓦16点、平瓦99点を数える。また、この他に埴が1点出土している。平瓦が主体であるが、タタキ目には簾状タタキ、雨垂れ状タタキ、斜格子タタキ、格子タタキ、平行タタキ(註1)など多種が認められることから、複数の生産地、数時期の年代幅が想定される。

1・2は軒丸瓦である。1は単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。本資料とほぼ同様とみられる文様をもつ軒丸瓦は、標葉郡家跡に比定される郡山五番遺跡からも出土している(軒丸瓦B類)(註2)。

2は瓦当面の破片である。素文の外縁と花文の一部がみられ、花文軒丸瓦と判断される。瓦当裏面に丸瓦との接合痕が認められないので、瓦当下半の一部と考えられる。厚さは2.2cmほどで、側面と裏面にはヘラケズリが施されている。

3は軒平瓦である。瓦当面には凸線による釣針形の文様が上下2段に並ぶ、いわゆる釣針文軒平瓦である。断面を観察すると、厚さ2cmほどの平瓦が瓦当粘土裏面に差しこまれ、凹面側と凸面側に接合粘土が付加されている製作手法を看取でき、包み込み技法により製作されたものと判断される。接合粘土は凸面側にやや厚く付加された後、段顎を作り出すために凸面に平行する方向と直行する方向からヘラが入れているが、後者のヘラは接合粘土を突き抜けて平瓦部の半分ほどにまで達している。また凹面にはヘラ書文字がみられる。変則的であるが「方」と読める。上部が欠損するめ不明であるが、郡名を記したものとも考えられる。3と同様の軒平瓦は郡山五番遺跡からも多数出土している。郡山五番遺跡出土資料(軒平瓦A類)は1~8類に分類されている(註3)。佐川正敏氏は、この郡山五番遺跡出土資料を、報告書での分類を基礎として、A-1類、A-2・6類、A-3~5類、A-7・8類の4種類にまとめられることを指摘している(註4)。3の資料はこのなかで、釣針文が上・下段とも巻きを下に向けて右偏行に並ぶこと、左端から3番目の釣針文が他に比べ下に下がっていることからA-4類と一致し、両者は同範と判断される。

4~7は丸瓦である。4~6は行基式、7は玉縁式である。凸面にはタタキ目を残さず、叩き締め後に縦位のヘラケズリを施してタタキ目を消しているが、6は部分的に格子タタキ目

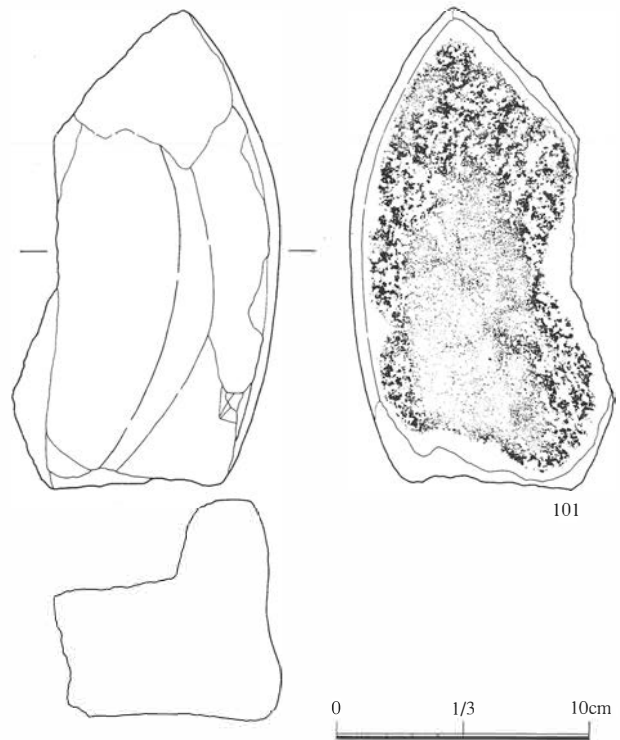


図55 石製品・土製品(2)

が残っている。4には粘土板切り離し時の糸切り痕を残している。7は全体に煤が付着している。

8～31は平瓦である。8～12は凸面に簾状タタキが見られるもので、簾状タタキは量的に当地区出土瓦の主体となるものである。

13～15は凸面に雨垂れ状タタキがみられるものである。出土量は少なく客体的である。

同種のタタキ目をもつ平瓦は第1次調査出土のものにもみられ、模骨側板の圧痕が明瞭に認められるものがあることから、桶巻作りにより製作されたものと考えられる。

16～22は凸面に斜格子タタキ目のみられるものである。斜格子タタキは当地区出土瓦のなかでは簾状タタキに次いで出土が多い。これらの瓦のほとんどは凹面に模骨の側板の圧痕を明瞭に残しており、桶巻き作りにより製作されたものと考えられる。同種のタタキ目はロクロ挽き重弧文軒平瓦の平瓦部にみられ、ロクロ挽き重弧文軒平瓦に伴う時期のものとして推定される。22は小片であるが、凸面に竹管状円文、ヘラ沈線による三角文が認められる。同種の文様は当遺跡出土のロクロ挽き重弧文軒平瓦の顎面施文に多用されているものであり、22は軒平瓦の平瓦

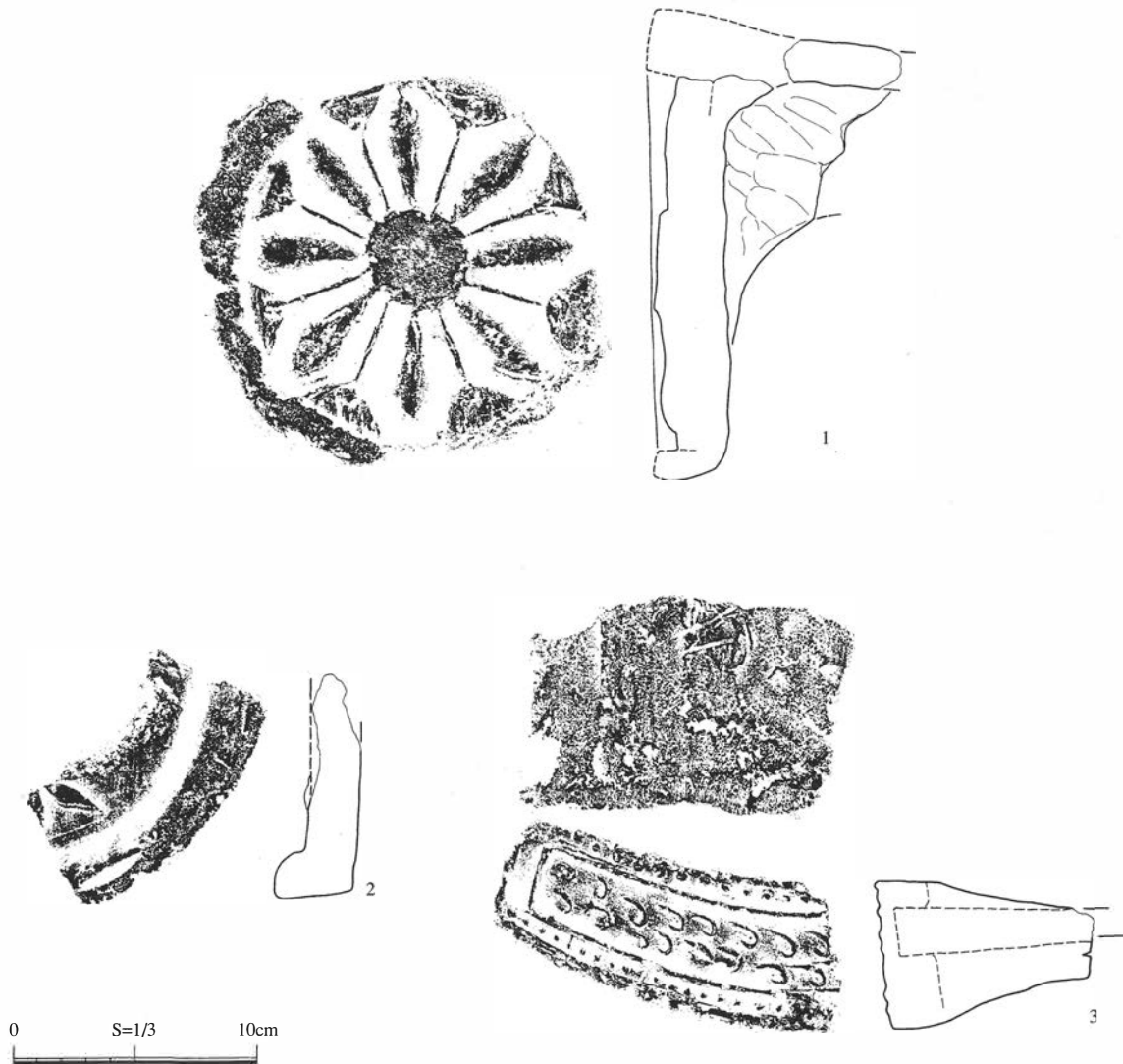
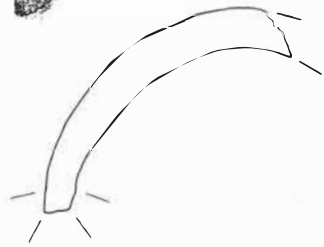


図56 瓦類 (1)



4



5

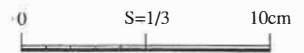
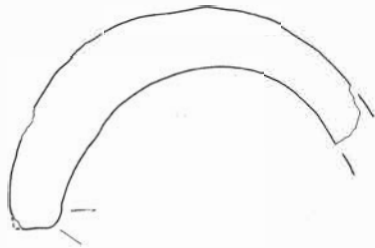


图57 瓦類 (2)

部であると判断される。

23～28は凸面に格子タタキのみられるものであるが、タタキ具はそれぞれ異なるものを選んだ。出土量は少なく客体的である。23のタタキ目は 0.7×0.6 cm角の格子が密に並ぶもので、凹面には黒色の煤状の付着物が認められる。24は 1.2×0.7 cm角の長方形の格子がみられるものである。一部縄の圧痕が認められ、部分的に縄タタキが施されている可能性がある。凹面には縦位のナデがみられるが、大部分は剥離している。25は 0.9×0.6 cm角の格子が並ぶものである。格子の枠がやや太い。また重複が著しく同じ場所に数回の叩き締めが行なわれている。側縁を残す資料であり、凹面には布目を残す。側縁・側面のヘラケズリ調整は行なわれていない。26は 0.9×0.8 cm角前後の格子目が並ぶ。27は、 1.2 cm角前後の正方形の格子目がみられるものである。凹面・凸面ともに煤状の付着物がみられ、また破損面も黒く煤けていることから、二次的な火を受けたものと推測される。28は 0.5×0.3 cm角前後の比較的小さい格子目をもつものである。凹面には一部布目がみられるが、布目の上には、一部縦位のナデの痕跡がみられる粘土がかぶさっている。軒平瓦の瓦当部接合粘土が一部残存したものである可能性もある。

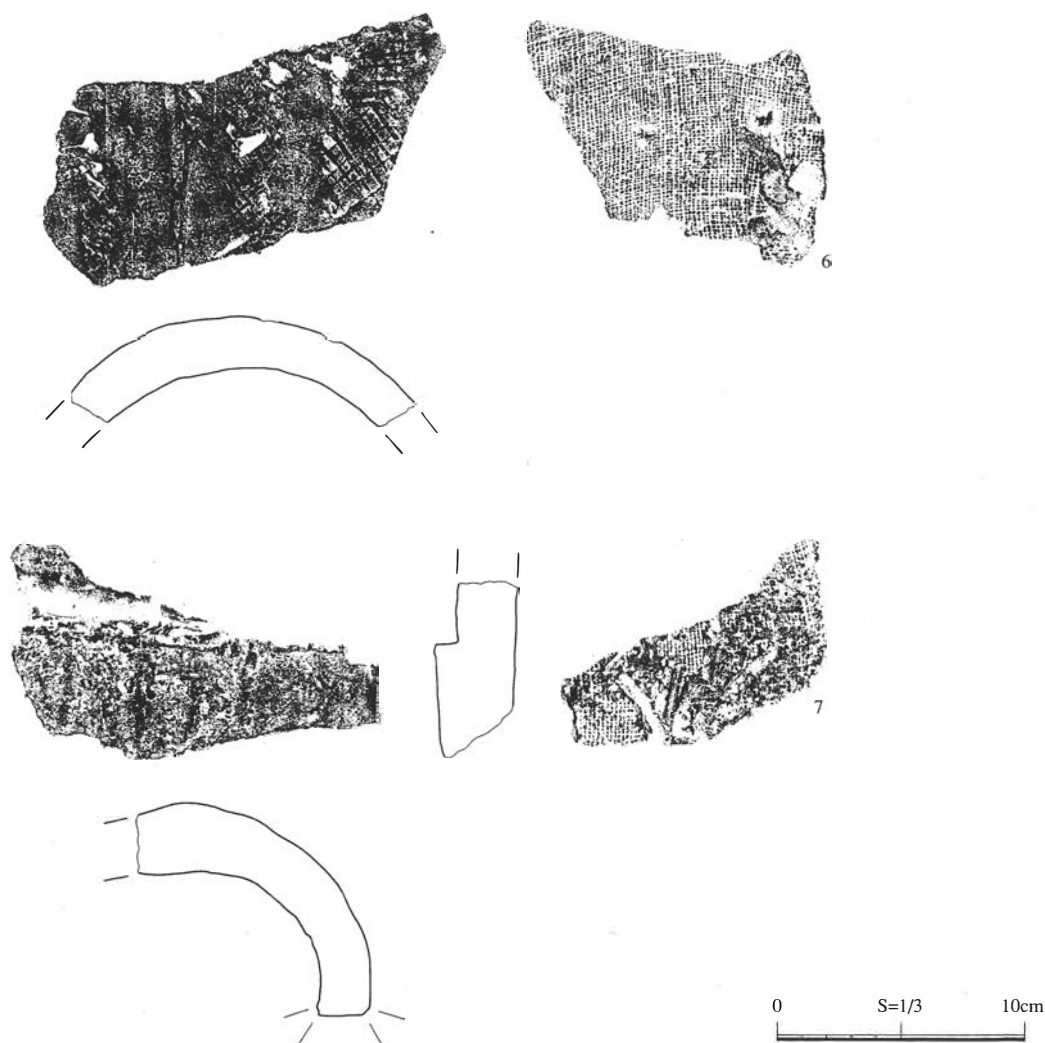
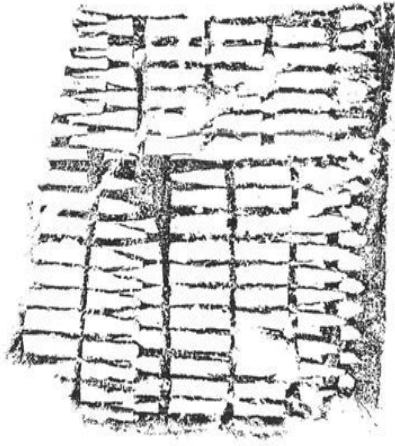
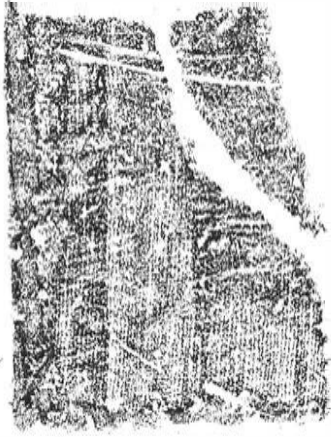
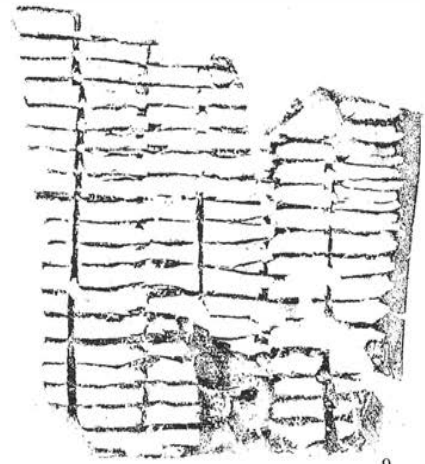
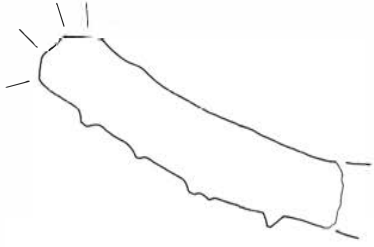


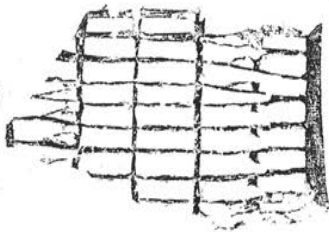
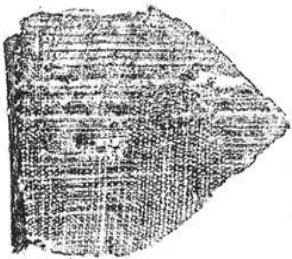
図58 瓦類 (3)



8



9



10

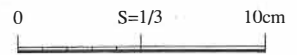
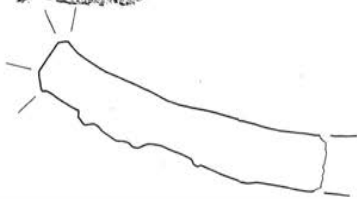


图59 瓦素 (4)

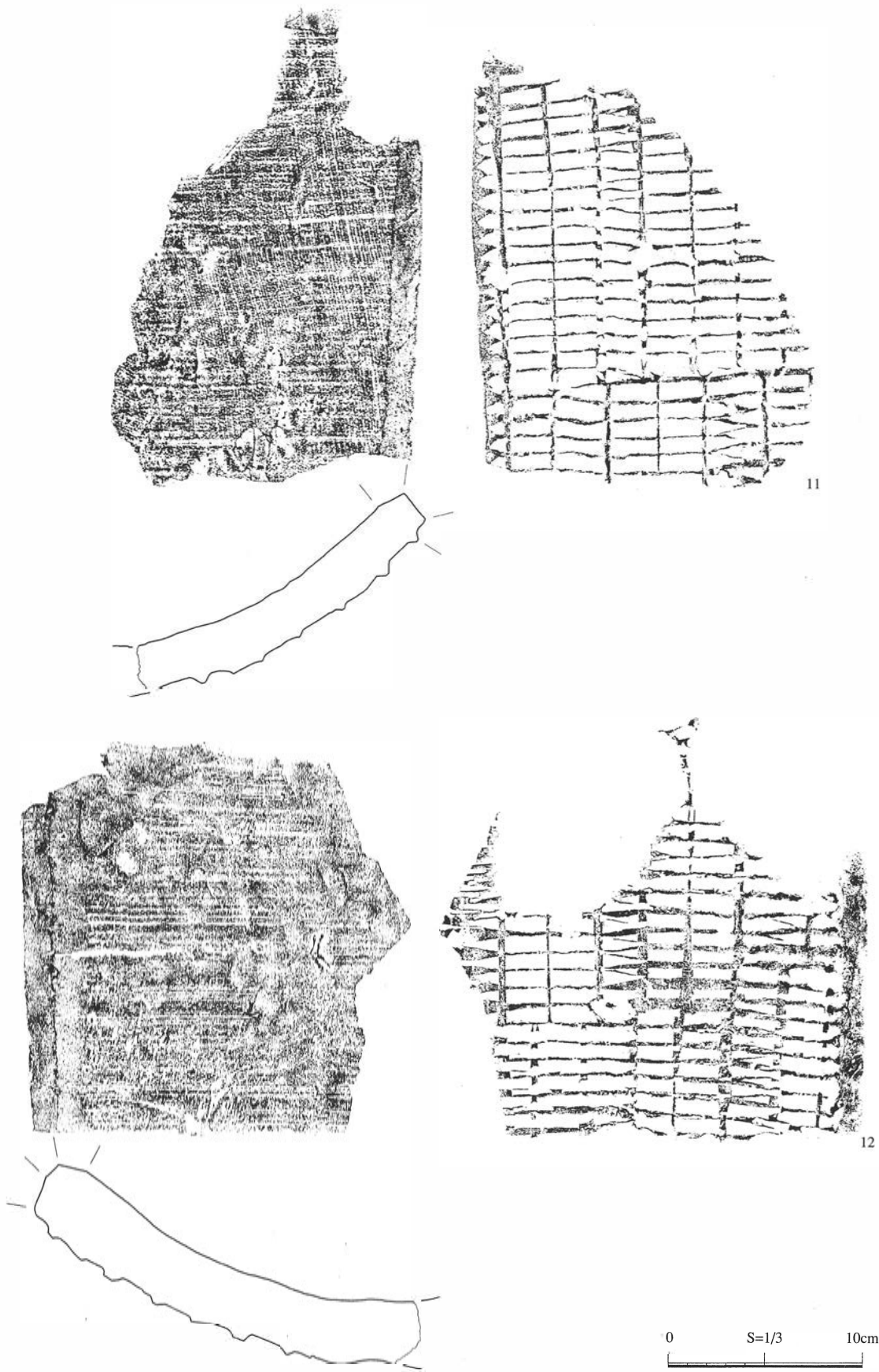


图60 瓦類 (5)

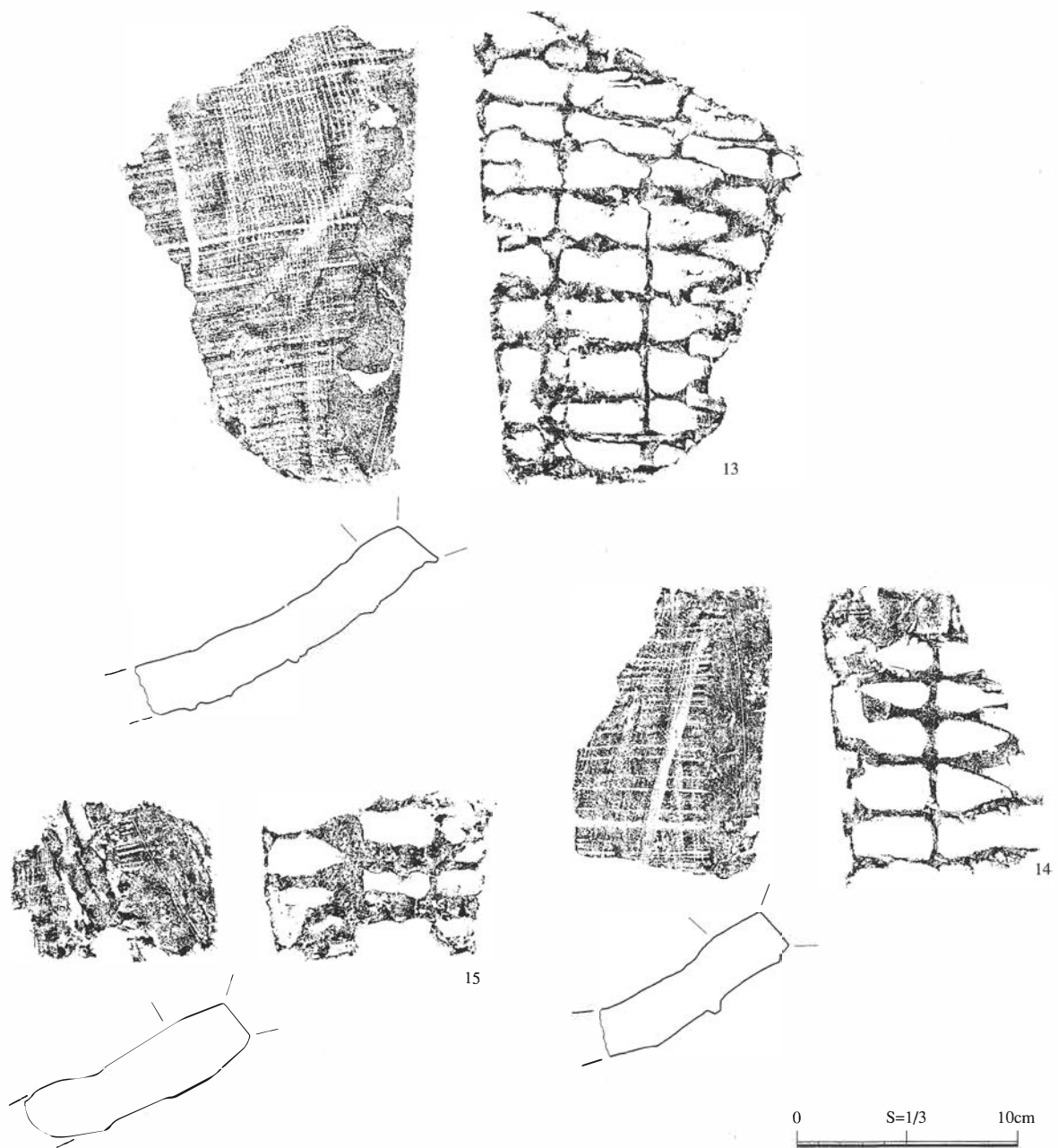
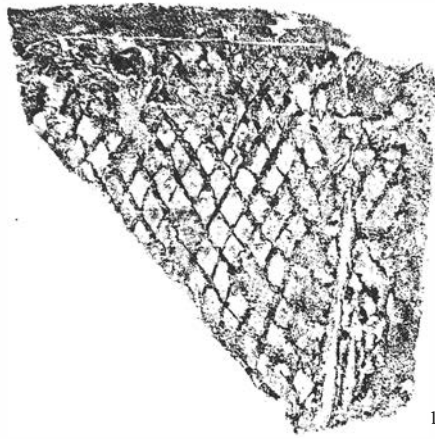


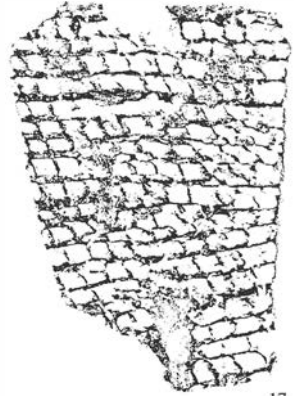
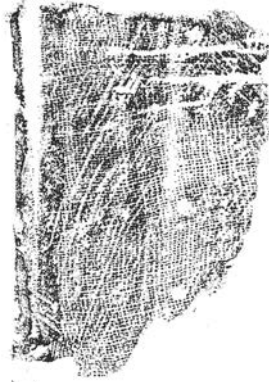
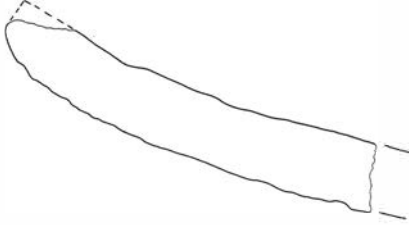
図61 瓦類 (6)

29～31 は平行タタキが施されているものである。29 はタタキ目を明瞭に残すが、30・31 は叩き締めの後、ナデによる調整が行なわれており、タタキ目は不明瞭である。また 29 は凹面に布目を残すが、43 は縦位のナデによって布目が消されている。31 は凹面全体が平滑に摩滅しており、硯に転用されたものと考えられる。

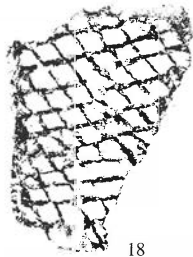
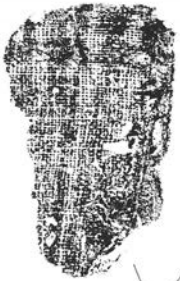
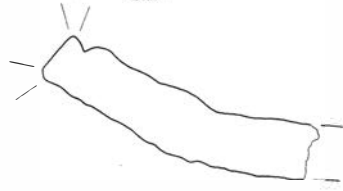
32 は塼である。表面はヘラナデによって調整され、裏面には格子タタキ目を残している。ただし裏面もタタキ目の上からヘラナデが行なわれている。側面はヘラケズリによる調整が施されている。



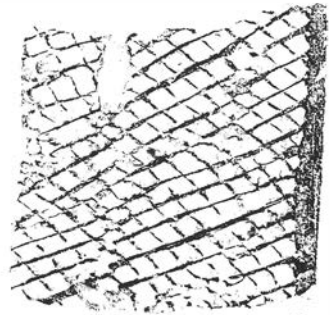
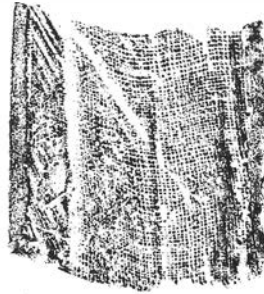
16



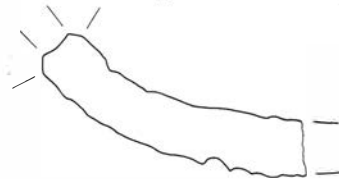
17



18



19



0 S=1/3 10cm

图62 瓦類 (7)

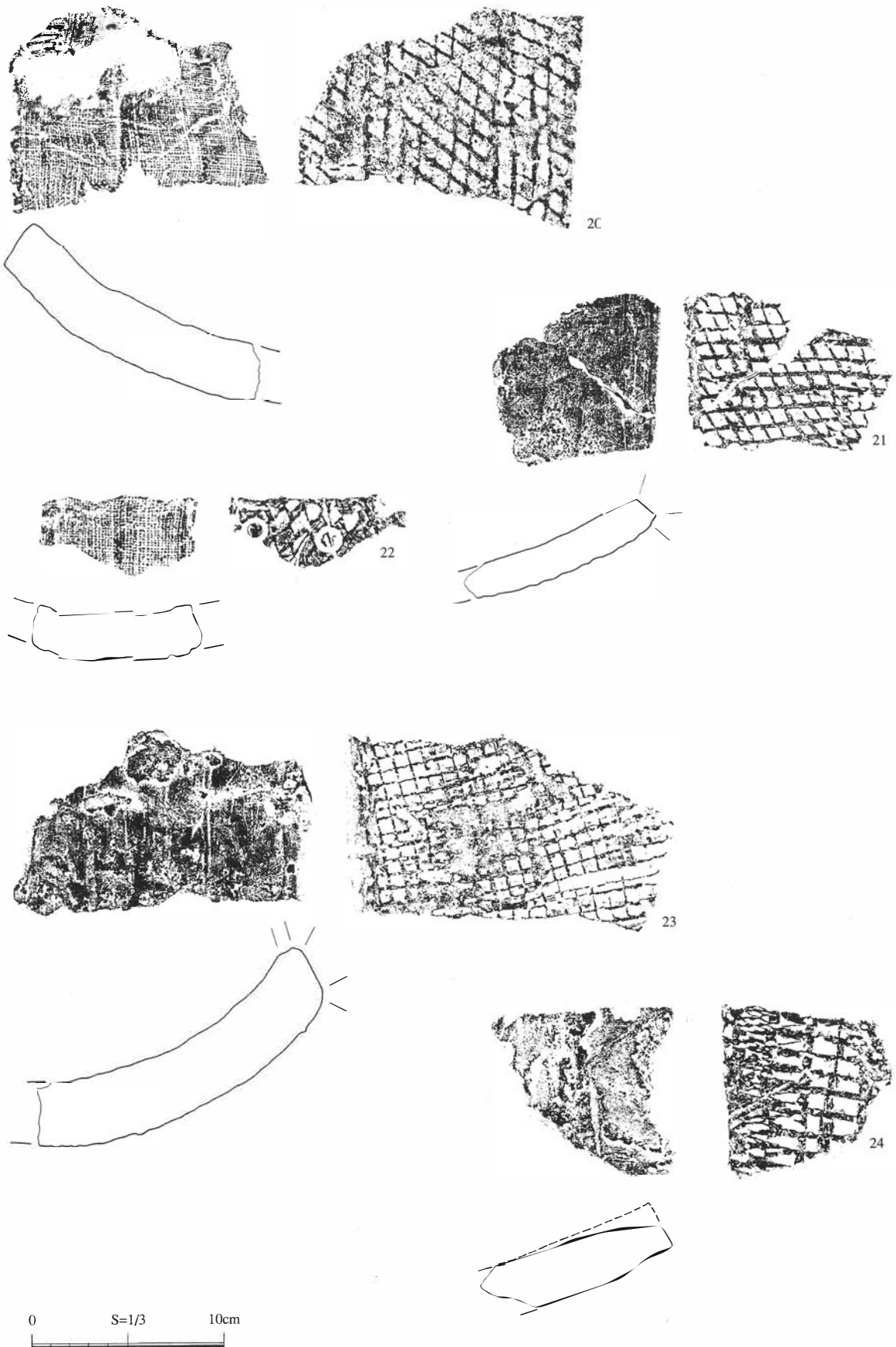


图63 瓦類 (8)

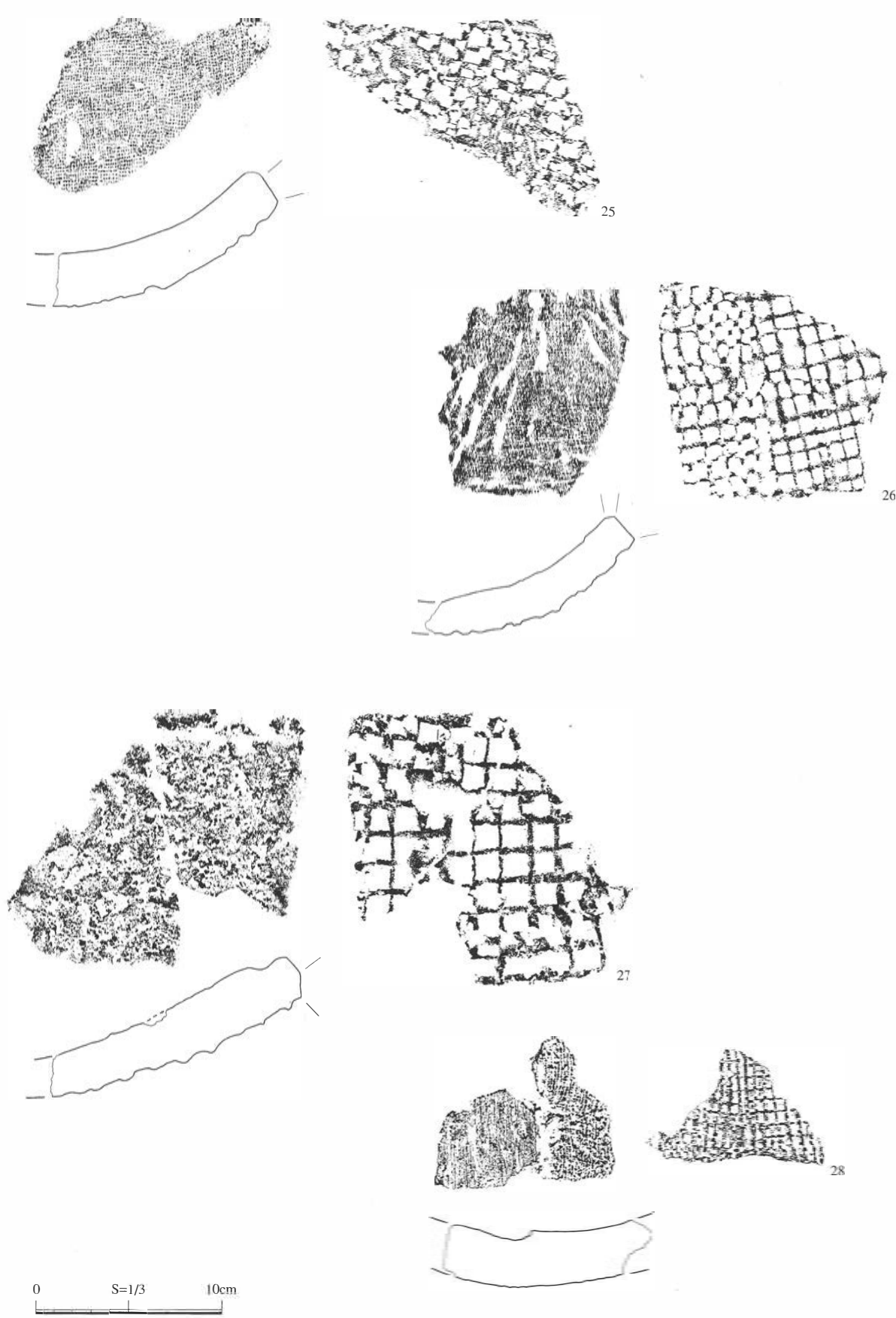


图64 瓦類 (9)

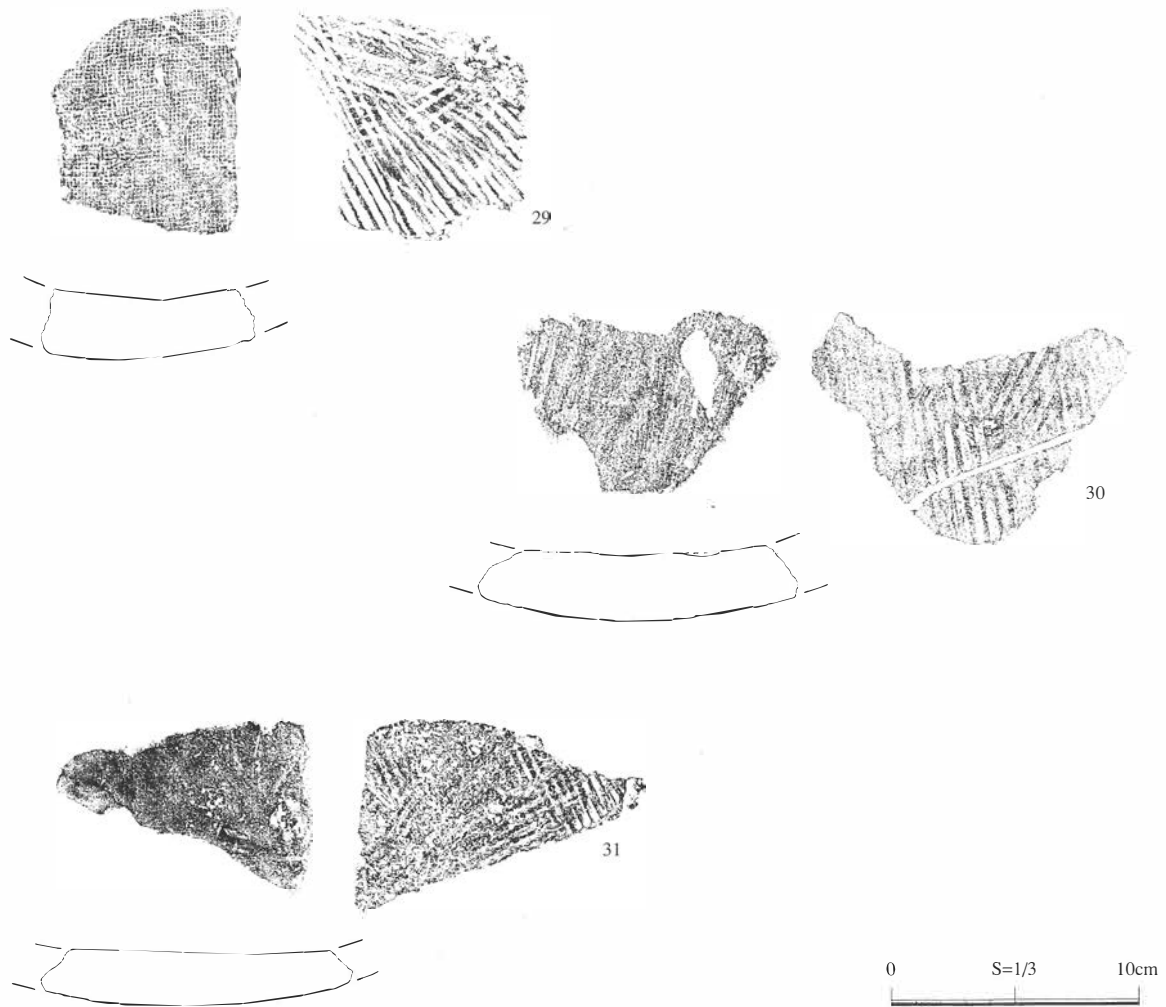


図65 瓦類 (10)

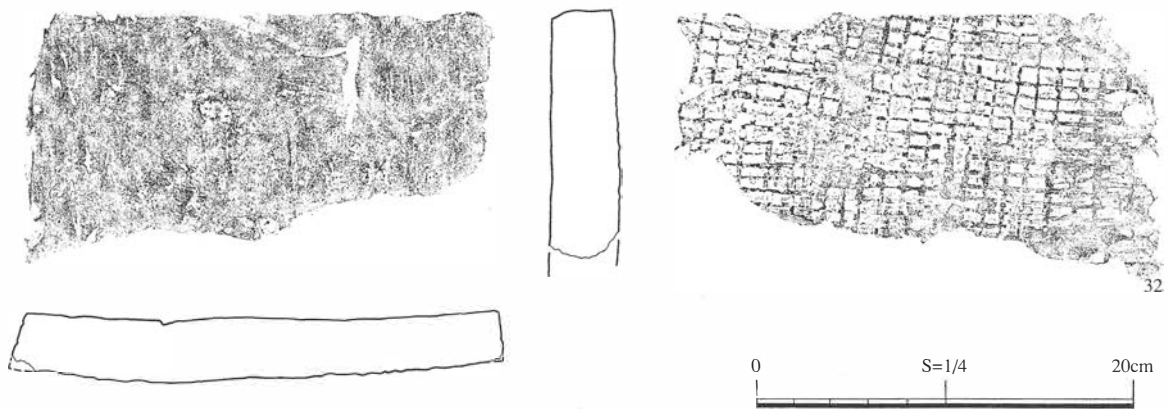


図66 瓦類 (11)

第4節 まとめ

古代に属する遺構は、掘立柱建物跡・一本柱列・溝跡・土坑・性格不明遺構がある。掘立柱建物跡の主軸方位をみると、真北方位に近い1・2号掘立柱建物跡と、東に26°振れる3号掘立柱建物跡がある。当遺跡においては、官衙創設段階に遡る施設の主軸方位は東に振れ、郡家

が整備される相対的に新しい段階になると真北方位に変更されるといった傾向が、郡庁院を初めとした諸施設に認められることから、当調査区の建物跡もそうした郡家関連施設の一部と考えられ、郡家施設全体の造営計画のなかで推移したものと考えられる。従って、東に振れる3号掘立柱建物跡は行方郡家の創設期に遡り、郡庁院の遺構期区分におけるⅠ期、真北方位を向く1・2号掘立柱建物跡は、これに続く郡庁院Ⅱ期ないしⅢ期に相当する時期のものとして推定される。また、柱列跡についても、2号柱列を前者、1号柱列を後者に当てはめてよいものと思われる。これらの建物跡には建て替えや同じ方位の建物同士での重複が認められないことから、長期間の存続は考え難いが、1・2号掘立柱建物跡が同時期に並存したか否かについても、建物配置に明確な関係性を見出せないため、現段階では決し難いところである。建物の規模については、全体の判明している3号掘立柱建物跡は3×2間(総長6.3m×3.5m)で、郡家の掘立柱建物としては小型の部類に属する。また1・2号掘立柱建物跡についても、全体像は不明であるものの、掘方の規模や間尺などから考えて、やはり大型のものとは考え難い。

出土遺物をみると、1号不明遺構や遺構外の遺物包含層から、古代に属する土器類が他地区に比して豊富に出土している。遺物の出土量は、遺構や包含層の遺存状況とも関連するが、比較的多量に出土する食器類が当地区の性格に一つの特徴を与えているとも考えられる。当地区出土の土師器には栗圀式期の土師器杯から赤焼土器までがあるが、量的に主体となるのはロクロ使用の内黒土師器杯である。これらでは底部調整が回転ヘラケズリのもので手持ちヘラケズリのものも多く、糸切り未調整のものは少ない。このほかに、国分寺下層式の非ロクロ杯も目立つ。当地区出土のこれらの遺物は、その特徴から、中心となる時期は8世紀後半～9世紀初頭と推定される。両黒の土師器蓋や高台付杯もこの時期のものと考えられる。当地区の南に位置する第9次調査区では、第8章で詳細に報告するように井戸と推定される土坑が10数基確認され、また溝跡から供膳形態の土師器・須恵器が多く出土している。当地区一帯における供膳形態の土器の豊富な出土は、この部分が行方郡家を構成する施設のなかでも生活・居住に関連する地区である可能性を示唆するものと考えられる。また漆容器の蓋として転用されたと推定される土師器杯の出土からは、郡家に付属する漆器等の生産工房などが存在した可能性も推測される。

中世以降に属する遺構については、溝跡・土坑・ピット群などがある。第5次調査区や第7次調査区でも該期のピット群が確認されており、これらは柵列ないし建物跡に属する柱穴と考えられる。中世以降の当地区には、一定の広がりをもつ居住区が広がっていたものと思われる。当遺跡の中世以降の様相については不明な点が多く、今後課題を残すが、周辺には相馬氏関連の平地居館や山城が分布しており、これらの遺跡を含めてその内容を明らかにすることが、当地域の中・近世史における重要な課題となる。(藤木)

《註》

註1 平瓦タタキ具の名称については、竹島國基編『福島県浜通りの古瓦』(竹島コレクション考古図録第2集 1992年)に従った。

註2 山田 廣「瓦類」『郡山五番遺跡』Ⅲ 双葉町教育委員会 1980年。

註3 山田 廣、前掲註2報告書。

註4 佐川正敏「陸奥国の平城宮式軒瓦 6282-6721の系譜と年代—宮城県中新田町城生遺跡と福島県双葉郡郡山五番遺跡・原町市泉廃寺—」『東北学院大学 東北文化研究所紀要』第32号 2000年。

表 11 1号溝跡出土土器観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量		調整
					口径/器高/底径		
26	1	1号溝跡	土師器	杯	15.6/5.4/-		内面:口底部ミガキ黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ 体底部ケズリ
26	2	1号溝跡	土師器	高杯	15.0/(6.0)/-		杯部内面:ミガキ黒色処理 外面:ナデヘラナデ脚部内面:ヘラナデ外面:ケズリ
26	3	1号溝跡	土師器	高杯	-(9.1)/10.0		杯部内面:黒色処理 外面:ヘラケズリ 脚部内面:ヘラナデ 外面:ヘラケズリ
26	4	1号溝跡	土師器	高杯	-(7.8)/-		杯部内面:ヘラミガキ、黒色処理 脚部外面:ヘラケズリ
26	5	1号溝跡	土師器	蓋	-(1.3)/-		内面:体部ミガキ、黒色処理 外面:体部ヘラミガキ、黒色処理つまみ部欠損
26	6	1号溝跡	土師器	甕	-(6.6)/9.0		内面:体~底部ナデ 外面:体部ヘラナデ後ナデ 外面:木葉痕
26	7	1号溝跡	土師器	甕	-(7.3)/6.8		内面:体~底部ヘラナデ 外面:体~底部ヘラケズリ

表 12 1号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量		調整
					口径/器高/底径		
28	—	1号土坑	須恵器	甕	-(4.0)/14.6		内面:体~底部ヘラナデ 外面:体~底部ヘラナデ

表 13 1号不明遺構出土土器観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量		調整
					口径/器高/底径		
33	1	1号不明遺構	土師器	蓋	20.4/(2.6)-		内面:口体部ヘラミガキ、黒色処理 外面:口体部ヘラミガキ、黒色処理
33	2	1号不明遺構	土師器	蓋	21.4/(2.1)/-		内面:口~体部ヘラミガキ、黒色処理 外面:口~体部ヘラミガキ、黒色処理
33	3	1号不明遺構	土師器	高台杯	-(3.3)/9.4		内面:体~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:体~底部ヘラミガキ、黒色処理
33	4	1号不明遺構	土師器	杯	13.0/3.6/8.0		内面:口底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ 体底部ヘラケズリ
33	5	1号不明遺構	土師器	杯	15.6/4.8/10.0		内面:口底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:口体部ロクロナデ 底部ヘラケズリ
33	6	1号不明遺構	土師器	杯	12.4/4.3/5.8		内面:口底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:口体部ロクロナデ 底部ヘラケズリ
33	7	1号不明遺構	土師器	高台杯	-(3.2)/9.6		内面:体~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:体~底部ロクロナデ
33	8	1号不明遺構	土師器	高杯	-(4.2)/7.8		杯部内面:ミガキ黒色処理 脚部内面:ヘラナデ 外面:ヘラケズリ
33	9	1号不明遺構	土師器	甕	21.0/25.1/11.0		内面:口ヨコナデ 体底部ヘラナデ 外面:口ヨコナデ体部ヘラナデ、ケズリ
33	10	1号不明遺構	土師器	甕	11.5/(7.8)/-		内面:口~体部摩滅のため不明 外面:口~体部鉄分着のため不明
33	11	1号不明遺構	土師器	甕	-(4.4)/11.4		内面:体~底部黒色処理 外面:体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ?
33	12	1号不明遺構	土師器	甕	-(3.9)/8.8		内外面:摩滅のため不明
34	13	1号不明遺構	須恵器	甕	22.8/(29.8)/-		内外面:口縁部ロクロナデ 体部青海波文 体部斜格子タタキ
34	14	1号不明遺構	須恵器	甕	21.8/(13.8)/-		内面:口縁部ロクロナデ 体部指ナデ 外面:口縁部ロクロナデ 体部ハケ目
34	15	1号不明遺構	須恵器	甕	-(9.1)/-		内面:頸~肩部ヘラナデ、青海波文 外面:頸~肩部ロクロナデ
34	16	1号不明遺構	須恵器	甕	厚1.0		内面:体部青海波文 外面:体部縄タタキ

表 14 2号不明遺構出土土器観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量		調整
					口径/器高/底径		
38	—	2号不明遺構	須恵器	杯	-(2.5)/7.6		内面:体部ロクロナデ 底部ヘラナデ 外面:体~底部回転ヘラケズリ

表 15 13号土坑出土土器・陶磁器観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量		調整
					口径/器高/底径		
47	1	13号土坑	陶器	皿	11.5/2.6/5.6		内面:口底部ナデ 外面:口縁部ナデ 体底部回転ヘラケズリ 志野焼
47	2	13号土坑	陶器	皿	10.7/(1.9)/-		内面:口体部ナデ 外面:口縁部ナデ 体部回転ヘラケズリ 灰白色の釉
47	3	13号土坑	陶器	皿	-(2.0)/5.7		内面:体~底部ロクロナデ 外面:体~底部ロクロナデ、回転ヘラケズリ
47	4	13号土坑	磁器	皿	-(3.1)/5.6		内面:体~底部ナデ 外面:体~底部回転ケズリ 内底に線刻の絵あり
47	5	13号土坑	瓦質土器	摺鉢	23.5/(8.4)/-		内面:口縁部ロクロナデ 体部ハケ目 外面:口~体部ロクロナデ
47	6	13号土坑	須恵器	甕	厚1.1		内面:体部青海波文 外面:体部格子タタキ

表 16 19号土坑出土土器・陶磁器観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量		調整
					口径/器高/底径		
47	7	19号土坑	陶器	小皿	9.5/(2.3)/4.0		内面:口~底部ロクロナデ 外面:口~体部ロクロナデ 底部糸切り瀬戸焼
47	8	19号土坑	土師器	杯	-(1.5)/11.4		内面:体~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:体~底部回転ヘラケズリ
47	9	19号土坑	土師器	甕	-(9.2)/9.0		内面:体~底部ヘラナデ、外面:体~底部ヘラケズリ

表 17 21号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量		調整
					口径/器高/底径		
47	10	21号土坑	土師器	杯	13.6/(4.7)/5.4		内面:口~底部ヘラミガキ、外面:体部ヘラケズリ 底部糸切り
47	11	21号土坑	土師器	杯	-(1.6)/5.2		内面:体底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:体部ロクロナデ 底部糸切り
47	12	21号土坑	土師器	杯	-(1.6)/5.4		内面:体~底部ヘラミガキ、外面:体~底部ロクロナデ後ヘラケズリ
47	13	21号土坑	土師器	杯	-(3.1)/5.6		内面:体~底部ヘラミガキ、外面:体~底部ロクロナデ、ヘラケズリ
47	14	21号土坑	須恵器	杯	-(3.1)/7.0		内面:体~底部ロクロナデ 外面:体部ロクロナデ 底部ヘラ切り

表 18 23号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量		調整
					口径/器高/底径		
47	15	23号土坑	土師器	甕	-(11.2)/-		内面:体部摩滅のため不明 外面:頸部ヨコナデ 体部ヘラナデ

表 19 24号土坑出土土器・陶磁器観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量		調整
					口径/器高/底径		

47	1	24号土坑	陶器	皿	11.4/2.3/6.6	内面：口～底部ロクロナデ、外面：口縁部ナデ 体～底部回転ヘラケズリ志野焼
47	2	24号土坑	赤焼土器	高台杯	-(2.1)/7.4	内面：体～底部ロクロナデ 外面：体～底部ロクロナデ

表 20 遠構外出土土器・陶磁器・瓦観察表

挿図 番号	No.	出土遺構	種 別	器種	法 量	調 整
					口径/器高/底径	
48	1	G13-53	土 師 器	杯	16.8/10.9/10.8	杯部内：ミガキ、黒色 外面：ナデ 脚内外：ナデ、ケズリ
48	2	G13-44	土 師 器	壺	-(3.0)/10.6	脚部：ヘラナデ、黒色 外：ヘラナデ
48	3	G13-47	土 師 器	蓋	-(2.0)/-	内：体ミガキ、黒色処理 外：体ミガキ、黒色
48	4	G13-27	土 師 器	蓋	5.0/(2.0)/-	内：体ミガキ、黒色処理 外：体ミガキ、黒色
48	5	G13-67	土 師 器	蓋	-(2.1)/-	内：体ミガキ、黒色処理 外：体ミガキ、黒色
48	6	G13-57	土 師 器	蓋	-(4.0)/22.0	内：体ミガキ、黒色 外：体ミガキ、黒色
48	7	-	土 師 器	杯	14.8/4.3/7.8	内：口～体ミガキ、黒色 外：口～体ヘラナデ 底部ケズリ
48	8	なし	土 師 器	杯	12.8/4.2/7.4	内：口ナデ 体底ミガキ 外：口ナデ 体～底ケズリ内面漆付着
48	9	G13-57	土 師 器	杯	12.2/(4.3)/-	内：口～底ミガキ、黒色 外：口ヨコナデ 体ケズリ
48	10	G13-53	土 師 器	杯	14.2/(4.5)/-	内：口～底ミガキ、黒色 外：口ヨコナデ 体～底ケズリ
48	11	G13-53	土 師 器	杯	14.4/4.5/9.2	内：口～底ミガキ、黒色 外：口～底ケズリ
48	12	G13-54	土 師 器	杯	13.9/3.2/8.6	内：口～底ロクロナデ、黒色 外：体～底部回転ヘラケズリ
48	13	G13-51	土 師 器	杯	13.6/4.3/6.8	内：口～底ミガキ、黒色外：口～体ロクロナデ 体底ケズリ
48	14	G13-30	土 師 器	杯	13.0/3.9/6.6	内：口～底ミガキ、黒色 外：ロクロナデ 底部摩滅
48	15	G13-63	土 師 器	杯	14.4/4.7/6.0	内：黒色 外：口～体ロクロナデ 底ケズリ
48	16	G13-30	土 師 器	杯	12.8/4.6/5.8	内：口～底ミガキ、黒色 外：ロクロナデ 底ヘラ切り
48	17	G13-52	土 師 器	杯	12.0/3.6/6.0	内：黒色 外：口～体ロクロナデ 体～底部ケズリ
48	18	G13-59	土 師 器	杯	-(3.2)/9.0	内：黒色 外：体ロクロナデ 底部糸切り
48	19	G13-57	土 師 器	杯	-(1.9)/7.4	内：黒色 外：体～底回転ヘラケズリ
48	20	G13-53	土 師 器	椀	-(4.0)/8.4	内：体～底ミガキ、黒色 外：体ロクロナデ 底ヘラケズリ？
48	21	G13-44	赤焼土器	杯	13.9/4.0/5.6	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ 底部糸切り
48	22	-	赤焼土器	杯	12.0/5.1/6.0	内・外：ロクロナデ 底部糸切り後ヘラケズリ
48	23	G13-51	赤焼土器	杯	13.0/(3.4)/-	内：口～体ロクロナデ 外：口～体ロクロナデ
48	24	SK37	土 師 器	杯	12.6/3.7/7.8	内：ロクロナデ 外面：ロクロナデ 底部ヘラケズリ
48	25	G13-61	土 師 器	高台杯	-(2.9)/7.8	内：黒色 外：ロクロナデ 底部ヘラケズリ
48	26	G13-57	土 師 器	高台杯	-(3.4)/8.8	内：黒色 外面：体～底ロクロナデ
48	27	G13-44	土 師 器	高台杯	14.8/5.9/8.4	内：口～底ロクロナデ 外：口～底ロクロナデ
48	28	G13-53	土 師 器	高台杯	-(2.6)/8.4	内：ロクロナデ 外面：ロクロナデ 底部糸切り
49	29	G12-39	土 師 器	甕	14.6/(11.2)/-	内：口～体部ヘラナデ、ケズリ 外：口～体ヘラナデ
49	30	-	土 師 器	甕	10.4/(6.6)/-	内外：口～頸部摩滅のため不明
49	31	G13-38	土 師 器	甕	19.8/(13.6)/-	内：口ヨコナデ 体ヘラナデ、外：口ヨコナデ 体ヘラナデ、
49	32	G13-57	土 師 器	甕	15.8/(11.9)/-	内：口ヨコナデ 体ヘラナデ 外：口ヨコナデ 体ヘラナデ
49	33	G13-54	土 師 器	甕	-(9.6)/-	内：体部摩滅のため不明 外面：体ハケメ後ヘラナデ
49	34	-	土 師 器	甕	-(15.8)/9.2	内：体～底ヘラナデ 外：体ヘラナデ 底ケズリ
49	35	G13-54	土 師 器	甕	11.2/(8.0)/-	内：口～体部摩滅のため不明 外：口ヘラナデ
49	36	G13-47	土 師 器	甕	-(13.2)/7.4	内：体底摩滅 外：体ヘラナデ 底ヘラケズリ内面付着物
49	37	G13-53	土 師 器	甕	-(3.9)/12.6	内：体～底ヘラナデ？ 外：体ヘラナデ 底部木葉痕
49	38	G13-40	土 師 器	甕	-(6.2)/10.0	内：体～底摩滅のため不明 外：体ヘラナデ
49	39	G13-37	土 師 器	甕	-(2.4)/9.4	内：体～底ヘラナデ 外：体ハケメ 底木葉痕
49	40	-	土 師 器	甕	-(2.9)/9.6	内：体～底ヘラナデ 外：体不明 底木葉痕
50	41	G13-38	土 師 器	甕	10.2/(8.7)/-	内：口～体指ナデか？ 外：口ヨコナデ 体ハケメ
50	43	G12-49	土 師 器	甕	-(1.6)/3.6	内：体～底指ナデ 外：体ケズリ 底木葉痕
50	44	G13-57	土 師 器	甕	-(2.6)/3.8	内：体～底ヘラナデ 外：体ヘラナデ 底指ナデ
50	45	G13-34	土 師 器	甕	-(1.2)/4.4	内：体～底指ナデか？ 外：体指ナデ 底木葉痕
50	46	G12-48	土 師 器	鉢？	10.0/(6.4)/-	内：口～体ヨコナデ、指押え 外：口ヨコナデ 体ヘラナデ
50	47	G13-56	土 師 器	甕	10.5/(5.3)/-	内：口～体ヘラナデ 外：口～体ヘラナデ
50	48	G12-47	土 師 器	壺	-(10.5)/8.4	内：体～底ヘラナデ、指ナデ、指頭痕 外：摩滅のため不明
50	49	G13-54	土 師 器	鉢	20.0/15.9/7.2	内：口～底ミガキ、黒色 外：ロクロナデ 底部不明
50	50	G13-61	土 師 器	甕	-(3.3)/5.0	内：体～底ヘラナデか？ 外：体ヘラナデ 底木葉痕
51	51	G13-54	須 恵 器	蓋	3.0/(2.8)/-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ 天井回転ヘラケズリ
51	52	G13-63	須 恵 器	蓋	3.8/(2.7)/-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ
51	53	G13-33	須 恵 器	蓋	3.0/(1.7)/-	内：ロクロナデ 外：体ロクロナデ 天井回転ヘラケズリ
51	54	G13-54	須 恵 器	蓋	4.0/(1.3)/-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ
51	55	G13-57	須 恵 器	蓋	-(3.0)/16.0	内：ロクロナデ 外：体ロクロナデ 天井回転ヘラケズリ
51	56	G13-38	須 恵 器	蓋	-(1.5)/16.6	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ 天井回転ヘラケズリ
51	57	G13-53	須 恵 器	蓋	-(2.0)/-	内外面：ロクロナデ 天井回転ヘラケズリ頂部ヘラ描き「×」？
51	58	G13-68	須 恵 器	高台杯	12.6/4.1/11.0	内：口～底ロクロナデ 外：口～底ロクロナデ
51	59	G13-54	須 恵 器	高台杯	-(3.6)/8.4	内：体～底ナデ 外面：ロクロナデ 底糸切り

51	60	G13-54	須恵器	杯	13.8/3.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ 底系切り		
51	61	G13-50	須恵器	杯	-(2.7)/8.4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ナデ 底部ヘラ切り		
51	62	G13-50	須恵器	杯	-(1.4)/9.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ 底回転ヘラケズリ		
51	63	G13-53	須恵器	杯	-(3.8)/9.2	内：ロクロナデ 外：体ロクロナデ 底ヘラケズリ		
51	64	G13-47	須恵器	杯	-(4.0)/9.6	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ 底回転ヘラケズリ		
51	65	G13-44	須恵器	杯	-(1.4)/6.6	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ナデ 底ヘラ切り		
51	66	G9-8	須恵器	杯	-(2.4)/6.0	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、ナデ 底ヘラ切り		
51	67	G13-42	須恵器	鉢	-(5.1)/11.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ 底ナデか？内面砥石再利用？		
51	68	G13-63	須恵器	盤？	-(3.2)/-	内：ロクロナデ後ナデ 外面：ロクロナデ 底回転ヘラケズリ		
51	69	G13-55	須恵器	鉢	12.2/(5.0)/-	内：口～頸ロクロナデ 外：口～頸ロクロナデ		
51	70	G13-55	須恵器	長頸瓶	10.0/(9.7)/-	内：口～体ロクロナデ 外：口～体ロクロナデ・暗緑色の自然釉		
51	71	G13-56	須恵器	瓶	-(3.6)/8.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ 底回転ヘラケズリ		
51	72	G13-34	須恵器	甕	-(4.2)/-	内：頸ロクロナデ 外：頸ロクロナデ		
51	73	G13-34	須恵器	甕	-(4.8)/-	内：頸ロクロナデ 外：頸ロクロナデ		
51	74	G13-62	須恵器	甕	-(3.7)/-	内：頸ロクロナデ 外：頸ロクロナデ		
51	75	G13-40	須恵器	甕	-(2.8)/-	内：頸ロクロナデ 外：頸ロクロナデ		
51	76	G13-62	須恵器	甕	-(11.9)/-	内：口～頸ロクロナデ 外：口～頸ロクロナデ		
51	77	G13-60	須恵器	壺？	-(3.2)/12.8	内：体～底ロクロナデ 外：体～底ロクロナデ		
51	78	G13-58	須恵器	円面硯	14.4/(2.8)/-	内：ヘラナデ、ロクロナデ 外：ロクロナデ・十字形の透かし		
51	79	G12-59	須恵器	風字硯	長9.8/幅6.0	内：使用痕 外：ヘラケズリ・厚さ1.0		
52	80	G13-52	須恵器	甕	-(9.9)/-	内：頸ヘラナデ 体同心円文 外：頸描文、ヘラナデ		
52	81	G13-39	須恵器	甕	-(7.6)/22.0	内：体～底ヘラナデ 外：平行タタキ、ヘラナデ 底ヘラナデ		
52	82	G12-37	須恵器	甕	-(4.5)/14.2	内：体～底ロクロナデ 外：体ロクロナデ、ヘラナデ 底ヘラナデ		
52	83	G13-47	須恵器	甕	-(6.6)/-	内：ロクロナデ、ヘラケズリ 外：平行タタキ、同心円		
52	84	-	須恵器	甕	-(5.0)/-	外：櫛描文		
52	85	G12-46	須恵器	甕	-/-/-	内：体同心円文 外：体矢羽タタキ		
52	86	G13-53	須恵器	甕	-/-/-	内：体同心円文 外：体縄タタキ		
53	87	S023	陶器	皿	12.8/3.5/6.0	内・外 ロクロナデ 底系切り後回転ヘラケズリ・志野焼		
53	88	G13-23	陶器	皿	11.4/2.2/6.8	内・外：ロクロナデ、底回転ヘラケズリ志野焼		
53	89	G13-40	陶器	皿	-(2.7)/8.0	内：ロクロナデ、外面：ロクロナデ、底回転ヘラケズリ・志野焼		
53	90	G13-62	陶器	皿	10.7/2.1/6.6	内外面：ロクロナデ 体～底回転ヘラケズリ志野焼		
53	91	G13-54	陶器	？	-(2.2)/6.9	内：ロクロナデ 外：体ロクロナデ、沈線 底回転ヘラケズリ		
53	92	G13-52	カワラケ	皿	8.2/2.1/5.8	内：口～底ロクロナデ 外：口～体ロクロナデ 底部系切り		
53	93	G12-55	カワラケ	皿	9.4/1.8/5.0	内面：ロクロナデ 外：ロクロナデ 底部系切り		
53	94	-	カワラケ	皿	7.4/1.4/5.1	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ 底部ヘラケズリ		
挿図 番号	No.	出土遺構	種別	調整		重量	厚さ	備考
				凸面	凹面			
56	1	G13-64L II	軒丸瓦	文様：単弁八葉蓮華文 瓦当裏面ヘラケズリ		1,200	2.8	丸瓦部剥離面に布目の凸型
56	2	G13-43L II b	軒丸瓦	文様：花文 瓦当裏面ヘラケズリ		230	2.3	
56	3	1号溝跡	軒平瓦	文様：釣針文 段頸、頸無文 凹・凸・側面ケズリ		930	6.0	凹面ヘラ描文字「方」？
57	4	G13-37L II	丸瓦	ヘラケズリ	布目痕、系切り痕？	470	1.9	凹側縁ヘラケズリ
57	5		丸瓦	ヘラケズリ	布目痕	1,240	2.7	凹凸側面・側縁ヘラケズリ
58	6	G13-60L II	丸瓦	正格子タタキ後ヘラナデ	布目痕	320	1.7	
58	7	13号土坑	丸瓦	ヘラケズリ	布目痕	230	2.7	玉縁式。凹凸側縁ナデ
59	8	G13-30L II b	平瓦	簾状タタキ	布目痕、模骨痕	1,040	3.4	側面、凹端縁・側縁、凸側縁ヘラケズリ
59	9	G13-27L I	平瓦	簾状タタキ	布目痕	970	2.9	砥石再利用
59	10	G12-47L III	平瓦	簾状タタキ	布目痕、模骨痕	330	2.0	側面、凹凸側縁ヘラケズリ
60	11	G13-47	平瓦	簾状タタキ	布目痕、系切り痕	1,350	2.6	凹面端縁・側縁ヘラケズリ
60	12	G13-36L I	平瓦	簾状タタキ	布目、系切、ヘラナデ	2,150	3.6	側面、凹凸側縁ヘラケズリ
61	13	G13-57L I	平瓦	雨垂れ状タタキ	布目・模骨痕、系切痕	850	2.5	凹面側縁ヘラケズリ
61	14	G13-34L I	平瓦	雨垂れ状タタキ	布目・模骨痕、系切痕	360	2.8	凹面側縁ヘラケズリ
61	15	G13-44L II	平瓦	雨垂れ状タタキ	布目痕、ヘラナデ	270	2.6	凹面側縁ヘラケズリ
62	16	G12-39	平瓦	斜格子タタキ	布目、模骨、ヘラナデ	800	2.4	側面、凹凸側縁・端縁ヘラケズリ
62	17	19号土坑	平瓦	斜格子タタキ	布目痕、模骨痕	470	2.0	側面、凹凸側縁ヘラケズリ
62	18	G13-43L III	平瓦	斜格子タタキ	布目痕、模骨痕	330	3.1	側・端面、凹凸側縁ヘラケズリ
62	19	G13-57L I	平瓦	斜格子タタキ	布目痕、模骨痕	460	2.2	側面、凹凸側縁ヘラケズリ
62	20	G13-58L II	平瓦	斜格子タタキ	布目痕、模骨痕	560	2.8	側面2面、凹側縁ヘラケズリ
63	21	G13-52L I	平瓦	斜格子タタキ	ヘラナデ	190	1.8	側面、凸側縁ヘラケズリ
64	22	G13-56	軒平瓦	斜格子タタキ	布目痕、模骨痕	100	2.4	凸面に三角文+竹管状円文
64	23	G12-48L II	平瓦	正格子タタキ	ヘラケズリ	680	3.2	側面、凹凸側縁ヘラケズリ
64	24	19号土坑	平瓦	正格子タタキ	ヘラナデ	230	2.5	
64	25	G12-48L III	平瓦	正格子タタキ	布目痕	370	2.8	側面ヘラケズリ
64	26	G13-62L II	平瓦	正格子タタキ	布目痕	350	2.2	凹側縁ヘラケズリ
64	27	19号土坑	平瓦	正格子タタキ	不明	640	2.9	側面、凹凸側縁ヘラケズリ
64	28	G13-49L II	平瓦	正格子タタキ	布目痕、ヘラナデ	200	2.6	凹面粘土接合痕？
65	29	19号土坑	平瓦	平行タタキ	布目痕	270	2.4	
65	30	19号土坑	平瓦	平行タタキ	ヘラナデ	260	2.4	凸面にヘラ描文字
65	31	G13-49L II	平瓦	平行タタキ	不明	180	2.2	砥石として再利用
66	32	G13-62L II	塼	正格子タタキ	ヘラナデ	1,760	3.4	凹面側端縁ヘラケズリ



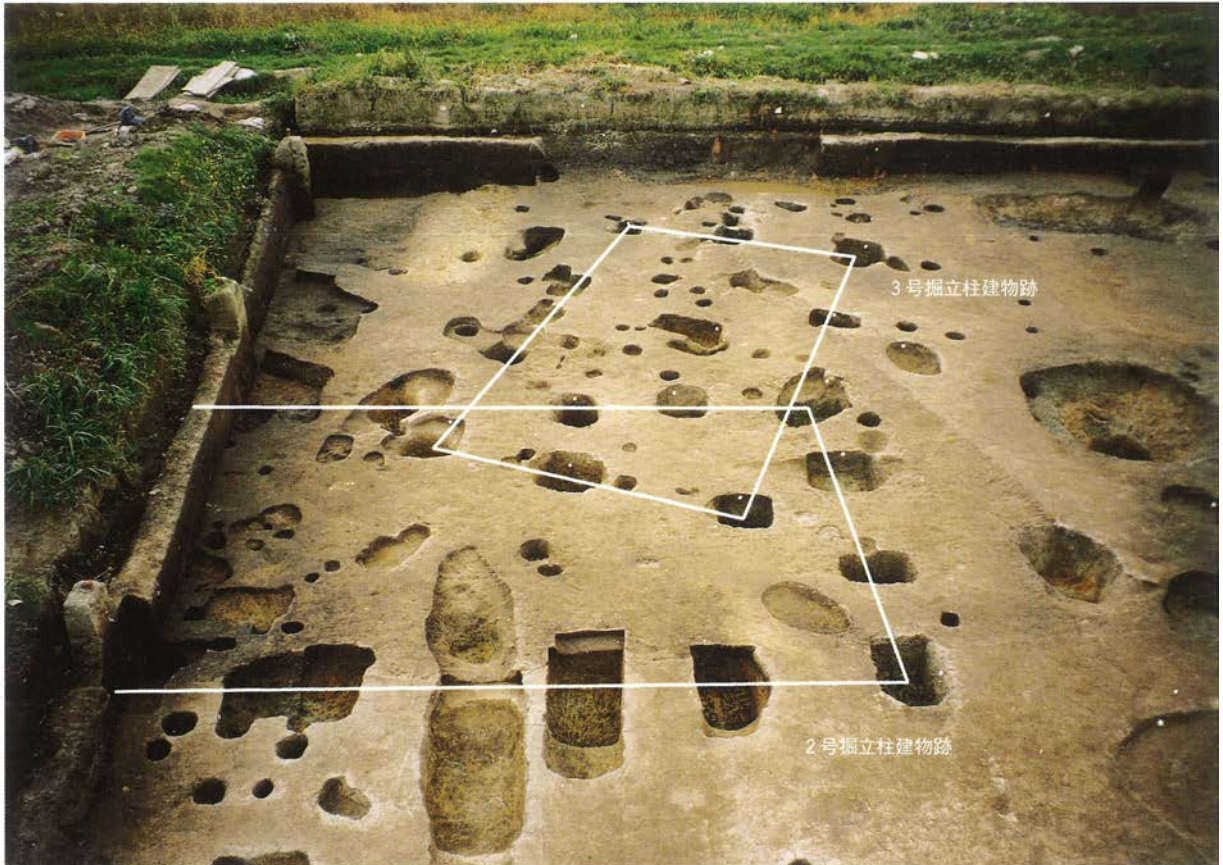
1 第3次調査区全景（東から）



2 古代掘立柱建物跡・柱列遺構配置（東から）



1 1号掘立柱建物跡 (南東から)



2 2・3掘立柱建物跡 (東から)



1 1号柱列 (西から)



2 2号柱列 (南東から)



3 1号溝跡 (南東から)



4 2号溝跡 (西から)



5 1号不明遺構 (北から)



6 1号不明遺構 A-A'セクション(西から)



7 2号不明遺構 (北から)



8 3号不明遺構 (西から)



1 ピット群検出状況 (G12-28~58・G12-29~59グリッド、北から)



2 ピット群検出状況 (G13-20~50、G13-41・51グリッド、北から)



1 3号溝跡 (東から)



2 4号溝跡 (北東から)



3 7号土坑 (北から)



4 13号土坑 (南西から)



5 14号土坑 (北から)



6 17号・18号土坑 (南から)

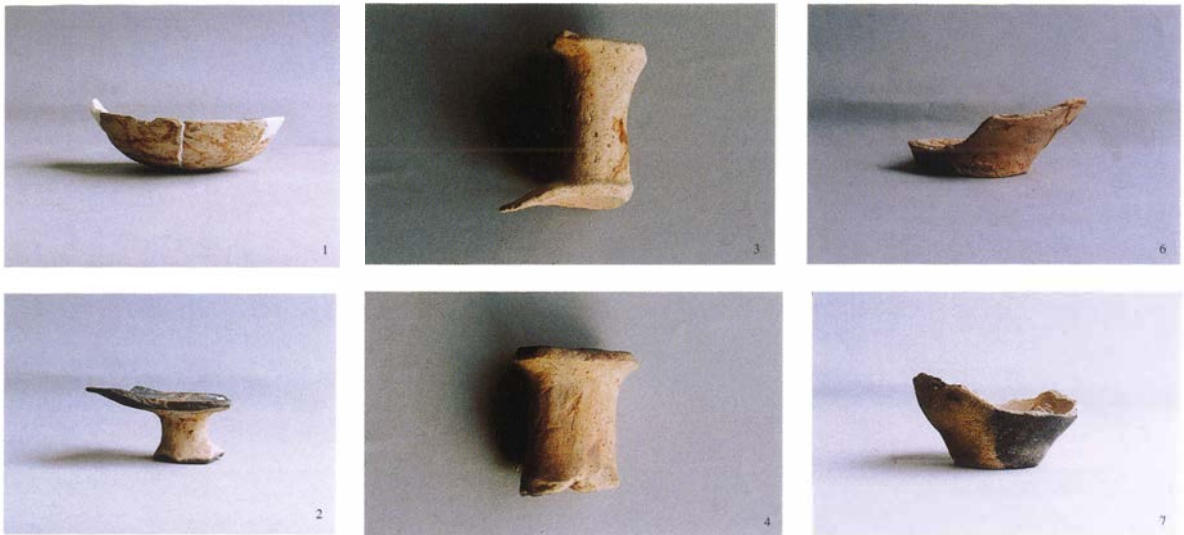


7 19号土坑 (北から)



8 24号土坑 土層断面 (東から)

図版11 第3次調査 遺物(1)



1号溝跡出土遺物



1号不明遺構出土遺物(1)



1号不明遺構出土遺物(2)

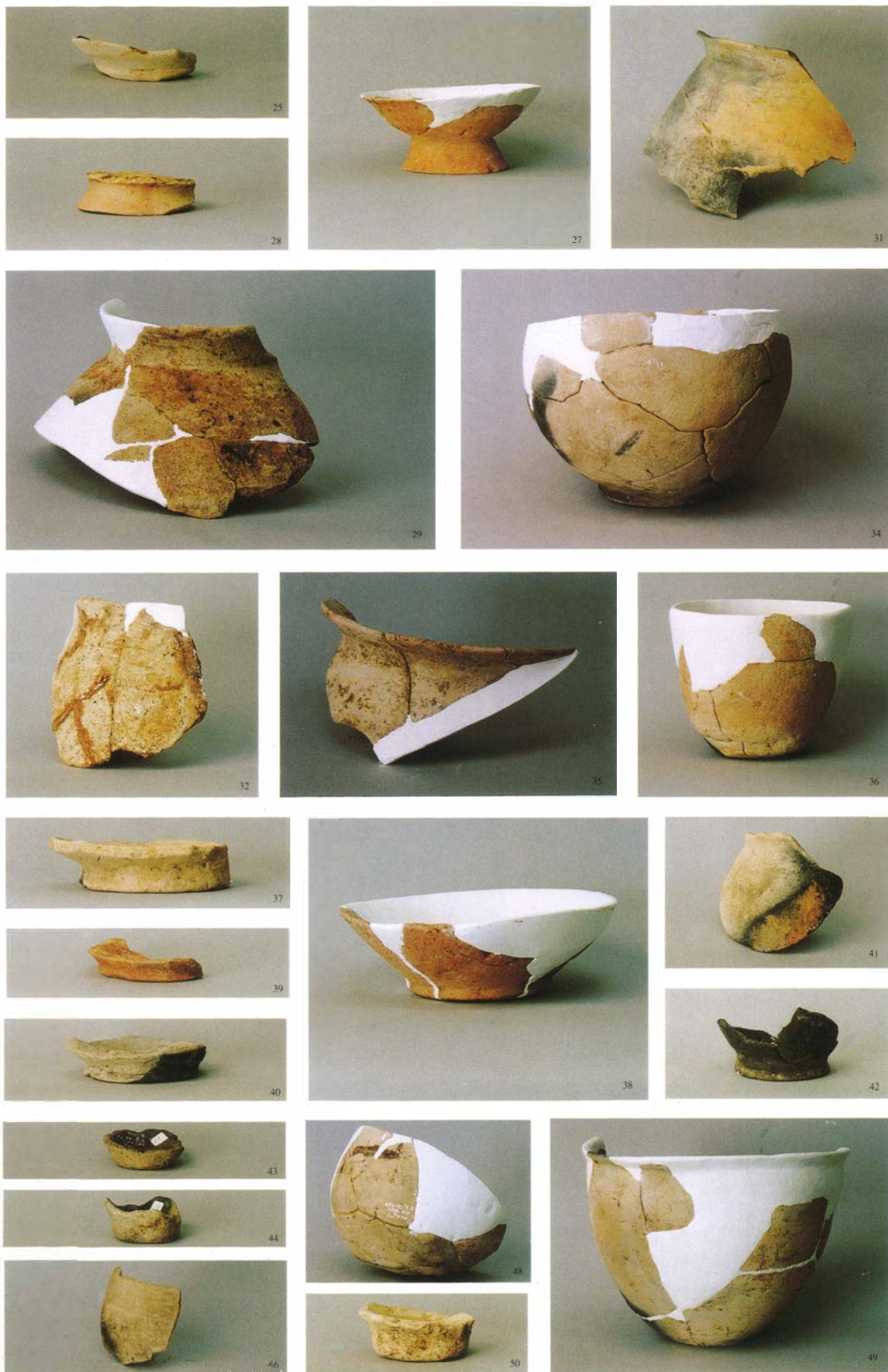


土坑出土遺物

図版13 第3次調査 遺物(3)



遺構外出土遺物(1) 土器・陶磁器類



遺構外出土遺物(2) 土器・陶磁器類

図版15
第3次調査
遺物(5)



遺構外出土遺物(3) 土器・陶磁器類



遺構外出土遺物(4) 土器・陶磁器類、土製品・石製品

図版17 第3次調査 遺物(7)



瓦当面



瓦当裏面



瓦当側面



瓦当面



瓦当裏面



凹面



瓦当面



断面

遺構外出土遺物(5) 瓦類



遺構外出土遺物(4) 瓦類

図版19
第3次調査
遺物(9)



遺構外出土遺物 瓦類

第5章 第5次調査

第1節 調査に至る経過

第5次調査区域は農業用河川武須川の改修予定区域である。東西に長い遺跡範囲の南辺中央にあたるG9グリッド付近に位置する(図67)。現況は水田であり、遺跡の背後に連なる丘陵裾の微高地が沖積低地に移行する境界部分に立地している。遺跡内を通過する市道を挟んだ北

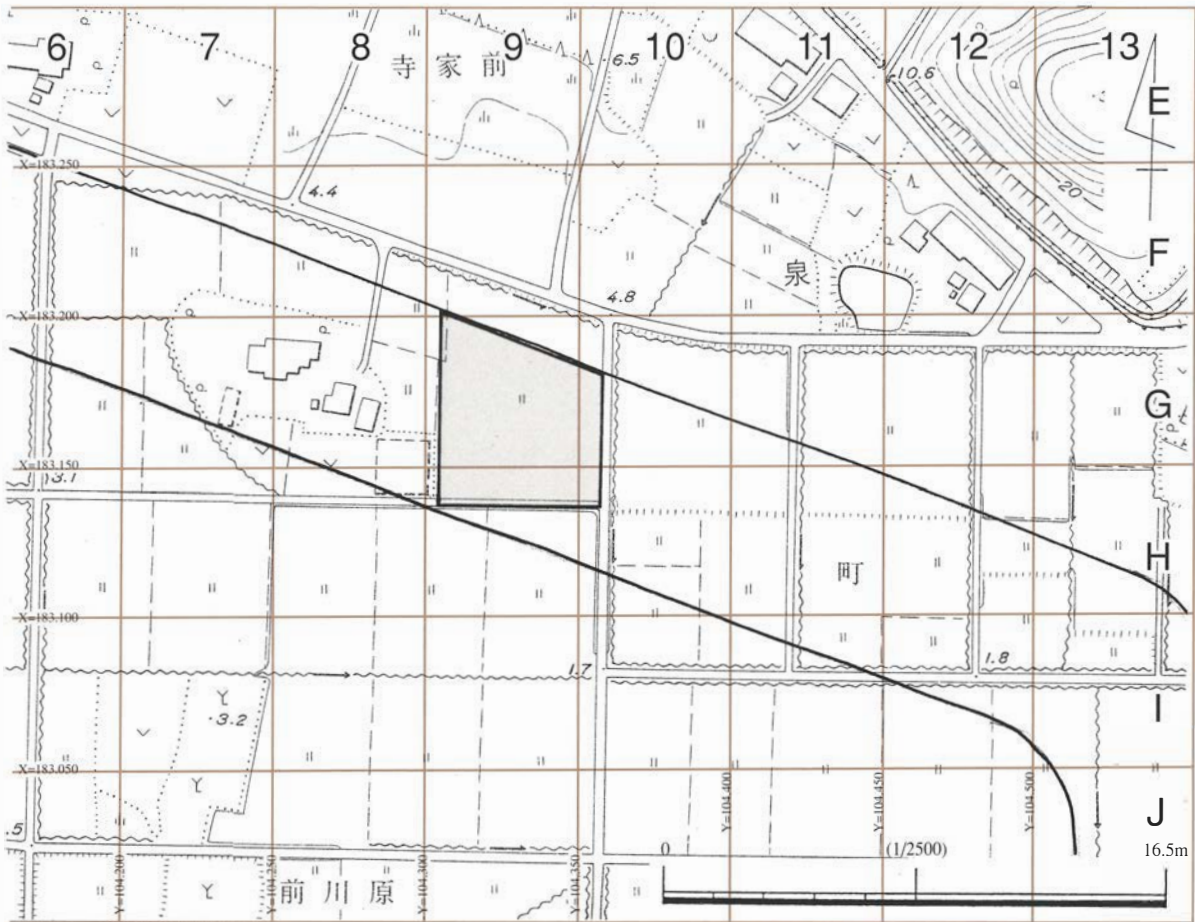


図67 調査区位置図

側には県指定地が広がっている。平成7年度に同区域で実施された遺跡の保存協議を得るための試掘調査（第2次調査）では、一本柱列とこれに連結する掘立柱建物跡による区画が確認されていた。また、この区画の西に隣接する部分では掘立柱の総柱建物跡2棟、側柱建物跡3棟が確認された。この第2次調査で確認された一本柱列とそれに連結する掘立柱建物跡による区画は、官衙の中核である政庁院にあたる可能性が指摘された。この地区の取り扱いについては、上記の調査結果をもって関係機関と保存協議がもたれ、一本柱列による区画と2棟の総柱建物跡が確認された部分については施行計画の変更により、農業用河川の法線を南に移動することで保存されることとなったが、3棟の側柱建物跡が確認された範囲については施工計画上保存は困難と判断されたため、平成8年10月28日から第5次調査として本調査を実施した。

第2節 調査の方法

調査は、調査区内に基準点を設置することから開始した。基準点は泉麿寺跡の遺跡全体に設定されている50m四方の大グリッドを5m四方の小グリッドに細分したものを調査区内に設定した。グリッドのX軸方位は南北方向を示し、アルファベットで標記している。Y軸方位は東西方向を示し、算用数字で記している。大グリッドのA-0の座標値はX=185,500、Y=103,850にあたる。調査区内にはX軸とY軸の交点に木製の基準杭を設置した。これらの杭には座標値・海拔標高を記し、遺構実測図の作成、遺物を取り上げる際の基準としている。

調査は表土を0.7 m³のバックホーで除去し、遺構検出面を確認した。遺構検出面に到達した後の遺構検出作業、遺構精査作業、各種実測図作成はすべて人力で行った。遺構は検出された順に遺構番号を付し、遺構の掘下げを行った。出土した遺物は、基本土層から出土したものは出土地点ならびに出土層位を記録しグリッド単位で取り上げた。遺構から出土した場合は、出土遺構・出土層位を記録したのちに取り上げた。遺物の出土状況によって出土状況図を作成している。

遺構の測量図は平板測量によって作成し、各遺構平面図ならびに土層断面図はS=1/20で作成し、調査区全体図はS=1/100で作成した。

記録写真は35mm判カラーリバーサルフィルム・カラーネガフィルム・モノクロームフィルムで撮影している。

第3節 調査成果

調査の結果、掘立柱建物跡、溝跡、土坑などを検出した（図68）。掘立柱建物跡は第2次調査時に検出されていた3棟のほかに、新たに2棟を検出した。遺物は土師器・須恵器・瓦が1号溝跡から出土した。

第1項 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (図69)

1号掘立柱建物跡は、調査区の北西付近調査グリッドG9-24からG9-35の範囲で検出した掘立柱建物跡である。当掘立柱建物跡の東側には2号掘立柱建物跡が隣接し、西側には1号溝跡が縦走している。他の遺構との直接的な重複関係にはない。建物は桁行3間×梁行3間で、桁行と梁行が同間数の建物跡であるが、南北柱列6.3m×東西柱列4.5mを計測することから、南北棟の側柱建物跡であると考えている。柱穴を検出した時点では、北側柱列・東側柱列・南側柱列でいくつかの柱穴が連結するように検出されたため、布掘り状の掘方の可能性を考慮しながら調査を進めた。ただし、検出段階では柱痕跡や柱の抜き取り痕などを認めることができな

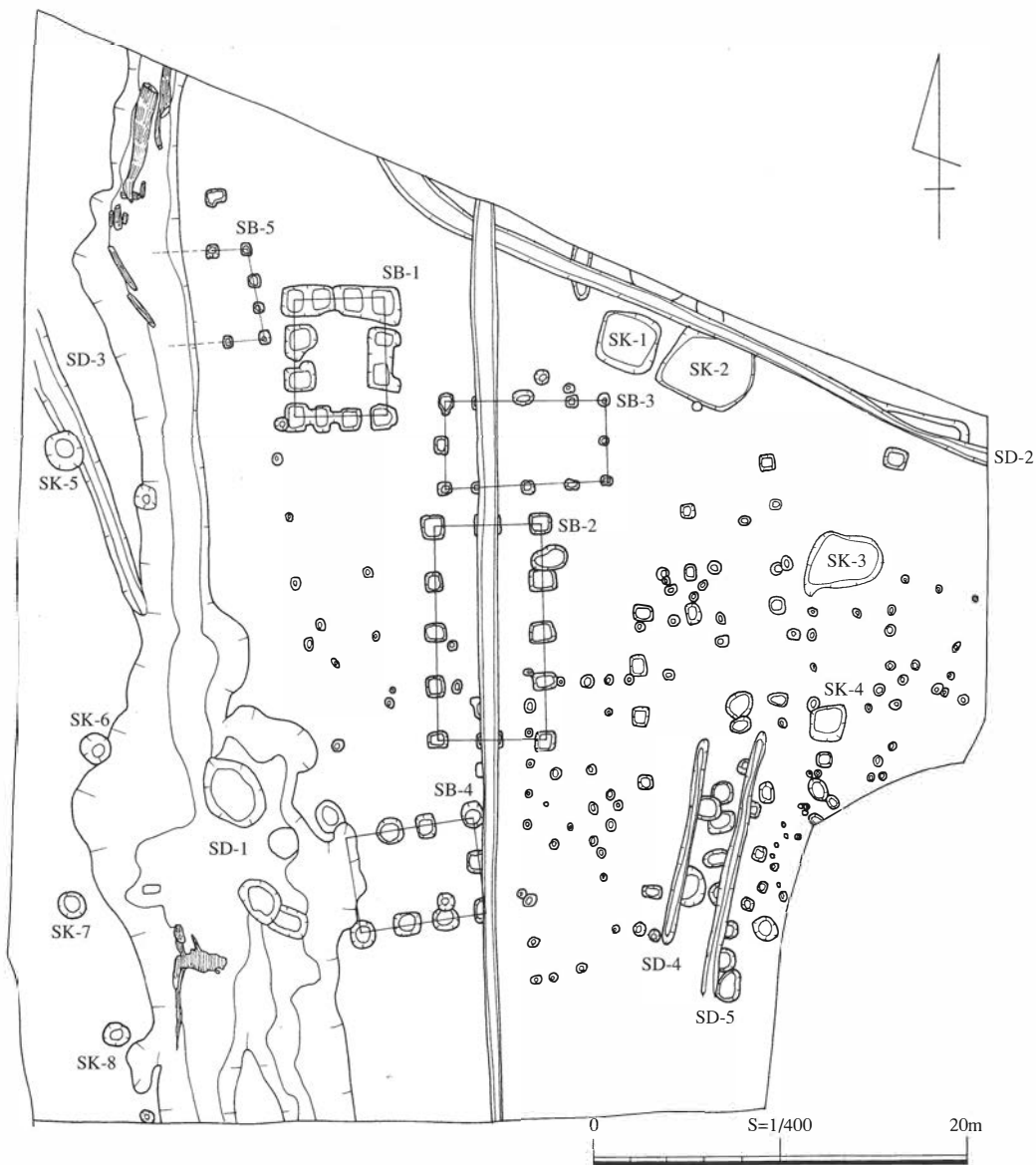


図68 調査区全体図

かかったため、詳細については土層断面の検討に委ねることとした。土層断面は柱穴のほぼ中央を横断するように設定し、柱穴の半截を行い土層断面の検討を行った。検討の結果、柱痕跡と重複するように斜めに掘り込まれた抜き取りの痕跡が確認され、最終的には検出した時点の布掘状に連結して見えた掘方は、柱の抜き取りによるものであると考えている。柱の掘り方は長辺 1.85m×短辺 1.60mの長方形で、深さは 50cm である。

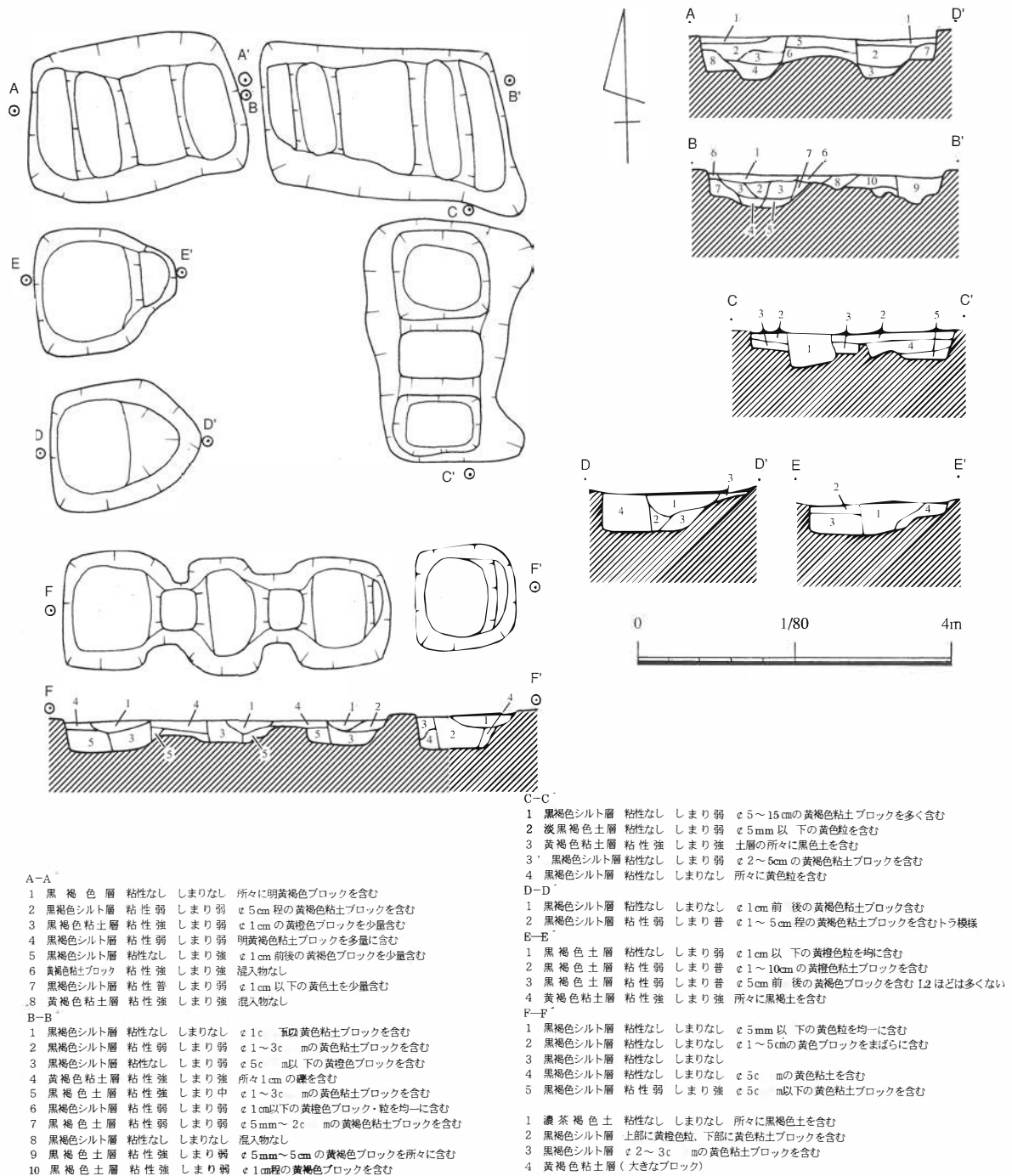


図69 1号掘立柱建物跡

建物規模は、土層断面で観察された柱痕跡から推定すると、桁行東側柱列は7尺等間、梁行南側柱列は5尺等間である。掘方や抜き取り痕からの遺物は出土していない。

2号掘立柱建物跡 (図70)

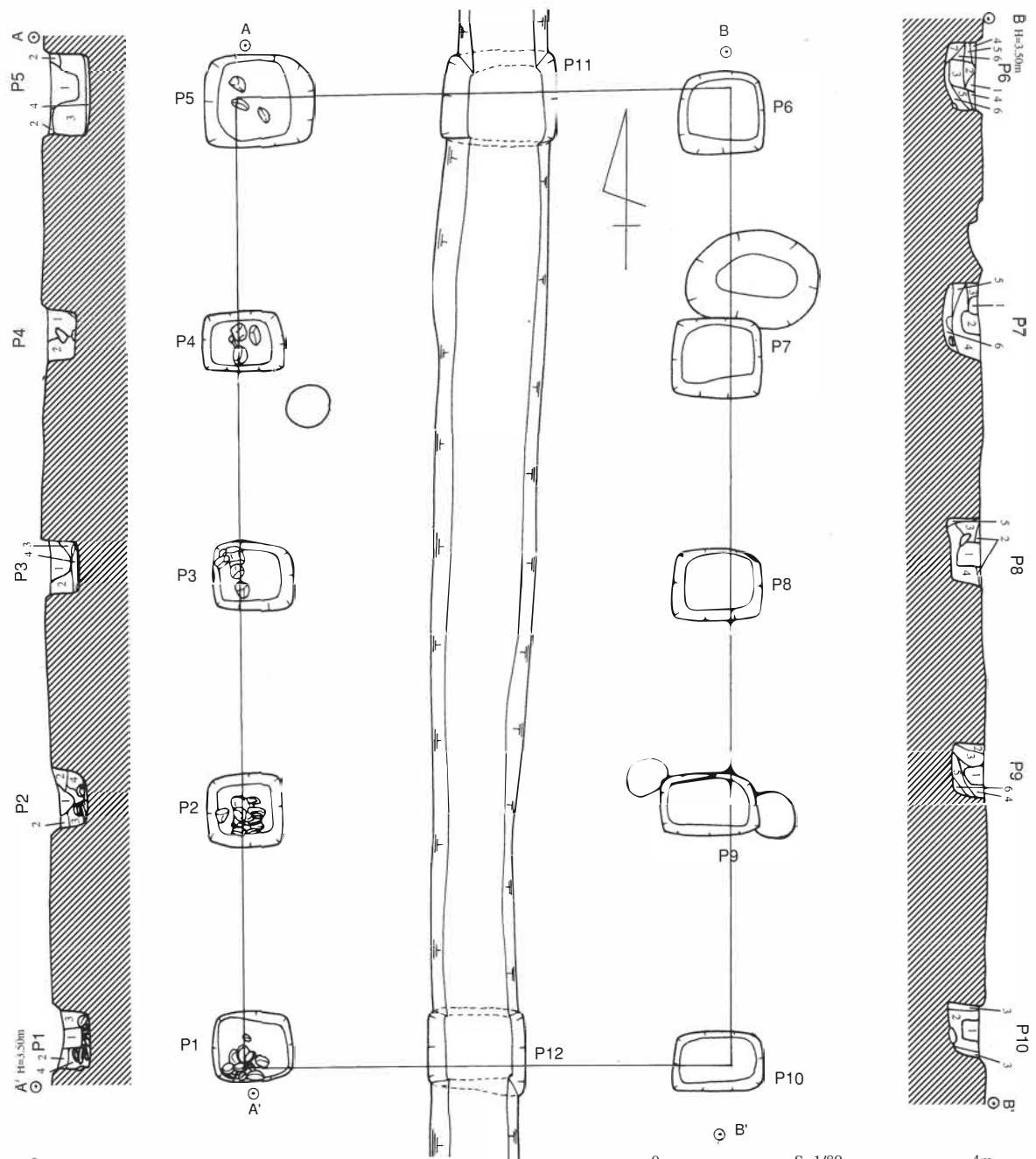
2号掘立柱建物跡は、調査グリッドG9-45 からG9-77 の範囲で検出した掘立柱建物跡である。建物跡の両梁行の中央に位置する柱の掘方は現代の水田耕作にかかる暗渠施設によって壊されており、ほとんど残存していない。当掘立柱建物跡の北側には3号掘立柱建物跡が隣接しており、また南西方向には4号掘立柱建物跡が位置している。建物は主軸方位を真北方位に求めており、桁行4間×梁行2間の側柱建物跡である。桁行西側柱列 11.50m×梁行北側柱列 6.0mを測る。柱痕跡は桁行東側の柱列では明瞭に観察することができたが、桁行西列では柱痕跡の不明瞭な柱穴がある。また桁行東側の柱掘方の底面には、柱痕跡の接地部分に拳大の川原石を礎板のように敷き詰めている。この川原石は桁行西側柱列の南側では量が多く、北側に向かうにつれて少なくなっており、掘方の埋土の下層に位置していることから意図的に詰め込まれたものと考えられる。柱間は桁行東側柱列で3.0m (10尺) 等間である。梁行は中央の柱穴が遺存していないため推定値となるが、梁行北側柱列の西柱と東柱の距離が6m (20尺) を計測することから、1間3.0mの10尺等間であったと考えられる。当建物跡に伴う遺物は出土しなかった。

3号掘立柱建物跡 (図71)

3号掘立柱建物跡は、調査区中央付近、調査グリッドG9-35 からG9-47 で検出した掘立柱建物跡である。当掘立柱建物跡の西側には1号掘立柱建物跡、南側には2号掘立柱建物跡が隣接する。建物跡は桁行4間×梁行2間の東西棟の側柱建物跡である。建物の桁行方位は真東を向く。桁行北側柱列8.2m×梁行東側柱列4.2mを測る。他の遺構との重複関係は認められない。柱の掘方は一辺50cm前後の方形で、検出面から35cmほどで底面を確認している。掘方の堆積土は黒褐色土を主体とした土層に地山ロームの黄褐色土を含む。明瞭な柱痕跡が確認された掘方は少なく、柱痕跡については不明な点が多いが、土層観察の結果直径20cm前後の柱であると想定され、建物の柱間寸法は桁行北側柱列で東から1.6m (5.3尺)・2.5m (8.3尺)・1.6m (8.2尺)・1.6m (5.2尺) であり、梁行東側柱列で2.1m (7尺) 等間であると考えられる。1号掘立柱建物跡や2号掘立柱建物跡と比較すると柱の掘方規模は約1/2程度の規模であり非常に小さい。当建物跡の掘方からは遺物は出土していない。

4号掘立柱建物跡 (図72)

4号掘立柱建物跡は、調査区南西部、調査グリッドG9-84 からG9-96で検出した掘立柱建物跡である。当掘立柱建物跡は調査区中央部を縦断する水田耕作にかかる暗渠によって、梁行東側柱列が壊されている。1号溝跡との重複が確認されており当建物跡が古い。建物跡は桁



- A-A'
- P1 1 黒褐色粘性シルト層 粘性弱 しまり普 所々にc 1cm以下の地山ブロック
 2 黒褐色粘性シルト層 粘性弱 しまり普
 3 褐色粘性土層 粘性強 しまり強 黒褐色土が混入する層
 P2 1 礫層 c 1~3cmの礫と若干の川砂を含む
 2 黒褐色粘性シルト層 粘性弱 しまりなし 所々にc 2cm程の地山ブロックを含む
 3 黒褐色粘性シルト層 粘性弱 しまりなし 全体に地山粒を含む
 4 黒褐色粘性シルト層 粘性強 しまり普 全体にc 1~4cmの地山ブロック
 P3 1 黄色粘土層 粘性強 しまり強 全体に黒色土を含む
 2 黒褐色粘性シルト層 粘性弱 しまり中 所々にc 1~3cmの地山ブロックを含む
 3 黒褐色粘性シルト層 粘性弱 しまり中 所々に地山ブロックと微量の粒子を含む
 4 砂礫層 粘性なし しまりなし 所々にc 1cmの礫を含む
 P4 1 黄褐色粘土層 粘性強 しまり強 まばらに黒色土を含む
 2 黒褐色粘土層 粘性弱 しまり普 全体に黄色地山粒を含む
 P5 1 黒褐色粘土層 粘性強 しまり強 c 1~5cmの地山ブロックを含む
 2 黒褐色粘土層 粘性強 しまり強 地山の粒を若干含む
 3 黄褐色粘土層 粘性強 しまり強 層の所々に黒色土をまばらに含む
 4 砂礫層 粘性なし しまりなし c 1~3cm程の礫と川砂の層
- B-B'
- P6 1 黒褐色シルト層 粘性なし しまりなし
 2 暗茶褐色シルト層 粘性有 しまり中 c 1cm程の地山黄色ブロックを含む
 3 暗茶褐色シルト層 粘性弱 しまり有 c 1mm程の微粒子を含む
 4 黒褐色シルト層 粘性弱 しまり有 c 5mm程の地山ブロックをまばらに含む
 5 黒褐色シルト層 粘性弱 しまり有 c 1~2cm程の地山ブロックを所々に含む
 6 黄褐色粘質シルト層 粘性強 しまり強 所々に黒色土を含む
 7 黒褐色シルト層 粘性なし しまり有
 8 黒褐色シルト層

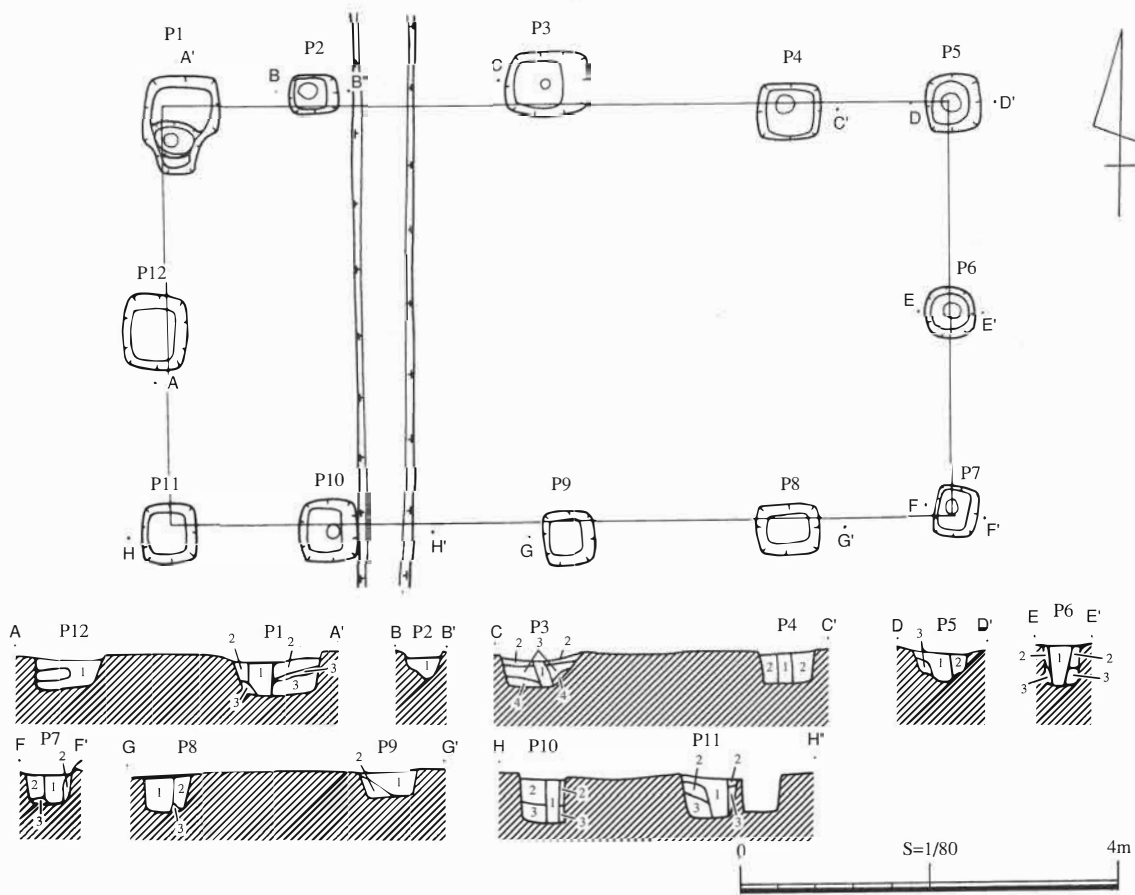
- P7 1 黒褐色粘質シルト層 粘性なし しまりなし
 2 暗茶褐色粘性土層 粘性有 しまり普 土層全体にc 1mm程の地山粒を均一に含む
 3 黒褐色粘性シルト層 粘性なし しまり普 c 1~3cm程の黄色地山ブロックを含む
 4 L3とほぼ同質土層 L3と比較して黒の割合が多い
 5 黄色粘性地山ブロック 粘性強 しまり強 所々に黒褐色土を含む
 6 黒褐色粘質シルト層 所々に地山黄色ブロックを含む
 P8 1 明茶褐色粘土層 粘性強 しまり強
 2 黒褐色粘質シルト層 粘性有 しまり普 所々にc 1cm程の黄色地山ブロックを含む
 3 黒褐色粘質シルト層 粘性強 しまり強 c 5cm程の地山ブロックを含む
 4 黄褐色粘土層 粘性強 しまり強 所々に黒色の帯が見られる
 5 地山黄色土層 (風過骨)
 P9 1 淡黒褐色粘質シルト層 粘性弱 しまり弱
 2 黒褐色粘質シルト層 粘性普 しまり普 c 3~5cm程の地山ブロックを含む
 3 黒褐色粘質シルト層 粘性弱 しまり普 c 1cm以上の地山ブロック、地山粒を含む
 4 黒褐色粘質シルト層 c 1cm以上の黄色地山粒を所々に含む
 5 黒褐色粘質シルト層
 6 黒褐色粘性シルト層
 P10 1 淡黒褐色粘性シルト層 粘性弱 しまり弱 少量のc 1cm地山ブロックを含む
 2 黒褐色粘性シルト層 粘性弱 しまり弱 所々に1cm程の地山ブロックを含む
 3 黒褐色粘性シルト層 粘性弱 しまり弱 c 5cm程の地山ブロックを含む

図70 2号掘立柱建物跡

行3間×梁行2間の側柱建物跡である。建物の推定規模は桁行北側柱列 7.0m×梁行西側柱列 5.2m、柱間寸法は北側柱列で西から 2.3m (7.6尺)・2.2m (7.5尺)・2.5m (8.3尺)、東側柱列で 2.6m (8.6尺) 等間である。柱の掘方は隅丸長方形が多く長辺 1.5m×短辺 1.1m前後である。土層断面では明瞭な柱痕跡を認めることができなかったが、P3やP7では直径 30cmの柱痕跡が観察されている。柱の掘方からは遺物は出土していない。

5号掘立柱建物跡 (図73)

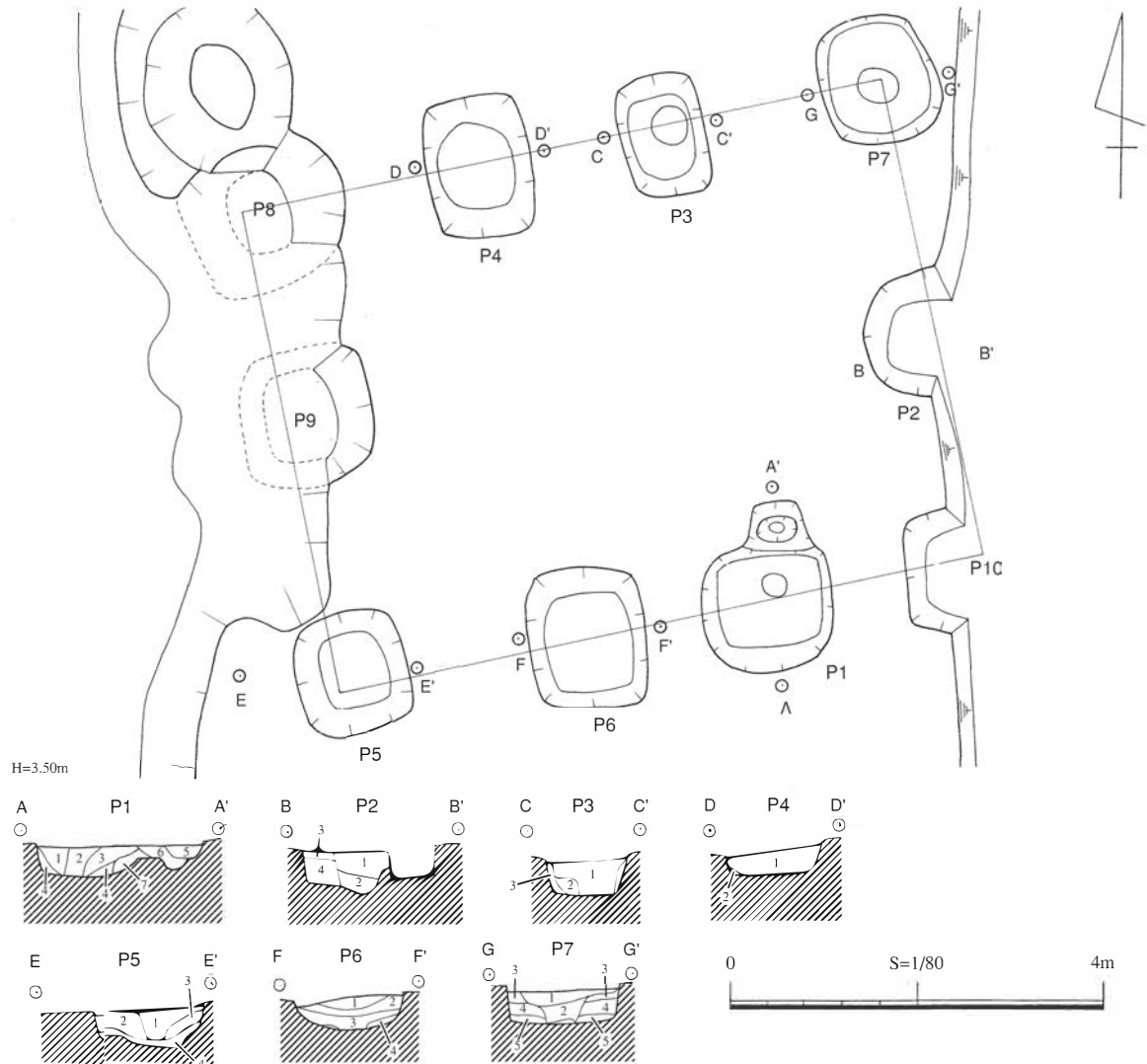
5号掘立柱建物跡は、調査区北西付近、調査グリッドG9-03付近で検出した建物跡である。当建物跡の東側には1号掘立柱建物跡が位置しており、西側には1号溝跡が位置している。西側柱列は1号溝跡との重複により壊されていることから、1号溝跡よりも古いと判断される。確認された柱穴は建物の西側柱列3間分と南北側柱列1間分であり、正確な建物の規模や構造



- P1 1 黒褐色シルト層 粘性なし しまりなし
- 2 黒褐色シルト層 粘性弱 しまり強 所々に黄色ロームブロックを含む
- 3 黄褐色粘土層 粘性強
- P2 1 黒褐色土層 粘性なし しまり弱 橙黄褐色粒を所々に含む
- 2 黄褐色シルト層 粘性なし しまり弱
- 3 1と同じ 黒褐色シルトの割合が少ない
- P3 1 褐色ロームブロック 粘性強 しまり強 所々に黒褐色シルトを含む
- 2 黄褐色シルト層 粘性なし しまり弱
- 3 1と同じ 黒褐色シルトの割合が少ない
- P4 1 黒褐色シルト層 粘性なし しまり弱
- 2 黄褐色粘土層 粘性強 しまり弱 所々に黒褐色層を含む
- 3 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中
- P5 1 黒褐色土層 粘性なし しまり弱
- 2 黒褐色土層 粘性弱 しまり強 黄褐色粘土粒を含む混ざり土
- 3 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 黒褐色土を所々に含む
- P6 1 黒褐色土層 粘性なし しまりなし ε 1cm以下の黄褐色ブロックを含む
- 2 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 同量の黒色土を含む
- P7 1 黒褐色土層 粘性なし しまり弱 所々に褐色土を含む
- 2 黄褐色粘土層 粘性強 しまり強 所々に黒色土を含む
- 3 黄褐色ロームブロック 粘性強 しまり中 所々に黒褐色シルト土を含む
- P8 1 黒褐色シルト層 粘性なし しまり弱
- 2 黒褐色シルト層 粘性なし しまり弱
- 3 黄褐色粘土層 粘性強 しまり強
- P9 1 黒褐色シルト層 粘性なし しまりなし
- 2 黄褐色粘土層 粘性強 しまり強
- 3 黒褐色土層 粘性なし しまり中 ε 1~2cmの黄色土を含む
- P10 1 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黒色土を含む
- 2 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黒色土を含む
- 3 黒褐色土層 粘性なし しまり中 ε 1~2cmの黄色土を含む
- P11 1 黒褐色土層 粘性なし しまり中 所々に黒褐色土を含む
- 2 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黒褐色土を含む
- 3 黄褐色粘土層 粘性強 しまり中 黒褐色土を所々に含む
- P12 1 黒褐色シルト層 粘性なし しまり弱 中央部に黄色ロームブロックを含む

図71 3号掘立柱建物跡

は不明である。柱間寸法は、明瞭な柱痕跡を確認することができない柱穴もあることから判然としなが、柱穴中心で計測すると梁行東側柱列は北から 1.8m (6 尺)・1.5m (5 尺)・1.5m (5 尺) を測り、総長は 4.8m (16 尺) である。桁行北側柱列は西から 1.8m (6 尺) を測る。柱穴は平面形が方形であり、長辺は約 50cm、深さは最も深いもので 30cm を測る。P3・P5・P6 には柱痕跡と思われる土層が確認され、直径は 15 cm である。柱穴からの遺物の出土はない。



- | | | | |
|-----|-----------|------|----------------------------|
| P 1 | 1 黒褐色シルト層 | 粘性なし | しまりなし |
| | 2 黒褐色シルト層 | 粘性なし | しまりなし (若干黄味色) 上層全体に黄褐色粒を含む |
| | 3 黒褐色土層 | 粘性なし | 所々に褐色(柱)ブロックを含む |
| | 4 黒褐色シルト層 | 粘性なし | 上層全体に黄褐色粒を含む (均一で量が多い) |
| | 5 黒褐色シルト層 | 粘性なし | 少量の褐色土粒を含む |
| | 6 黒褐色シルト層 | 粘性なし | 上層全体に黄褐色土粒を含む |
| | 7 黄褐色粘土層 | 粘性強 | 所々に黒褐色土を含む |
| P 2 | 1 黒褐色土層 | 粘性なし | しまりなし e 5mm 以下の黄色粒子を含む |
| | 2 黒褐色土層 | 粘性なし | しまりなし e 1cm 前後の黄色土を含む |
| | 3 黄茶褐色土層 | 粘性小 | しまり強 e 5cm 程の礫を含む |
| | 4 黄褐色土層 | 粘性強 | しまり中 所々に茶褐色土を含む |
| P 3 | 1 黒褐色土層 | 粘性なし | しまりなし e 5mm 以下の黄色土粒を含む |
| | 2 黒褐色土層 | 粘性なし | しまりなし e 1~3cm 程の礫を含む |
| | 3 明褐色粘土層 | 粘性強 | しまり強 |

- | | | | |
|-----|-----------|------------------|------------------------------------|
| P 4 | 1 黒褐色シルト層 | 粘性なし | しまりなし 上層全体に黄褐色地山粘土を含む |
| | 2 黄褐色粘土層 | 粘性強 | しまり強 |
| P 5 | 1 黒褐色土層 | 粘性なし | しまりなし e 5mm 以下の黄褐色粘土を均一に含む |
| | 2 暗茶褐色土層 | 粘性なし | しまりなし e 1mm 程度の粘土粒及び e 3cm 前後の礫を含む |
| | 3 黒褐色土層 | 粘性なし | しまりなし e 5cm 以下の粘土ブロックを含む |
| | 4 黄褐色土層 | e 5cm 程の河原石及び砂の層 | |
| P 6 | 1 黒褐色シルト層 | 粘性なし | しまりなし 黄色粒を均一に含む |
| | 2 黒褐色シルト層 | 粘性なし | しまりなし 所々に黄色粒と 1cm のブロック |
| | 3 黒褐色シルト層 | 粘性なし | しまりなし e 5~10cm の黄色ブロック |
| | 4 黄褐色粘土層 | 粘性強 | しまり強 e 2~5cm の礫を含む |
| P 7 | 1 黒褐色土層 | 粘性なし | しまりなし e 5mm 以下の黄褐色粘土粒を含む |
| | 2 黒褐色土層 | 粘性なし | しまりなし e 2~3cm 程の黄色粘土ブロックを含む |
| | 3 黒褐色土層 | 粘性なし | しまりなし e 5cm 以上の明褐色粘土ブロックを多量に含む |
| | 4 黒褐色土層 | 粘性なし | しまりなし e 1~3cm 程の黄褐色粘土ブロックを含む |
| | 5 明褐色粘土層 | 粘性強 | しまり強 e 1cm 程の河原石を少量含む |

図72 4号掘立柱建物跡

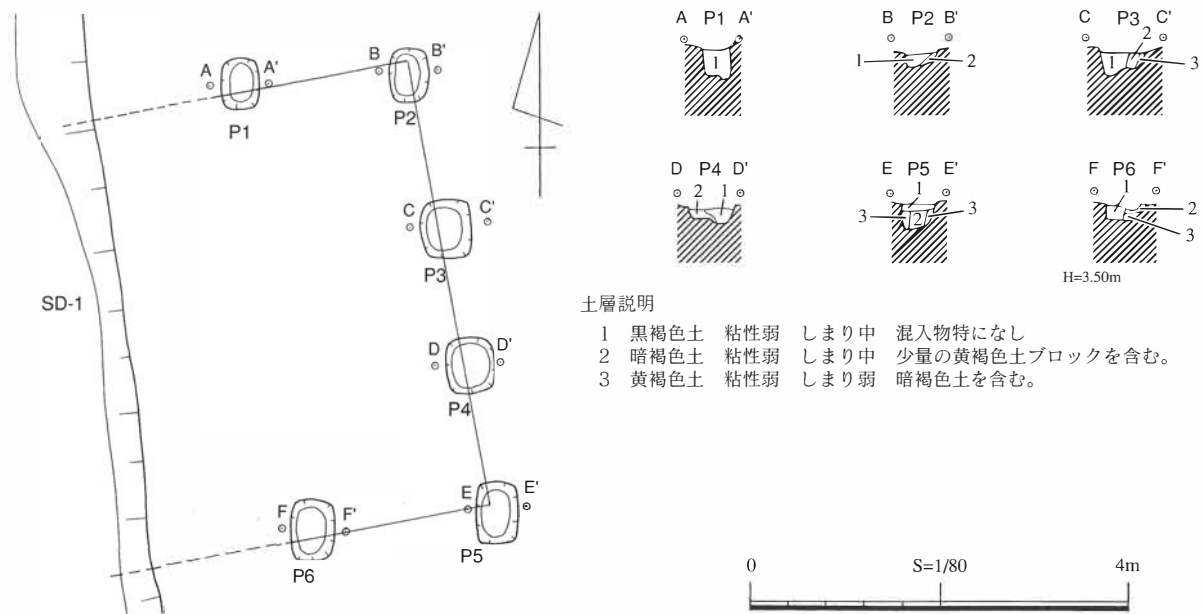


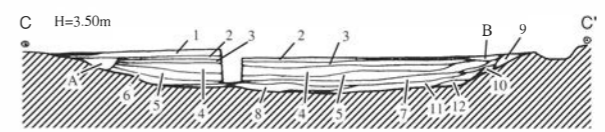
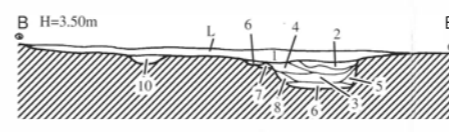
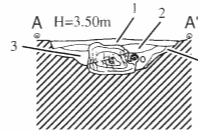
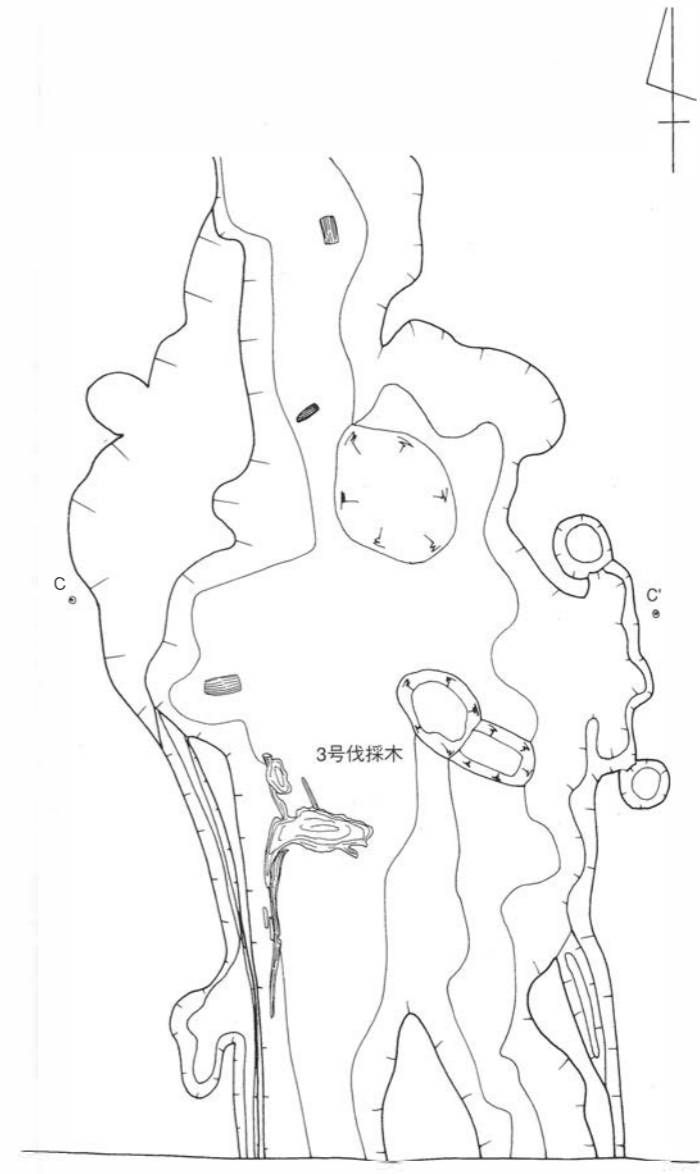
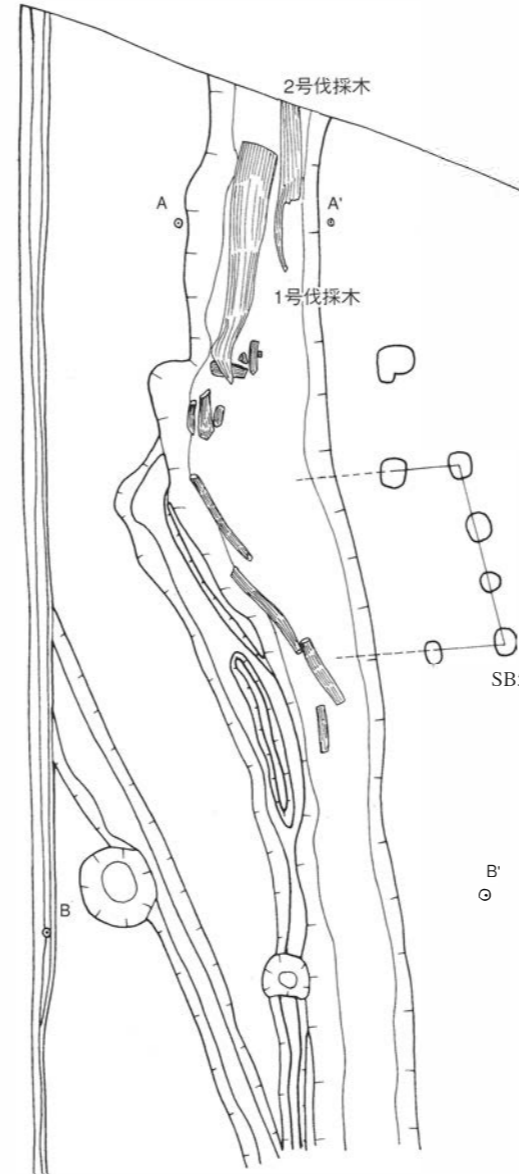
図73 5号掘立柱建物跡

第2項 溝跡

1号溝跡 (図74)

1号溝跡は調査区の西部を南北方向に縦走する溝跡である。溝の北側は調査グリッドG 9-02 からG 9-03 の範囲に位置しており、溝南側はH 9-12 からH 9-14 の範囲で確認し、総延長56mまでを確認した。また4号掘立柱建物跡と重複関係が確認されており、当溝跡が新しいことが確認されている。溝は北側で上幅3m・下幅1.8mを測り、南では上端幅10m・下幅8mである。断面形は北側では逆台形を呈し、比較的整った形状であるが南に向かうにつれて平面形及び断面形は崩れていく。溝の深さは北側で90cm、南側で110cmを測り、南に向かって微妙に傾斜する。溝の堆積層は黒色粘土の自然堆積層である。当溝跡で特筆すべきは、根元に伐採痕が残る伐採木が出土したことである。この伐採木は、北側と南側の2箇所にとまって検出された。北側では調査グリッドG 9-02 からG 9-22 の範囲に位置する。特に1号伐採木は根元の直径が1.1m、長さ6.3mを測る。2号伐採木は推定直径約80mm、長さは約4.5m以上である。南側では調査グリッドG 9-92 からG 9-93 の範囲で検出された。検出された3号伐採木は、木の幹部分が縦に半截された状況で出土し、半截面が上を向いた状況で出土している。

また北側の集中箇所と南側の集中箇所の間にも若干の伐採木が出土している。遺物は土師器、瓦、須恵器片が合計8点出土している。遺物は堆積土中から出土し、溝が埋没する過程で混入したものと判断され、確実に当溝跡にともなう遺物と判断することはできない。



A-A'

- 1 黒褐色土層 粘性中 しまり中 所々に黄褐色粘土ブロックを含む。
- 2 黒褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に黄褐色粘土ブロックを含む。
- 3 灰茶褐色土層 粘性弱 しまり中 混入物は特になし。
- 4 青灰褐色粘土層 粘性強 しまり中 所々に地山黄色粘土を含む。

B-B'

- 1 明黄褐色粘土層 粘性なし しまりなし 混入物特になし
- 2 暗茶褐色土層 粘性なし しまりなし ϕ 5mm以下の黄褐色粒を含む また所々に ϕ 3~5cmの同色ブロックを含む
- 3 黄橙褐色粘土層 粘性普 しまり弱 多少の黒褐色土を含む
- 4 赤黒褐色土層 粘性弱 しまり弱 赤茶褐色(鉄錆分)の帯が混入する また少量の淡黄褐色粘土ブロックを含む
- 5 黒褐色粘土層 粘性強 しまり弱 LAの鉄分が混入する以外は混入物なし
- 6 濃茶褐色シルト層 粘性弱 しまり弱 ϕ 1cm前後の黄褐色土を多少含む
- 7 黒褐色土層 粘性普 しまり弱 ϕ 5cm以上の明黄褐色粘土ブロック(地山崩落?)が現られる
- 8 黒褐色土層 粘性強 しまり弱 土層全体に枝・根などの植物繊維を含む
- 9 青黒褐色粘土層 粘性強 しまり弱 土層全体に地山崩落土と思われる青色粘土を均一に含む。
- 10 灰褐色砂質層 粘性なし しまり弱 ϕ 1mm前後の砂層で 2~10cmの礫を含む

C-C'

- 1 淡黒褐色土層 粘性なし しまり強 所々に赤褐色の鉄分を含む
- 2 黒褐色土層 粘性なし しまりなし 混入物特になし
- 3 淡黒褐色土層 粘性なし しまり強 赤褐色土(鉄分)が層を形成する
- 4 黒褐色土層 粘性なし しまり強 少量の黄色土を所々に含む
- 5 黒褐色粘土層 粘性強 しまり普 ベタベタした粘土層
- 6 茶褐色土層 粘性なし しまりなし ボソボソした土 土層全体に植物の根等の混入が見られる
- 7 黒褐色土層 粘性弱 しまり弱 土層全体に地山ブロックが崩落した青色土を均一に含むため青色が強い
- 8 黒褐色土層 粘性強 しまり弱 土層の所々に ϕ 1~3cmの礫を含む
- 9 黒褐色土層 粘性弱 しまりなし 所々に植物根を含む
- 10 黒褐色土層 粘性なし しまりなし 河砂と河石の層
- 11 黒褐色粘土層 粘性普 しまり弱 所々に黄褐色土を含む
- 12 黒褐色粘土層

図74 1号溝跡

第3項 土坑 (図75)

1号土坑

1号土坑は調査グリッドG9-38で検出された。遺構は2号溝跡との重複が確認されており、当土坑が古いことが確認されている。遺構は長軸4.7m×短軸3.5m以上の不整楕円形で、深さは40mである。溝内の堆積土は黒色土を主とする自然堆積土である。遺物は出土していない。

2号土坑

2号土坑は調査グリッドG9-27からG9-38で検出された。遺構は2号溝跡との重複が確認されており、当土坑が古いことが確認されている。遺構は一辺3.2mの隅丸方形で、深さは60cmである。溝内の堆積土は黒色土を主とする自然堆積土である。遺物は出土していない。

3号土坑

1号土坑は調査グリッドG9-59からG10-50で検出された。他の遺構との重複は確認されていない。遺構は長軸3.9m×短軸2.9mの不整楕円形で、深さは20cmである。溝内の堆積土は黒色土を主体とする自然堆積土である。遺物は出土していない。

4号土坑

4号土坑は調査グリッドG9-88で検出された。遺構は2号溝跡との重複が確認されており、当土坑が新しいことが確認されている。土坑は直径1.75mの円形を呈し、深さは40cmを測る。堆積土は黒色土を主体とする。遺物は出土していない。

5号土坑

5号土坑は調査グリッドG9-98で検出された。遺構は2号溝跡との重複が確認されており、当土坑が新しいことが確認されている。土坑は直径1.4mの正円形を呈し、深さは35cmを測る。堆積土は黒色土を主体とする。遺物は出土していない。

6号土坑

6号土坑は調査グリッドG9-81で検出された。他の遺構との重複はない。土坑は直径1.2mのほぼ正円形で、深さは60mを測る。堆積土は黒色土を主体とし、土坑内部からは火を受けたために赤色に変色した粘土塊が検出されている。遺物は出土していない。

7号土坑

7号土坑は調査グリッドG9-31で検出された。遺構は2号溝跡との重複が確認されており、当土坑が新しいことが確認されている。土坑は直径1.4mのほぼ正円形を呈し、深さは80cmを測る。堆積土は黒色土を主体とする。遺物は出土していない。

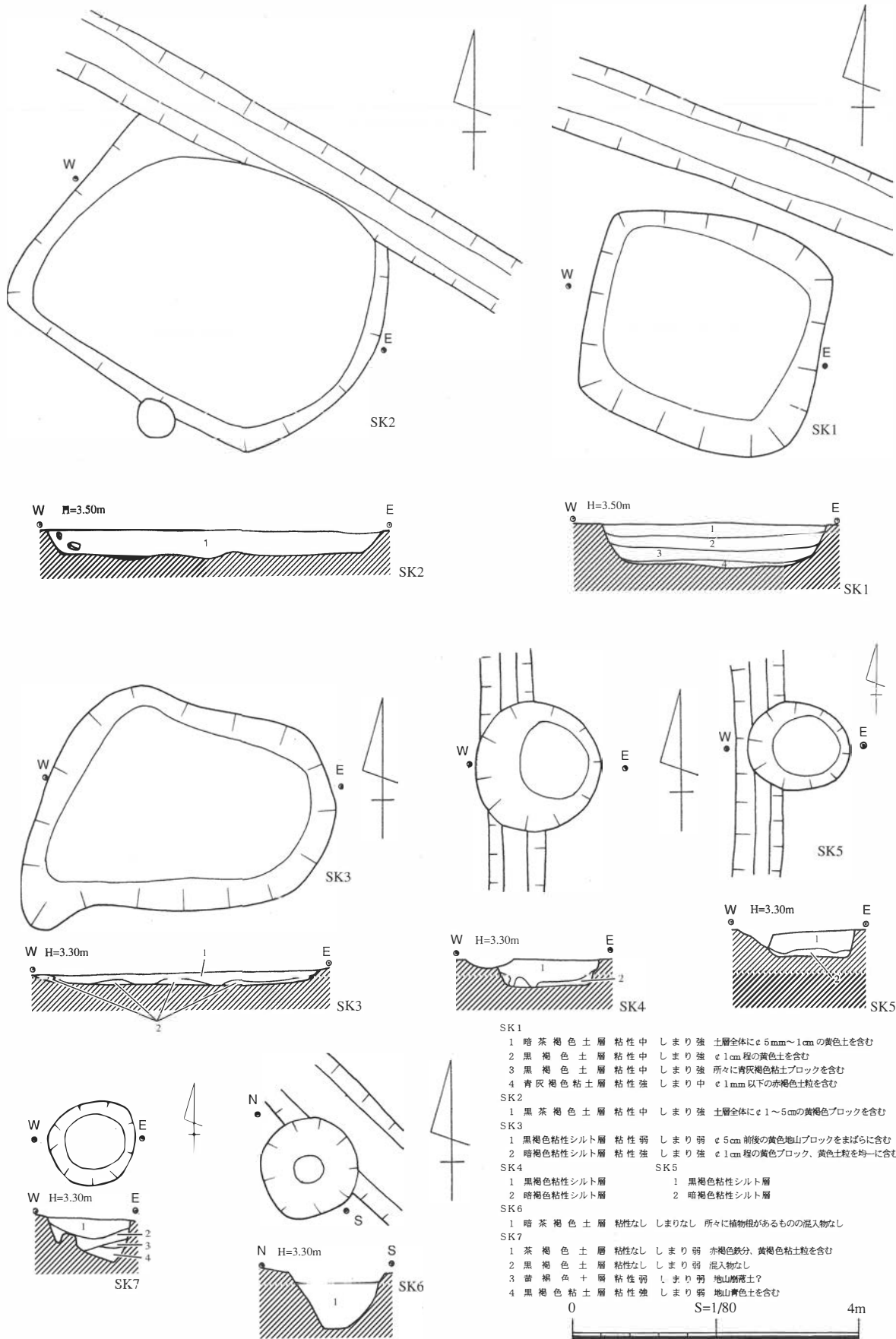


図75 土坑

第5項 出土遺物

第5次調査で出土した遺物のほとんどは1号溝跡からの出土である。出土した遺物は土師器・須恵器・瓦である。

(1) 土師器 (図76-1~3)

1は土師器の高杯脚部資料である。脚裾部並びに杯部は欠損しており不明である。強くハの字に開く裾部と、内面に黒色処理が施される杯部を有し、脚部は太く短い。外面には縦方向の

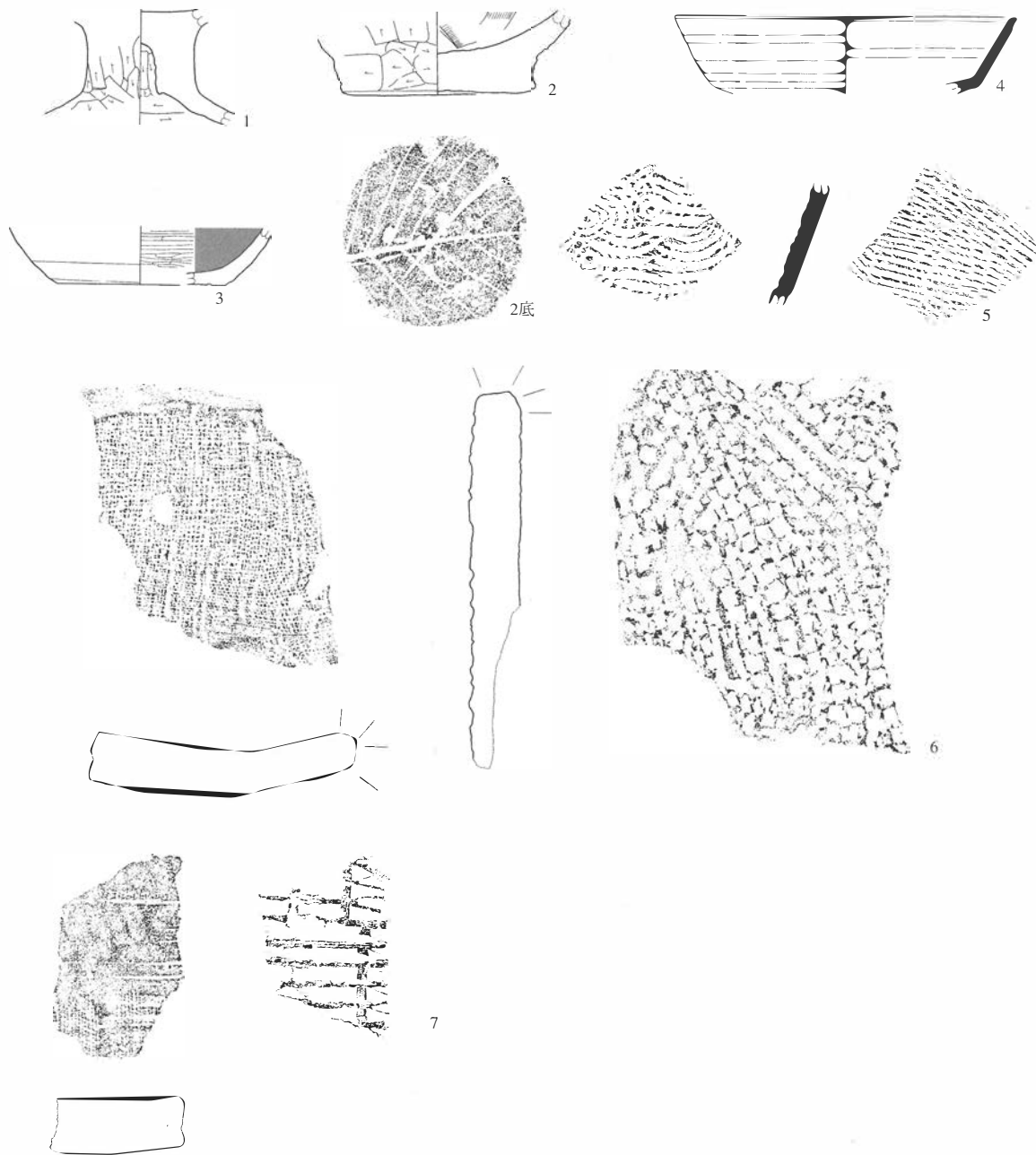


図76 出土遺物

ヘラケズリが施され、内面にはタテ・ナナメ方向のケズリが施される。また裾部内面には横方向のケズリが施される。

2は甕の底部資料である。底面に明瞭な木葉痕が観察される。平坦な底部から一旦垂直気味に立ち上がり、体部に至る。外面にはヘラケズリ、内面にはヘラナデが施される。

3はロクロ整形による杯である。底部には回転ヘラケズリが施され、内面にはミガキと黒色処理が施される。

(2) 須恵器 (図 76-4・5)

4は須恵器の高台付杯と判断した資料である。底部、高台部は欠損しており判断することはできないが底部付近から口縁部に向かう屈曲部が見られる。内外面には明瞭なロクロナデが観察される。

5は碎片のため器種、部位の断定は困難な資料であるが、内面に青海波文の充具痕、外面にタタキ痕が確認されることから、甕の体部資料であると判断した。

(3) 瓦 (図 77-6~8)

6・7は平瓦である。6は凸面に正方形の格子タタキが施されている。タタキは複数の方向から施され複雑に重複している。凹面には明瞭な布目が確認され、側縁部は縦方向のケズリが施されている。7は凸面に格子タタキが施され凹面には布目と縦方向のナデが施される。

8は丸瓦である。凸面には縦方向のケズリが施され、凹面には布目が観察される。側縁部は縦方向のケズリによる調整が施されている。

第4節 まとめ

第5次調査では5棟の掘立柱建物跡と大規模な溝跡が検出された。検出された溝跡は、調査区を南北に縦断しており、最小幅3m、最大幅10m、深さ1mを測る大規模なものである。溝跡の北側には行方郡家の正倉院が位置する寺家前地区が所在し、溝跡は正倉院に向かって延びているものと考えられる。また溝跡の北側に新田川の氾濫によって形成された沖積地が広がっており、最終的には新田川へ至っていたものと推測される。

現在のところ、当溝跡が建物群を区画するような状況には無いこと、溝の平面形が非常に不整形であることから区画施設としての機能を想定するのは難しく、運河のような機能を有していた溝跡と仮定している。特に溝跡からは多くの伐採木が検出されていることは、当溝跡が運河として機能していたと考えた理由のひとつである。

郡家と河川や水運についての研究については、荒木隆氏によって考察がなされている。氏は東北地方南部の郡家や郡家関連遺跡と地域を流れる中小河川、遺跡内で確認された溝の検討を行い、郡家や関連遺跡は陸上交通・水上交通の要所となる中小河川に隣接して造営されていること、遺跡内で検出された溝の中には運河としての機能を有するものがあり、隣接地を流れる中小河川を通じ物資や人の運送に利用されている可能性があることを指摘している(荒木2000)。

郡家または郡家関連遺跡と河川や運河の関係が見られる例は、会津若松市矢玉遺跡や同市上居合遺跡があり、矢玉遺跡では近くを流れる小河川を人工的に掘削加工した船溜状遺構や河川

に隣接する広場を囲む建物群が確認され（萩生田 1993）、建物群が造営されている広場を舟運の荷揚げ場もしくは人の運送までを含んだ船着場として評価されている（荒木 2000）。第5次調査では検出された溝跡の東岸に溝跡と平行する4棟の掘立柱建物跡が確認され、第7章で後述する第7次調査糠塚地区では同溝跡の西側に8棟の掘立柱建物跡が確認されており、1号溝跡を中心に合計16棟の掘立柱建物跡が配置されていることが明らかとなっている。これらの建物群の造営は1号溝跡の存在を強く意識しており、これらの建物群は運河の機能を有する1号溝跡からの物資の搬入搬出に関連するものと考えておきたい。

また1号溝跡の年代については、確実に当溝跡にともなうと考えられる遺物は出土しなかったため不明であると言わざるを得ないが、溝の堆積土中から土師器や瓦などが出土している。出土した土師器はロクロ整形の杯であり底部に回転ヘラケズリが施されていることから、少なくとも東北地方土師器編年の表杉ノ入式期の9世紀前半（戸田・柳沼 1996）には溝は運河として機能していたものと推測される。

このように、当調査区では運河状遺構とこれを中心とした建物群が検出されたことにより、郡家内に配置された施設の中には物資や人員の運送を目的とした施設が存在する可能性を提示できたことは大きな成果であると考えている。（荒）

《参考文献・引用文献》

- 荒木 隆 2000 「陸奥南部の郡衙立地条件と水運」『福島県立博物館紀要』第15号 福島県立博物館
 萩生田和郎 1993 『矢玉遺跡・下吉田遺跡』 会津若松農地事務所・会津若松市教育委員会
 戸田有二・柳沼賢治 1996 「福島県の7世紀の土器」・「福島県の8世紀の土器」
 「福島県の9世紀の土器」『日本土器辞典』雄山閣
 佐藤敏幸ほか 2001 『赤井遺跡Ⅰ 牡鹿柵・郡家推定地』 矢本町教育委員会・宮城県石巻土木事務所
 猪狩忠雄ほか 2000 『根岸遺跡』 いわき市教育委員会
 木本元治ほか 1985 『関和久遺跡』 福島県教育委員会
 藤木 海 2001 「泉廃寺跡（第14次調査）」『原町市内遺跡発掘調査報告書』6 原町市教育委員会
 伊東信雄ほか 1984 『多賀城跡 政庁跡 本文編』 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所
 伊東信雄ほか 1980 『多賀城跡 政庁跡 図録編』 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所

表 21 第5次調査区出土土器観察表

挿 番 号	No.	出土遺構	種 別	器 種	法 量	調 整
					口 径 / 器 高 / 底 径	
76	1	G9-23 SD-2 19	土師器	高杯	—/(5.0)/—	内面：杯底部ミガキ黒色 脚部ケズリ 外面：ケズリ
76	2	G9-23 SD-2 19	土師器	甕	—/(3.6)/7.2	内面：体底部ヘラナデ 外面：体部ケズリ底部木葉痕
76	3	G9-23 SD-2 19	土師器	杯	—/(2.0)/7.3	内面：体底部ミガキ黒色 外面：体部ナデ回転ケズリ
76	4	G9-23 SD-2 19	須恵器	台杯	—/(3.4)/14.8	内面：体底部ロクロナデ 外面：体底部ロクロナデ
76	5	G9-23 SD-2 19	須恵器	甕	長5.7/厚0.8	内面：体部青海波紋文 外面：体部平行タタキ

表 22 第5次調査区出土瓦観察表

挿 番 号	No.	出土遺構	種 別	調 整		重 量	厚 さ	備 考
				凸 面	凹 面			
76	6	S D - 1	平瓦	格子状タタキ	布目・模骨痕	510	2.0	
76	7	S D - 1	平瓦	スタレ状タタキ	布目・模骨痕・ナデ	170	2.4	側辺部に削り



1 第5次調査区全景(上が北)



1 第5次調査区全景



2 1号掘立柱建物跡



3 3号掘立柱建物跡



4 4号掘立柱建物跡



1 1号掘立柱建物跡



2 掘方 (D→D')



3 掘方 (E→E')



4 掘方 (A→A')



5 掘方 (C→C')



6 掘方 (F→F')



7 掘方 (B→B')



8 掘方 (F→F')



1 3号掘立柱建物跡



2 2号掘立柱建物跡



1 掘方断面



2 掘方断面



3 掘方断面



4 掘方断面



5 掘方断面



6 掘方断面



7 掘方断面



8 掘方断面



1 3号掘立柱建物跡



2 掘方 (P4)



3 掘方 (P4)



4 掘方 (P3)



5 掘方 (P5)



6 掘方 (P1)



7 掘方 (P9)



8 掘方 (P2)



1 1号溝跡(北半)



2 1号溝跡(南半)



3 伐採木



4 伐採木



5 伐採木



1 1号溝断面 (西部)



1 1号溝断面 (東部)



3 1号溝断面 (全体)



4 1号溝断面



5 1号溝断面



6 1号溝断面



7 4号土坑断面



8 3号土坑断面



1 高杯 (図76-1)



2 A 甕 (図76-2)



2 B



3 A 杯 (図76-3)



3 B



4 A 高台付杯 (図76-4)



4 B



5 A 甕 (図76-5)



5 B



6 A 瓦 (図76-6)



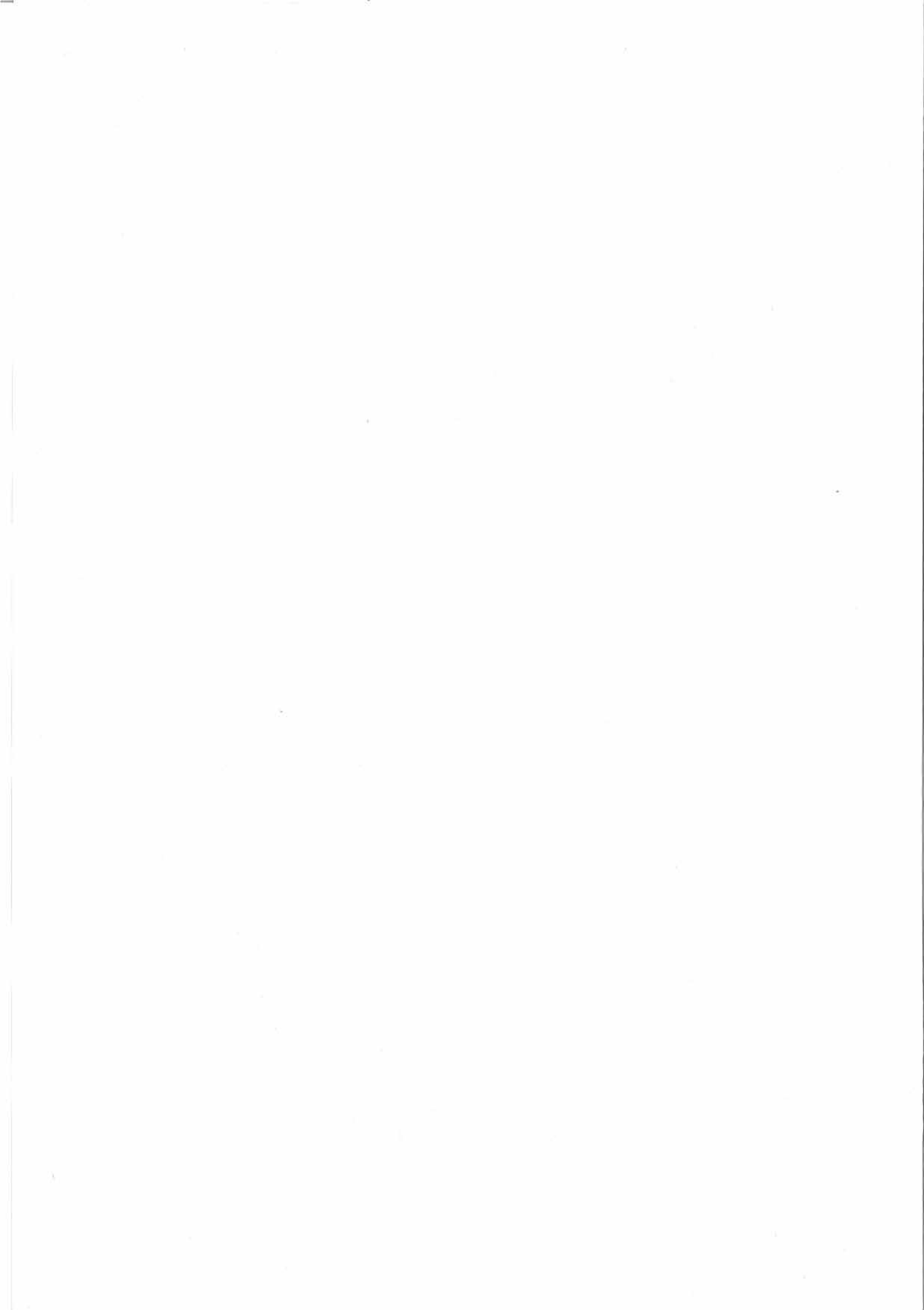
6 B



7 A 瓦 (図76-7)



7 B



第6章 第7次調査

第1節 調査に至る経過

第7次調査は農業用河川武須川の改修予定区域について行なった本調査である(図77)。東西に長い遺跡範囲のうち、中央南辺部分にあたるG9・10グリッド付近に位置する。現況は水田である。平成7年に実施された第2次調査では、一本柱列とこれに連結する掘立柱建物跡による区画が確認され、官衙の政庁院にあたる可能性が指摘されたため、この地区の保存協議が行われた結果、武須川の計画路線を南に移動することで保存が決定されたが、計画変更後の改修予定区域の保存は困難と判断されたことから、本調査が行われることとなった。後の第13・14次調査において、第2次調査で確認された遺構が行方郡家の郡庁院であることが確定するこ



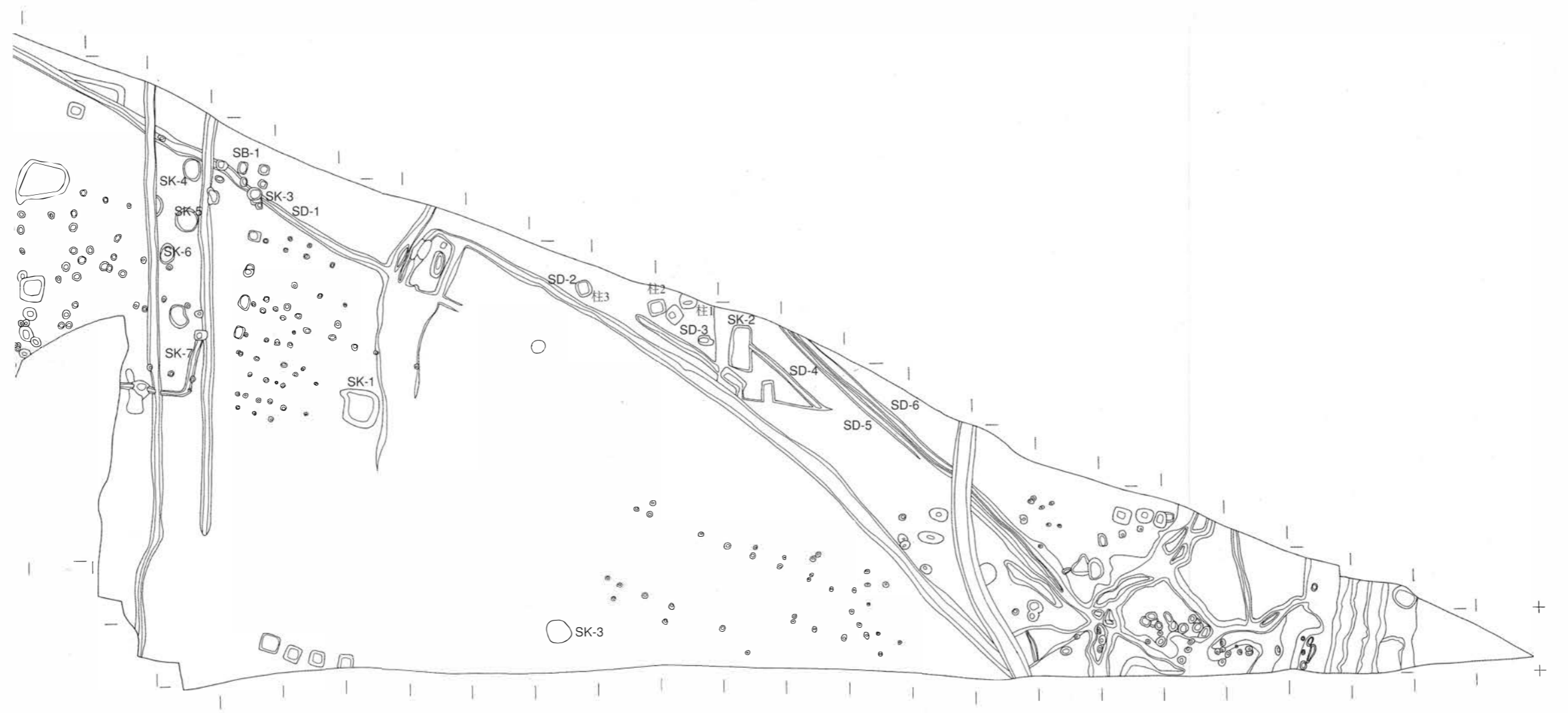


図78 第7次調査区全体図

となるが、第7次調査区は、この郡庁院の南側から南東側に隣接する部分にあたる。また当調査区の西側には第5章において報告した運河状の大溝と、それに伴う掘立柱建物群が確認されている。発掘調査は、平成9年8月から開始した。

第2節 調査の方法

調査は表土・水田耕作土は 0.7m^3 のバックホーで除去し、遺構検出・精査作業は人力で行った。遺構は検出された順に遺構番号を付し遺構の掘り下げを行った。遺物は、検出過程で出土したものはグリッドで取り上げ、遺構から出土したものは遺構番号、層位を記録し取り上げた。遺構図は $S = 1/20$ で作成し、写真は35mm判リバーサル・カラーネガ・モノクロで撮影した。

なお、調査を進めるにあたって、対象区域の一部を廃土置場としたため、この部分については、他の部分での作業が全て終了した後に調査を行なっている。

第3節 調査成果

調査区はA地区とB地区に分けて記載を行う。A地区は調査区の大部分を占める広大な調査区であるが、B地区は第5次調査区域との境に位置しており、最後まで廃土置場として利用したために、一連した調査を行えなかった部分である。

第1項 A地区

(1) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (図79)

1号掘立柱建物跡は調査区北西付近、調査グリッドG10-52からG10-83付近で検出した、桁行5間×梁行2間の南北棟の側柱建物である。建物跡の桁行方位は $N-10^\circ-W$ であり、桁行は総長13.65m、梁行総長は3.3mを測る。柱間寸法は柱痕跡が不明な柱穴が多く、掘方中央で計測すると桁行東側柱列は2.7m(9尺)等間となり、梁行北側柱列は西から1.8m(6尺)+1.5m(5尺)となる。桁行西側の柱穴と梁行南側の中央柱は現代の水路によって壊されており不明である。梁行北側柱列の西第1柱穴と桁行東側柱列の北第2柱穴は第5次調査区域から東に伸びる第1号溝跡との重複が確認されており、当建物跡が古いものと判断される。柱掘方の平面形は方形に近いものと楕円形のものが見られ、長辺90cm、短辺70cm前後のものが多い。柱痕跡は桁行東側柱列で確認され、直径30cm前後であると考えられる。抜取痕や切取痕などは確認されていない。また、桁行の北第1柱と第2柱の間に方形を呈するやや小型の柱穴が3基認められる。この3基の柱穴は確実に当建物に伴うものかは不明であるが、周辺にはこの小柱穴に対応する柱穴は存在しないこと、逆に当建物跡の梁行柱列に対応する柱位置をとっていることから、1号掘立柱建物跡に伴う柱穴である可能性が高いと考えている。その場合、小柱穴は1号掘立柱建物に伴う間仕切りのような施設であると考えられる。

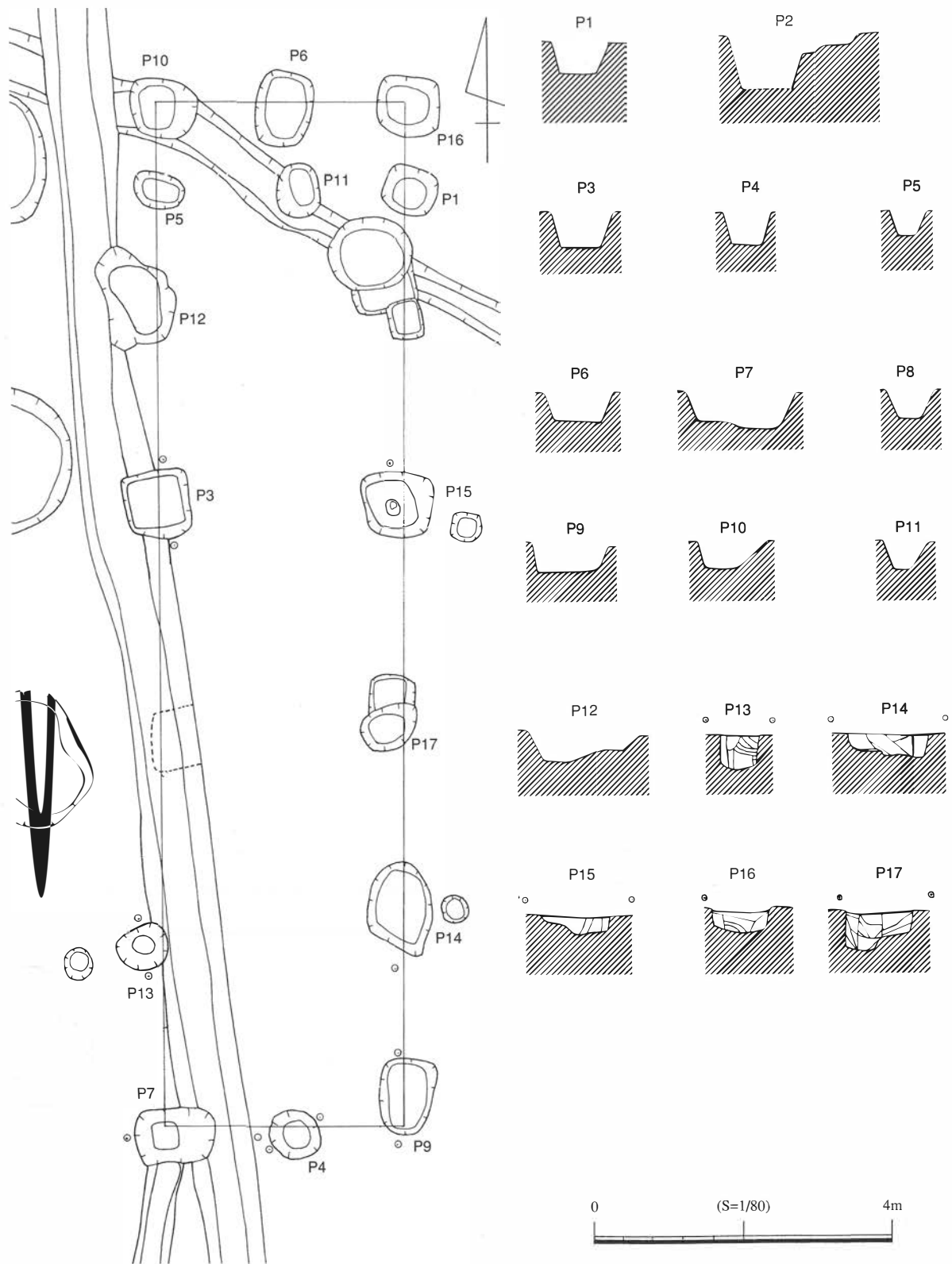


图79 1号掘立柱建物跡

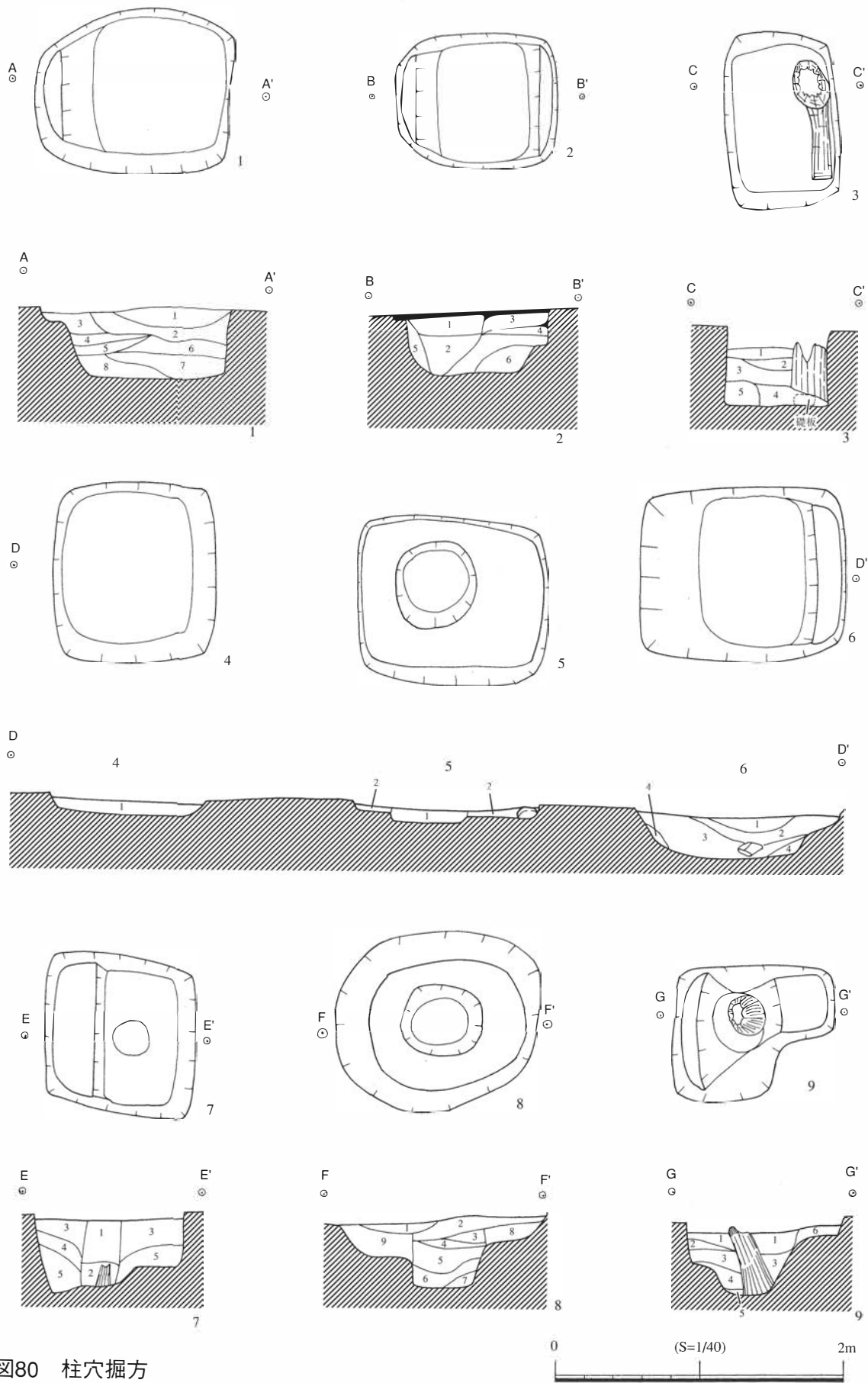


图80 柱穴掘方

2号掘立柱建物跡 (図 80)

2号掘立柱建物跡としたものは、調査グリッドH10-33 からH10-35 で検出した4基の掘方である。この4基の掘方は東西方向に並んで検出され、掘方を結んだ線はN-20° -Wを指す。

図 80 柱穴掘方 土層説明

No.1	No.6
1 1 黒褐色土 粘性強 しまり中 所々に黄色土を含む。	1 1 黒褐色土 粘性強 しまり中 混入物は特になし。
1 2 黄褐色粘土 粘性強 しまり中 所々に黒色土を含む。	1 2 黒褐色土 粘性強 しまり中 青灰色粘土を含む。
1 3 黒褐色粘土 粘性強 しまり中 多量の黄色土を含む。	1 3 黒褐色土 粘性強 しまり弱 混入物は特になし。
1 4 黒褐色土 粘性中 しまり中 少量の黄色土を含む。	1 4 青褐色ブロック
1 5 黒褐色土 粘性中 しまり中 灰褐色砂を含む。	No.7
1 6 黒褐色土 粘性強 しまり中 黄色土を含む。	1 1 黒褐色土 粘性弱 しまり中 砂利層を含む。
1 7 黄褐色土 粘性強 しまり中 少量の黒色土を含む。	1 2 黒褐色土 粘性弱 しまり中 黄色土を含む。
1 8 黒褐色土 粘性中 しまり中 黄色土を含む。	1 3 黒褐色土 粘性弱 しまり中 黄橙色を含む。
No.2	1 4 黒褐色土 粘性弱 しまり中 暗褐色ブロックを含む。
1 1 暗灰褐色土 粘性中 しまり中 多量の黄色土を含む。	1 5 黒褐色土 粘性弱 しまり弱 黄色土を含む。
1 2 暗灰褐色土 粘性強 しまり中 少量の白色粘土を含む。	1 6 黒褐色土 粘性弱 しまり中 暗褐色ブロックを含む
1 3 暗灰褐色土 粘性中 しまり中 黄色土を含む。	No.8
1 4 黄褐色ブロック 粘性強 しまり中 混入物は特になし。	1 1 黒褐色土 粘性中 しまり強 黄色ブロックを含む。
1 5 黒褐色粘土 粘性強 しまり中 青褐色粘土を含む。	1 2 暗褐色土 粘性中 しまり中 黄色土を含む。
1 6 黄褐色土 粘性強 しまり中 黒褐色土を含む。	1 3 黒褐色土 粘性中 しまり中 礫を含む。
No.3	1 4 黄色土 粘性弱 しまり強 礫を含む。
1 1 黒褐色土 粘性中 しまり弱 黄褐色土を含む。	1 5 暗褐色土 粘性中 しまり強 黄色土を含む。
1 2 黒褐色土 粘性中 しまり中 黄色ブロックを含む。	1 6 黒褐色土 粘性強 しまり弱 混入物は特になし。
1 3 黒褐色土 粘性中 しまり中 黄色土を含む。	1 7 黒褐色土 粘性強 しまり弱 青灰色を含む。
1 4 黒褐色土 粘性強 しまり中 黄色土・青灰色を含む。	1 8 黒褐色土 粘性弱 しまり強 黄色土を含む。
1 5 黄褐色土 粘性強 しまり中 黒褐色土を含む。	1 9 黒褐色土 粘性強 しまり中 黄色土を含む。
No.4	No.9
1 1 暗褐色土 粘性強 しまり弱 黄色土・暗褐色土を含む。	1 1 暗褐色土 粘性中 しまり中 黒色土を含む。
No.5	1 2 明褐色土 粘性弱 しまり弱 ブロックを含む。
1 1 黒褐色土 粘性強 しまり弱 混入物は特になし。	1 3 黒褐色土 粘性中 しまり中 明褐色土を含む。
1 2 黄褐色土 粘性弱 しまり中 灰褐色土を含む。	1 4 黒褐色土 粘性中 しまり中 黄色土を含む。
	1 5 黒褐色土 粘性中 しまり中 黄色土を含む。

ただし最も東に位置する掘方は、後世の削平により底面部分をわずかに残しているに過ぎない。明確な方形のプランをもち、等間隔で並ぶことから、これらは掘立柱建物の柱掘方と考えられ、調査区内では、これらの掘方の周辺には他の掘方は存在していないことから、北側柱列にあたる柱穴であると考えられる。2号掘立柱建物跡は大部分が調査区の南側に延びるが、調査区の南側は低い水田となっており、遺構が残存している可能性は極めて低く、建物構造や建物規模は不明である。柱掘方は一辺1.1mで比較的整った方形を呈している。深さは検出面より10～15cmである。柱間寸法は柱痕跡が不明であることから推定となるが、掘方中心で計測して2.2m(7.3尺)等間となり、総長は6.6m(22尺)を測る。柱列の東側から数えて第3柱穴からは木材を粗割した木片が出土している。

(2) 柱列跡

1号柱列 (図80)

1号柱列は調査区北辺のほぼ中央付近で検出した3基の掘方である。調査当時の当柱列は、建物跡や柱列としての積極的な知見は得られなかったことから、土坑として位置付け調査を行ったが、その後の第14・17次調査によって当柱穴は郡庁院3期の区画施設の一部である可能性が強くなったものである。

3基の柱穴は東西方向に並んで検出された。柱列は東西方向を指し、柱穴は東から数えて第1柱穴と第2柱穴の柱間は2.6m(8.6尺)を計測し比較的近接して位置しているが、第2柱穴と第3柱穴の柱間は約6m(20尺)を計測し、柱間が広い。調査では第2柱穴と第3柱穴の間に、別の掘方が存在している可能性を考慮し精査作業を行ったが、ついに掘方を検出することはできなかった。掘方は長辺1m×短辺90cmであり、深さは50cmである。最も西側に位置する掘方からは直径25cmの柱材と礎板が出土している。

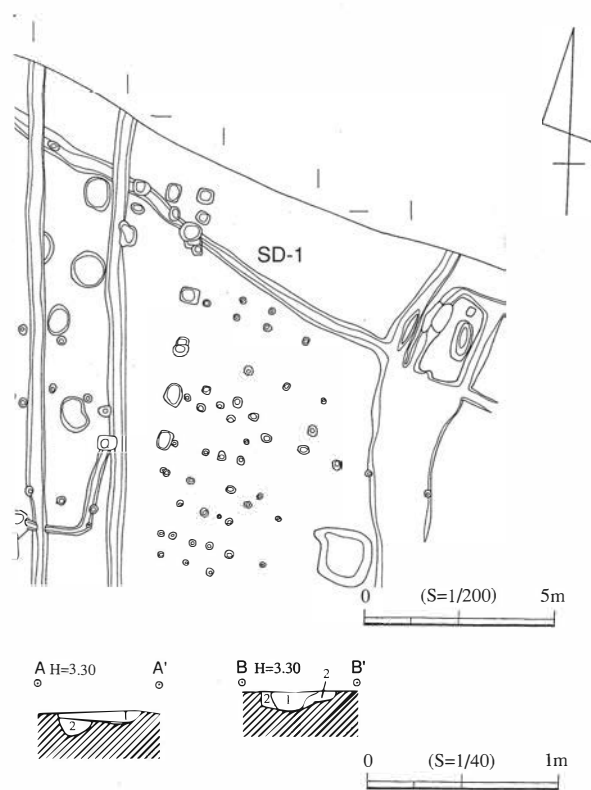


図81 溝跡1

2号柱列 (図80)

3号柱列は調査区北辺の東側で検出した3基の掘方である。この3基の掘方については厳密な意味で掘立柱建物跡であるのか、柱列であるかは不明であるが、現時点では建物跡としての確実な知見は存在しないことから柱列として位置付けておく。柱列は東西方位を指しており、柱間寸法は2.1m(7尺等間)である。掘方は1辺1m×深

さ 50 cm の方形である。最も東に位置する柱穴からは直径 20cm の柱材が出土している。

(4) 溝跡

1号溝跡 (SD 1) 図 81

1号溝跡は第5次調査区から続く溝跡である。溝跡は調査区を斜めに横断しており、幅 80cm × 深さ 20cm を測る。溝の断面形は箱型である。溝跡は1号掘立柱建物跡、3号土坑との重複が確認されており、当溝跡が新しい。溝跡からは遺物は出土していない。

2号溝跡 (SD 2) 図 81

2号溝跡は調査区を斜めに横断する溝跡である。溝跡は幅 1.2m、深さ 40cm を測り、溝の断面は箱型である。他の遺構との重複はなく、遺物は出土していない。

3・4号溝跡 (SD 3・4) 図 81

3号溝跡は調査区中央部を斜めに走る溝であり、2号土坑に至る。2号土坑との重複関係としては当溝跡が新しい。溝跡の上幅は 60cm × 深さ 30cm を測り、溝の断面は浅い皿状である。4号溝跡は3号溝跡と平行して走る溝跡である。幅 40cm × 深さ 35cm を測り、最終的には自然

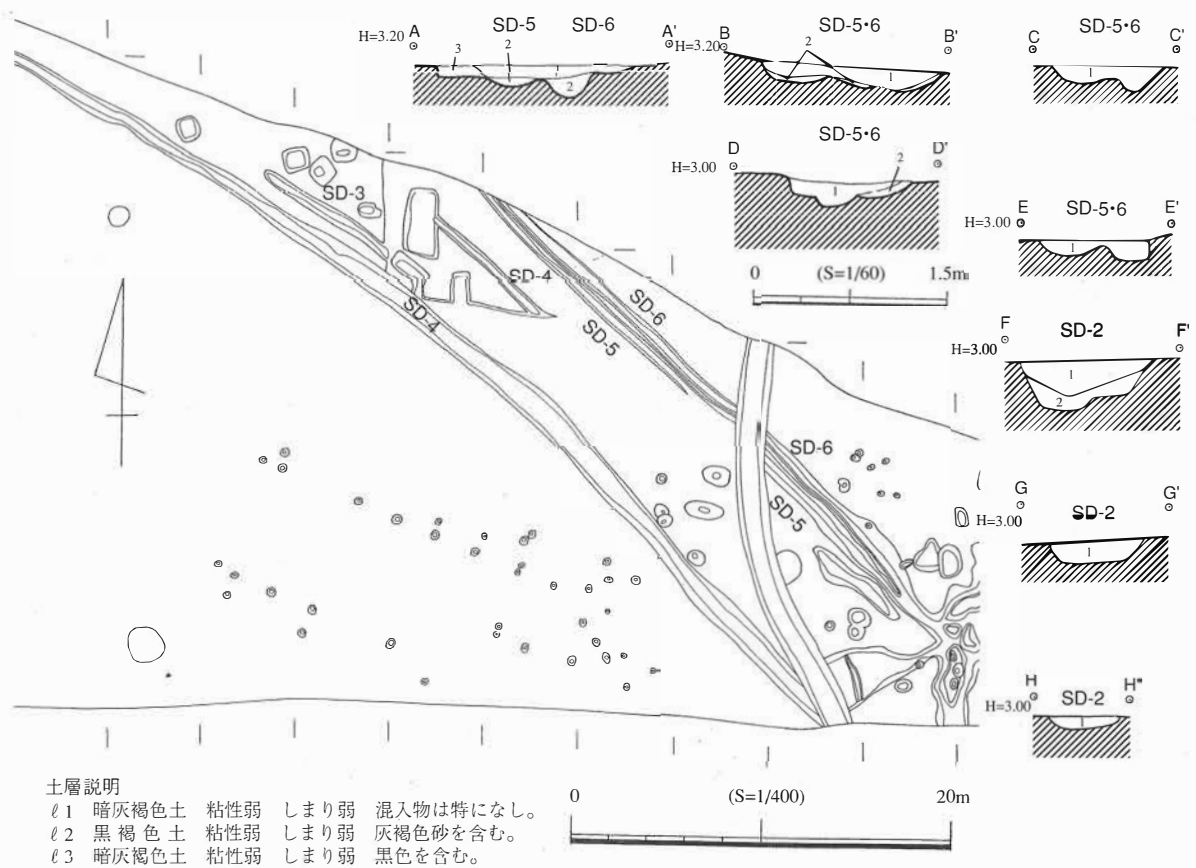


図82 溝跡2

流路へ至る。3号溝跡・4号溝跡の底面には砂層が確認されている。土器類の出土は認められなかったため、当溝跡の年代は不明である。

5・6号溝跡（SD5・6） 図82

5・6号溝跡は調査区中央付近を斜めに走る溝跡である。この2条の溝跡は重複関係にあり、6号溝跡が新しい。したがって5号溝跡の溝幅は不明であるが、6号溝跡の上幅は1.2m、深さ55cmを測り、溝の断面は半円形を呈する。溝からは遺物は出土していない。

（3）土坑

1号土坑（SK1） 図83

1号土坑は調査区中央やや西寄りで見出した方形の土坑である。この土坑は長辺5.7m×短辺5.2mを測る隅丸方形を呈し、北西角に舌状の張り出しが見られる。当土坑の調査については当初住居跡の可能性を考慮して調査をおこなった。遺構内の堆積土は黒褐色土を主体とする自然堆積であり、西側に舌状に突出した部分の底面は検出面より60cmで検出し、更に50cm下で遺構の底面を検出した。遺構には柱穴や壁周溝、カマドなど住居跡であることを示す痕跡や土器類の出土は認められず、最終的には性格不明の土坑として位置付けている。土坑からは木製の椀が1点出土している。

2号土坑（SK2） 図83

2号土坑は調査区北辺中央部付近で見出した南北に長い長方形の土坑である。土坑は南北7.3m×東西3.5m×深さ2.5mを測る。当遺構は4号溝跡と重複しており当土坑が古いことが確認されている。土坑からは遺物は出土していないため、遺構の年代並びに性格は不明である。

3号土坑（SK3） 図83

3号土坑は調査区北西付近で見出した円形の土坑である。当土坑は1号溝跡、1号掘立柱建物跡との重複しており1号溝跡よりは古く、1号掘立柱建物跡よりは新しいことが確認されている。土坑の平面形はほぼ正円形を呈し、遺構の壁面はほぼ垂直に掘り込まれている。

調査は検出面より約2mほど掘り進んだところで、遺構壁面の崩落が始まったため、調査を断念した。調査では遺物は出土しなかったため、遺構の年代並びに性格は不明であるが、井戸跡の可能性が高いと考えている。

4号土坑（SK4） 図83

4号土坑は調査区西辺北側で見出した円形の遺構である。遺構は直径2mを測り、深さは検出面より10cmと浅い。遺構の断面形は浅い皿状である。他の遺構との重複関係にはない。また遺物などは出土しなかったため、遺構の性格、年代は不明である。

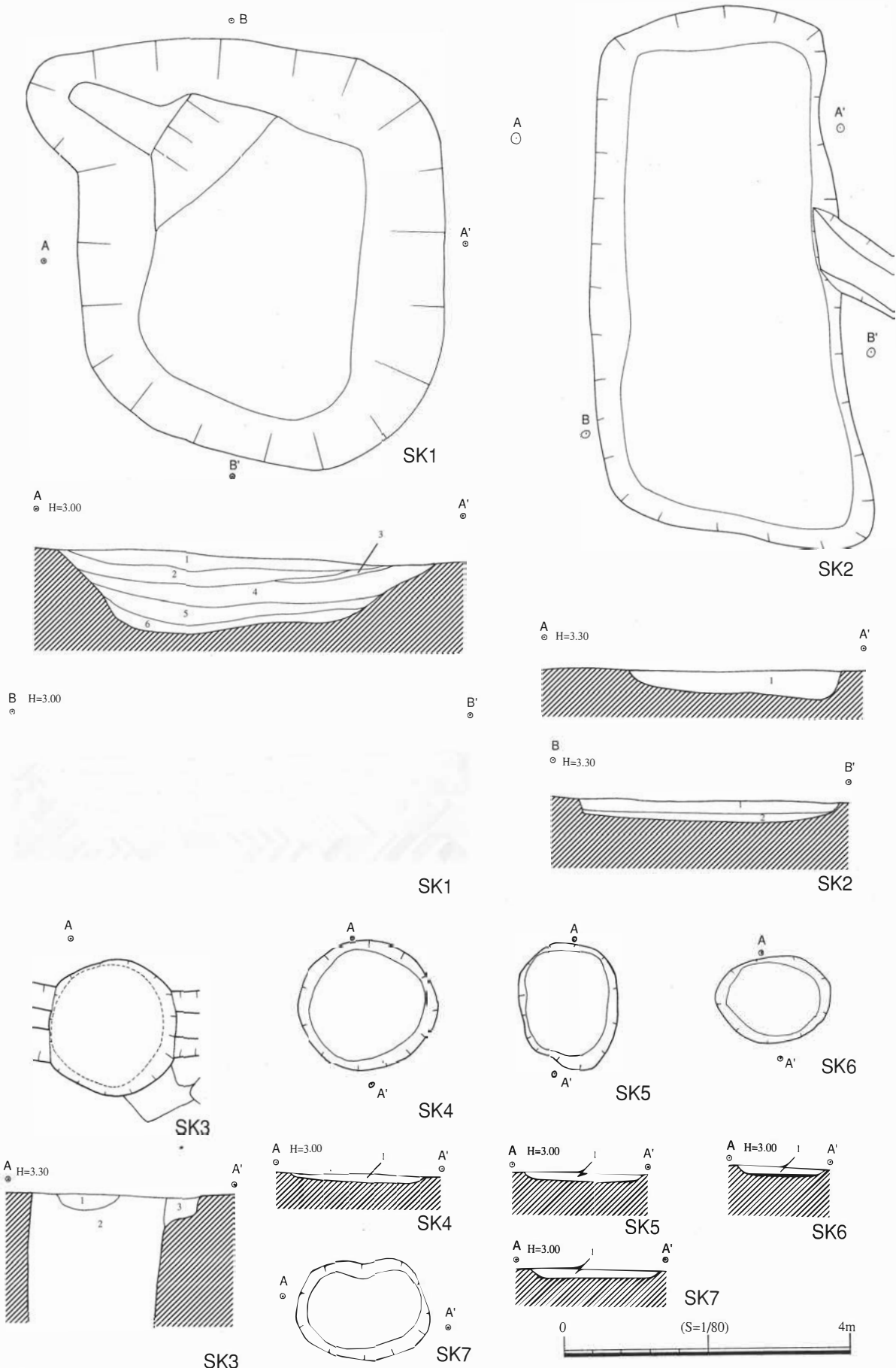


图83 土坑

5号土坑 (SK5) 図83

5号土坑は4号土坑の南側で検出した。他の遺構との重複はみられない。平面形は直径1.4mを測る楕円形であり、深さは検出面より10cmである。当遺構からは遺物などは出土しなかったため、遺構の性格、年代は不明である。

6号土坑 (SK6) 図83

6号土坑は5号土坑の南側で検出した。平面形は長軸1.6mを測る楕円形である。遺構底面は検出面より10cmで検出した。遺構の断面形は浅い皿状を呈する。他の遺構との重複は認められず、また遺物などは出土しなかったため、遺構の性格、年代は不明である。

図83 土坑 土層説明

SK1

- 1 1 灰褐色土 粘性中 しまり中 赤褐色土を含む。
- 1 2 黒褐色土 粘性強 しまり中 混入物は特になし。
- 1 3 明褐色砂 粘性無 しまり無 混入物は特になし。
- 1 4 暗灰褐色土 粘性強 しまり中 砂を含む。
- 1 5 黒褐色土 粘性強 しまり中 混入物は特になし。
- 1 6 黒褐色土 粘性強 しまり中 植物遺存体を含む。
- 1 1 黒褐色土 粘性中 しまり中 赤褐色土を含む。
- 1 2 黒褐色土 粘性強 しまり中 礫を含む。
- 1 3 明褐色砂 粘性無 しまり無 混入物は特になし。
- 1 4 黒褐色土 粘性強 しまり弱 灰白色土を含む。
- 1 5 黒褐色土 粘性強 しまり中 1 4より淡い。
- 1 6 黒褐色土 粘性強 しまり中 1 5より淡い。

SK7

- 1 1 黒褐色土 粘性中 しまり中 赤褐色土を含む。

SK2

- 1 1 黒褐色土 粘性中 しまり中 赤褐色土を含む。

SK3

- 1 1 暗灰褐色土 粘性中 しまり中 混入物は特になし。
- 1 2 黒褐色土 粘性強 しまり中 灰白色土を含む。

以下崩落

- 1 3 暗黄褐色土 粘性中 しまり中 黒色土を含む。

SK4

- 1 1 黒褐色土 粘性中 しまり中 赤褐色土を含む。

SK5

- 1 1 黒褐色土 粘性中 しまり中 赤褐色土を含む。

SK6

- 1 1 黒褐色土 粘性中 しまり中赤褐色土を含む。

- 1 2 黒褐色土 粘性中 しまり中 灰白色土を含む。

第2項 B地区 (図84)

B地区は第5次調査区域と第7次調査区域の境に位置しており、最後まで残土置場として利用していたことから、調査の最終段階まで調査ができなかった部分である。B地区からは柱穴状の土坑やピット群・溝跡など合計74基を検出した。ピットは直径10cm程度の非常に小規模なもので、平面形は円形のものと同方形のものが見られる。深さは検出面から約10cmほどで底面に至る。また遺構内の堆積土は黒褐色を主とする単一土層であり、遺物は出土していない。

溝状遺構は2箇所を検出された。A溝はB地区北側で検出されたL字状の溝である。第7次調査A地区で検出された溝跡と一連のものである可能性が高く、コの字状の溝となる。当溝跡は住居跡の壁周溝の可能性を考慮し検討を行ったが、住居跡として位置付けることはできなかった。B溝は調査区南部を横断するように検出された溝跡である。幅40cm、深さ15cmを測る。堆積土は明褐色を主体としており、他の遺構の堆積土とは大きく異なる。両溝跡からは遺物が出土しなかったため、溝の性格については不明である。

柱穴状の掘方は調査区西部に集中しており、複雑に重複している。平面形は卵形のものと同方形のものがある。掘方は長辺1m前後、単辺70cmのものが多く、検出面から50cm～60cm程で底面を確認した。堆積土は黒褐色土の黄褐色土を混入するものがあり、掘立柱建物跡の柱穴と類似するものが見られる。ただし、明瞭な柱痕跡は認められなかったため、建物跡を構成する柱穴と断定することはできない。

第3項 出土遺物

第7次調査では、土師器・須恵器・瓦・瓦質土器・陶磁器・土製品などが出土した。いずれの遺物も基本土層の表土や水田耕作土からの出土であり、遺構に伴うものはほとんどない。

(1) 土師器 (図85)

土師器は杯・甕・高台付杯・高杯・手捏土器・カワラケが出土している。

1～4は非ロクロ整形による杯である。外面ヘラケズリによって調整され、丸底の底部が見られる。外面の口縁部と底部の境には段が見られる。口縁部はヨコナデによって調整が施され、

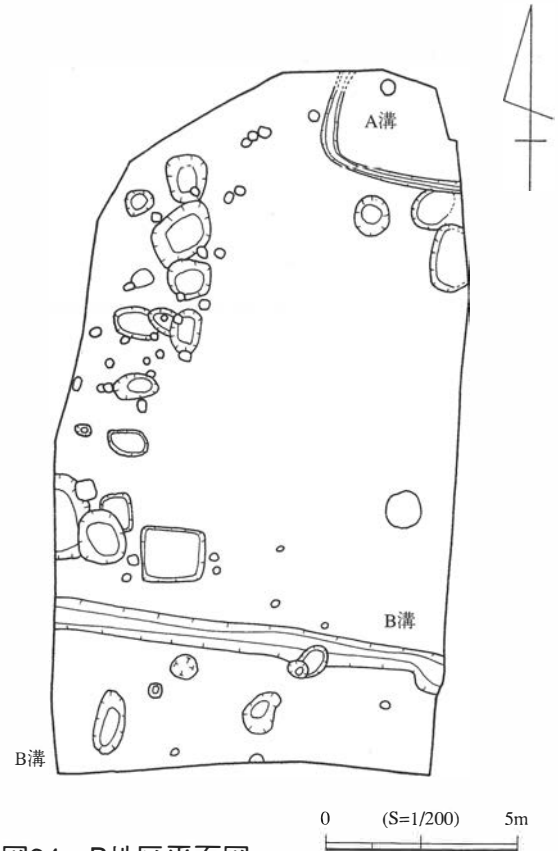


図84 B地区平面図

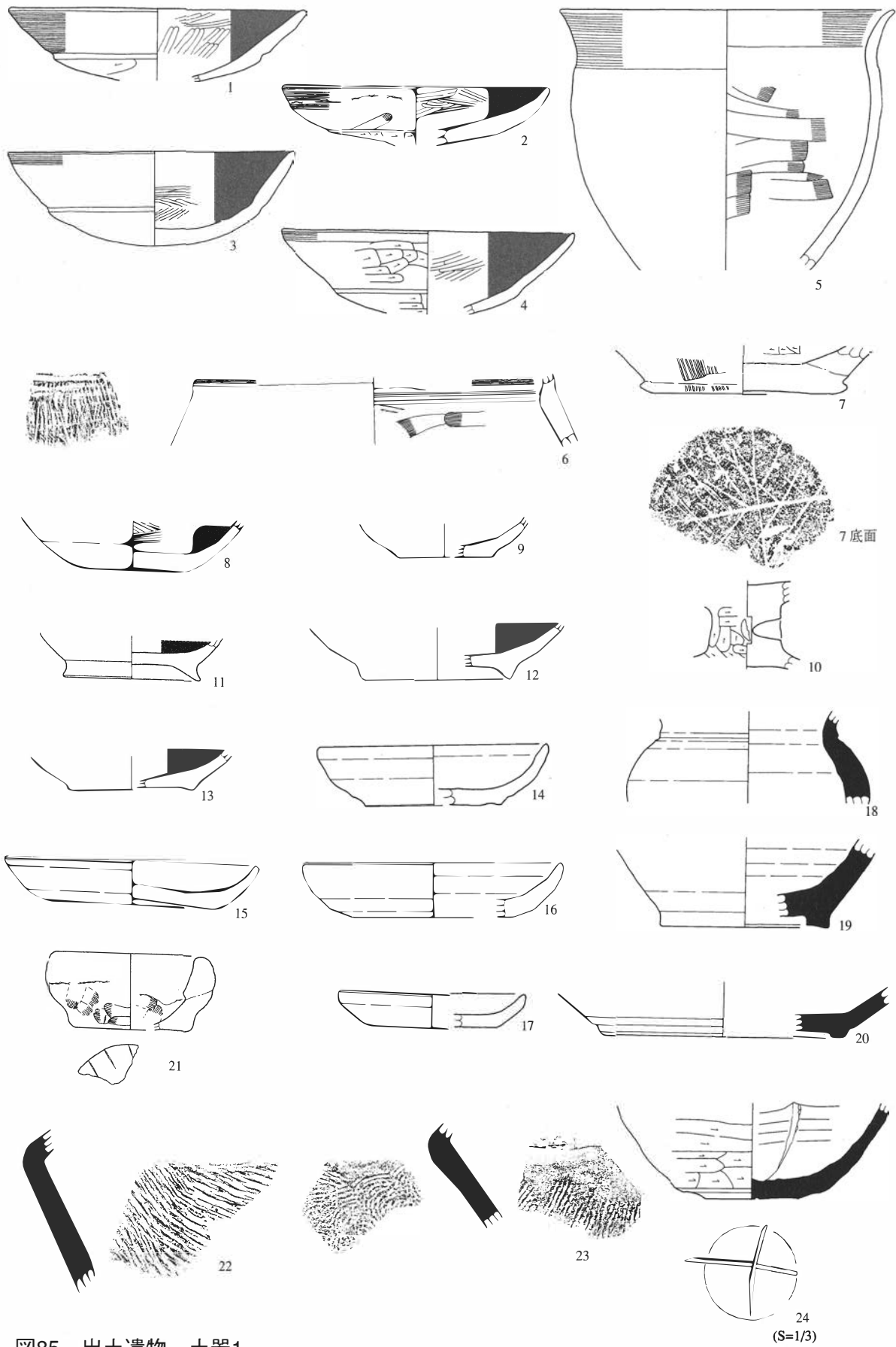


图85 出土遺物 土器1

内面にはミガキと黒色処理が施される。

5から7は甕である。5は比較的小型の甕である。口縁部はヨコナデ、体部内面にはヘラナデが施されている。底部の形状は不明であるが、丸みを帯びた体部に短く外反する口縁部が見られる。6は甕の頸部付近と判断した資料である。口縁部と体部下半の形状は不明である。外面には縦方向のハケ調整が施され、内面にはヘラナデと口縁部と体部の接続部分にはハケ状工具によると思われる横方向の調整が施される。7は底部資料である。体部、口縁部の形状は不明である。底面には明瞭な木葉痕が観察される。外面には縦方向のハケ調整が施され、内面には横方向のヘラケズリが施される。

8・9はロクロ整形の杯である。平底の底部から体部に至り、外面の調整は明瞭ではないが、内面にはミガキ・黒色処理が施される。底部の再調整は見られない。

10は高杯の脚部資料である。柱実の脚部の外面には細かなヘラケズリが施され、外面から断面三日月形のヘラ状工具による刺突が施されているが、脚部を貫通するまでは至っていない。

11・12は高台付杯である。いずれの資料もは断面三角形の高台部に杯部がのるもので、11はやや反る形の高台部である。11は直立に立ち上がる高台部が見られる。13は断面三角形の短い高台がつく。

14から17は赤焼土器と判断した資料である。平底の底部から内椀気味に立ち上り口縁部に至る。内面のミガキや黒色処理は施されず、また底部の再調整は施されない。17はカワラケとした資料である。口径9.7cm、器高1.2cmの小型品であり、明瞭な器面調整は見られない。

21は手捏土器である。器高4cm、口径8cmを測る。不明瞭であるが、外面下部、内面下部にヘラナデと思われる調整が施される。

(2) 須恵器 (図 85)

18~20、22~24は須恵器である。18は壺の肩部資料である。口縁部ならびに体部から底部の形状は不明である。丸みの強い体部から直立気味の口縁部がつくものと思われる。19・20は壺もしくは長頸瓶の底部資料である。両資料とも1cm程度の短い高台が見られ、内外面には明瞭なロクロナデを残す。

22と23は甕の頸部付近の資料である。緩やかに内傾した体部から口縁部に至る屈折部が確認される。22は外面に櫛描状のタタキが施され、23は内面に青海波文のタタキが施される。

24は杯の底部資料である。平底の底部から丸みを帯びた体部が見られる。口縁部の形状は不明である。外面にはヘラケズリが施され、内面にはロクロナデが残る。底面にはヘラ状工具による「十」印の線刻が見られる。

25は円面硯である。円面部は無提式で脚部上端は硯面よりも若干広い。脚裾部ならびに外縁部は欠損している。陸部中央は外縁部よりも高く盛り上がっている。円面部径13.8cm、脚部上端径は、残存高5cmである。脚部外面の2箇所へヘラ状工具による三角形の線刻が見られ、山形文もしくは斜格子文になるとと思われる。

(3) 瓦質土器 (図 86)

27・28は瓦質土器である。27は口縁部付近の資料であり、外面の口縁部直下に上下2列の隆帯がみられ、上段の隆帯の上部には竹管状工具による直径3mmの小さな円文が見られる。上段の隆帯と下段の隆帯間には竹管状工具による大きな円文が施される。竹管状円文は直径1cmを測り、2個が重複するように施され、二個一対の文様構成をとる。28は体部付近の資料である。器面下部の三箇所に刻印が見られる。刻印は不明瞭で判断し難いが、正円のなかに右巻きの三

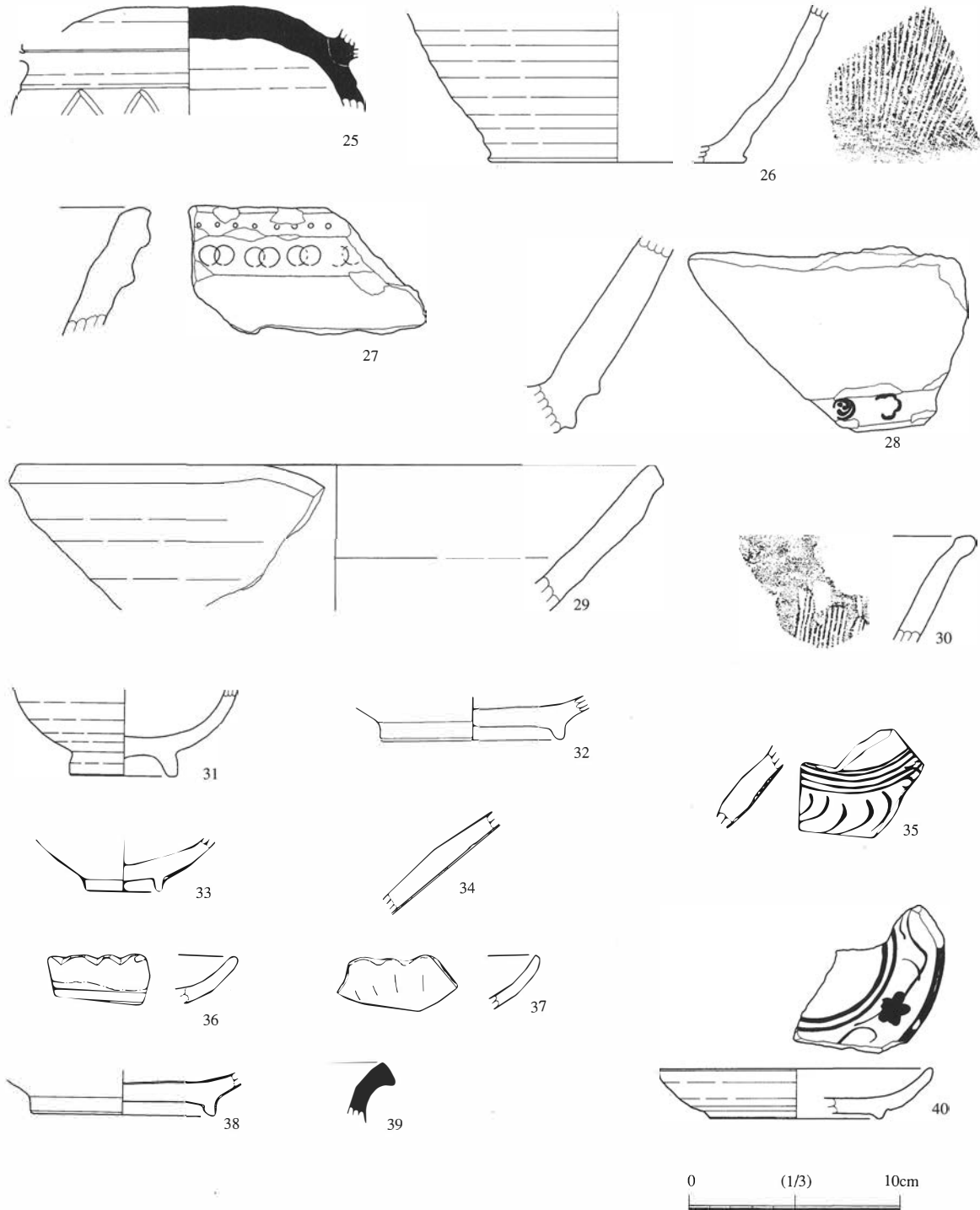


図86 出土遺物 須恵器・瓦質土器・陶器

巴である。上記の両資料は火鉢に代表される火器であり、中世以降の所産であろう。

(4) 陶器 (図 86)

29 は復原口径 29.5cm を測る片口として判断した。底部の形状は不明であるが、直線的に口縁部へ至ると推定され、中世以降の所産である。31・33 は碗である。31 は呉器手の丸碗で浸しかけによる灰釉が見られる。33 には畳付けに砂が付着している。器面には灰釉が見られる。施釉は器面内外面から高台部の内外面の全体に施されていることが特徴である。32・34 は瀬戸・美濃産の皿である。32 は浸しかけによる灰釉が見られ、40 には鉄絵による草花文が描かれている。前者の生産地ならびに年代は不明であるが、後者は 17 世紀前半段階の穴田窯産であると考えられる。38・39 は古瀬戸産と判断した資料である。38 は皿で、底面には不明瞭であるが亀甲印花文が見られる。内面及び外面の一部には緑釉が施されている。39 は瓶子である。外面には緑釉が施されているが内面には至らない。36・37 は瀬戸・美濃産の輪花皿である。口縁部付近の資料であり、全体の器形は不明である。36 は口縁部から約 1 cm の範囲に灰釉が施されており、37 は残存範囲に灰釉が見られる。施釉方法は漬けがけであると思われる。

(6) 瓦 (図 87・88・89)

1 は平瓦である。凸面には簾状のタタキが施されており、凹面には布目及び模骨痕が観察される。側辺部は削りによって面取りが行われている。

2 は平瓦である。凸面には斜格子状のタタキが施されており、凹面には布目及び模骨痕が観察されるが、布目は縦位のナデによってナデ消されている。

3 は平瓦である。凸面には簾状タタキが施されており、凹面はナデが施され、布目は観察することはできない。側辺部が残存しており凸面側で面取りのためケズリが施されている。

4 は平瓦である。凸面に簾状タタキが施されており、凹面には布目と模骨痕が見られ、また布目及び模骨根を消すようにナデが施されている。側辺部にはケズリが行われている。

5 は平瓦である。凸面には斜格子状タタキ、凹面には明瞭な布目が残る。側辺部はケズリが施され、また面取りが行われている。

6 は平瓦である。凸面には斜格子状のタタキが施され、凸面には糸切り痕を残し、また布目が観察される。

7 は平瓦である。ケズリによって面取りが行われている側縁部が残存しており、凸面には斜格子状のタタキが施され、凹面には布目と模骨痕が観察される。

8 は平瓦である。凸面には格子状のタタキが施されており、凹面はナデにより布目や模骨痕は消されている。側辺部は残存しているが面取りのためのケズリは行われていない。

9 は平瓦である。凸面には簾状のタタキが施され、凹面には布目が残る。側縁部は分割の際のケズリの外に面取りのためのケズリが施される。

10 は平瓦である。凸面には格子状のタタキが施されており、凸面には布目や模骨痕を消すようにナデが施される。側縁部は分割の際のケズリの外に面取りのためのケズリが確認される。

11 は平瓦である。凸面には斜格子状のタタキが施され、凹面には布目を消すようにナデが施

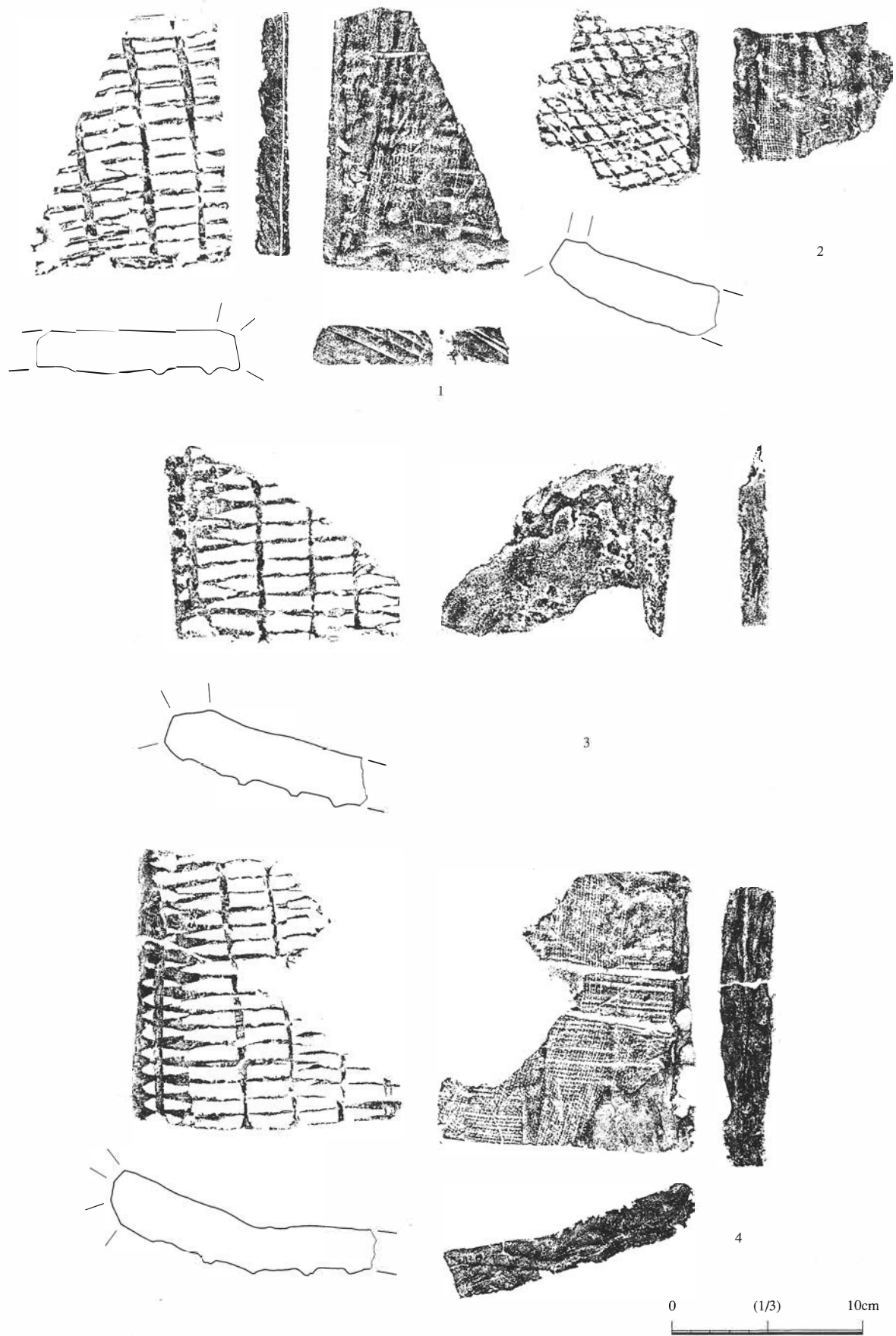


图87 出土遺物瓦 (1)

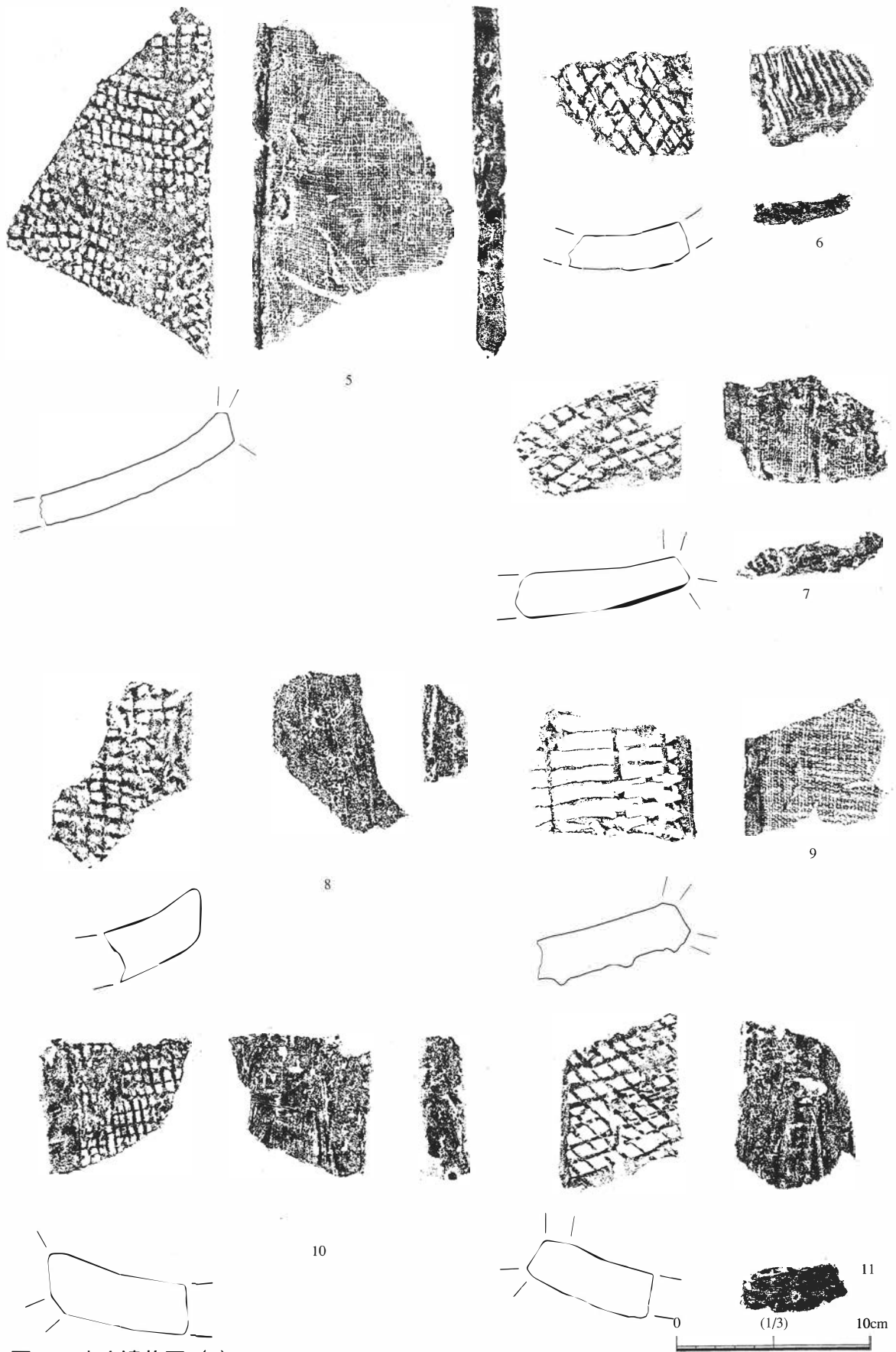


图88 出土遺物瓦 (2)

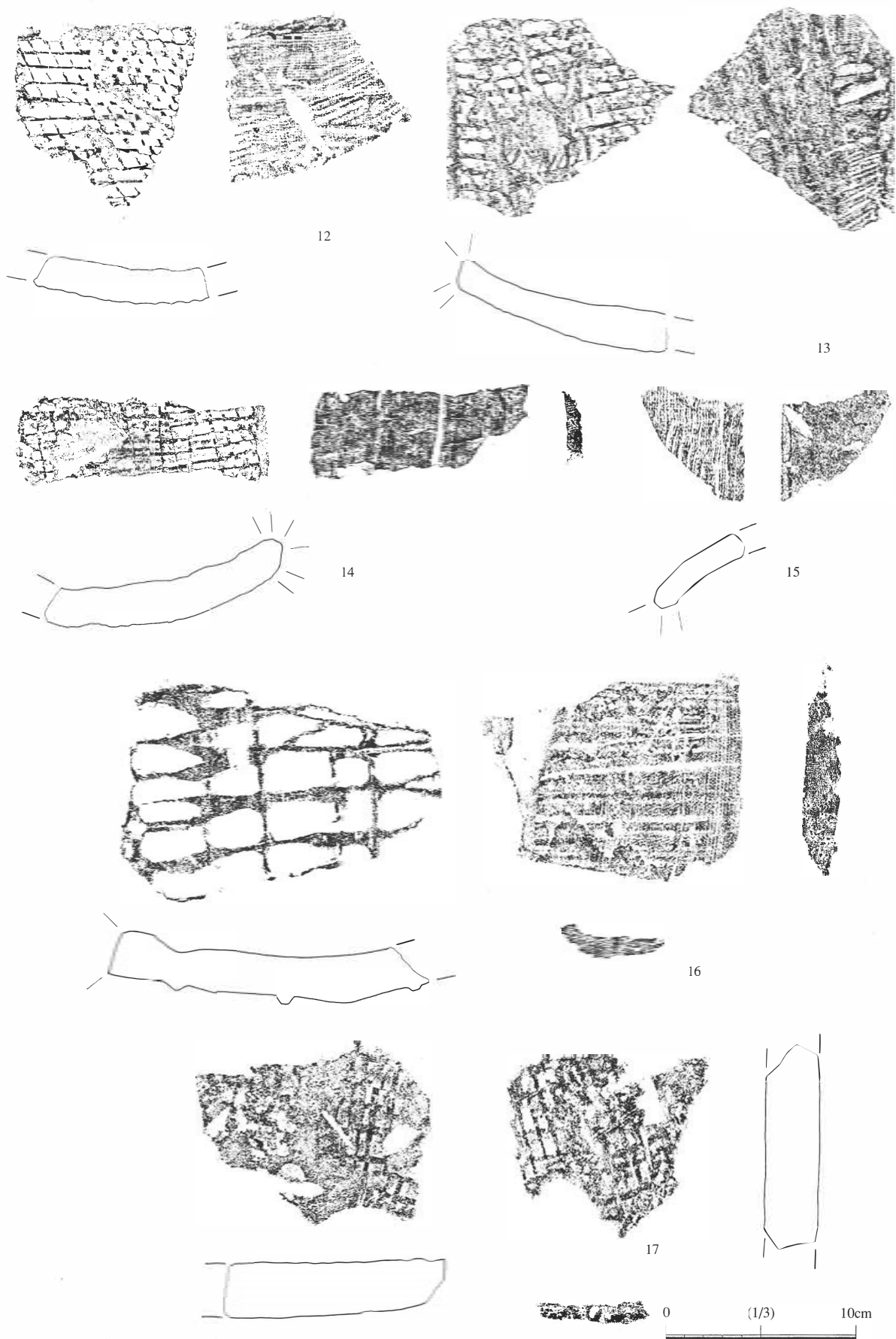


图89 出土遺物瓦 (3)

されている。側縁部は分割の際のケズリの外に面取りのためのケズリが確認できる。

12は平瓦である。凸面には斜格子タタキが施され、凹面には布目と糸切り痕が観察される。

13は平瓦である。凸面には斜格子状のタタキが施され、凹面には布目と糸切り痕を消すように縦位方向のナデが施されている。また側縁部には、面取りのためのケズリが施されている。

14は平瓦である。凸面には格子状のタタキが施されており、凹面は丁寧な縦位方向のナデが施されている。また側縁部は分割の際のケズリの外に面取りが行われている。

15は丸瓦である。凸面は縦位方向のナデによって整えられており、凹面には明瞭な布目が観察される。側縁部は分割の際のケズリの外に面取りが行われている。

16は平瓦である。凸面には雨垂れ状タタキが施されており、凹面には布目と糸切り痕が観察される。側辺部の調整は分割の際のケズリで終了している。また当資料の凸面凹面には多量のススが付着しており二次的な火を受けていると考えられる。

17は埴として判断した。この資料は非常に扁平で表裏両面に格子状のタタキが施されている。

(5) 土製品 (図90)

1は土錘である。外周径7.4cmを測る円柱状で、中央には直径1.3cmの通し穴が見られる。

2は土玉である。直径2.8cmの球形であり、中央には直径7mmの孔が見られる。

(6) 石製品 (図90)

3は滑石製の紡錘車である。上面径2.8cm、底面径4cm、高さ2.1cmを測る。4は不明石製品である。上面径2.5cm、底面径4.8cm、高さ3.1cmを測る。断面形は崩れた台形を呈し、上面には穿孔跡が見られる。紡錘車の未製品であるかもしれない。

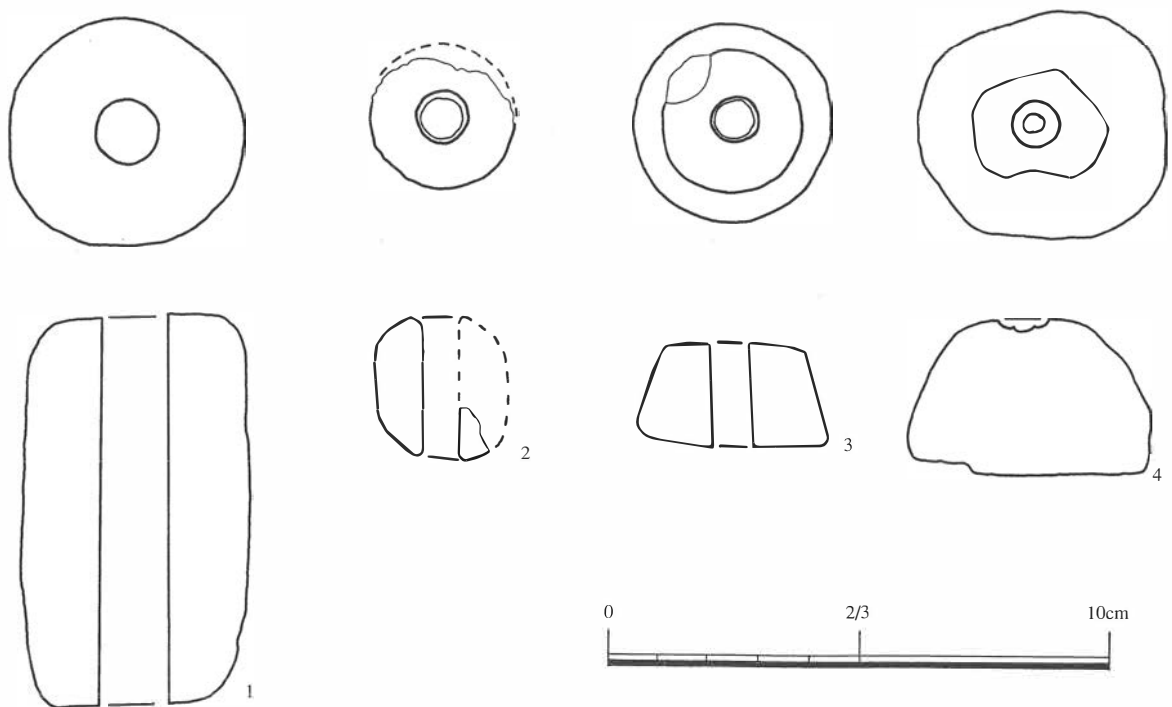


図90 土製品 (1・2) ・石製品 (3・4)

第4節 まとめ

第7次調査を行った時点では調査区域周辺の様相についてはほとんど不明であり、検出された遺構について詳細な評価はできない状況にあった。しかし平成11年から3ヵ年をかけて実施された第13・14・17次調査で、当調査区域の北側には郡庁院が位置していることが確認され、当調査区域の検討が可能な状況が整い始めた。ここでは、第7次調査以後に実施された周辺地区の調査成果を踏まえて、当調査をまとめる。

まず、当調査区域の評価には、北側で発見された郡庁院の存在が重要である。郡庁院は一本柱列によって周辺と区画されており、他の地区で確認されている建物群とは異なったまとまりを見せている。郡庁院は主軸方位が東に 16.5° 偏するⅠ期、Ⅰ期の郡庁構造を維持したまま院の主軸を真北にそろえるⅡ期、郡庁院の規模を拡張し建物配置を大きく改変するⅢ期に大別される。Ⅰ期とⅡ期は院の四辺を囲う柱列の中央に南側に前殿、東西に脇殿、北側に後殿を接続する構造をとっており、この区画の中央北寄りに正殿に相当する東西棟の掘立柱建物が配置される。Ⅲ期はⅡ期段階の方位を維持したまま区画規模を拡大する時期である。また柱列に接続していた前殿、後殿、両脇殿は姿を消し、正殿の東西に独立した脇殿が現れる。いずれの建物もほぼ同位置での建て替えが行われていることは、郡庁院の造営に際してこの地区を非常に重要視していたことが窺える(藤木2001)。

さて、第7次調査は泉廃寺跡南辺のほぼ中央で実施された調査である。調査では掘立柱建物跡1棟、掘立柱建物跡の一部であると考えられる柱穴、溝跡、土坑などが検出されたが、調査面積の割に検出された遺構密度は非常に薄い。

唯一、確実に掘立柱建物跡として認識された1号掘立柱建物跡は調査区の北西部に位置しており、第5次調査、第7次調査(糠塚)で検出された掘立柱建物跡を含めると、この地区には16棟からなる建物群が建設されたことになる。これらの建物群は $Y=104,360$ より西側に位置しており、 $Y=104,360$ ラインの東側には確実な掘立柱建物跡は存在していない。よって $Y=104,360$ ラインより東側には広場のような空閑が存在していたと想定することができる。

当調査区域で掘立柱建物跡の分布に偏りが見られる理由は、上述の郡庁院との位置的な関係があると考えている。つまり郡庁院周辺地域で建物を造営する際には郡庁前面に位置する範囲もしくは郡庁院の側辺地域には意識的に建物の造営を行わなかったのではないかと推測される。

このように郡庁院の前面に明確な建物が存在しない例としては、豊前国上毛郡衙推定地大ノ瀬下大坪遺跡(矢野1998)、武蔵国豊島郡衙に比定されている御殿前遺跡(藤木他2000)が類似した状況であると思われる。両遺跡の報文では郡庁院周辺における建物が造営されることのない空閑について具体的な指摘はなされていないが、両郡衙の郡庁院の周辺には明確な建物群は展開することなく、ある程度の空閑が保持されているように見える。また御殿前遺跡では郡庁院の西側に展開する正倉院の間にも明確な建物跡は存在せず、郡庁院と正倉院の間にも空閑が確保していたと考えられる。このように、郡庁院の周囲に空閑が見られることは泉廃寺跡に限定された状況ではないことは明らかである。

検出された個々の建物を見ると、1号掘立柱建物跡は第5次調査の掘立柱建物跡とのまとま

りが見られるが、建物方位に差異が認められる。第7次調査の1号掘立柱建物跡は建物の桁行方向がN-10°-Eを向く南北棟の側柱建物跡であり、第5次調査、第7次調査、第7次調査（糠塚）で検出された建物群の大部分が真北方向を向く建物であることから、両者は一連の建物群であるとは考え難い。これまで泉廃寺跡で確認されている建物跡で、7次調査の1号掘立柱建物跡と同様の建物配置をとるものは非常に少なく、現段階では1号掘立柱建物跡がどの時期の建物群と共存するものかは不明であると言わざるを得ない。

また、2号掘立柱建物跡とした柱穴は建物の北側が検出されたただけであり、建物の全体構造は不明な建物である。建物北側の柱穴方位は真北方向から東に偏しており、郡庁院I期の建物配置に酷似しており、郡庁院I期段階に造営された可能性のある建物跡として位置付けておく。

第7次調査では検出された遺構が少なく、郡庁院の周辺に造営された建物群の具体的な内容や変遷、年代について大きな知見を得ることはできなかったが、郡家における土地利用、各施設の配置について知見を得ることが出来たと評価している。郡家に存在する諸施設は意図的に形成された空間によって機能的に結びつき、人員の移動や物資の搬出入などに利用されていたものと理解しておきたい。

このように建物が建設されない空閑地の存在や、機能については今後の調査課題であろう。

また、当調査区からは土師器、須恵器、瓦などが出土している。いずれの遺物も表土ならびに水田耕作土中からの出土であり、確実に遺構に伴うものは出土していない。

出土遺物を概観すると、最も古い時期に位置付けられる資料は、非ロクロ整形の杯である。この杯は丸底の底部、体部外面に段を有する有段杯であること、内面にミガキ調整、黒色処理を施すなどの特徴は東北地方土師器編年栗囲式から国分寺下層式に比定できるものであるが、当資料には、栗囲式の特徴である外面の段と対応する内面に稜が形成されていないことを考慮すると、国分寺下層式に近いものと考えられる。国分寺下層式の年代は、8世紀後半を中心とする時期が与えられており、当資料も8世紀後半段階に位置付けられるものと考えておきたい。

最も新しい時期のものと考えられる資料は赤焼土器として判断した資料である。口径13.3cm、器高2.5cmを測るもので、明瞭な器面調整は施されず、ロクロナデが残る。東北地方における赤焼土器の出土は10世紀段階からみられるようになる。よって当調査区で出土した資料も最も古く位置付けても10世紀を遡るものではないと考えられる。

このように、当調査区では8世紀後半から10世紀までの遺物が出土しており、確実に7世紀段階に位置付けられる資料は確認されていない状況である。

当調査区周辺で検出された掘立柱建物跡は、建物の主軸方位を真北に揃えて造営されるものであり、8世紀段階には泉廃寺跡で建設された建物の大部分は主軸方位を真北方向に向けたものに統一されると考えられていることは、当調査区周辺で出土した遺物の年代と、確認された掘立柱建物群の年代がほぼ一致している状況と見ることができる。現段階では確実に遺構に伴う遺物が少なく、詳しく言及することはできないが、今後掘方などから出土する遺物から、各建物群の具体的な変遷年代を明らかにすることが、課題であると考えている。 (荒)

《参考文献・引用文献》

- 矢野和昭 1998 『大ノ瀬下大坪遺跡』Ⅱ 新吉富村教育委員会
 藤木 海ほか 2000 『御殿前遺跡』Ⅵ 東京都北区教育委員会
 藤木 海 2001 『泉庵寺跡(第14次調査)』『市内遺跡発掘調査報告書』6 原町市教育委員会
 佐藤敏幸 2001 『赤井遺跡Ⅰ 牡鹿柵・郡家推定地』 矢本町教育委員会・宮城県石巻土木事務所
 猪狩忠雄ほか 2000 『根岸遺跡』いわき市教育委員会
 木本元治ほか 1985 『関和久遺跡』 福島県教育委員会
 大川清他 1996 『日本土器辞典』 雄山閣
 伊東信雄ほか 1985 『多賀城跡 政庁跡』本文編 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所
 伊東信雄ほか 1980 『多賀城跡 政庁跡』図録編 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所

表 23 第7次調査区出土土器・陶磁器観察表

挿 図 番 号	No.	出土遺構	種 別	器 種	法 量		調 整
					口径/器高/底径		
85	1	H11-32 P12	土師器	杯	15.8/(3.8)/-		内面：口底部ミガキ黒色 外面：口体部ヨコナデ 底部ケズリ
85	2	H11-32 P6	土師器	杯	13.8/(3.15)/-		内面：口底部ミガキ黒色 外面：ヨコナデ、ヘラナデ、ケズリ
85	3	H11-28 L1	土師器	杯	14.8/5.0/9.0		内面：口底部ミガキ黒色 外面：口縁部ヨコナデ 体底ケズリ
85	4	H11-00	土師器	杯	15.7/(4.4)/7.0		内面：口底部ミガキ黒色 外面：口縁部ヨコナデ 体底ケズリ
85	5	H11-28	土師器	甕	17.4/(13.8)/-		内面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 外面：口縁部ヨコナデ
85	6	H11-34 P6	土師器	甕	-(3.5)/-		内面：体部よな、ヘラナデ 外面：体部ハケ目
85	7	H11-29 P6	土師器	甕	-(2.5)/9.7		内面：体～底部ヘラケズリ 外面：体部ハケ目 底部木葉痕
85	8	H11-00	土師器	杯	-(2.6)/5.8		内面：体底部ミガキ、黒色処理 外面：体部ナデ 底部系切り
85	9	G11-20	土師器	杯	-(0.9)/5.1		内面：摩滅 外面：摩滅 底部系切り
85	10	H11-30 P	土師器	高杯	-(4.6)/-		杯部内面：ミガキ黒色 脚部外面：ケズリ、半月形透かし2個
85	11	G10-68	土師器	台杯	-(2.3)/7.0		内面：体部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ
85	12	G10-68	土師器	台杯	-(2.8)/7.7		内面：体部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ
85	13	CH-10 28L2	土師器	台杯	-(1.8)/4.5		内面：体部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ
85	14	H11-00	赤焼土器	杯	11.85/3.1/7.2		内面：口底部ロクロナデ 外面：口体部ロクロナデ底部系切り
85	15	H11-24 L2	赤焼土器	杯	13.1/2.4/8.5		内面：口～底部ロクロナデ 外面：口～体部ナデ 底部系切り
85	16	H11-00	赤焼土器	杯	13.4/2.9/8.4		内面：口～底部ナデ 外面：口～体部ナデ 底部ヘラケズリ
85	17	H11-25	赤焼土器	杯	9.6/6.7/1.75		内面：口～底部ナデ 外面：口～底部ロクロナデ 底部系切り
85	18	G10-68	須恵器	壺	-(4.7)/8.8		内面：体部ロクロナデ 外面：体部回転ケズリ、ロクロナデ
85	19	H11-00	須恵器	甕	-(2.85)/12.6		内面：体～底部ロクロナデ 外面：体～底部回転ケズリ
85	20	G10-84	須恵器	甕	-(6.4)/-		内面：体部指ナデ 外面：体部縄タタキ
85	23	G10-84	須恵器	甕	-(3.8)/-		内面：体部青海波文 外面：体部縄タタキ?
85	24	H11-31 P6	須恵器	甕?	-(5.0)/6.0		内面：体底部ロクロナデ 外面：体～底部回転削りヘラ描
86	25	G10-88 L2	須恵器	円面硯	-(5.0)/-		内面：体部指ナデ、ナデ 外面：体部回転ケズリ、ナデ
86	26	H10-08	陶器?	すり鉢	-(7.0)/11.2		内面：体底部ロクロナデ、ハケ 外面：体部ナデ 底部系切り
86	27	H11-00	瓦質土器	?	-(6.0)/2.2		内面：体～底部ロクロナデ 外面：体～底部ロクロナデ
86	28	H11-00	瓦質土器	?	-/-/厚2.3		内面：体部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ
86	29	H11-29	中世陶器	片口鉢	29.5/(6.8)/-		内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ
86	30	H10-08	瓦質土器	すり鉢	-(4.9)/-		内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ
86	31	H11-00	陶器	碗	-(4.0)/4.95		内面：体底部ナデ 外面：体部ナデ 底部回転ケズリ
86	32	H11-20	陶器	碗	-(2.6)/3.6		内面：体～底部ナデ 外面：体部ナデ 底部回転ケズリ
86	33	H11-00	陶器	壺?	-/-/厚1.1		内面：体部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ
86	34	H11-00	陶器	壺	-/-/厚1.1		内面：体部ロクロナデ、線刻文 外面：体部ロクロナデ
86	36	H11-22	陶器	皿	-/-/厚0.5		内面：体部ロクロナデ 外面：体部回転ケズリ
86	37	H11-22	陶器	皿	-/-/厚0.5		内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ
86	38	H11-00	陶器	皿	-(2.1)/8.5		内面：体～底部ロクロナデ 外面：体～底部ロクロナデ
86	39	H11-00	須恵器	長頸瓶	-(2.8)/-		頸部内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ
86	40	H11-22	陶器	皿	12.6/2.4/8.1		内面：口～底部ロクロナデ 施文 外面：体～底部回転ケズリ

表 24 第7次調査区出土瓦類観察表

挿 図 番 号	No.	出土遺構	種 別	調 整		重 量	厚 さ	備 考
				凸 面	凹 面			
87	1	S D 1 4	熨斗瓦	廉状タタキ	布目痕、模骨痕	340	2.2	側面・凹側縁ヘラケズリ、狭端面ヘラ
87	2	G10-64表土	平瓦	斜格子タタキ	布目痕、ケズリ	280	2.7	凹凸側縁ヘラケズリ、側面分割ままか?
87	3	H11-20表土	平瓦	廉状タタキ	ヘラナデ	400	2.8	凹側面・側縁ヘラケズリ
87	4	G10-68表土	平瓦	廉状タタキ	布目痕、模骨痕	680	3.2	広端面・凹凸側縁・側面ヘラケズリ
88	5	H11-00表土	平瓦	正格子タタキ	布目痕	360	1.8	側面分割ままか?
88	6	H11-22表土	平瓦	斜格子タタキ	布目痕、ナデ	110	1.7	狭端面ヘラケズリ。凹側縁ケズリか?
88	7	G10-LⅡ	平瓦	斜格子タタキ	布目痕、模骨痕	160	2.2	側面凹凸側縁・狭端面凸側縁ケズリ
88	8	G10-68表土	平瓦	正格子タタキ	ヘラナデ	190	2.5	側面・凹凸側縁ヘラケズリ
88	9	H10-06表土	平瓦	廉状タタキ	布目痕	210	2.6	側面、凹凸側縁ヘラケズリ
88	10	H11-24LⅡ	平瓦	正格子タタキ	縦方向のナデ	210	3.1	側面、凹凸側縁ヘラケズリ
88	11	H11-00表土	角切瓦	斜格子タタキ	布目痕	520	2.2	凹側縁・側面ヘラケズリ
89	12	H11-29	平瓦	斜格子タタキ	布目痕、模骨痕	440	2.0	狭端面ヘラケズリ
89	13	G10-80表土	平瓦	斜格子タタキ	布目痕、	300	2.6	側面・凹凸側縁ヘラケズリ
89	14	G10-68表土	平瓦	正格子タタキ	ヘラナデ	170	2.0	
89	15	G10-88表土	丸瓦	ヘラケズリ	布目痕	40	1.4	側面・凹凸側縁ヘラケズリ
89	16	不	明	雨垂れ状タタキ	布目痕	-	-	側面・ヘラケズリ
89	17	H10-28LⅢ	塼	格子タタキ	格子タタキ	390	2.8	片面のタタキ不鮮明。摩滅か?ナデか?



1 第7次調査区全景



2 第7次調査区全景 (西から)



1 1号掘立柱建物跡・ピット群



1 杯 (85-3)



2 A 杯 (図85-1)



2 B 裏



3 A 杯 (図85-1) 表



3 B 裏



4 高杯 (図85-10)



5 A 杯 (図85-8)



5 B



6 A 杯 (図85-4)



6 B



7 A 高台付杯 (図85-13)



7 B



8 A 高台付杯 (図85-11)



8 B



9 A 高台付杯(図85-12)



9 B



10A 赤焼土器(図85-16)



10B



11A 杯(図85-9)



11B



12A 手捏土器(図85-21)



12B



13A 赤焼土器(図85-14)



13B



14A 甕(図85-6)



14B



15A 甕(図85-5)



15B



16A 切片口(図86-29)



16B



17A 赤焼土器(図85-17) 17B



18 甕(図85-7)



19 長頸瓶(図85-19)



20A 甕(図85-23) 20B



21A 甕(図85-22) 21B



22 長頸瓶(図85-20)



23 長頸瓶(図86-39)



24A すり鉢(図86-30) 24B



25 壺 (図85-18)



26 すり鉢 (図86-26)



27 杯 (図85-24)



28 円面硯 (図85-25)



29 紡錘車 (図90-3)



30 (図90-4)



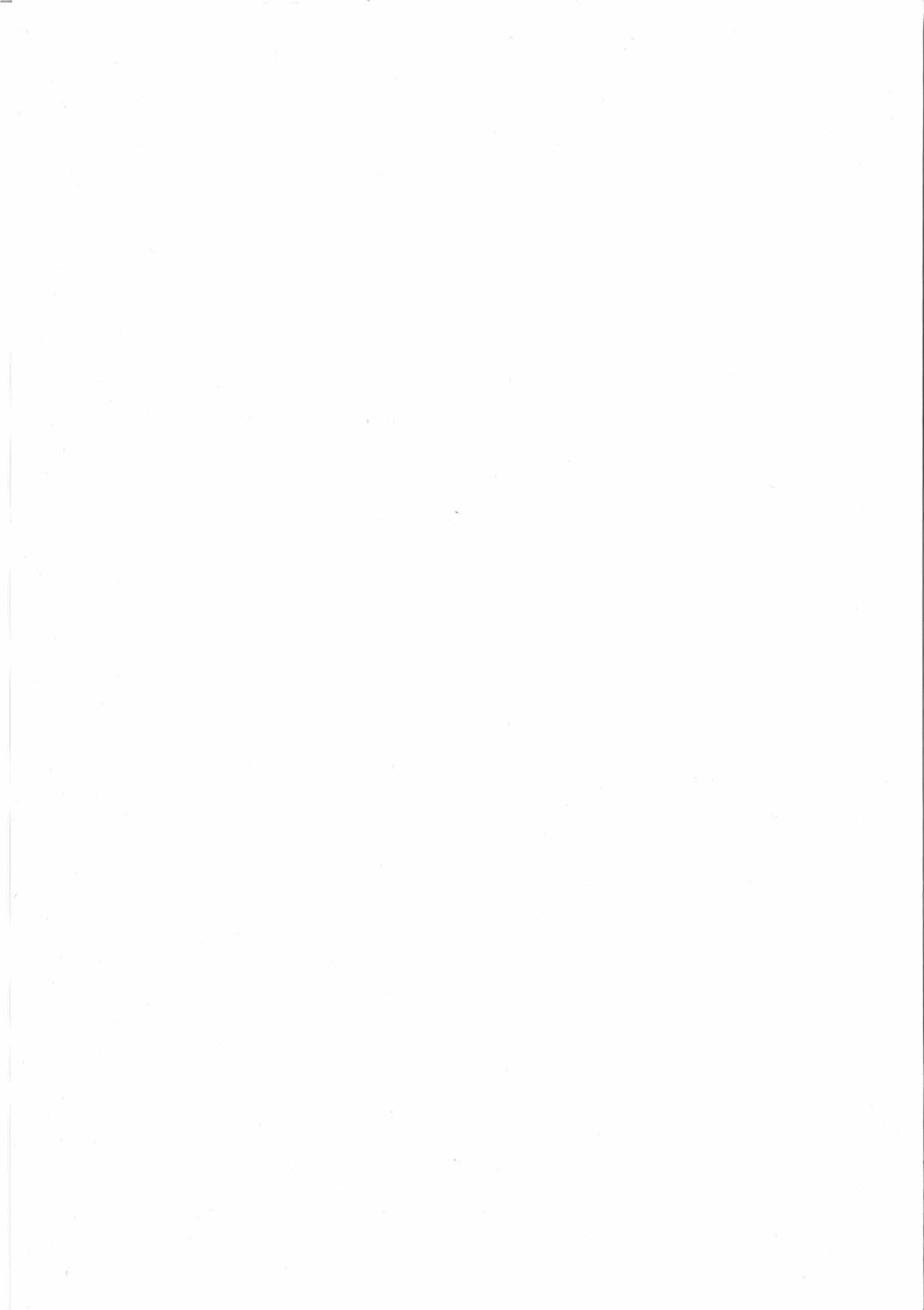
31 土錘 (図90-1)



32 土玉 (図90-2)







第7章 第7次調査（糠塚）

第1節 調査に至る経過

第7次調査区（糠塚）は、東西に長い遺跡範囲の南辺中央、G8グリッド付近に位置する。調査地区は奈良・平安時代の掘立柱建物群や溝跡が確認されている第5次調査区を挟んで東西に分かれるため、東側を第7次調査区、西側を第7次調査区（糠塚）に分けて調査することとした。第7次調査区（糠塚）は県指定範囲の中でも以前から焼け米が多量に出土することから正倉域と推定されている寺家前地区の南に隣接している。当地区は、調査前には標高約3mの水田の中に標高4.0m・東西約100m・南北約70mの微高地が沖積地内に島状に浮かんでいるような地形で、その上に農家の屋敷と畑が作られていた。また、敷地の北西隅には糠塚と呼ばれる標高6.0mの塚があり、田の神が祀られていた。原町市内には各地に田の神が祀られ、その地区毎に稲の豊作が祈願されているが、糠塚は泉地区の田の神として信仰されてきた。糠塚の東側、この調査区の微高地の北側に沿って高さ約5.8mの土塁状の高まりもある。県指定地の北側に県指定重要文化財の泉観音堂十一面観音菩薩立像があり、解体修理によって弘安6年（1283）の胎内銘が確認されている。その寄進者はこの地方の有力な豪族であったと考えられる。泉地区の中世豪族の城館跡としては市指定史跡泉の館跡があり、当調査地区においても中世館跡が存在する可能性も予想された。こうしたことから、当地点は行方郡家に関連する掘立柱建物群の他、古墳や中世館跡が存在する可能性も予想された。

第2節 調査の方法

ほ場整備の施工計画では、当調査区のうち北側が武須川の開削部分、南側は微高地上につくられた畑を削平して水田を造成することとなっていた。工事は平成9年度に調査区南側に位置する水田の面工事が先行して行われていたが、調査区の南端がこの水田の工事範囲にかかっていたため、平成9年3月に幅5m・長さ43mの範囲を調査した。平成10年度に入り、水田造成の前に武須川の開削が先行して進められていたため、農地事務所・施工業者と協議した結果、発掘調査も武須川開削部分を先行して行なうこととなった。また、武須川部分も一部は宅地の移転に伴う植木や資材の搬出が済んでいなかったため、搬出路を残して東西に分断された形で調査を行った。このように、調査区が南端部分・北半分（武須川開削部分）・中央部分の3に分かれる形になり、遺構の検出・実測等の作業を都合3度に渡って実施することとなった（図91）。このため、同一の遺構を南北に分けて調査せざるを得なかったものもあり、手間のかかる調査となった。調査は、まず住宅の移転後に塚・土塁と思われる地形があるため、25cm間隔の等高線地形測量を行った。2番目に、塚と土塁の調査を行い、積土を除去した。3番目にバックホーにより、民家の基礎と塚上にあった祠の基礎部分のコンクリート除去および表土除去、クローラダンプによる表土運搬を行った後、人力による遺構検出作業・遺構の精査を行った。7次（糠塚）調査区は宅地跡であったため、塚の南側と東側には大きな攪乱の穴がいくつ

か掘られ、宅地に伴う井戸の枠は調査中も取り残された形であった。地表下約 0.5m で遺構確認面に到達した。

遺構番号は、泉廃寺跡の過去の調査で検出された遺構を含めた通し番号を付した。このため、掘立柱建物跡（略号 S B）は 23 号から、溝跡（略号 S D）は 5 号から、土坑（略号 S K）は 5 号から、塚（略号 S X）については 1 号から命名した。

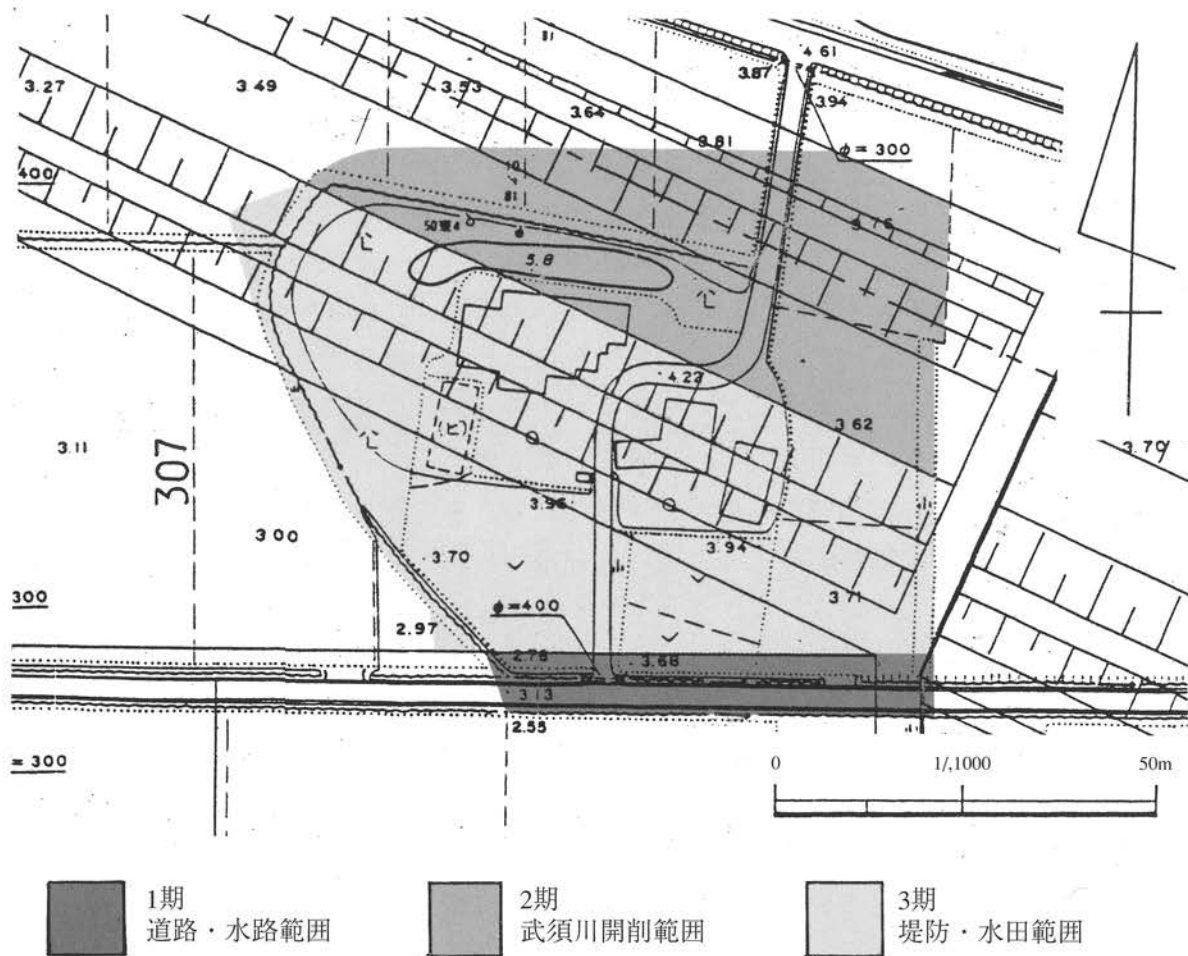


図91 泉廃寺跡（7次・糠塚）本調査区域区分

第3節 調査成果

本調査で確認された遺構は、塚 1 基、土塁 1 基、掘立柱建物跡 8 棟、溝跡 7 条、柵列 2 列、土坑 39 基、小ピット多数である（図 92）。遺物は、古墳時代後期の土師器・須恵器、平安時代の土師器・須恵器・瓦、中世の陶磁器・茶臼等が出土した。

第1項 塚・土塁

現況地表において、調査地北西側に塚・土塁と推定される高まりを確認したため、その正確な規模・形状を把握するため、発掘調査に先立って 25cm 間隔の等高線地形測量を行なった（図 92）。その後、幅 2m のトレンチを設定して塚および土塁を断ち割り、盛り土の状況を確認する

こととした。塚については、表土除去の後に、塚の周囲を円形に巡る溝を確認しており、塚に伴う溝跡と推定した。

糠塚(SX1) 図92~99

調査の際、糠塚と呼称した1号塚状遺構は調査グリッドG7-06~09・15~19・25~29・35~39・45~49、G8-00・10・20・30グリッドに位置する。この塚状遺構については発掘調査以前から塚状の高まりが確認されること、この地区が以前より糠塚と呼ばれている地区であることなどの理由から、古墳か中近世の塚である可能性が高いと考えられたため、調査を行った。

調査はこの塚状遺構と塚状遺構の北端から東に走る土塁状遺構の地形測量を行い、形状並びに範囲の記録を行った。塚状遺構及び土塁の地形測量は、調査区内に設けた調査グリッド杭を基準に幅25cmの等高線で作成した。測量で導き出された塚状遺構の規模は東西15.0m×南北23.5mの楕円形である。また土塁状遺構は塚状遺構の北端付近から東方に約47mを測り、基底部幅4.5~6.0m×上端幅2~3m×高さ0.75~1.25mを計測する。

調査

発掘調査は塚状遺構に幅2mのトレンチを南北31m×東西25mの規模で設け、塚状遺構の形状確認を行った。厚さ約5cmの表土を除去すると、塚状遺構のほぼ中央付近では後世の土取りによると思われる落ち込みが検出され、塚の南半部では粗くしまりの弱い後世の盛土が確認された。それ以外の範囲では塚を構成する硬くしまった黄褐色土が混入した盛土が検出されたが、この時点では埋葬施設は確認されず、また、出土遺物からも古墳であることを決定付ける知見を得ることはできなかつたため、塚状遺構の盛土の断ち割りを行った。また塚状遺構の北端から東に延びる土塁状遺構は層位的に1号塚状遺構の上層に位置していることが確認され、塚状遺構が築かれたあとに土塁状遺構が築かれていることが明らかとなっている。

塚を構成する黄褐色土を約1.2mほど掘り下げると黒色土が検出された。検出された黒色土は層位的には塚状遺構の下層に位置していることから、この塚状遺構を築いた時点の旧表土層である可能性が高い。この旧表土層は東西22.5m×南北23.5mの円形を呈し、厚さ5cmである。また旧表土層上面から塚状遺構の頂部までの高さは1.8mを測る。

検出された旧表土層の平面形は直径23mほどの円形を呈しており、旧表土層の外周付近には幅1.5~9.2m×深さ0.5mの溝状遺構が検出されている。この溝跡は、塚状遺構の下層から検出された旧表土層の外周ラインに沿うように円形に巡っていること、溝内の堆積土には塚状遺構からの流出土が認められることから、1号塚状遺構にともなう可能性が高いと判断される。この溝跡は10号溝跡・11号溝跡との重複が認められるが、塚状遺構に伴う溝跡が古いことが確認されている。この溝跡の底面付近からは古墳時代終末期の須恵器甕と横瓶が出土している。

出土遺物

1号塚状遺構の調査では土師質土器(土鍋)、茶臼、須恵器が出土している。このうち1号塚状遺構に伴う可能性がある遺物は塚状遺構の周囲を巡る東側の溝跡底面から出土した須恵器の甕と横瓶である。

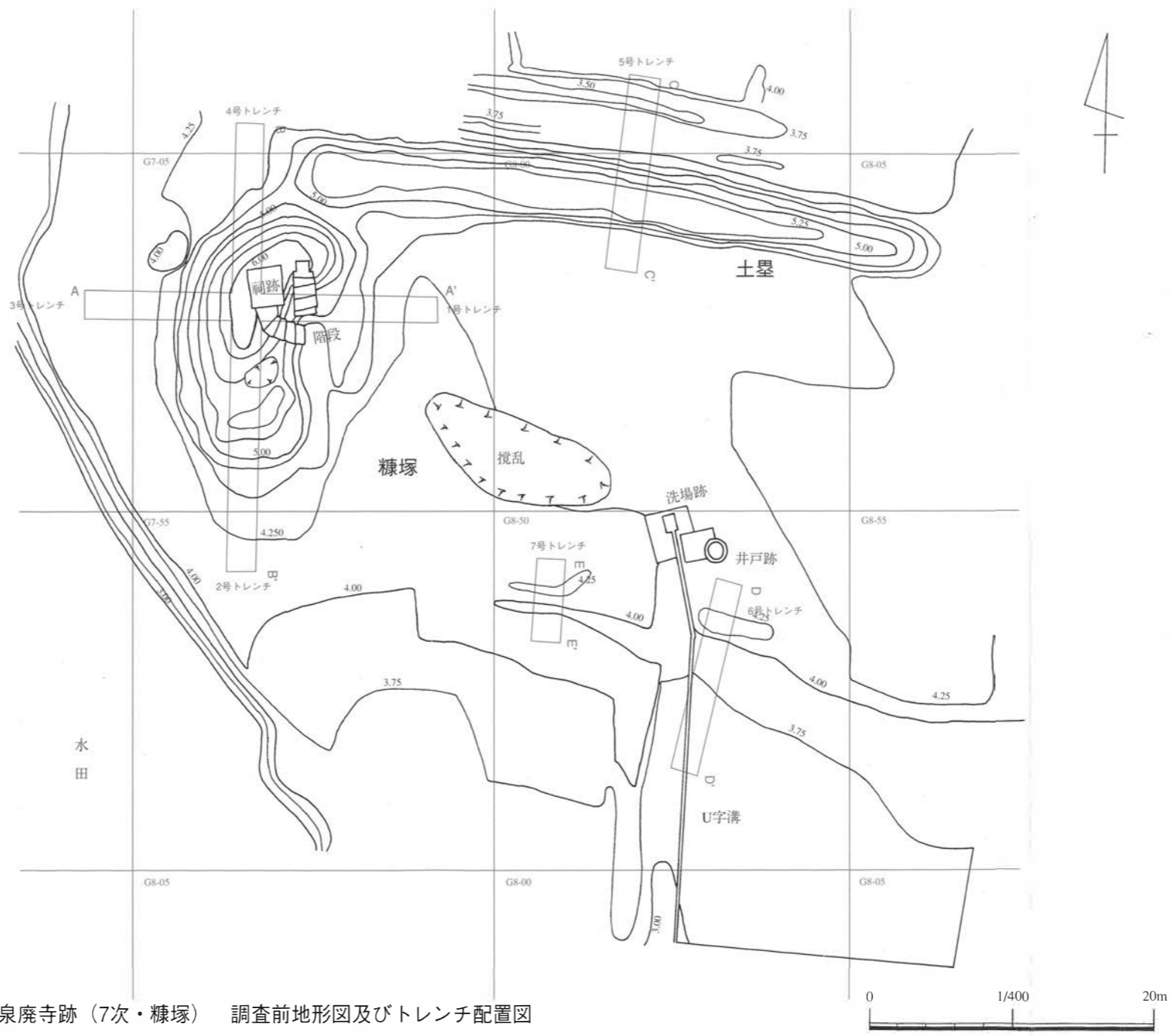


図92 泉麁寺跡（7次・糠塚） 調査前地形図及びトレンチ配置図

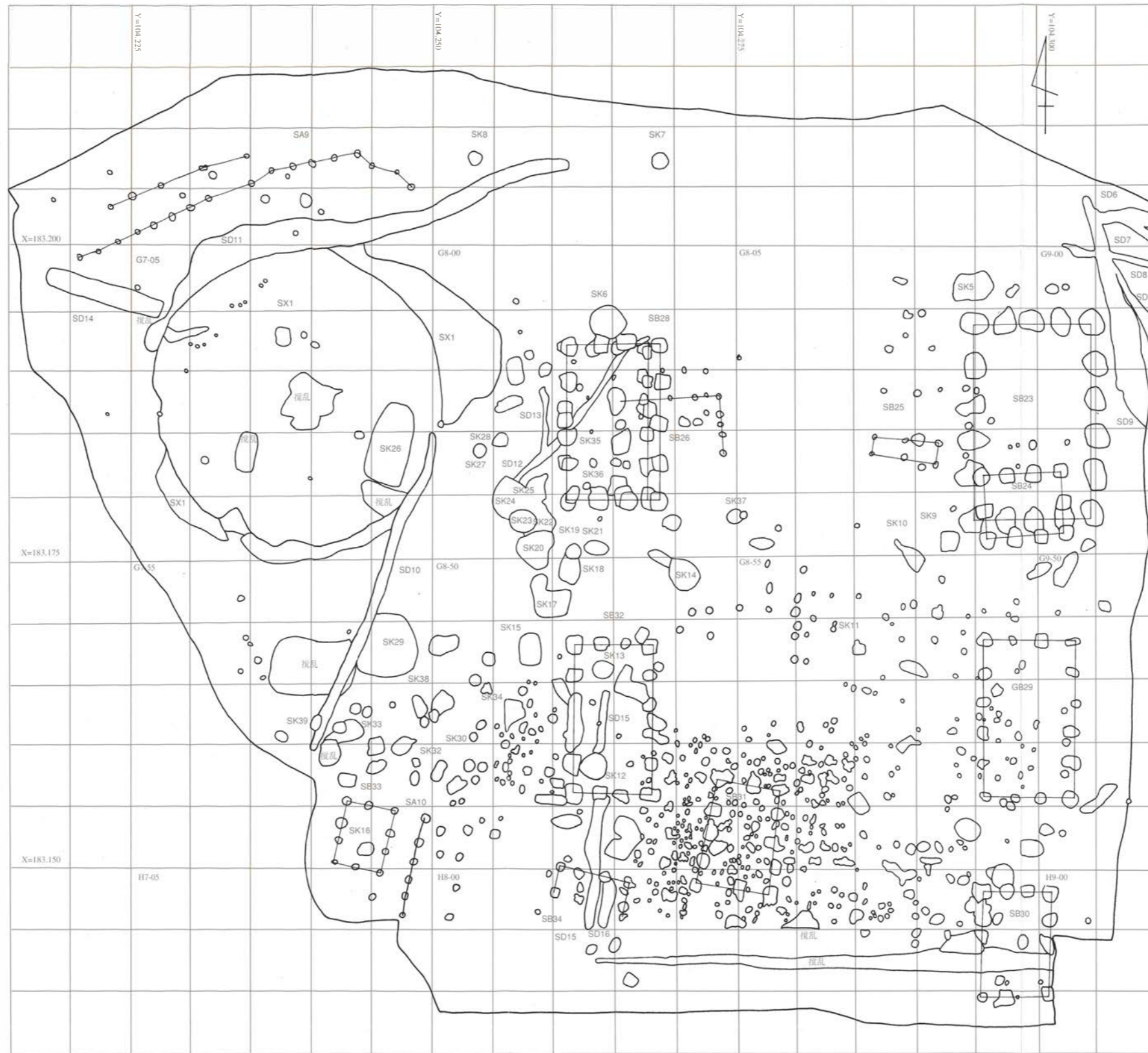


図93 泉麿寺跡（7次糠塚）遺構配置図

調査区外

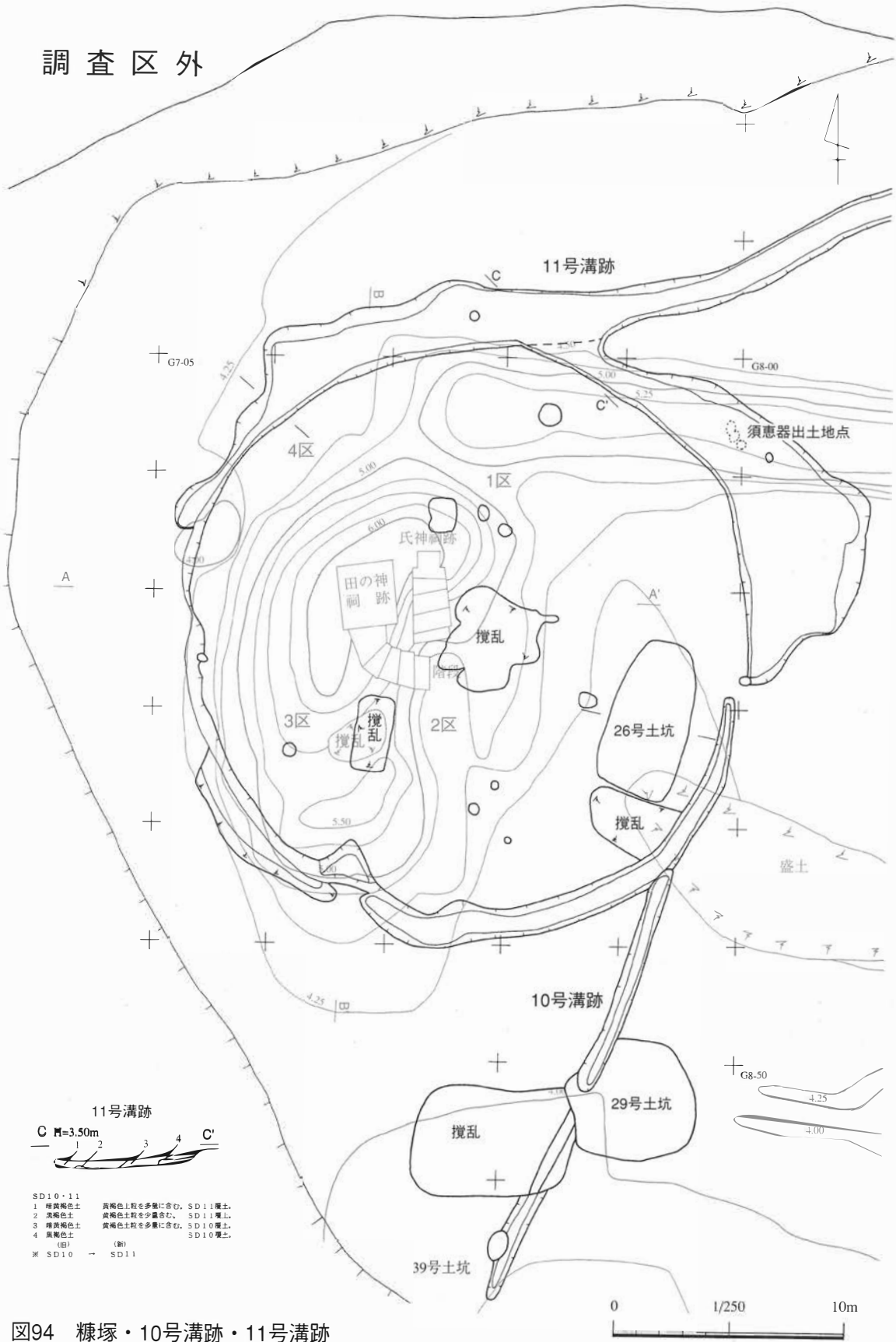
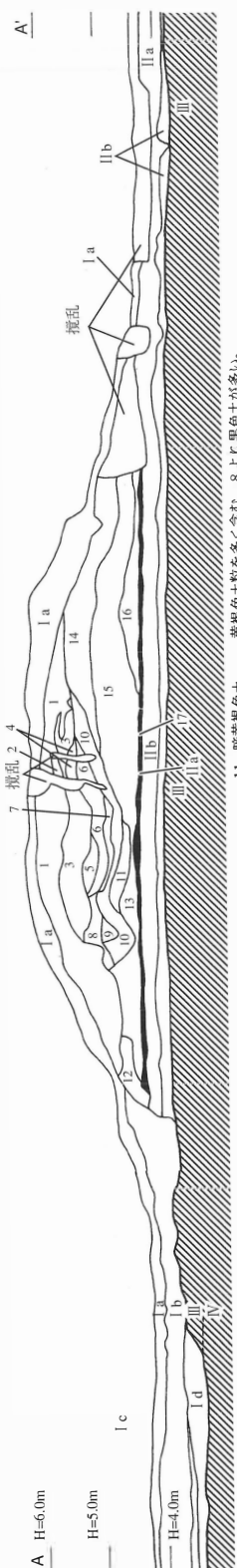


図94 糠塚・10号溝跡・11号溝跡



黄褐色土粒を多く含む。8より黒色土が多い。
黄褐色土ブロックを多量に含む。旧表土層。
黄褐色土粒を少量含む。
黄褐色土粒を少量含む。
黄褐色土粒を少量含む。
旧表土層。

- 11 暗黄褐色土
12 暗黄褐色土
13 黒褐色土
14 黒褐色土
15 黒色土
16 黒褐色土
17 黒色土
II a 黒褐色土
II b 暗褐色土
III 黄褐色土
IV 黄褐色砂礫

※ 塚の西側を浅い溝が巡っている。さらにその西側は礫層の上面まで削り出して、微高地を形成している。その西側は湿地になる。



黄褐色土ブロック主体で、黒色土を含む。
黄褐色土粒を少量含む。
黄褐色土ブロック主体で、黒色土を含む。
黄褐色土ブロックを含む。
黄褐色土ブロックを多量に含む。
4よりも黒色土を多く含む。
黄褐色土ブロックを多量に含む。

- 1 暗黄褐色土
2 黄褐色土
3 黒褐色土
4 暗黒褐色土
5 黒褐色土
6 暗黄褐色土
7 黒色土
8 暗黄褐色土
9 黒色土
10 暗黄褐色土
9 暗黄褐色土
10 暗褐色土
11 黒褐色土
12 暗黄褐色土
13 黒褐色土
14 暗黄褐色土
15 黄褐色土
16 黒色土
17 暗黄褐色土
18 暗黄褐色土
19 暗褐色土
20 黒褐色土
21 暗黄褐色土
22 黒色土

黄褐色土ブロックを多量に含む。
黄褐色土粒を含む。
黄褐色土ブロックを多量に含む。
黄褐色土粒を少量含む。
黄褐色土ブロックを多量に含む。
黄褐色土ブロックを多量に含む。
黄褐色土粒を含む。
黄褐色土ブロックを多量に含む。

- 23 黒色土
24 暗黄褐色土
25 暗褐色土
26 黄褐色土
27 黄褐色土
28 黒色土
II a 里色粘質土
II b 暗褐色土
III 黄褐色土
IV 黄褐色砂礫

※ 全体に黒色土と黄褐色土ブロックを含んだ土を交互に積み上げている。北側は黒色粘質土が厚く堆積しており、低湿地であった。

- 継層 2 T・4 T**
I a 暗黄褐色土
I b 褐色土
I c 褐色土
I d 暗黄褐色土
I e 黒色土
1 暗黄褐色土
2 黄褐色土
3 暗黄褐色土
4 黒褐色土
5 暗黄褐色土
6 黒褐色土
7 黄褐色土
8 黒色土

表土。しまりなし。
しまりやや弱い。
しまりやや弱い。
黄褐色土ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。
暗褐色土を含む。
黄褐色土ブロックを多量に含む。
黄褐色土ブロックを多量に含む。
黄褐色土ブロックを多量に含む。

- 9 暗黄褐色土
10 暗褐色土
11 黒褐色土
12 暗黄褐色土
13 黒褐色土
14 暗黄褐色土
15 黄褐色土
16 暗褐色土
17 黒色土
18 暗黄褐色土
19 暗褐色土
20 黒褐色土
21 暗黄褐色土
22 黒色土

黄褐色土ブロックを多量に含む。
黄褐色土粒を含む。
黄褐色土ブロックを多量に含む。
黄褐色土粒を少量含む。
黄褐色土ブロックを多量に含む。
黄褐色土ブロックを多量に含む。
黄褐色土粒を含む。
黄褐色土ブロックを多量に含む。

黄褐色土ブロックを多量に含む。
黄褐色土粒を少量含む。
黄褐色土ブロックを多量に含む。
旧表土層。
II a 里色粘質土
II b 暗褐色土
III 黄褐色土
IV 黄褐色砂礫



図95 糠塚 土層断面図

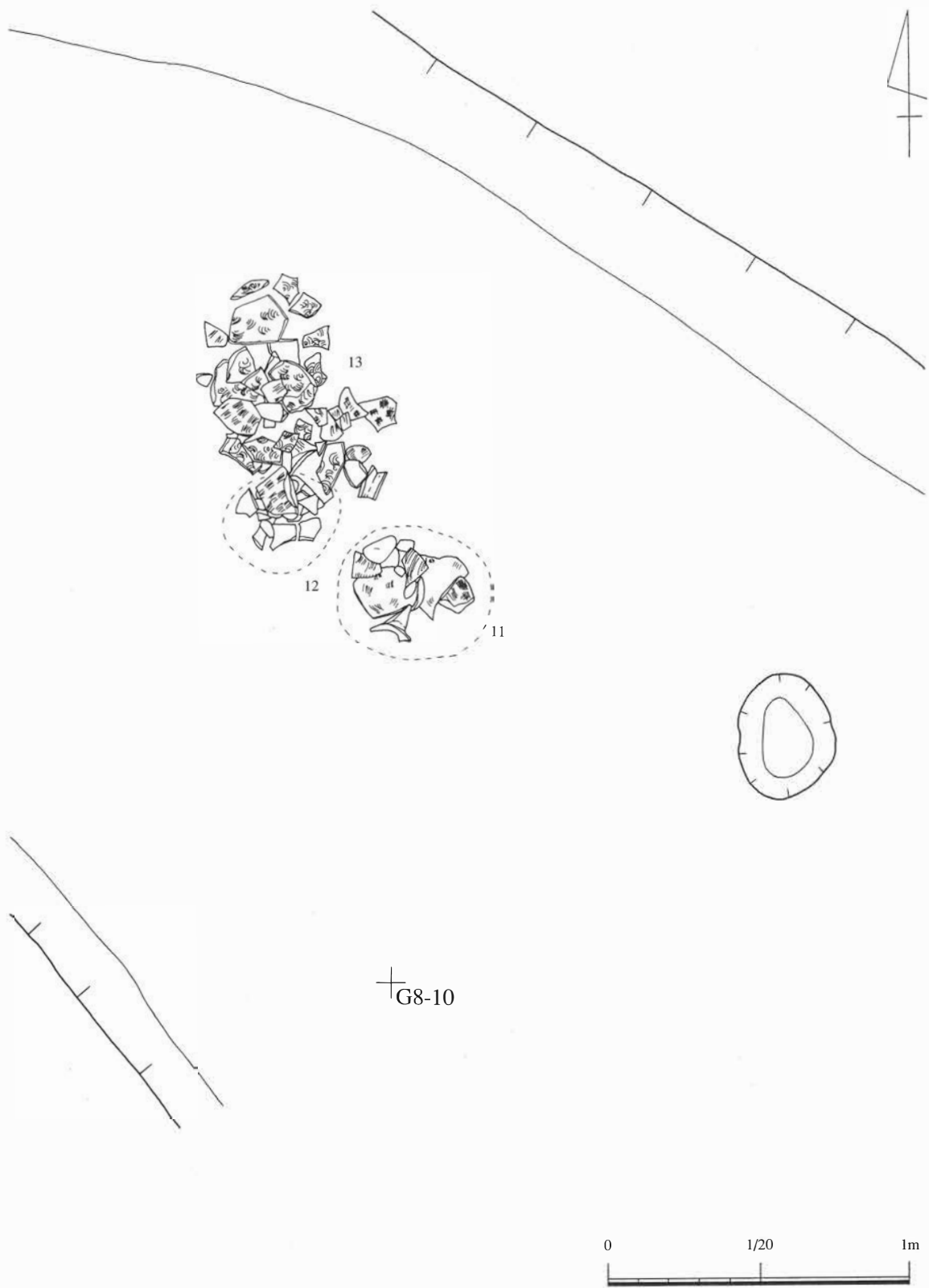


图96 糠塚 周溝須恵器出土状況図

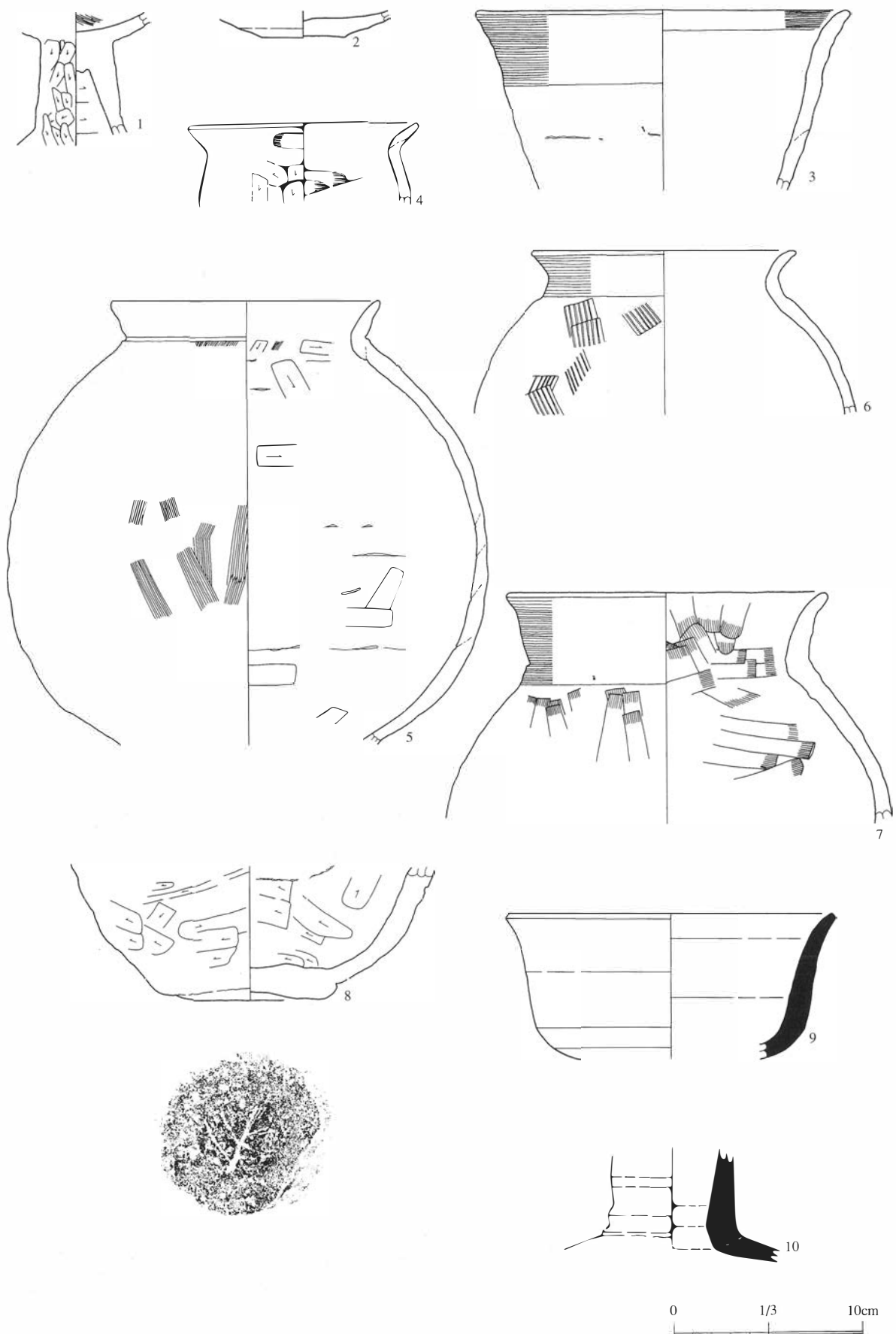


图97 糠塚出土遺物 (1)

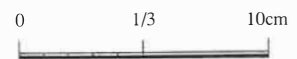
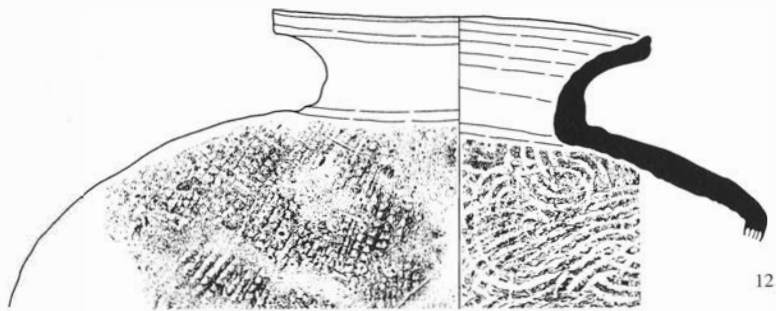
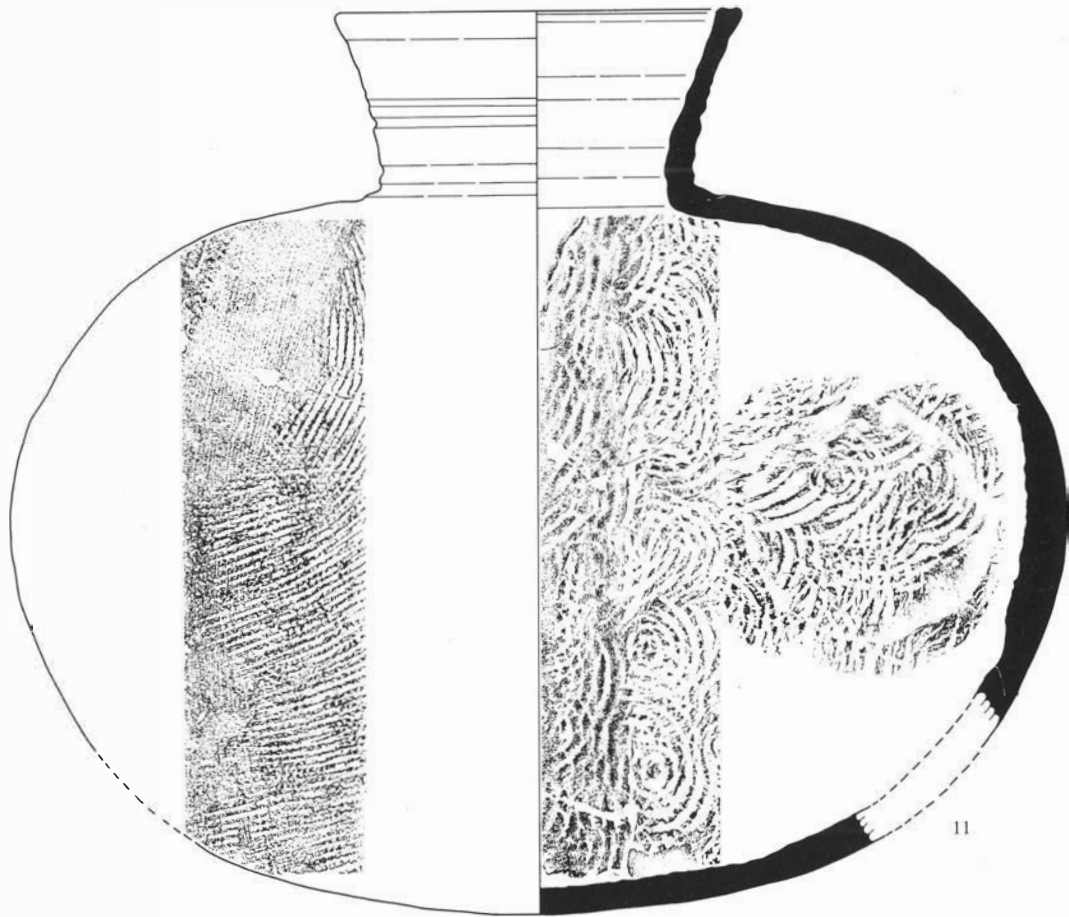
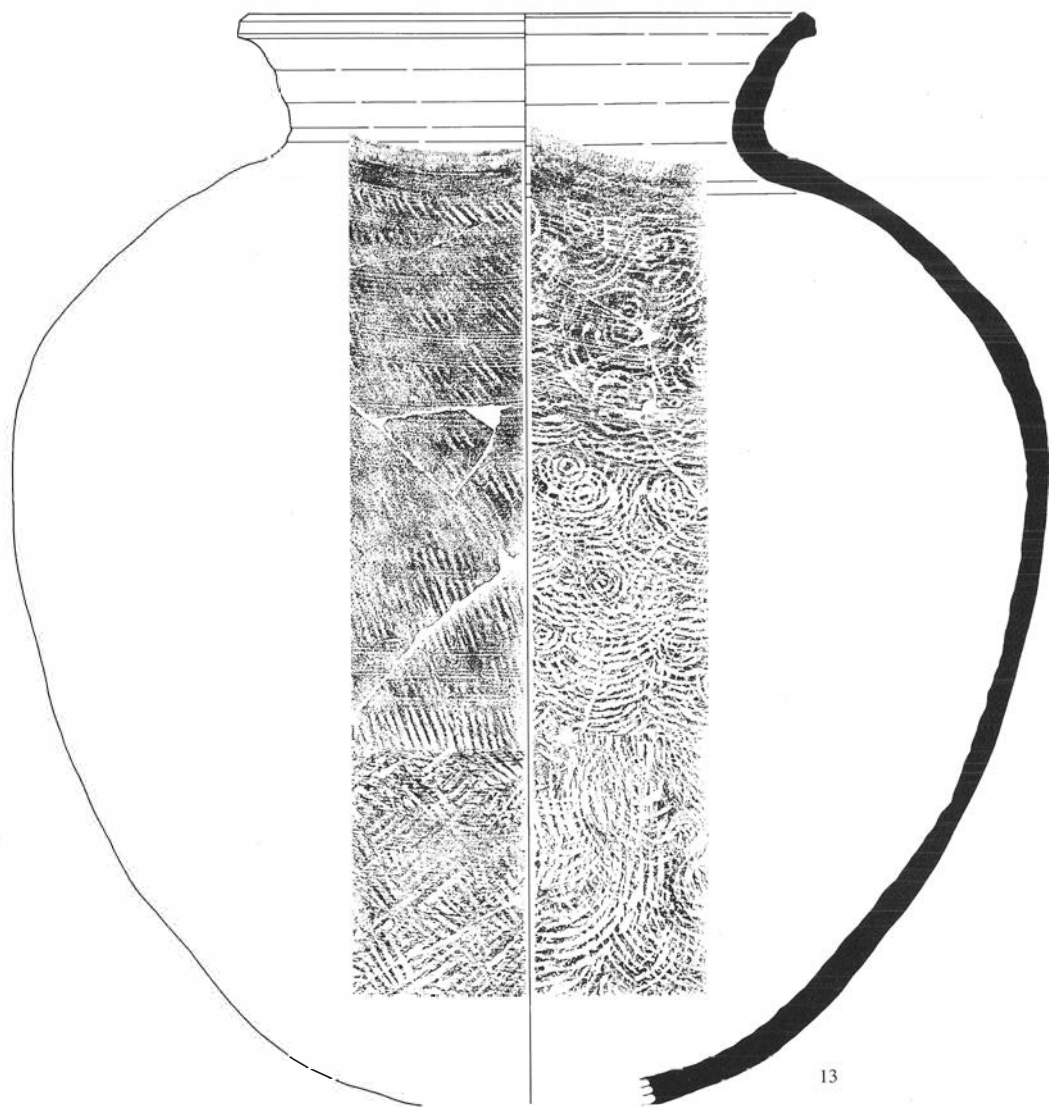
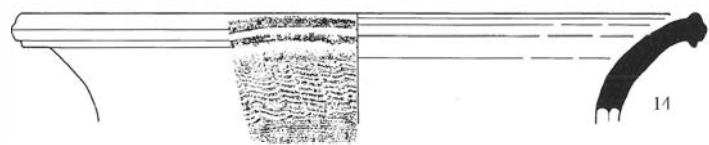


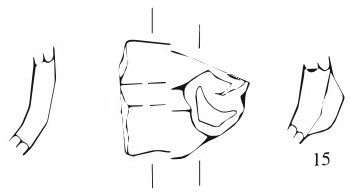
图98 糠塚出土遺物 (2)



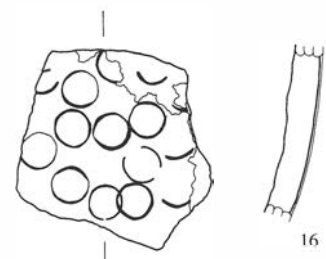
13



14



15



16

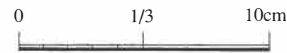


图99 糠塚出土遺物 (3)

図 99-13 は須恵器の甕である。口径 22.0cm、器高 43.1cm、体部最大径 40.2cm を測る比較的大きなものである。底部は尖底で体部は微妙に外反しながら立ち上がり、体部上半で強く屈曲し口縁部へ至るため、体部の最大径は体部上半で計測する。口縁部は短く、体部と接する箇所から強く外反し口唇部へ至る。口唇部には 2 つの面が形成されている。底部から体部にかけての範囲の外面には丁寧な平行タタキが施され、内面には青海波文の当具痕が明瞭に残る。口縁部にはヨコナデが施される。

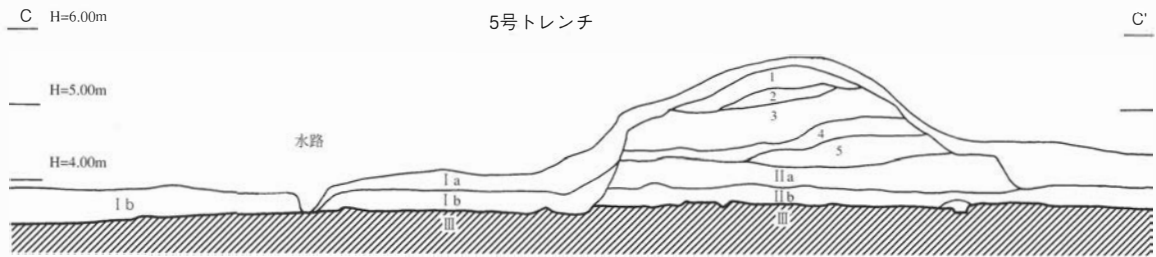
図 98-11 は横瓶である。口縁部と体部側部が欠損している。体部最大幅 41.8cm、残存高 35.7cm を測る。体部外面には丁寧な平行タタキが施され、内面には青海波文の当具痕が残る。また、体部の一部にはタタキ調整のあとに縦位方向のナデが施されている。頸部ならびに口縁部はヨコナデが施され、頸部ならびに口縁部は体部と接する箇所から外傾しながら直線的に立ち上がり、大きな屈曲点を持たないまま、口縁端部へ至る。口縁端部は平坦に仕上げられ、断面形は「**┌**」である。また頸部の中段には 2 条の横位沈線が巡るのが特徴的である。下部沈線は幅 7mm、上部沈線は幅 12mm である。

図 98-12 は横瓶である。体部下半は欠損しており、体部上半から口縁部にかけての範囲を確認することができる。全体的には図 98-11 と比較すると小型な作りである。体部は俵状を呈するものと思われ、体部の側部では器面がくぼんでいる痕跡が認められる。口縁部は強く外反しながら立ち上がり、口縁端部は外側を向く。体部の外面には平行タタキが施され、内面には青海波紋状の当具痕跡が残る。頸部から口縁部にかけては横位のナデによって整えられており、口縁部内面ならびに肩部付近には自然釉が見られる。

これらの須恵器のうちある程度の編年的な位置付けが可能なものは図 99-11 で図示した甕がある。この甕は口縁部の形状、調整ならびに器形的な特徴を見ると、善光寺Ⅲ式に相当する可能性があり、当溝跡出土遺物については善光寺Ⅲ式である 7 世紀前半段階の年代が与えられる。

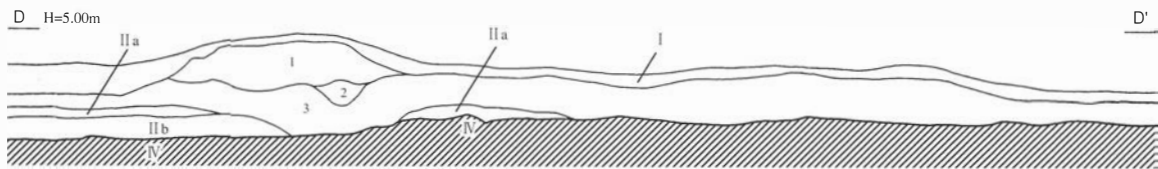
土塁 図 92・94・100

位置 G 7-07~G 8-15 グリッド **重複関係** 土塁の西側の覆土が糠塚の北側覆土の上ののっている。**主軸方位** W-8.5° -N を示す東西方向 **規模** 東西 47m 分を確認している。現況地表で計測して基底部幅 4.5~6.0m、上面幅 2~3m である。高さは、土塁南側で計測して 0.75m、土塁北側で 1.25m を測る。また、断ち割り調査を行なった結果、基底部下で旧表土層を確認しており、この旧表土層上面から土塁の積土頂部までの高さは 1.9m を測る。**積土** 暗褐色土・黒褐色土を、20~50cm の厚さで積み重ねている。**備考** トレンチ断面では、土塁北側部分の積土がやや直に切られている状況が観察された。旧表土層は土塁北側まで水平に続いており、堀のような施設は伴っていない。土塁は沖積地内に島状にのこる微高地の北側縁に接して東西に走っており、この微高地上の区域を区画していたものと思われる。調査区内では多数のピットが確認され、これらは区画内に営まれた建物跡の可能性もある。土塁西端に接する位置にある塚では、盛り土の東半が大きく削り取られており、また後世に盛り土が一部積み足されていることから、屋敷地を区画するために利用された可能性もある。



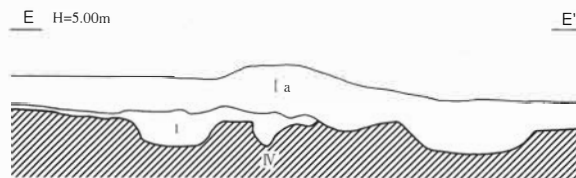
- 土層 5 T
- I 黒褐色土 表土
 - 1 黒褐色土
 - 2 暗黄褐色土 黄褐色土と黒色土の混合土。
 - 3 黒褐色土
 - 4 暗黄褐色土 黄褐色土と黒色土の混合土。
 - 5 黒褐色土
 - II a 暗褐色土
 - II b 黒褐色土
 - III 黄褐色土

6号トレンチ



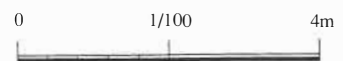
- 土層 6 T
- 1 暗褐色土 しまりなし。近代の互礫を含む。
 - 2 黄褐色土 しまりなし。近代の互礫を含む。
 - 3 暗褐色土 黄褐色土粒を少量含む。
 - I 暗褐色土 表土
 - II a 黒褐色土
 - II b 暗褐色土
 - III 黄褐色土
 - IV 礫層
- この土層状の遺構は近代の屋敷造成に伴って築かれたもの。

7号トレンチ



- 土層 7 T
- 1 暗褐色土 黄褐色土粒を多く含む。しまりなし。近代の屋敷跡に伴う土坑と考えられる。
- ※ 土層状の高まりは近代の屋敷に伴うもの。近代の互礫等が出土。

図100 土層 土層断面



第2項 掘立柱建物跡・柵列跡

(1) 掘立柱建物跡

23号掘立柱建物跡 (SB23) 図101~103

位置 G8-18・19・28・29・38・39・48・49、G9-10・20・30・40 グリッド **重複関係** 24号掘立柱建物跡より新しい。**主軸方位** 西側桁行柱列で計測してN-1.5°-Eを示す南北棟建物である。**平面形式** 桁行5間×梁行4間の側柱建物である。**規模** 2時期あり、建替後の規模は桁行総長15.7m、梁行総長10.0mである。柱間寸法は、東側梁行が北から3.8m+3.0+2.8m+3.0m+3.1m、西側梁行が北から3.5m+3.2m+2.8m+3.0m+3.2mである。南側桁行は西から2.3m+2.5m+2.4m+2.4m、北側桁行は西から2.4m+2.5m+2.3m+2.5mである。**柱穴** 18個を確認した。掘方は基本的に隅丸長方形を呈するが、ややいびつである。埋土は黒色土と黄褐色土の互層であり、版築が認められた。P3・4・6・9・13・15・16・17・18柱穴では底面に柱または礎板の木製品が遺存していた。柱を抜き取っている柱穴が多いが、柱だけ抜き取り、礎板は残した柱穴もみられる。柱が地中に残っているものは、柱に斧状の工具で根本から切り取った痕跡がみられる。**出土遺物** 柱・礎板。 **備考** 古代。2時期あり。

24号掘立柱建物跡 (SB24) 図104・105

位置 G8-38・39・48・49、G9-30・40 グリッド **重複関係** 23号掘立柱建物跡 (SB23) より古い。**主軸方位** N-5°-Wを示す東西棟建物である。**平面形式** 桁行3間×梁行2間の側柱建物である。**規模** 桁行総長6.5m×梁行総長5.0mである。柱間寸法は、東側梁行が北から2.5m+2.5m、西側梁行が北から2.5m+2.5mである。南側桁行は西から2.2m+2.2m+2.1mを測る。北側桁行は西から2.1m+2.1m+2.3mを測る。**柱穴** 10個を確認し掘方は隅丸長方形を呈する。P6柱穴で礎板が遺存していた。 **備考** 古代。

25号掘立柱建物跡 (SB25) 図106

位置 G8-37・38 グリッド **主軸方位** W-4°-Nを示す東西棟建物である。**平面形式** 桁行2間×梁行1間の建物である。なお、北側のG8-17・18・27・28グリッドにある5個の小ピットも関連する柱穴の可能性はある。**規模** 桁行2間×梁行1間の建物であれば、桁行総長5.1m×梁行総長1.7mである。柱間寸法は、南側桁行が2.6m等間、北側桁行が2.6m等間、東側梁行が1.8m、西側梁行が1.4mである。**柱穴** 6個を確認している。掘方は円形・楕円形を呈する。P1・2・6柱穴の底部に直径10~20cmの平滑な石を置いている **備考** 中世の小規模な掘立柱建物跡の可能性はある。

表25 SB23柱穴計測値 (m)

	長軸	短軸	深さ
P1	2.1	2.0	0.6
P2	2.0	2.0	0.5
P3	1.8	1.5	0.9
P4	1.9	1.9	0.9
P5	2.6	1.8	0.6
P6	2.0	1.9	0.7
P7	1.7	1.4	0.5
P8	2.0	1.5	0.5
P9	2.1	1.7	0.5
P10	2.1	1.9	0.6
P11	2.3	1.9	0.7
P12	2.4	1.6	0.7
P13	2.3	1.4	0.5
P14	2.0	1.7	0.7
P15	2.1	1.8	0.7
P16	2.3	1.8	0.7
P17	2.1	1.6	0.5
P18	2.2	1.6	0.8

表26 SB24柱穴計測値 (m)

	長軸	短軸	深さ
P1	1.1	1.1	0.6
P2	1.4	1.3	0.6
P3	1.3	1.1	0.5
P4	1.2	1.1	0.4
P5	1.6	1.3	0.5
P6	1.3	1.2	0.5
P7	1.2	1.1	0.4
P8	1.2	1.1	0.4
P9	1.2	1.2	0.4
P10	1.3	1.3	0.4

表27 SB25柱穴計測 (m)

	長軸	短軸	深さ
P1	0.5	0.4	0.2
P2	0.4	0.4	0.1
P3	0.4	0.4	0.1
P4	0.4	0.3	0.1
P5	0.4	0.3	0.2
P6	0.5	0.3	0.3

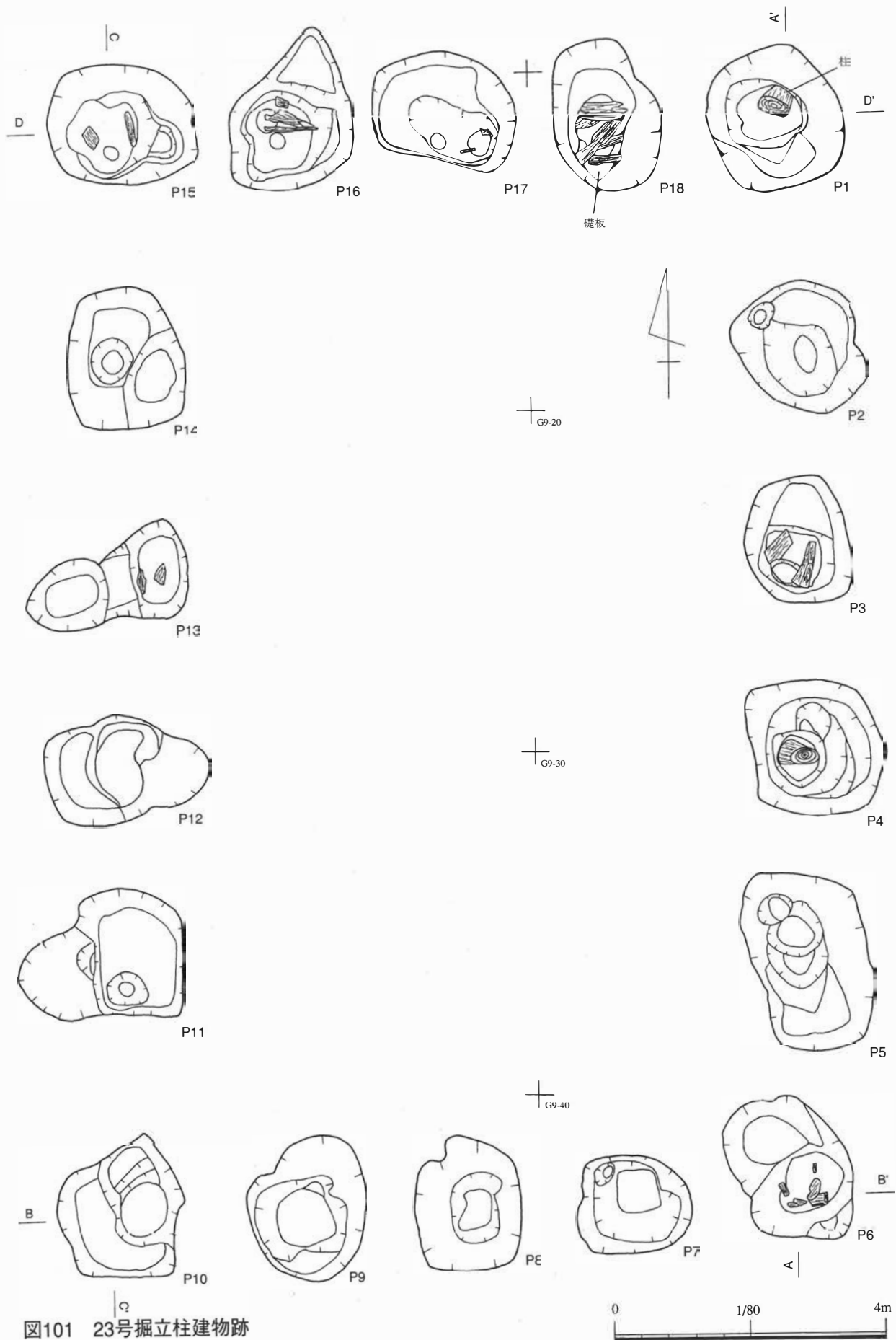


图101 23号掘立柱建物跡



SB23セクション3

- P15
 1 暗褐色土
 2 暗褐色土
 3 暗黄褐色土
 4 暗褐色土
 5 暗黄褐色土
 6 暗褐色土
 7 暗黄褐色土
 8 暗黄褐色土
 9 暗褐色土
 礎板

- P14
 1 暗褐色土
 2 暗黄褐色土
 3 暗褐色土
 4 暗黄褐色土
 5 暗褐色土
 6 暗黄褐色土
 7 暗褐色土

- P13
 1 暗褐色土
 2 暗黄褐色土
 3 暗褐色土
 4 暗黄褐色土
 5 暗褐色土
 6 暗黄褐色土
 7 暗褐色土

- P12
 1 暗褐色土
 2 暗黄褐色土
 3 暗褐色土
 4 暗黄褐色土
 5 暗褐色土
 6 暗黄褐色土
 7 暗褐色土

- P11
 1 暗黄褐色土
 2 暗褐色土
 3 暗黄褐色土
 4 暗褐色土
 5 暗褐色土

- P10
 1 暗褐色土
 2 暗黄褐色土
 3 暗褐色土
 4 暗黄褐色土
 5 暗褐色土

- P10
 1 暗褐色土
 2 暗黄褐色土
 3 暗褐色土
 4 暗黄褐色土
 5 暗褐色土

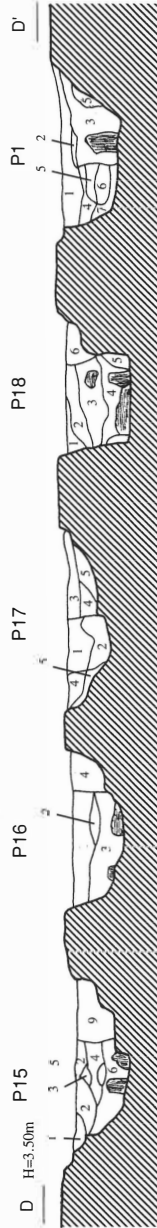
- P14
 1 暗褐色土
 2 暗黄褐色土
 3 暗褐色土
 4 暗黄褐色土
 5 暗褐色土

- P13
 1 暗褐色土
 2 暗黄褐色土
 3 暗褐色土
 4 暗黄褐色土
 5 暗褐色土

- P12
 1 暗褐色土
 2 暗黄褐色土
 3 暗褐色土
 4 暗黄褐色土
 5 暗褐色土
 6 暗黄褐色土
 7 暗褐色土

- P11
 1 暗黄褐色土
 2 暗褐色土
 3 暗黄褐色土
 4 暗褐色土
 5 暗褐色土

- P10
 1 暗褐色土
 2 暗黄褐色土
 3 暗褐色土
 4 暗黄褐色土
 5 暗褐色土



SB23セクション4

- P15
 1 暗褐色土
 2 暗黄褐色土
 3 暗褐色土
 4 暗黄褐色土
 5 暗褐色土
 6 暗黄褐色土
 7 暗褐色土
 8 暗黄褐色土
 9 暗褐色土
 礎板

- P14
 1 暗褐色土
 2 暗黄褐色土
 3 暗褐色土
 4 暗黄褐色土
 5 暗褐色土
 6 暗黄褐色土
 7 暗褐色土

- P13
 1 暗褐色土
 2 暗黄褐色土
 3 暗褐色土
 4 暗黄褐色土
 5 暗褐色土
 6 暗黄褐色土
 7 暗褐色土

- P12
 1 暗褐色土
 2 暗黄褐色土
 3 暗褐色土
 4 暗黄褐色土
 5 暗褐色土
 6 暗黄褐色土
 7 暗褐色土

- P11
 1 暗黄褐色土
 2 暗褐色土
 3 暗黄褐色土
 4 暗褐色土
 5 暗褐色土

- P10
 1 暗褐色土
 2 暗黄褐色土
 3 暗褐色土
 4 暗黄褐色土
 5 暗褐色土

- P10
 1 暗褐色土
 2 暗黄褐色土
 3 暗褐色土
 4 暗黄褐色土
 5 暗褐色土

図103 23号掘立柱建物跡土層断面図(2)

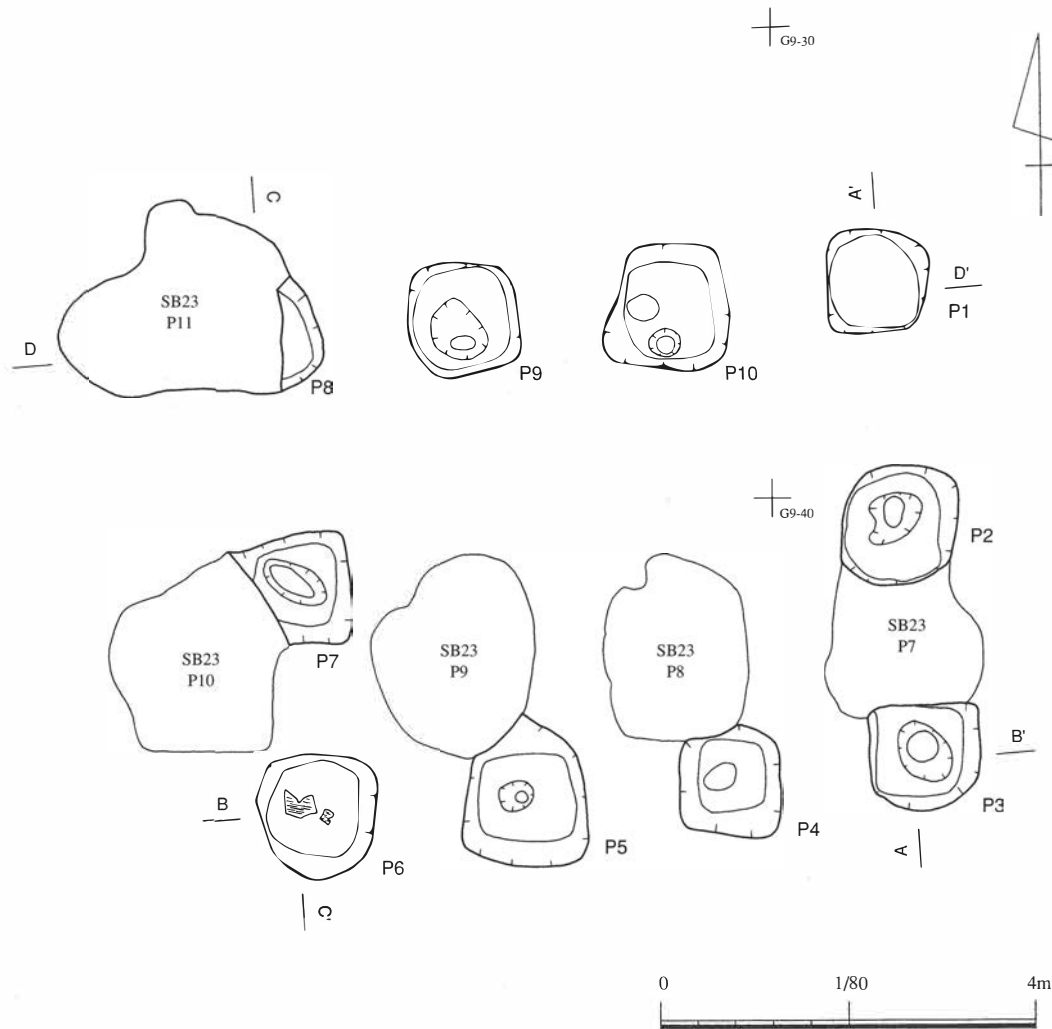


図104 24号掘立柱建物跡

26号掘立柱建物跡 (SB26) 図107

位置 G8-23・24・33・34 グリッド **重複関係** 28号掘立柱建物跡より新しい。**主軸方位** W-3°-Sを示す東西棟建物と考えられる。**平面形式** コーナー部分の柱穴を重複して数えると、東側梁行に5個のピット、西側梁行に4個のピット、北側桁行に6個のピットがあるが、南側には柱穴と考えられるピットは検出できなかった。なお、北側にも北辺に平行するピット列があり、関連する柱穴の可能性はある。

規模 桁行総長 8.0m × 梁行総長 4.9mである。柱間寸法は、北側桁行が西から 1.9m + 2.1m + 2.0m + 2.0m、東側梁行が北から 1.5m + 1.7m + 1.7m、西側梁行が北から 1.7m + 1.5m + 1.7mである。**柱穴** 11個を確認している。掘方は円形・楕円形を呈する。**出土遺物** なし

備考 中世の小規模な掘立柱建物跡の可能性はある。

表28 SB26柱穴計測値(m)

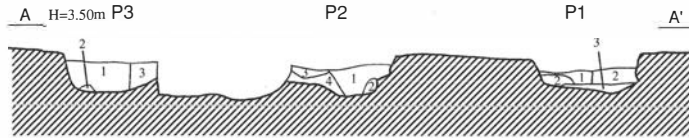
	長軸	短軸	深さ
P 1	0.5	0.4	0.3
P 2	0.6	0.4	0.2
P 3	0.5	0.4	0.3
P 4	0.7	0.6	0.5
P 5	0.6	0.5	0.5
P 6	0.7	0.5	0.2
P 7	0.8	0.7	0.3
P 8	0.3	0.3	0.4
P 9	0.6	0.6	0.4
P 10	0.4	0.3	0.3
P 11	0.4	0.4	0.2

SB24

P3

- 1 黒褐色土
- 2 黄褐色土
- 3 黒褐色土

柱抜取痕。
柱抜取痕。
黄褐色土ブロックを多く含む。柱穴掘り方。



P2

- 1 黒褐色土
- 2 暗黄褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗黄褐色土

柱抜取跡。
黄褐色土主体。黒褐色土を含む。柱穴掘り方。
黄褐色土ブロックを多く含む。柱穴掘り方。
柱穴掘り方。

P1

- 1 暗黄褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 暗黄褐色土

黄褐色土主体。黒褐色土を含む。柱抜取痕。
柱穴掘り方。
柱穴掘り方。

P6

- 1 黒褐色土
- 2 "
- 3 黄褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 暗黄褐色土

柱抜取痕。
黄褐色土粒を含む。柱抜取痕。
柱抜取痕。
黄褐色土粒を含む。柱穴掘り方。
柱穴掘り方。
(旧)
SB23
P8 → P11

P5

- 1 黒褐色土
- 2 暗黄褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗黄褐色土

柱抜取痕。
黄褐色土と黒褐色土の混合土。柱穴掘り方。
柱穴掘り方。
柱穴掘り方。

P4

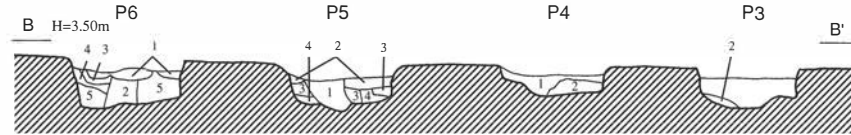
- 1 黒褐色土
- 2 黄褐色土

黄褐色土粒を含む。
ブロックの間に黒褐色土を含む。

P3

- 1 黒褐色土
- 2 暗黄褐色土

黄褐色土粒を含む。



P8

※ SB23・P11に切られている。

P7

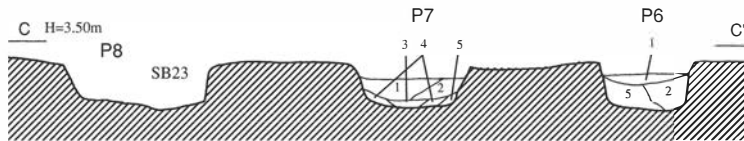
- 1 黒褐色土
- 2 暗黄褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗黄褐色土
- 5 黒褐色土

黄褐色土ブロックを多く含む。
黄褐色土ブロックを多量に含む。
黄褐色土粒を含む。
黄褐色土主体。黒褐色土を含む。
黄褐色土粒を含む。

P6

- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 暗黄褐色土

柱抜取痕。
柱抜取痕。
黄褐色土粒。



P8

- 1 暗黄褐色土
- 2 黒褐色土

黄褐色土ブロックと黒褐色土の混合土。

P10

- 1 黒褐色土
- 2 暗黄褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗黄褐色土

黄褐色土粒を含む。
黄褐色ブロックを多く含む。
黄褐色土粒を含む。
黄褐色ブロックを多く含む。柱穴掘り方。

P1

- 1 黒褐色土
- 2 黄褐色土

柱抜取痕。
柱抜取痕。
柱穴掘り方。
柱穴掘り方。
黄褐色土ブロックを含む。
黒褐色土ウオ少量含む。

P9

- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 暗黄褐色土
- 4 黄褐色土
- 5 黒褐色土

黄褐色土粒を含む。柱抜取痕。
黄褐色土粒を多く含む。柱抜取痕。
黄褐色ブロック主体。

P8

※ SB23・P11に切られている。

P1

- 1 黒褐色土
- 2 黄褐色土

柱抜取痕。
柱抜取痕。
柱穴掘り方。
柱穴掘り方。
黄褐色土ブロックを含む。
黒褐色土ウオ少量含む。

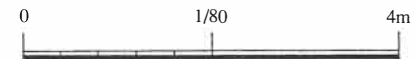
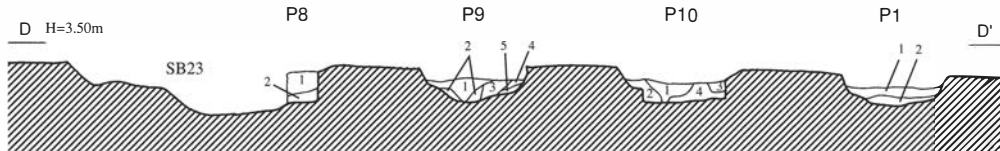


図105 24号掘立柱建物跡土層断面図

28号掘立柱建物跡 (S B 28) 図 108~110

位置 G 8-01・02・11・12・21・22・31・32 グリッド **重複関係** 12号溝跡・6号土坑・36号土坑より古い。28号掘立柱建物跡だけでも3時期の建て替えがあり、徐々に東に拡張されている。**主軸方位** 1時期目の柱穴は2度の建て替えによって削られ、東側桁の3基の柱穴が残るのみで、不明である。2時期目の西側桁行柱列で計測してN-1.5°-Eを示し、3時期目の西側桁行柱列で計測してN-1°-Wを示す南北棟建物である。**平面形式** 2時期目は桁行5間×梁行3間の側柱建物である。3時期目は桁行4間×梁行3間の側柱建物である。**規模** 2時期目の規模は桁行総長11.9m、梁行総長6.6mである。柱間寸法は、東側桁行が北から2.4m+2.4m+2.0m+2.7m+2.4m、西側桁行が北から2.7m+2.0m+2.4m+2.2m+2.6m、南側梁行は西から2.2m+2.0m+2.4m、北側梁行は西から2.3m+2.0m+2.3mである。3時期目の規模は桁行総長12.2m、梁行総長7.4mである。柱間寸法は、東側桁行が北から3.0m+3.2m+3.1m+2.9m、西側桁行が北から3.0m+3.0m+3.1m+3.1m、南側梁行は西から2.6m+2.3m+2.5m、北側梁行は西から2.5m+2.4m+2.5mである。**柱穴** 33個を確認した。3期目の柱穴はP 1~14柱穴、2期目の柱穴はP 15~30柱穴、1期目の柱穴はP 31~33柱穴である。掘方は基本的に隅丸方形を呈するが、東へ若干の拡張をして建て替えているために柱穴が重なって不整形である。埋土は黒色土と黄褐色土の互層であり、版築が認められた。**出土遺物** 図化できる遺物は出土しなかった。**備考** 古代。3時期。

表 29 S B 28 柱穴計測表 (m) 1 期

	長軸	短軸	深さ
P 31	0.9	0.8	0.4
P 32	0.9	0.9	0.3
P 33	1.0	0.8	0.4

表 30 S B 28 柱穴計測値 (m) 2 期

	長 軸	短 軸	深 さ
P 15	1.0	0.7	0.5
P 16	0.9	0.9	0.3
P 17	1.3	1.1	0.6
P 18	1.1	1.0	0.5
P 19	1.3	1.2	0.5
P 20	1.8	1.0	0.5
P 21	1.7	1.5	0.6
P 22	不明	不明	不明
P 23	1.4	1.1	0.8
P 24	1.2	1.1	0.5
P 25	1.5	1.3	0.4
P 26	1.2	1.1	0.4
P 27	1.4	1.1	0.7
P 28	1.0	0.8	0.5
P 29	1.1	0.9	0.9
P 30	1.2	1.2	0.6

表 31 S B 28 柱穴計測 (m) 3 期

	長 軸	短 軸	深 さ
P 1	1.1	1.1	0.1
P 2	1.2	1.2	0.3
P 3	1.4	1.3	0.5
P 4	1.3	1.1	0.3
P 5	1.5	1.5	0.3
P 6	1.4	1.3	0.5
P 7	1.7	1.6	0.5
P 8	1.5	1.0	0.6
P 9	1.3	1.0	0.6
P 10	1.2	1.2	0.3
P 11	1.2	1.2	0.7
P 12	1.4	1.1	0.7
P 13	1.3	1.3	0.4
P 14	1.2	1.1	0.3

29号掘立柱建物跡 (SB29) 図111・112

位置 G8-68・69・78・79・88・89、G9-60・70・80グリッド **重複関係** なし **主軸方位** 西側桁行柱列で計測してN-1.4°-Eを示す南北棟建物である。**平面形式** 桁行5間×梁行3間の側柱建物である。**規模** 桁行総長12.8m、梁行総長7.3mである。柱間寸法は、東側桁行が北から2.7m+2.4m+2.2m+2.7m+2.8m、西側桁行が北から2.8m+2.3m+2.4m+2.6m+2.7m、南側梁行は西から2.7m+2.1m+2.5m、北側梁行は西から2.2m+2.5m+2.6mである。**柱穴** 16個を確認した。掘方は円形・楕円形・隅丸方形を呈する。埋土は黒色土と黄褐色土の互層であり、版築が認められた。**備考** 古代。2時期あり。

表32 SB29柱穴計測値(m)

	長軸	短軸	深さ
P 1	1.1	0.6	0.2
P 2	1.1	0.7	0.2
P 3	0.8	0.6	0.3
P 4	1.4	0.9	0.3
P 5	1.4	0.8	0.4
P 6	1.3	1.3	0.3
P 7	0.8	0.8	0.3
P 8	0.7	0.8	0.2
P 9	0.9	0.7	0.4
P 10	1.0	0.7	0.2
P 11	0.9	0.8	0.2
P 12	1.2	0.7	0.3
P 13	1.1	0.8	0.3
P 14	1.2	1.2	0.4
P 15	0.7	0.6	0.2
P 16	1.2	1.0	0.5

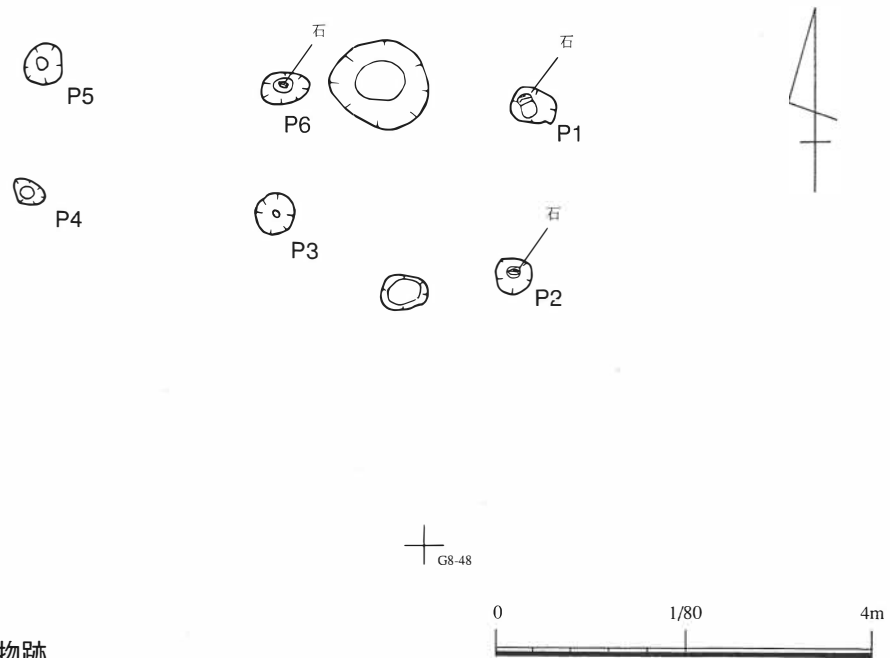


図106 25号掘立柱建物跡

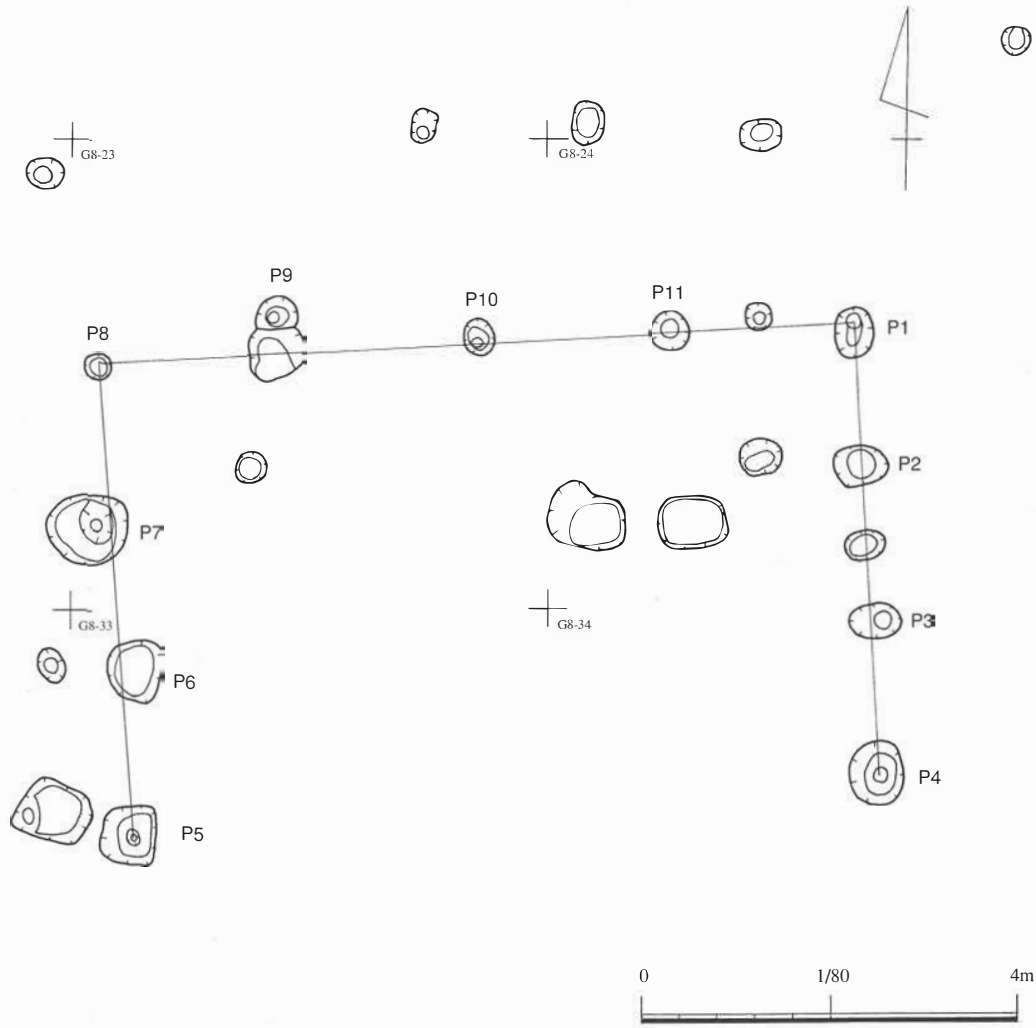


图107 26号掘立柱建物跡

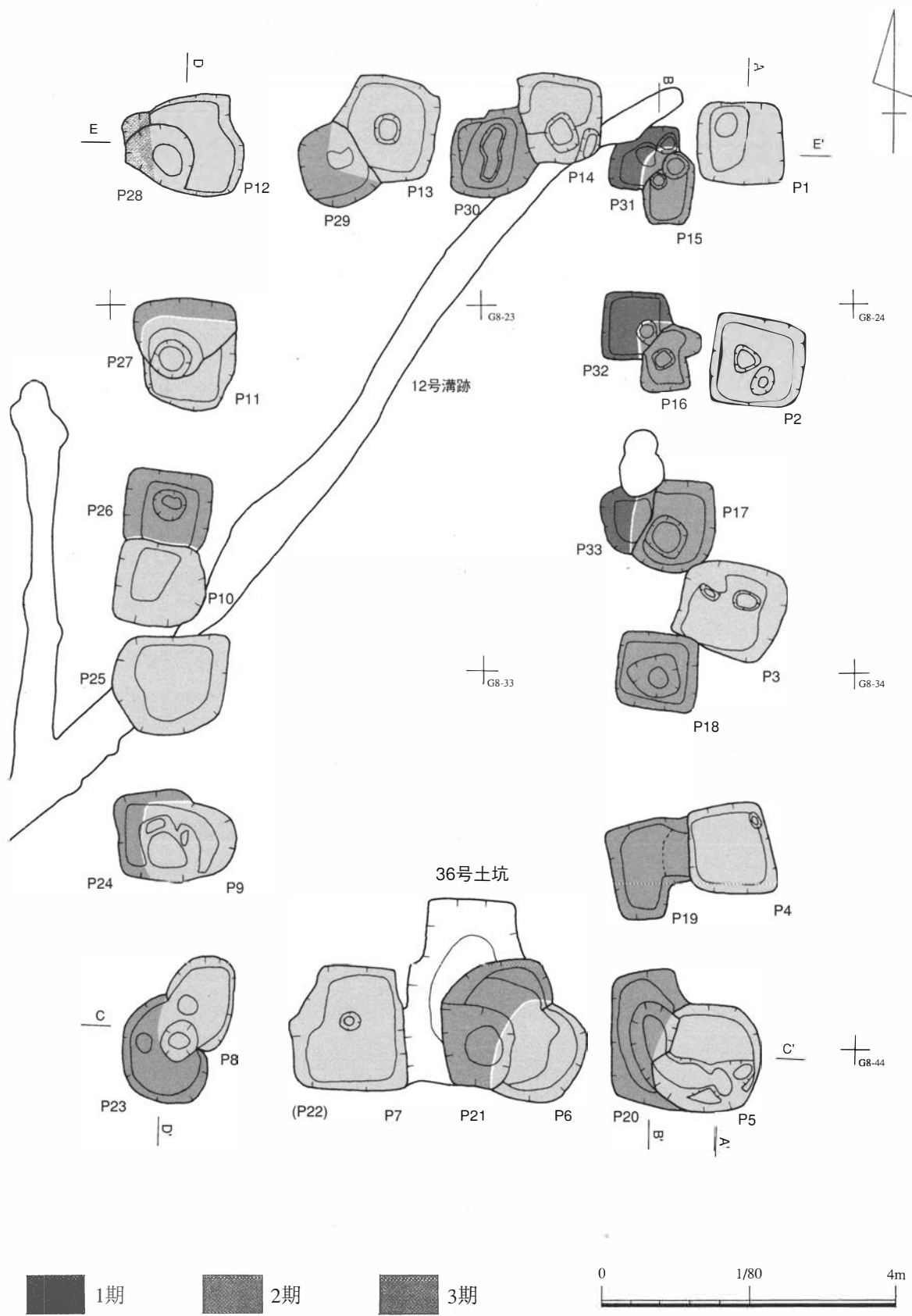


图108 28号掘立柱建物迹、36号土坑

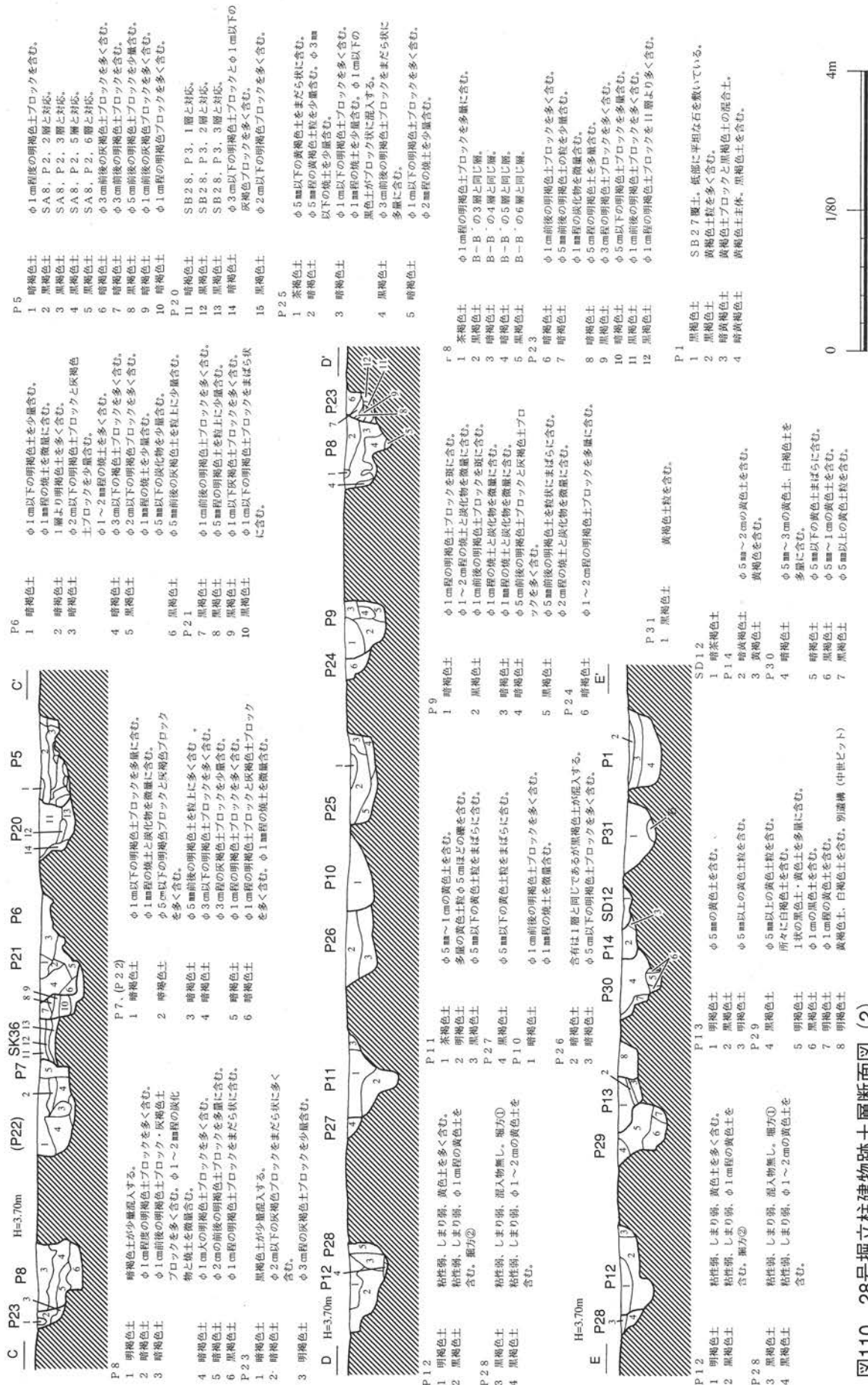


図110 28号掘立柱建物跡土層断面図 (2)

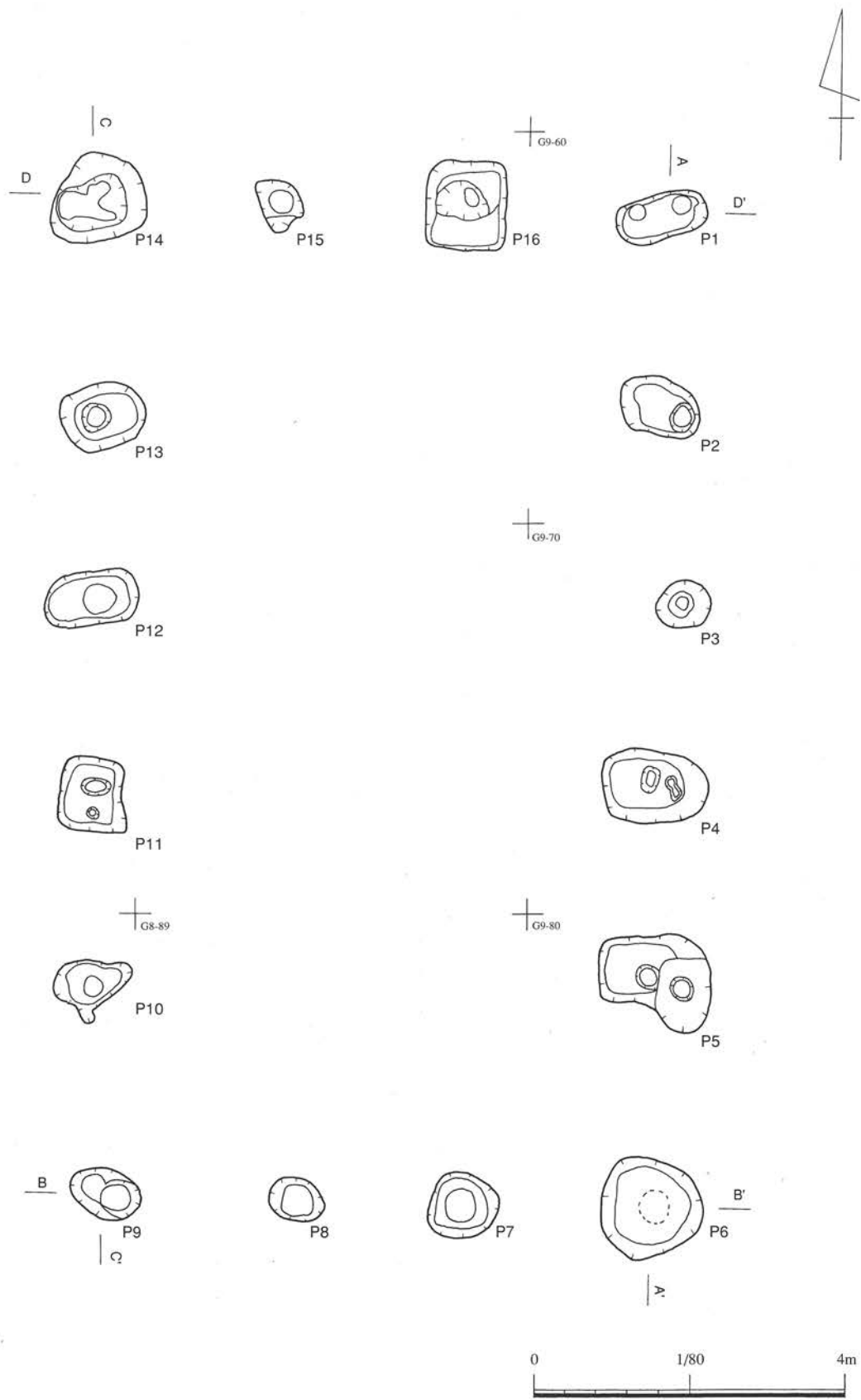
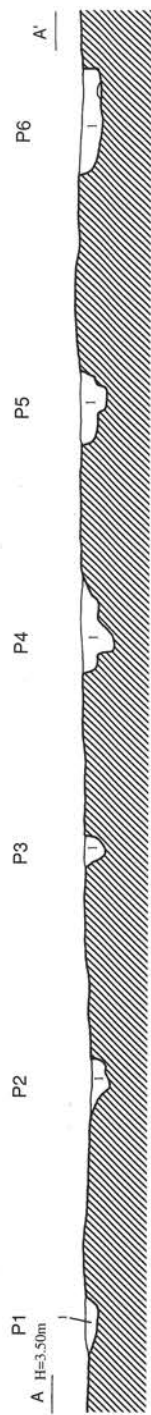


图111 29号掘立柱建物跡



SB 29

1 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。



1 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。



1 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。



(新) 別ヒット 0 黒色土 黄褐色土粒を少量含む。
 (旧) SB 29 1 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。
 2 明黄褐色土 黄褐色土粒を多量に含む。

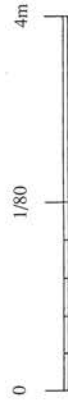


図112 29号掘立柱建物跡土層断面図

30号掘立柱建物跡 (SB30) 図113・114

位置 H8-09・19、H9-00・10グリッド **重複関係** なし **主軸方位** 西側桁行柱列で計測してN-0°-Eを示す南北棟建物である。**平面形式** 桁行4間×北側梁行3間(南側梁行2間)の側柱建物である。柱間から考えると、P3柱穴とP4柱穴の間と、P6柱穴とP7柱穴の間にそれぞれ1基づつ柱穴があったと考えられるが、現代の水路に削平されて残存していなかった。**規模** 桁行総長9.5m、梁行総長5.4mである。柱間寸法は、東側桁行が北から2.3m+2.4m+4.8m、西側桁行が北から2.4m+3.0m+4.2m、南側梁行は西から1.9m+3.5m、北側梁行は西から1.8m+1.8+1.8mである。**柱穴** 11個を確認した。掘方は円形・楕円形・隅丸方形を呈する。埋土は黒色土と黄褐色土の互層であり、版築が認められた。**出土遺物** なし **備考** 古代。

表33 SB30柱穴計測値(m)

	長軸	短軸	深さ
P1	1.3	1.2	0.4
P2	1.1	1.0	0.4
P3	1.5	1.0	0.4
P4	1.1	1.0	0.4
P5	1.2	1.1	0.2
P6	0.9	0.8	0.3
P7	1.0	1.0	0.5
P8	1.3	1.2	0.5
P9	1.5	1.1	0.4
P10	1.3	1.1	0.3
P11	1.1	0.8	0.3

31号掘立柱建物跡 (SB31) 図115・116

位置 H8-09・19、H9-00・10グリッド **重複関係** なし **主軸方位** 西側桁行柱列で計測してN-8°-Eを示す南北棟建物である。**平面形式** 桁行4間×北側梁行2間の側柱建物である。**規模** 桁行総長8.4m、梁行総長5.1mである。柱間寸法は、東側桁行が北から2.0m+2.3m+2.1m+2.1m、西側桁行が北から2.1m+2.0m+2.4m+1.9m、南側梁行は西から2.5m+2.6m、北側梁行は西から2.9m+2.2mである。**柱穴** 12個を確認した。掘方は隅丸長方形を呈する。埋土は黒色土と黄褐色土の互層であり、版築が認められた。**出土遺物** なし **備考** 古代。

表34 SB31柱穴計測値(m)

	長軸	短軸	深さ
P1	1.1	0.8	0.4
P2	1.1	1.0	0.4
P3	1.2	0.8	0.4
P4	1.2	0.9	0.4
P5	1.4	1.1	0.5
P6	1.5	0.9	0.5
P7	0.9	0.9	0.5
P8	1.1	1.0	0.4
P9	1.2	1.2	0.5
P10	1.2	1.0	0.5
P11	1.3	1.0	0.3
P12	1.3	1.1	0.4

32号掘立柱建物跡 (SB32) 図117・118

位置 G8-62・63・72・73・82・83グリッド **重複関係** なし **主軸方位** 西側桁行柱列で計測してN-0°-Eを示す南北棟建物である。**平面形式** 桁行5間×梁行3間の側柱建物である。**規模** 桁行総長12.0m、梁行総長6.1mである。柱間寸法は、東側桁行が北から2.4m+2.4m+2.4m+2.3m+2.5m、西側桁行が北から2.6m+2.3m+2.6m+2.3m+2.2m、南側梁行は西から2.1m+2.1m+1.9m、北側梁行は西から2.0m+2.1m+2.0mである。**柱穴** 16個を確認した。掘方は隅丸方形または隅丸長方形を呈する。埋土は黒色土と黄褐色土の互層であり、版築が認められた。**出土遺物** なし **備考** 古代。

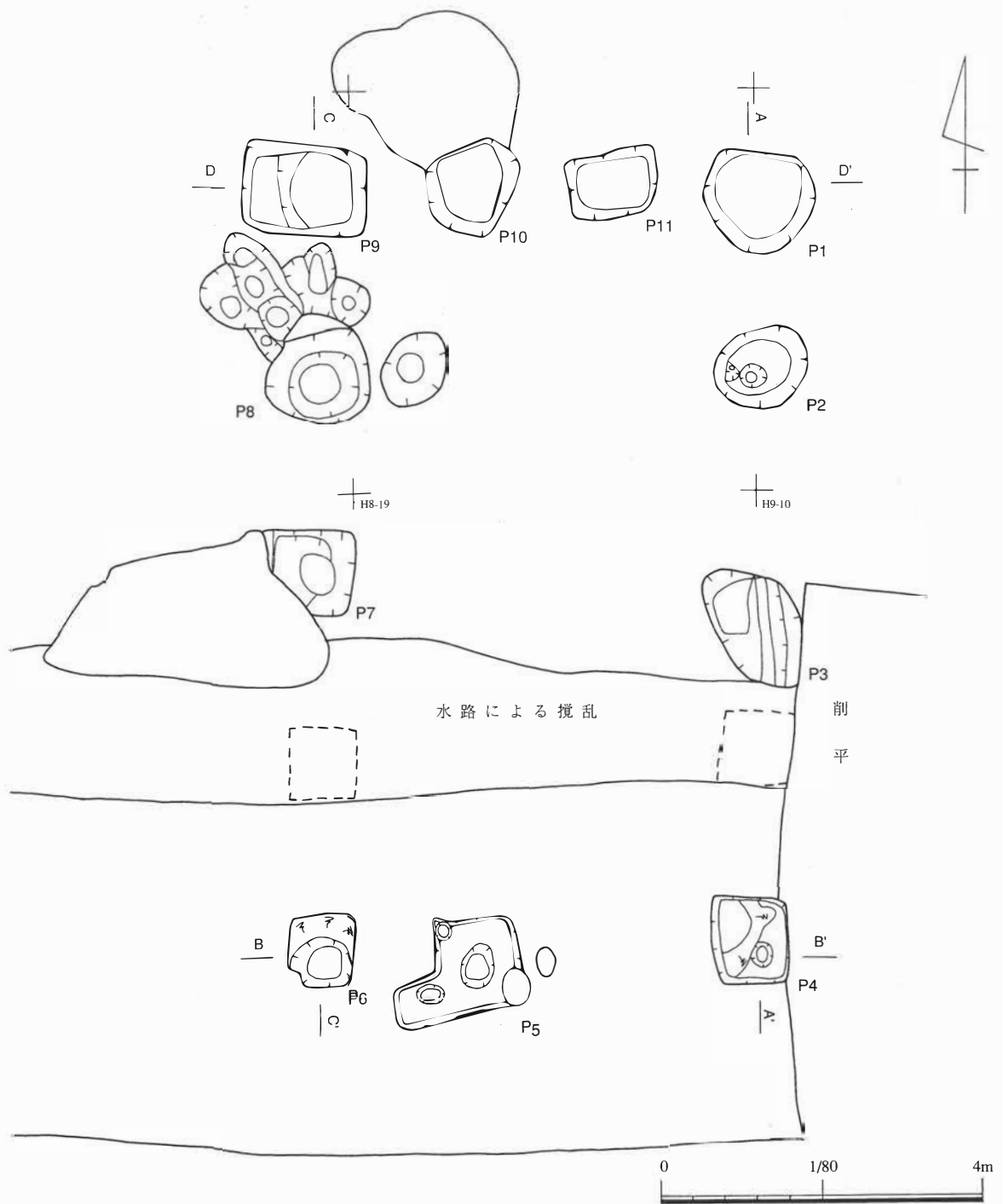
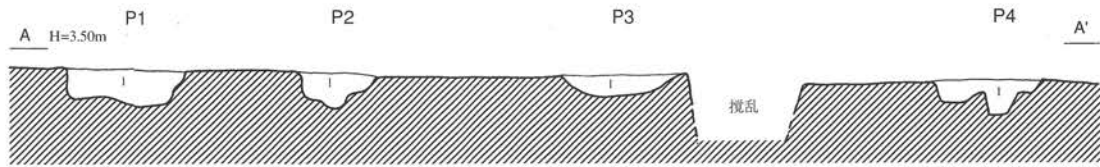
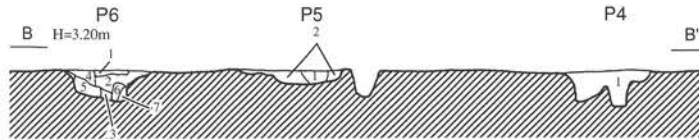


図113 30号掘立柱建物跡



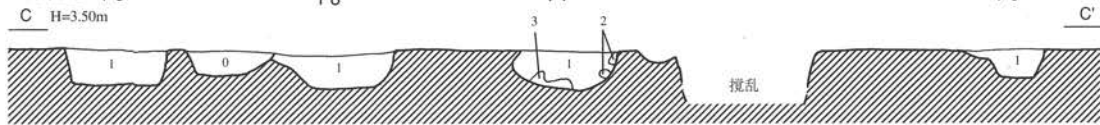
SB30
P1~P4
1 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。



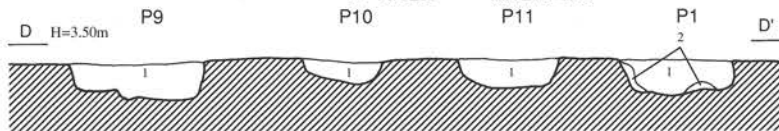
P6
1 黄褐色土
2 灰褐色土
3 茶褐色土
4 灰褐色土 φ1mmほどの黄褐色土ブロックをまばらに含む。
5 黄褐色土 φ1mmほどの黄褐色土ブロックをまばらに含む。
6 灰褐色土 φ2~3mmの黒褐色ブロック、黄褐色ブロックを少量含む。
7 明黄褐色土

P5
1 灰褐色土 φ1cmほどの黄褐色ブロックを少量含む。
2 灰褐色土 φ1cmほどの黄褐色ブロック、φ5mmほどの黄褐色ブロックを含む。

P4
1 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。



P9~P6
(新) 別ビット 0 黒色土 黄褐色土粒を少量含む。
(旧) SB29 1 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。
2 暗黄褐色土 黄褐色土と黒色土の混合土。
3 黄褐色土 黒褐色土を含む。



P9~P1
1 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。
2 暗黄褐色土 黄褐色土と黒色土の混合土。



図114 30号掘立柱建物跡土層断面図

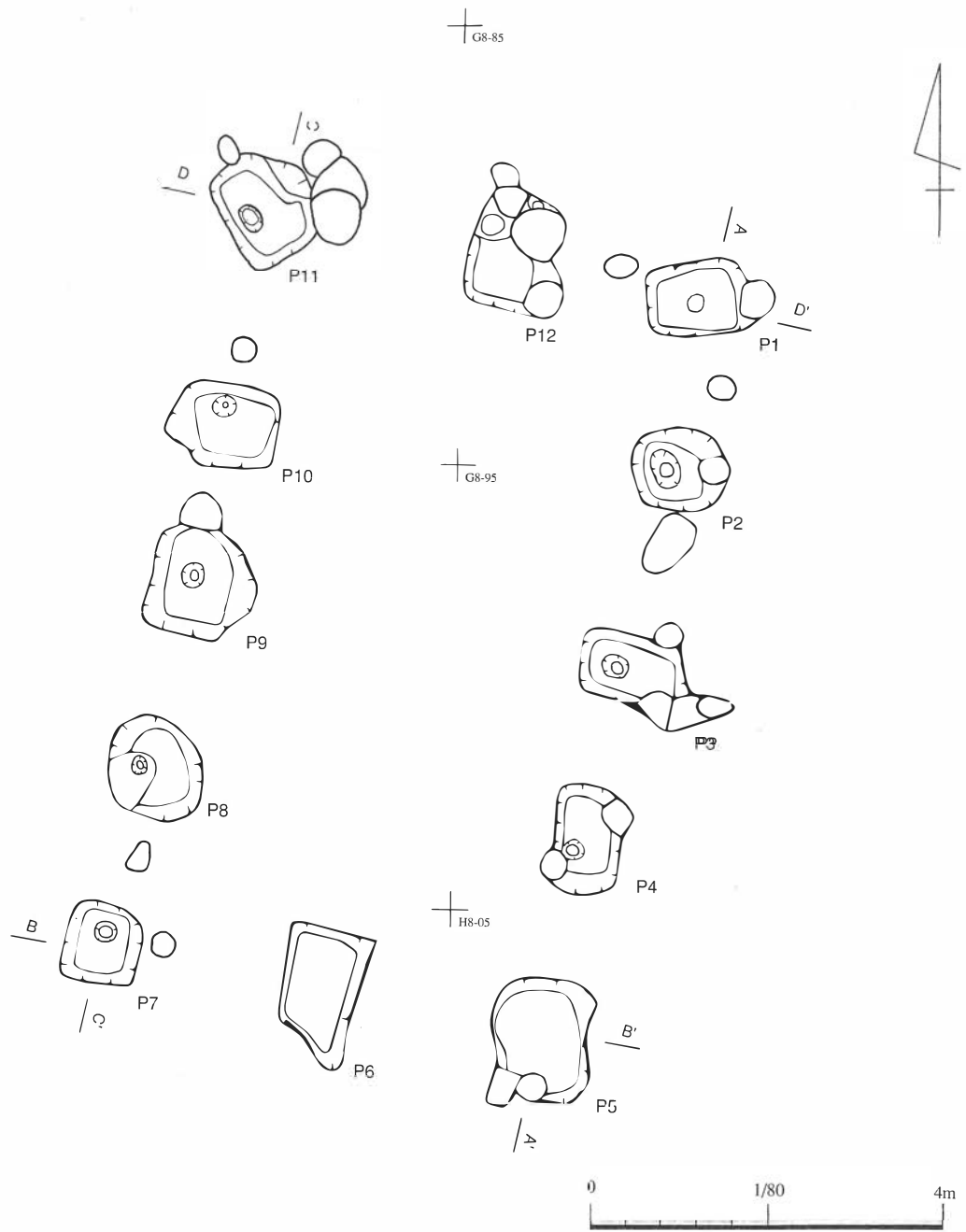
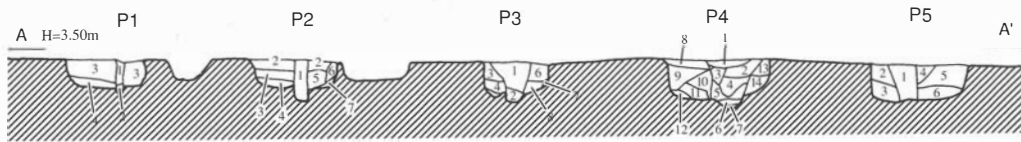


图115 31号掘立柱建物迹



SB 3 1

P 1

- 1 灰褐色土
- 2 茶褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗黄褐色土

P 2

- 1 黒褐色土
- 2 茶褐色土
- 3 灰褐色土
- 4 暗灰褐色土
- 5 3と同じ
- 6 灰褐色土
- 7 暗灰褐色土

P 3

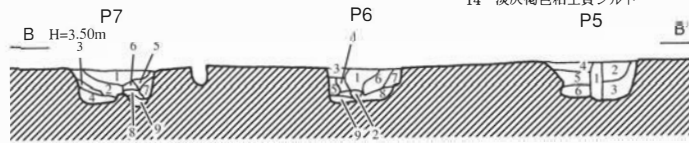
- 1 灰褐色土
- 2 暗灰褐色土
- 3 灰褐色土
- 4 灰褐色土
- 5 黒褐色土
- 6 茶褐色土
- 7 褐色土
- 8 灰褐色土

P 4

- 1 茶褐色シルト
- 2 暗茶褐色シルト
- 3 灰褐色粘土質シルト
- 4 暗灰褐色粘土
- 5 黒灰褐色粘土
- 6 黒灰褐色粘土
- 7 黒褐色粘土
- 8 暗褐色粘土質シルト
- 9 にぶい黄褐色粘土
- 10 9と同じ
- 11 9と同じ
- 12 黒褐色粘土
- 13 暗褐色シルト
- 14 淡灰褐色粘土質シルト

P 5

- 1 灰褐色土
- 2 灰褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 灰褐色土
- 5 茶褐色土
- 6 黒褐色土



P 7

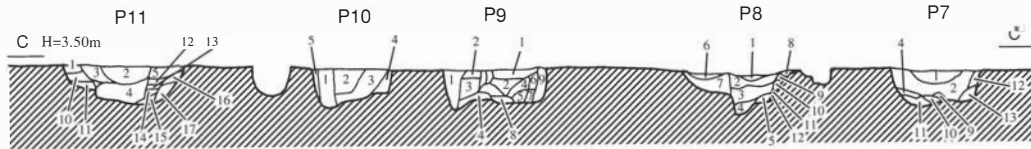
- 1 暗灰褐色土 φ 5mm大の黄褐色ブロックをわずかに含む。
- 0 淡黄褐色砂
- 2 暗黄褐色土
- 3 黒灰褐色土 淡黄褐色砂、黄褐色粒を混入する。

P 6

- 1 灰褐色土 炭少量含む。
- 2 茶褐色土 φ 1mm大の黄褐色粒をまばらに含む。
- 3 黄褐色土 地山崩壊層。
- 4 3と同じ
- 5 灰褐色土 φ 1cm大の黄褐色粒をまばらに含む。
- 6 灰褐色土 φ 2~5cm大の黄褐色ブロックを多く含む。
- 7 淡黄褐色土 φ 1mm~2cm大の黄褐色粒、φ 5mm大の黄褐色ブロックをまばらに含む。

P 5

- 1 灰褐色土 φ 3mm大の黄褐色ブロックをまばらに含む。
- 2 灰褐色土 φ 3cm大の黄褐色ブロックをまばらに含む。
- 3 黒褐色土 φ 2~5cm大の黄褐色ブロックを多く含む。
- 4 灰褐色土 含有物なし。
- 5 茶褐色土 φ 5mm大の黄褐色・淡黄褐色ブロックを多く含む。
- 6 黒褐色土 φ 2~5cm大の黄褐色ブロックを少量含む。



P 11

- 1 黄褐色土 粘土に黒褐色土粘土質ブロック、茶褐色土を混入。
- 2 黄褐色土
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7 灰褐色土 φ 1mm大の黄褐色粒を多く含む。
- 8 黒灰褐色土 φ 1~3mm大の黄褐色ブロックをまばらに含む。
- 9 φ 2~5mm大の黄褐色ブロックを多めに含む。
- 10
- 11

P 10

- 1 黒褐色土
- 2 茶褐色土
- 3 暗灰褐色土
- 4 黄褐色土

P 9

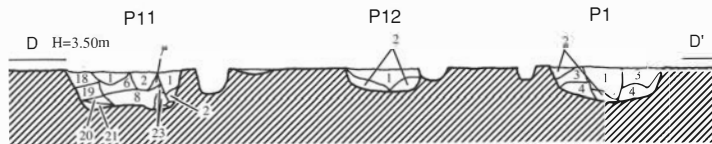
- 1 灰褐色土
- 2 灰褐色土
- 3 にぶい黄褐色土
- 4 暗灰褐色土
- 5 灰褐色土
- 6 灰褐色土
- 7 黄褐色土
- 8 灰褐色土
- 9 青灰褐色土

P 8

- 1 灰褐色土
- 2 灰褐色土
- 3 淡灰褐色土

P 7

- 10 淡黄褐色土
- 11 暗灰褐色土
- 12 暗黄褐色土
- 13 黒灰褐色土



- 12 灰褐色土 φ 3mm大の黄褐色ブロックを多く含む。
- 13 灰褐色土 φ 3mm大の黄褐色ブロックを
- 14 茶褐色土
- 15 暗灰褐色土
- 16 青灰褐色土 φ 2mm大の茶褐色ブロック、茶褐色土をやや多く含む。
- 17 12と同じ
- 18 茶褐色土
- 19
- 20
- 21
- 22 灰褐色土 φ 1mm~1cm大の黄褐色粒をわずかに含む。
- 23 灰褐色土 φ 1~2mm大の黄褐色粒

P 1 2

- 1 暗灰褐色土 φ 1mm大の黄褐色ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 φ 2~3cm大の黄褐色土をまばらに含む。

P 1

- 1 黒褐色土 φ 5mm大の黄褐色ブロックを多く含む。

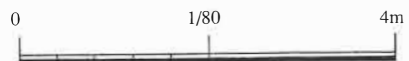


図116 31号掘立柱建物跡

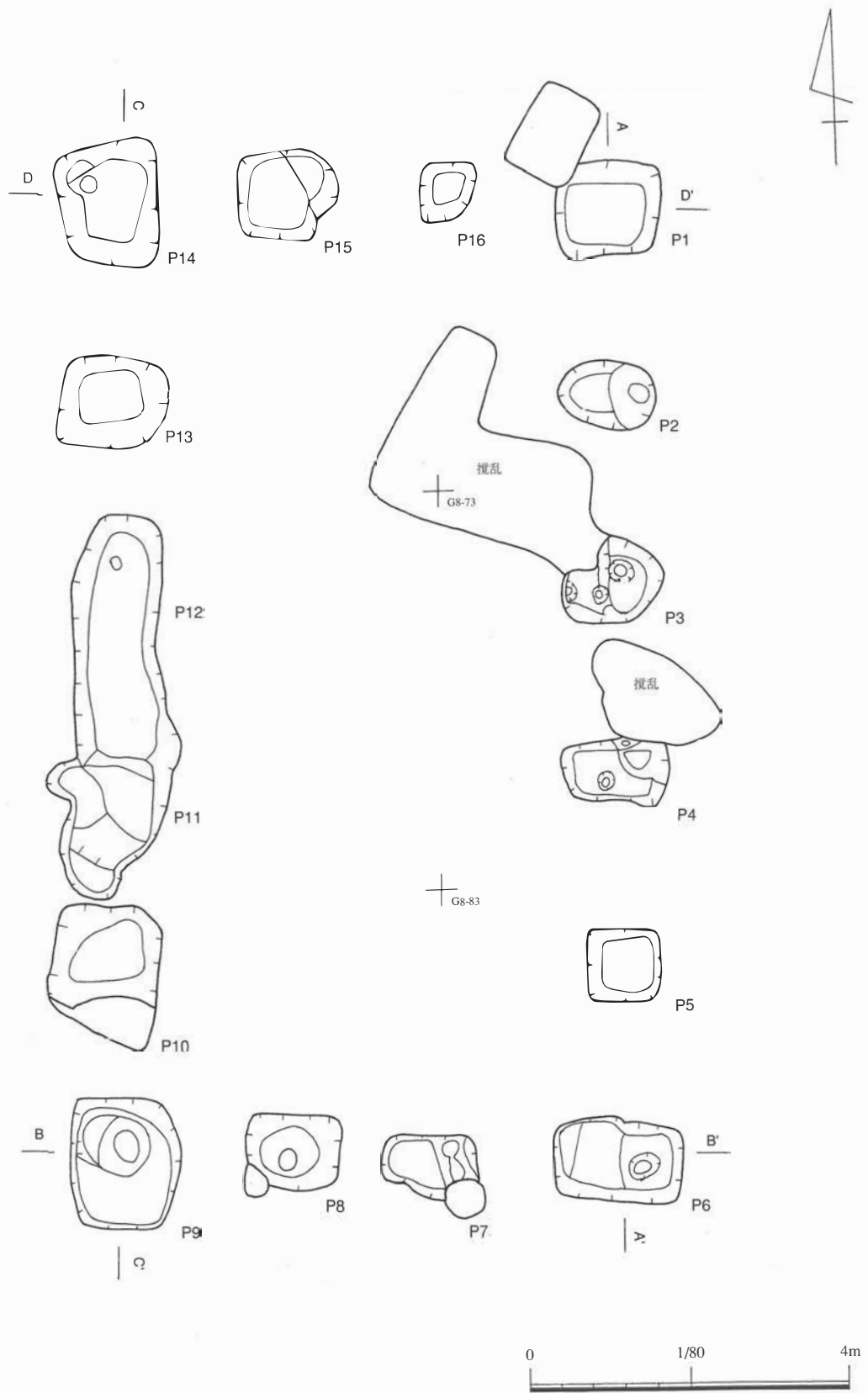


图117 32号掘立柱建物跡



図118 32号掘立柱建物跡 土層断面

33号掘立柱建物跡 (S B 33) 図 119・120

位置 G 7-88・89・98・99、H 7-08・09 グリッド **重複関係** 建物の中に 16号土坑、15号溝跡があるが、新旧関係は不明である。**主軸方位** 西側桁行柱列で計測してN-11°-Eを示す南北棟建物である。**平面形式** 桁行3間×梁行2間の側柱建物である。**規模** 桁行総長5.1m、梁行総長3.9mである。柱間寸法は、東側桁行が北から1.7m+1.6m+1.8m、西側桁行が北から1.8m+1.6m+1.7m、南側梁行は西から1.8m+2.1m、北側梁行は西から1.8m+2.1mである。**柱穴** 10個を確認した。掘方は楕円形を呈する。埋土は黒色土と黄褐色土の互層であり、版築が認められた。**出土遺物** なし **備考** 中世以降。

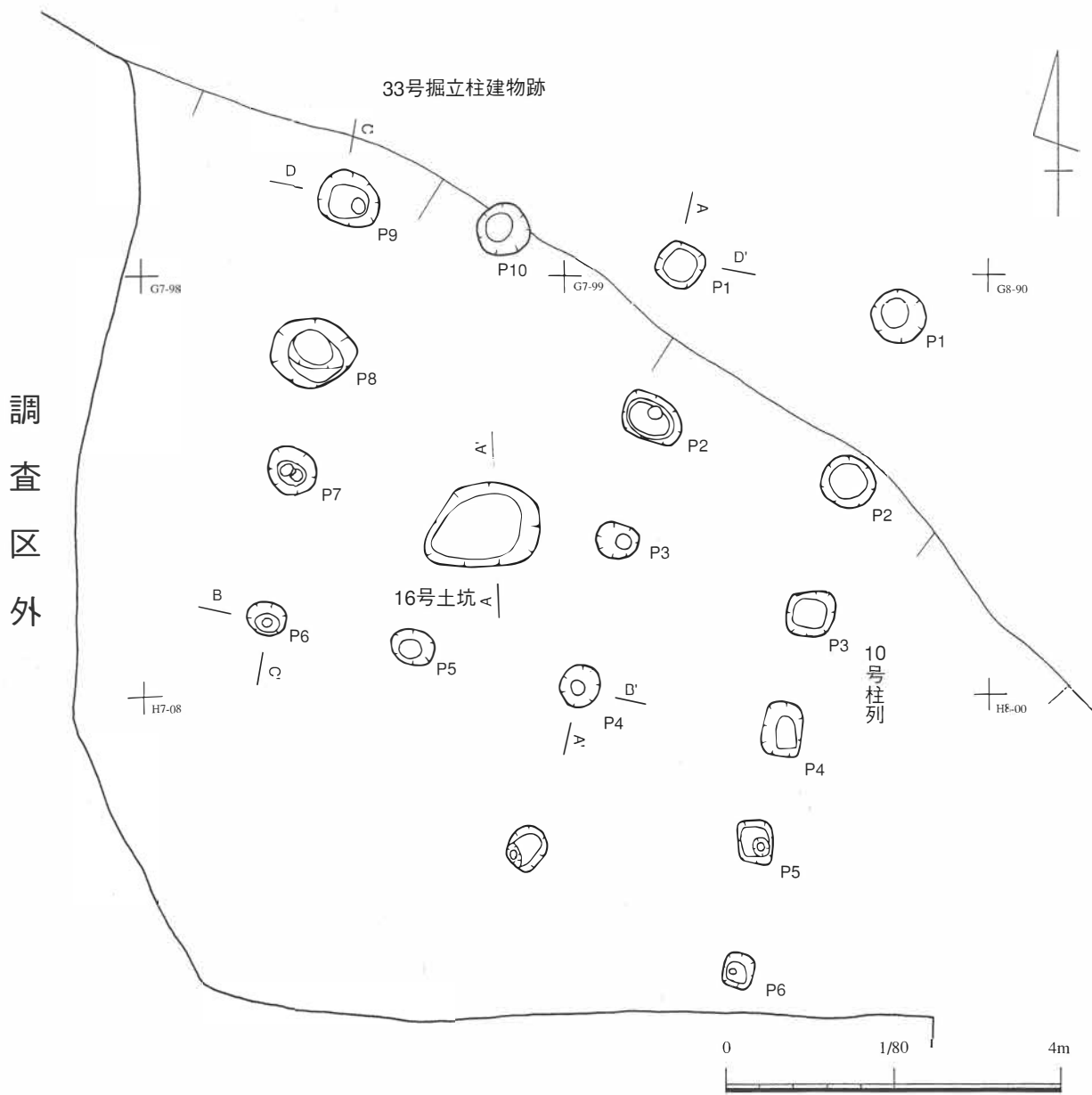


図119 33号掘立柱建物跡、10号柱列、16号土坑

表 35 S B 32 柱穴計測値 (m)

	長軸	短軸	深さ
P 1	1.3	1.2	0.2
P 2	1.2	0.9	0.2
P 3	1.2	1.0	0.2
P 4	1.3	0.8	0.2
P 5	0.9	0.9	0.2
P 6	1.6	1.0	0.3
P 7	1.2	0.8	0.3
P 8	1.2	1.0	0.5
P 9	1.6	1.4	0.6
P 10	1.8	1.4	0.5
P 11	1.9	1.5	0.4
P 12	3.0	1.1	0.4
P 13	1.4	1.1	0.3
P 14	1.6	1.3	0.3
P 15	1.3	1.1	0.3
P 16	0.7	0.6	0.2

34号掘立柱建物跡 (S B 34) 図 121

位置 G8-91・92、H8-01・02グリッド 重複関係 なし 主軸方位 西側柱列で計測してN-6°-Eを示す建物である。平面形式 南側は削られているため、桁方向は不明であるが、東西3間×南北1間以上の側柱建物である。建物の南側は工事用道路部分の1期調査時に3基のピットを検出しているが、3期調査で検出した柱列とは並ばない。調査個所は南に向かって傾斜し、南側には水路と1段下がって水田になっているため、削平されているものと考えられる。規模 東西6.0m、南北2.2m以上。

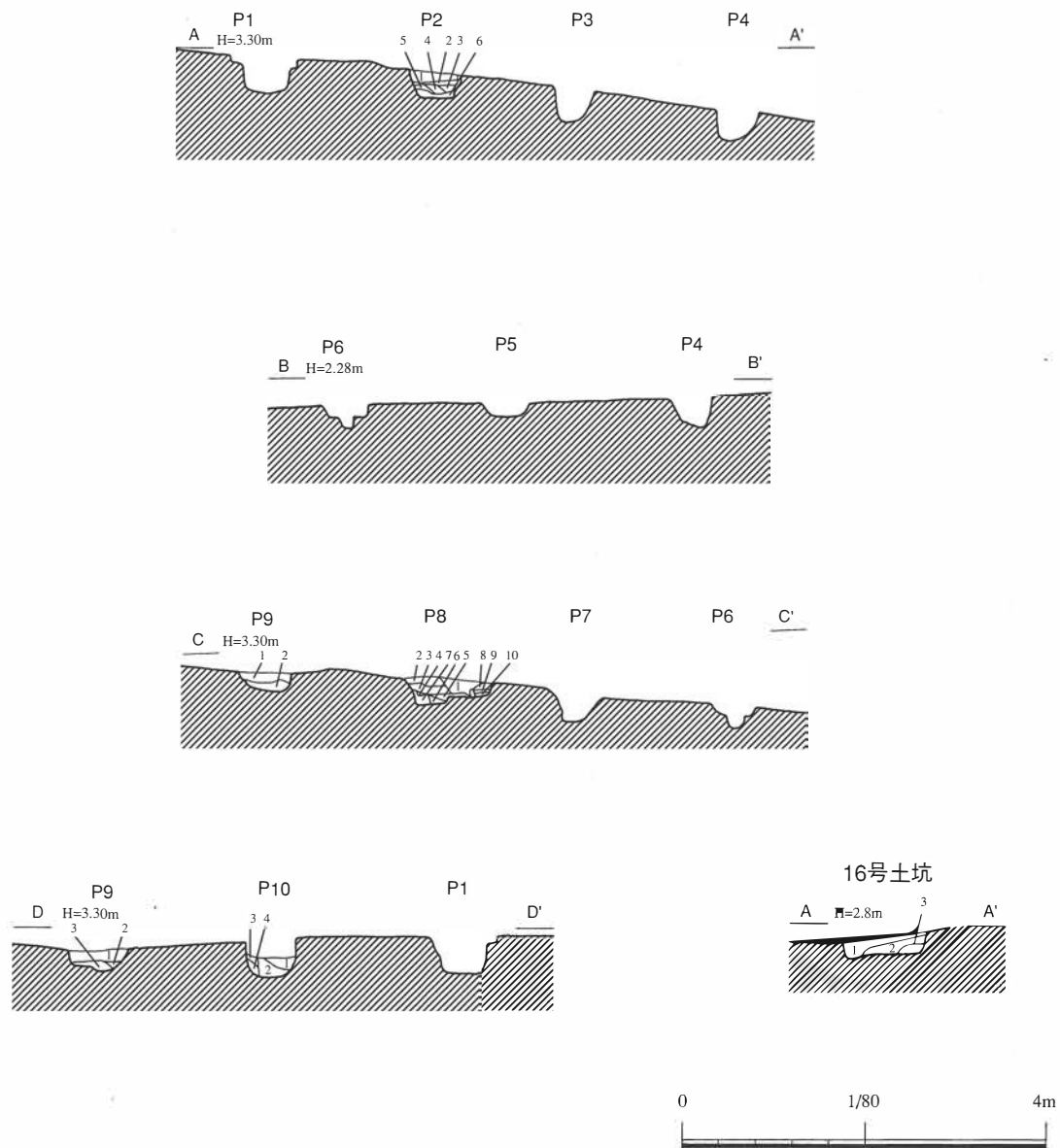
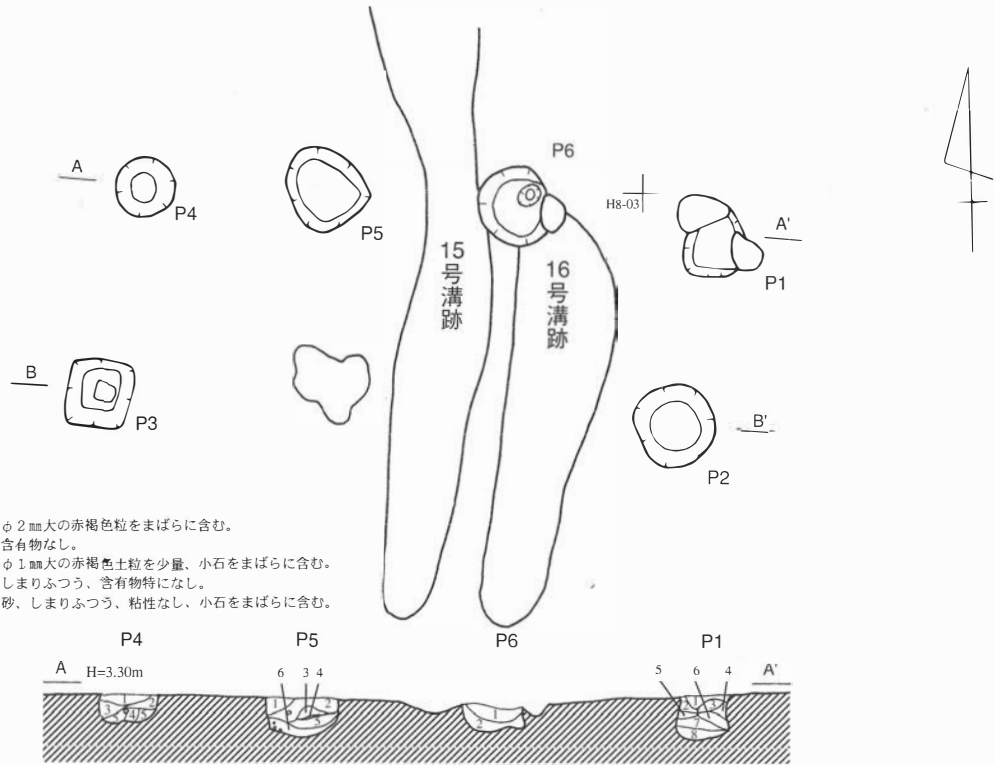


図120 33号掘立柱建物跡、16号土坑土層断面図

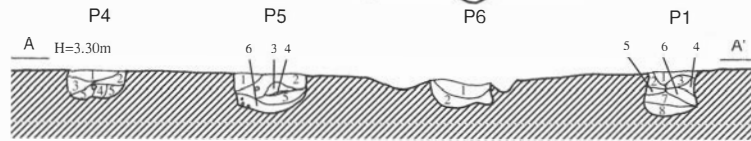


SB34

P4

- 1 灰褐色土
- 2 灰褐色土
- 3 暗灰褐色土
- 4 青灰褐色土
- 5 にぶい黄褐色土

φ2mm大の赤褐色粒をまばらに含む。
含有物なし。
φ1mm大の赤褐色土粒を少量、小石をまばらに含む。
しまりふつつ、含有物特になし。
砂、しまりふつつ、粘性なし、小石をまばらに含む。



P5

- 1 茶褐色土
- 2 灰褐色土
- 3 暗灰褐色土
- 4 にぶいき褐色土
- 5 黄褐色土
- 6 黒褐色土

砂、φ1cm大の黄褐色ブロックをわずかに含む。
砂、含有物特になし。
砂質シルト、φ1mm大の黄褐色土ブロックをわずかに含む。
含有物特になし。
砂、含有物特になし。
黄褐色砂を所々に含む。

P6

- 1 黒灰褐色土
- 2 灰褐色土

黒褐色砂、φ1mm大の黄褐色土粒、灰褐色土を含む。
黒灰褐色土をまばらに含む。

P1

- 1 灰褐色土
- 2 黒灰褐色土
- 3 青灰褐色土
- 4 黒灰褐色土
- 5 黒褐色土
- 6 黒灰褐色土
- 7 6と同じか

黄褐色土を含む。
黄褐色土ブロックを含む。
φ1cm大の黄褐色砂質ブロックをわずかに含む。
φ5cm大の黄褐色ブロックを多く含む。
φ1~2cm大の黄褐色土粒をわずかに含む。
φ1cm大のにぶいき褐色砂質ブロックをまばらに含む。
含有物なし。

P2

P2

- 1 黄褐色土
- 2 灰褐色土
- 3 暗灰褐色土

φ5cm大の黄褐色ブロックを多く含む。
φ2cm大の黄褐色ブロックをわずかに含む。
φ1~3cm大の黄褐色ブロックをまばらに含む。

P3

- 1 にぶい灰褐色土
- 2 暗灰褐色土
- 3 暗灰褐色土
- 4 暗灰褐色土

シルト、粘性なし、しまりふつつ、含有物特になし。
粘土質シルト、粘性なし、しまりふつつ、小石をまばらに含む、炭わずかに含む
粘土質シルト、粘性ややあり、しまりふつつ、φ3~10cm大の石をやや多く、φ2cm大の赤褐色土粒をまばらに含む。
粘土、粘性ややあり、しまりふつつ、炭わずかに含む。



図121 34号掘立柱建物跡

柱間寸法は、東側柱列が北から 2.2m、西側柱列が北から 2.2m、北側柱列は西から 2.1m + 2.1m + 1.8m である。**柱穴** 6 個を確認した。掘方は楕円形を呈する。埋土は黒色土と黄褐色土の互層であり、版築が認められた。**備考** 中世以降。

表 36 SB33 柱穴計測値 (m)

	長軸	短軸	深さ
P 1	0.5	0.5	0.4
P 2	0.8	0.5	0.4
P 3	0.5	0.4	0.5
P 4	0.5	0.5	0.4
P 5	0.5	0.4	0.2
P 6	0.5	0.4	0.3
P 7	0.6	0.5	0.5
P 8	1.0	0.9	0.3
P 9	0.8	0.6	0.3
P 10	0.6	0.6	0.4

表 37 SB34 柱穴計測値 (m)

	長軸	短軸	深さ
P 1	0.8	0.6	0.5
P 2	0.9	0.9	0.3
P 3	0.7	0.7	0.5
P 4	0.6	0.6	0.4
P 5	0.9	0.8	0.5
P 6	0.8	0.7	0.4

(2) 柱列跡

9号柱列 (SA9) 図 122

位置 F 7-84・85・86・87・88・89・94・95・96・97・98・99 グリッド。**重複関係** **主軸方位** 遺構群のある微高地と北側の低湿地の境にあたる汀に沿った 2 列の東西柱列である。**規模** 北側の柱列は 4 間分 (総長 12.0m)、南側の柱列は 16 間分 (総長 29.7m) を確認した。柱間寸法は北側の柱列が平均 3.0m。南側の柱列は No.13 柱穴と No.14 柱穴の間が 3.8m と広く空いているため、この部分が出入口となっていた可能性がある P 6 から P 13 まで平均 1.7m、P 14 号柱穴から P 22 柱穴まで平均 1.8m である。**柱穴** 22 個を確認した。掘方は円形ないし楕円形を呈する。埋土は 7 次 (糠塚) 調査区で検出した他の中世小ピット群と類似した黒色土層である。

出土遺物 P 1 と P 3 柱穴から直径約 9 cm の杭の基部が打ち込まれたまま出土した。23 号掘立柱建物跡で出土した柱や礎板に比べると腐食の程度が少なく、色調もやや明るい。

備考 7 次 (糠塚) 調査区と北側の県指定地との間は、トレンチ調査の結果、低湿地で遺構がないことを確認しているが、本柱列跡は遺構群のある微高地と北側低湿地との境にあたる汀に沿った 2 列の柱列である。中世に土塁と土塁に接続させて改変した糠塚の地形に合わせて、設置された柵列の可能性はある。

10号柱列 (SA10) 図 119

位置 G 7-99、H 8-09 グリッド。33 号掘立柱建物跡の東に位置する。**主軸方位** 33 号掘立柱建物跡の東側桁行に並行しており、N-11° - E を示す南北方向の柱列である。**規模** 5 間分 (総長 8.0m) を確認したが、南の調査区外に続いている可能性がある。

表 38 SA9 柱穴計測値 (m)

	長軸	短軸	深さ
P 1	0.4	0.3	0.5
P 2	0.7	0.5	0.3
P 3	0.4	0.3	0.1
P 4	0.7	0.3	0.4
P 5	0.3	0.3	0.2
P 6	0.4	0.3	0.1
P 7	0.4	0.3	0.3
P 8	0.4	0.4	0.4
P 9	0.5	0.4	0.4
P 10	0.6	0.5	0.3
P 11	0.6	0.5	0.3
P 12	0.6	0.5	0.4
P 13	0.6	0.5	0.4
P 14	0.5	0.5	0.2
P 15	0.4	0.4	0.3
P 16	0.5	0.4	0.4
P 17	0.5	0.5	0.2
P 18	0.5	0.5	0.1
P 19	0.5	0.4	0.2
P 20	0.5	0.4	0.2
P 21	0.3	0.2	0.2
P 22	0.5	0.5	0.1

調查区外

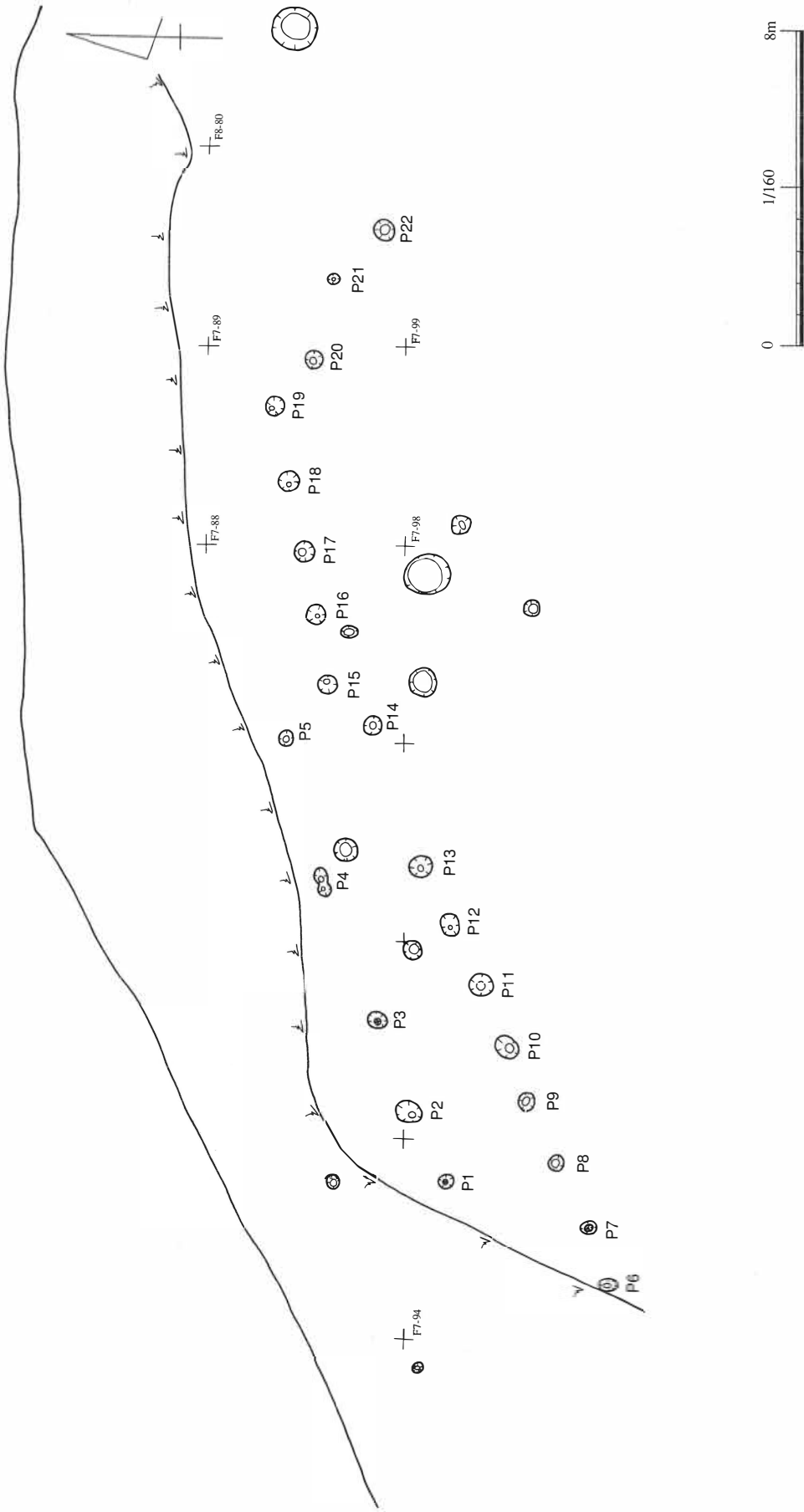


图122 9号柱列

柱間寸法は北から 2.0m + 1.6m + 1.4m + 1.4m + 1.5m である。柱穴 6 個を確認した。掘方は円形ないし隅丸方形を呈する。埋土は 33 号掘立柱建物跡の柱穴と同様、黒色土と黄褐色土の互層であり、版築が認められた。出土遺物 なし 備考 本柱列跡は、33 号掘立柱建物跡の東に隣接し、主軸方向も同一である。しかし、33 号掘立柱建物跡が南北 3 間 (5.1m) に対し、10 号柱列は南北 5 間 (8.0m) である。柱間も 33 号掘立柱建物跡の東側桁行が北から 1.7m + 1.6m + 1.8m に対し、10 号柱列は北から 2.0m + 1.6m + 1.4m + 1.4m + 1.5m と対応していない。本柱列は 33 号掘立柱建物跡の一部あるいは庇とは考えにくく、目隠し塀の柱列と考えられる。

第 3 項 溝跡・土坑

(1) 溝 跡

5号溝跡 (SD5) 図 123

幅約 1.0m × 深さ 0.3m の南北溝である。主軸方位は N - 30° - W を示す。当溝跡は、既調査の第 5 次調査区で確認されている 5 号溝跡の北側延長部分にあたり、5 次調査において伐採痕のある広葉樹の大木が出土した 4 号溝跡に流れ込んでいる。本調査区では北側の約 5 m 分を確認している。断面形は、底面幅が広い逆台形である。覆土は自然堆積による。

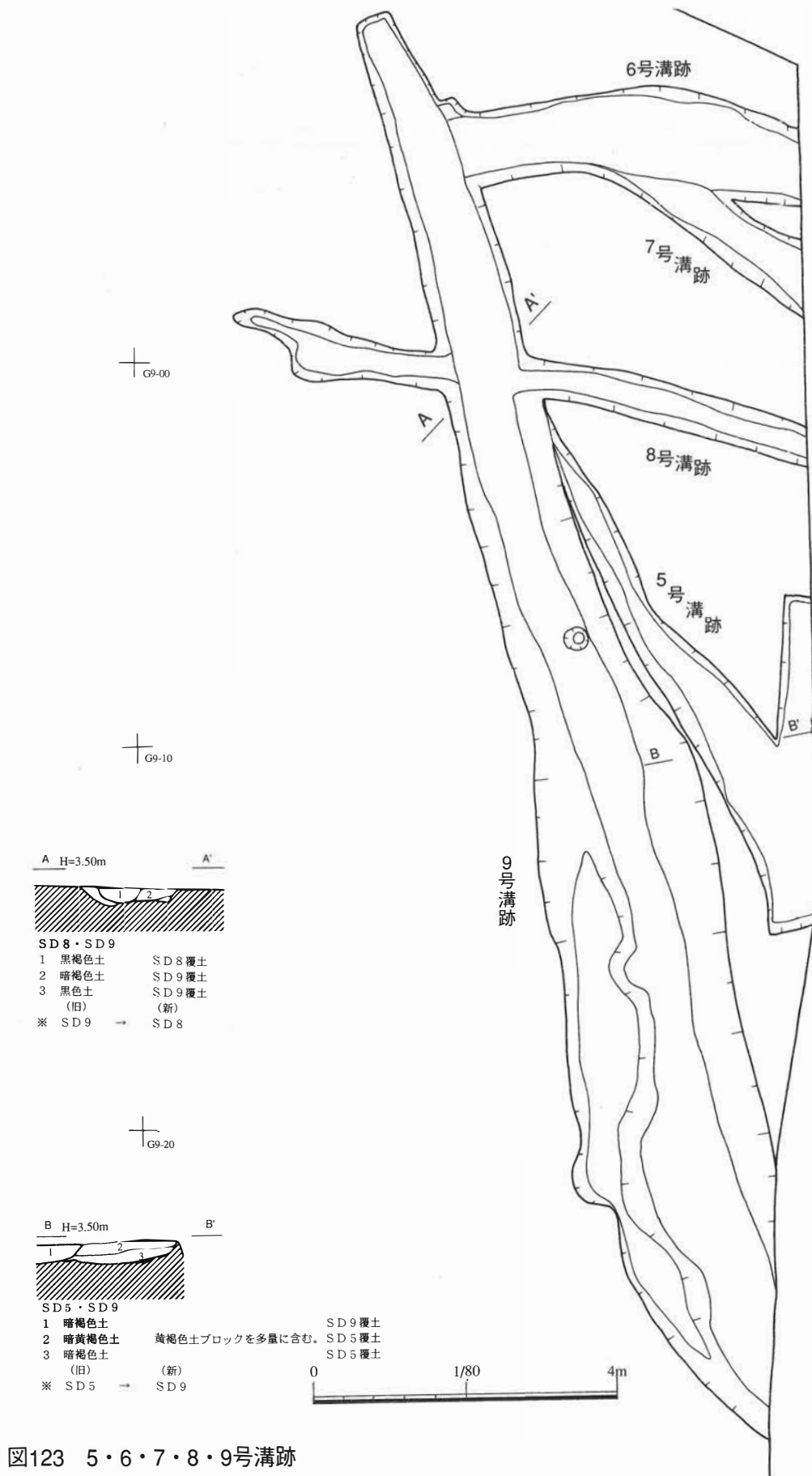
6号溝跡 (SD6) 図 123

幅約 1.2m × 深さ 0.2m の東西溝である。主軸方位は N - 85° - W を示す。当溝跡は、既調査の第 5 次調査区で確認されている 4 号溝跡に向かって延びている。断面形は、底面幅が広い逆台形である。覆土は自然堆積による。

7号溝跡 (SD7) 図 123

幅約 0.7m × 深さ 0.1m の東西溝である。主軸方位は N - 54° - W を示す。当溝跡は、既調査の第 5 次調査区で確認されている 4 号溝跡に向かって延びている。断面形は、底面幅が広い逆台形である。覆土は自然堆積による。

調査区外(第5次調査区)



A H=3.50m



- SD 8・SD 9
- 1 黒褐色土 SD 8 覆土
 - 2 暗褐色土 SD 9 覆土
 - 3 黒色土 SD 9 覆土 (旧) (新)
 - ※ SD 9 → SD 8

G9-20

B H=3.50m



- SD 5・SD 9
- 1 暗褐色土 SD 9 覆土
 - 2 暗黄褐色土 黄褐色土ブロックを多量に含む。SD 5 覆土
 - 3 暗褐色土 SD 5 覆土 (旧) (新)
 - ※ SD 5 → SD 9



図123 5・6・7・8・9号溝跡

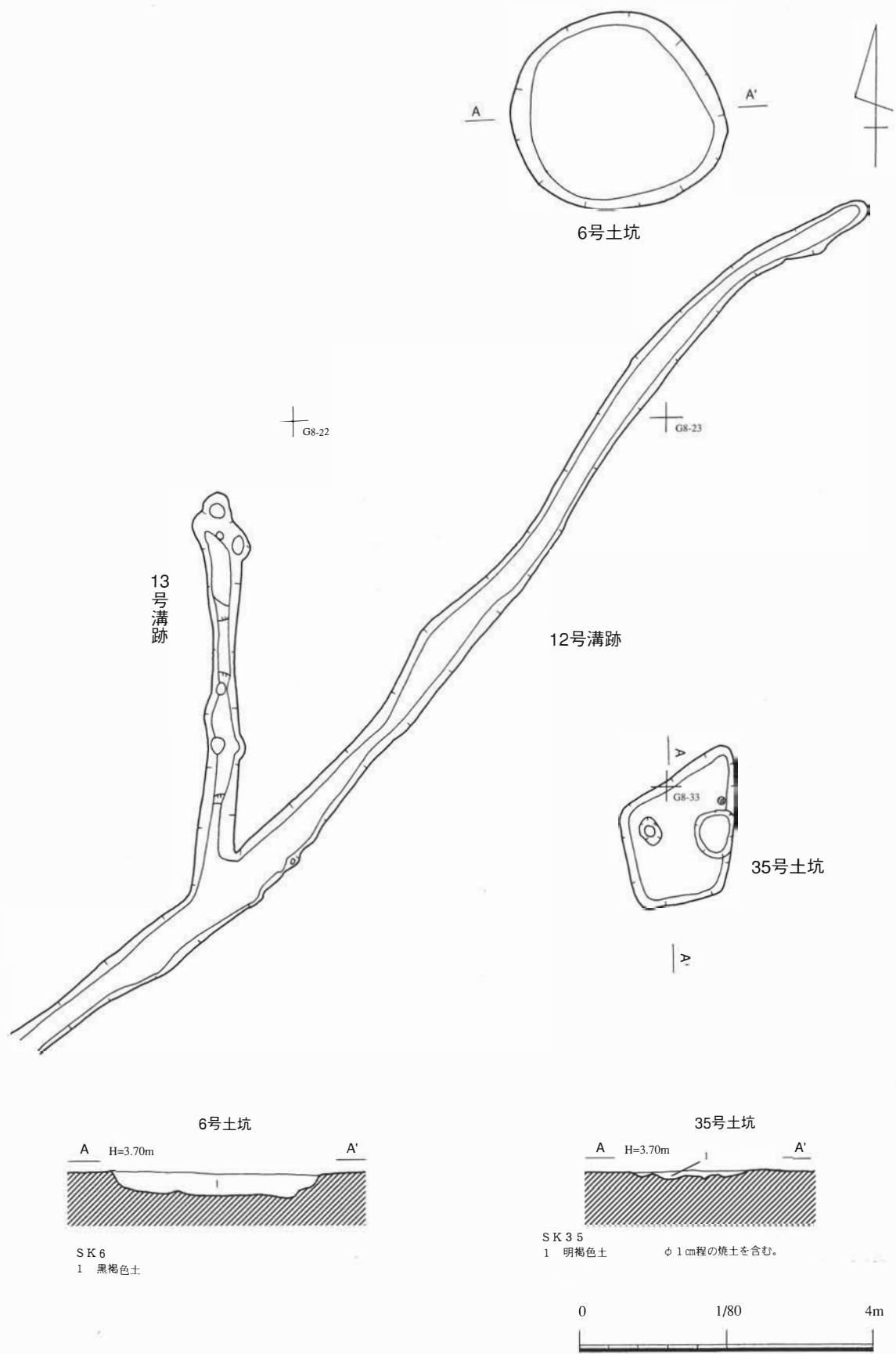


図124 12・13号溝跡、6・35号土坑

8号溝跡 (SD8) 図 123

幅約 0.5m×深さ 0.2mの東西溝である。主軸方位はN-77°-Wを示す。当溝跡は、既調査の第5次調査区で確認されている4号溝跡に向かって延びている。断面形は、底面幅が広い逆台形である。覆土は自然堆積による。

9号溝跡 (SD9) 図 123

幅約 0.5m×深さ 0.2m、調査区での長さ 19mの東西溝である。主軸方位はN-16°-Wを示す。当溝跡から既調査の第5次調査区で確認された4号溝跡が分岐している。断面形は、底面幅が広い逆台形である。覆土は自然堆積による。

10号溝跡 (SD10) 図 94

糠塚の南東裾部から延びる、幅約 0.8m×深さ 0.2m、調査区での長さ 16mの南北溝である。糠塚の周溝の一部を切っている。主軸方位はN-21°-Eを示す。断面形は、底面幅が広い逆台形である。覆土は自然堆積による。

11号溝跡 (SD11) 図 94

糠塚の北側裾部から延びる、最大幅 3.2m×深さ 0.2m、長さ 30mの東西溝である。糠塚の北側周溝を切る。主軸方位はN-33°-Eを示す。断面形は、底面幅が広い逆台形。

12号溝跡 (SD12) 図 124

幅 0.6m×深さ 0.1m、長さ 13mの南北溝である。28号掘立柱建物跡の柱穴を切っている。主軸方位はN-45°-Eを示す。断面形は、底面幅が広い逆台形である。

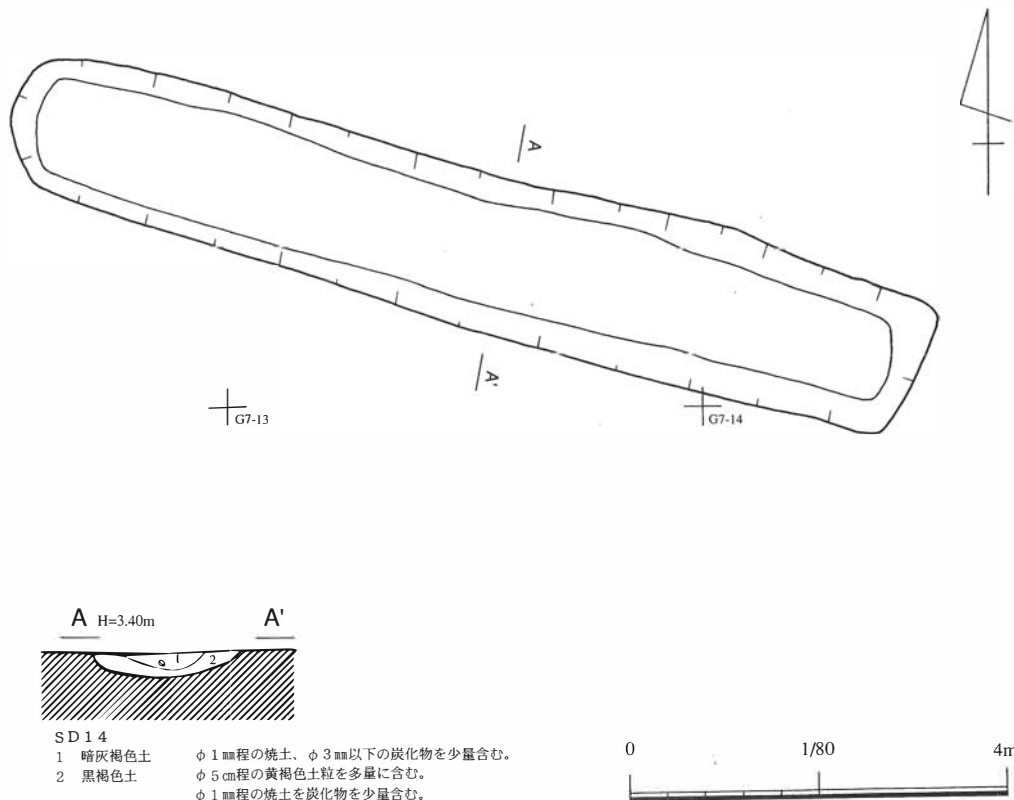


図125 14号溝跡

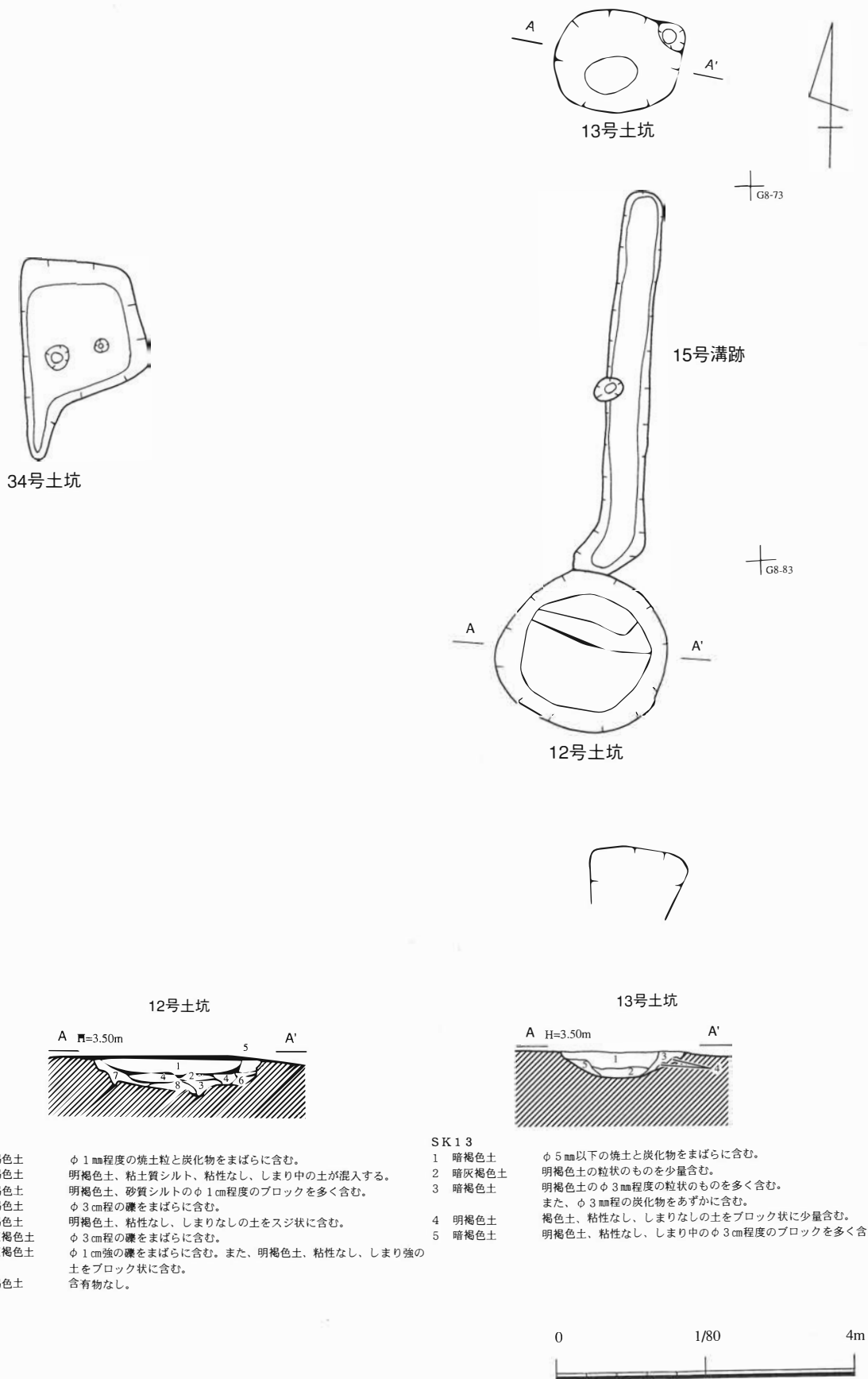


図126 15号溝跡、12・13号土坑

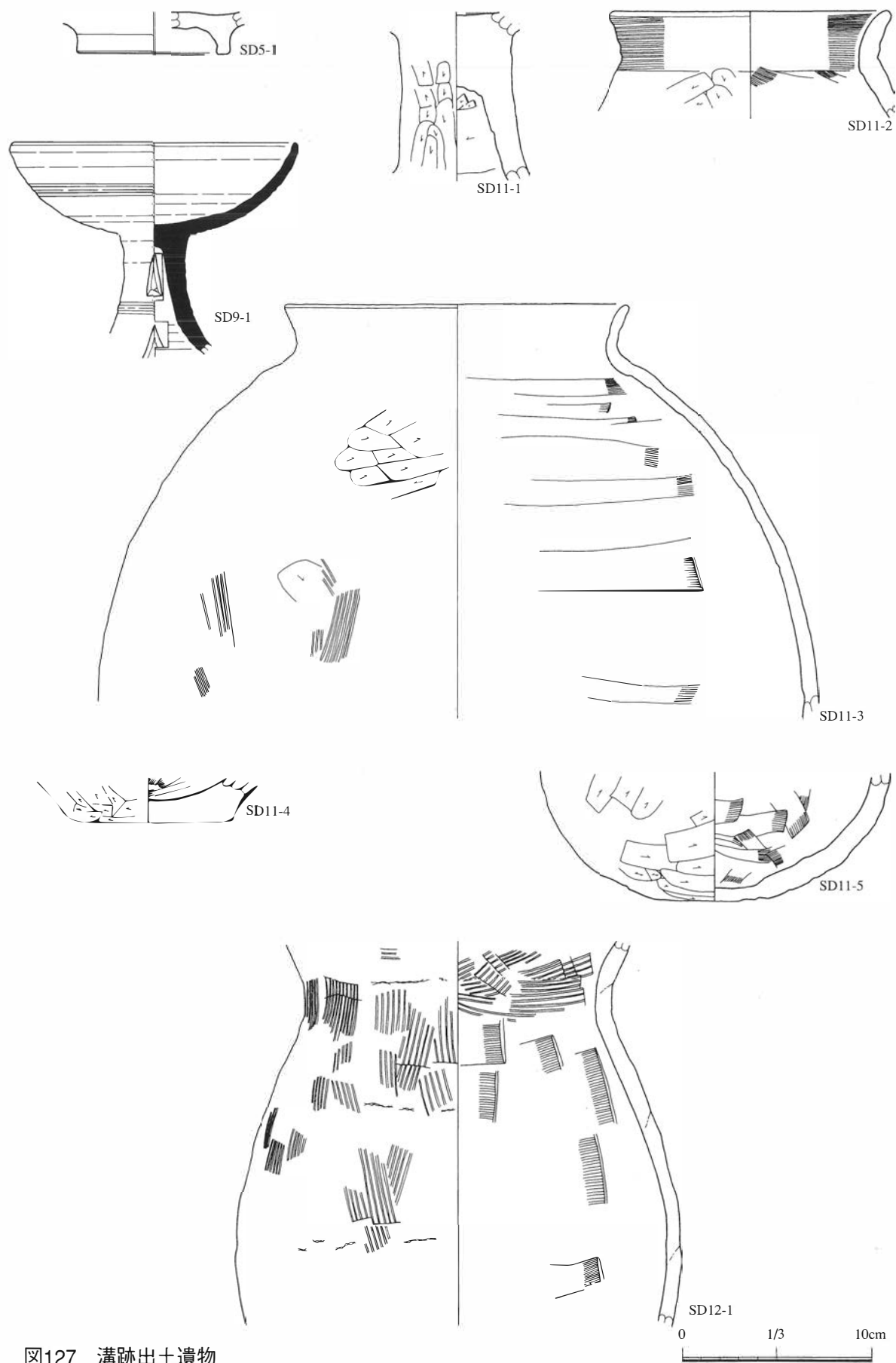


图127 溝跡出土遺物

13号溝跡 (SD13) 図 124

南端で12号溝跡と合流する、幅0.5m×深さ0.1m、長さ5mの南北溝である。主軸方位はN-0°-Eを示す。断面形は、底面幅が広い逆台形である。覆土は自然堆積による。

14号溝跡 (SD14) 図 125

糠塚の北西裾部に位置する、幅1.6m×深さ0.2m、長さ10mの東西溝である。主軸方位はN-73°-Wを示す。断面形は、底面幅が広い逆台形である。

15号溝跡 (SD15) 図 121・126

32号掘立柱建物跡から南に位置し、12号土坑で一旦途切れ、32号掘立柱建物跡の8号柱穴を切って再び南に延びている。北側で幅0.6m×深さ0.1m、長さ5mを測り、3.5m空けて、南側では幅1.0m×深さ0.1m、長さ10.5mを測る南北溝である。主軸方位はN-5°-Eを示す。断面形は、底面幅が広い逆台形である。

16号溝跡 (SD16) 図 121

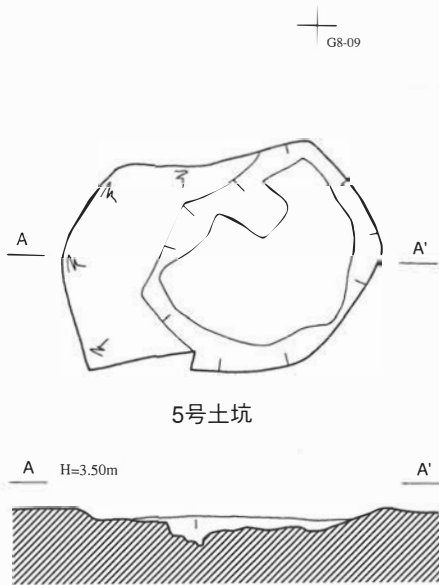
15号溝跡の東隣に並行する、幅1.0m×深さ0.1m、長さ4.5mを測る南北溝である。主軸方位はN-5°-Eを示す。断面形は、底面幅が広い逆台形である。

(2) 土 坑

土坑は35基を確認した。各土坑の規模・形態は、表39のとおりである。

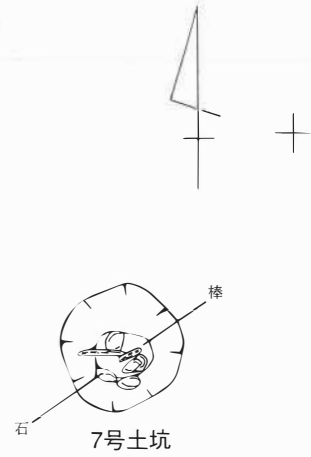
表 39 土坑計測表 (m)

遺構No.	グリッド	長 軸	短 軸	深 さ	形 状	出 土 遺 物	備 考
S K 5	G8-08・09	3.3	2.2	0.4	楕 円 形		
S K 6	G8-12・13	2.9	2.6	0.3	楕 円 形		S B 28より新しい
S K 7	F8-83	1.3	1.3	0.5	円 形	礫・棒	
S K 8	F8-80	1.0	0.9	0.7	円 形		
S K 9	G8-99	1.6	1.4	0.6	隅 丸 方 形	木片	
S K 10	G8-98	3.0	1.2	0.4	不 整 形	礫多量	
S K 11	G8-66	0.5	0.4	0.7	隅 丸 方 形		
S K 12	G8-82	2.2	2.0	0.4	円 形		
S K 13	G8-62	1.6	1.4	0.4			
S K 14	G8-53・54	2.6	2.5	1.3	楕 円 形	焼土・礫	
S K 15	G8-61	2.6	1.8	0.4	隅 丸 長 方 形		
S K 16	G7-98	1.4	1.0	0.2	楕 円 形	炭粒	
S K 17	G8-51	3.3	3.0	0.4	不 整 形		
S K 18	G8-52	2.2	1.6	0.5	楕 円 形		S K 19より古い
S K 19	G8-42	1.2	1.2	0.4	円 形		S K 18より新しい
S K 20	G8-41	3.1	3.1	0.2	楕 円 形		S K 22より新しい
S K 21	G8-42	1.9	1.1	0.2	楕 円 形		
S K 22	G8-41	2.2	2.2	0.2	不 整 形	炭粒	
S K 23	G8-41	2.1	1.8	0.2	楕 円 形	炭粒・焼土	S K 22・24・25より新しい
S K 24	G8-31・41	3.4	2.9	0.3	楕 円 形	炭粒・焼土	
S K 25	G8-31	2.0	1.5	0.2	不 整 形		
S K 26	G7-29・39	6.7	3.4	0.3	楕 円 形		糠塚より新しい
S K 27	G7-68・69	1.1	1.1	0.2	円 形		
S K 28	G8-31	1.4	1.2	0.2	楕 円 形		
S K 29	G7-59	5.5	5.1	0.4	円 形	土師器・炭粒	S D 10より古い
S K 30	G8-70	0.6	0.6	0.5	円 形		
S K 31	G7-79	1.8	1.5	0.6	楕 円 形		
S K 32	G8-80	1.6	0.8	0.3	隅 丸 長 方 形		
S K 33	G7-78	3.2	1.7	0.5	楕 円 形		
S K 34	G8-71	2.7	1.6	0.6	不 整 形		
S K 35	G8-33	2.0	1.5	0.2	楕 円 形		
S K 36	G8-32・33	1.5	1.5	0.2	隅 丸 方 形		
S K 37	G8-44	1.1	1.1	0.2	円 形		
S K 38	G7-79	1.8	0.9	0.5	楕 円 形		
S K 39	G7-78	1.3	0.8	0.4	楕 円 形		S D 10より新しい



1 黒褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。

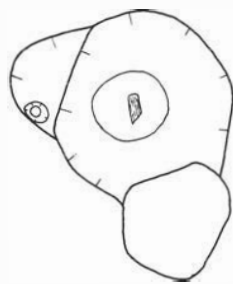
F8-83



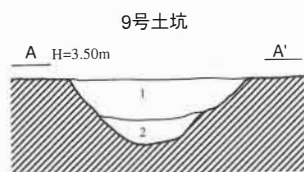
G8-99



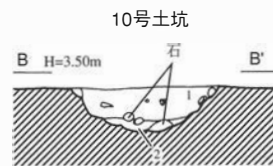
G9-90



G9-00



SK 9
 1 暗褐色土
 2 黒褐色土 やや粘性あり



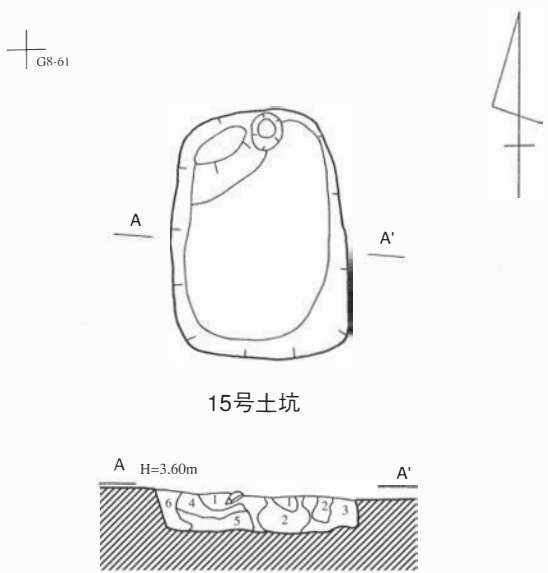
SK 10
 1 暗褐色土
 2 黒褐色土 やや粘性あり
 ※ 覆土中から20cm前後の石多量に出土。投げ込んでいる。



図128 5・7・9・10号土坑



- SK 1 1
- 1 暗褐色土
 - 2 黒褐色土 やや粘性あり



- SK 1 5
- 1 暗褐色土 黄橙色土を粒上を含む。
 - 2 茶褐色土 黒褐色土、粘性なし、しまり中の土が多く混入する。
また、黄橙色の土を少量含む。
 - 3 暗褐色土 茶褐色土、粘性なし、しまり中の土をブロック状に含む。
 - 4 暗褐色土 黄橙色土が多く混入する。
 - 5 黒褐色土 明褐色土を粒状に多く含む。
 - 6 黄橙色土 φ 3 cm前後の礫を多く含む。

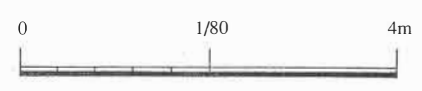
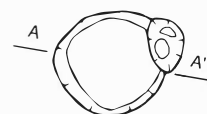


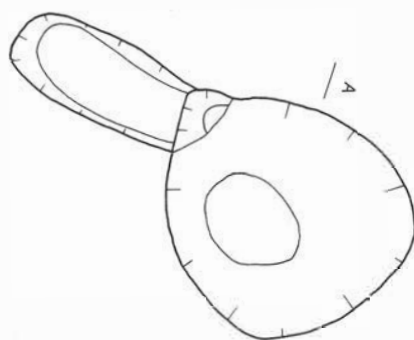
図129 11・15号土坑

G8-44

G8-45



37号土坑

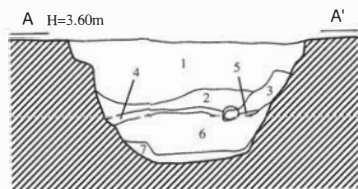


14号土坑

G8-55

G8-64

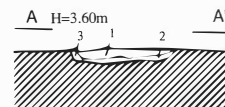
14号土坑



SK 14

- | | |
|---------|---|
| 1 暗褐色土 | φ 5 cm前後の礫をまばらに含む。φ 5 mm以下の焼土をまばらに含む。 |
| 2 暗褐色土 | 黒褐色土、粘性なし、しまり中の土を少量含む。
また、スジ状に焼土を含む。 |
| 3 明褐色土 | 暗褐色土を多量に含む。 |
| 4 茶褐色土 | 焼土を帯状に含む。 |
| 5 黒褐色土 | φ 5 mm程度の焼土をまばらに含む。φ 1 cm以下の礫をまばらに含む。 |
| 6 暗灰褐色土 | 黒褐色土が多量に混入する。φ 1 cm以下の礫を少量含む。 |

37号土坑



SK 37

- | | |
|--------|-------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 灰白色土ブロックを多量に含む。磁気をおびたような赤褐色の土を少量含む。 |
| 2 明褐色土 | 黄褐色土をうすく帯状に含む。 |
| 3 暗褐色土 | φ 1 mm程の焼土を少量含む。 |



図130 14・37号土坑

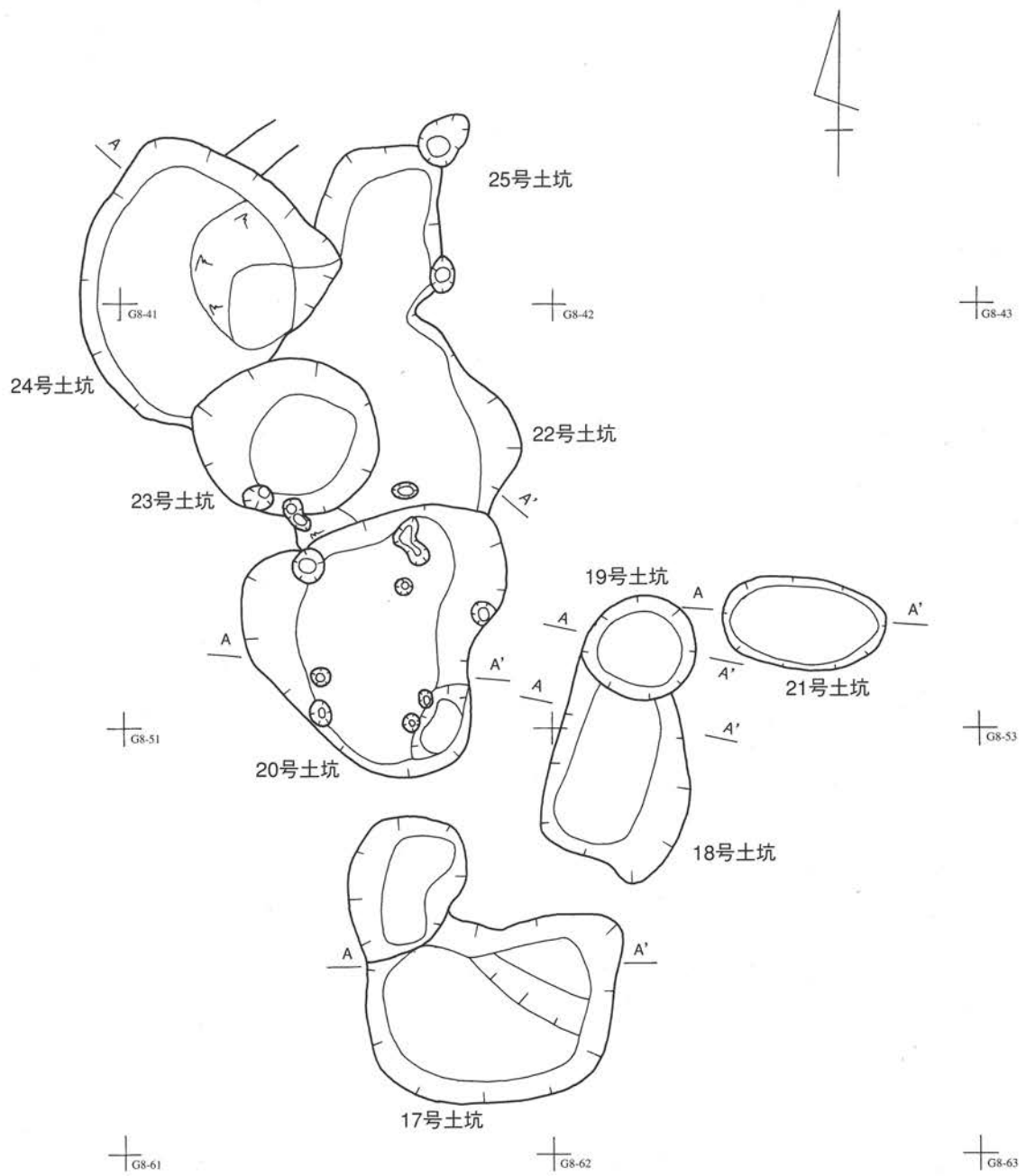
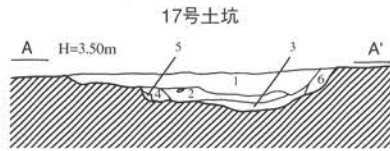
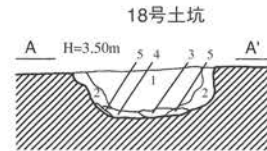


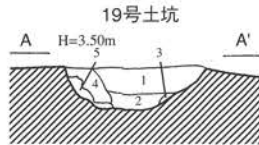
图131 17~25号土坑



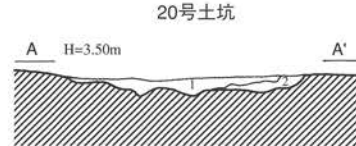
- SK 17
- 1 黒褐色土 φ 2 mm前後の明褐色土を粒状に多く含む。
 - 2 暗褐色土 明褐色土、粘性なし、しまり中の土をブロック状に多く含む。
 - 3 黒褐色土 明褐色土を少量含む。
 - 4 黄褐色土 φ 2 cm前後の礫を多く含む。
 - 5 暗褐色土 含有物特になし。
 - 6 暗褐色土 明褐色土をブロック状に多く含む。



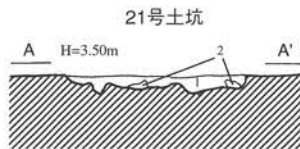
- SK 18
- 1 暗褐色土 φ 3 mm程の焼土をまばらに含む。また、φ 3 mm前後の炭化物を微量含む。
 - 2a 暗褐色土 明褐色土をブロック状に含む。
 - 2b 暗褐色土 2a層より明褐色土ブロックを多く含む。
 - 3 暗褐色土 明褐色土を粒状にまばらに含む。
 - 4 黒褐色土 明褐色土、粘性なし、しまり中のφ 5 cm程のブロックを含む。
 - 5 明褐色土 黒褐色土をブロック状に少量含む。
- ※ SK 18 (旧) → SK 19 (新)



- SK 19
- 1 暗灰褐色土 φ 3 mm前後の炭化物をまばらに含む。また、φ 2 mm程の焼土を微量含む。
 - 2 暗褐色土 明褐色土粒を多少含む。(φ 5 mm程)
 - 3 暗褐色土 明褐色土、粘性なし、しまり強のブロックを多量に含む。
 - 4 暗褐色土 φ 5 mm程度の明褐色土粒を多量に含む。
 - 5 暗褐色土 含有物特になし。



- SK 20
- 1 暗褐色土 φ 5 cm程の明褐色土、粘性なし、まりなしのブロックを少量含む。
 - 2 暗褐色土 また、φ 3 mm前後の焼土を少量含む。



- SK 21
- 1 暗褐色土 明褐色土をφ 5 mm前後の大きさと多量に含む。
 - 2 暗褐色土 明褐色土、粘性なし、しまり中のブロックを多く含む。



- SK 22~24
- 1 暗褐色土 φ 3 mm以下の焼土とφ 5 cm以下の炭化物をまばらに含む。
 - 2 茶褐色土 φ 2 mm前後の炭化物を微量に含む。
 - 3 茶褐色土 φ 2 mm程度の黄褐色土粒を多量に含む。
 - 4 茶褐色土 φ 1~2 mm程の炭化物と焼土をまばらに少量含む。
 - 5 暗褐色土 φ 1 mm程の炭化物と焼土を微量に含む。
- ※ SK 23 (旧) → SK 22・SK 24 (新)
- SK 24に溝状遺構がかかることが平面プランで確認されているがセクションで新旧関係はわからない。

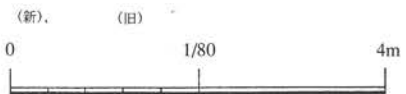
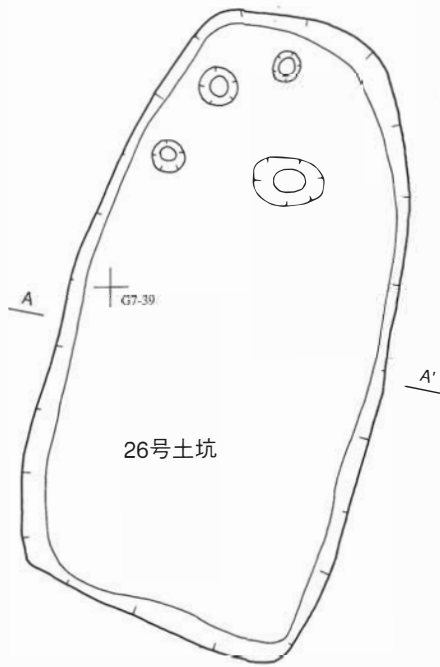
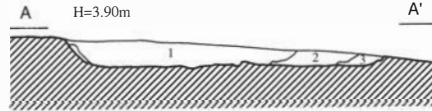


図132 17~24号土坑 土層断面図

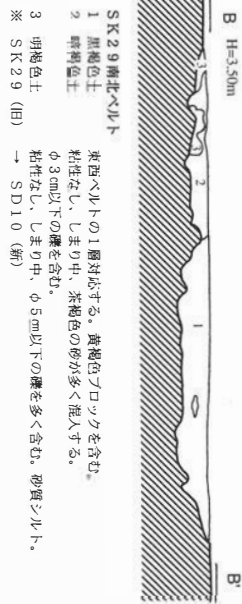


G7-30



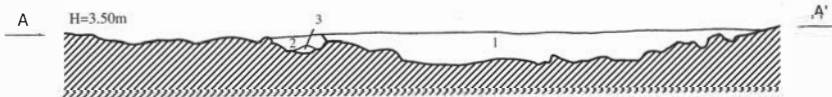
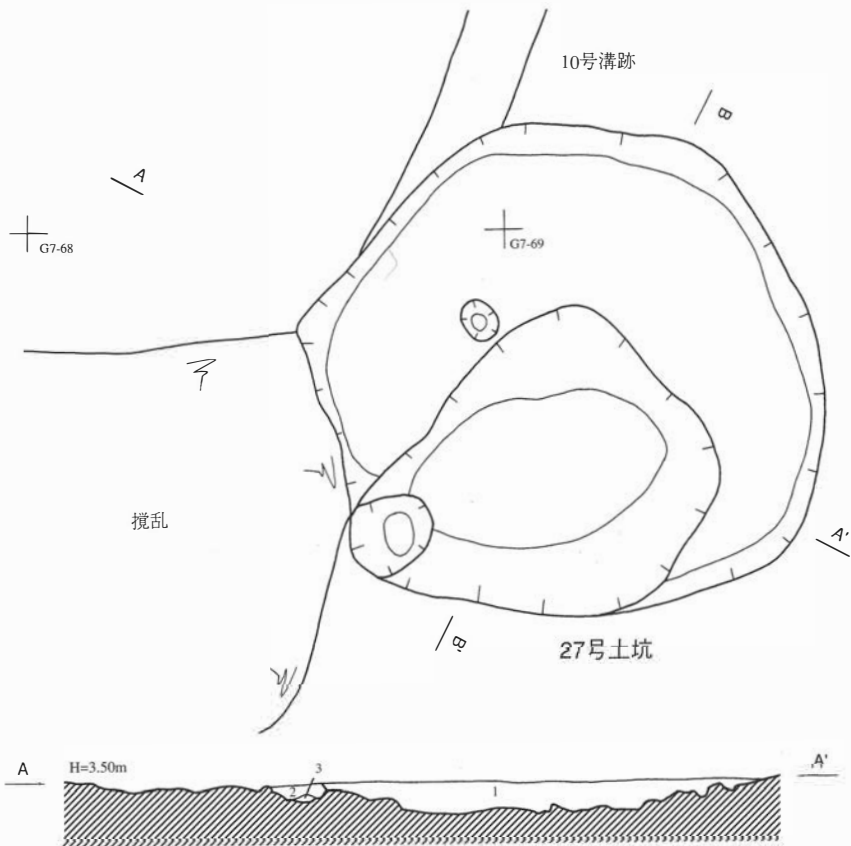
SK 26

- 1 暗褐色土 ϕ 2mm前後の焼土をまばらに含む。植物遺体をまばらに含む。
 ϕ 5mm前後の黄褐色土粒を少量含む。
- 2 茶褐色土 ϕ 1cm前後の黄褐色土ブロックを多く含む。
- 3 暗褐色土 ϕ 1cm程の黄褐色土、粘性なし、しまりなしのブロックを少量含む。
- 4 暗褐色土 ϕ 1mm程の炭化物をわずかに含む。黄褐色土、粘性なし、しまり強の土を粒状に多く含む。



SK 29 南北ベルト
1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 明褐色土
※ SK 29 (旧) → SD 10 (新)

東西ベルトの1層に対応する。黄褐色ブロックを含む。
粘性なし、しまり中、茶褐色の砂が多く混入する。
 ϕ 3cm以下の礫を含む。
粘性なし、しまり中、 ϕ 5cm以下の礫を多く含む。砂質シルト。
→ SD 10 (新)



SK 29 東西ベルト・SD 10

- 1 黒褐色土 粘性なし、しまり中、 ϕ 3~5cm程の礫を含む。
 ϕ 3mm以下の炭化物を少量に含む。
 - 2 黒褐色土 粘性なし、しまり中、黄褐色ロームを少量含む。
 ϕ 1mm程の炭化物を微量に含む。
 - 3 茶褐色土 粘性弱、しまり中、 ϕ 1cm程の黄褐色ロームブロックを多く含む。
- ※SK 29 (旧) → SD 10 (新)

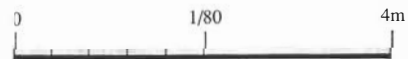
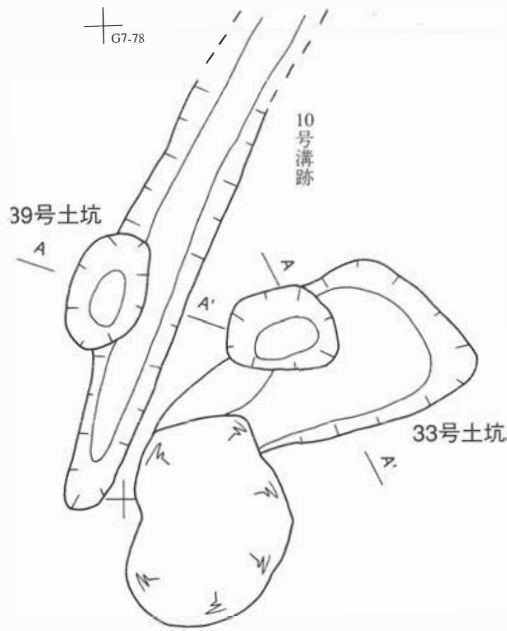
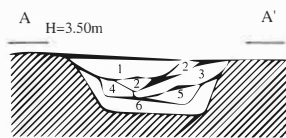


図133 26・29号土坑



攪乱

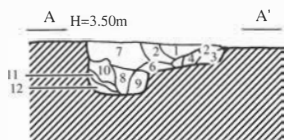
31号土坑



SK 3 1

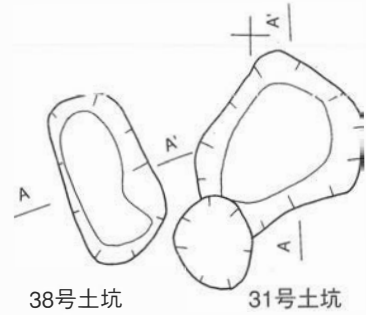
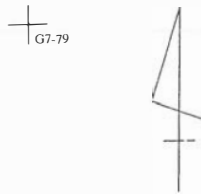
- | | |
|----------|---|
| 1 暗褐色土 | φ 1 ~ 2 cm のレキを含む |
| 2 黄褐色砂質土 | φ 0.5 mm の長石、石炭を含む。2 層に φ 5 c m 程のキ、φ 5 mm の粒の大きなものもある。 |
| 3 暗褐色土 | φ 1 c m 状のレキを含む。 |
| 4 暗褐色土 | 同色の粒を所々に含む。 |
| 5 黒褐色土 | 明褐色砂を所々に含む。 |
| 6 暗褐色砂層 | φ 2 c m 程レキを含む。 |

33号土坑



SK 3 3

- | | |
|---------|--|
| 1 黒褐色土 | φ 3 mm 程の黄褐色土粒を少量含む。 |
| 2 暗褐色土 | φ 5 mm 前後の暗褐色土粒を多く含む。φ 2 mm 前後の炭化物をまばらに含む。 |
| 3 暗褐色土 | φ 3 c m 程 N 明褐色土ブロックを多く含む。 |
| 4 黒褐色土 | φ 3 c m 以下の灰褐色土ブロックを多く含む。φ 1 mm 程の炭化物を微量に含む。 |
| 5 黒褐色土 | φ 1 mm 程の明褐色土粒を微量に含む。 |
| 6 黒褐色土 | φ 1 mm 程の明褐色土粒を多く含む。φ 2 mm 程の炭化物を微量に含む。 |
| 7 黒褐色土 | φ 1 mm 程の焼土と炭化物をまばらに含む。 |
| 8 黒褐色土 | 7 層で見られるのよりやや大きめの焼土と炭化物を少量含む。 |
| 9 黒褐色土 | φ 3 c m 程の礫を含む。 |
| 10 黒褐色土 | φ 3 ~ 5 c m 程の礫を多く含む。 |
| 11 黒褐色土 | 混入物特になし。 |
| 12 黒褐色土 | 2 ~ 3 c m 程の明褐色土ブロックを多く含む。 |



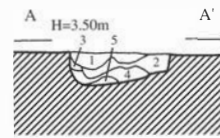
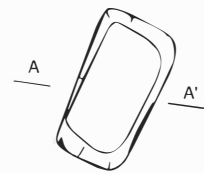
38号土坑

31号土坑

G7-79

G8-80

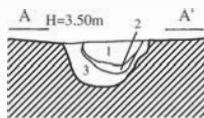
32号土坑



SK 3 2

- | | |
|--------|---------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | φ 1 mm 程の炭化物と焼土を微量に含む。 |
| 2 黒褐色土 | φ 1 ~ 2 mm 程の炭化物と焼土を少量含む。黒褐色土が少量混入する。 |
| 3 黒褐色土 | φ 3 mm 以下の炭化物と焼土を3層より多く含む。 |
| 4 黒褐色土 | φ 1 c m 程の礫を多く含む。また、黒褐色の砂が多く混入する。 |
| 5 黒褐色土 | |

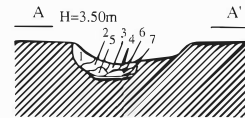
38号土坑



SK 3 8

- | | |
|--------|--|
| 1 暗褐色土 | φ 5 c m 程の褐色土ブロックを含む。φ 1 mm 程の炭化物を微量含む。暗褐色土が少量混入する。φ 1 c m 程の礫を含む。 |
| 2 茶褐色土 | |
| 3 明褐色土 | 暗褐色土が少量混入する。φ 1 c m 程の礫を含む。 |

39号土坑



SK 3 9

- | | |
|-----------|--|
| 1 褐色土 | 粘土質シルト。φ 1 ~ 2 c m 黄褐色ブロックをまばらに含む。シルト。含有物特になし。 |
| 2 暗褐色土 | シルト。褐色土をまばらに含む。 |
| 3 にぶい茶褐色土 | シルト。含有物特になし。 |
| 4 暗褐色土 | シルト。含有物特になし。 |
| 5 褐色土 | 粘土質シルト。含有物特になし。 |
| 6 褐色土 | 粘土質シルト。φ 2 mm 大の黄褐色ブロックをわずかに含む。 |
| 7 淡褐色土 | 粘土質シルト。φ 5 c m 大の小石を多く含む。その下は明黄褐色の地山となる。 |

図134 31~33・38・39号土坑



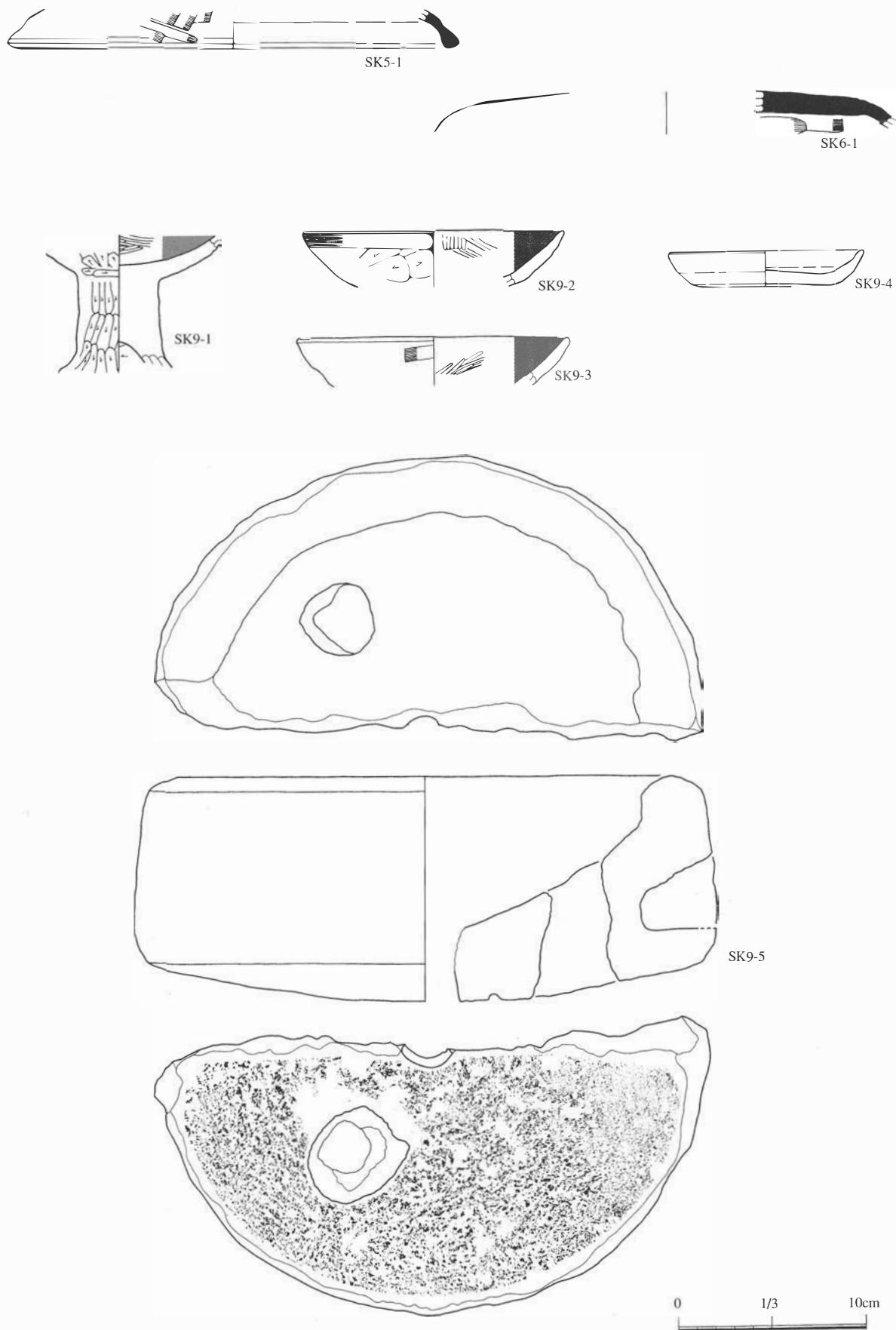


图135 土坑出土遺物 (1)

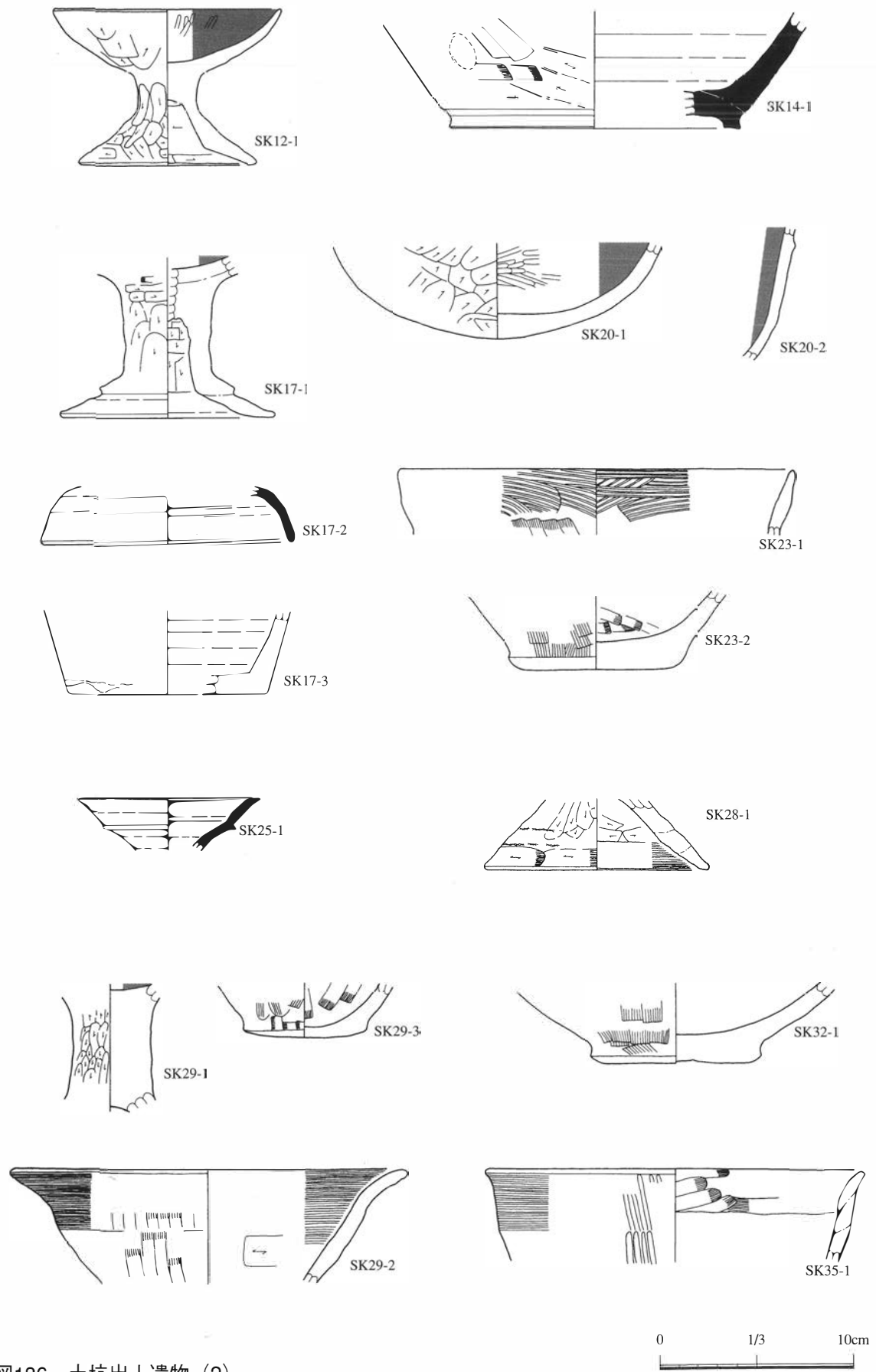


图136 土坑出土遺物 (2)

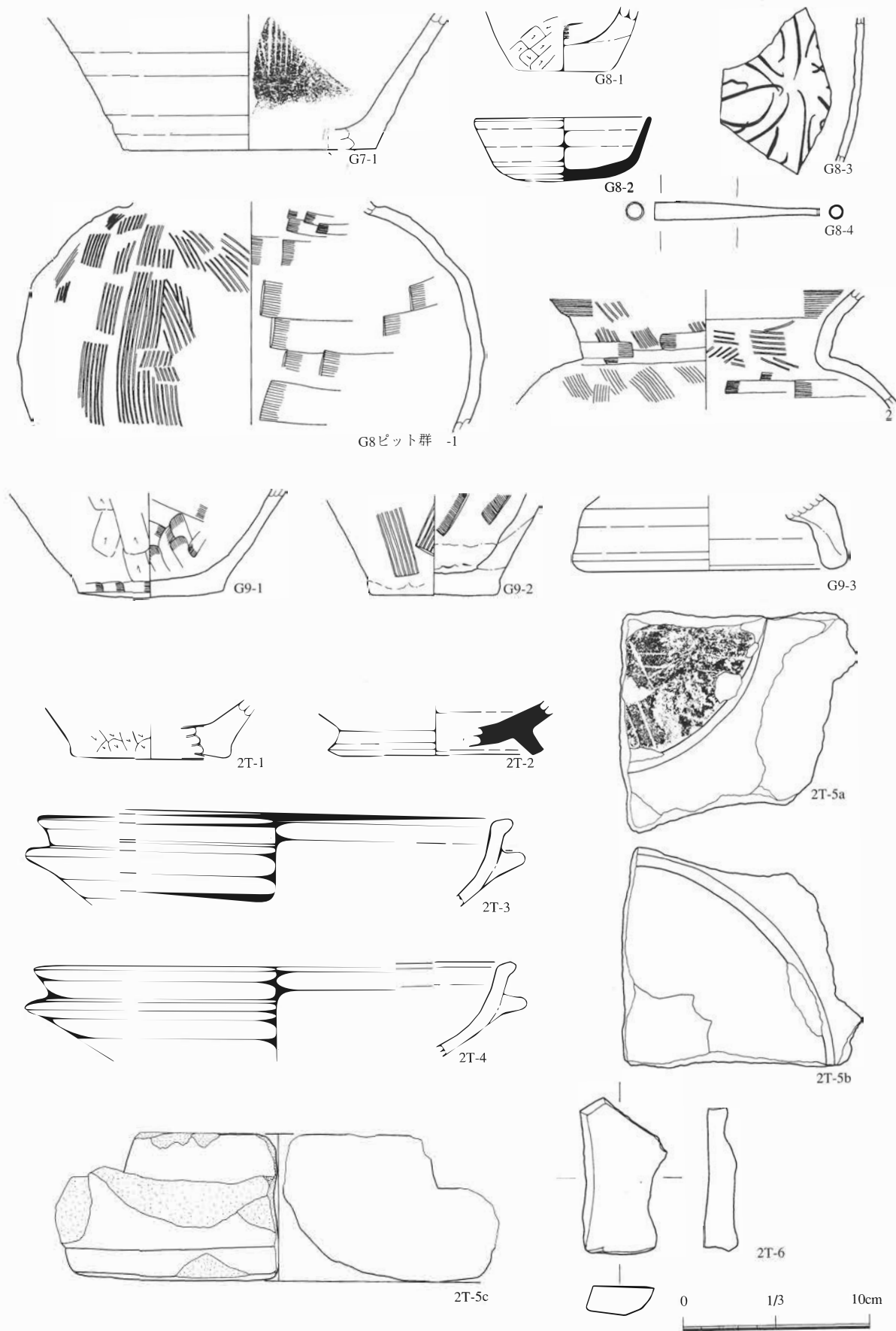


図137 遺構外出土遺物 (1)

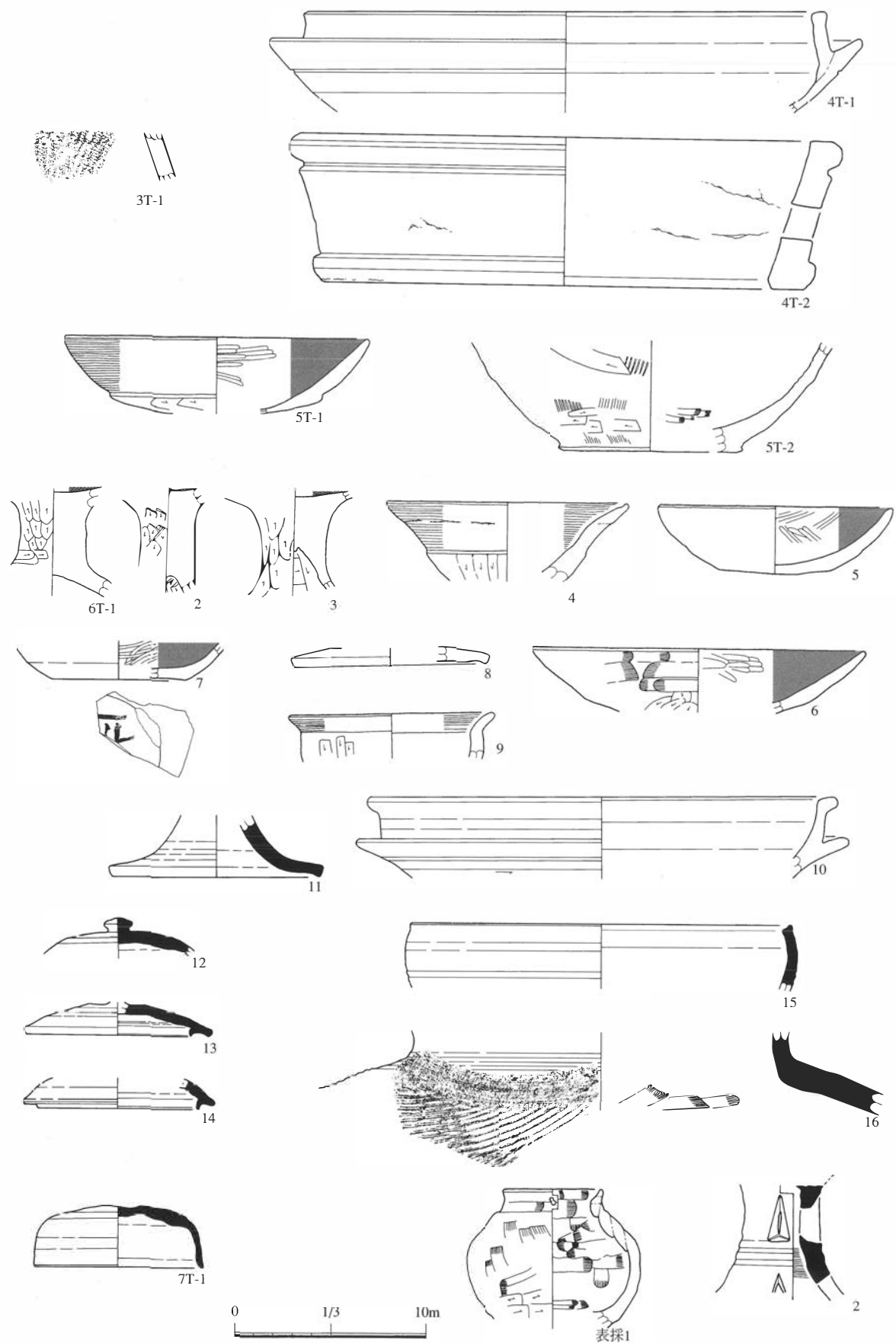


图138 遺構外出土遺物 (2)

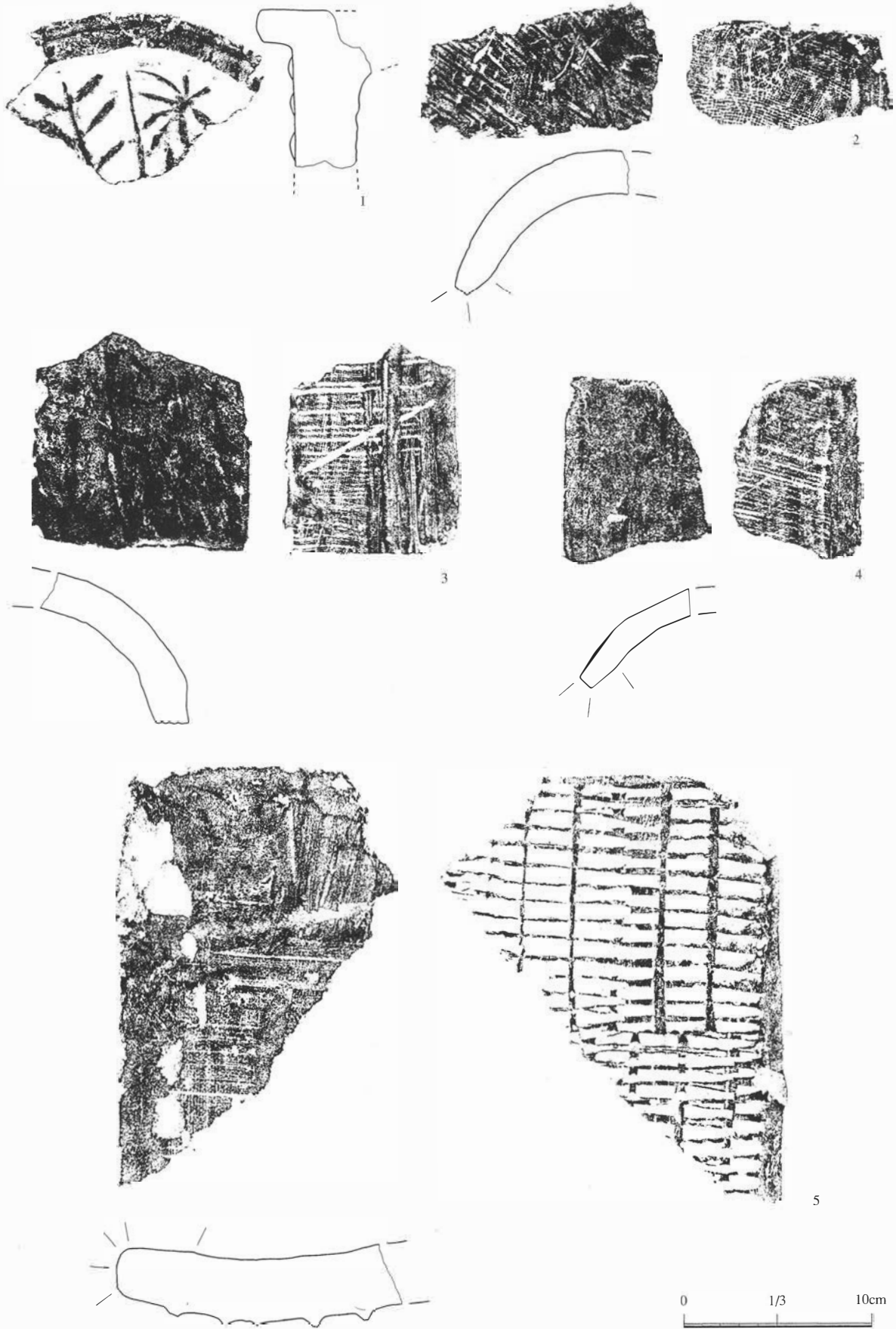


图139 瓦 (1)

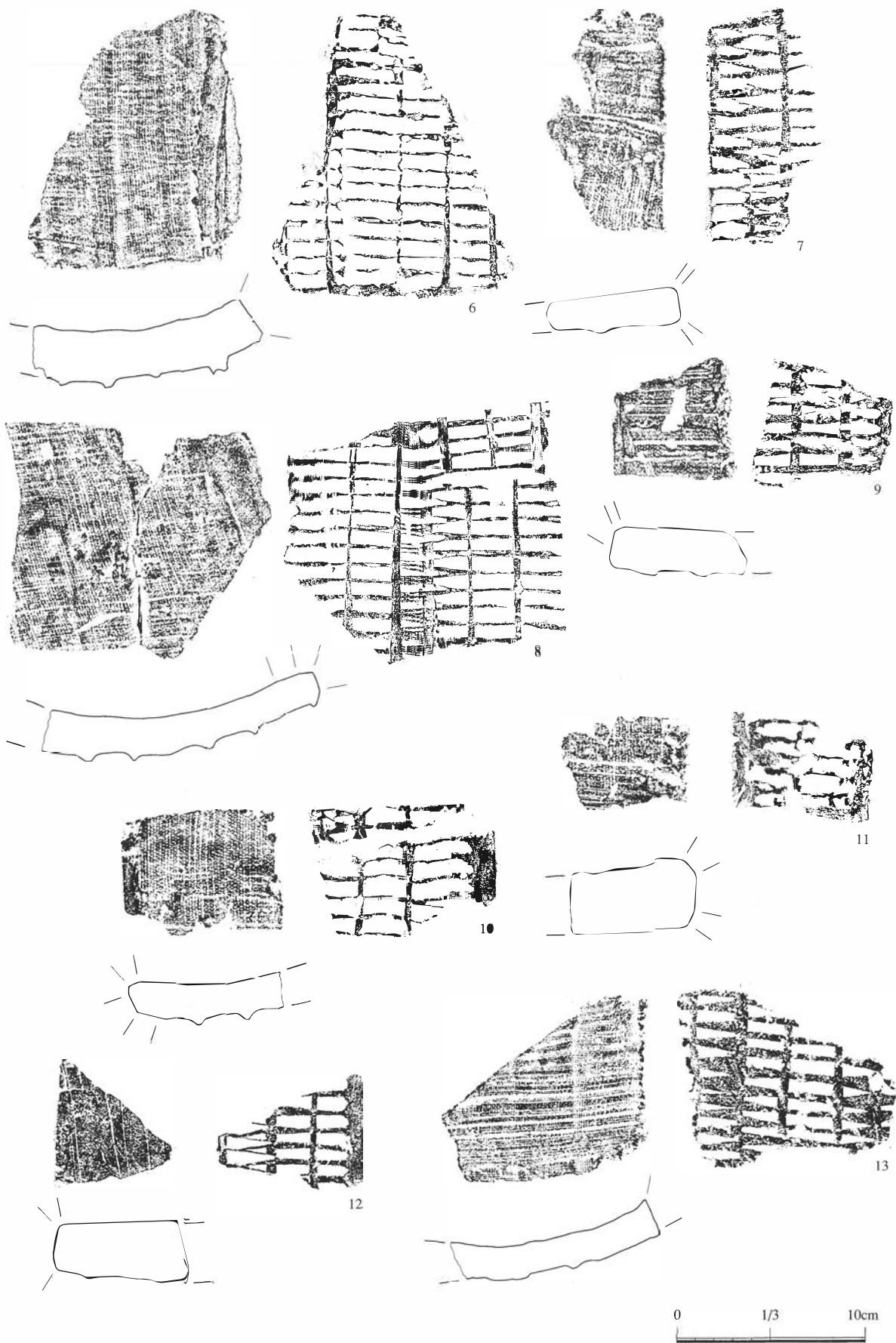


图140 瓦 (2)

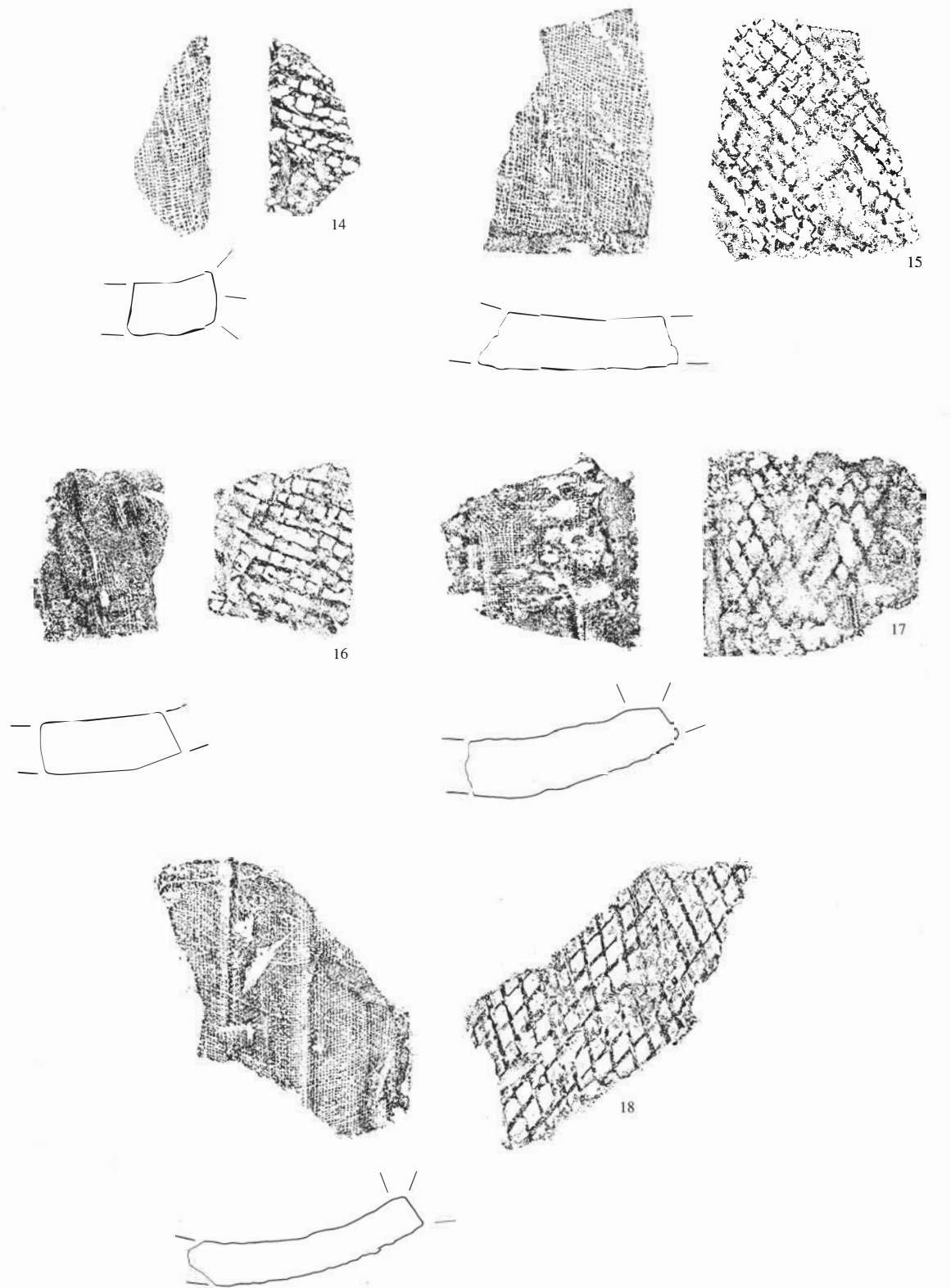


图141 瓦 (3)

第5項 遺構外出土遺物

表土出土の遺物や表面採集した遺物のうち、図化可能なものを図137～141に示した。これらの遺物については、遺構出土の遺物と同様、観察表にその内容を示した(表40～67)。

出土した遺物には縄文土器、土師器、須恵器、陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦、金属製品、石製品などがある。

第4節 まとめ

(古墳時代)

泉廃寺跡第7次調査(糠塚)では奈良・平安時代以前の遺構としては調査区西部域で検出された断片的ながらも円形に巡る溝跡がある。この溝跡からは善光寺Ⅲ型式に比定されるであろう須恵器の甕などが出土していることから、古墳時代終末期から奈良時代初頭にかけての時期に掘削されたものであると考えることができる。また、この溝跡は「糠塚」と称する塚状遺構の周囲を巡るように位置しており、糠塚との関係を見捨てることはできない。糠塚は直径23m、高さ1.8mを測る円形の塚状遺構であり、古墳である可能性を考慮しながら調査を進めた遺構である。調査では確実に当遺構に伴う遺物を得ることはできず、また古墳であることを決定付ける埋葬施設を検出することはできなかった。従って糠塚を積極的に古墳として位置付ける根拠は乏しいと言わざるを得ないが、塚状の高まりと周囲を巡る古墳時代終末期の遺物を伴う溝の存在を考慮すれば、古墳である可能性が完全に否定されたわけではないと考えている。古墳として位置付けた場合、埋葬施設が位置すると想定される墳丘中央部には後世の大規模な掘削が行われており、埋葬施設が破壊されてしまった可能性は十分にある。

また糠塚を古墳として認めるのであれば、陸奥国行方郡家成立に関する大きな問題を提示することになると考えている。国造本紀によれば、古代の相双地方では行方郡の北に位置する浮田(宇多)と南に位置する標葉には国造が置かれたことが記されているが、当行方郡については国造の存在は記されていない。しかし、行方郡家については7世紀後半という時期は郡家の創建が開始される時期であり、6世紀末から7世紀初頭に位置付けられる墳墓が行方郡家の周辺に築かれたとすれば、当地方を治めていた国造以外の有力豪族が郡家成立に関して何らかの影響を与えていた可能性が考えられよう。

いずれにせよ、現段階では当糠塚を確実に古墳として決定付ける知見を得ることができなかったことを尊重し、古墳として位置付けることは差し控えておくが、糠塚を古墳として認めるかについては、今後詳細な検討が必要であると思われる。

(古 代)

今回調査を行った7次(糠塚)調査区では、第5次調査で確認された4号溝跡につながる溝が確認された。この5号溝跡には伐採痕のある大木が埋没しており、溝が機能していた段階では滞水ないし流水していた可能性が高い。市道を隔てた本調査区の北側には正倉院と推定される県指定地が広がり、4号溝跡は郡家内に物資を搬入するための運河として機能したことが想定される。第5次調査ではこの南北溝の東に6棟の掘立柱建物跡が検出されている。本次調査

区では検出された9棟の掘立柱建物跡のうち、5棟の南北棟掘立柱建物跡が柱筋を揃えて溝と平行に整然と配置されている。本調査区の建物群は2ないし3時期の建て替えがあったが、運河状溝跡を挟んだ東側の建物のいずれかは本調査区の建物と同時に存在していたと考えられる。

本調査区は正倉院と推定される県指定地の南側に隣接しているが、調査区の北側は低湿地になっており、掘立柱建物跡等の遺構も確認されなかったことから、運河状の溝の両岸に位置する掘立柱建物群は、第7次調査区北辺で途切れ、建物群の北への広がり、第5・7次調査区で完結するものと思われる。今回検出した建物群と北側の正倉院の間には空白域があったと考えられる。つまり、正倉院と運河に区画された今回の調査区は、南北2列の建物群が整然と並ぶ物資の搬入に関わる区域であったと考えられる。この区域の建物の規模を見ると、23号掘立柱建物跡は5間(15.7m)×4間(10.0m)=157㎡の大形の建物跡で、平成11～13年度にかけて検出された郡庁院の2期正殿建物[庇を含め6間(13.8m)×4間(9.0m)=124.2㎡]、3期正殿建物[5間(19.5m)×3間(9.0m)=175.5㎡]と並ぶ規模で、正殿以外の建物としては3期後殿建物[10間(19.5m)×2間(9.0m)=175.5㎡]に次ぐ異例の大きさである。28号掘立柱建物跡は2度の建て替えがあるが、最大の3期目の規模は4間(12.2m)×3間(7.4m)=90.28㎡、29号掘立柱建物跡は5間(12.8m)×3間(7.3m)=93.44㎡、30号掘立柱建物跡は4間(9.5m)×3間(5.4m)=51.3㎡、32号掘立柱建物跡は4間(12.0m)×3間(6.1m)=73.2㎡である。西側の下流(南側)にはやや小規模な30号掘立柱建物跡、その北側に中規模な29号掘立柱建物跡、一番上流(北側)に大規模な23号掘立柱建物跡が並び、この3棟に対峙するように中規模な28号掘立柱建物跡・32号掘立柱建物跡が計画的に配置されている。これらのことから、正倉院の前に位置し運河に接した本調査区は、計画的に建物群を配置した物資搬入に関わる機能を持った官衙ブロックの1つであったと推定される。

(中 世)

泉廃寺跡の第5次・7次調査区では中世の遺構と思われる多くの小ピット群が検出されているが、それらはほとんど建物を復原するにいたっていない。本調査区にも多数の小ピットがあり同様に建物に復原するにいたらなかったが、25号掘立柱建物跡・26号掘立柱建物跡のように、ある程度建物跡の規模を復原できるものや、ピットの底に根固め石のある小ピットも多く検出した。これらの小ピット群のある微高地北辺に沿う形で土塁が築かれている。また、糠塚を改変して土塁に接続させて土塁をより大きく見せており、中世には部分的ではあるが土塁を巡らせた小規模な掘立柱建物跡群が存在していたことが伺える。

遺物では、糠塚の表土直下から中世と考えられる茶臼や羽釜・瓦器などが出土している。泉廃寺跡の10次調査区でも中世陶磁器が出土している。泉廃寺跡の東北東0.8kmには泉の館跡(市指定史跡)があり、『奥相志』によれば、元亨3年(1323)に相馬重胤に従って下総から奥州行方に向した泉宮内太夫胤安が元亨3年(1323)に築城し、その後も泉氏が累世居住したが、慶長2年(1612)に泉藤右衛門胤政が故あって館を焼き、会津に向かい上杉景勝に属したとされている。今回の調査で確認された中世期の遺構は泉氏が泉を支配する以前、つまり相馬重胤下向以前の相馬氏の行方郡遙任時代(文治五年(1189)～元亨3年(1323))にこの地を支配し

ていた相馬氏の一族や家臣が土着した豪族の居宅等があったことも十分考えられる。(二本松)

表 40 糠塚 (S X 01) 出土遺物観察表

挿 番 号	No.	出土遺構	種 別	器 種	法 量	調 整
					口径/器高/底径	
97	1	糠塚	土師器	高杯	—/(7.0)/—	内面：杯部ミガキ 脚部ケズリ 外面：脚部ケズリ
97	2	糠塚	土師器	杯	—/(1.3)/4.4	内面：体~底部ロクロナデ 外面：体部ナデ 底部系切り
97	3	糠塚	土師器	鉢	19.3/(9.5)/—	内面：口縁部ヨコナデ 外面：口縁部ヨコナデ
97	4	糠塚	土師器	甕	11.9/(4.3)/—	内面：口体部ヘラナデ 外面：口縁部ヘラナデ 体ケズリ
97	5	糠塚	土師器	甕	14.2/(23.4)/—	内面：口縁部ヘラナデ 体部ケズリナデ 外面：体部ハケ
97	6	糠塚	土師器	壺	13.5/(8.6)/—	内面：摩滅 外面：口縁部ヨコナデ 体部ハケ目
97	7	糠塚	土師器	壺	16.7/(12.2)/—	内面：口~体部ヘラナデ 外面：口縁部ナデ体部ヘラナデ
97	8	糠塚	土師器	甕	—/(7.0)/7.0	内面：体~底部ヘラケズリ 外面：体部ヘラケズリ
97	9	糠塚4区	須恵器	鉢 ?	16.9/(7.7)/—	内面：口~体部ロクロナデ 外面：口~体部ロクロナデ
97	10	糠塚4区	須恵器	長頸瓶	—/(6.0)/—	内面：体部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ
98	11	糠塚	須恵器	横瓶	15/(35.7)/—	内面：体部青海波文外面：体部縄タタキ
98	12	糠塚	須恵器	横瓶	14.8/(11.8)/—	内面：体部青海波文外面：体部縄タタキ
99	13	糠塚	須恵器	甕	22.0/(43.1)/—	内面：体部ナデ、カキ目 外面：体部縄タタキ、カキ目
99	14	糠塚3区I	須恵器	甕	26.6/(4.3)/—	内面：口~体部ロクロナデ 外面：口~体部ロクロナデ
99	15	糠塚2区I	瓦質土器	不明	厚0.8	内面：口~体部ナデ 外面：口~体部ナデ後ヘラナデ
99	16	糠塚	陶器	壺	厚1.25	内面：体部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ

表 41 5号溝跡出土遺物観察表

挿 番 号	No.	出土遺構	種 別	器 種	法 量	調 整
					口径/器高/底径	
127	1	SD-5 L2	土師器	台杯	—/(2.15)/7.8	杯部内面：ロクロナデ 台部外面：ロクロナデ

表 42 9号溝跡出土遺物観察表

挿 番 号	No.	出土遺構	種 別	器 種	法 量	調 整
					口径/器高/底径	
127	1	SD-9-1	須恵器	高杯	14.6/(11.1)/—	杯部内ナデ 脚部ケズリ、回転ケズリ 外面ナデ

表 43 11号溝跡出土遺物観察表

挿 番 号	No.	出土遺構	種 別	器 種	法 量	調 整
					口径/器高/底径	
127	1	SD11	土師器	高杯	—/(8.8)/—	杯部内面：ミガキ黒色 脚部内外面：ヘラケズリ
127	2	SD11	土師器	壺	14.05/(5.5)/—	内面：ナデ体部ヘラナデ 外面：ロナデ体部ケズリ
127	3	SD11	土師器	壺	17.7/(21.5)/—	内面：体部ヘラナデ 外面：体部ハケ目
127	4	SD11	土師器	甕	—/(2.3)/8.6	内面：底部ヘラナデ 外面：体~底部ヘラケズリ
127	5	SD11	土師器	甕	—/(6.6)/7.0	内面：体底部ヘラナデ 外面：体底部ヘラケズリ

表 44 12号溝跡出土遺物観察表

挿 番 号	No.	出土遺構	種 別	器 種	法 量	調 整
					口径/器高/底径	
127	1	SD-12	土師器	甕	—/(20.0)/—	内面：体部ハケ目、ヘラナデ 外面：体ハケ目

表 45 5号土坑出土遺物観察表

挿 番 号	No.	出土遺構	種 別	器 種	法 量	調 整
					口径/器高/底径	
135	1	SK5	須恵器	蓋	22.5/(2.05)/—	内面：体部ナデ 外面：体部ロクロナデ後ヘラナデ

表 46 6号土坑出土遺物観察表

挿 番 号	No.	出土遺構	種 別	器 種	法 量	調 整
					口径/器高/底径	
135	1	SK6	須恵器	蓋	—/(2.2)/—	内面：体部ナデ後ヘラナデ 外面：体部カキ目

表 47 9号土坑出土遺物観察表

挿 番 号	No.	出土遺構	種 別	器 種	法 量	調 整
					口径/器高/底径	
135	1	SK9	土師器	高杯	—/(7.2)/—	内面：黒色処理 脚部ケズリ 外面：杯脚部ケズリ
135	2	SK9	土師器	杯	13.6/(2.9)/—	内面：口体部ミガキ黒色 外面：口体部ヘラナデ
135	3	SK9	土師器	杯	14.1/(2.5)/—	内面：口体部ミガキ、外面：口体部ナデ底部系切り
135	4	SK9	カワラケ	杯	10.1/1.85/6.8	内面：口底部ナデ 外面：口体部ナデ 底部系切り
135	5	SK9	石製品	石臼	上径25.8/高11.8/下径29.0	

表 48 12号土坑出土遺物観察表

挿 番 号	No.	出土遺構	種 別	器 種	法 量	調 整
					口径/器高/底径	
136	1	SK12	土師器	高杯	11.6/(8.0)/8.8	内面：黒色処理 脚部ケズリ 外面：杯脚部ケズリ

表 49 14号土坑出土遺物観察表

挿図 番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
136	1	SK14	須恵器	甕	—/(6.1)/15.0	内面:体底部ナデ 外面:ナデヘラナデ、ケズリ

表 50 17号土坑出土遺物観察表

挿図 番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
136	1	SK17	土師器	高杯	—/(8.1)/10.7	杯部内面:ミガキ黒色 脚内外面:ヘラナデケズリナデ
136	2	SK17	須恵器	蓋	—/(2.9)/12.7	内面:体~底部ナデ 外面:体~底部ナデ
136	3	SK17	陶磁器	鉢	—/(4.3)/10.1	内面:体~底部ナデ 外面:体ナデ 底部系切り

表 51 20号土坑出土遺物観察表

挿図 番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
136	1	SK20	土師器	杯	—/(4.9)/8.5	内面:体底部ミガキ、黒色処理 外面:体底部ケズリ
136	2	SK20	土師器	鉢	厚0.7	内面:体部ミガキ、黒色処理 外面:ナデ、ケズリ

表 52 23号土坑出土遺物観察表

挿図 番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
136	1	SK23	土師器	甕	20.1/(3.3)/—	内面:口体部ハケ目 外面:口縁部ハケ目体部ケズリ
136	2	SK23	土師器	甕	—/(3.8)/7.5	内面:体~底部ヘラナデ 外面:体部ハケ底部ケズリ

表 53 25号土坑出土遺物観察表

挿図 番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
136	1	SK25	須恵器	壺	9.3/(2.7)/—	内面:口~体部ナデ 外面:口体部ロナデ

表 54 28号土坑出土遺物観察表

挿図 番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
136	1	SK28	土師器	器台	11.3/(3.6)/—	脚部内面:ケズリ、ナデ 外面:ケズリ、ヘラナデ

表 55 29号土坑出土遺物観察表

挿図 番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
136	1	SK29	土師器	台杯	—/(6.5)/—	杯部内面:ミガキ、黒色処理 脚部外面:ケズリ
136	2	SK29	土師器	鉢	20.0/(5.9)/—	内面:ロナデ体部ヘラナデ外面:ロナデ体部ヘラナデ
136	3	SK29	土師器	甕	—/(2.3)/6.3	内面:体底部ヘラナデ外面:体部ハケ底部ケズリ

表 56 32号土坑出土遺物観察表

挿図 番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
136	1	SK32	土師器	甕	—/(4.1)/8.0	内面:体~底部ヘラナデ 外面:体部ハケ目

表 57 35号土坑出土遺物観察表

挿図 番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
136	1	SK35	土師器	鉢	19.1/(4.7)/—	内面:口縁部ヘラナデ 外面:口縁部ナデ、ヘラナデ

表 58 G7グリッド出土遺物観察表

挿図 番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
137	1	G7	陶器	攪鉢	—/(7.2)/13.1	内面:口体部ナデ 外面:口体部ナデ 底部系切り

表 59 G8グリッド出土遺物観察表

挿図 番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
137	1	G8	土師器	甕?	—/(3.4)/4.9	内面:体部ヘラナデ 外面:体部ヘラケズリ
137	2	G8-58	須恵器	杯	9.1/5.6/3.35	内面:口体部ナデ 外面:体部ナデ 底部回転ケズリ
137	3	G8-58	陶器	甕?	—/—/厚0.4	内面:体部ロクロナデ 外面:体部ロクロナデ
137	4	G8	金属	キセル	長8.6/長径(0.9)/短(0.3)	

表 60 G8ピット群出土遺物観察表

挿図 番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
137	1	G8-84	土師器	壺	—/(11.8)/—	内面口底部ナデ 外面口体部:ナデ 底部回転ケズリ
137	2	G8-84	土師器	壺	—/(6.2)/—	

表 61 G9グリッド出土遺物観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
137	1	G9-35	土師器	甕	—/(5.5)/7.5	内面: 体部ナデ、ヘラナデ 外面: 体部ヘラナデケズリ
137	2	G9-35	土師器	甕	—/(5.3)/6.5	内面: 体部ヘラナデ 外面: 体部ハケ目、ヘラケズリ
137	3	G9	土師器	不明	—/(3.95)/13.0	内面: 体部ロクロナデ 外面: 体部ロクロナデ

表 62 2号トレンチ出土遺物観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
137	1	2T	土師器	甕	—/(2.6)/7.7	内面: 摩滅 外面: 体~底部ヘラケズリ
137	2	2T	須恵器	台杯	—/(2.8)/10.2	内面: 体底部ロクロナデ 外面: 体底部ロクロナデ
137	3	2T L I	土師質土器	土鍋	—/(4.6)/24.6	内面: 口体部ナデ 外面: 口縁部ナデ 体部回転削り
137	4	2T L I	土師質土器	土鍋	—/(5.0)/24.8	内面: 口体部ナデ 外面: 口縁部ナデ 体部回転削り
137	5	2T盛土	石製品	茶臼		上径15.5/高(8.2)/下径21.2
137	6	2T盛土	石製品	砥石	長8.2/幅4.4/厚1.8	

表 63 3号トレンチ出土遺物観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
138	1	3T	縄文	深鉢	長2.8/厚0.8	内面: 体部研磨、外面: 体部縄文

表 64 4号トレンチ出土遺物観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
138	1	4T L I	土師質土器	土鍋	—/(5.2)/26.9	内面口体部ナデ 外面体部ケズリ
138	2	4T L I	瓦器	火鉢	27.4/7.7/24.7	内面口底部ナデ 外面: 口底部ロクロナデ

表 65 5号トレンチ出土遺物観察表

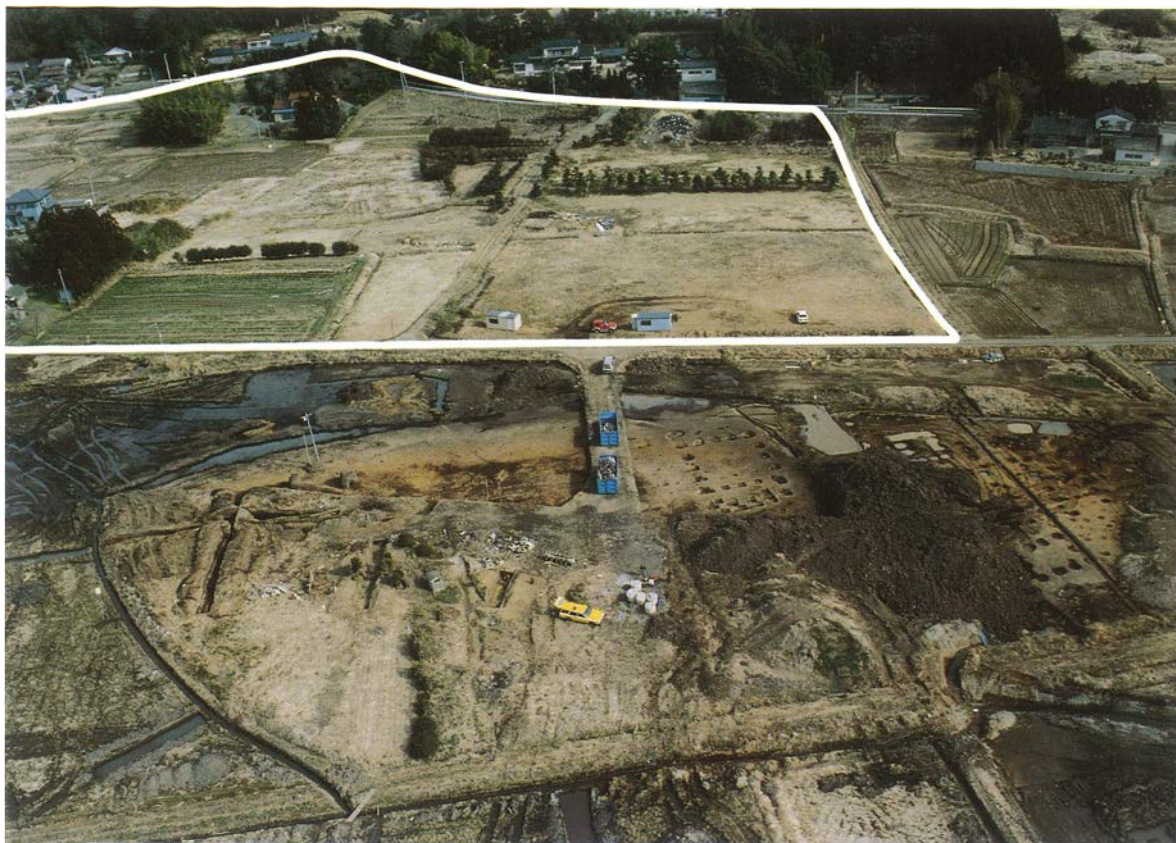
挿図番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
138	1	5T	土師器	杯	15.5/3.9/—	内面: 口底部ミガキ黒色 外面: 口縁部ナデ体底部ケズリ
138	2	5T	土師器	壺?	—/(5.7)/9.5	内面: 底部ヘラナデ 外面: ハケヘラケズリ底部木葉痕

表 66 6号トレンチ出土遺物観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量	調整
					口径/器高/底径	
138	1	6T	土師器	台杯	—/(5.5)/—	杯部内面: ミガキ、黒色処理 脚部内外面: ケズリ
138	2	6T	土師器	高杯	—/(5.5)/—	杯部内面: ミガキ、黒色処理 脚部内外面: ケズリ
138	3	6T	土師器	高杯	—/(5.6)/—	杯部内面: ミガキ、黒色処理 脚部内外面: ケズリ
138	4	6T	土師器	杯	12.4/(4.1)/—	内面: 口体部ナデ 外面: 口縁部ナデ 体部ケズリ
138	5	6T	土師器	杯	11.8/5.2/3.4	内面: 口~底部ミガキ、黒色処理 外面: 底部ケズリ
138	6	6T	土師器	杯	17.0/(3.3)/—	内面: 口体部ミガキ黒色 外面: 口縁部ナデ 体部ケズリ
138	7	6T	土師器	杯	—/(1.9)/6.8	内面体底部ミガキ黒色 外面体部ロクロナデ系切 墨書
138	8	6T	土師器	蓋	—/(1.0)/9.8	内面: 口体部ナデ 外面: 口~体部ナデ
138	9	6T	土師器	鉢	10.3/(2.3)/—	内面: 口縁部ナデ 外面: 口縁部ナデ 体部ケズリ
138	10	6T	土師質土器	土鍋	—/(4.15)/23.5	内面: 口~体部ロクロナデ 外面: 体部回転削り
138	11	6T	須恵器	高杯	—/(3.2)/10.6	脚部内面: ロクロナデ 外面: ロクロナデ
138	12	6T	須恵器	蓋	—/(2.0)/—	内面: 体部ロクロナデ後ヘラナデ 外面: 体部カキ目
138	13	6T	須恵器	蓋	—/(1.65)/9.3	内面: ロクロナデ 外面: 回転削り
138	14	6T	須恵器	蓋	—/(1.6)/8.2	内面: ロクロナデ 外面: 回転削り
138	15	6T	須恵器	鉢	19.6/(3.4)/—	内面: 口体部ナデ 外面: 口体部ナデ
138	16	6T	須恵器	甕	—/(4.0)/—	内面: ロナデ 体部ヘラナデ 外面: 体部平行タタキ

表 67 調査区出土瓦観察表

挿図番号	No.	出土遺構	種別	調整		重量	厚さ	備考
				凸面	凹面			
139	1	G7-78	軒丸瓦	瓦当文	様: 花葉文	490	2.2	
139	2	G8	丸瓦	正格子タタキ後ヘラナデ	布目痕	230	2.4	凹側縁・狭端面ヘラケズリ
139	3	SK14	丸瓦	ヘラケズリ	布目痕、ヘラナデケズリ	400	2.1	凹側縁ヘラケズリ
139	4	G8	丸瓦	ヘラナデ	布目痕、模骨痕、横ナデ	120	1.3	狭端面・側面。凹側縁ヘラケズリ
139	5	4T盛土	平瓦	廉状タタキ	布目痕、横ナデケズリ	1,250	2.0	側面・凹凸側縁ヘラケズリ
140	6	糠塚	平瓦	廉状タタキ	布目痕、模骨痕	590	3.2	狭端面・凹狭端縁ケズリ、凹側縁ナデ
140	7	G8-86	平瓦	廉状タタキ	布目痕	180	2.2	側面・凹凸側縁ヘラケズリ
140	8	SB31	平瓦	廉状タタキ	布目痕、模骨痕	610	2.6	凹側縁ヘラケズリ、凸側縁ナデ
140	9	G8-86	平瓦	廉状タタキ	布目痕、横ナデ	130	3.4	側面分割ままか? 凹凸側縁ケズリ
140	10	糠塚	平瓦	廉状タタキ	布目痕	160	1.9	側面、凹凸側縁ケズリ
140	11	SB	平瓦	廉状タタキ	布目痕	190	3.6	側面・凹凸側縁ケズリ
140	12	2T盛土	平瓦	廉状タタキ	ヘラケズリ	150	2.8	側面・凹凸側縁ケズリ、凹側縁ケズリ
140	13	糠塚	平瓦	廉状タタキ	布目痕、模骨痕、横ナデ	230	1.8	側面分割。狭端面角切り部分ヘラナデ
141	14	表土	平瓦	格子タタキ	布目痕	110	2.4	側面二面ヘラケズリ
141	15	糠塚3区	平瓦	正格子タタキ	布目痕	440	2.8	凹狭端縁ヘラケズリ
141	16	糠塚	平瓦	格子タタキ	布目痕、横方向のヘラナデ	200	2.4	狭端面ヘラケズリ
141	17	糠塚1区	平瓦	斜格子タタキ	布目痕	390	2.6	側面・狭端面・凹凸側縁ヘラケズリ
141	18	2T盛土	平瓦	斜格子タタキ	布目痕、模骨痕	370	2.1	凹側縁ヘラケズリ、側面分割ままか?



1 泉廃寺跡（7次糠塚） 武須川開削部分（南から） 白線は県指定史跡範囲



2 泉廃寺跡（7次糠塚） 武須川南側部分（南から） 白線は県指定史跡範囲



3 泉廃寺跡（7次糠塚） 武須川南側部分（南から）



4 泉廃寺跡（7次糠塚） 調査区西側部分（上が北）



5 泉廃寺跡 (7次糠塚) 調査区中央部分 (上が北)



6 泉廃寺跡 (7次糠塚) 調査区東側部分 (上が北)



7 遺跡近景(東から)



8 遺跡近景(西から)



9 試掘調査前調査区全景(南東から)



10 試掘調査前調査区全景(南から)



11 糠塚 調査前(南から)



12 土塁 調査前(東から)



13 糠塚 1号トレンチ土層断面(南東から)



14 糠塚 2号トレンチ茶臼(1)出土状況(南から)



15 糠塚 2号トレンチ茶臼(2)出土状況(南から)



16 糠塚 3号トレンチ土層断面(南西から)



17 糠塚 4号トレンチ土層断面(西から)



18 土塁 5号トレンチ(南から)



19 盛土 6号トレンチ土層断面(西から)



20 盛土 7号トレンチ土層断面(西から)



21 調査区南側試掘トレンチ(北から)



22 調査区南西側試掘トレンチ(北東から)



23 調査区西側試掘トレンチ(東から)



24 調査区北側試掘トレンチ(南から)



25 糠塚調査前(手前の屋敷林)(西から)



26 糠塚北側溝(奥)・11号溝(前)(北東から)



27 糠塚北側溝(南東から)



28 糠塚北側溝 須恵器出土状況(南東から)



29 糠塚東側盛土(南東から)



30 糠塚西側盛土(南西から)



31 糠塚基底面(南西から)



32 糠塚完掘後(上が北)



33 23号掘立柱建物跡 (南から)



34 23号掘立柱建物跡 (北から)



35 23号掘立柱建物跡 P1土層断面 (南から)



36 23号掘立柱建物跡 P1柱出土状況 (南から)



37 23号掘立柱建物跡 P3土層断面 (東から)



38 23号掘立柱建物跡 P3礎板出土状況 (南から)



39 23号掘立柱建物跡 P18土層断面 (南から)



40 23号掘立柱建物跡 P18礎板出土状況 (南から)



41 24号掘立柱建物跡 検出状況(南から)



42 24号掘立柱建物跡 完掘状況(南から)



43 24号掘立柱建物跡 P1土層断面(東から)



44 24号掘立柱建物跡 P3土層断面(南から)



45 24号掘立柱建物跡 P6土層断面(南から)



46 24号掘立柱建物跡 P6土層断面(西から)



47 25号掘立柱建物跡 (南から)



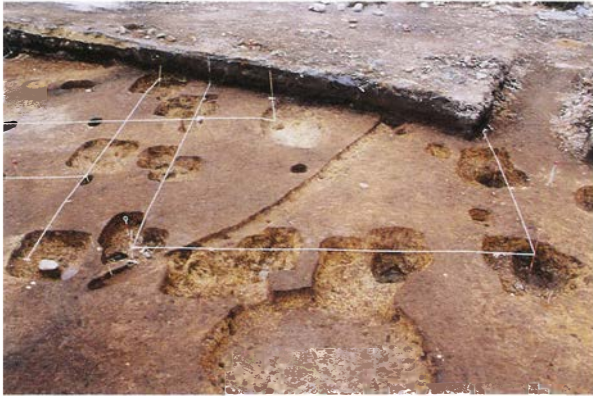
48 25号掘立柱建物跡 柱穴の根固石(南から)



49 26号掘立柱建物跡 (東から)



50 26号掘立柱建物跡 (北から)



51 28号掘立柱建物跡 (北側部分) (北から)



52 28号掘立柱建物跡 (南側部分) (西から)



53 29号掘立柱建物跡 (南から)



54 29号掘立柱建物跡 (東から)



55 30号掘立柱建物跡 (北側部分) (西から)



56 30号掘立柱建物跡 (南側部分) (西から)



57 31号掘立柱建物跡 (西から)



58 31号掘立柱建物跡 P2土層断面 (西から)



59 28(奥)・32(前)号掘立柱建物跡 (南から)



60 32号掘立柱建物跡 (南から)



61 33号掘立柱建物跡 (南から)



62 34号掘立柱建物跡 (北から)



63 9号柵列 (東から)



64 10(右)・33号掘立柱建物跡(左) (西から)



65 5号溝跡 土層断面 (南から)



66 8 (横)・9 (縦) 号溝跡 (西から)



67 9号溝跡 (南から)



68 9号溝跡 高杯出土状況 (南から)



69 10号溝跡・29号土坑 (北から)



70 10号溝跡・39号土坑 (南から)



71 14号溝跡 (東から)



72 14号溝跡 土層断面 (西から)



73 6号土坑 (南から)



74 7号土坑 (南から)



75 14号土坑 (南から)



76 26号土坑 (南から)



77 29号土坑 (南から)



78 33号土坑 (南から)



79 34号土坑 (南から)



80 35号土坑 (南から)



81 G8-71・72・81・82グリッド ピット群(東から)



82 G8-55・56グリッド ピット群(東から)



83 G8-75・76グリッド ピット群(南から)



84 G8-95・96グリッド ピット群(西から)



85 G8-95・96グリッド ピット群(南から)



86 H8-06グリッド ピット群(南から)



87 G8-95グリッド ピット、根固石出土状況(東から)



88 H8-05グリッド ピット、根固石出土状況(南から)



89 糠塚 北東側溝出土、土師器甕



90 糠塚 北東側溝出土、土師器甕



91 糠塚 北東側溝出土、土師器甕



92 糠塚 北東側溝出土、土師器甕



93 糠塚 北東側溝出土、須恵器群



88 糠塚 北東側溝出土、須恵器横瓶



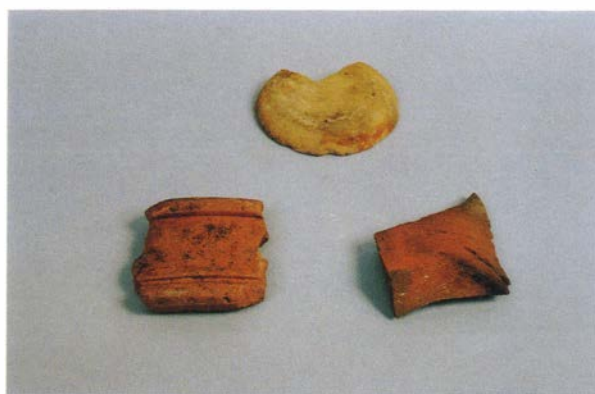
95 糠塚 北東側溝出土、須恵器横瓶



96 糠塚 北東側溝出土、須恵器甕



97 糠塚 南側盛土 (2T) 出土、土器鍋



98 糠塚 北側盛土 (4T) 出土、瓦質土器 (下) 9号土坑出土、カワラケ (上)



99 糠塚 南側盛土 (2T) (上)・北側盛土 (4T) (下) 出土、砥石



100 糠塚 南側盛土 (2T) 出土、茶臼



101 土塁 盛土 (5T) 出土、土師器杯



102 6T出土、須恵器蓋 (左上)。25号掘立P8 出土須恵器壺 (右上)。遺構外出土須恵器壺



103 31号掘立柱建物P6出土 須恵器杯 (十字線刻)



104 7号溝跡出土、土師器甕



105 7号トレンチ(左)・G8-58グリッド出土、須恵器杯



106 9号溝跡出土、須恵器高杯



107 11号溝跡出土、土師器甕



108 12号溝跡出土、土師器甕



109 9号土坑出土、石臼



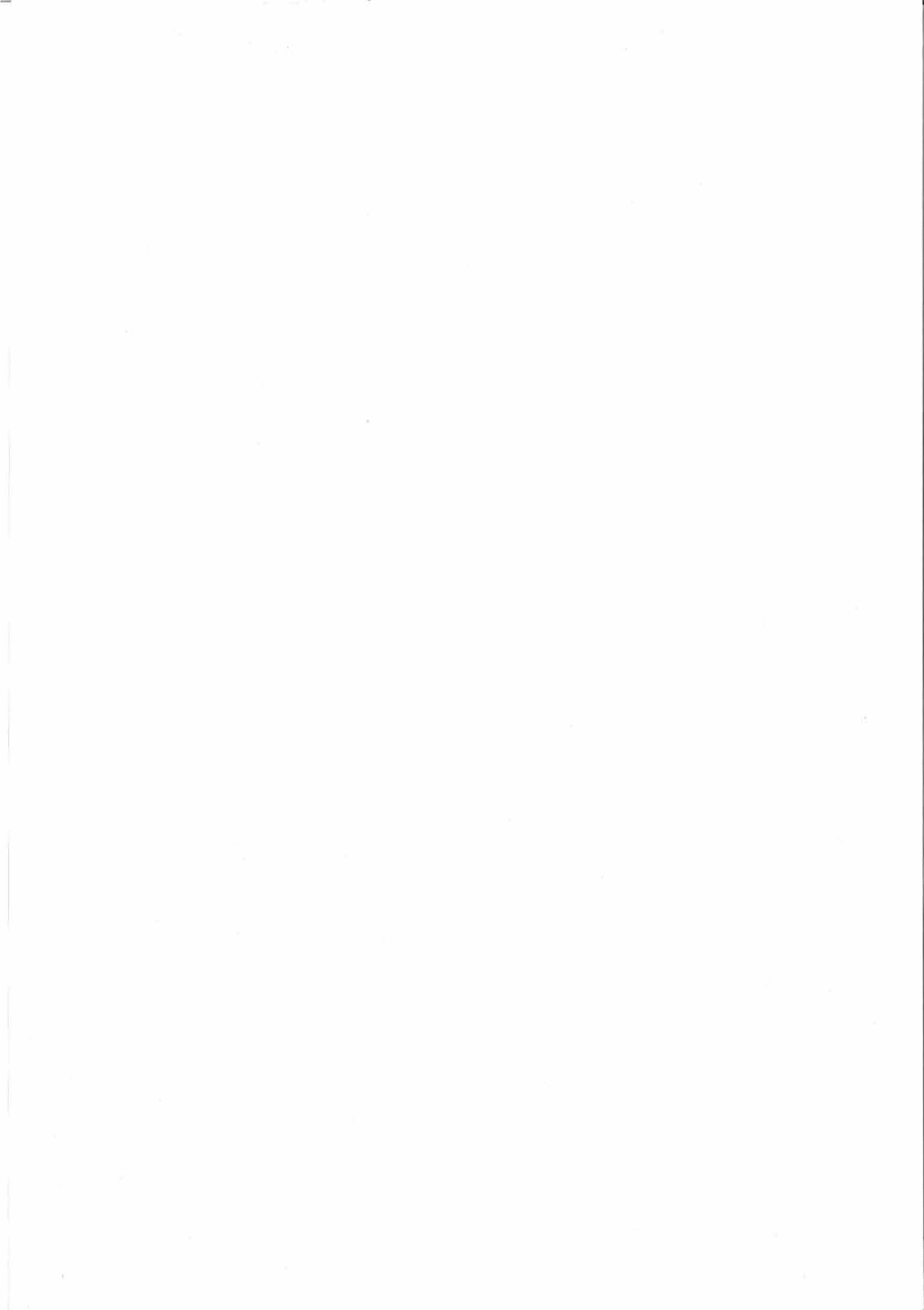
110 12号土坑出土、土師器高杯



111 表採土師器壺



112 G8-84グリッド出土、土師器甕



第8章 第9次調査

第1節 調査に至る経過

第9次調査区は泉廃寺跡の南東部、H13グリッド付近に位置する(図142)。第9次調査区の北側には第3次調査区が位置し、掘立柱建物跡や溝跡が検出されている。また西には第7次調査区が位置し、掘立柱建物跡、ピット群が検出され、更に東側の第10次調査区では、掘立柱建物跡とともに多量の瓦が出土している。当調査区は県営ほ場整備事業にかかる面整備事業施工区域であったが、発掘調査を実施する以前に当該区域の工事が開始されてしまった。そこで急遽開発側との保存協議を行い、開発事業を一時停止し、平成10年4月20日から発掘調査を開始した。

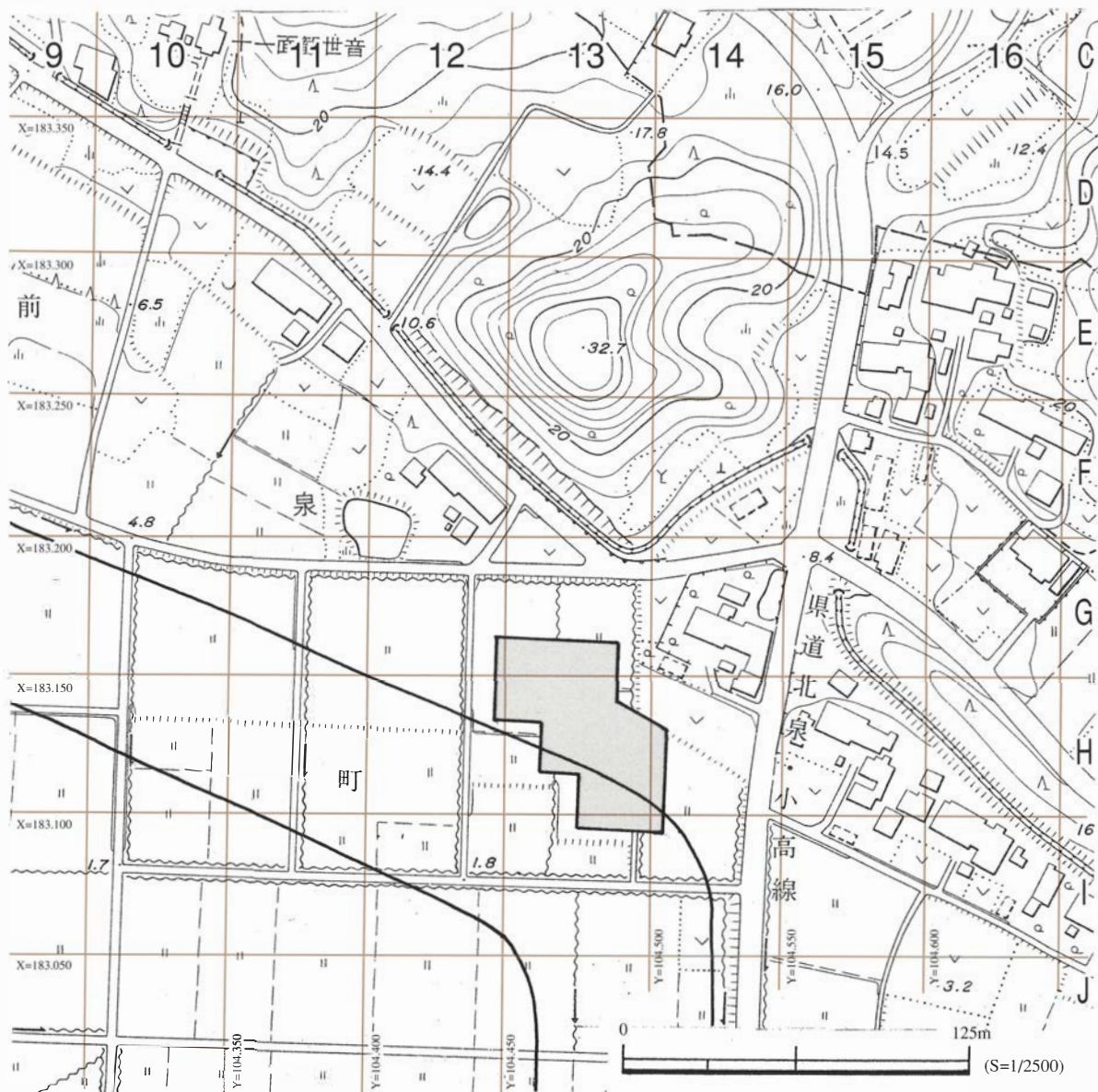


図142 第9次調査区位置図

第2節 調査の方法

調査は、泉廃寺跡全域に設けられているグリッドを第9次調査区内に設定することから始めた。調査区内に設置したグリッドは泉廃寺跡の遺跡全体に設けられている50m四方の大グリッドを5m四方の小グリッドに分割し、グリッドのX軸とY軸の交点に杭を設置した。設置したグリッド杭は公共座標との対応関係にある。遺物の取り上げや図面作成は設置したグリッド杭を基準に行っている。

調査は表土ならびに水田耕作土は 0.7m^3 のバックホーで除去し、遺構検出面の確認を行った。遺構検出面に到達した後の遺構検出、精査作業は人力で行い、遺構は検出された順に遺構番号を付し、掘下げを行った。出土した遺物は、表土並びに耕作土から出土したものは出土層位・出土グリッドを記録して取り上げ、遺構から出土したものは出土遺構、出土状況、出土層位を記録して取り上げた。また遺物の出土状況によっては出土状況図を作成している。

現地の記録は、遺構は平板測量で作成し、調査区全体図を $S = 1 / 100$ 、各遺構平面図・土層断面図を $S = 1 / 20$ 、遺物出土状況図を $S = 1 / 10 \cdot 20$ で作成している。記録写真は35mm判カラーリバーサルフィルム・カラーネガフィルム・モノクロームフィルムで撮影した。

第3節 調査成果

第1項 溝跡

1号溝跡 (SD1) 図144

1号溝跡は調査グリッドH13-66付近で検出した南北方向の溝跡である。溝跡の大部分は後世の掘削により大きく削平されており、調査では溝底面の一部を検出しただけである。溝跡は残存している範囲で、最大幅3.7m・深さ20cm・長さ8.2mを測る。また溝跡の南側は掘削により完全に削平されており溝跡の範囲については不明であるが、地山ローム面に青白色のグライ化が溝状に認められたことから、更に南側へ延びていたと判断される。溝跡からは土師器・須恵器・瓦が出土している。遺物は溝跡の底面近くから出土しており、1号溝跡に伴う遺物であると判断される。

第2項 土坑

1号土坑 (SK1) 図145

位置 調査グリッドH13-03に位置する。**重複関係** 他の遺構との重複はない。**形状** 平面形は円形を呈し、垂直に掘り込まれている。**規模** 直径1.85m×深さ1.62mを測る。**覆土** 暗灰褐色粘性シルト層。**遺物** なし

2号土坑 (SK2) 図145

位置 調査グリッドH13-13に位置する。**重複関係** 他の遺構との重複はない。**形状** 平面形は楕円形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれる。**規模** 直径0.88m×深さ0.05m **覆土** 灰褐色シルト層 **遺物** 鉄鏝

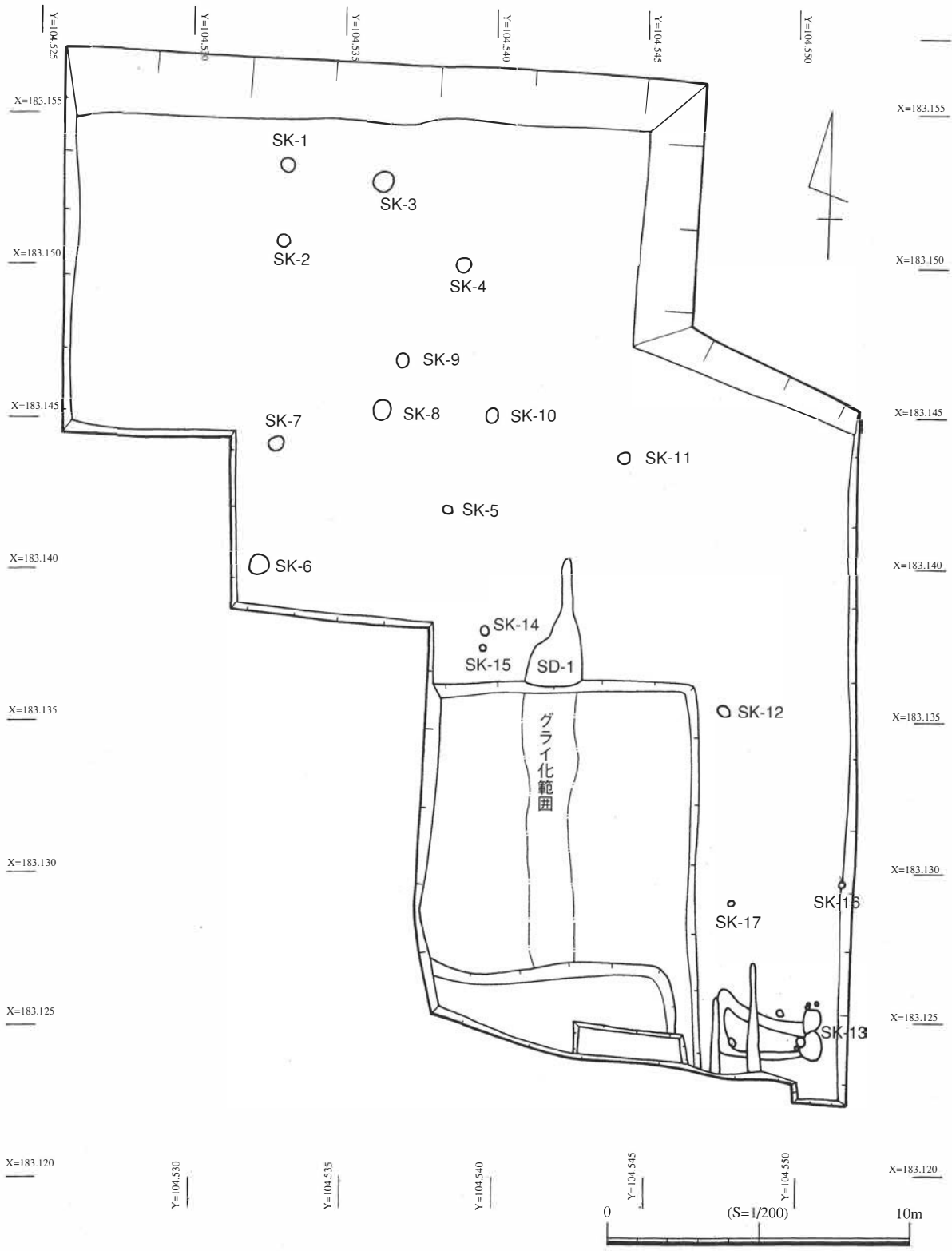
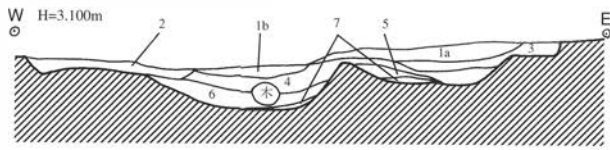


図143 第9次調査区全体図



1号溝跡 土層説明

- | | | | | |
|----|---------|-----|------|------------------------|
| 1a | 黒褐色砂質土 | 粘性弱 | しまり強 | 所々に赤褐色土・暗灰褐色粘土ブロックを含む。 |
| 1b | 黒褐色砂質土 | 粘性弱 | しまり強 | 少量の黄白色ブロックを含む。 |
| 2 | 黒褐色シルト層 | 粘性弱 | しまり強 | 混入物は特になし。 |
| 3 | 暗灰褐色砂質土 | 粘性弱 | しまり強 | 少量の白色土粒を含む。 |
| 4 | 黒褐色シルト層 | 粘性中 | しまり中 | 全体に明褐色砂を均一に含む。 |
| 5 | 黒褐色シルト層 | 粘性中 | しまり中 | 混入物は特になし。 |
| 6 | 灰褐色砂質土 | 粘性弱 | しまり中 | 混入物は特になし。 |
| 7 | 赤褐色砂質土 | 粘性弱 | しまり中 | 少量の灰色砂を含む。 |

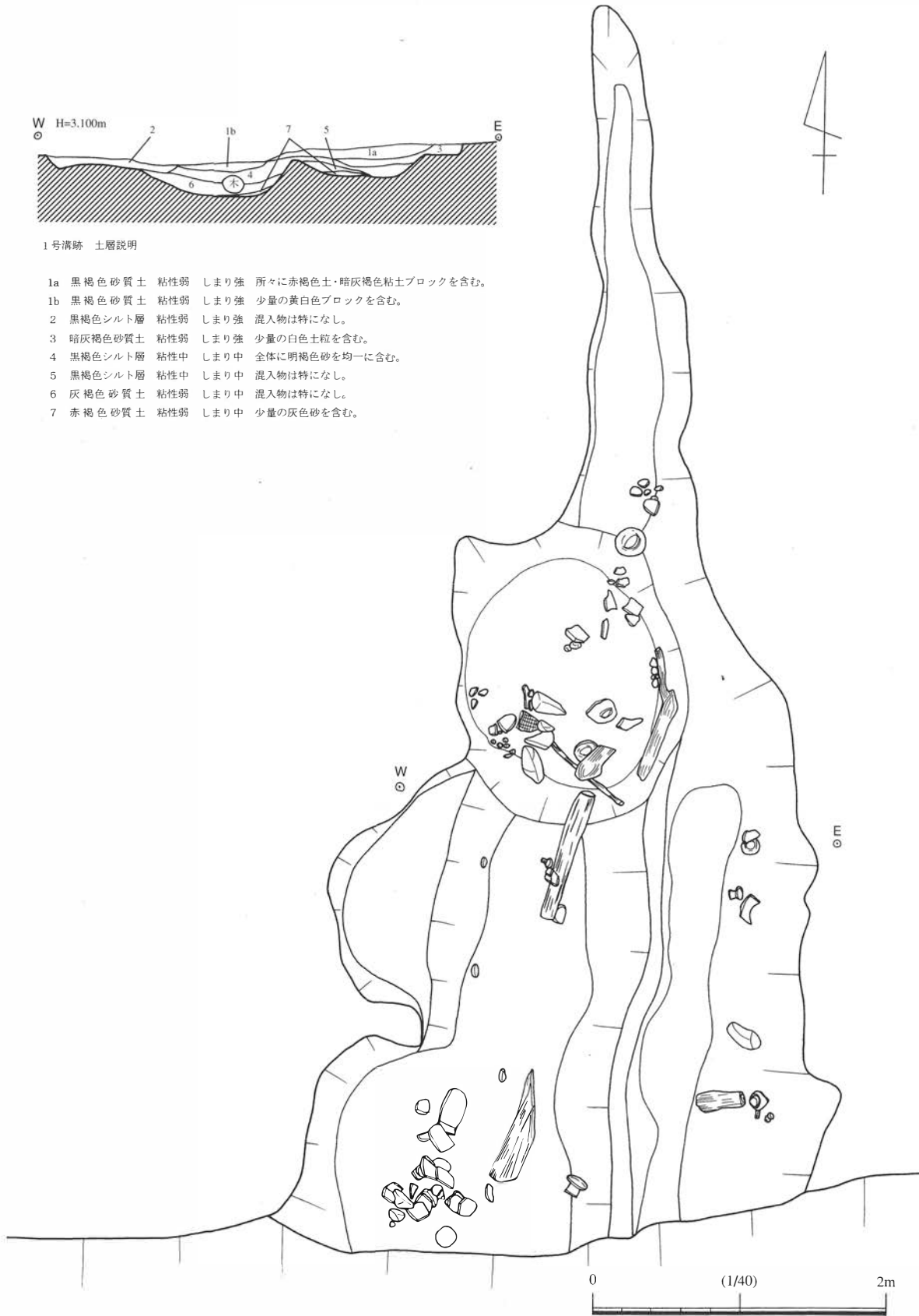
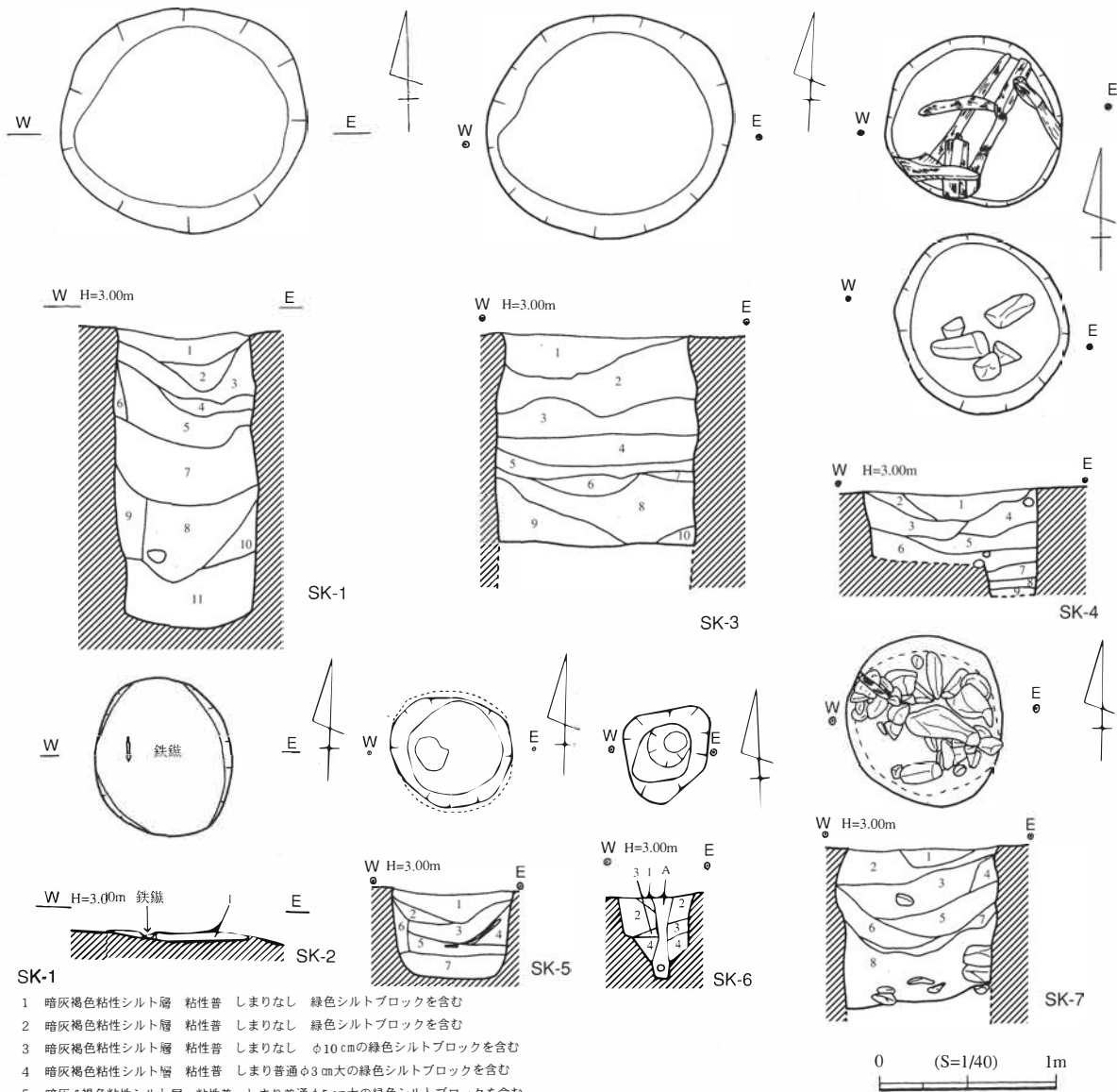


図144 1号溝跡



SK-1

- 1 暗灰褐色粘性シルト層 粘性普 しまりなし 緑色シルトブロックを含む
- 2 暗灰褐色粘性シルト層 粘性普 しまりなし 緑色シルトブロックを含む
- 3 暗灰褐色粘性シルト層 粘性普 しまりなし φ10 cmの緑色シルトブロックを含む
- 4 暗灰褐色粘性シルト層 粘性普 しまり普通φ3 cm大の緑色シルトブロックを含む
- 5 暗灰褐色粘性シルト層 粘性普 しまり普通φ5 cm大の緑色シルトブロックを含む
- 6 緑色シルト層 暗灰褐色粘性シルトを含む
- 7 明黒褐色粘土層 粘性有 しまりなし φ5 cm大の緑色シルトブロックを少量含む
- 8 暗灰褐色粘性シルト層 粘性有 しまり φ3 cmの緑色粘性シルトブロックを含む
- 9 暗灰褐色粘性シルト層 粘性有 しまりなし 緑色粘性シルトブロック 物遺体を含む
- 10 灰褐色シルト層 粘性なし しまりなし 緑色粘性シルトブロック 物遺体を含む
- 11 灰褐色粘性シルト層 粘性なし しまりなし 植物遺体を含む

SK-3

- 1 暗褐色粘性シルト層 粘性中 しまり中 φ1mm前後の植物遺体を含む
- 2 暗褐色粘性シルト層 粘性弱 しまり中 灰褐色砂質土を含む
- 3 黒褐色粘性シルト層 粘性中 しまり中 φ1cmの緑色ブロックを含む
- 4 黒褐色粘性シルト層 粘性中 しまり中 φ5 cmの灰オリブ色ブロックを含む
- 5 灰褐色粘性シルト層 粘性中 しまり中 混入物は特になし
- 6 黒褐色粘性シルト層 粘性強 しまり弱 混入物は特になし
- 7 暗灰褐色粘性シルト層 粘性強 しまり弱 φ1 cmの黄褐色シルトを含む
- 8 灰褐色砂質層 粘性強 しまり弱 混入物は特になし
- 9 灰褐色粘性シルト層 粘性強 しまり弱 φ1 cmの明褐色シルトを含む
- 10 灰褐色粘性シルト層 粘性強 しまり弱 黄褐色シルトを含む

SK-4

- 1 灰褐色シルト層 粘性なし しまり有 φ5 cmの緑色シルトを含む
- 2 灰褐色シルト層 粘性なし しまり有 緑色シルトを含む
- 3 明黒褐色シルト層 粘性なし しまり普
- 4 明黒褐色粘性シルト層 φ30 cmの緑色粘土ブロックを含む
- 5 明黒褐色シルト層 粘性なし しまり普
- 6 明黒褐色粘性シルト層 粘性普 しまり普 φ5 cmの緑色ブロックを含む
- 7 緑色粘性シルト層 壁面崩落土
- 8 灰オリブ色粘土層 粘性普 しまり普
- 9 オリブ色粘土層 粘性普 しまり普 φ5 cmの緑色ブロックを含む

SK-2

- 1 灰褐色シルト層 粘性なし しまり有 φ5 cm大の緑色ブロックを含む

SK-5

- 1 暗灰褐色シルト層 粘性弱 しまり弱 赤褐色土を含む
- 2 黒褐色粘土層 粘性強 しまり中 φ2~4 cmの青褐色土を含む
- 3 黒褐色粘土層 粘性強 しまり中 植物遺体を含む
- 4 青褐色砂質層 粘性強 しまり中 混入物は特になし
- 5 黒褐色粘土層 粘性強 しまり中 φ2~4 cmの青褐色土を含む
- 6 黒褐色粘土層 粘性強 しまり中 混入物は特になし
- 7 黄褐色粘性シルト層 粘性強 しまり中 黒褐色粘土を含む

SK-6

- A 暗灰褐色粘性シルト層 粘性なし しまり有 φ2~3 cmの黄褐色粘性ブロックを含む
- 1 黒褐色シルト層 粘性なし しまり有
- 2 暗灰褐色シルト層 粘性なし しまり有 φ10 cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 3 暗灰褐色シルト層 粘性有 しまり有 φ2~3 cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む

SK-7

- 1 青褐色砂質層 粘性中 しまり弱 黒褐色粘土を含む
- 2 黒褐色粘土層 粘性強 しまり弱 φ1 cmの青褐色シルトブロックを含む
- 3 青褐色砂質層 粘性弱 しまり中 黒褐色粘土を含む
- 4 黒褐色粘土層 粘性強 しまり中 植物遺体を含む
- 5 黒褐色粘土層 粘性強 しまり中 φ2~4 cmの青褐色土を含む
- 6 黒褐色粘土層 粘性強 しまり中 混入物は特になし
- 7 黄褐色粘性シルト層 粘性強 しまり中 黒褐色粘土を含む
- 8 黒褐色粘土層 粘性強 しまり中

図145 土坑 (1)

3号土坑 (SK3) 図145

位置 調査グリッドH13-04に位置する。**重複** 他の遺構との重複はない。**形状** 平面形は円形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれる。**規模** 直径 1.38m×深さ 1.20m以上 **覆土** 暗灰褐色・黒褐色粘性シルト層を主体とする。**遺物** なし **備考** 深さ約 1.2m付近で遺構壁面の崩落が始まったため、調査を断念した。

4号土坑 (SK4) 図145

位置 調査グリッドH13-15に位置する。**重複** 他の遺構との重複はない。**形状** 平面形は円形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれている。**規模** 直径 0.98m×深さ 0.60m以上 **覆土** 灰褐色・黒褐色シルト層を主体とし、緑色粘土ブロックを含む。 **遺物** 木製品 (加工木)

5号土坑 (SK5) 図145

位置 調査グリッドH13-55に位置する。**重複** 他の遺構との重複関係はない。**形状** 平面形は円形を呈し、断面形は箱型である。遺構は垂直に掘り込まれている。**規模** 直径 0.70m×深さ 0.50mを測る。**覆土** 黒褐色粘土層を主体とし、砂層を含む。**遺物** なし

6号土坑 (SK6) 図145

位置 調査グリッドH13-52に位置する。**重複** 他の遺構との重複関係にはない。**形状** 平面形は不整形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれている。**規模** 直径 0.47m×深さ 0.46mを測る。**覆土** 暗灰褐色シルト層を主体とし、黄褐色土を含む。**遺物** なし

7号土坑 (SK7) 図145

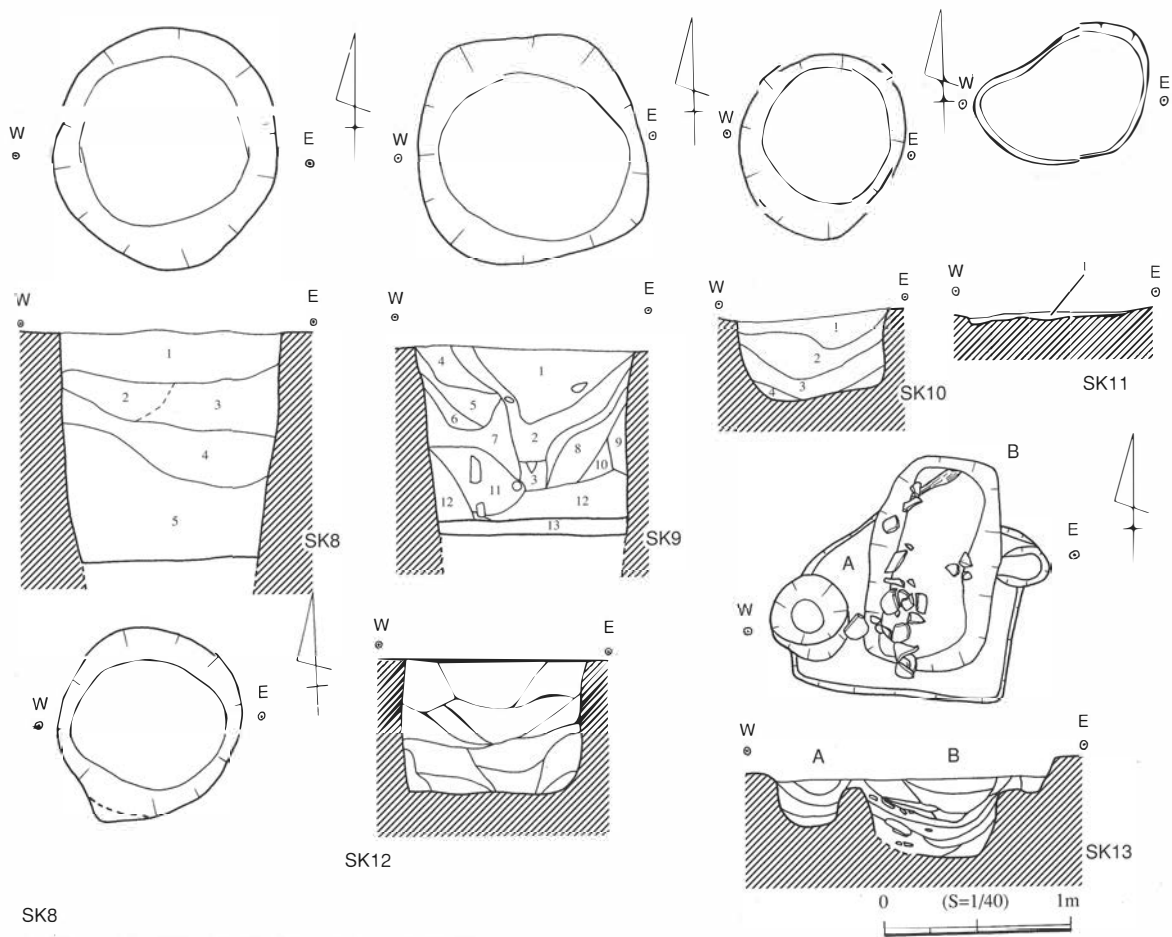
位置 調査グリッドH13-43に位置する。**重複** 他の遺構との重複関係にはない。**形状** 平面形は円形を呈し、遺構はほぼ垂直に掘り込まれている。**規模** 直径 0.88×深さ 0.90m以上 **覆土** 案灰褐色土を主体とし黄褐色粘土ブロックを含む。**遺物** なし **備考** 深さ1m付近で遺構壁面の崩落が始まったため、調査を中止した。

8号土坑 (SK8) 図146

位置 調査グリッドH13-34に位置する。**重複** 他の遺構との重複関係はない。**形状** 平面形は円形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれる。**規模** 直径 1.19m×深さ 1.2m以上。**覆土** 黒褐色土を主体とし、植物遺存体を含む。**遺物** なし **備考** 深さ1mを超えた付近で遺構の崩落が始まったため、調査を中止した。

9号土坑 (SK9) 図146

位置 調査グリッドH13-34に位置する。**重複** 他の遺構との重複関係にはない。**形状** 平面形は円形を呈し、遺構は垂直に掘り込まれる。**規模** 直径 1.20m×深さ 1.0 m以上を測る。



SK8

- 1 黒褐色シルト層 粘性普 しまり普 所々に緑色シルトブロックを含む
- 2 黒褐色粘性シルト層 粘性普 しまり普 φ3~5mmの植物遺体を含む
- 3 黒褐色粘性シルト層 粘性普 しまり普 φ2~3mmの緑色土 植物遺体を含む
- 4 黒褐色粘性シルト層 粘性普 しまり普 混入物は特になし
- 5 黒褐色粘性シルト層 粘性強 しまり普 混入物は特になし

SK9

- 1 黄褐色土・灰褐色土・淡緑色土・暗茶褐色土を含む
- 2 暗灰褐色シルト層 粘性なし しまり有 φ3~5cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 3 暗灰褐色砂質層 粘性なし しまり普 植物遺体を含む
- 4 暗灰褐色シルト層 粘性なし しまり有 φ10cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 5 茶褐色シルト層 粘性普 しまり有 φ1cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 6 灰褐色砂質層 粘性なし しまり普 混入物は特になし
- 7 黄褐色粘性シルト層 粘性有 しまりなし
- 8 明灰褐色粘土層 粘性有 しまりなし φ5cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 9 暗灰褐色粘性シルト層 粘性有 しまりなし φ3cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 10 灰褐色砂質層 粘性有 しまりなし φ2cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 11 黒褐色砂質層 粘性有 しまりなし φ5cmの淡緑色粘性シルトブロックを含む
- 12 黒褐色粘土層 粘性有 しまりなし φ3~10cmの茶褐色粘性シルトブロックを含む
- 13 黒褐色砂質層 粘性普 しまりなし φ2cmの淡緑色粘性シルトブロックを含む

SK10

- 1 黒褐色粘性シルト層 粘性なし しまり普 φ1cmの青褐色土を含む
- 2 黒褐色粘性シルト層 粘性なし しまり普 φ1cmの褐色土を含む
- 3 黒褐色粘性シルト層 粘性なし しまり普 φ3cmの灰オリーブ色土を含む
- 4 黒褐色粘性シルト層 粘性なし しまり普 混入物は特になし

SK11

- 1 黒褐色粘土層 粘性中 しまり中 φ3cmの青褐色シルトブロックを含む

SK12

- 1 黒褐色粘性シルト層 粘性中 しまり中 φ1cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 2 黒褐色粘性シルト層 粘性中 しまり中 黄褐色粘性シルトブロック・焼土を含む
- 3 黒褐色粘性シルト層 粘性中 しまり中 φ3cmの黄褐色粘性シルトブロック・焼土を含む
- 4 黒褐色粘性シルト層 粘性中 しまり中 黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 5 黒褐色粘性シルト層 粘性強 しまり弱 茶褐色土・炭を含む
- 6 黒褐色粘性シルト層 粘性中 しまり中 φ5cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 7 黒褐色粘性シルト層 粘性中 しまり中 φ5cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 8 黒褐色粘性シルト層 粘性強 しまり中 混入物は特になし
- 9 黒褐色粘性シルト層 粘性中 しまり弱 混入物は特になし
- 10 黒褐色粘性シルト層 粘性強 しまり中 黄褐色粘性シルトブロックを含む

A

- 1 暗灰褐色粘性シルト層 粘性なし しまり普 φ5cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 2 暗灰褐色粘性シルト層 粘性なし しまり普 φ2cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 3 黄褐色粘土層 粘性なし しまり普 淡黒褐色土を含む
- 4 灰褐色粘性シルト層 粘性有 しまり普 φ2cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む

B

- 1 黒褐色シルト層 粘性なし しまり普 φ10cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 2 黒褐色粘性シルト層 粘性なし しまり普 φ5cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 3 黒褐色粘性シルト層 粘性なし しまり普 混入物は特になし
- 4 黒褐色シルト層 粘性有 しまり普 φ3cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 5 暗灰褐色シルト層 粘性なし しまり普 φ2~5cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 6 暗灰褐色砂質層 粘性有 しまり普 φ3cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 7 暗灰褐色粘性シルト層 粘性有 しまり普 混入物は特になし
- 8 灰褐色粘性シルト層 粘性有 しまり普 φ3cmの黄褐色粘性シルトブロック・炭を含む
- 9 暗灰褐色粘性シルト層 粘性有 しまり普 φ5cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 10 暗灰褐色粘性シルト層 粘性有 しまり普 φ5mmの炭・植物遺体を含む
- 11 淡灰褐色粘性シルト層 粘性有 しまり普 植物遺体を含む
- 12 暗灰褐色シルト層 粘性なし しまり普 φ3~5cmの黄褐色粘性シルトブロックを含む
- 13 黒褐色シルト層 粘性なし しまり普 混入物は特になし
- 14 黒褐色シルト層

図146 土坑 (1)

覆土 黒褐色土を主体とし、褐色土ブロックを含む。**遺物** なし **備考** 深さ1mを超えた付近で遺構壁の崩落が始まったため、調査を中止した。

10号土坑 (SK10) 図146

位置 調査グリッドH13-35に位置する。**重複** 他の遺構との重複関係にはない。**形状** 平面形は円形を呈し、垂直方向から掘り込まれている。**規模** 直径0.98m×深さ0.43mを測る。**覆土** 黒褐色土を主体とし、黄褐色土を含む。**遺物** なし

11号土坑 (SK11) 図146

位置 調査グリッドH13-47に位置する。**重複** 他の遺構との重複関係にはない。**形状** 平面形は不整形円形を呈し、垂直方向から掘り込まれている。**規模** 直径0.90m×深さ0.03mを測る。**覆土** 黒褐色土を主体とする。**遺物** なし

12号土坑 (SK12) 図146

位置 調査グリッドH13-79に位置する。**重複** 他の遺構との重複関係にはない。**形状** 平面形は円形を呈し、垂直方向から掘り込まれている。**規模** 直径0.97m×深さ0.68mを測る。**覆土** 黒褐色土を主体とする土層に黄褐色土を含む。**遺物** なし

13号土坑 (SK13) 図146

位置 調査グリッドI14-10に位置する。**重複** 遺構は2単位の掘り込みが重複しており、それぞれA・Bとする。**形状** Aは円形、B方形を呈し、斜め方向から掘り込まれている。**規模** Aは直径0.41m×深さ0.28mを測り、Bは長軸1.12m×短軸0.70mを測る。**覆土** 黒褐色土を主体とする。**遺物** 有段内黒土師器杯 **備考** 焼土・炭化物を多く含む。

14号土坑 (SK14) 図147

位置 調査グリッドH13-65に位置する。**重複** 他の遺構との重複関係にはない。**形状** 平面形は不整形方形を呈し、遺構断面は皿状である。**規模** 長軸0.50m×深さ0.12mを測る。**覆土** 灰褐色土を主体とし、黄褐色土を含む。**遺物** なし

15号土坑 (SK15) 図147

位置 調査グリッドH13-75に位置する。**重複** 他の遺構との重複関係にはない。**形状** 平面形は正円形を呈し、遺構は斜めから掘り込まれる。**規模** 直径0.59m×深さ0.15mを測る。**覆土** 黒褐色土を主体とする。**遺物** なし

16号土坑 (SK16) 図147

位置 調査グリッドI14-00に位置する。**重複** 他の遺構との重複有り **形状** 平面形は隅

丸方形を呈し、遺構は斜めから掘り込まれている。**規模** 直径 0.42m×深さ 0.03mを測る。**覆土** 黒褐色土を主体とし、黄褐色土を含む。**遺物** なし **備考** ほとんどが削平されており、グライ化範囲と重複している。

17号土坑 (SK17) 図 147

位置 調査グリッド I 13-09 に位置する。**重複** 他の遺構との重複関係にはない。**形状** 方形。斜めから掘り込まれている。**規模** 長辺 0.47m×短辺 0.42m×深さ 0.24mを測る。**覆土** 黒褐色土を主体とする土層に黄褐色土を含む。**遺物** なし

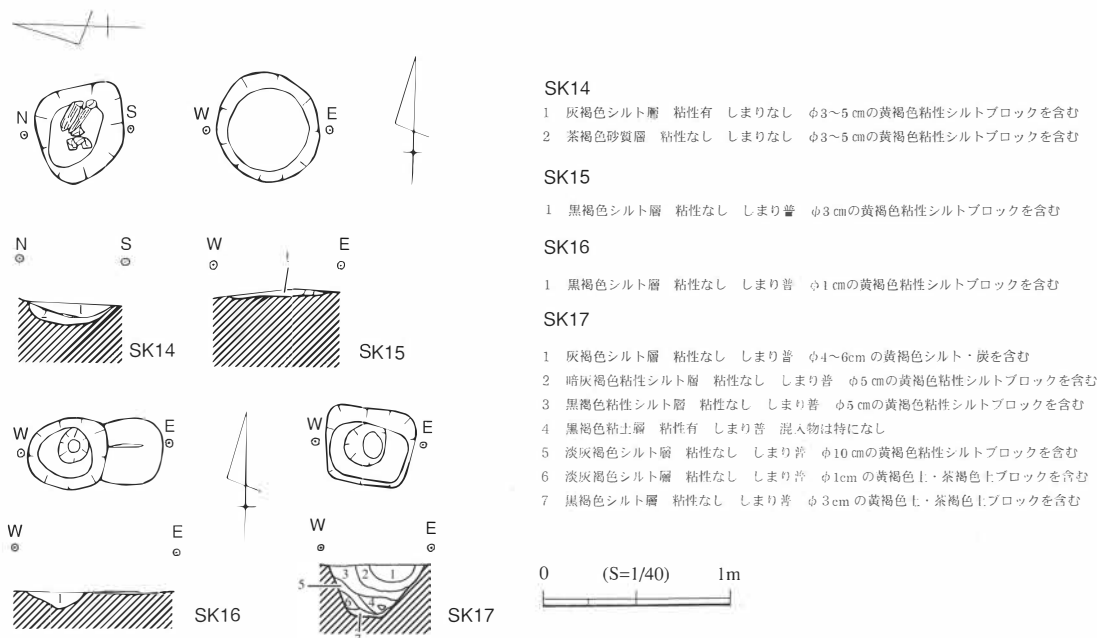


図147 土坑 (3)

第3項 出土遺物

出土した遺物はSD1・SK13・掘削部埋土から出土したが、出土した遺物の大半は1号溝跡からの出土で、土師器・須恵器・瓦や甑・円面硯・瓦が出土している。またSK13からは土師器杯がSK2からは鉄鏝1点が出土している。

(1) 土師器

土師器は杯、甕、高杯、高台付杯、蓋、甑、が出土しており、非ロクロ整形のものを1類、ロクロ整形のものを2類に分類する。

1類 非ロクロ整形のもので甕15点、杯23点、碗2点、甑1点、高杯3点を図示した。

甕 (図 148)

1は口縁部から底部までの全体が残存している資料である。木葉痕を明瞭に残す平底の底部

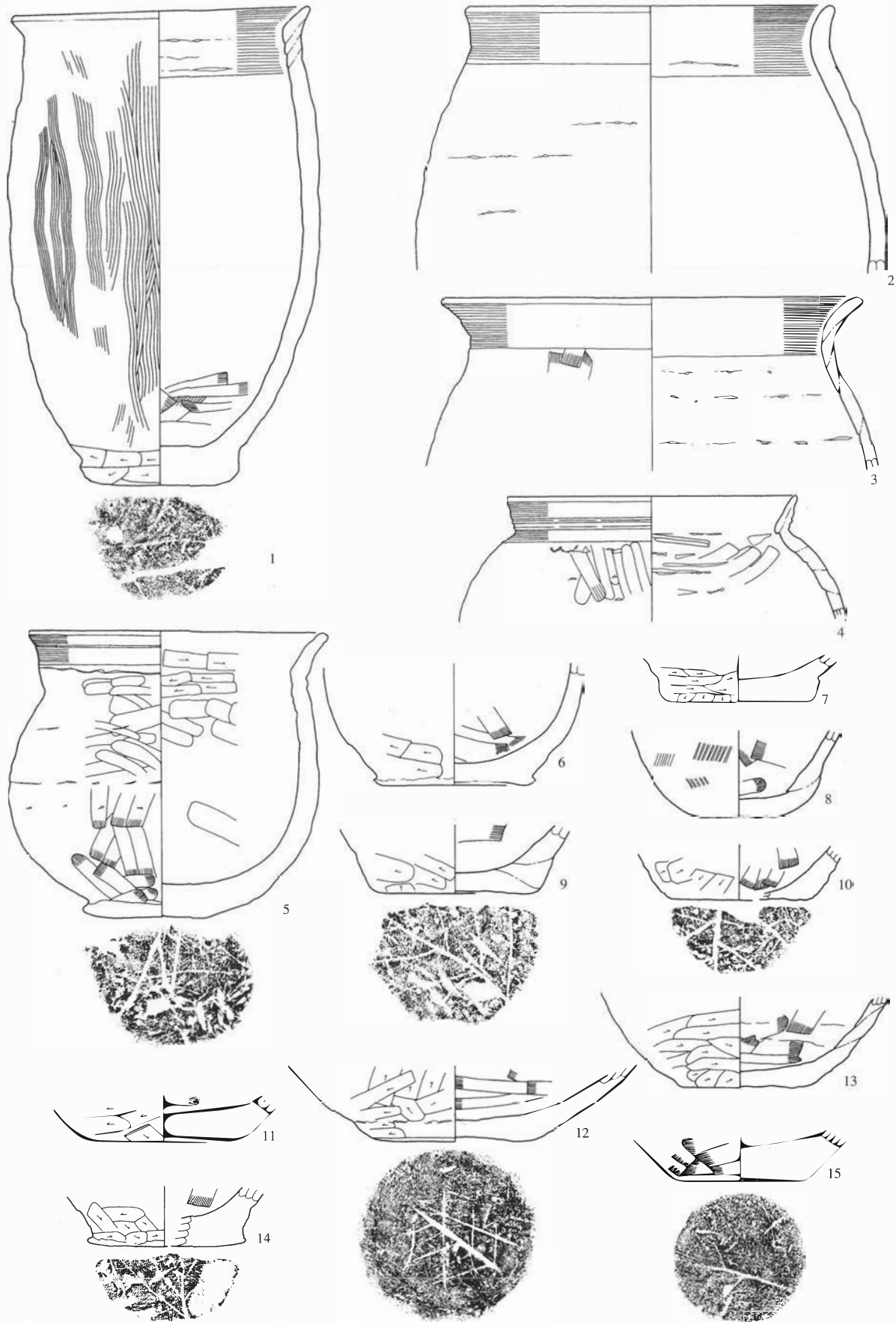


图148 出土遺物 (1) 土師器

0 (S=1/3) 5cm

から長胴化が進んだ体部が見られる。口縁部は短く外反しておさまる。外面には粗いハケ工具による調整が施され、内面下部にはヘラナデが施される。口縁部はヨコナデで整えられる。

2～4は口縁部から体部上半までが残存している資料である。内湾気味の体部に短く外反する口縁部が見られる。体部外面はヘラナデ、内面はナデによって整えられ、口縁部にはヨコナデが施される。

5は小型の甕である。径の小さな平底の底部には明瞭な木葉痕が観察される。球状に近い体部に短く外反する口縁部がつく。外面調整は体部下部にヘラナデが施され、上部にはナデが施される。内面は上部にナデとヘラケズリが施される。

6～15は底部資料である。いずれも平底で外面調整はナナメのヘラケズリを施すものが多いが8はハケメ、15はヘラナデが施されている。内面はヘラナデが施される。

杯A類とB類に細分が可能である。

A類 (図149-1～8) 内面の黒色処理が施されない丸底の杯である。

1～8は非ロクロの杯で内面の黒色処理が施されないものであり、ほとんどの資料が丸底の底部から緩やかに外傾しながら立ち上り口縁部に至る。外面の調整は1から6がヘラケズリ、7・8は杯部下半にヘラケズリ、上半にヘラナデ、9はヘラナデが施される。内面の調整は1がヘラナデ、3・4・5・6はミガキ、2・7は不明である。口縁部の調整は1・2・7・8・9にヨコナデが施され、3はヘラナデ、4は未調整、5・6は不明である。

B類 (図149-9～23) 内面に黒色処理が施される丸底の杯である。

9から23は非ロクロの杯で、内面に黒色処理が施されるものである。ほとんどの資料は丸底の底部であるが、17は平底である。また、杯部が底部から緩やかに外傾しながら立ち上がる9～18と、急に立ち上がる19から23に大別される。外面調整はヘラケズリが施されるものが9～13・19・22・23で、このうち13のヘラケズリは口縁部まで至る。15・18はヘラケズリが施される。17の底部側面には手持ちヘラケズリが観察される。

内面調整は9～20・22・23にミガキが見られる。21は磨滅のため不明であるがミガキが施されるものと思われる。口縁部は9・12・14・15・17・19にヨコナデ、10・16・20・22・23は未調整である。

甑 (図149-24)

24は甑の底部付近の資料である。底部から直線的にやや外傾しながら口縁部へ向かう。外面下部にはヘラケズリ・ナデ・ヘラナデが施され、内面には下部にヘラケズリ・ミガキが施される。

鉢 (図149-25・26)

25・26は鉢として判断した資料である。25は口縁部付近の資料で、直線的に外傾しながら口縁部に至ると口縁端部で強く外湾する。外面には縦方向のケズリが施され口縁部はヨコナデが

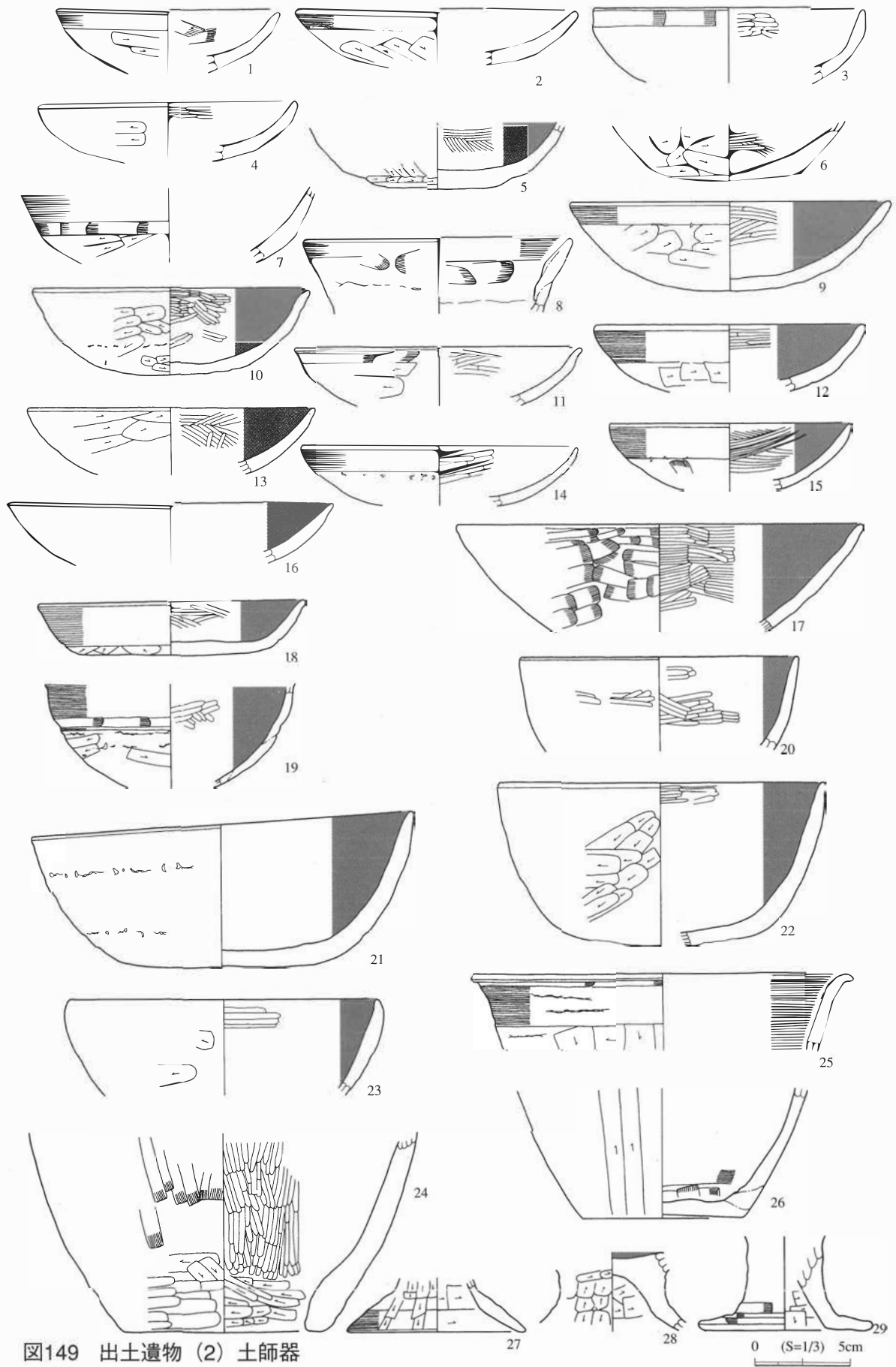


图149 出土遺物 (2) 土師器

施される。26は底部付近の資料である。平底の底部から直線的に外傾しながら口縁部に向かう。外面には縦方向のケズリが施され、内面にはヘラナデが施される。

高杯（図 149-27～29）

27～29はいずれも裾部から脚部にかけての資料である。27は強くハの字に開く裾部で内外面ともにヘラケズリが施される。28は裾端部ならびに杯部は不明である。脚部は太く短い。内外面ともにヘラケズリが施される。29は長い脚部に小さな裾部が見られる。外面にはヘラナデが施され、内面にはヘラケズリが施される。

2類 ロクロ整形によるもので、杯7点・蓋2点・甕1点・高台付杯4点を図示した。

杯（図 150-30～36）

30から36は内面に黒色処理とミガキが施されている。31・33の底部には回転ヘラケズリによる再調整が見られ、32・35・36は底面に回転糸切痕を残す。

蓋（図 150-37）

37は蓋として判断した資料である。つまみは欠損しており不明であるが、口縁部の断面形三角形である。かえりはない。全体的の丸みをおびた器形をしている。

甕（図 150-39）

1点を図示した。資料は体部上半から口縁部下部にかけた資料で器面にはロクロナデを残す。

高台付杯（図 150-40～43）

40はハの字に開く高台が見られる。高台部は高さ2cmを測る。41はハの字に開く短い高台が見られる。高台部の高さは0.5cmである。42はハの字に開く高台部が見られ、高さは1.3cmを測る。43は直立する高台である。高さは1.5cmを測る。いずれの資料も杯部の形状は不明であるが、杯底部は回転糸切りによって切り離されている。

（2） 須恵器 須恵器は甕、長頸瓶、蓋、高台付椀、円面硯、杯が出土している。

甕（図 150-44～46）

口縁部資料の3点を図示した。底部から体部の形状は不明であるが、大形甕であると思われる。口縁部は強く外反しており、口縁端部には断面T字状の口唇部がつく。器面にはロクロの痕跡が明瞭に観察される。

長頸瓶（図 150-47・48）

頸部から口縁部にかけての資料で、2点を図示した。47は頸部より下の形状は不明であるが緩

やかに外反しながら上方に向い、口縁部で更に強く外反し口縁端部を形成する。

48は弱く外反しながら緩やかに立ち上がり、大きく変化することなく口縁部に至る。48の内面には多量の漆が付着しているのが特徴である。

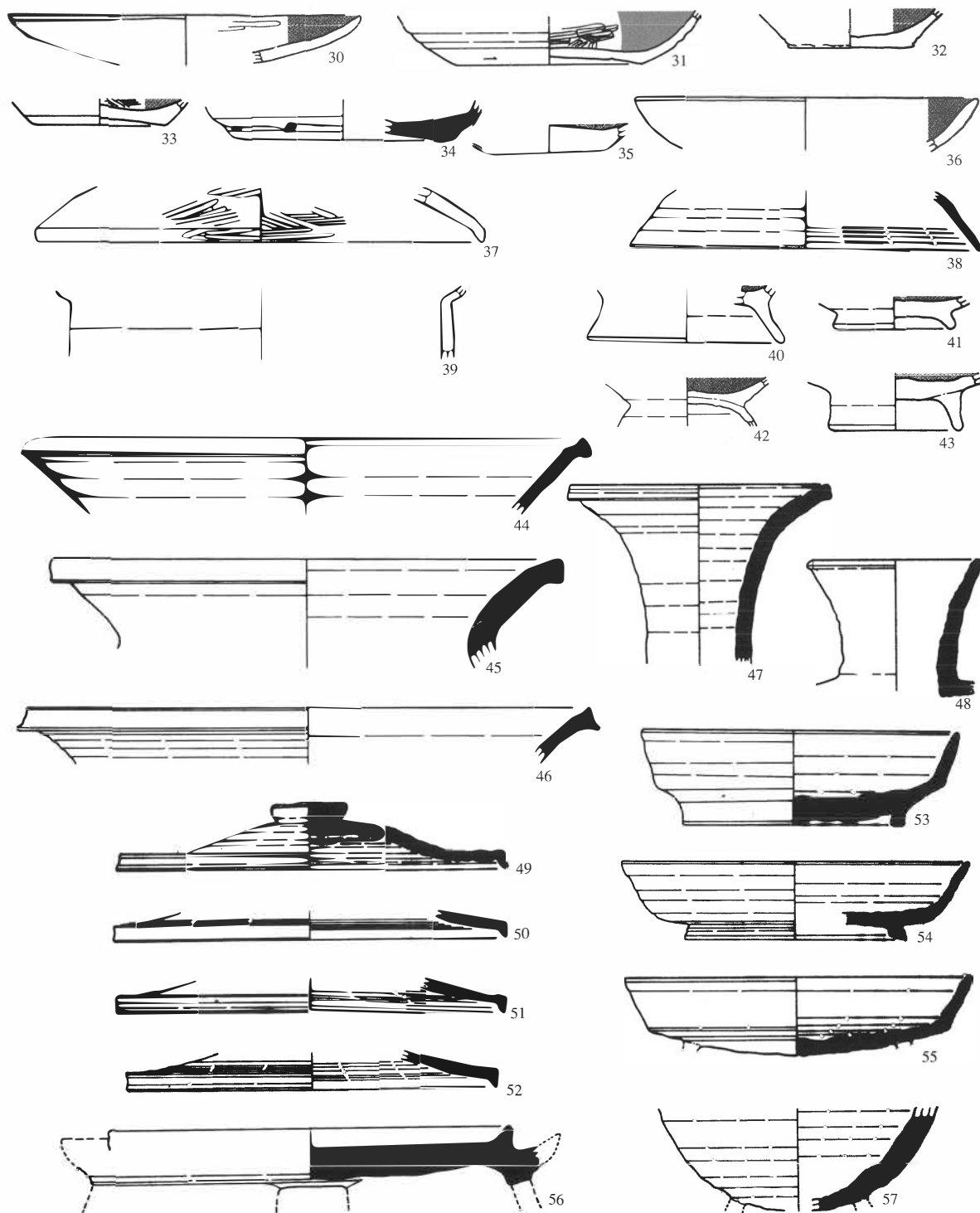


図150 出土遺物 (3) 土師器・須恵器

0 (S=1/3) 5cm

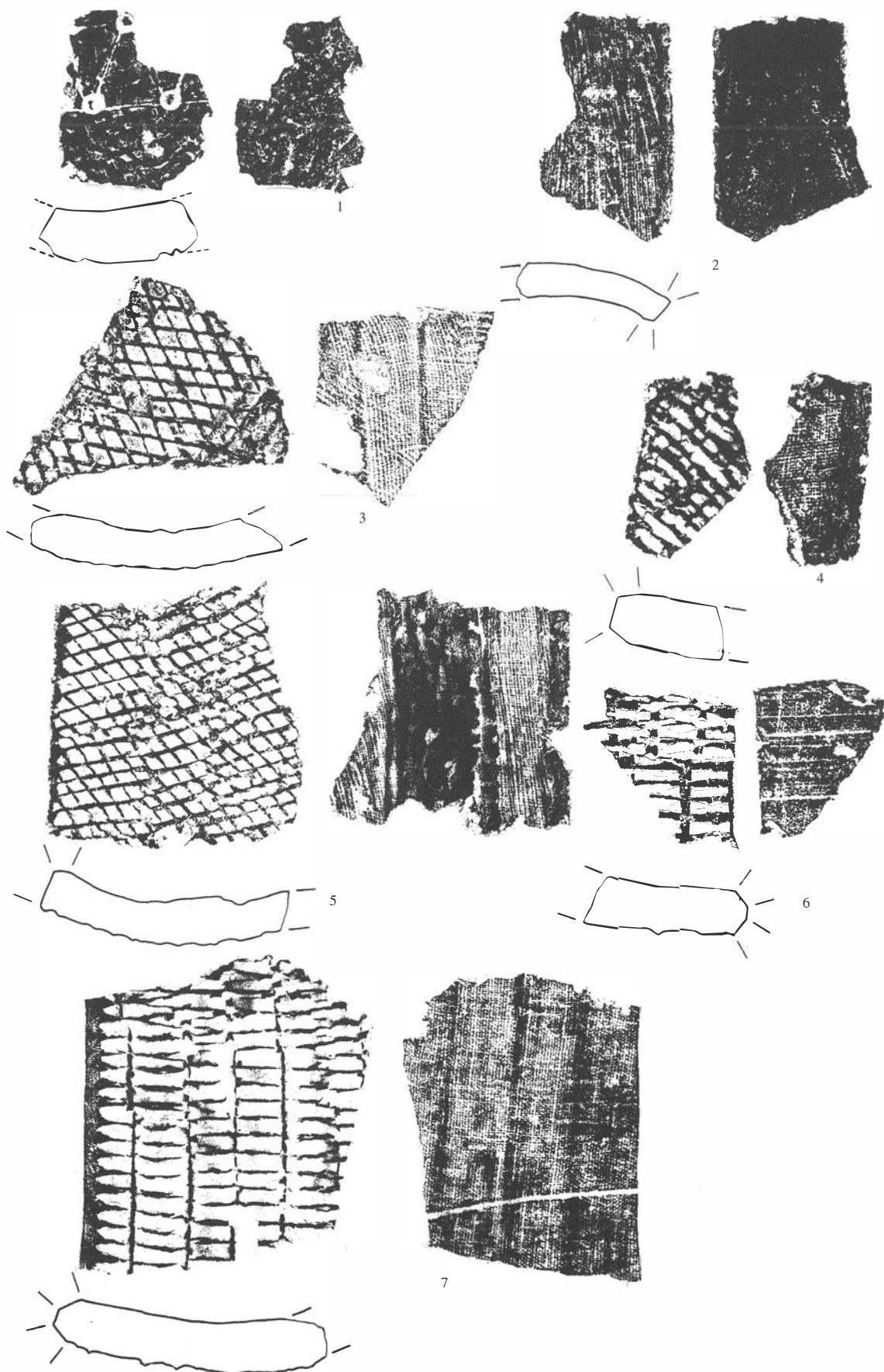


图151 出土遺物 (4) 瓦

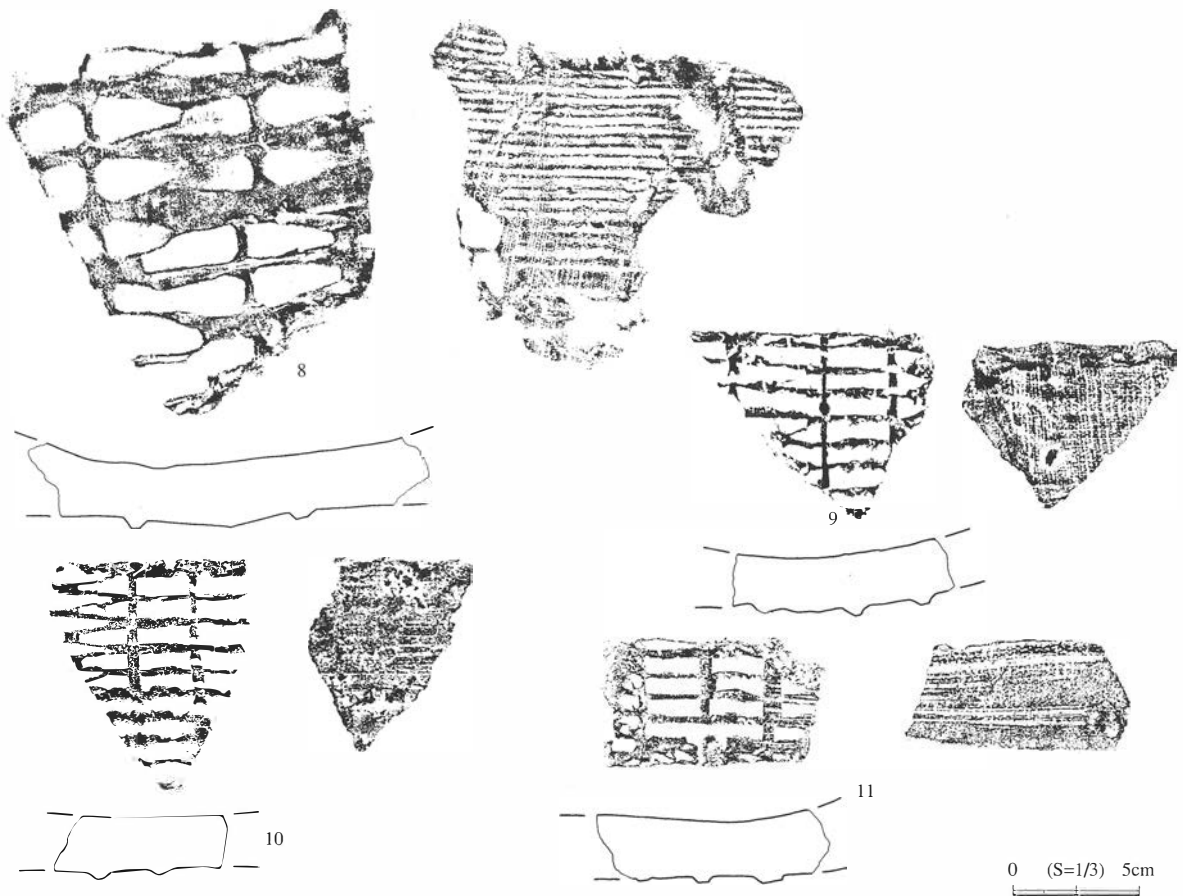


図152 出土遺物 (5) 瓦

蓋 (図 150-49~52)

4点を図示した。49は口径19.0cmを測り、ボタン状のつまみが見られる。かえりはない。天井部はつまみを中心に直径12cmの範囲は若干ふくらみを持っており、口縁部付近では平坦になる。50~52のつまみは欠損しており不明である。かえりはない。50・51・52はそれぞれ口径19.0cm・18.9cm・18.0cmであり、明瞭なロクロ痕を残す。

高台付椀 (図 150-53~55)

3点を図示した。平底の底部に1cm未満の高台がつく。体部は体部中段で屈曲し直立気味に立ち上がる。器面には明瞭なロクロ痕が残り、杯部底面には回転ヘラケズリが見られる。53は器高4.5cm・口径15.2cm、54は器高3.8cm・口径16.8cm、55は残存高3.8cm、口径16.8cmである。

円面硯 (図 150-56)

1点を図示した。円面部は無提式で平坦なものが、脚部上端にのるような形状である。裾部の形状は不明であるが、縦長長方形の透かし窓が確認される。硯部の直径は19.6cmを測り、内縁径は24cmを測る。

その他 (図 150-57)

57 は丸みの強い体部が確認される。口縁部は欠損しており、底部に剥離痕が確認されることから、脚部もしくは高台部がついていた可能性が高く、高杯の可能性を指摘しておきたい。

(3) 瓦 (図 151・152)

瓦は軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土している。

1 は軒平瓦である。瓦当面を含めた瓦の大部分は欠損しており詳細は不明であるが、凸面にはへら状工具による斜線と斜線の交点に施される竹管状工具による円文が見られる。

2 は丸瓦である。大部分は欠損しており詳細は不明であるが、側端部には縦方向のケズリが施される。凸面は縦方向のケズリによって整えられ、凹面には明瞭な布目を残す。

3～11 は平瓦である。3・4 は凹面に斜格子状タタキが施され、凸面には布目と模骨痕を残す。4 の側端部には縦方向のケズリ施される。5～11 は格子状のタタキが施され、凹面には布目と模骨痕が残る。5 は凸面にタタキが斜めに施され、側端部はケズリで施される。6～8 は長方形の格子タタキが見られる。6・7 は側端部にはケズリが施されている。9 は凸面にタタキ、凹面はナナメ方向の櫛もしくはハケ状工具によって調整される。10・11 は長方形の格子タタキが見られる。

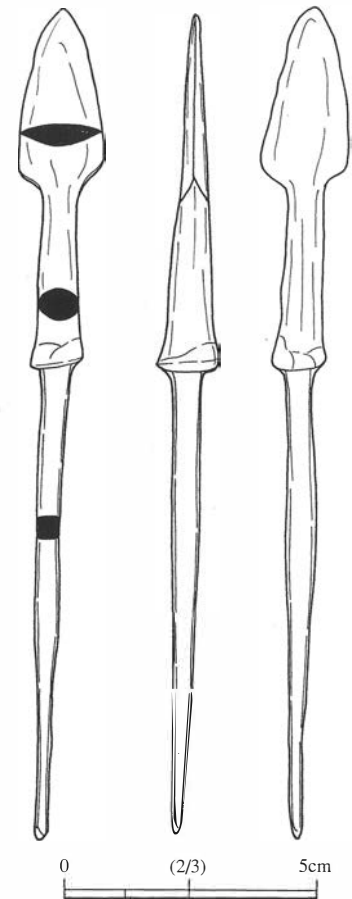


図153 出土遺物 (6) 鉄鏃

(4) 鉄製品 (図 153)

S K 2 から出土した鉄鏃を図示した。鉄鏃は細身式長頸鏃で、縦に長い三角形の刃部と断面が丸い頸部、断面が四角形の茎が見られる。長さは 16.2 cm、刃部は 3.5 cm、頸部 3.5 cm・茎 9.2 cm である。

第4節 まとめ

第9次調査区域は泉廃寺跡全体の東部に設けられた調査区である。調査区域の東側で行われた第10次調査区域は掘立柱建物跡と多量の瓦が出土し、行方郡家に附属する寺院跡が存在していると推測されている地区である (荒 1999)。

しかし、第9次調査区域は調査以前に大規模な掘削が行われてしまい、急遽発掘調査をおこなった区域である。よって現代まで遺存していたと思われる泉廃寺跡に関連する遺構のほとんどはこの時に削平されてしまっていた。検出された遺構は掘削を免れた深い井戸跡や土坑、溝跡であり、本来この地区に存在していたはずの遺構の内容や性格などは知ることができなかった。

かろうじて検出された1号溝跡は、この区域に大規模な溝が存在していたと示している。1

号溝跡は調査区中央で検出された南北方向の溝跡である。確認された溝跡の残存幅は 3.5m を計測しており、この地区が大規模な掘削により遺構の上面が削平されたことを考慮すると、非常に大規模な溝跡であったと推測される。検出された溝跡の底面の標高は北側が高く、南側が低い。したがって溝跡は南にむかって傾斜していることは確実であり、排水としての機能を有する溝跡であったと想定される。

この溝跡の底面からは比較的まとまった遺物が出土している。出土した遺物でもっとも数が多いのが非ロクロ整形の土師器である。杯には内面黒色処理とミガキが施され、外面には明瞭な段は見られない。また底部は丸底でケズリによる調整が行われる。甕は長胴化が進んだもので、外面には粗いハケメが残るものがある。東北地方において、杯内面の黒色処理は栗圀式から一般化する。1号溝跡から出土した杯類は口縁部と体部の境には栗圀式特有の有段は認められず、有段が消失した国分寺下層式の特徴をもっていることから「国分寺下層式」であると考えられる(戸田・柳沼 1996)。また、1号溝跡からは須恵器が出土しており、高台付杯と蓋の存在が目立つ。特に蓋は口縁部内面のかえりは消失し、つまみはボタン状であるのが特徴である。このような須恵器は8世紀後半段階に見られるもので、土師器の国分寺下層式と大きく矛盾するものではないと考えている。

国分寺下層式は年代の上限を国分寺建立の天平13年(741)から天平神護2年(766)頃、下限を延暦2年(783)頃までとされていることから(戸田・柳沼 1996)、国分寺下層式土器を出土する1号溝跡の年代は下限を国分寺下層式の8世紀後半とすることができる。

また泉廃寺跡全体の遺構の変遷では、8世紀以前の年代が想定されているI期官衙の建物は建物の主軸を真北方位から東に約16°偏していることが確認されており、8世紀代になると建物の主軸を真北方向に揃えるII期官衙に整備される(藤木 2001)。1号溝跡は溝の方位が真北方向を指していることから、I期官衙にともなう可能性は低く、8世紀段階のII期官衙にともなうものと考えておきたい。

また調査区の全域には円形の土坑が17基確認されている。その多くは井戸跡の可能性が高いもので、この地区に井戸を有する建物群が存在していた可能性が考えられる。その建物の存在は削平により不明であるが、井戸を有することと1号溝跡から食膳具を中心とした土器が出土していることから、厨家に代表されるような施設が存在していた可能性が考えられる。

これら以外の遺構として特徴的なのは13号土坑とした焼成遺構と2号土坑とした土坑がある。前者の13号土坑からは、内面に黒色処理を施さない非ロクロ丸底杯と黒色処理を施す有段杯が出土している。前者は古墳時代後期住社式に見られる杯の特徴を有しており、後者は古墳時代後期から奈良時代にかけての栗圀式の特徴である(戸田・柳沼 1996)。したがって13号土坑は古墳時代後期の年代が想定される遺構である。この地区では13号土坑以外の遺構で古墳時代ものは発見されていないが、この地区には13号土坑以外に古墳時代後期の遺構が存在していた可能性は高い。後者の2号土坑からは鉄鏝が出土している。遺構は深さが10cm程度しか残存していなかったことから、遺構の性格や年代については不明であるが、今後の周辺地域で2号土坑に類似する遺構が発見されることを期待したい。

このように第9次調査区域には古墳時代後期の遺構と8世紀後半の溝跡が確認されたことになる。これらの遺構は、この地域に古墳時代から奈良・平安時代に人々が生活していたことを示している。特に1号溝跡は泉廃寺跡に関連する溝である可能性が高く、発掘調査以前に遺構の大部分が削平されてしまったことは非常に残念である。(荒)

《参考文献》

- 荒 淑人 1999 「泉廃寺跡(第10次調査)」『原町市内遺跡発掘調査報告書』4 原町市教育委員会
 戸田有二・柳沼賢治 1996 「福島県の8世紀の土器」「福島県の9世紀の土器」『日本土器辞典』雄山閣
 藤木 海 2001 「泉廃寺跡(第14次調査)」『原町市内遺跡発掘調査報告書』6 原町市教育委員会
 伊東信雄ほか 1985 『多賀城跡 政庁跡 本文編』 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所
 伊東信雄ほか 1980 『多賀城跡 政庁跡 図録編』 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所
 木本元治ほか 1985 『関和久遺跡』 福島県教育委員会

表 68 第9次調査区出土土器観察表

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
148-1	SD-1 14	土師器	甕	15.4/25.5/7.5	内面:ロナデ体底部ヘラナデ 外面:体部ハケズリ
148-2	SD-1 14	土師器	壺	19.0/14.1/-	内面:ロナデ 外面:口縁部ナデ 体部不明
148-3	SD-1 11	土師器	壺	21.7/(9.1)/-	内面:ロナデ体ユビナデ 外面:ロナデ体部ヘラナデ
148-4	SD-1 14	土師器	甕	15.2/(6.6)/-	内面:口体部ヘラナデ 外面:ロナデ 体部ヘラナデ
148-5	SD-1 14	土師器	甕	15.4/15.3/8.4	内面:ロナデケズリ体底部ナデ 外面:ロナデ体ケズリ
148-6	SD-1 L2	土師器	甕	-(6.4)/8.6	内面:体~底部ヘラナデ 外面:体~底部ヘラケズリ
148-7	SD-1 14	土師器	甕	-/2.5/7.4	内面:体~底部ヘラナデ 外面:体~底部ヘラケズリ
148-8	SK-13	土師器	甕	-(4.5)/4.2	内面:体底ヘラナデ 外面:体部ハケメ 底部不明
148-9	SD-1 11	土師器	甕	-(3.6)/8.0	内面:体部ヘラナデ 外面:体部ケズリ 底部木葉痕
148-10	SD-1 16	土師器	甕	-(2.9)/7.1	内面:体底部ヘラナデ 外面:体部ケズリ底部木葉痕
148-11	SD-1 16	土師器	甕	-(4.0)/8.0	内面:体底ヘラナデ 外面:体ケズリ 底部木葉痕
148-12	下段水田	土師器	甕	-(4.9)/6.0	内面:体~底部ヘラナデ 外面:体~底部ヘラケズリ
148-13	SD-1 14	土師器	甕	-(3.2)/8.2	内面:体底部ヘラナデ 外面:体部ケズリ 底部木葉痕
148-14	SD-1 14	土師器	甕	-(2.6)/6.7	内面:体部ヘラナデ 外面:体底部ヘラナデ底部木葉痕
149-1	SK-13 19	土師器	杯	11.7/(3.3)/-	内面:口底ヘラナデ 外面:ロナデ 体底ケズリ
149-2	SD-1	土師器	杯	14.7/(3.0)/5.5	内面:口縁部ミガキ 外面:口縁部ナデ 体部ケズリ
149-3	SK-13 19	土師器	杯	14.1/(4.0)/-	内面:口体ミガキ 外面:ロナデ 体ヘラケズリ
149-4	SK-13 19	土師器	杯	13.6/(3.2)/5.5	内面:口底ミガキ 外面:口底部ヘラケズリ
149-5	SK-13 19	土師器	杯	-(3.4)/6.5	内面:体底ミガキ黒色処理 外面:体底ケズリ
149-6	下段水田	土師器	鉢	-(3.0)/7.8	内面:体~底部ヘラミガキ 外面:体~底部ヘラケズリ
149-7	下段水田	土師器	杯	-(4.0)/-	内面:不明 外面:ロヨコナデ体ヘラナデ底ヘラケズリ
149-8	下段水田	土師器	鉢	14.2/(4.1)/-	内面:口縁部ヨコナデ指ナデ 外面:ヨコナデ、指ナデ
149-9	SK-13 19	土師器	杯	16.7/4.7/7.5	内面:ロミガキ黒色 外面:ロナデ 体底ケズリ
149-10	SD-1 14	土師器	杯	14.6/(4.5)/-	内面:口底部ミガキ黒色 外面:口~底部ヘラケズリ
149-11	SD-1 12	土師器	杯	15.0/(3.1)/-	内面:口体部ミガキ黒色処理 外面:ロナデ体部ケズリ
149-12	SK-13 19	土師器	杯	14.1/(3.5)/6.5	内面:口底ミガキ、黒色 外面:ロナデ 体底ケズリ
149-13	SD-1 11	土師器	杯	15.1/(3.5)/-	内面:ロミガキ、黒色処理 外面:口体部ケズリ
149-14	SD-1 11	土師器	杯	14.6/(3.2)/-	内面:ロミガキ黒色 外面:ロナデ 体部ケズリ
149-15	SD-1 11	土師器	杯	12.8/(3.4)/-	内面:口体部ミガキ黒色 外面:ロナデ 体部ケズリ
149-16	SD-1 11	土師器	杯	17.1/(3.2)/-	内面:口体部ミガキ黒色 外面:口体部ケズリ 漆
149-17	SD-1	土師器	杯	21.4/(5.7)/-	内面:口体部ミガキ、黒色処理 外面:口体部ナデ
149-18	SK-13 19	土師器	杯	14.5/2.8/9.0	内面:口底ミガキ黒色 外面:口体ナデ 体底ケズリ
149-19	SK-13 19	土師器	杯	-(5.4)/-	内面:体ミガキ黒色 外面:体部ヘラナデケズリ
149-20	SK-01	土師器	杯	14.6/(5.0)/-	内面:口体ミガキ黒色 外面:ロミガキ、黒色処理
149-21	SK-01	土師器	椀	20.2/(8.2)/10.0	内面:ミガキ黒色 外面:口縁部摩滅のため不明
149-22	SD-1 14	土師器	椀	17.0/8.7/-	内面:口底部ミガキ黒色 外面:ロナデ体底部ケズリ
149-23	SD-1	土師器	椀	16.3/(5.1)/-	内面:口体部ミガキ、黒色処理 外面:口体部ケズリ
149-24	下段水田	土師器	甕	-(10.5)/10.6	内面:体部ミガキケズリ 外面:体ヘラケズリ 指ナデ
149-25	SK-13 18	土師器	杯	19.1/(4.0)/-	内面:口体ヨコナデ 外面:ロヨコナデ 体部ケズリ
149-26	SK-14	土師器	杯	-(6.8)/8.5	内面:体底ヘラナデ 外面:体底ケズリ
149-27	SD-1	土師器	高杯	-(2.8)/9.2	内面:脚部ケズリ 外面:脚部ヘラケズリ ヨコナデ
149-28	SK-6	土師器	台杯	-(4.1)/-	杯内面:ミガキ黒色 脚部内外面:ヘラケズリ
149-29	SD-1	土師器	高杯	-(5.0)/8.4	内面:脚部ケズリ 外面:脚部指ナデ ケズリ
150-30	下段水田	土師器	杯	16.8/(2.3)/-	内面:口縁部ミガキ、黒色処理 外面:摩滅のため不明
150-31	SD-1 11	土師器	杯	-(2.5)/9.0	内面:体底部ミガキ黒色 外面:体部ナデ 底部回転ケズリ
150-32	SD-1 11	土師器	杯	-(1.85)/6.0	内面:体部ナデ 外面:体部ナデ 底部系切り
150-33	SK-8	土師器	杯	-(1.2)/6.8	内面:体底ミガキ、黒色処理 外面:体底回転ケズリ
150-34	下段水田	須恵器	瓶	-(1.95)/10.6	内面:体底ロクロナデ 外面:体部ケズリ底部ヘラナデ
150-35	SK-1	須恵器	杯	-(1.3)/5.9	内面:体底ナデ 外面:体ナデ 底部系切り
150-36	SK-13 19	土師器	杯	16.3/(2.55)/-	内面:口~体部ロクロナデ 外面:口~体部ロクロナデ
150-37	SD-1 11	土師器	蓋	21.4/(2.6)/-	内面:口体部ミガキ黒色 外面:口体部ミガキ、黒色
150-38	SD-1 11	須恵器	蓋	16.8/(2.8)/-	内面:体部ロクロナデ 外面:体部ロクロナデ

150-39	下段水田	土師器	鉢	—/(3.55)/—	内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ
150-40	SD-1 I1	須恵器	台杯	—/(2.7)/9.3	内面：体～底部ロクロナデ 外面：高台部ロクロナデ
150-41	下段水田	土師器	台杯	—/(1.55)/5.3	内面：ミガキ黒色 外面：高台部ロクロナデ 底部系切
150-42	SD-1 I1	土師器	台杯	—/(2.4)/—	内面：体部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ
150-43	SK-8	土師器	台杯	—/(2.2)/6.0	内面：底ナデ 外面：高台部ナデ 底部系切り
150-44	SX-01 I1	土師器	甕	26.8/(3.7)/—	内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ
150-45	下段水田	須恵器	壺	24.4/(5.2)/—	内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ
150-46	SX-01 I1	須恵器	甕	27.0/(2.6)/—	内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ
150-47	SD-1 I4	須恵器	長頸瓶	12.4/(8.7)/—	内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ
150-48	SD-1 I4	須恵器	瓶	—/(0.9)/—	内面：口縁部ロクロナデ 外面：口縁部ロクロナデ
150-49	SD-1 I4	須恵器	蓋	3.4/(3.2)/19.0	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ 頂部回転削り
150-50	SD-1 I4	須恵器	蓋	18.9/(1.3)/—	内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ
150-51	SD-1 I4	須恵器	蓋	18.7/(1.5)/—	内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ
150-52	SD-1 I6	須恵器	蓋	17.8/(1.8)/—	内面：口体部ナデ 外面：口体部ナデ
150-53	SD-1 I1	須恵器	台杯	15.2/4.5/10.6	内面：口底部ナデ 外面：口ナデ 体～底部回転削り
150-54	SD-1 I4	須恵器	台杯	16.8/3.8/10.6	内面：口底部ナデ 外面：口体部ナデ 底部回転削り
150-55	SD-1	須恵器	台杯	16.8/(3.8)/—	内面：口体部ナデ 外面：口体部ナデ 底部回転削り
150-56	下段水田	須恵器	円面碗	19.3/2.45/—	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ
150-57	SD-1 I1	須恵器	台碗	—/(4.9)/—	内面：体底部ロクロナデ 外面：体～底部ロクロナデ

表 69 第 9 次調査区出土瓦観察表

挿図番号	出土遺構	種別	調 整		重 量 (g)	厚 さ (cm)	備 考
			凸 面	凹 面			
151-1	表 採	軒平瓦	へら書き三角文・竹椀状円文・ナデ		290	2.6	
151-2	表 採	丸瓦	縦位ケズリ	布目・模骨痕・糸切痕	20	1.7	
151-3	表 採	平瓦	斜格子タタキ	布目・模骨痕	260	2.0	
151-4	表 採	平瓦	簾状タタキ	布目	190	2.6	側辺部ケズリ
151-5	SK-13 I1	平瓦	簾状タタキ	布目・糸切り痕	580	2.2	側辺部ケズリ
151-6	下段水田	平瓦	簾状タタキ	布目・模骨痕	180	2.4	側辺部ケズリ
151-7	SD-1 I1	平瓦	簾状タタキ	布目・模骨痕	840	2.5	側辺部ケズリ
152-8	SD-1 I1	平瓦	雨垂れ状タタキ	布目・糸切り痕	630	2.5	
152-9	SD-1 I1	平瓦	簾状タタキ	ナデ・糸切り痕	170	2.0	
152-10	SD-1 I1	平瓦	簾状タタキ	ナデ・布目・糸切り痕	140	2.1	
152-11	表 採	平瓦	簾状タタキ	布目・糸切り痕	160	2.1	



1 第9次調査区近景 (北西から)



2 第9次調査区近景 (北から)



3 第9次調査区近景 (東から)



4 作業風景



5 1号溝跡遺物出土状況



6 1号溝跡完掘状況



7 遺物出土状況



8 1号溝跡調査風景



9 1号溝跡土器出土状況(1)



10 1号溝跡土器出土状況(2)



11 1号溝跡土器出土状況(3)



12 2号土坑完掘状況



13 13号土坑土層断面



14 2号土坑鉄鍬出土状況



15 5号土坑出土編物状製品



16 4号土坑木製品出土状況



17 9号土坑土層断面



18 12号土坑完掘状況



19 9号土坑調査状況



20 1号土坑完掘状況



21 7号土坑完掘状況



22 1号土坑完掘状況



23 7号土坑土層断面



24 4号土坑調査状況



1 甕 (図148-1)



2 甕 (図148-5)



3 甕 (図148-3)



4 甕・鉢類 (表)



5 甕・鉢類 (裏)



6 甕 (図148-2)



7 甕 (図148-4)



8 甕 (図148-12)



9 甕 (図148-10)



10 甕 (図148-9)



11 甕 (図148-11)



12 甕 (図148-13)



13 高台付杯 (図150-40)



14 高台付杯 (図149-28)



15 高台付杯 (図150-41)



16 高杯 (図149-28)



17 鉢 (図149-22)



18 杯 (図150-31)



19 杯 (図150-31)



20 鉢 (図149-21)



21 杯 (図149-17)



22 杯 (図149-18)



23 杯 (図149-14)



24 甌 (図149-24)



25 甕 (図148-11)



26 甕 (図148-14)



27 甌 (図149-24)



28 長頸瓶 (図150-47)



29 高台付椀 (図150-53)



30 高台付椀 (図150-54)



31 長頸瓶 (図150-48)



31 長頸瓶内面 (図150-48)



32 蓋 (図150-49)



33 蓋 (表) (図150-55)



33 蓋 (裏) (図150-55)



34 蓋 (表) (図150-50)



34 蓋 (内) (図150-52)



35 蓋 (表) (図150-51)



35 蓋 (裏) (図150-51)



36 蓋 (表) (図150-52)



36 蓋 (裏) (図150-52)



37 瓦 (図151-1)



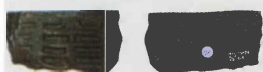
38 瓦 (図152-10)



39 瓦 (図151-6)



40 瓦 (図152-9)



41 瓦 (図152-11)



42 瓦 (図151-4)



43 瓦 (図151-7)



44 瓦 (図151-5)



45 瓦 (図151-3)



47 瓦 (図152-8)



46 瓦 (図151-2)



48 鉄鏟 (図153)

第9章 第15次調査

第1節 調査に至る経過

第15次調査区は東西に長い遺跡範囲の何辺中央、F8・9グリッド付近に位置する。第2章第2節で述べたように、平成7年の第2次調査において確認された行方郡家の郡庁院にあたる遺構の保存が決定されたことから、農業用河川武須川の計画路線が一部変更されることとなった。武須川は当初遺跡範囲内を通過する市道の南側に沿う形で路線が計画されていたため、武須川の計画路線変更に伴って市道を付け替えることとなり、これに先だってこの部分の本調査を実施することとなった(図154)。当調査区に隣接する第5・7次調査区では、既に行方郡家に関連する掘立柱建物跡や溝跡が確認されており、これらの遺構群が市道付け替え部分まで広がることが予想された。また、北側には正倉院に比定される県指定地が位置している。

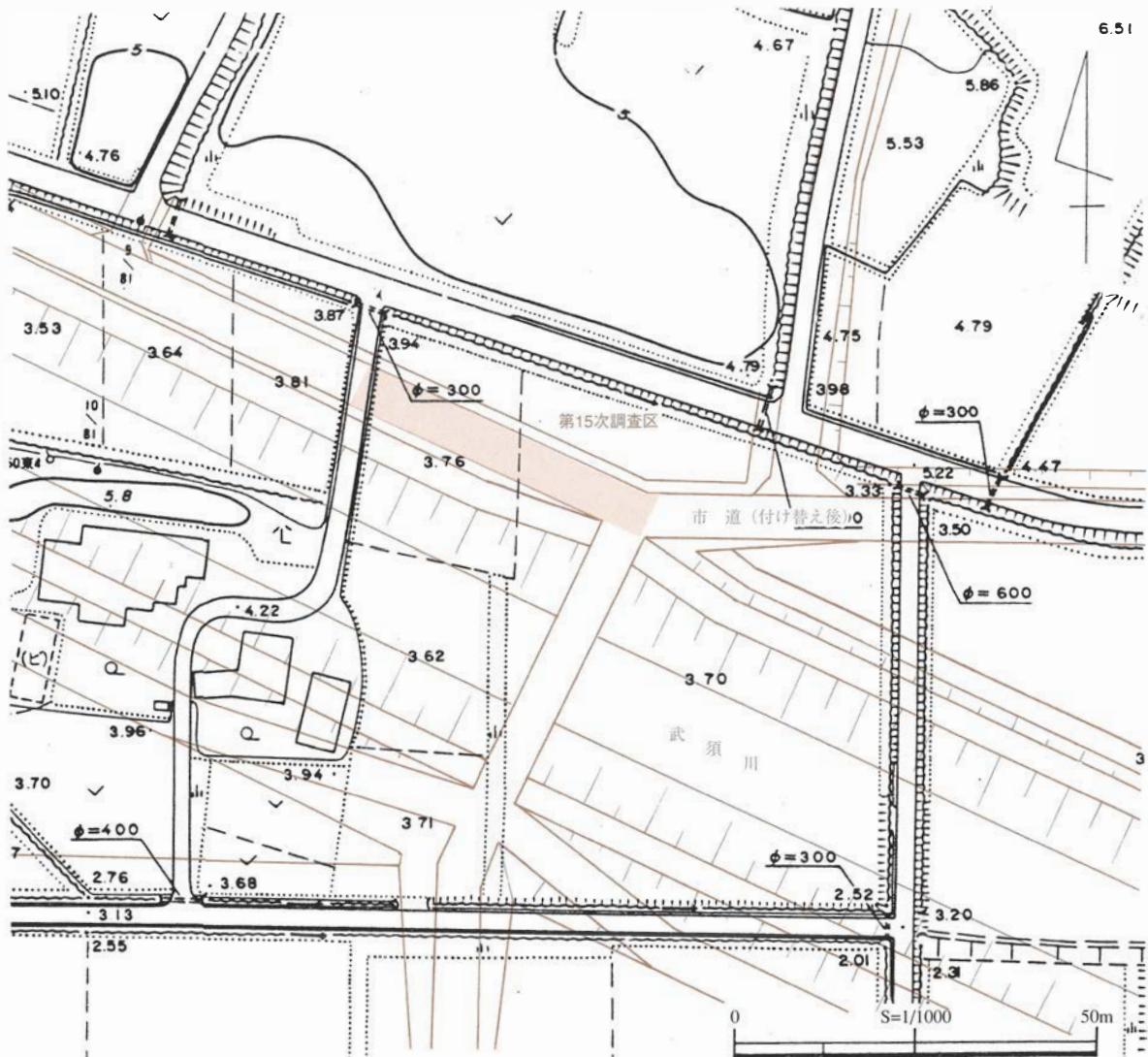


図154 第15次調査区位置図

調査に至る経過は以下の通りである。

- ・平成12年5月25日、福島県相双農林事務所長より高平地区ほ場整備事業に伴う市道付け替えに係る泉廃寺跡の取扱いについて照会、福島県相双農林事務所長と原町市教育委員会生涯学習部文化課との間で打合わせ
- ・同9月29日、相双農林事務所長から原町市教育委員会あてに、開発予定地内の発掘調査の依頼の提出
- ・同10月19日、工事主体者である福島県農林事務所長より原町市教育委員会を經由して福島県教育委員会に文化財保護法第57条の3第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知の提出
- ・同10月24日、原町市教育委員会より福島県教育委員会へ法第58条の2第1項に基づく発掘調査の実施についての通知の提出

なお、発掘調査は、道路付け替え工事が行われる約250㎡の面積を対象に、10月5日から11月16日まで行われた。

第2節 調査の方法

調査区は市道付け替え部分に合わせて東西約50m×南北約5mの範囲に設定した。グリッドは遺跡全体に設定された大・小グリッドに従った(図155)。調査は、まず重機による表土除去作業を行い、その後人力による遺構検出作業・遺構掘り下げを行った。

調査区南半部は地表下1mほどの深さまで攪乱を受けており、遺構を確認できたのは攪乱が比較的少ない北半分のみである。この部分では、地表下0.70mほどで遺構確認面に到達した。

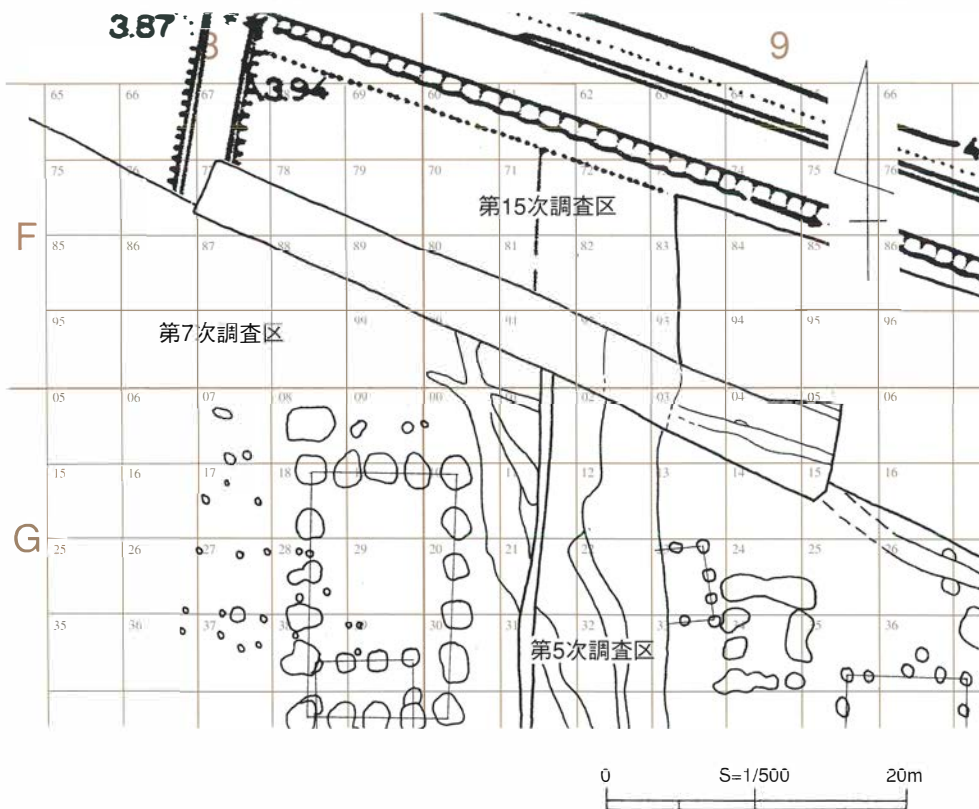


図155 第15次調査区グリッド配置図

第3節 調査成果

本調査で確認された遺構は、溝跡3条、土坑1基である（図156）。遺物は、表土より土師器18点、須恵器4点、瓦1点、陶器1点、鉄滓1点が出土した。

1号溝跡（図157）

F9-92・93 グリッドに位置する幅約5.2m×深さ約1mの南北溝である。主軸方位はほぼ真南北を示す。当溝跡は、既調査の第5次調査区で確認されている1号溝跡の北側延長部分にあたり、本調査区で約2.5m分を確認している。断面形は、底面幅が狭く壁の傾斜の緩やかな逆台形である。覆土は自然堆積による。最下層には自然木や木の種実などの植物遺体を多量に含む黒褐色粘質土が約50cmの厚さで堆積していた。自然木はこの層の上面から上部に集中する。覆土の中層から上層にかけては、黒灰色粘質土が堆積していた。植物遺体を含む層は溝跡が機能していた段階に堆積したものである。なお、本溝跡の時期を示す遺物は出土しなかったが、

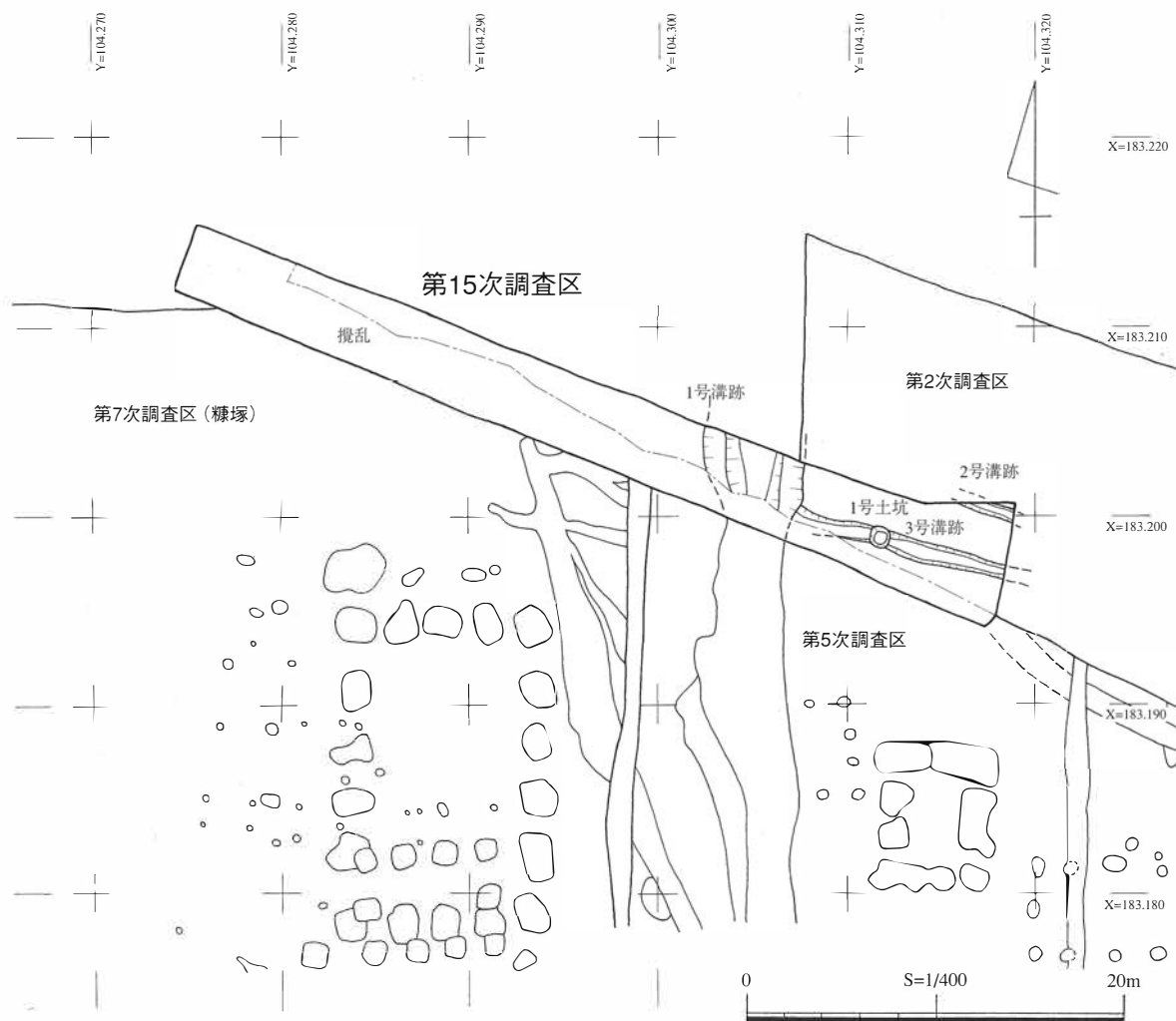
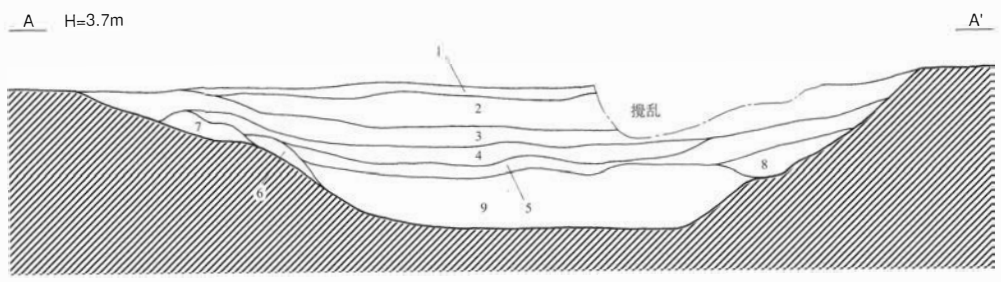
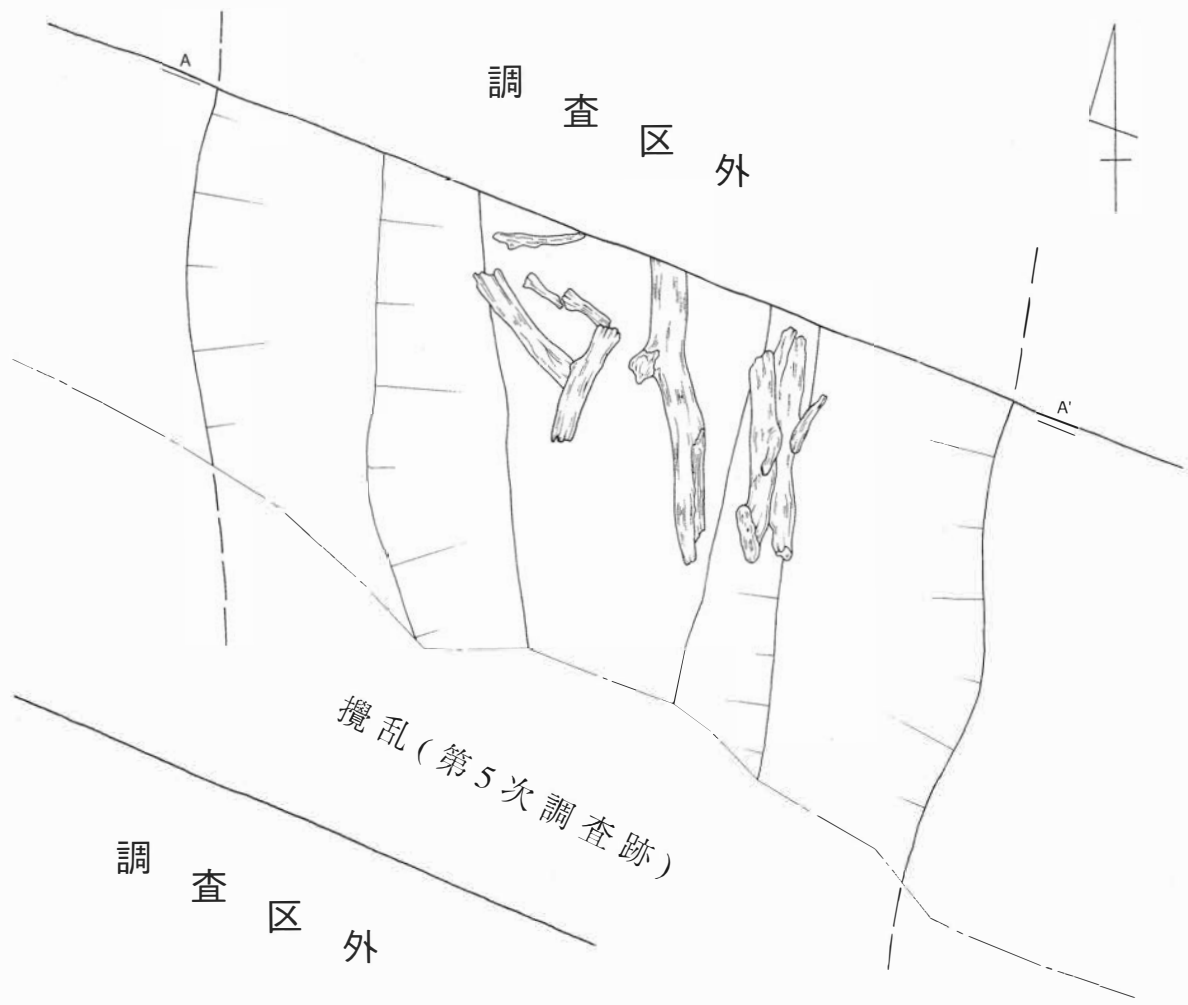


図156 第15次調査区遺構配置図



- A-A'
1. 灰色粘質土
 2. 暗灰色粘質土
 3. 黒灰色粘質土
 4. 黒灰色粘質土
 5. 黒灰色粘質土
 6. 暗灰色粘質土：灰白色粘質土粒・ブロック多量。
 7. 灰色粘質土
 8. 暗灰色粘質土
 9. 黒褐色粘質土：植物遺体を多量に含む。

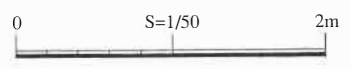


図157 1号溝跡

第5・7次調査の成果から、行方郡家に関連する溝跡である可能性が非常に高く、官衙存続期間内に掘削され機能したものと考えられる。

2号溝跡（図158）

G9-05グリッドに位置する。幅0.6m×深さ0.25mの東西溝である。主軸方位はN-68°-Wを示す。当調査区で約3.2m分を確認した。断面形は底面の平坦な逆台形を呈する。覆土は暗灰色粘質土で自然堆積による。本溝跡の時期を示す遺物は出土しなかった。

3号溝跡（図158）

G9-03~05グリッドに位置する幅約1m×深さ0.2mの東西溝である。1号土坑と重複し、これより新しい。主軸方位はN-72°-Wを示す。当調査区で約11m分を確認した。断面形は底面の平坦な逆台形を呈する。覆土は暗灰色粘質土で自然堆積による。遺物は出土しなかった。

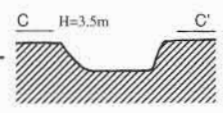
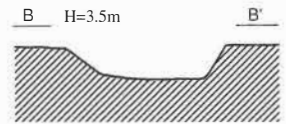
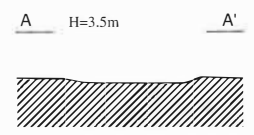
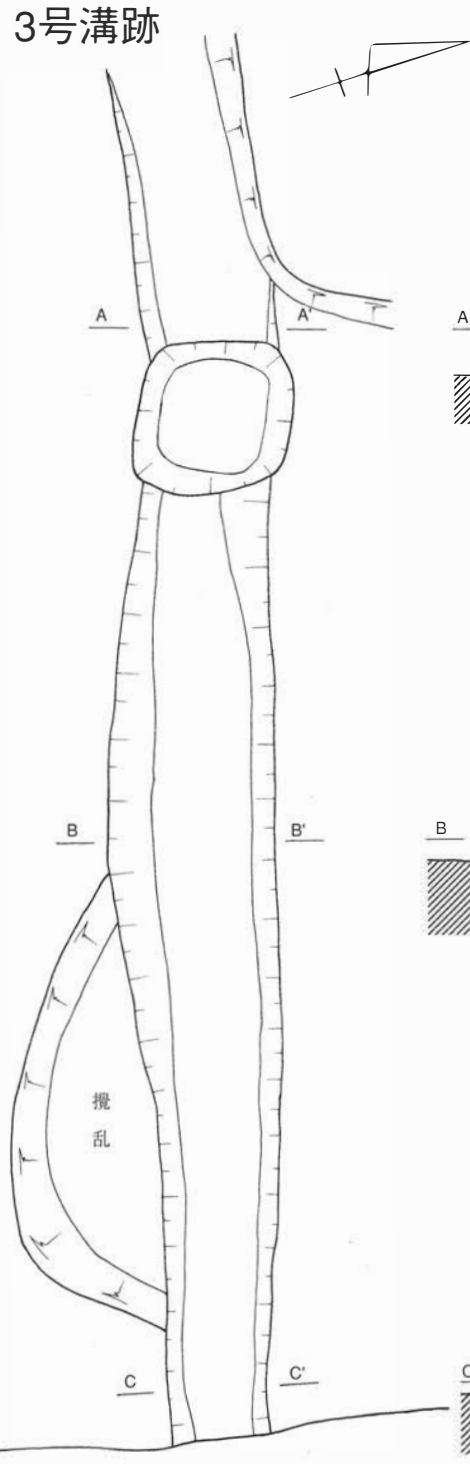
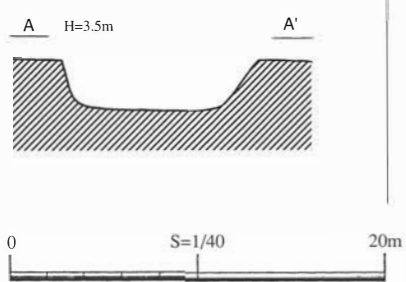
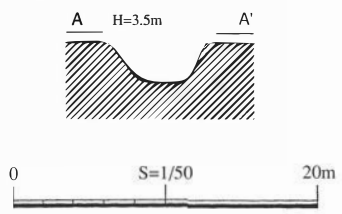
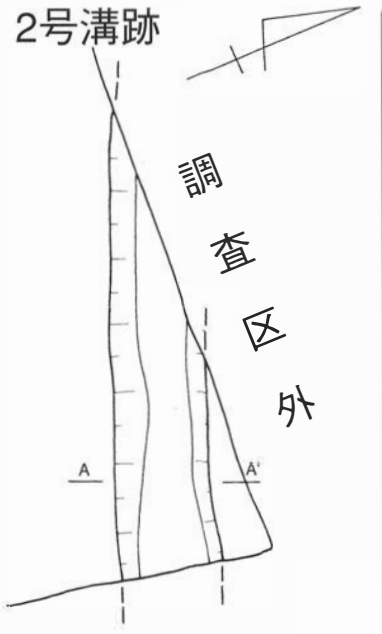
1号土坑（図158）

G9-04グリッドに位置する長軸1.05m×短軸1m×深さ0.26mの隅丸方形を呈する土坑である。3号溝跡と重複し、これより古い。壁の傾斜が緩やかで底面はほぼ平坦な掘り込みである。覆土は灰色粘質土の単層で自然堆積による。3号溝跡に切られており、3号溝跡の覆土を掘り下げて確認した。

遺構外出土遺物

第15次調査区出土の遺物は、全て遺構外の表土層出土のものである。このなかで図化できたのは、土師器高杯1点、高台付杯1点、須恵器壺3点、陶器碗1点、平瓦1点である（図159）。

1は土師器高杯の脚部である。外面は縦位ヘラケズリ、内面は横位のヘラナデが施されている。また、わずかに残る杯部内面にはミガキ・黒色処理が施されている。2は土師器高台付杯の底部である。ロクロ整形で底面に回転ヘラケズリによる調整の痕跡をわずかに残している。また短い貼付け高台をもつ。高台を貼付け後、ロクロナデにより調整が行われている。内面はミガキ後黒色処理が施されている。3は須恵器甕の口縁部である。口縁部は折り返しをもたず、やや外傾しながらまっすぐ立つ。また口縁端部は面取りされて平坦面をもつ。内・外面ともロクロナデによる調整が行われている。また、外面には櫛描による横線文・波状文が施されている。4・5は須恵器甕の体部破片である。外面に平行タタキ目、内面に同心円当て具痕を残す。6は陶器碗の底部である。相馬大堀焼と推定される。ロクロ成形で底部に削り出し高台をもつ。外面には高台を残し灰釉が施釉されている。7は平瓦の破片である。凹面には布目を残し、凸面には簾状タタキ目がみられる。また凹面には粘土塊から粘土板を切り離した際の糸切り痕が残っている。



調査区外

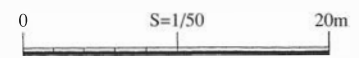


図158 2・3号溝跡、1号土坑

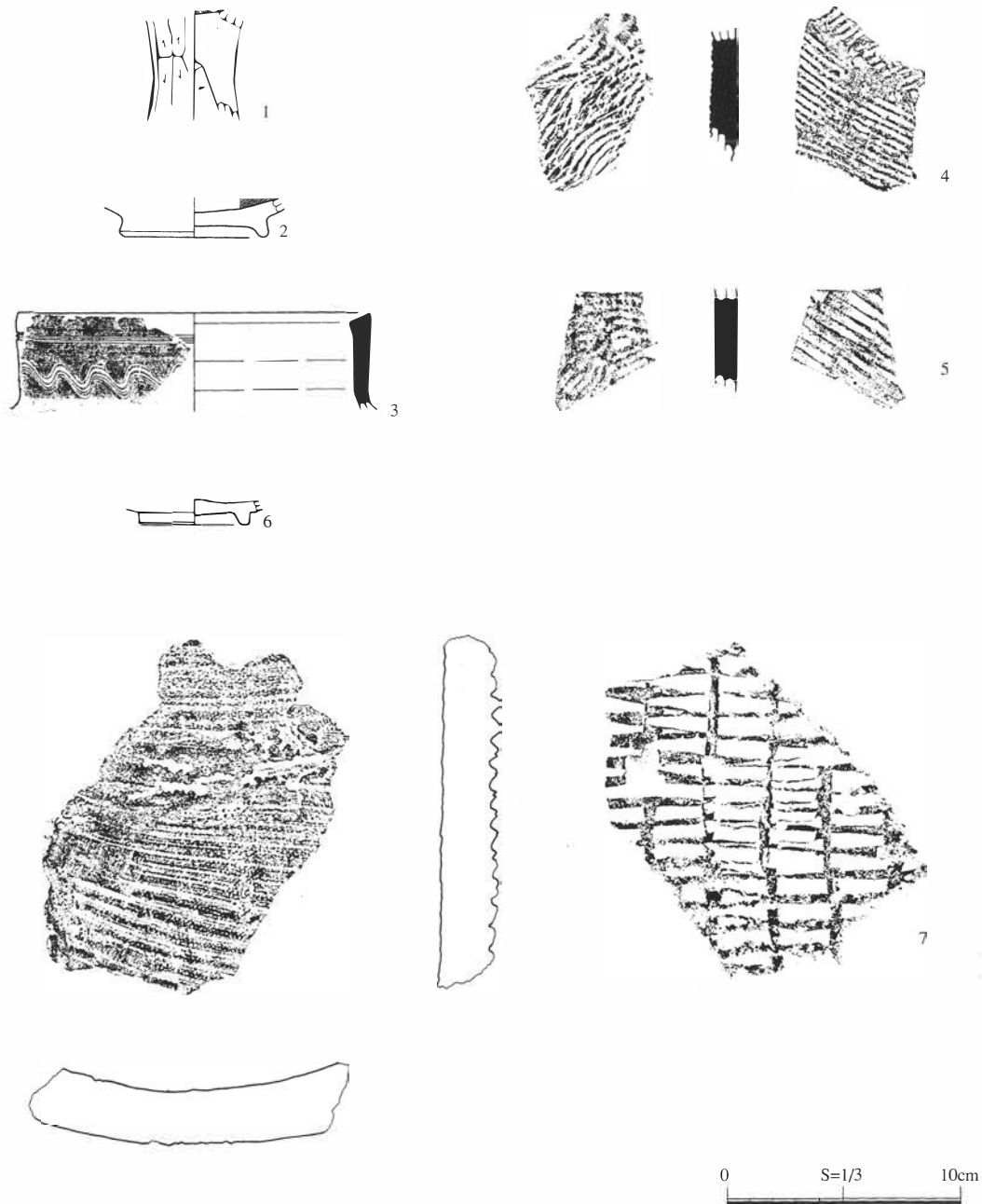


図159 第15次調査区出土遺物

第4節 まとめ

本調査区は、第5・7次調査区の北側に隣接する位置にあり、本調査区で確認された1号溝跡は、第5次調査区検出の溝跡の北側延長部分である。第5・7次調査（糠塚）では、この南北溝の東・西両岸に多数の南北棟掘立柱建物跡が柱筋を揃えて溝と平行に整然と配置されていたことが明らかとなっている。この溝の両岸に位置する掘立柱建物群は第7次調査区北端部で途切れており、今回調査区においても掘立柱建物跡は確認されていないことから、建物群の北への広がり第5・7次調査区内で完結するものと思われる。しかし溝跡はさらに北側へ延びていっており、当地区の北側に位置する正倉院との関わりが問題となる。溝跡の最下層には流

木かと思われる自然木をはじめ種々の植物遺体が堆積しており、溝が機能していた段階では滞水ないし流水していた可能性が高い。この最下層の土層については、溝内の環境を調べるために珪藻分析を行なった。その結果については付章を参照されたい。(藤木)

表 70 第 15 次調査区出土土器・陶磁器観察表

挿図 番号	No.	出土 構	種 別	器 種	法 量	調 整	備 考
					口径/器高/底径		
159	1	表 土	土師器	高 杯	—/(2.8)/7.7	杯部内面ミガキ、黒色処理、脚部外面ケズリ	
159	2	表 土	土師器	高台付杯	—/(1.8)/6.3	内面ミガキ、黒色処理、貼り付け高台	
159	3	表 土	須恵器	甕	15.0/(4.0)/—	口縁部外面に櫛描横線文・波状文	
159	4	表 土	須恵器	甕	—/—/—	外面に平行タタキ目、内面に同心円当て具痕	
159	5	表 土	須恵器	甕	—/—/—	外面に平行タタキ目、内面に同心円当て具痕	
159	6	表 土	陶 器	碗	—/(1.1)/4.7	口ク口水挽き成形・削出し高台 灰釉	大塚相馬焼

表 71 第 15 次調査区出土瓦観察表

挿図 番号	No.	出土遺構	種 別	調 整		重 量 (g)	厚 さ (cm)	備 考
				凸 面	凹 面			
159	7	表 土	平 瓦	簾状タタキ	布目痕、糸切り痕		2.3	



1 第15次調査区全景 (東から)



2 1号溝跡 (南から)



3 1号溝跡土層断面 (南から)



4 1号溝跡植物遺体出土状況 (南東から)



5 1号溝跡植物遺体出土状況 (東から)



1 2号溝跡
(西から)



3 1号土坑土層断面 (南から)



2 3号溝跡
(東から)



4 1号土坑完掘状況 (南から)



5 調査着手後 (西から)



6 第15次調査区出土遺物

第2編 荒井前遺跡

第1章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過

高平ほ場整備事業による農業基盤整備に伴って、下高平字荒井前・川原・牛渡前地区の水田の面工事が計画された。川原地区の畑の一角には中世の板碑群があり、嘉元二年（1304）の年号のある板碑がある。奥州相馬氏は相馬重胤が元亨三年（1323）に下総国相馬郡から奥州行方郡に下向して以来、移封もなく近世末まで続いたが、それ以前に相馬師常が文治の役（頼朝の奥州征伐）の功勞の賞として奥州行方郡（現在の福島県相馬地方）を貰い、下総の相馬領と奥州の行方郡を領知することになったが、奥州には一族家臣をつかわして支配させていたらしい。この遙任期間は文治元年（1189）から相馬重胤が行方下向する元亨三年（1323）まで138年におよんでいる。この間に奥州行方と房州相馬との往来が盛んになり、相馬氏の一族や家臣が奥州行方に下って土着し、豪族となって屋敷を構え、各村邑を支配した時代であった。相馬胤平は、重胤とは従兄弟の間柄で、重胤の下向前後に行方に下向し、高平を領地としていた。また、上高平の共同墓地にある五輪塔は胤平の墳墓であると伝えられている（註1）。こうしたことから、当該地区は相馬胤平に関連する居館跡の可能性があったことから、工事に先行して試掘調査を実施し、遺跡の有無を確認することとなった。試掘調査は国庫補助事業により実施することとなり、その成果は先に報告済みであるが（註2）、本調査は相双農地事務所との契約により受託事業として行なうこととなった。本報告では、試掘調査についても若干ふれながら、本調査成果について報告する。

試掘調査は造成工事が急がれていた荒井前地区からはじめることとなり、標高8m前後の微高地上の畑から調査に入った。調査の方法は、畑の区画に合わせてほぼ東西方向に長さ10m・幅2mの試掘トレンチを23箇所設定し、表土（畑の耕作土）を除去して地山の黄褐色土層上面まで掘り下げて、遺構・遺物の有無を確認した。その結果、荒井前地区には平安時代の幅約5m・長さ（南北）約100m・深さ約0.8mの大溝、その東側には古墳時代前期の大型の住居跡、大溝の西側には平安時代の多数の土坑が確認されたことから、古墳時代から平安時代にかけての住居跡や土坑が複数存在することが予想された。このため、福島県相双農林事務所・原町市土地改良区・高平ほ場整備施行委員会等と協議を行った結果、荒井前地区は本調査の後、造成工事を行うこととなった。川原地区・牛渡前地区では、住宅や神社があり、ほ場整備の事業区域に入っていないため、造成工事は行われず、現状保存する形となった。畑及び遺跡の中央を南北に走る道路は畑として面整備するが、掘削する深さが遺構検出面まで至らないため、試掘調査は不要とした。ただし、微高地縁辺の水田部分は水田の面工事により削平されるため、試掘調査を行い、遺構の有無を確認して改めて保存協議することとなった。このため、荒井前遺

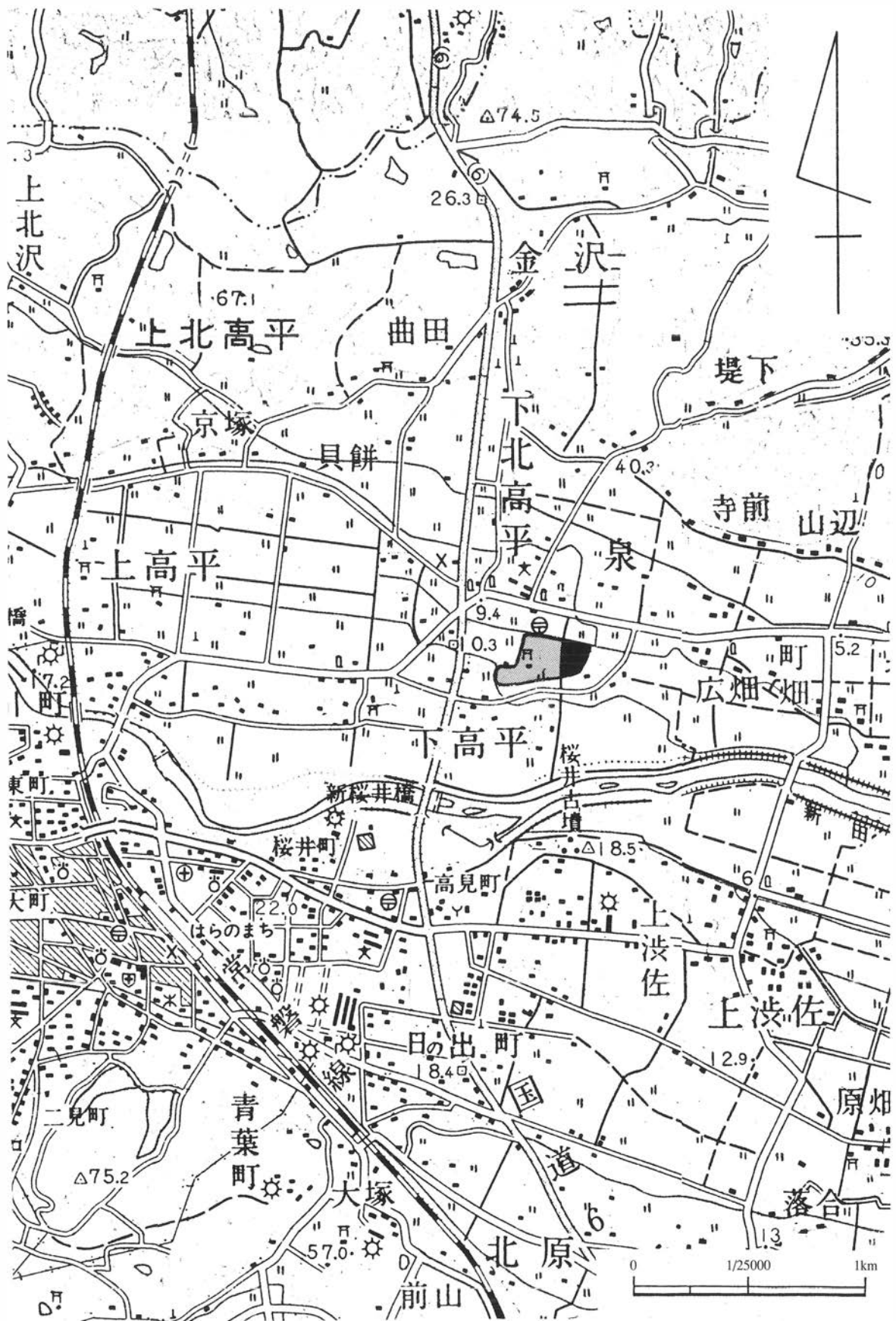


図1 荒井前遺跡 位置図

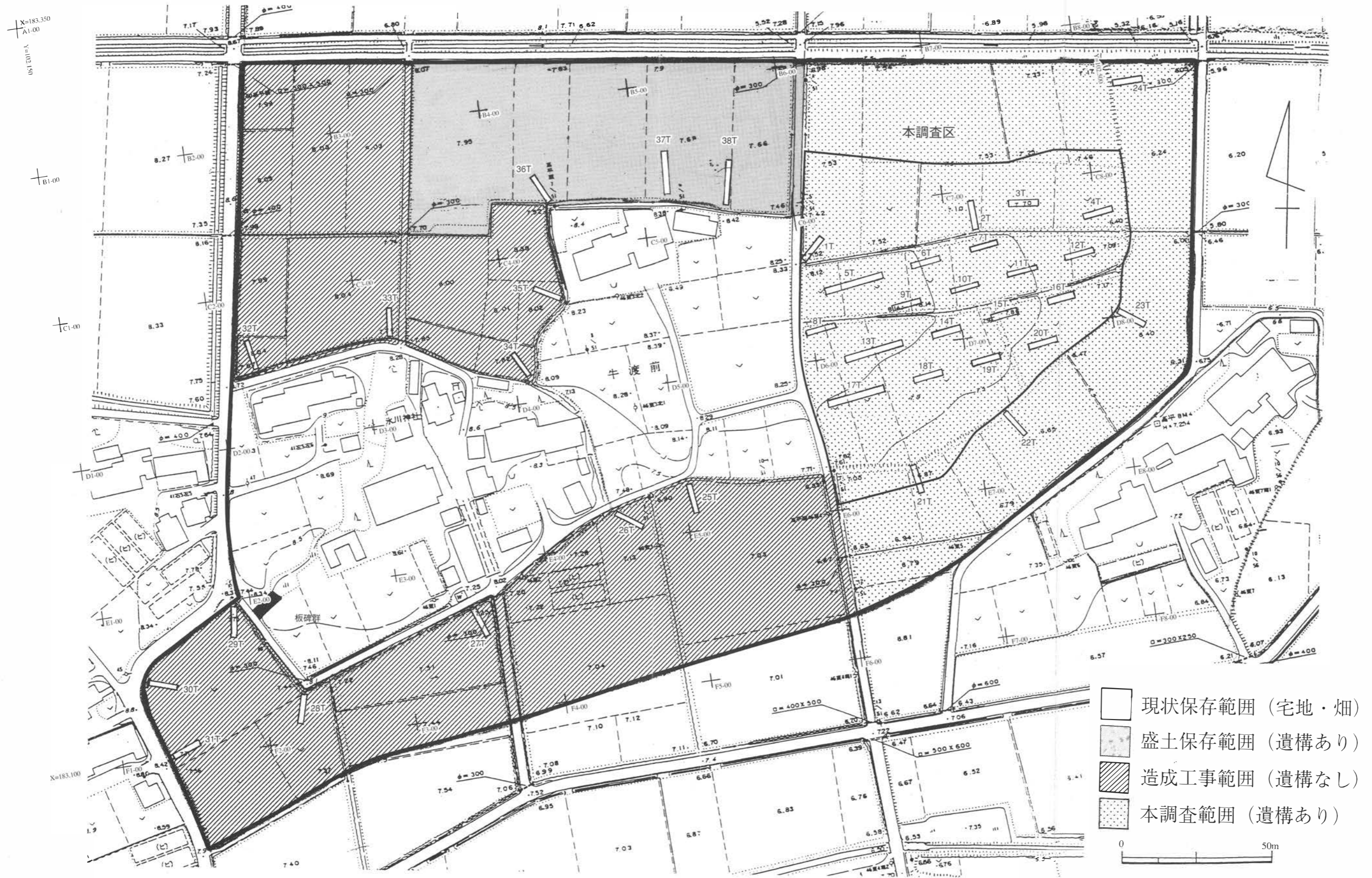


図2 荒井前遺跡 試掘調査トレンチ配置図 保存及び本調査範囲

跡の西半分で新たに微高地の縁辺を巡る形で長さ約 10m・幅 2 m の試掘トレンチを設定し、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、川原地区では氷川神社の南に位置する 27 トレンチで土師器の細片が少量出土したが、ほかには遺構・遺物は発見されなかった。牛渡前地区では、道路と耕作中の畑を挟んで、荒井前地区で検出した平安時代の溝の西側部分を検出した。また、縄文土器の深鉢・土師器の甕などが出土した。このため、開発関係機関と協議した結果、溝を検出した現水田面は盛土して遺構を保存することとなった。

なお、試掘調査を開始した段階では、先に述べたように中世の豪族居館跡の可能性が想定されたため、遺跡名を相馬胤平居館跡としたが、試掘調査の結果と本調査により古墳時代前期の集落と墳墓、平安時代の生産遺跡（小鍛冶）であることが明らかになったため、遺跡名を荒井前遺跡と変更した。なお、その後の調べで、相馬胤平の居館跡は原町市上高平字竹下の寛徳寺跡と考えられている。

調査に至る経過は以下の通りである。

平成 7 年度

平成 7 年 9 月 1 日から 9 月 12 日まで、遺跡の性格・範囲を確認するため、国庫補助事業により試掘調査を行った。遺跡面積は 21,000 m² である。最初のトレンチによる試掘は 2 × 10 ~ 20 m のトレンチを 24 箇所設定し調査した結果（面積 540 m²）、大型の住居跡をはじめ幅 5 m 前後の溝跡が検出された。溝跡の方向を確認するため、重機により表土を除去してトレンチの拡張を行なった（3,060 m²）。トレンチ調査と拡張調査の合計面積は 3,600 m² である。

試掘調査の結果、調査対象区域（標高 8 m 前後の微高地）全体が、古墳時代前期及び平安時代の遺跡の範囲と判断された。

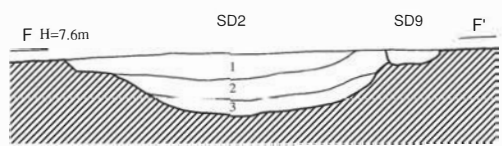
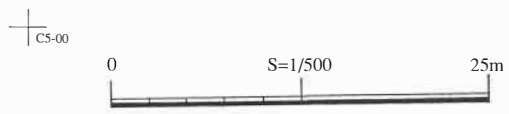
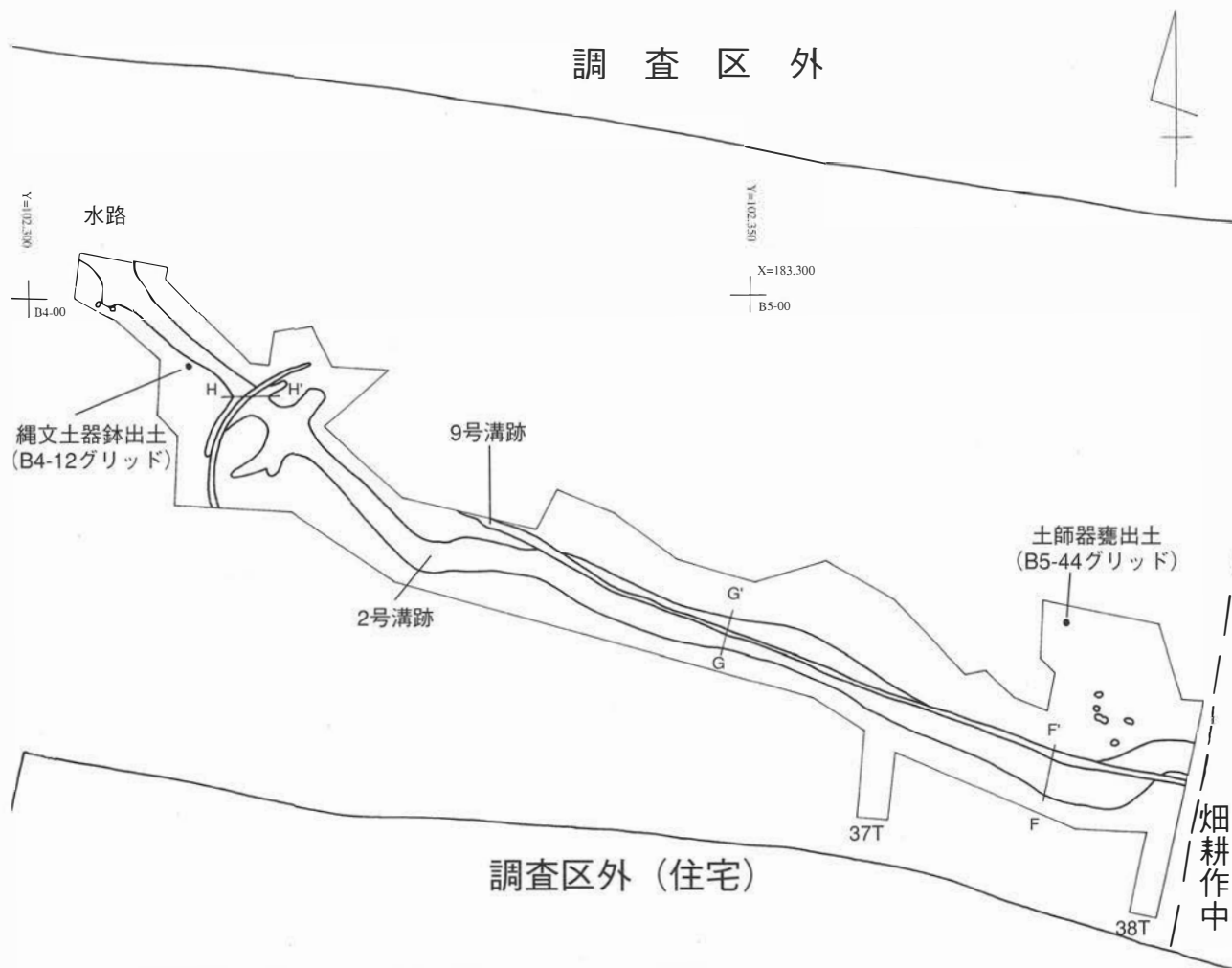
相双農地事務所（当時）・原町市土地改良区・高平ほ場整備施行委員会等との保存協議の結果、現地は切土により水田の面工事を行なうため、盛土等の工法対応が不可能なことから、次年度に本調査を実施した後、造成工事を行なうこととなった。

平成 8 年度

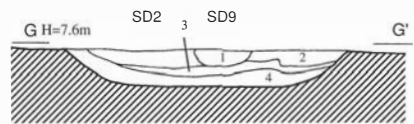
平成 8 年 4 月 10 日、荒井前地区の本調査開始。器材を搬入し、基準点測量を行なった。

平成 8 年 9 月 12 日 ~ 平成 8 年 12 月 20 日 川原地区の試掘調査。対象面積 32,808 m² のうち試掘面積 320 m²（対象面積の 1 %）。微高地の南側（氷川神社の南）の水田には遺構がなかったため、本調査は不要と判断した。微高地の北側（氷川神社の北）の水田には、荒井前地区で検出された平安時代の溝の続きが確認されたが、関係機関との協議の結果、盛土保存することとなり本調査は不要となった。

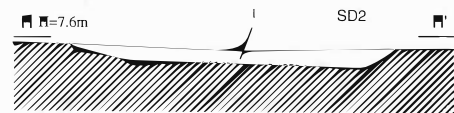
平成 9 年 1 月、牛渡前地区の現状保存範囲の宅地の脇に U 字溝を布設するため、幅 2 m ・深さ約 1 m で掘削することとなり、工事に先行して表土除去を行い遺構の有無を確認したが、遺構は検出されず、土師器の破片が少量出土したのみであったため、本調査は不要と判断され、布設工事を行うこととなった。



- 旧 SD 2 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- ↓ 3 黒褐色砂質土
- 新 SD 9 1 明褐色土



- 旧 SD 2 1 黒褐色土
- 2 灰褐色土
- ↓ 3 暗灰褐色土
- 新 SD 9 1 明褐色土



- 1 暗灰色砂質土

図3 荒井前遺跡 盛土保存範囲 (2号溝跡西側部分)

第2節 調査要項

- 1 遺跡名 荒井前遺跡（あらいまえいせき・遺跡番号2060272）
- 2 所在地 原町市下高平字荒井前・川原・牛渡前
- 3 遺跡の性格 古墳時代から近世にかけた複合遺跡（墳墓・集落・生産遺跡）
- 4 調査面積 19,297 m²
- 5 調査期間 荒井前地区本調査 平成8年4月10日～平成8年12月14日
川原地区・牛渡前地区試掘調査 平成8年9月12日～平成8年12月20日
- 6 調査体制
調査主体 原町市教育委員会
調査担当 生涯学習部文化課 鈴木文雄
事務局体制（平成8年度）
教 育 長 井 村 寛
生涯学習部長 中善寺敏行
生涯学習部次長 佐藤禎一
文化課長 佐藤一男
文化振興係長 高田 毅
主 査 木幡雅巳
副 主 査 鈴木文雄
主任文化財主事 堀 耕平
文化財主事 荒 淑人
嘱託職員 松本 弘
事務補助 館岡るみ
- 7 整理補助員 寺内美智子・古谷洋子・遠藤和子・太田正子・山本恵子・阿部路代
- 8 発掘作業員 新妻順子・高井孝子・玉木 清・玉木セツ子・白石正男・高玉 親・
小川美紀子・青田光収・青田翠・青田博子・遠藤キミ子・八木米子・遠藤 明・
佐藤フクイ・木幡春江・杉浦桂子・大石潤二郎・大石房子・北山富子・加賀
田勇一・新開光子・鈴木伸子・佐藤時雄・佐藤敏雄・宇佐美實・宇佐美茂子・
大野利雄・栢本 充・西 幸吉・西 敏子・真壁ヨシ子・門馬 誠・武山民男・
山田春雄・平音次郎・藤田正司・原田三郎・阿部定雄・米津 豊・小元 智・
荒川幸雄・志賀セツ子・門馬正光・志賀秀夫・志賀とも子・寺島日出雄・
稲村丑治・草野ヤイ子・五十嵐フミ子・相良英樹・国分孝徳

第2章 調査の方法

調査対象範囲は荒井前地区・川原地区・荷渡地区の3地区にまたがっていたが、開発関係機関との調整の結果、調査は荒井前地区から行うこととなった。このため、①平成7年度に荒井前地区の試掘調査、②試掘調査の成果をもとに開発関係機関との協議の結果、平成8年度に荒井前地区の本調査を行うこととなった、③平成8年度に川原地区の水田造成範囲の試掘調査を行うこととなった。微高地の南側（氷川神社の南）では遺構は発見されず、本調査は不要と判断された。微高地の北側（氷川神社の北）では荒井前地区で検出された平安時代の大溝の続きが確認されたが、関係機関との協議の結果、工法対応により保存されることが決定された。

試掘調査は、現地形の畑の地割に合わせ、幅2m・長さ10～20mのトレンチを東西方向に設定し、地山面〔Ⅲ層(黄褐色土)上面]まで掘り下げて、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、古墳時代前期と平安時代の遺構・遺物が荒井前地区の微高地全体に確認された。②の本調査では、グリッドの設定は、5m四方の小グリッドと小グリッド100個(00～99グリッド)からなる大グリッドで遺跡範囲を区画することとした(図4)。荒井前地区・川原地区・荷渡地区をふくめた遺跡全体をカバーできるように、遺跡の北西隅(第3座標系X=183.350 Y=102.150)をA1(大グリッド)-00(小グリッド)の北西隅とし、南東隅に向かってグリッド番号を振ることとした。調査範囲が広いため、調査区を4分割し、B6グリッドとC6グリッド北半分→C6グリッド南半分とD6グリッド→B7グリッドとC7グリッド北半分→C7グリッド南半分とD7グリッドの順に遺構検出から精査を繰り返すこととした。現地は調査前には畑で、畑の耕作土をバックホーで40～50cm除去すると黄褐色土の地山が現れ、この面を人力で遺構検出(検出面の精査)し、遺構の精査・写真撮影・実測を順次行なった。③の川原地区・荷渡地区の試掘調査は現状保存区域から周囲の水田に向かって放射状に幅2m・長さ10mの試掘トレンチを設定し、黄褐色土の地山面まで掘り下げて、遺構・遺物の検出に努めた。川原地区の畑の一角には中世板碑群があり、その西側には如来堂という地名が残されている。また、近隣の方によれば、昭和初期頃までは板碑群の東隣にお堂があり、お堂と板碑群の南側の広場では盆踊りも行なわれていたという。現在、この付近は畑になっており、ほ場整備事業地外のため板碑群の周囲は調査対象外となった。



図4 荒井前遺跡、本調査区グリッド配置図

第3章 調査成果

本調査で確認された遺構は、古墳時代前期の墳墓2基・住居跡1軒、平安時代の掘立柱建物跡3棟・住居跡1軒・小鍛冶関連遺構4箇所・溝跡6条・土坑多数、近代の住宅跡に伴う井戸跡・洗い場などである（図5）。遺物は、古墳時代前期の土師器、平安時代の土師器・須恵器・羽口・刀子・鉄床石・鉄滓、近代の陶磁器等が出土した。

第1節 古墳

1号墳（SX1） 図6・7・10・11

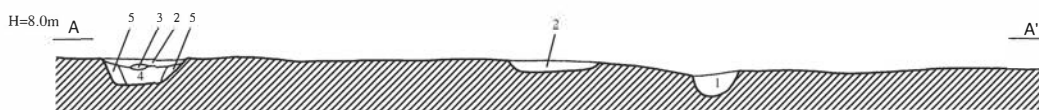
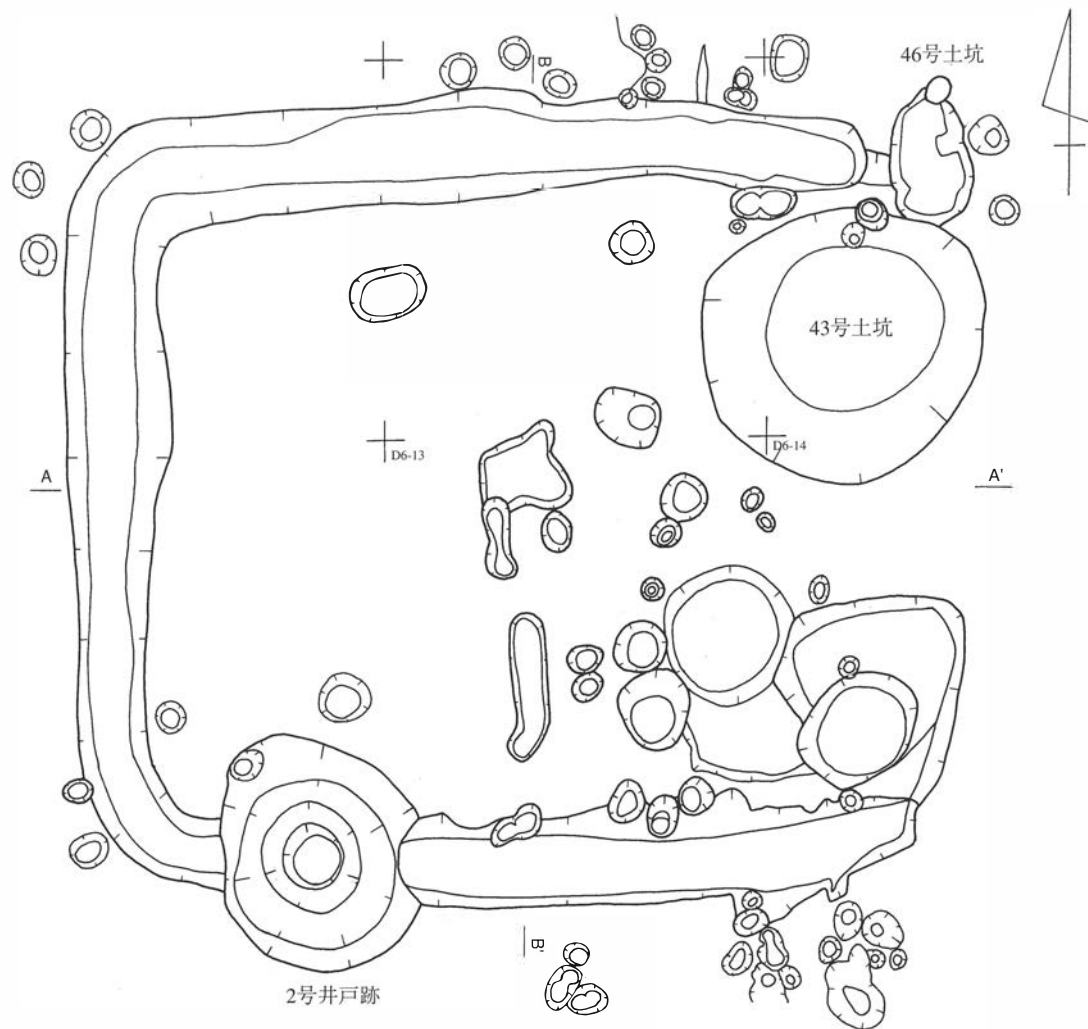
1号墳として位置付けた遺構は調査グリッドD6-02~04・12~14・22~24グリッドの範囲に展開する溝跡で、遺構を検出した層位は第Ⅲ層（黄褐色土）上面である。この溝跡は第26・27・28・29・43・45・46号土坑、2号井戸跡との重複関係にあるが、当溝跡はこのいずれの遺構よりも古いと判断される。

検出された溝状遺構の平面形は東辺が途切れる方形を呈し、北・西・南を画する溝はいずれも直線的で、各辺の溝が接するコーナー部は直角に近い。墳丘部の規模は南北溝中央付近の傾斜変換線で計測すると南北10.8m、西辺溝中央付近の傾斜変換線から、南北辺溝東端を結んだラインの中央で計測すると10.9mを測る。従って墳丘部の規模は約11m弱のほぼ正方形に近い形状を有することとなる。溝跡の規模は北辺溝で長さ10.0m、最大幅1.5m、深さ0.3mを測り、溝の西端は区画西辺と接するが、溝の東端は途切れている。西辺溝の規模は長さ9.0m最大幅1.4m深さ0.3mを測り、北辺溝と南辺溝と連結する。南辺溝は長さ10.5m最大幅1.3m深さ0.3mを計測し、溝の東端は途切れている。溝の断面形は逆台形を呈し、溝壁面の立ち上がりは強いが、傾斜変換線付近は丸い。溝内の堆積土は5層からなり、最も上層には暗褐色土が位置しその下層には黒色土が位置する。上述の2層は溝が埋没する過程で堆積したものと考えられる自然堆積層である。溝の最下層には黄褐色砂質土が堆積している。この黄褐色砂質土は、溝の掘削後の比較的早い時期に溝内に自然流入したもので、溝の内周付近に堆積しているものは墳丘流出土として位置付けられるものである。従って、溝に囲まれた内側には盛土による墳丘が存在していた可能性があるが、この墳丘については高塚状の墳丘であったのか、低塚状の墳丘であったかについては不明である。

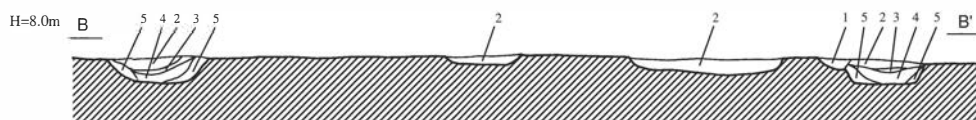
また、墳丘部の中央には不整形な形状を呈した浅い土坑が存在する。この土坑については、遺構が墳丘部の中央付近に位置していることから、埋葬施設の可能性を考慮して調査を行ったが、土坑内に堆積していた土層は黒色土の単一土であり、また遺物の出土も認められなかったことから、埋葬施設として位置付けることができる知見を得ることはできていない。遺物は溝内の堆積土から土師器が出土している。出土した遺物のうち18点を図示した。8はロクロ整形



図5 荒井前遺跡 本調査範囲 (遺構配置図)



- 1 暗褐色土
- 2 黑色土
- 3 黄褐色砂質土
- 4 黑色土 黄褐色砂質土を含む。
- 5 黄褐色砂質土 黑色土を含む。



- 1 暗褐色土
- 2 黑色土
- 3 黄褐色砂質土
- 4 黑色土 黄褐色砂質土を含む。
- 5 黄褐色砂質土 黑色土を含む。

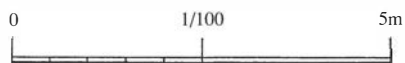


図6 1号墳

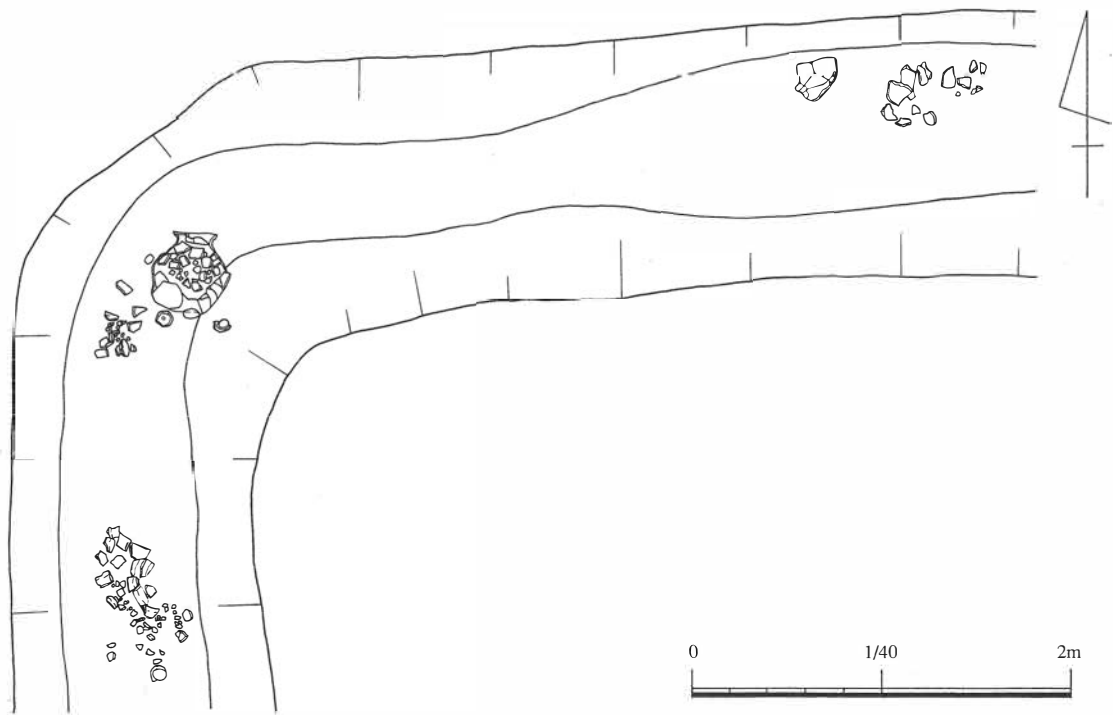


図7 1号墳、遺物出土状況

された杯で、内面には内黒処理が施されている。出土層位は1層から2層にかけての付近であることから、溝が埋没する過程の中で混入したものと思われる。8以外の土器は何れも溝の底面に近いところから出土しており、特に溝の北西コーナー付近からは9の複合口縁を有する壺型土器とともに器台などが出土している。1・2は器台の受部付近の資料である。浅めの受け部からハの字に開く裾部を有するものである。3～5は高杯と思われる資料である。6・15～18は甕の底部、10～14は甕の口縁部付近の資料である。7は手握ね土器である。9は大型の壺型土器である。半坦で直径の小さな底部から体部の最大径を体部中央もしくはやや上部に有する体部が見られる。頸部は体部と接する箇所から外反しながら口縁部に向かい、口縁部は複合口縁を有する。器面調整は、体部にはハケメが施され、ハケメのあとに体部上半に限ってヘラナデを施している。また頸部には縦位方向のヘラナデ、口縁部はヨコナデによって整えられている。内面には体部付近にはヘラナデが施され、口縁部にはヨコナデが見られる。

本遺構は墳丘部や埋葬施設は後世の削平によって確認することはできなかったが、溝の堆積土に墳丘側からの流出土が確認されたことから、溝の内部には墳丘に相当する盛土が存在していた可能性が考えられること、古墳時代の塩釜式の特徴を有する土師器群が出土したことから、古墳時代前期に築かれた方形規格の墳墓として位置付けておく。

2号墳 (SX2) 図8・9・11

2号墳とした遺構は調査グリッドD6-22～24・31～34・41～44グリッドの範囲で検出した溝状遺構であり、遺構を検出した層位は第Ⅲ層(黄褐色土)上面である。この遺構の南側には1号墳として位置付けた方形の溝状遺構が位置しており、また他の遺構との重複関係としては

41・50号土坑との重複が認められ、当遺構が古いことが確認されている。しかし、当遺構の大部分は後世の削平によって失われおり、遺存状況は極めて悪い。

検出された溝跡は後世の削平によって断片的に検出されているが、本来はコの字状に巡るものと考えられる。この溝が確認されたのはコの字状の西辺から北辺に至る北西コーナーを中心とする範囲及び東辺の一部である。確認できた溝の形状は直線的で、各辺の溝が接するコーナー部分は直角であると考えられる。従って区画の北東コーナー部では溝の痕跡を認めることはできなかったが、これはもともと北東コーナーが途切れていたものではなく、後世の削平によるものと考えている。ただし、区画の南側においても溝の痕跡を確認することはできていないが、この南辺については1号墳同様にもともと溝の掘削を行っていない可能性が高い。

検出された溝の規模は北辺で長さ 11.0m、幅 1.6m、深さ 0.4mを確認し、東辺で長さ 7.5m、幅 1.0m、深さ 0.2m、西辺で長さ 8.3m、幅 1.5m、深さ 0.2mを確認した。墳丘部は東辺から西辺までの距離が 11.6mを計測するため東西規模は 11.6mと求めることができる。東辺墳丘部の南北規模は南端および西辺南端が本来の掘削面を遺存しているとは考えにくく墳丘部の南辺位置は確定することはできないため、厳密な南北規模を知ることはできない。ただし、隣接して営まれた1号墳が東西規模とほぼ同規模の南北規模を備えていることを考慮すれば、2号墳の南北規模を東西規模とほぼ同規模の 11.6m前後であったと推定しておきたい。

溝内で確認された堆積土は黒褐色土、暗黄褐色土が検出されているが、当溝は本来の溝の掘削面は大きく削平されていると考えられることから、検出された堆積土は溝跡が埋没する過程の中で比較的初期段階に堆積したのと考えられ、当土層から出土した遺物は当溝跡にともなうものと考えることができる。また残存している範囲では確実に墳丘部から溝内へ流出したと考えられる墳丘流出土は認められないため、溝で区画された範囲に墳丘に相当する盛土が存在していたかについては不明である。

埋葬施設については墳丘部の中央南側に浅い溝状の遺構が検出されたため、埋葬施設の可能性を考慮し調査を行ったが、遺構内の堆積土は黒褐色土の単一土層であり、遺物は出土しなかったため、埋葬施設と断定することはできなかった。

遺物は区画溝の北東付近からまとめて土師器が出土している。

図 11-1 は短い脚部を有する高杯である。杯部ならびに裾部の形状は不明であるが、杯部内面には黒色処理が施されている点を考慮すると、栗圀式以降の所産である。2 は杯である。3 ~ 5 はロクロ整形によるもので、3 は杯・4 は皿・5 は甕の体部上半である。上記の5点の遺物はどれも遺構を検出した段階で出土したものであり、確実に当遺構にともなうものと判断することはできない。6 は土師器壺の底部付近の資料である。この資料は東辺溝の底面付近から出土したもので、当溝跡にともなう遺物として判断されるものである。比較的径の小さな平坦な底部を有し、一旦短く上方に立ち上がったのち、緩やかに外傾する体部が始まる。体部上半の形状は欠損しており不明である。体部外面にはハケ調整後に縦方向のミガキを施し、内面にはヘラナデが施されている。この資料については、全体の様子を知ることができないため、編年的な位置付けは困難であるが、体部外面調整がハケ調整の後ミガキ調整を施している点を考

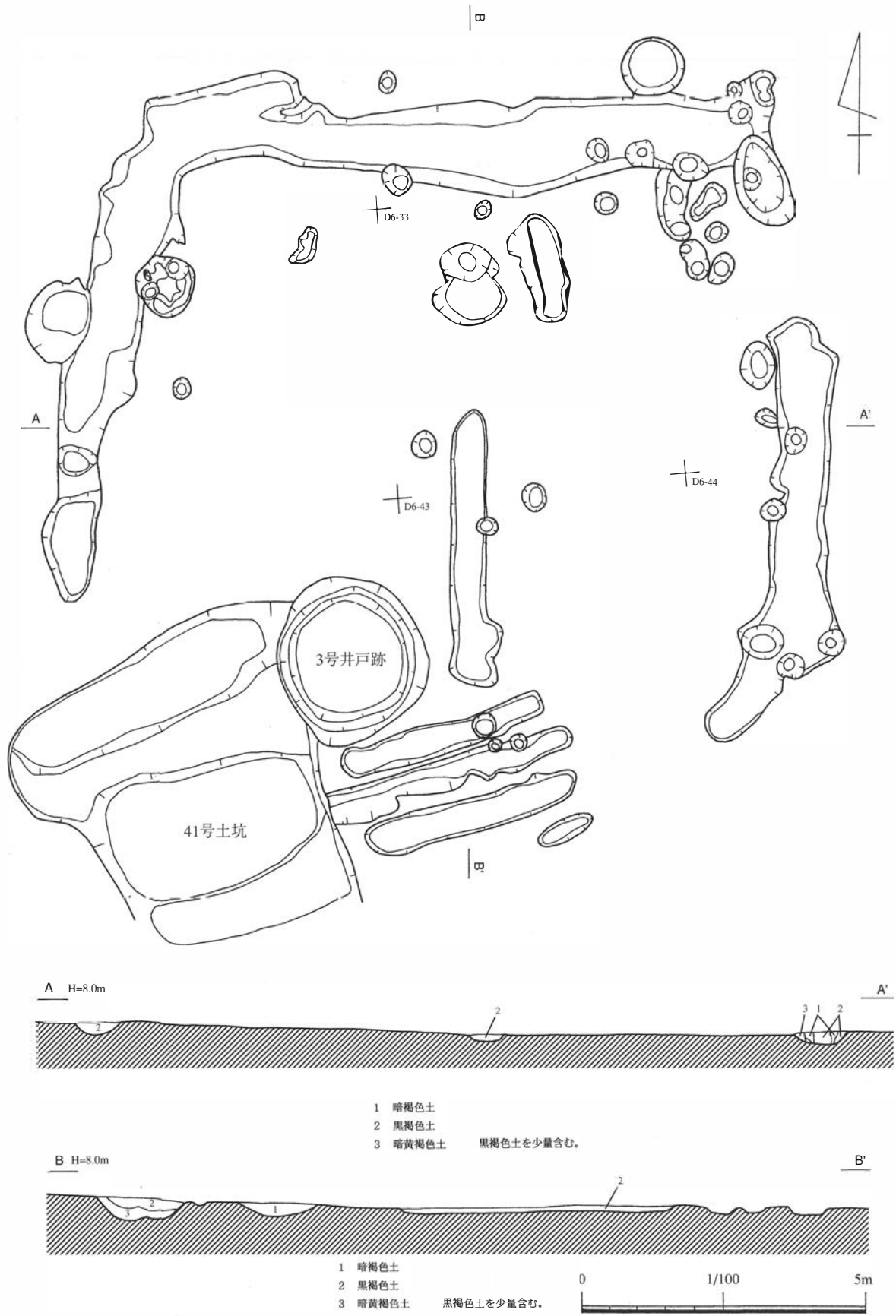


図8 2号墳

慮すれば、古墳時代前期の所産である可能性が高い。7は体部下半以下を成形しないで底部を大きく穿孔した壺であろうか。8は壺の体部資料と判断したものである。器面の状態があまり良くないために詳細な調整を観察することはできないが、外面には断片的なハケ調整が施されている。ただし、ハケ調整後にミガキもしくはケズリ等の調整が施されている可能性も残されている。内面にはヘラナデによる調整が施されており、6の資料と共通点が多い。9は土錘である。

本遺構は後世に遺構の大部分が削平されてしまい、墳丘部の周囲にめぐらされたと考えられる溝が検出されただけであったが、方形に巡ると推定される溝跡と溝跡の底面から出土した土師器から古墳時代前期に築かれた方形規格の墳墓であると考えられる。溝で区画された墳丘部に、いわゆる高塚状の墳丘が存在していたかについては不明であるが、1号墳と同様にある程度の墳丘状の盛土があったものと考えている。

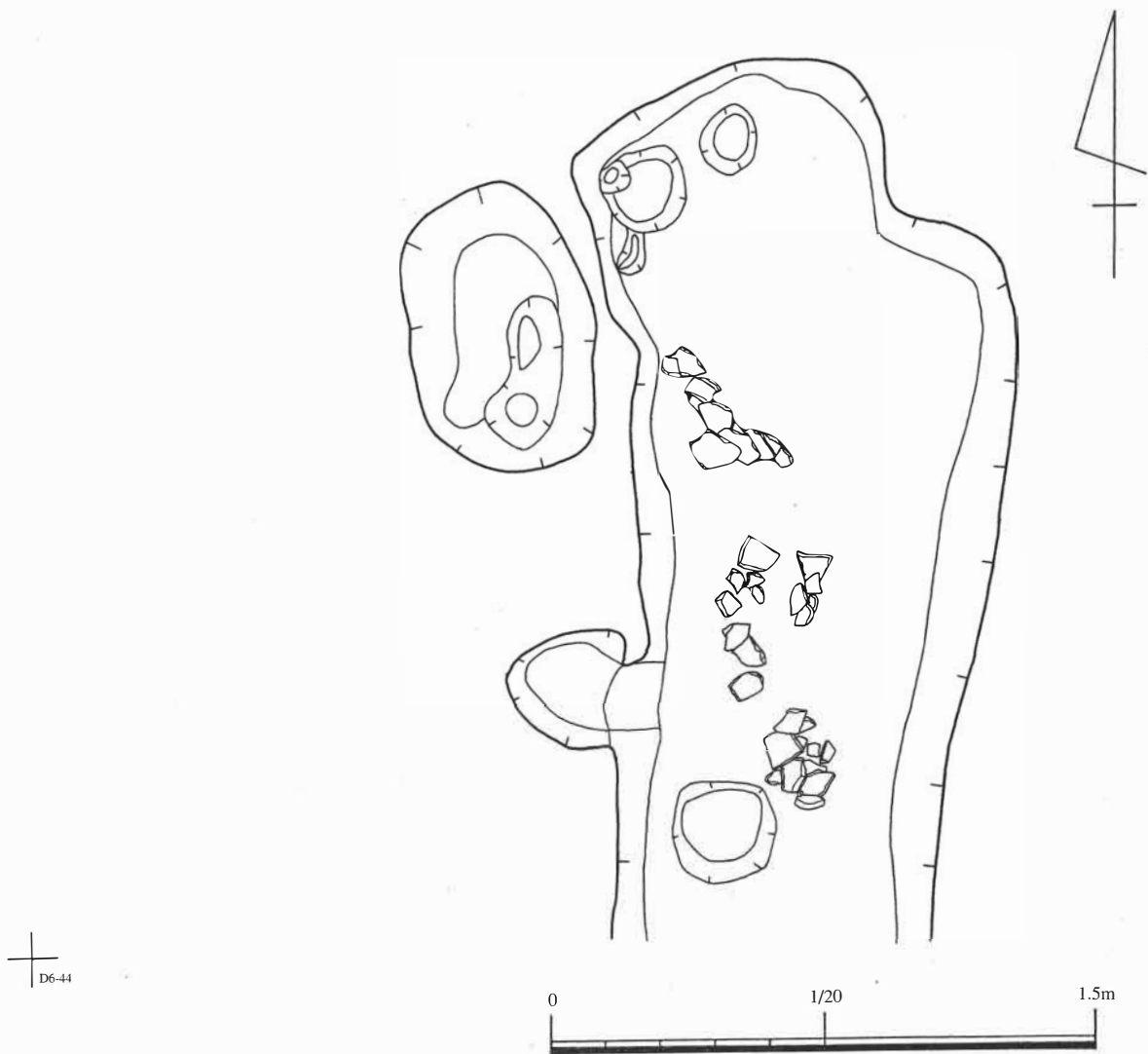


図9 2号墳 遺物出土状況

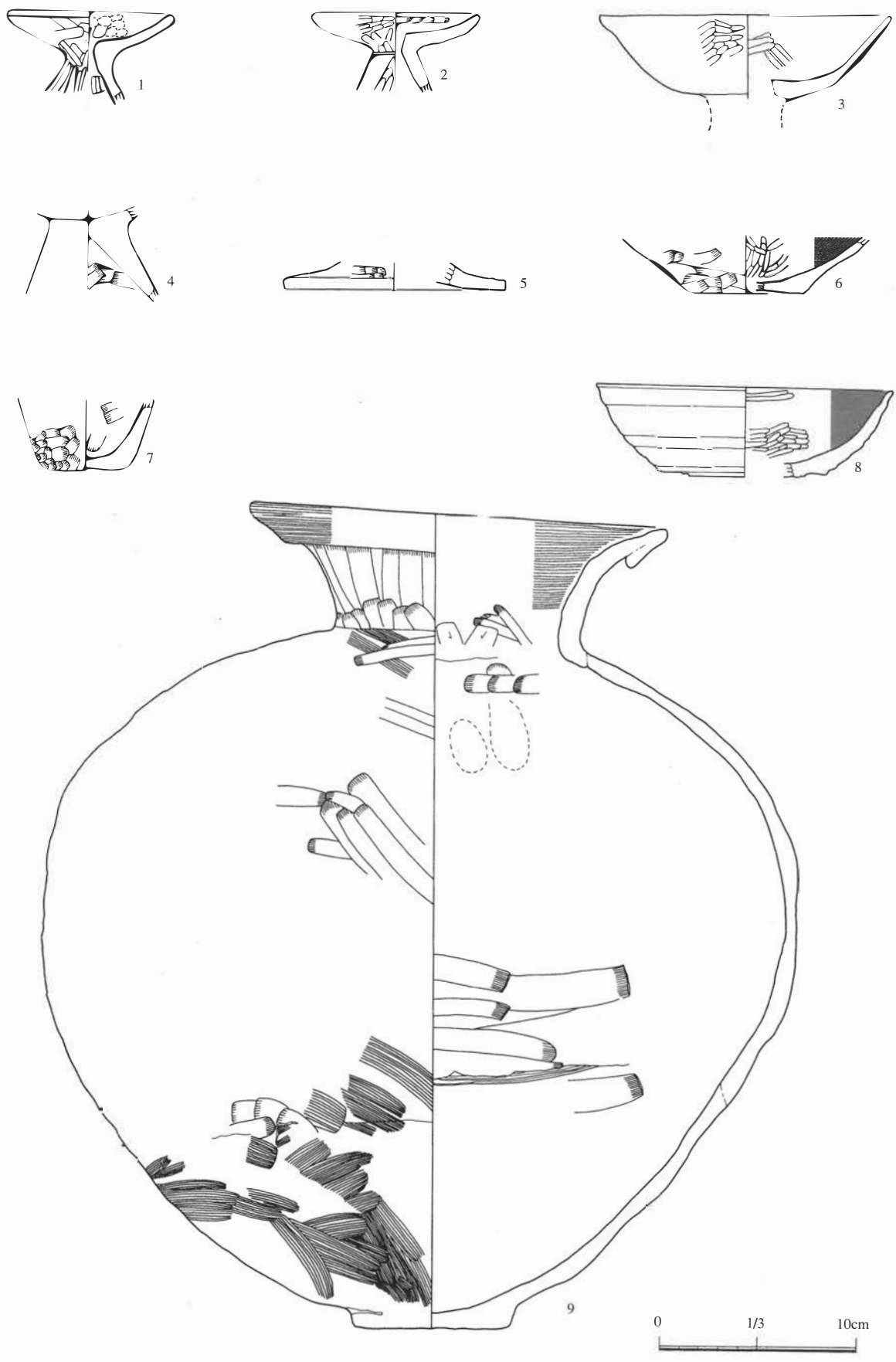
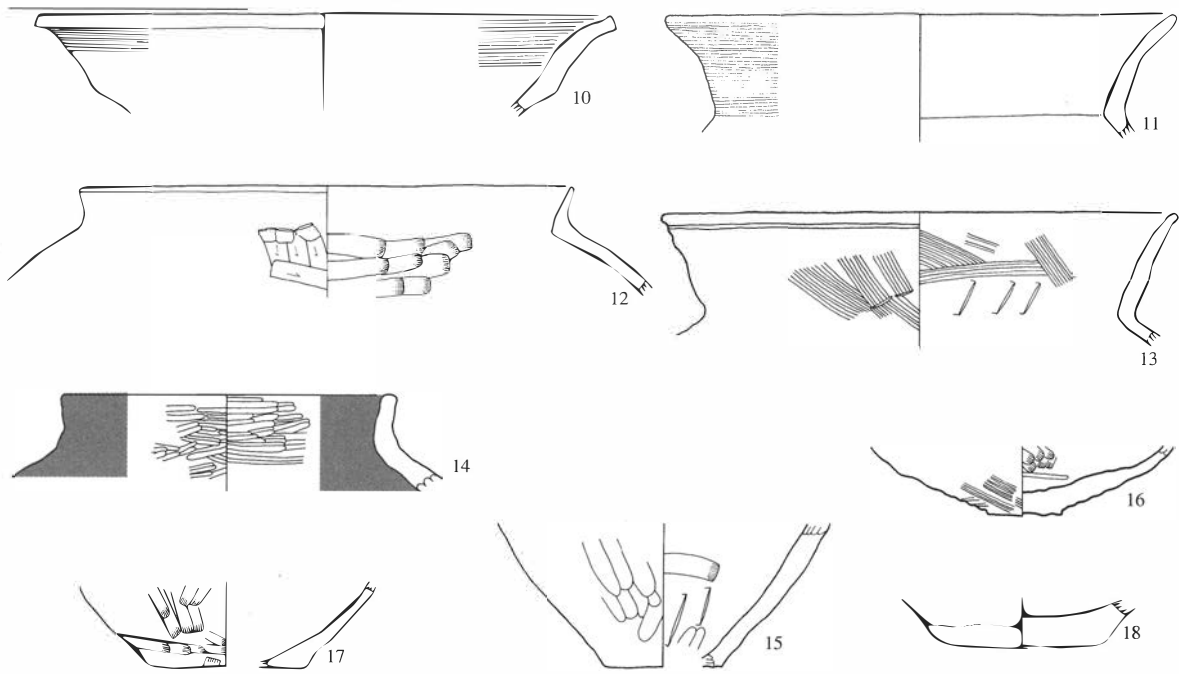


图10 1号墳出土遺物 (1)



SX1

SX2

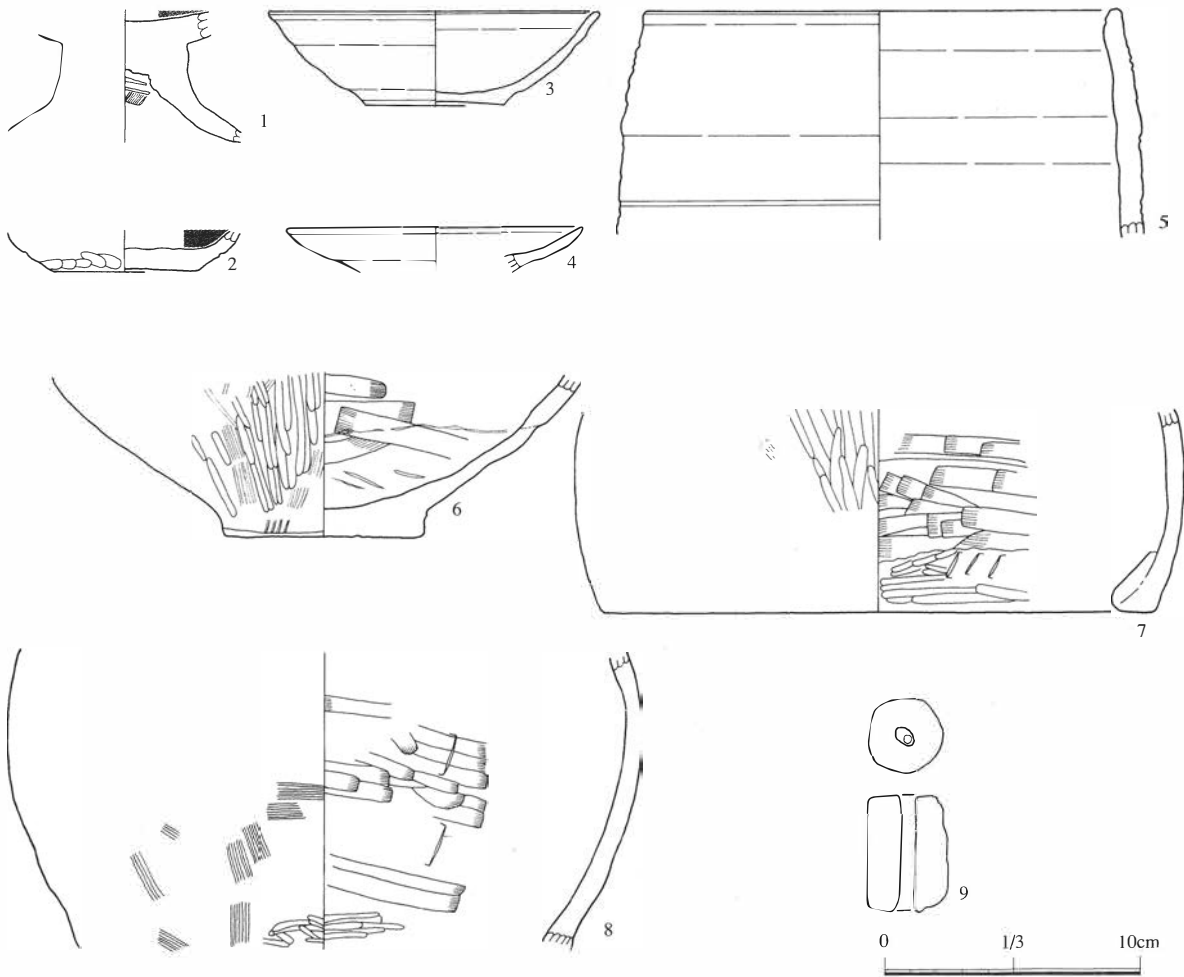


图11 1号墳 (2) · 2号墳出土遺物

第2節 竪穴住居跡

1号住居跡 (S I 1) 図 12~15

位置 C 6 - 69・79・89、C 7 60・61、70・71・80・81 グリッド **重複関係** なし **主軸方位** N - 43° - Wを示す。**平面形** 隅丸方形 **規模** 南西から北東 10.0m×北西から南東 9.8mを測る大型の竪穴住居跡である。**床面** ほぼ平坦で、床面には屋根材と思われる炭化材が散布している。

壁 遺構の上部が削平され、検出面から床面までの深さが浅いため、壁の高さは 10~30 cmで立ち上がりは急である。**炉** 住居跡の中央に位置し、1.6×1.0mの楕円形で深さ 5 cmを測る。底面には焼土が堆積し、火床部はよく焼けている。**柱穴** 楕円形の支柱穴 4 個 (P 1・P 2・P 3・P 4) を検出した。P 2 と南東壁をつなぐように幅 0.25m長さ 1.8mの溝があり、間仕切りと考えられる。P

5・6 は出入りに付随する施設と考えられる。**貯蔵穴** 北コーナーの大きく深い P 8 は貯蔵穴と考えられる。**壁柱穴** 各壁の周溝に 4 個ずつ、1.8~2.7m間隔で計 16 個掘られている (P 12~27)。全体にやや内側に傾斜しており、P 19 では傾斜が強く断面形がオーバーハングしている。**その他のピット** 炉と南西壁の間には、壁に平行な細長い P 9・P 10 があり、覆土には木炭粒が多く含まれていた。P 11 は北西壁にそった細長いピットである。炉の西側には直径 20~30 cmの小ピットが 10 個程、P 3 の柱穴の周囲にも直径 20~30 cmの小ピットが 7 個みられるが、性格は不明である。**出土遺物** 器台・埴・壺・土錘・磨石。 **備考** 古墳時代前期。

表 1 S I 1ピット計測値 (m)

	性格	長軸	短軸	深さ
P 1	支柱穴	0.7	0.6	0.4
P 2	支柱穴	0.8	0.7	0.6
P 3	支柱穴	0.8	0.7	0.7
P 4	支柱穴	0.9	0.6	0.3
P 5	出入口	0.9	0.8	0.4
P 6	出入口	2.0	1.0	0.1
P 7	不明	0.8	0.7	0.6
P 8	貯蔵穴	1.4	1.3	0.6
P 9	(木炭粒含む)	2.4	0.6	0.2
P 10	(木炭粒含む)	3.2	0.6	0.2
P 11	不明	2.6	0.5	0.1
P 12	壁柱穴	0.4	0.4	0.4
P 13	壁柱穴	0.4	0.3	0.5
P 14	壁柱穴	0.5	0.3	0.5
P 15	壁柱穴	0.4	0.3	0.4
P 16	壁柱穴	0.3	0.3	0.4
P 17	壁柱穴	0.4	0.3	0.5
P 18	壁柱穴	0.3	0.3	0.4
P 19	壁柱穴	0.4	0.2	0.5
P 20	壁柱穴	0.2	0.2	0.5
P 21	壁柱穴	0.3	0.3	0.5
P 22	壁柱穴	0.3	0.2	0.5
P 23	壁柱穴	0.3	0.2	0.5
P 24	壁柱穴	0.4	0.3	0.5
P 25	壁柱穴	0.4	0.4	0.6
P 26	壁柱穴	0.3	0.3	0.5
P 27	壁柱穴	0.3	0.3	0.4

2号住居跡 (S I 2) 図 16

位置 C 7 - 77・78・87・88 グリッド **重複関係** 小ピット群に切られている。**主軸方位** N - 5° - Wを示す。**平面形** 隅丸方形 **規模** 東側は削平さ

れているが、検出した範囲で東西 4.6 m・南北 4.9mを測る。**床面** ほぼ平坦で、床面全体に焼土粒・木炭粒が分布している。**壁** 遺構の上部が削平され、東壁は検出できなかったが、西壁は高さ 10 cmで立ち上がりは急である。**カマド** 遺構の東側 3分の1は削平されているため東カマドであれば不明だが、カマドまたは炉の痕跡は確認できなかった。**柱穴** 西壁側に寄っているが、柱穴の可能性のあるピット 2 個 (P 1・P 2) を検出した。**出土遺物** なし **備考** カマド・明確な柱穴はないが、方形プランの浅い掘り込みと上屋構造が火災によって焼失した痕跡から、簡単な構造の竪穴住居跡であったと思われる。

表 2 S I 2ピット計測値 (m)

	性格	長軸	短軸	深さ
P 1		0.4	0.4	0.4
P 2		0.5	0.4	0.4

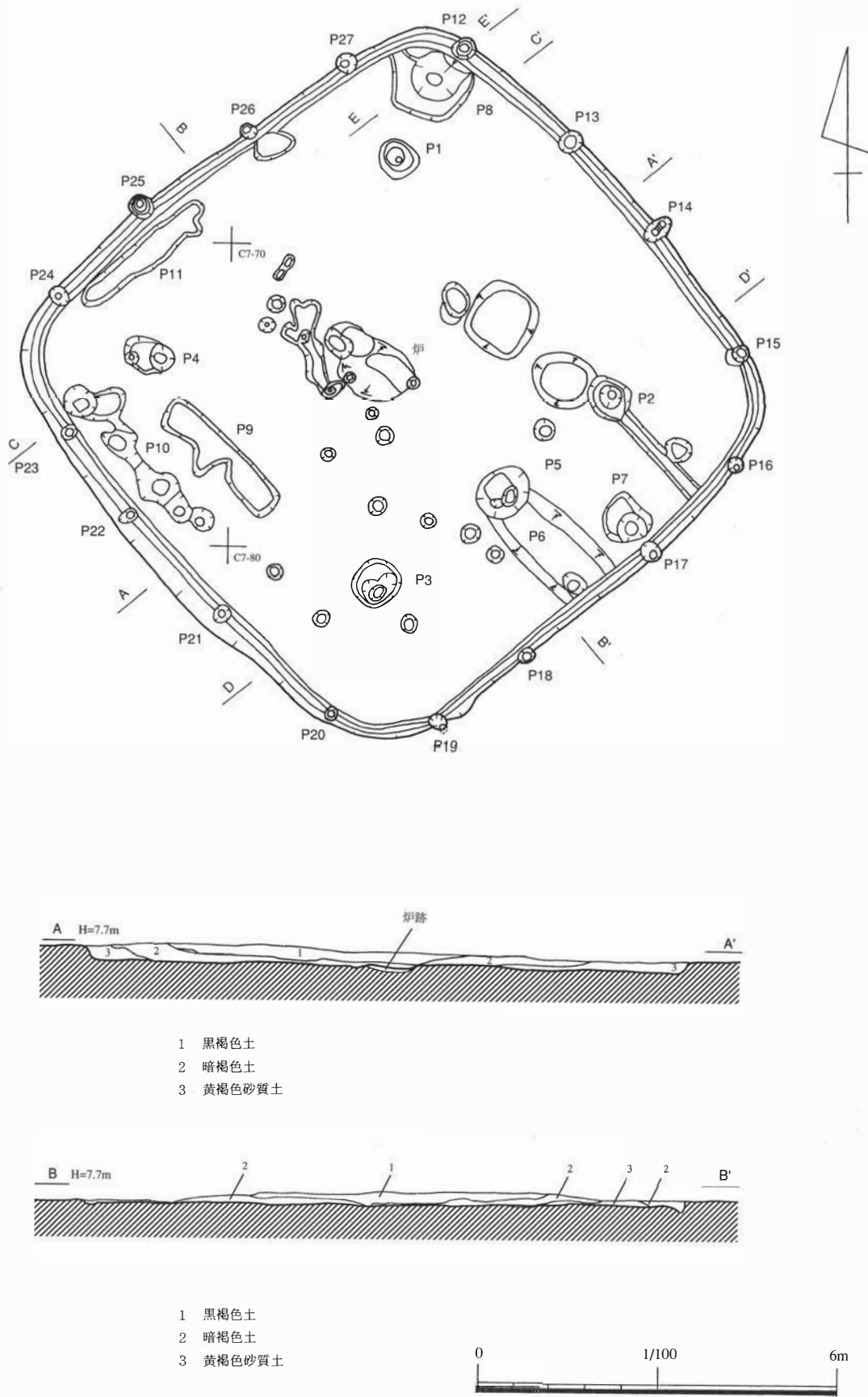


图12 1号住居跡 (1)

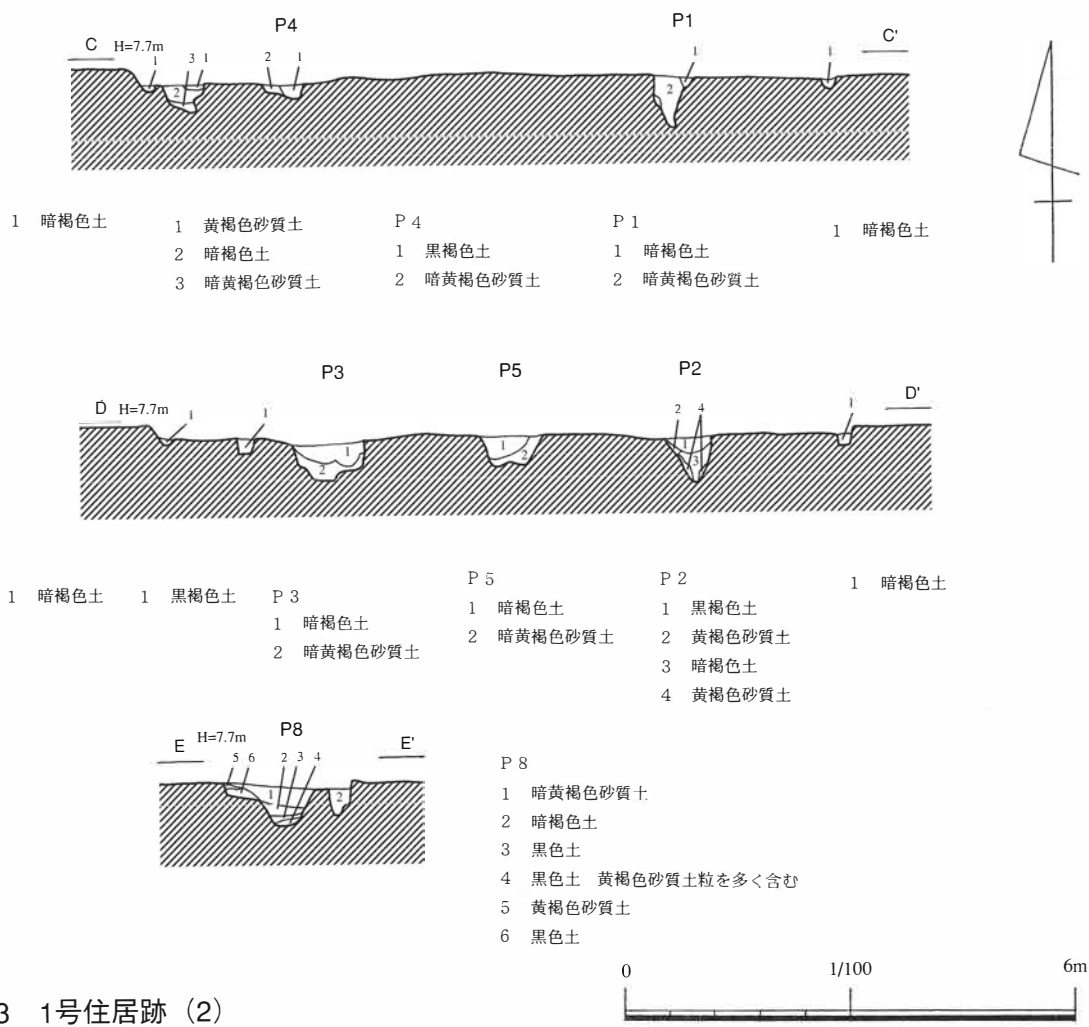


図13 1号住居跡 (2)

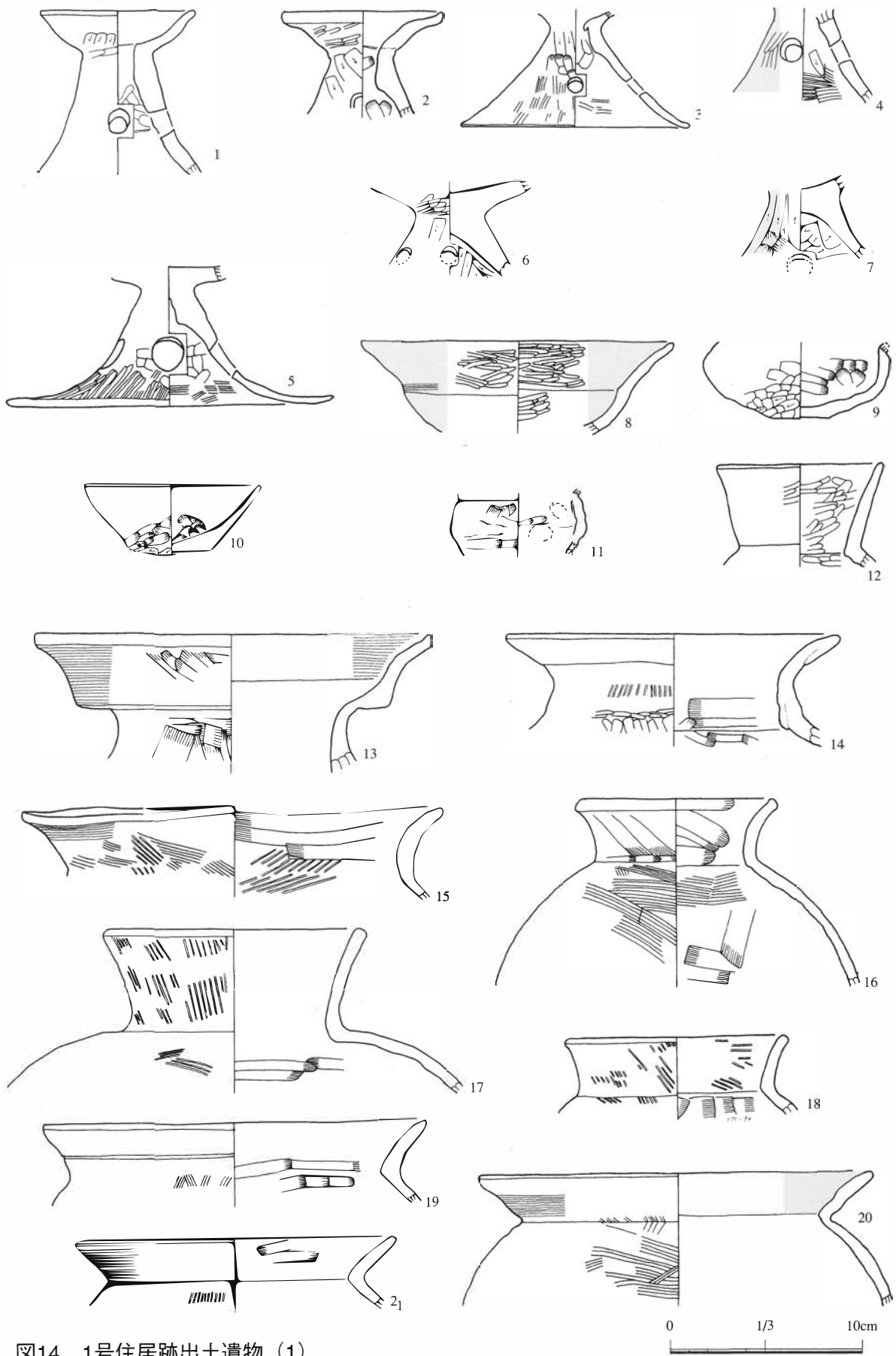


图14 1号住居跡出土遺物 (1)

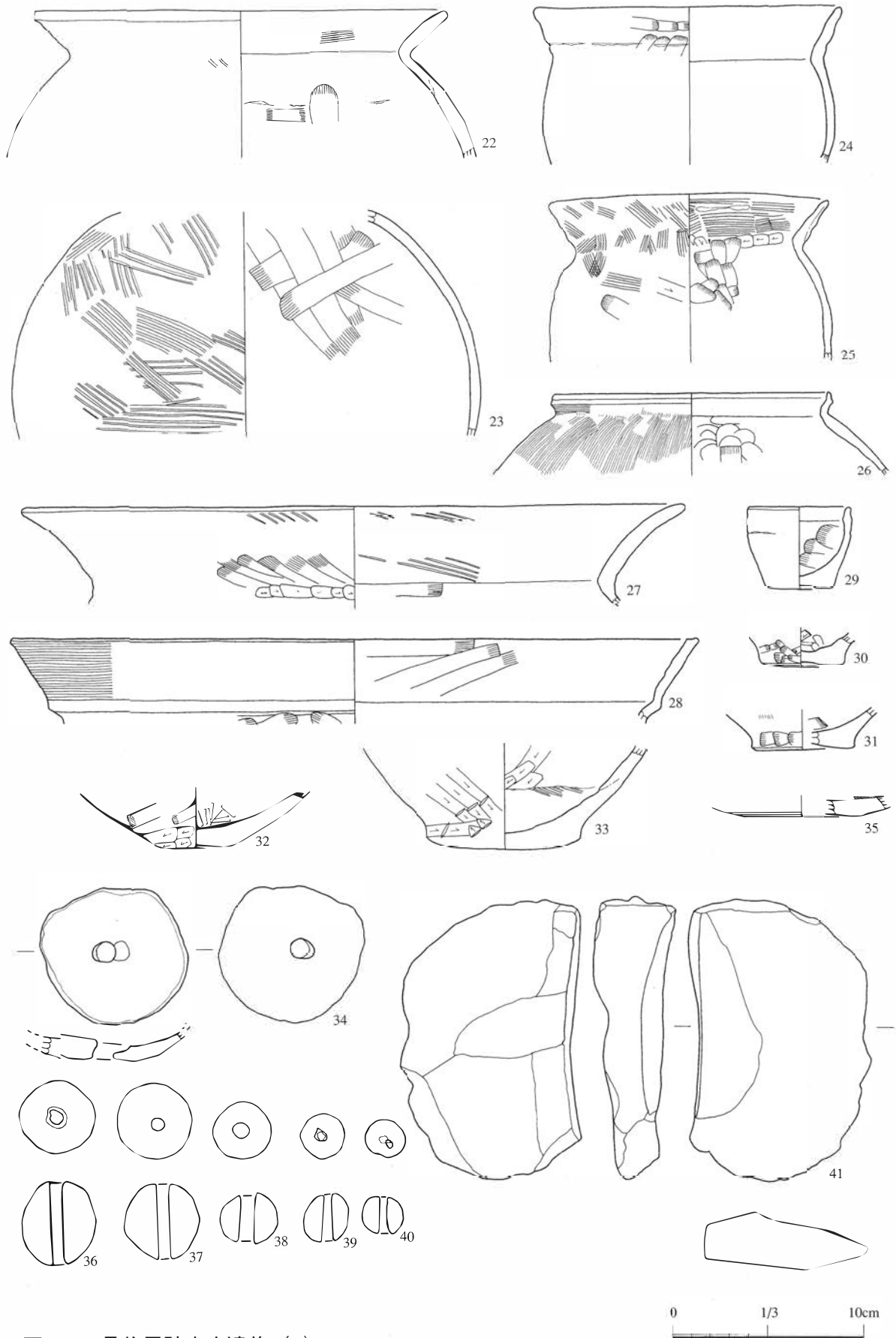


图15 1号住居跡出土遺物 (2)

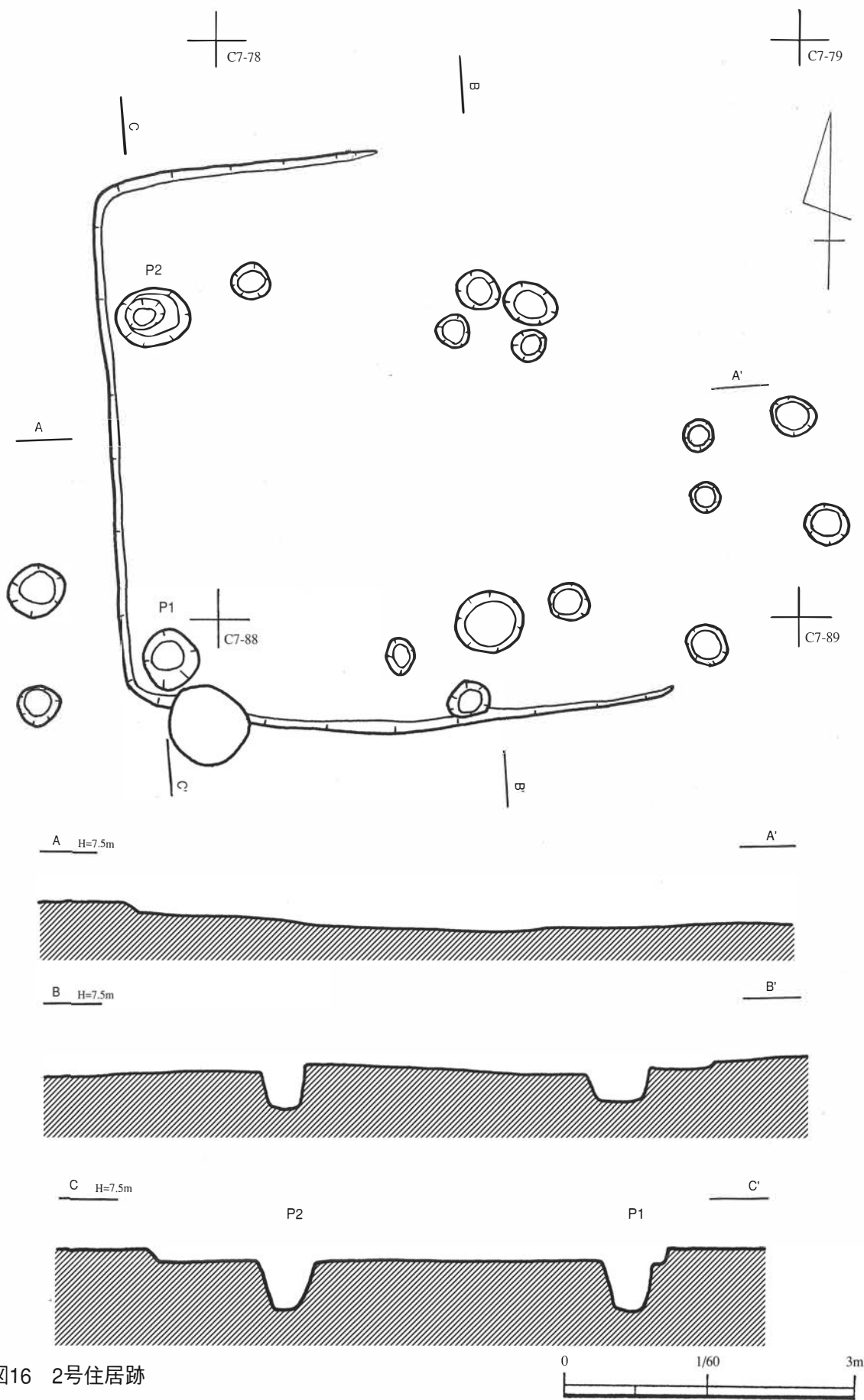


图16 2号住居跡

3号住居跡 (S I 3) 図 17・19

位置 C 5-59・69、C 6-50・60 グリッド **重複関係** 小ピット群に切られている。**主軸方位** N-10°-Wを示す。**平面形** 隅丸方形 **規模** 西側は道路で調査区外のため未掘。検出した範囲で東西 4.6 m・南北 4.9mを測る。**床面** ほぼ平坦で、床面全体に焼土粒が分布している。**壁** 東壁は高さ 10 cmで立ち上がりは急である。**カマド** 調査範囲では検出されなかったが、遺構の西側が未調査のため、西カマドの可能性もある。**柱穴** 多数の小ピットに切られているため明瞭でないが、柱穴の可能性のあるピット3個 (P 1・P 2・P 3) を検出した。**出土遺物** 東壁寄り P 4 から土師器甕・高杯の支脚・木炭が、床面南東コーナーから磨石が出土した。**備考** カマド・明確な柱穴は確認できないが、隅丸方形プランの浅い掘り込みと上屋構造が火災によって焼失した痕跡から、簡単な構造の竪穴住居跡であったと思われる。

表 3 S I 3ピット計測値 (m)

	性格	長軸	短軸	深さ
P 1		0.4	0.3	0.2
P 2		0.5	0.4	0.4
P 3		0.7	0.5	0.3
P 4		0.4	0.4	0.1

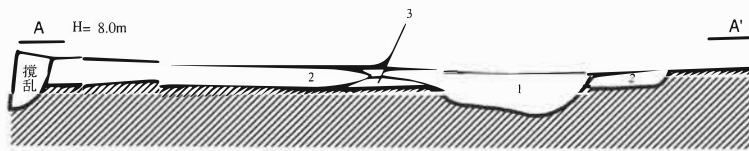
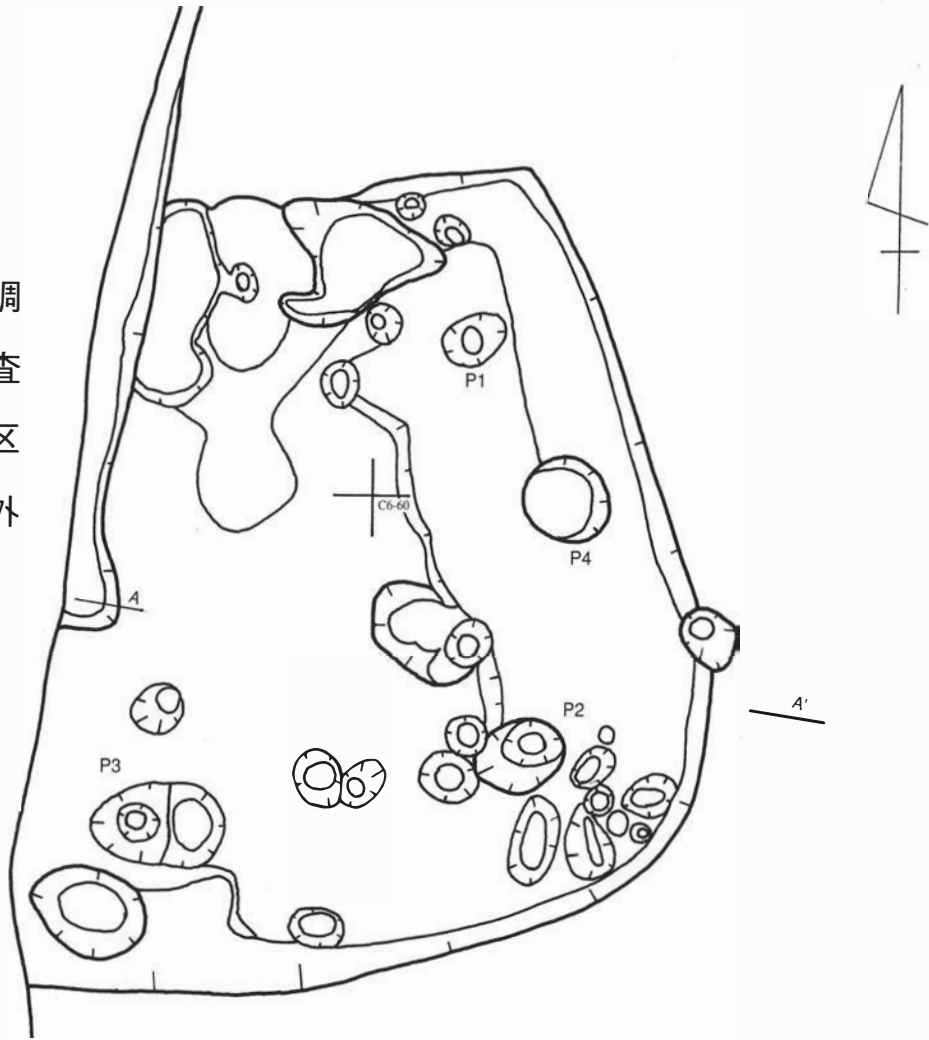
4号住居跡 (S I 4) (小鍛冶関連遺構 1) 図 18・19

位置 C 6-99、C 7-90、D 6-09 グリッド **重複関係** なし **主軸方位** N-3°-Eを示す。**平面形** U字形 (北は方形、南は楕円形) **規模** 東西 3.7m・南北 6.3mを測る。**床面** ほぼ平坦。中央から西壁に向かって鉤の手状に溝を切っており、始点 (P 10) と曲がり角 (P 11) には簡易な柱穴がある。これらは間仕切り施設と考えられる。**壁** 上部は削平されているため、検出面から床面まで浅く、壁の高さは 3~10 cmである。**カマド** なし。**柱穴** 主柱穴はなく、壁柱穴 9 個 (P 1~P 9) を検出した。**鍛冶炉** 東壁沿いの P 16 は壁面が焼けて、焼土が多量に出土している。通常の住居の炉ではなく小鍛冶関連の炉と考えられる。**その他のピット** 床面に 5 個の大きなピットがあり (P 12~15・17)、いずれも浅いが小鍛冶に付属する作業ピットの可能性がある。**出土遺物** P 13 から鉄製品、P 16 から土師器杯・甕、支脚、磨石が出土。**備考** 本遺構は通常の住居跡とは形態も違い、カマドもない。金沢製鉄遺跡群で検出された鍛冶炉では火窪の周囲に粘土を円形または馬蹄形に積み上げているのに対し (註 3)、荒井前遺跡では粘土の構築材はないが、小鍛冶工房跡と考えられる。

表 4 S I 4ピット計測値 (m)

	性格	長軸	短軸	深さ	出土遺物
P 1	壁柱穴	0.3	0.2	0.4	
P 2	壁柱穴	0.5	0.3	0.1	
P 3	壁柱穴	0.2	0.2	0.2	
P 4	壁柱穴	0.4	0.3	0.5	
P 5	壁柱穴	0.2	0.2	0.3	
P 6	壁柱穴	0.2	0.2	0.2	
P 7	壁柱穴	0.3	0.2	0.3	
P 8	壁柱穴	0.3	0.3	0.2	
P 9	壁柱穴	0.2	0.2	0.2	
P 10	間仕切	0.3	0.2	0.1	
P 11	間仕切	0.2	0.2	0.1	
P 12 (SK73)		0.8	0.7	0.1	土師器甕 須恵器甕
P 13 (SK74)		1.0	0.9	0.5	鉄製品、木炭
P 14		1.3	1.1	0.2	
P 15		0.9	0.8	0.1	
P 16	鍛冶炉	1.0	0.9	0.2	土師器杯・甕、 支脚、磨石
P 17		1.5	1.2	0.2	

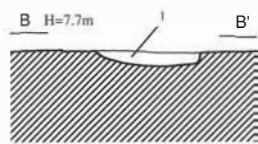
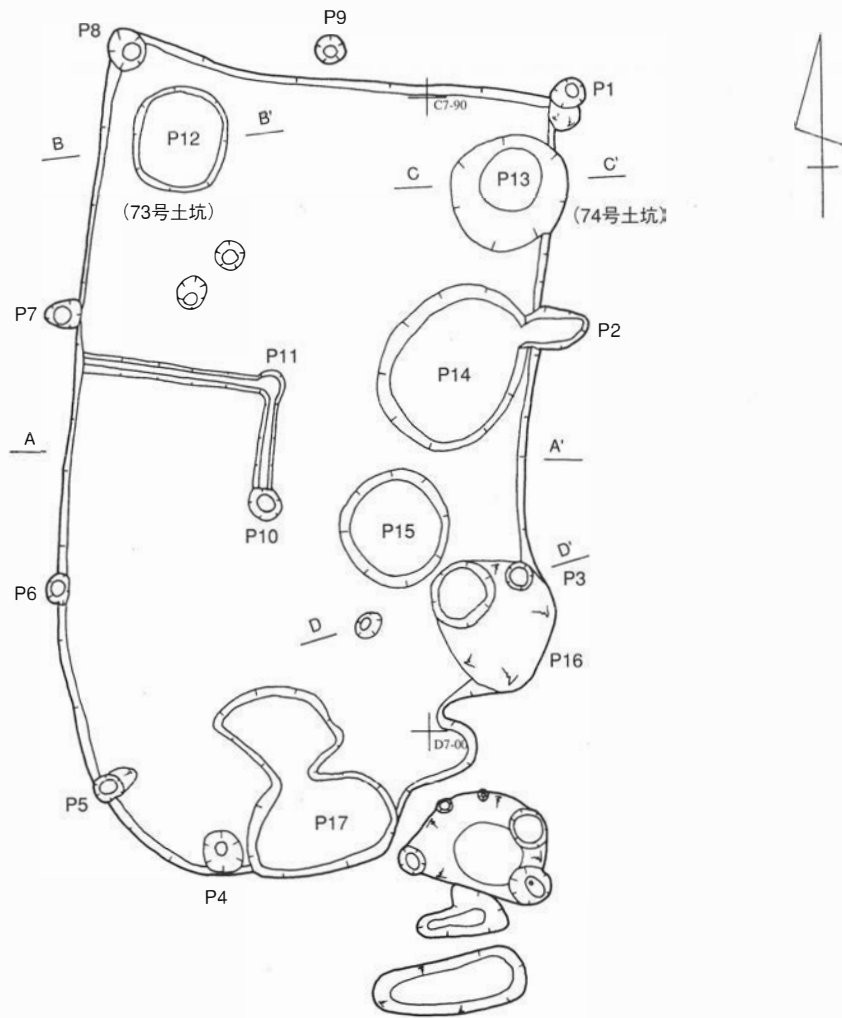
調査区外



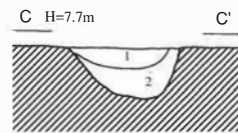
- 1 黒褐色土 黄褐色砂質土粒を含む。住居跡より新しい。
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土 焼土粒を含む。炉の直上層。
- ※ 住居跡の西端は道路脇の溝に攪乱を受けている。



図17 3号住居跡

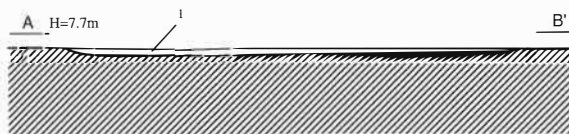


1 暗褐色土

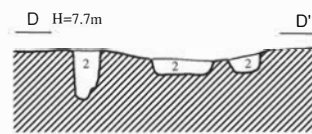


1 暗褐色土

2 黑褐色土



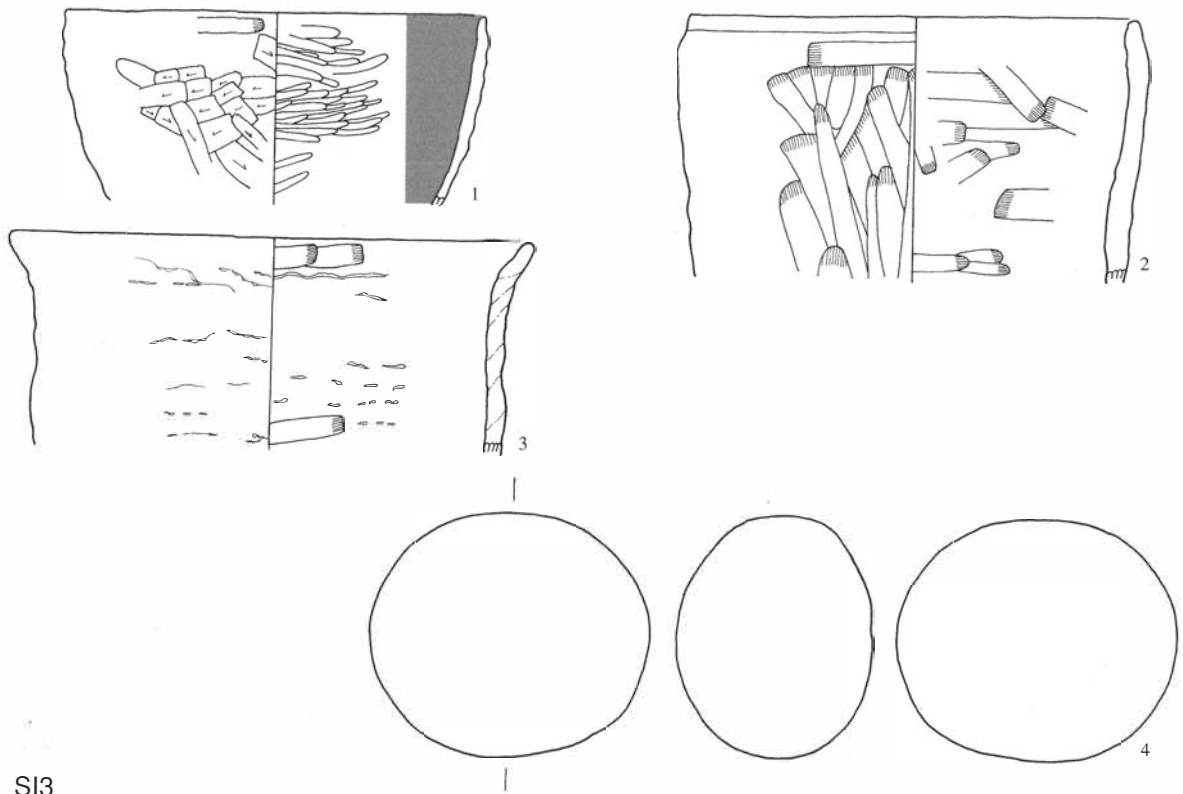
1 暗褐色土



2 暗褐色土



图18 4号住居跡 (1号小鍛冶関連遺構)



SI3

SI4

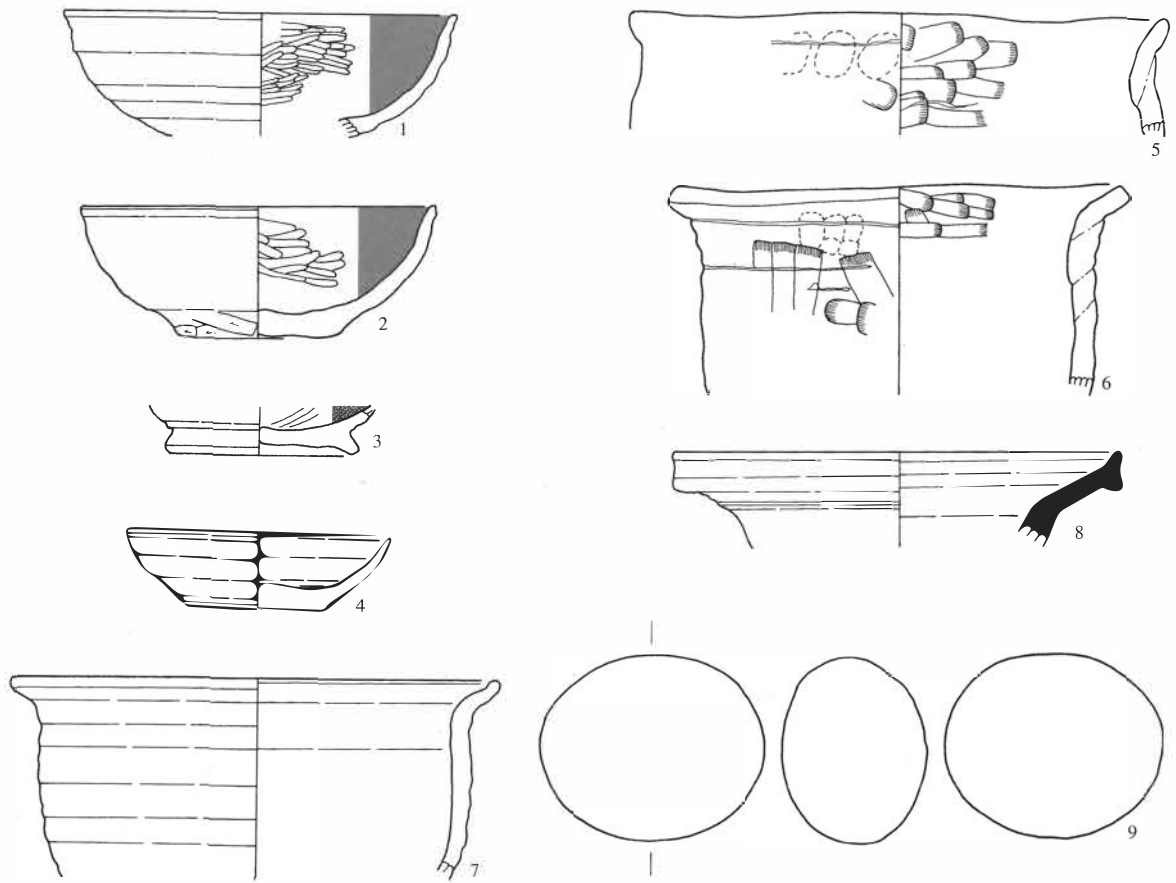


图19 3号住居跡・4号住居跡出土遺物

0 1/3 10cm

第3節 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (SB1) 図20

位置 C7-06・16グリッド **主軸方位** N-12° - Eを示す建物である。**平面形式** 東西2間×南北2間の側柱建物である。**規模** ややいびつなため、各コーナーの柱の当りで計測すると、東辺2.8m・西辺3.0m×南辺2.8m・北辺2.9mである。柱間寸法は、南辺が1.4m等間、北辺が西から1.4m・1.5m、東辺が北から1.2m・1.5m、西辺が北から1.8m・1.2mである。**柱穴** 8個を検出した。掘方は円形・楕円形を呈する。**出土遺物** なし。**備考** 2号掘立柱建物跡と並列している。

表5 SB1柱穴計測値 (m)

	長軸	短軸	深さ
P1	0.3	0.3	0.5
P2	0.6	0.4	0.5
P3	0.4	0.4	0.5
P4	0.4	0.4	0.3
P5	0.5	0.4	0.5
P6	0.4	0.4	0.5
P7	0.4	0.4	0.6
P8	0.4	0.2	0.1

2号掘立柱建物跡 (SB2) 図20

位置 C7-07・17グリッド **主軸方位** N-8° - Eを示す建物である。**平面形式** 東西2間×南北2間の側柱建物である。**規模** ややいびつなため、各コーナーの柱の当りで計測すると、東辺2.7m・西辺3.0m×南辺2.7m・北辺2.7mである。柱間寸法は、南辺が西から1.3m・1.4m、北辺が西から1.3m・1.4m、東辺が北から1.4m・1.3m、西辺が北から1.5m・1.5mである。**柱穴** 8個を検出した。掘方は円形・楕円形を呈する。**出土遺物** P4から土師器杯・甕の細片。**備考** 1号掘立柱建物跡と並列している。

表6 SB2柱穴計測値 (m)

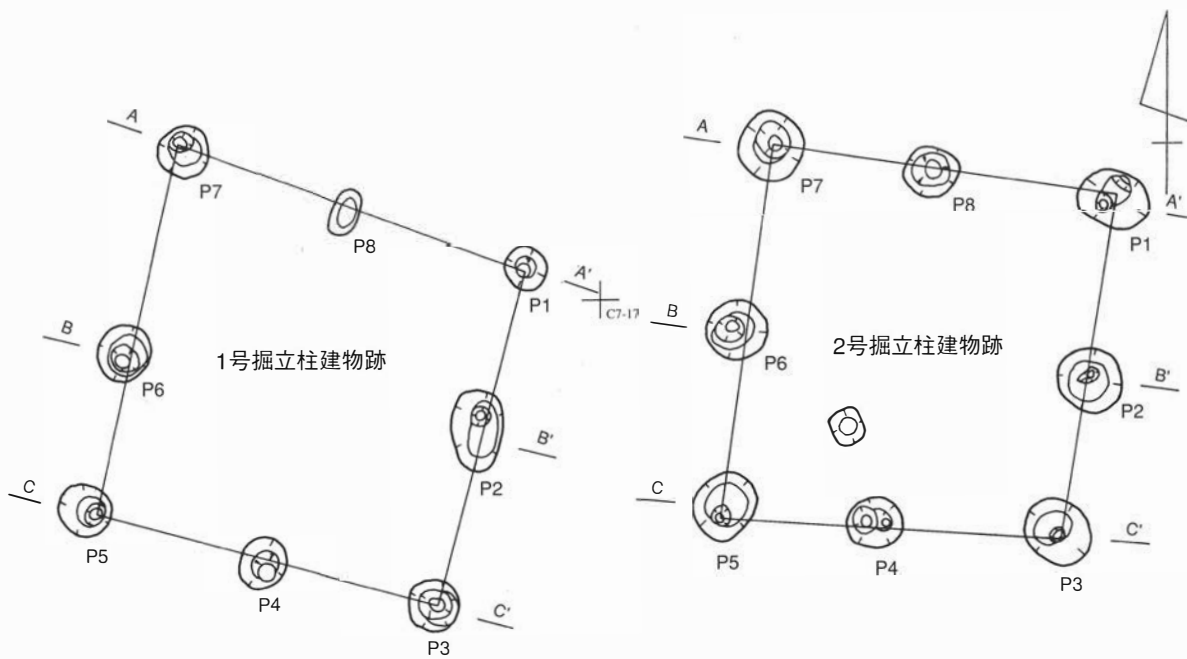
	長軸	短軸	深さ
P1	0.5	0.4	0.4
P2	0.5	0.5	0.4
P3	0.6	0.5	0.5
P4	0.5	0.4	0.5
P5	0.5	0.4	0.9
P6	0.5	0.5	0.4
P7	0.5	0.5	0.4
P8	0.4	0.4	0.4

3号掘立柱建物跡 (SB3) 図21

位置 C7-55・56・65・66グリッド。1号掘立柱建物跡の南18mに位置する。**主軸方位** 西側桁行柱列で計測してN-6° - Eを示す南北棟建物である。**平面形式** 桁行3間×梁行3間(北側では2間)の側柱建物である。**規模** 桁行総長6.6m、梁行総長4.6mである。柱間寸法は、東側桁行が北から2.3m+2.4m+1.9m、西側桁行が北から2.2m+2.3m+2.1m、南側梁行は西から1.6m+1.4m+1.6m、北側梁行は西から3.0m+1.6mである。**柱穴** 11個を確認した。掘方は円形または楕円形を呈する。P4は重複する浅いピットに上部を削られている。P11も重複するピットに一部切られている。**出土遺物** なし。

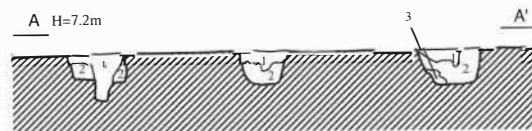
表7 SB3柱穴計測値 (m)

	長軸	短軸	深さ
P1	0.5	0.5	0.5
P2	0.5	0.4	0.8
P3	0.4	0.4	0.4
P4	0.4	0.4	0.6
P5	0.4	0.4	0.2
P6	0.5	0.5	0.6
P7	0.6	0.5	0.7
P8	0.5	0.5	0.7
P9	0.5	0.5	0.6
P10	0.7	0.7	0.6
P11	0.7	0.6	0.3



1号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡



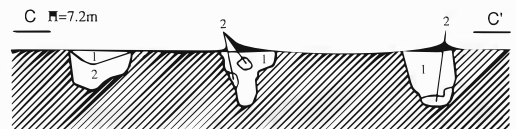
- 1 黒色土 黄褐色砂質土粒を含む。
- 2 暗黄褐色砂質土 黒色土と黄褐色砂質土の混合土。

- 1 黒色土 黄褐色砂質土粒を含む。
- 2 暗黄褐色砂質土 黒色土と黄褐色砂質土の混合土。



- 1 黒色土 黄褐色砂質土粒を含む。
- 2 暗黄褐色砂質土 黒色土と黄褐色砂質土の混合土。

- 1 黒色土 黄褐色砂質土粒を含む。
- 2 暗黄褐色砂質土 黒色土と黄褐色砂質土の混合土。



- 1 黒色土 黄褐色砂質土粒を含む。

- 1 黒色土 黄褐色砂質土粒を含む。
- 2 暗黄褐色砂質土 黒色土と黄褐色砂質土の混合土。



図20 1号掘立柱建物跡・2号掘立柱建物跡

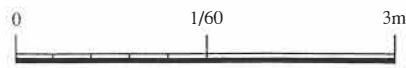
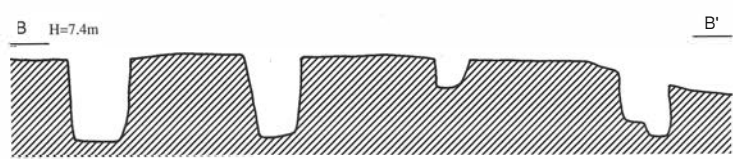
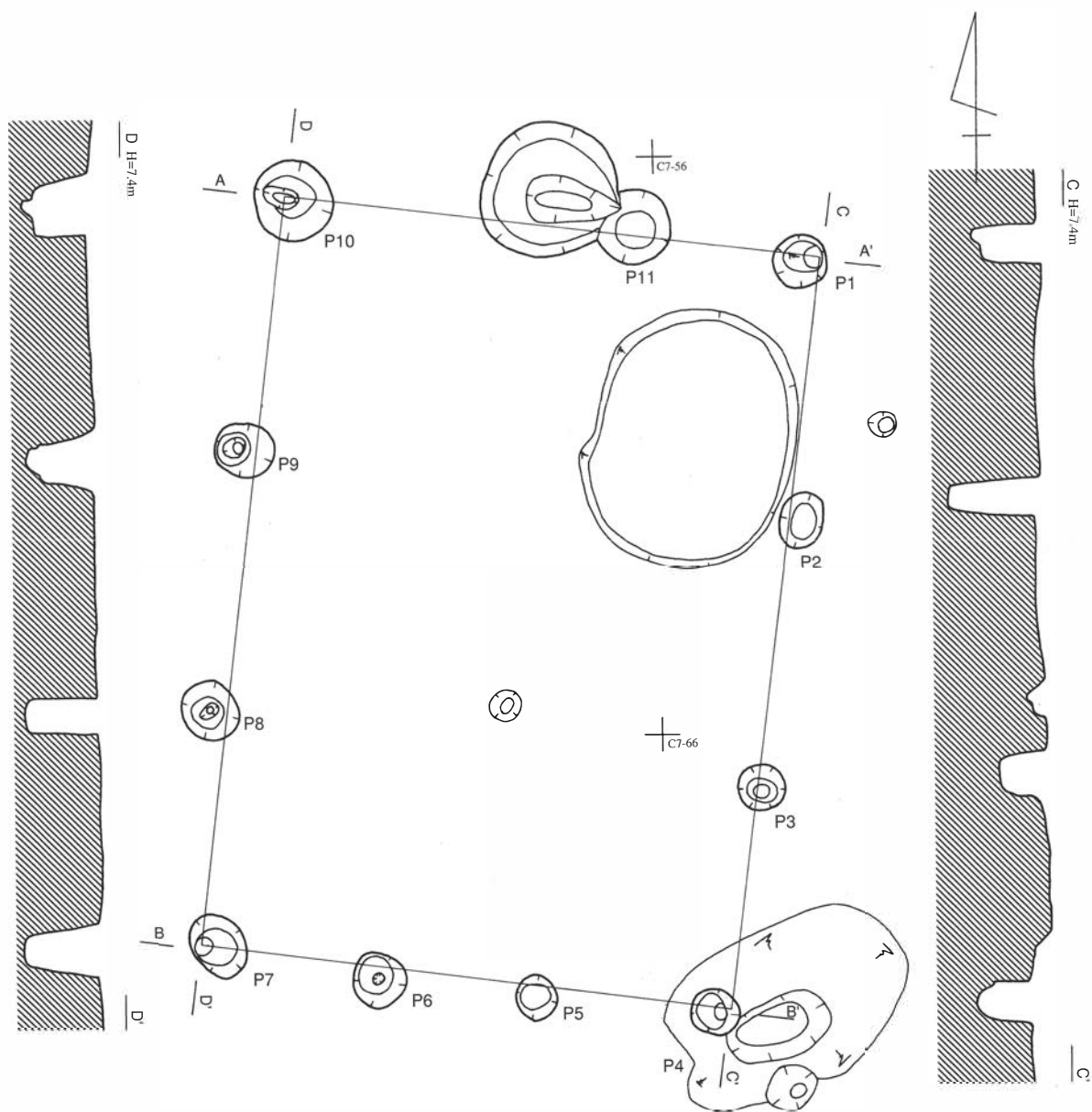


图21 3号掘立柱建物跡

第4節 溝跡・ピット群・土坑

(1) 溝 跡

1号溝跡 (SD1) 図22

位置 調査区北端のA7-80グリッドからB6-84グリッドに延びる。平成7年度の試掘調査で北側半分を検出し、平成8年度の本調査で残りの南半分を検出した。北側は調査区外に続いており、南側は2号溝跡に接続している。**主軸方位** N-20°-Eを示す南北溝。**規模・形態** 幅約0.8m・深さ0.3m・検出した長さ36m。断面形は、底面幅が狭い逆台形である。**出土遺物** なし **備考** 2号溝跡と同時期に機能していたと考えられる。

2号溝跡 (SD2) 図23~31

位置 本調査範囲ではB6-70グリッドからD6-60グリッドに延びる。平成8年度の試掘調査範囲ではB5-56グリッドからA4-90グリッドに延びる。**主軸方位** 本調査範囲(農道の東側)ではN-9°-Wを示し南北方向に延びるが、本調査範囲の北端から西へ曲がり、平成8年度試掘調査範囲の川原地区ではN-60°-Wを示し東西方向に延びる。**規模・形態** 幅2.0~7.0m・深さ0.4~0.8m・本調査部分と試掘調査部分を合わせた長さ220m。断面形は底面幅が広い逆台形。溝の底面および側面に大小のピットが掘り込まれているが、大きな土坑は4基で(P1~4)、そのうちP1は溝の検出面から深さ2.5mを測る井戸である。**出土遺物** 小鍛冶関連遺構に近いD区・E区部分(D6グリッド)では、溝の底面から多量の遺物が出土しており、土師器・須恵器・羽口・鉄滓・鉄床石などがテン箱(容量55×39×13cm)に20箱を数える。**備考** 平成8年度の川原地区(農道の西側)の試掘調査で検出した部分は、盛土して畑にすることとなり、本調査は行なわなかった。2号溝跡は、西から東へ舌状に延びる東西約300m・南北約100mの微高地の北辺を通り、途中から南へ曲がって、微高地南辺まで続いており、微高地を東西に分ける大きな区画溝であったと考えられる。

表8 SD2ピット計測値(m)

	長軸	短軸	深さ	備考
P1	2.0	1.7	2.5	井戸跡
P2	3.1	2.5	0.9	
P3	3.2	2.7	0.2	
P4	6.2	2.3	0.3	

3号溝跡 (SD3) 図32・33

位置 C6-60グリッドからC6-65に延びている。**主軸方位** N-90°-Eを示す東西溝である。**規模・形態** 直径1.0~2.0m・深さ0.1~0.6mの円形または楕円形のピットが十数個変則的に連続して、溝状を呈している。各ピットの断面形は、底面幅が広い逆台形である。溝の西側はピットが途切れて終わるが、東側は2号溝跡に切られて終わっている。**出土遺物** 古墳時代後期の土師器杯・甕。

4号溝跡 (SD4) 図34~38

位置 1号ピット群(PG1)のあるC6-42グリッドからD6-05グリッドに延び、2号溝跡(SD2)まで続く。**主軸方位** N-29°-Wを示す南北溝。**規模・形態** 幅0.5~0.7m・深さ0.1m。断面形は、底面幅が広い逆台形である。ピット群1(PG1)の南端のピットを起点に、3号溝跡を切って、2号溝跡に接続している。



図22 1号溝跡

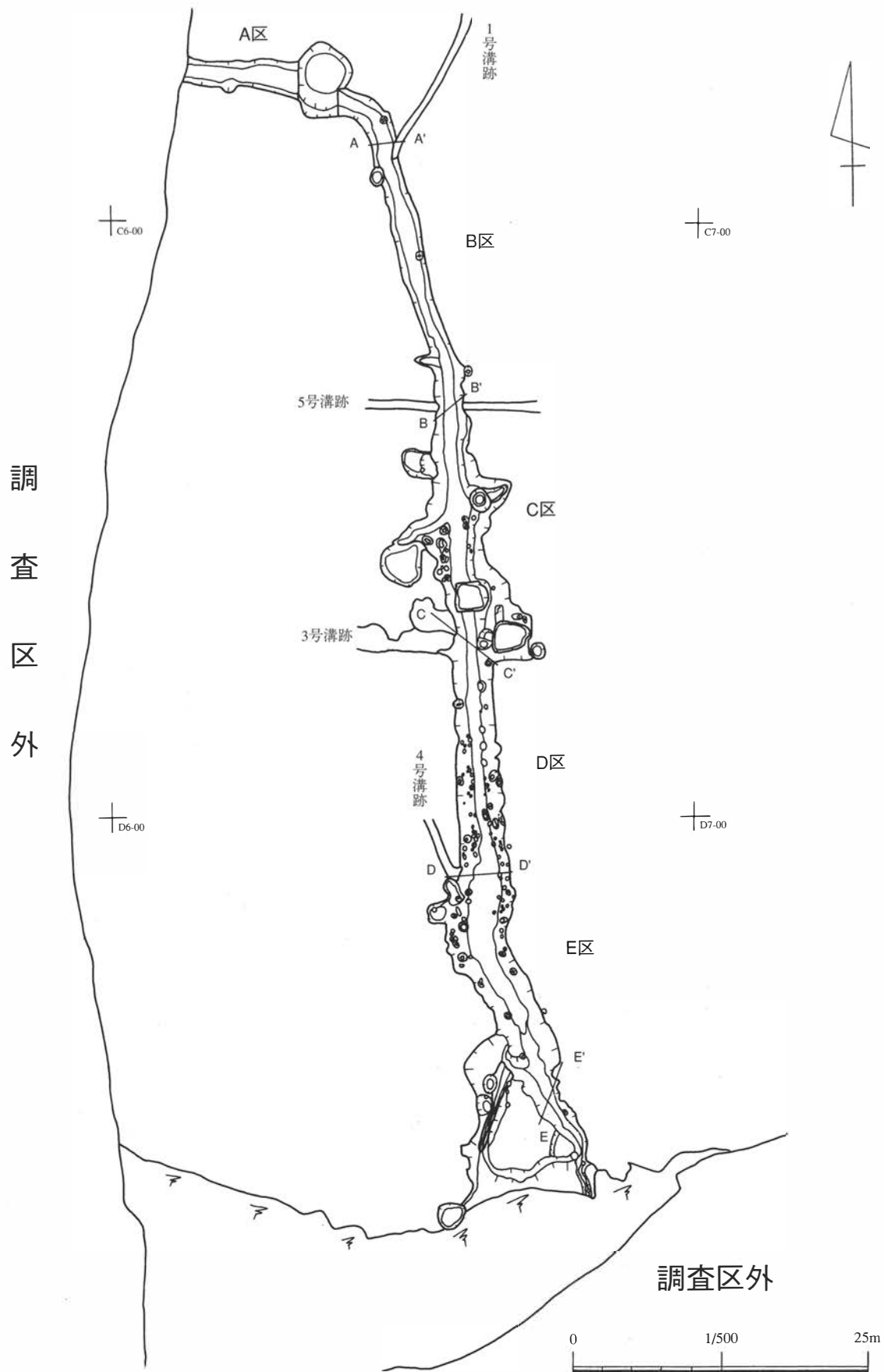
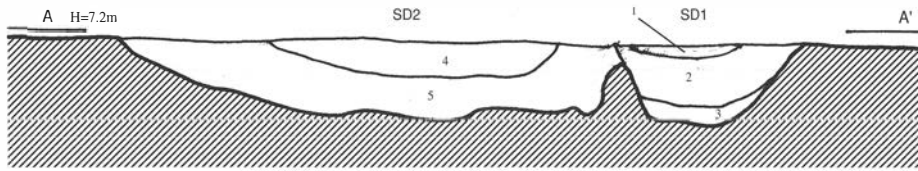
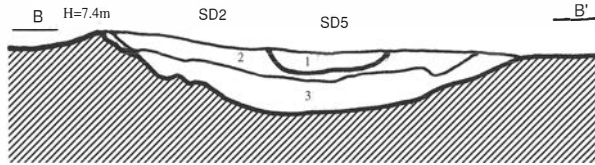


図23 2号沟迹 (本調査範囲)



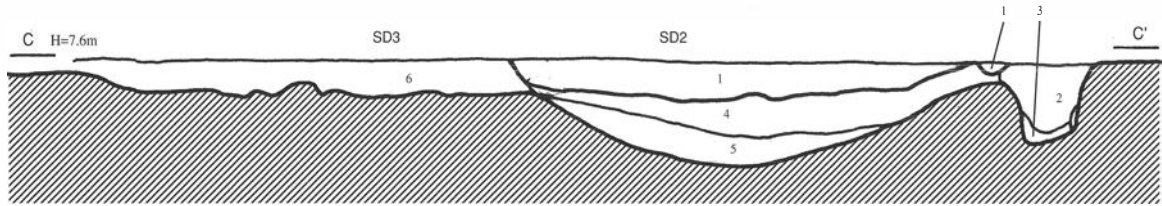
A-A'

- SD 2 4 黒色土 SD 1 1 φ約0.2cmの黄褐色砂質粒を多く含む。
 5 黒褐色土 2 φ約0.2~5cmの黄褐色砂質粒を多く含む。
 3 1・2より粘性やや高い。



B-B'

- SD 2 2 黒色土 SD 5 1 黒褐色土
 (旧) 3 黒褐色土 (新) → (新)



C-C'

- SD 3 6 暗褐色土 SD 2 1 暗褐色土
 (旧) → (新) 2 黒色土
 3 暗黄褐色土
 4 黒色土 黄褐色砂質土粒を含む。
 5 暗褐色土 やや砂質。

D H=7.6m SD4 SD2

D-D'

- SD 2 2 暗褐色土 SD 4 1 暗褐色土
 (旧) 3 黒褐色土 → (新)
 4 黒色土
 5 褐色砂質土 土器片を多量に含む。
 6 暗黄褐色土 黄褐色砂質土と褐色砂質土の混合土。
 7 褐色砂質土

E H=7.4m SD2 E'

E-E'

- SD 2 1 黒褐色土 黄褐色砂質土粒を多く含む
 2 暗褐色土
 3 黄褐色砂質土
 4 暗褐色土
 5 黒褐色土 褐色土粒を少量含む。
 6 暗灰褐色土 暗黄褐色砂質土を多く含む。

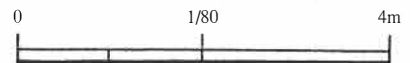
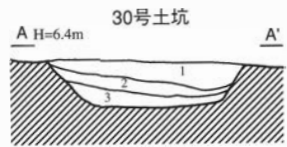
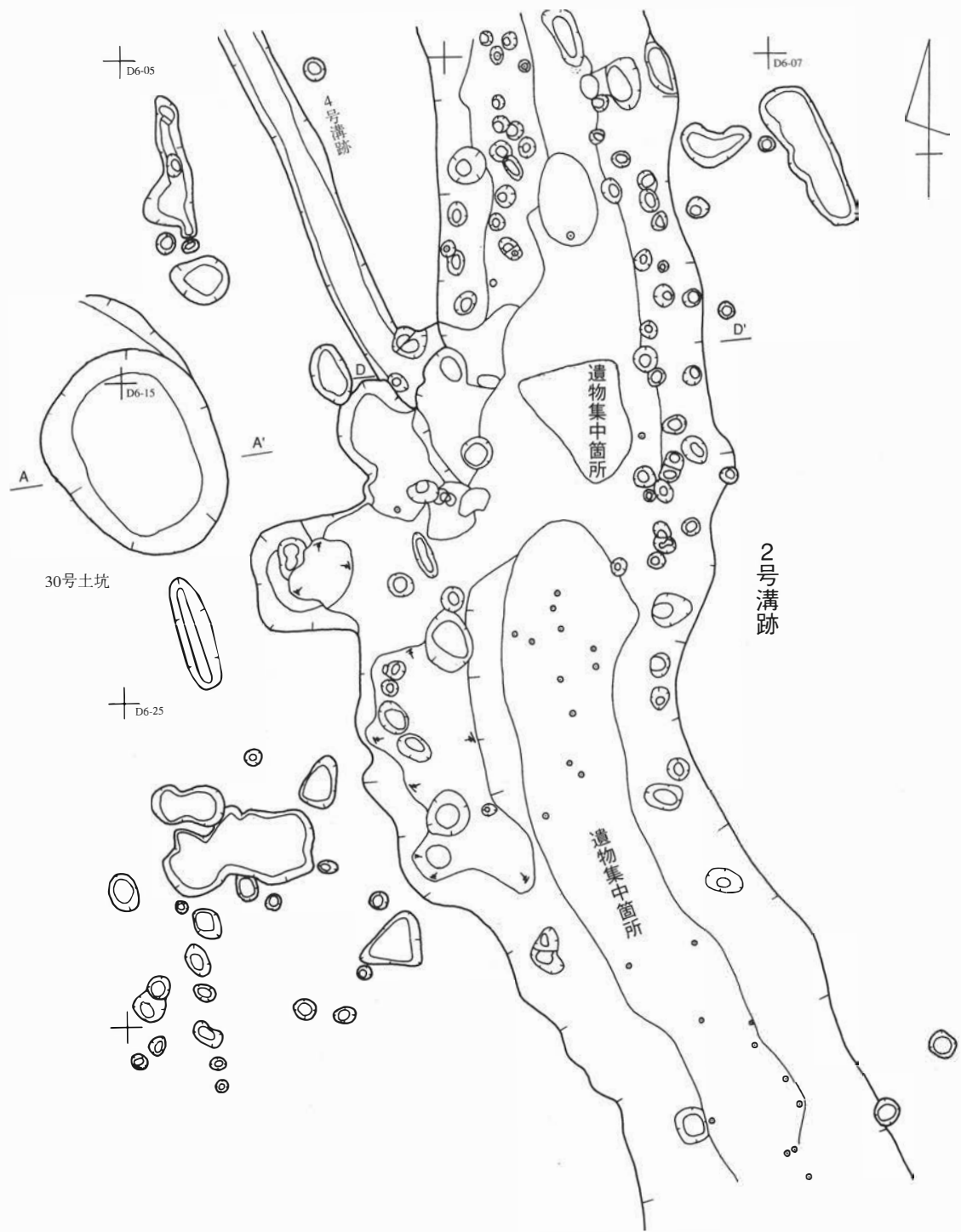


図24 2号溝跡 土層断面図



- 1 黄褐色砂質土 暗褐色土を多く含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色砂質土を少量含む。
- 3 黒褐色土 やや粘性あり。

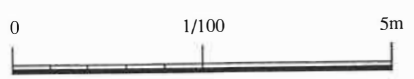


図25 2号溝跡（遺物集中箇所）

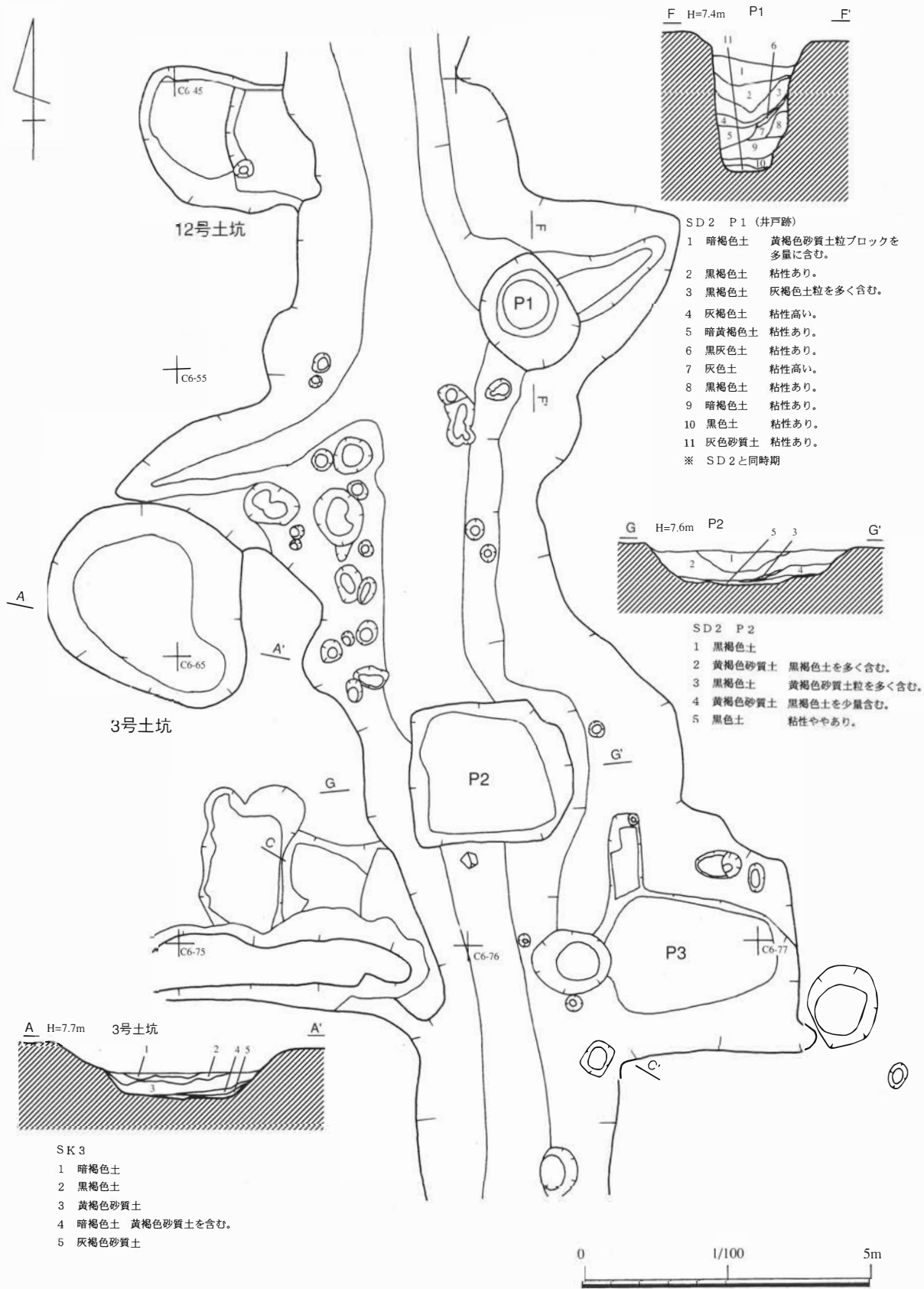


図26 2号溝跡 (中央部分)

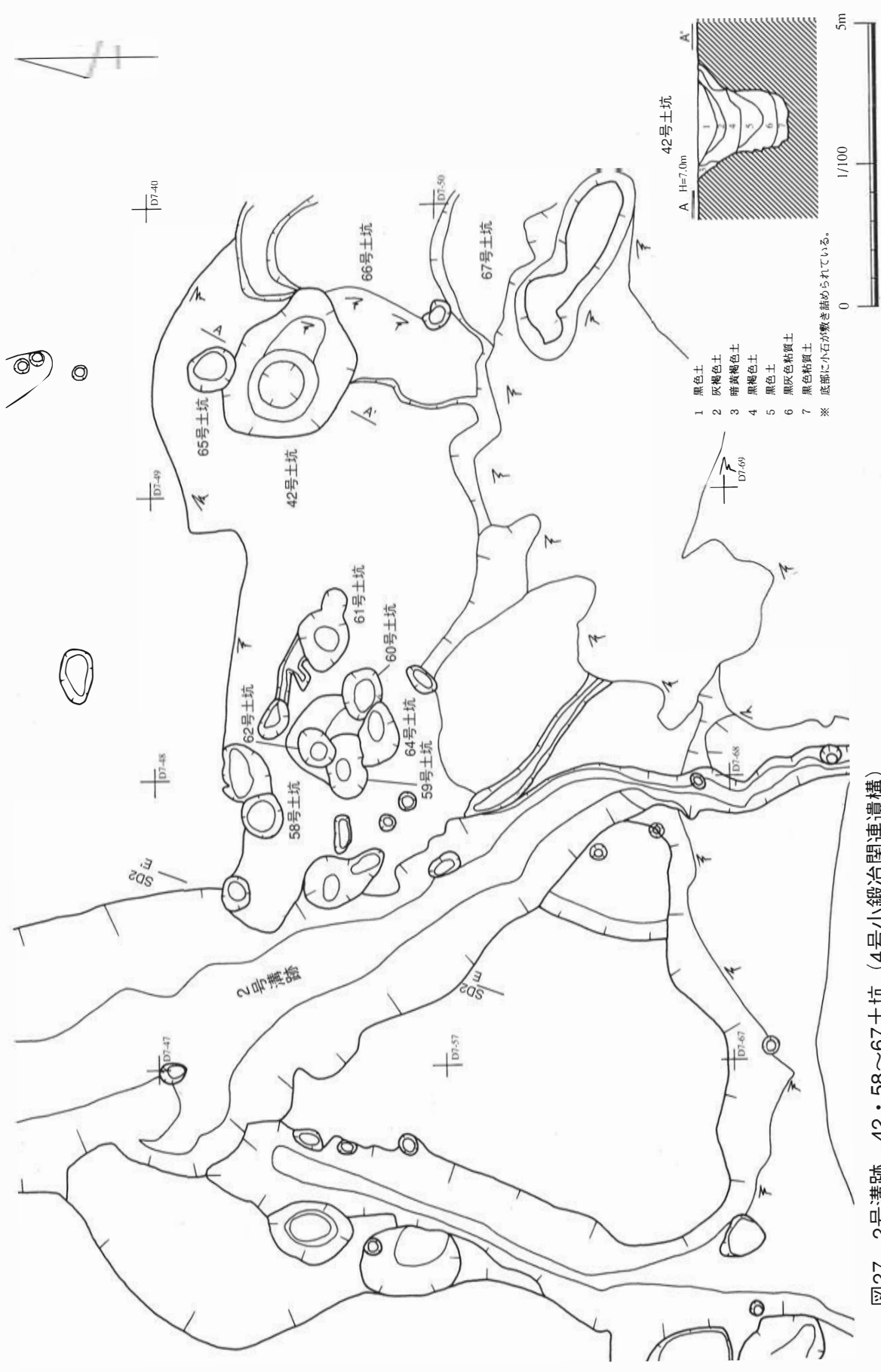


图27 2号溝跡、42・58～67土坑（4号小鍛冶関連遺構）

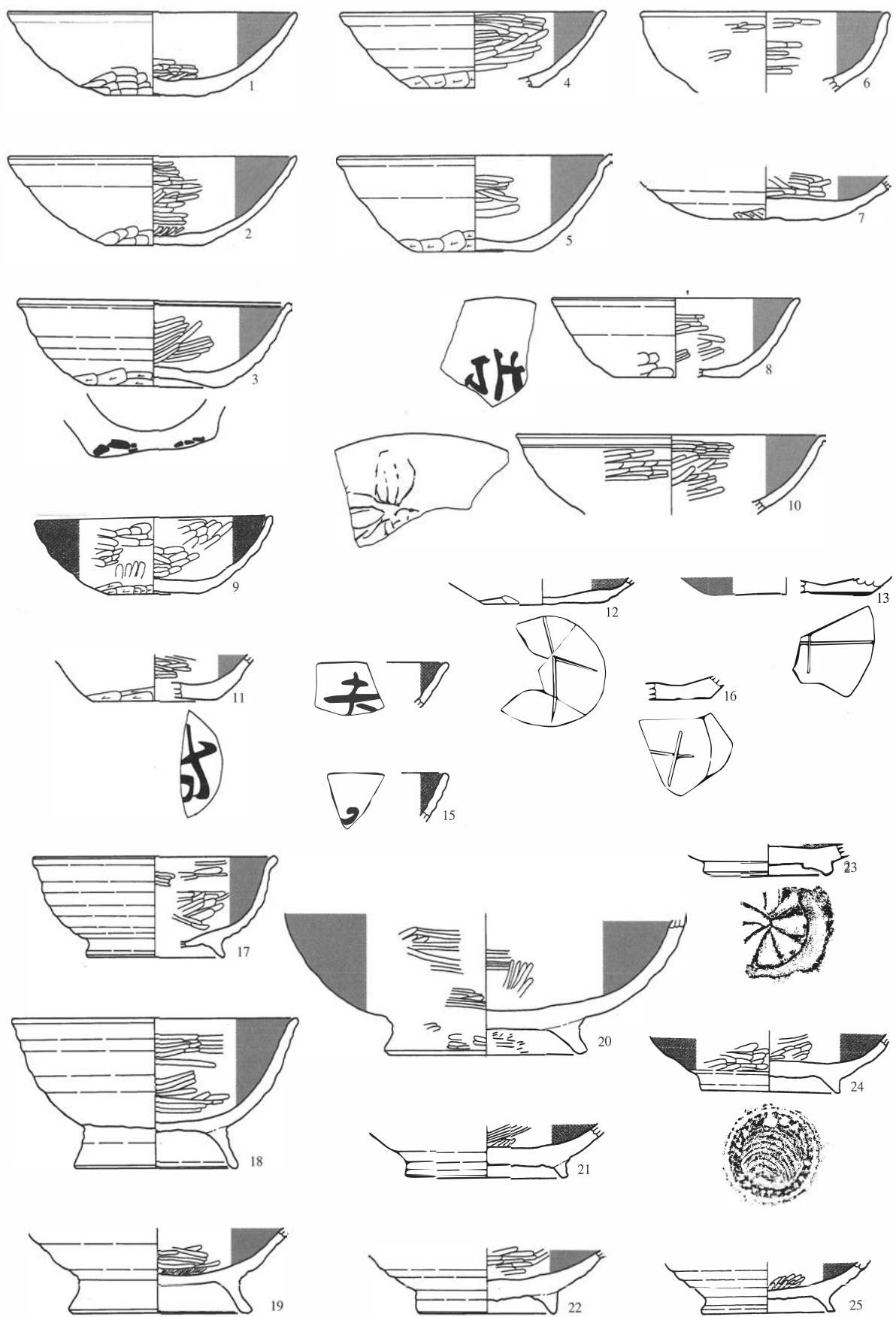


图28 2号沟迹出土遗物 (1)

0 1/3 10cm

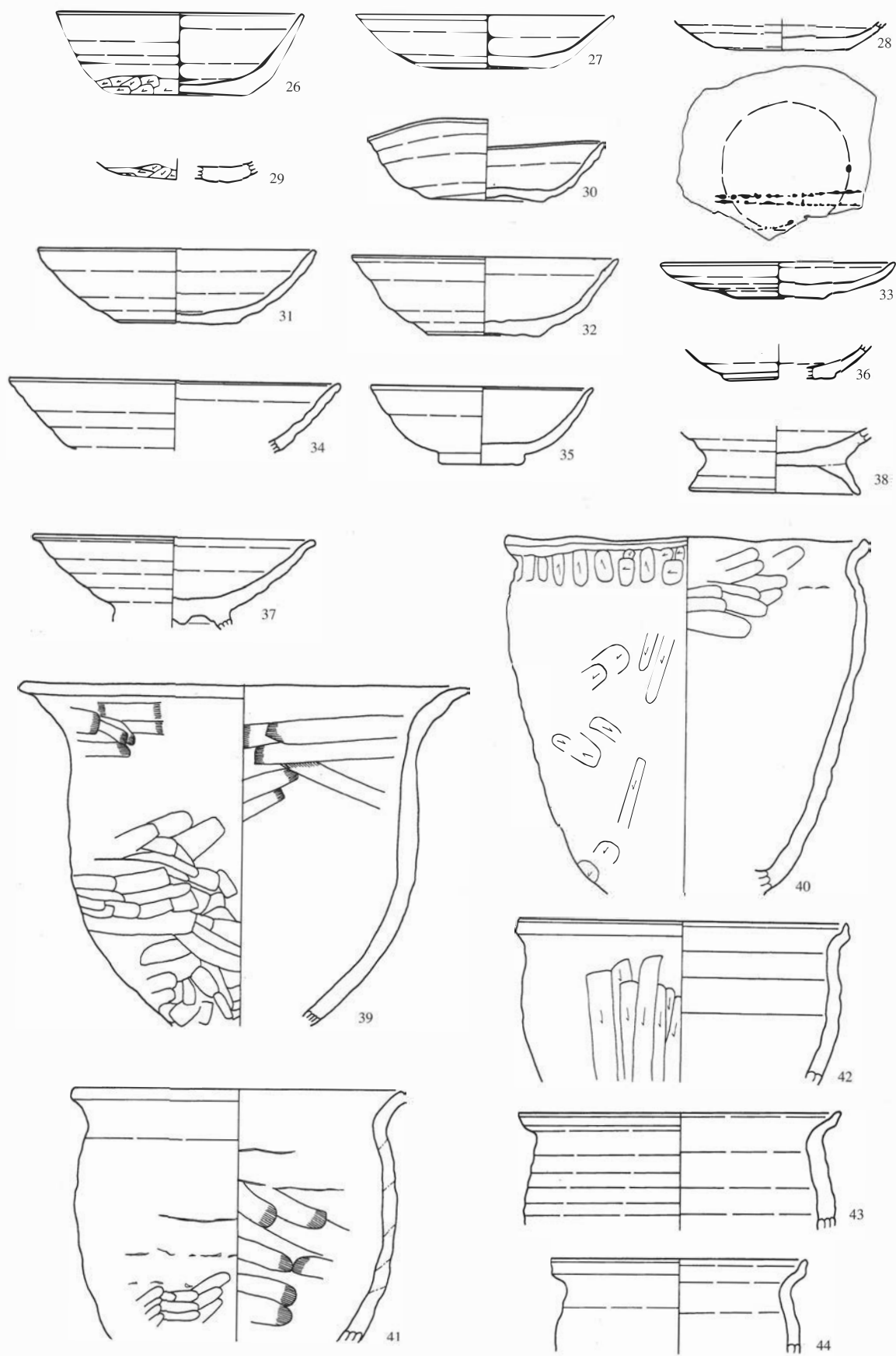


图29 2号沟迹出土遗物 (2)

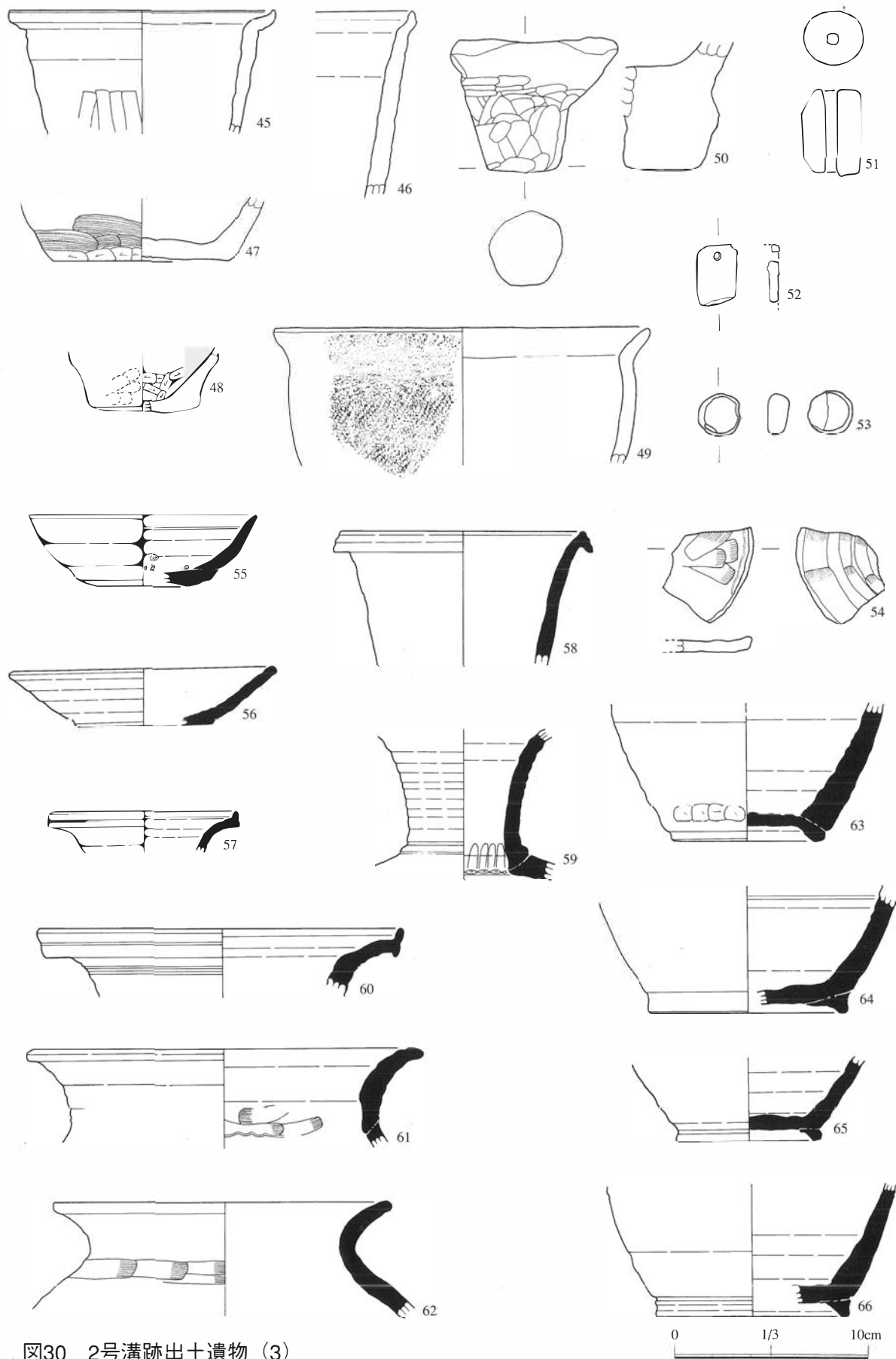


图30 2号沟迹出土遗物(3)

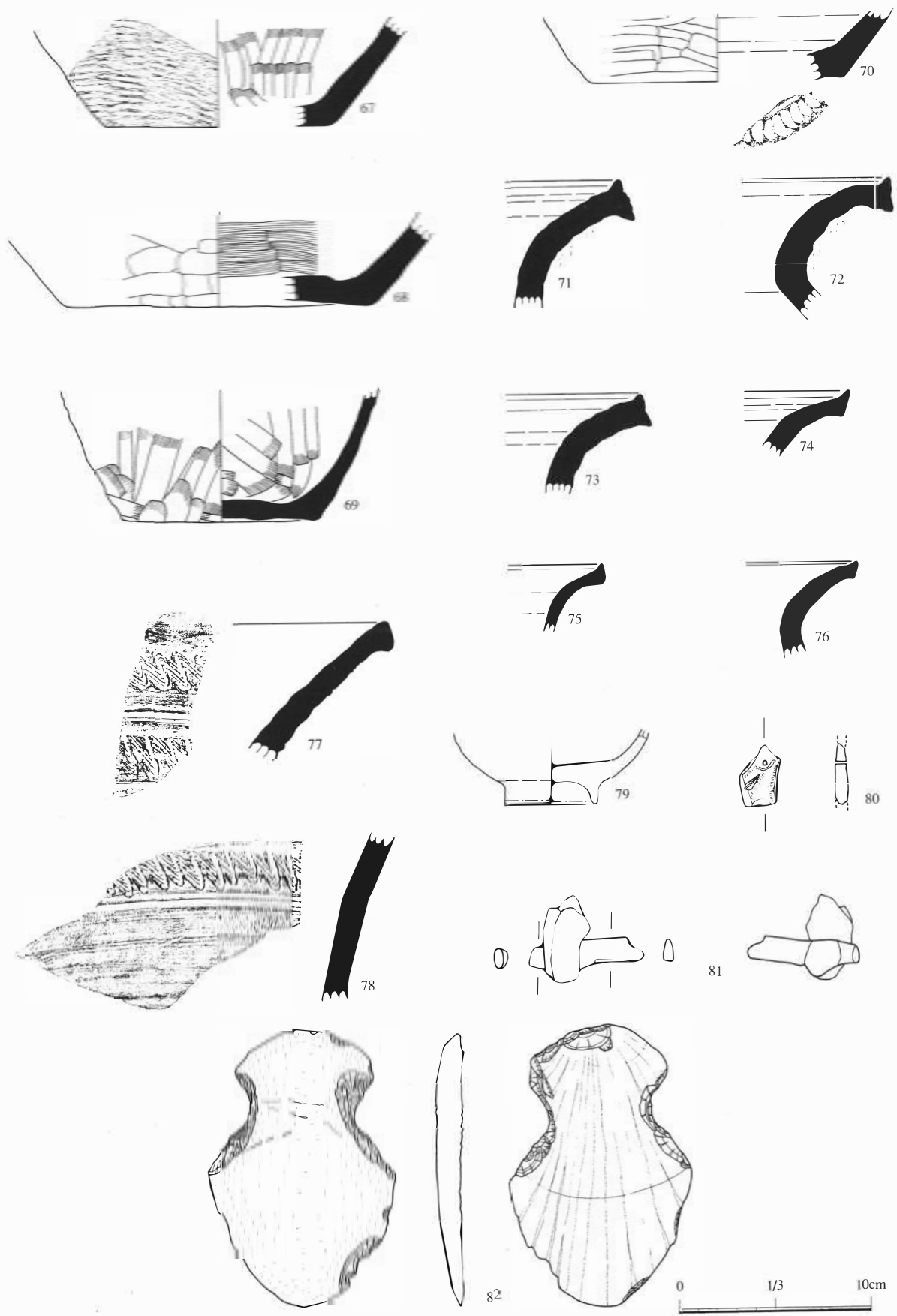
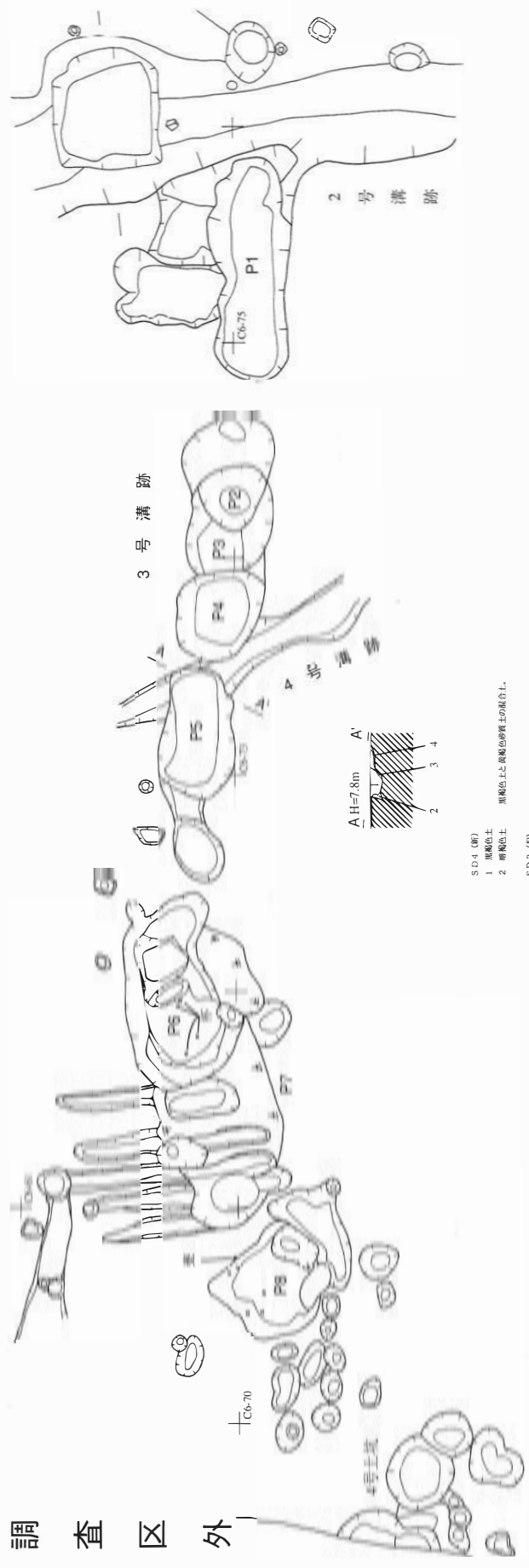


图31 2号沟迹出土遗物 (4)



調査区外

図32 3号溝跡

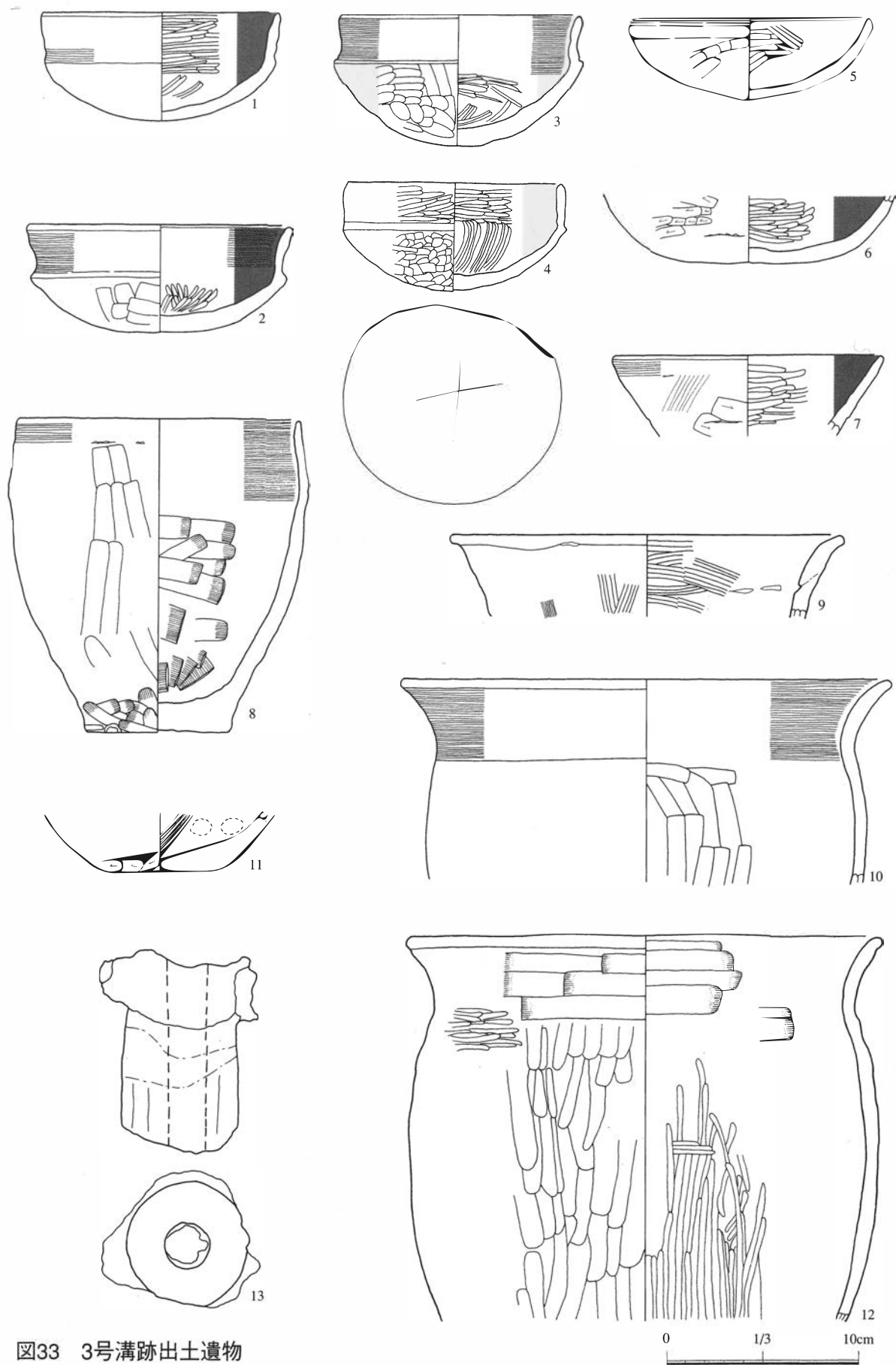


图33 3号沟迹出土遗物

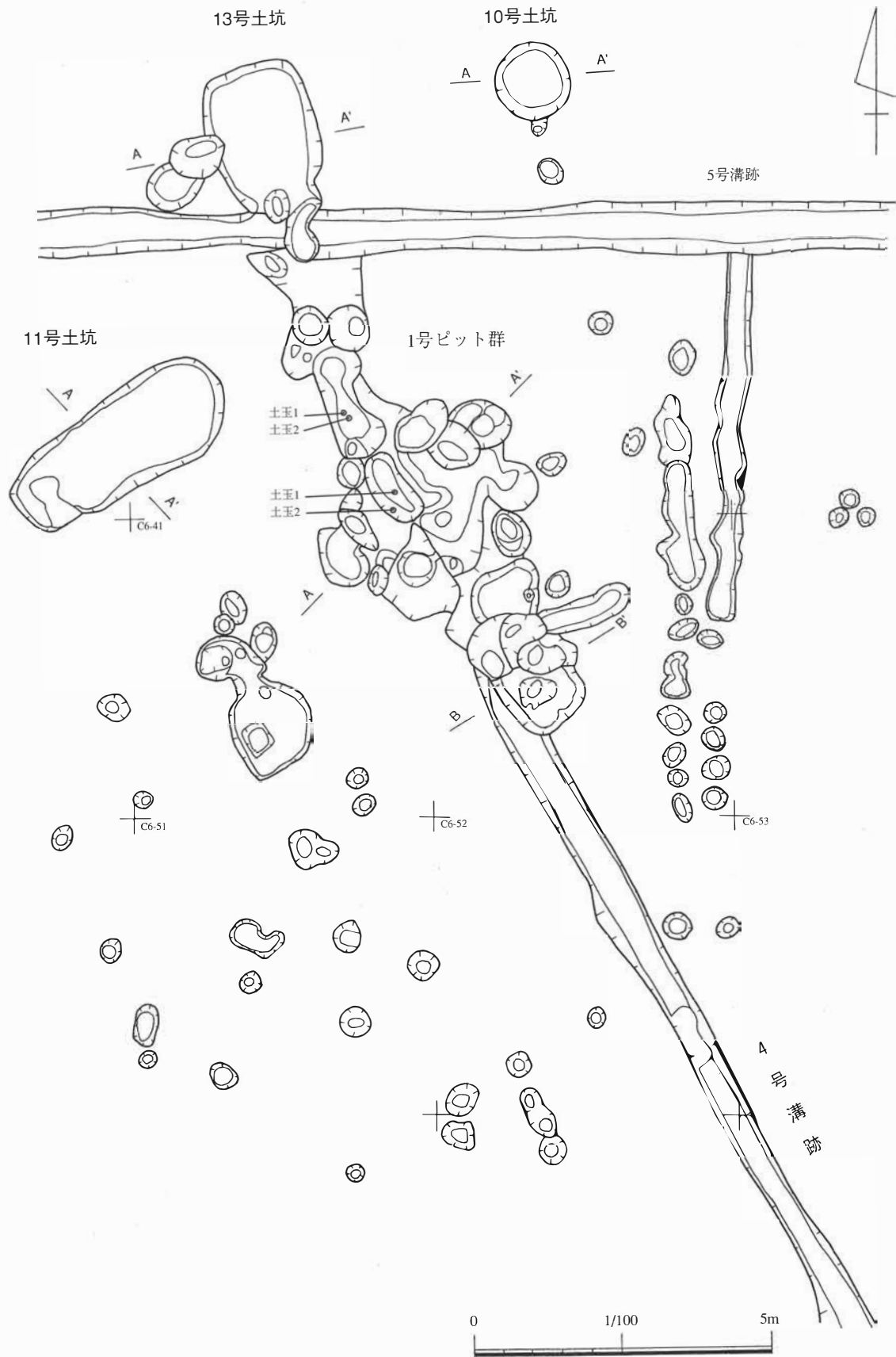


図34 4・5号溝跡、1号ピット群（2号小鍛冶関連遺構）、10・11・13号土坑

5号溝跡 (SD5) 図 34

位置 C6-20 グリッドからC8-41 グリッドに延びている。**主軸方位** 西側半分の主軸方位はN-90°-Eを示し、ほぼ中央で南にふれてN-102°-Eを示す東西溝。**規模・形態** 幅0.7m・深さ0.2m・調査区での長さ109m。断面形は、底面幅が広い逆台形。**備考** 現代の畑の区割り溝。

6号溝跡 (SD6) 図 36・37

位置 本調査区西端近くのC6-90 グリッドからC6-92 グリッドに延びる。**主軸方位** N-78°-Eを示す東西溝。**規模・形態** 幅0.3m、深さ0.1m、長さ10m。断面形は、底面幅が広い逆台形。近代陶磁器が多数出土した24号土坑に接続する。**備考** 覆土はしまりが弱い。この付近には近代に民家があったために、それに伴う多数の小ピットがあるが、6号溝も覆土の状態などから、近代の溝と考えられる。

7号溝跡 (SD7) 図 40

位置 D6-00 グリッドからD6-01 グリッドに延びている。**主軸方位** N-78°-Eを示す南北溝。**規模・形態** 幅0.7~3.6m・深さ0.05~0.2m・長さ32m。断面形は底面幅が広い逆台形。

8号溝跡 (SD8) 図 41

位置 C6-00 グリッドからC6-34 グリッドに延びている。**主軸方位** N-100°-Eを示すが、9号土坑に重なる所から直角に曲がって南へ延びる。**規模・形態** 幅0.4~0.9m・深さ0.2m・長さ26m。断面形は浅いU字形。

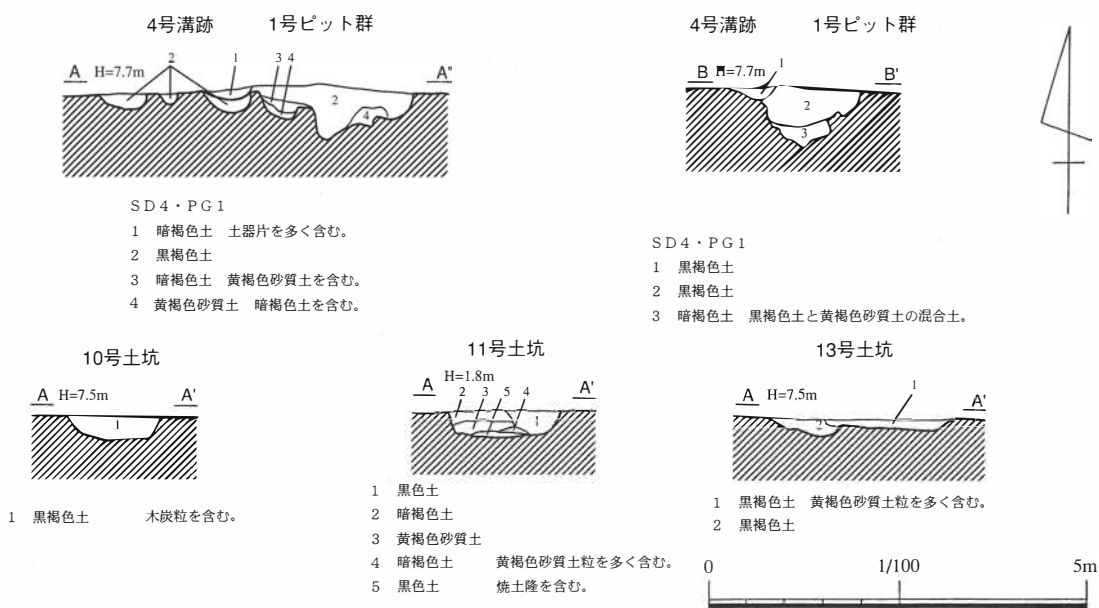


図35 4号溝跡、1号ピット群（2号小鍛冶関連遺構）、10・11・13号土坑

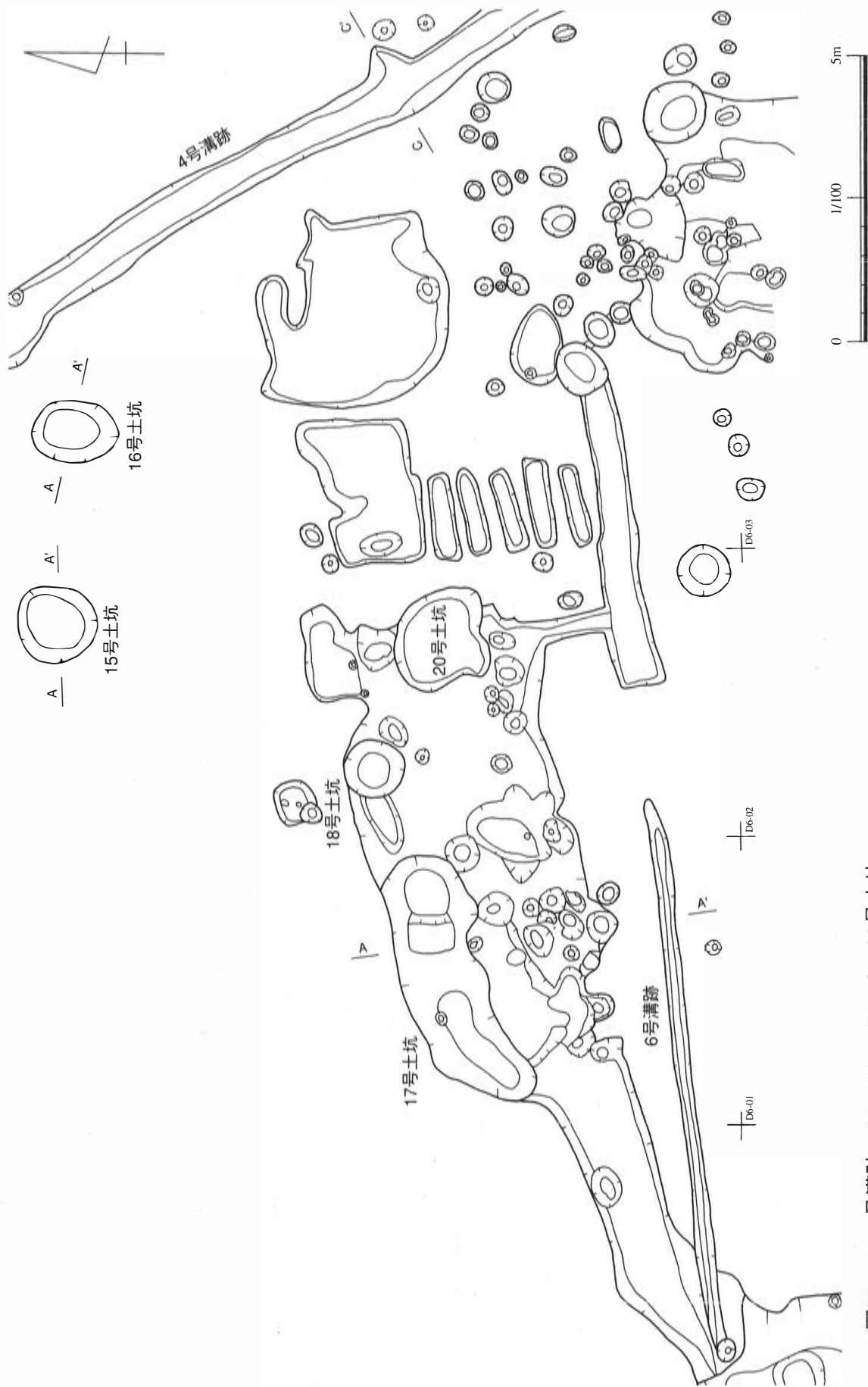


图36 4·6号沟迹、15·16·17·18·20号土坑

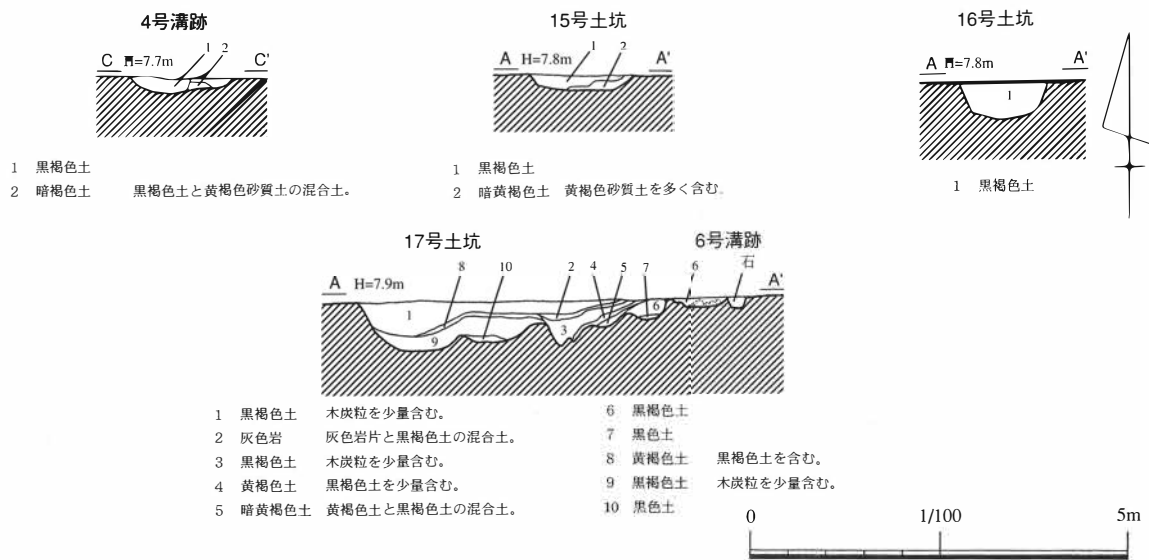


図37 4・6号溝跡、15・16・17号土坑土層断面図

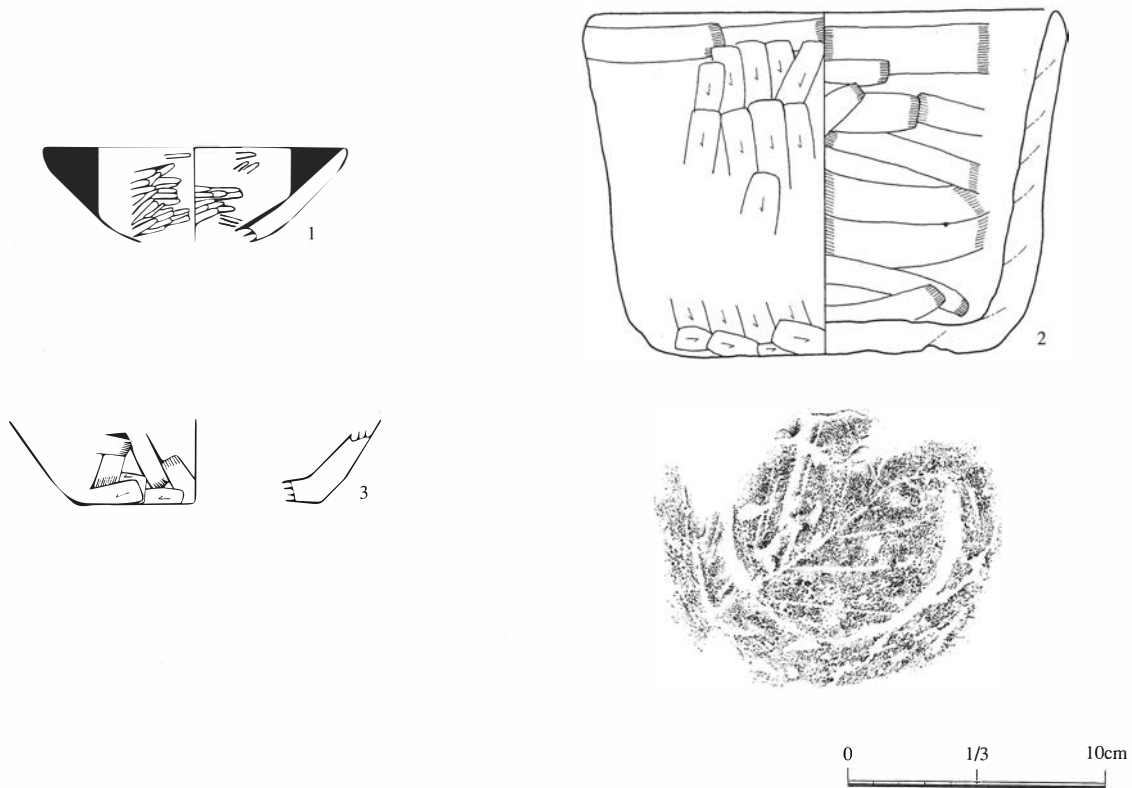


図38 4号溝跡出土遺物

(2) ピット群

荒井前遺跡全体に大小のピット（土坑）が分布しているが、以下に分布密度が高く関連性が高いと思われるピット群について説明する。なお、位置の説明で〇〇に囲まれたという表現は、単に検出した遺構のことで、同時期に存在した遺構を意味するものではない。

1号ピット群（PG1） 図34・42・43

位置 2号溝跡と3号溝跡・5号溝跡に囲まれた、C5-30~35・40~45・50~55・60~65グリッドに位置する。**規模・形態** 約20m四方の中に直径約0.3~1.5m・深さ0.1~0.6mのピットが密集している。特に4号溝跡の北端と13号土坑の間には直径1m前後・深さ0.6m前後の不整形なピットが10数基重なり合って、幅4.0m・長さ8.5mの房状を呈している。また、房状のピット群の内面は鉄錆で酸化している。**出土遺物** 房状のピット群から、土師器甕・土錘・土鈴が出土している。**備考** 本ピット群は掘立柱建物跡のように規則的な配列を持たず、竪穴住居跡のように1つのまとまりを持った掘方も呈していない。しかし、房状のピット群からは小鍛冶に関連すると思われる鉄錆や小鍛冶の儀礼に使われた可能性が指摘されている土鈴が出土しており、大量の土師器・須恵器や羽口・鉄床石が出土した2号溝跡に接続する4号溝跡は、本ピット群と一連の機能を持った遺構と考えられる。また、これらの北の延長線上にある13号土坑と、房状ピット群の西隣に位置し焼土が堆積している11号土坑も、配列と形態から、一連の小鍛冶関連遺構と考えられる。

2号ピット群（PG2） 図43

位置 1号住居跡と3号掘立柱建物跡・5号溝跡に囲まれた、C7-32~34・40~44・50~54・60~64グリッドに位置する。**規模・形態** 約20m四方の中に直径約0.3~1.5m・深さ0.1~0.2mのピットが密集している。**備考** 時期・性格不明。

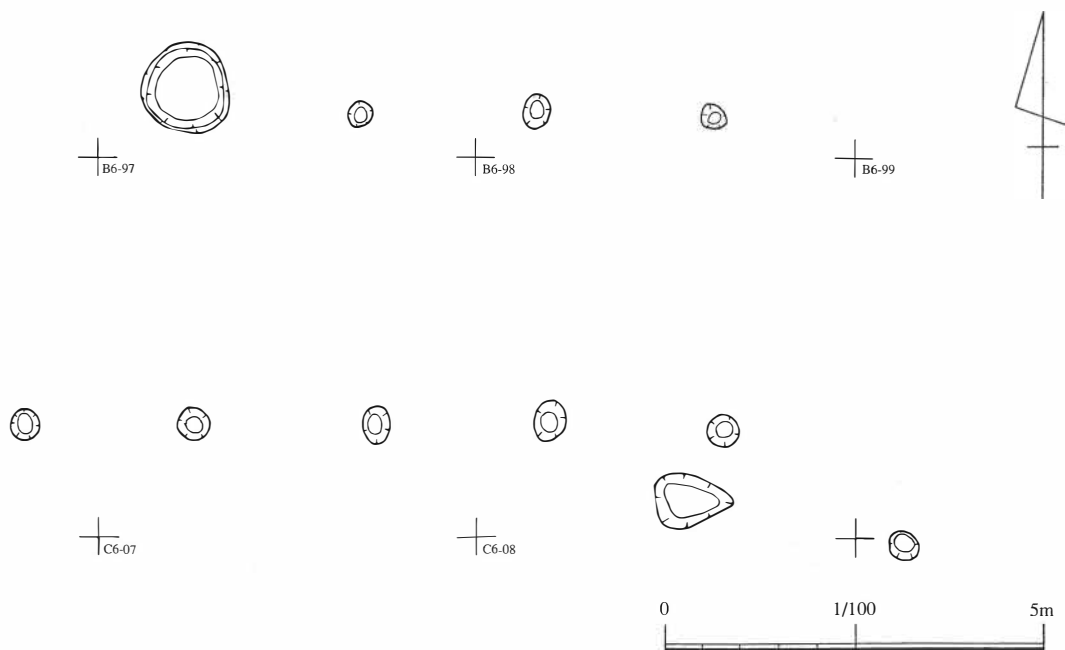


図39 5号ピット群

3号ピット群 (PG3) 図 43

位置 1号墳と2号墳・3号溝跡・2号溝跡に囲まれた、D6-24~25・34~35・44~45・54~55・グリッドに位置する。**規模・形態** 東西10m×南北20m四方の中に直径0.2m~1.5m・深さ0.2~0.6mのピットが密集している。特に、2号墳の東側では、直径約0.3m深さ約0.2mのピットからなる長さ4~7mのピット列が4列ほどあり、いずれも主軸方位はN-12°-E程で並列している。**出土遺物** この付近一帯から近代の陶磁器が出土している。**備考** 本ピット群は断片的ではあるが、規格性のあるピット列を伴っている。この付近は近代に屋敷があったところで、本ピット群の北西約10mには近代の石積みの井戸跡があり、南西約10mの微高地と低湿地の境目には近代の洗い場があることから、近代の屋敷跡に伴うピット群と考えられる。

4号ピット群 (PG4)

位置 2号溝跡が折れ曲がり西へ延びた部分と8号溝跡・2号溝跡に囲まれた、B6-81~82・91~92・C6-00~02グリッドに位置する。**規模・形態** 東西10m×南北15m四方の中に直径0.5m前後・深さ約0.3mのピットが密集している。**備考** 時期・性格不明。

5号ピット群 (PG5) 図 39

位置 1号溝跡と2号溝跡・5号溝跡に囲まれた、B6-87~88・96~98グリッドに位置する。**規模・形態** 直径0.3m・深さ約0.3mのピットが北側と南側に2列並行している。北側ピット列は5号土坑から東へ2.4m間隔で3個並んでいる。南側ピット列は北側ピット列の南4.0mにあり2.4m間隔で4個ならんでいる。**備考** 南北のピット列は、計画性をもって配置されているが、規模も小さく非常に簡素であることから、掘立小屋程度の施設の柱穴と考えられる。一方、北側柱列西端では南側柱列に対応するピットが2個足りないが、その位置に75号土坑がある。75号土坑は壁面から朽ちた桶のタガが出土している。

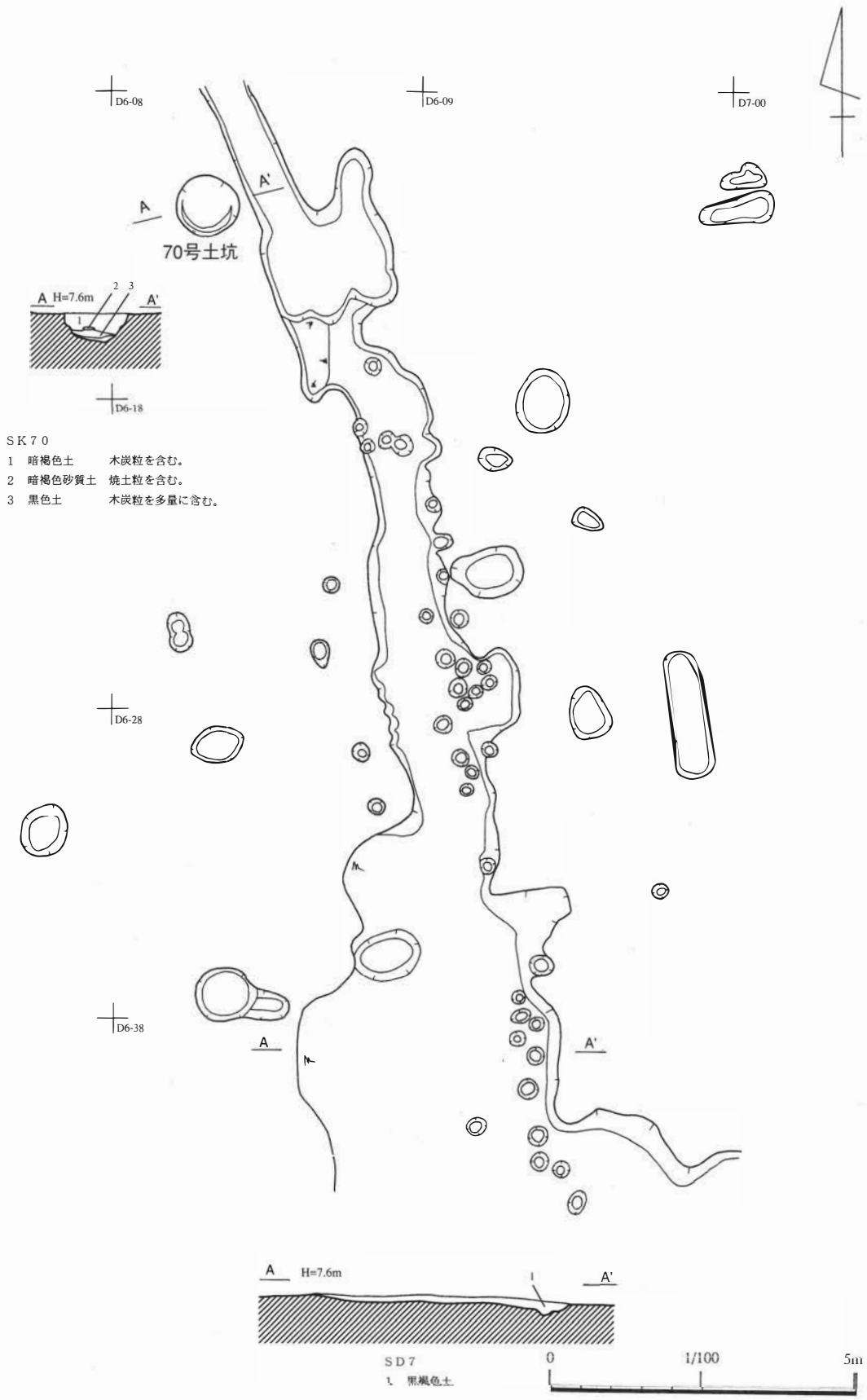


図40 7号溝跡、70号土坑

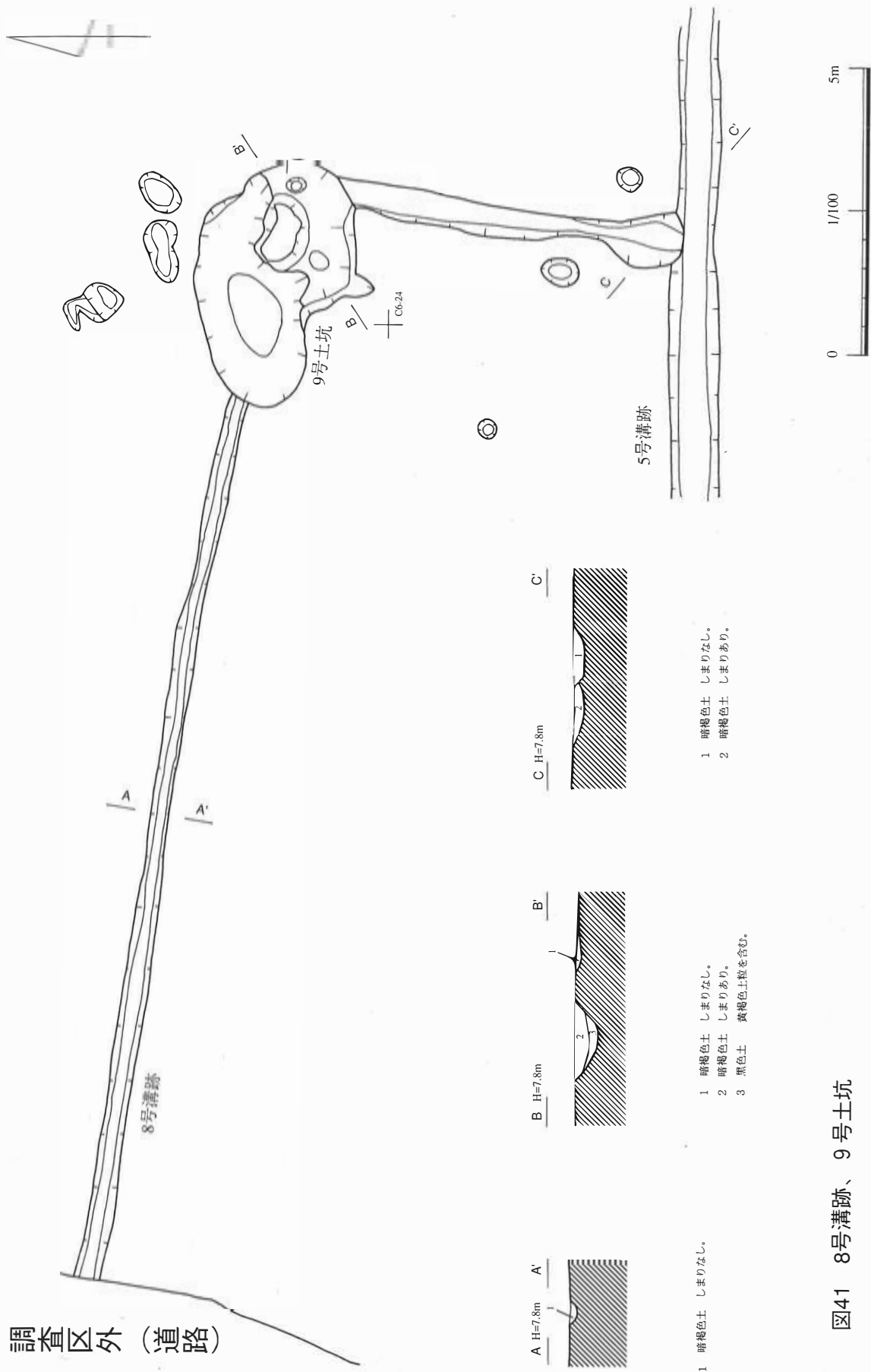


図41 8号溝跡、9号土坑

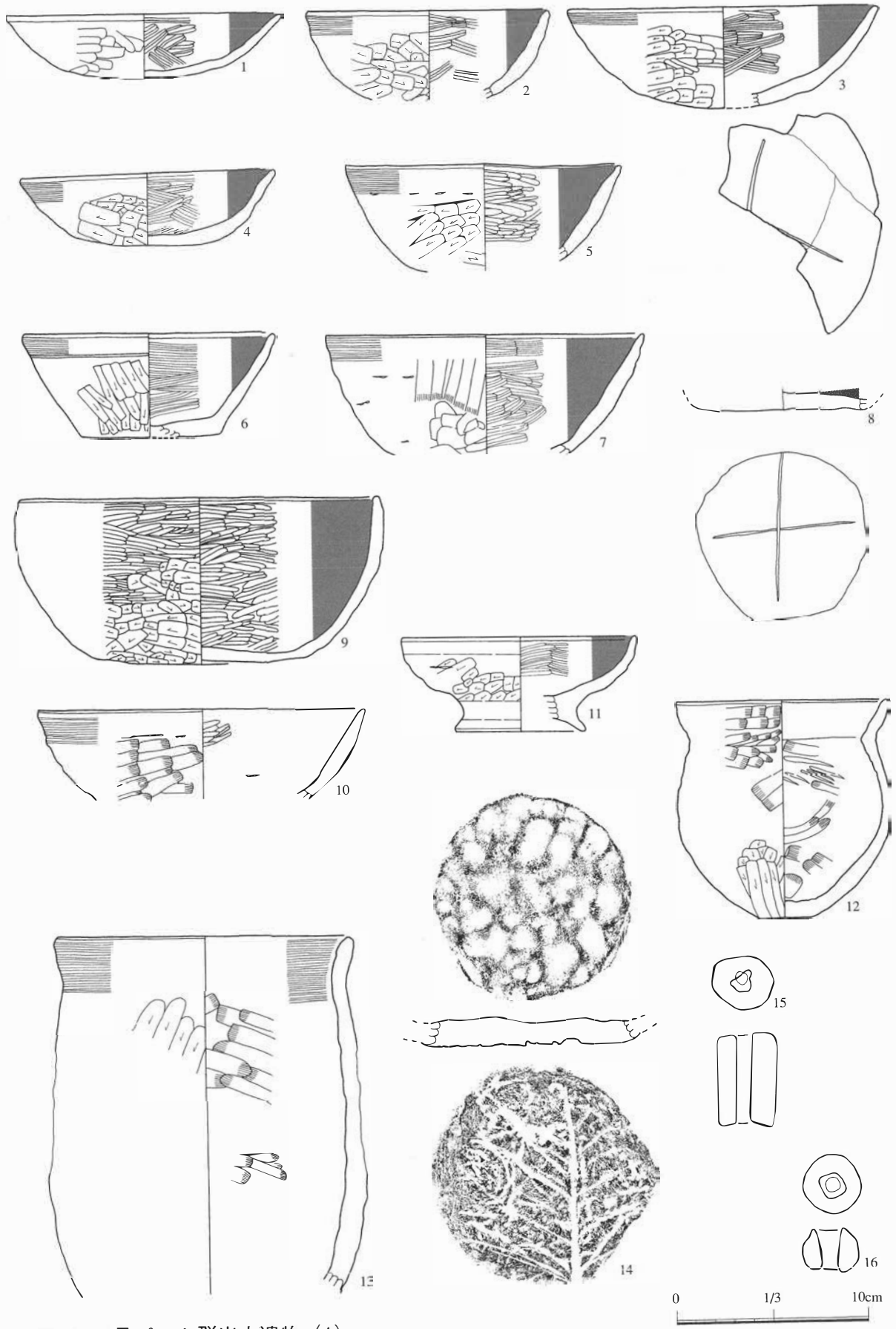
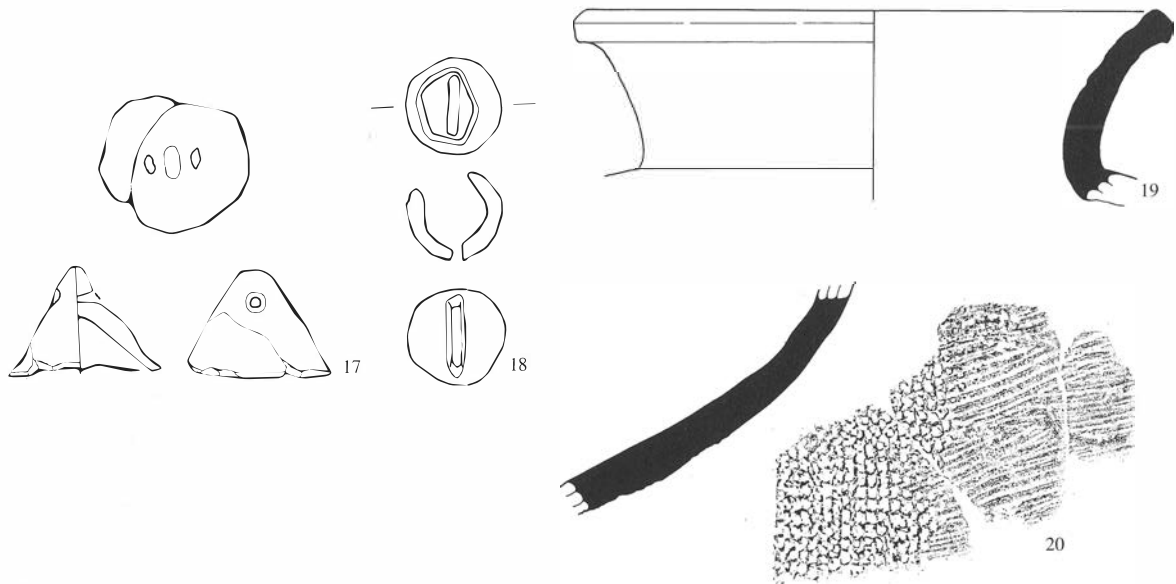


図42 1号ピット群出土遺物 (1)

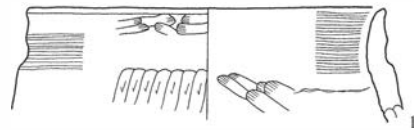


PG1

PG2

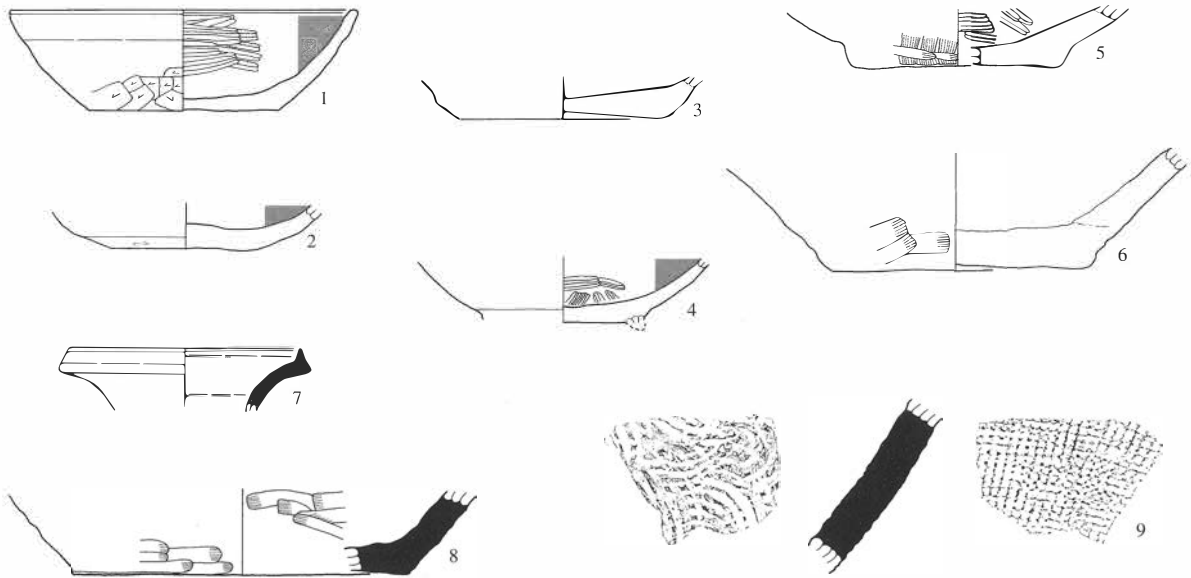


PG3



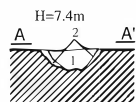
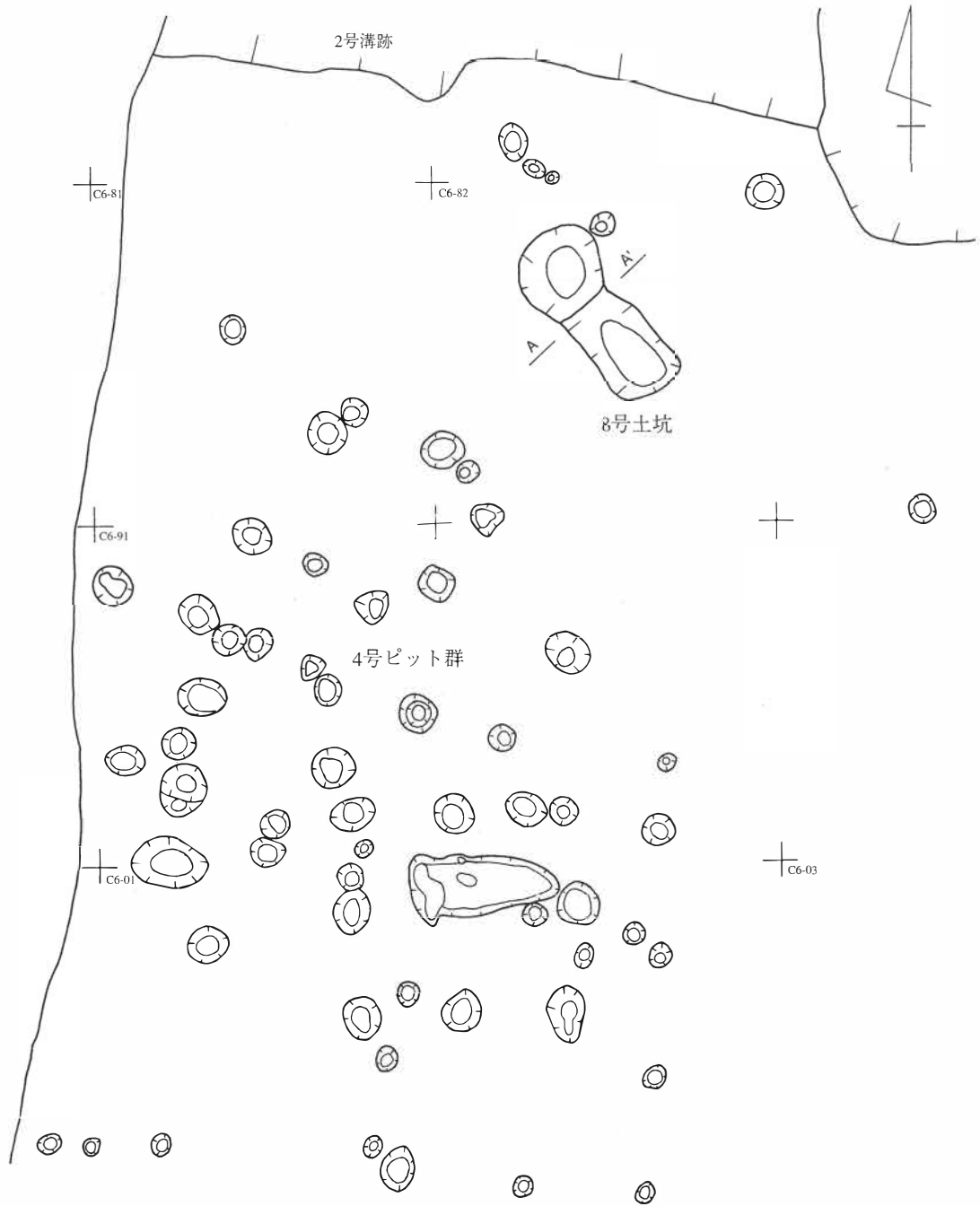
0 1/3 100m

図43 1号ピット群 (2)、2・3号ピット群出土遺物



0 1/3 10cm

図44 8号溝跡出土遺物



- 1 黒褐色土 木炭粒を含む。
- 2 暗褐色砂質土 黒褐色土と黄褐色砂質土の混合土。



図45 4号ピット群、8号土坑

(3) 土 坑

表9 土坑計測表(単位m)

遺構No.	グリッド	長軸	短軸	深さ	形状	出土遺物	備考
S K 1	C8-31	2.6	2.4	0.3	楕円形	土師器	土器捨て場か
S K 2	C7-45	3.0	2.2	0.3	不整形	礎	
S K 3	C6-54・55・64・65	4.0	3.0	0.7	楕円形		
S K 4	C5-79	1.8	1.5	0.4	楕円形	火葬骨片・木炭	火葬墓。
S K 5	B6-87	1.2	1.2	0.3	円形	竹タガ	近代。
S K 6	C6-17	1.3	1.2	0.3	三角形		
S K 7	B6-52・53	4.5	3.5	0.6	不整形	縄文土器深鉢・磨石	
S K 8	D6-82	2.9	1.3	0.2	瓢形	土師器	
S K 9	C6-13・14	3.7	1.6	0.5	不整楕円形		
S K 10	D6-49	1.3	1.2	0.3	円形		
S K 11	C6-30・31	3.9	1.7	0.4	楕円形	土師器	
S K 12	C6-95	1.2	1.5	0.5	ほぼ円形	土師器	
S K 13	C6-21	2.5	1.8	0.1	隅丸長方形		P G 1 の続き
S K 14	D6-75	3.5	1.5	0.2	楕円形		
S K 15	C6-72	1.3	1.3	0.2	円形	土師器	
S K 16	C6-73	1.5	1.1	0.4	楕円形		
S K 17	C6-81・91	4.7	1.5	0.6	楕円形	土師器・砥石・カンザシ	
S K 18	C6-82	1.0	1.0	0.6	円形		
S K 19	C6-81~82 90~92	15.0	3.5	0.2	不整形	焼けた白色岩	大小のピットを伴う
S K 20	C6-82・92	1.7	1.6	0.3	不整楕円形		
S K 21	D6-11	1.4	1.3	0.4	隅丸方形		
S K 22	D6-11	0.8	0.6	0.2	楕円形		
S K 23	C6-95	1.0	1.0	0.5	円形		
S K 24	C5-99 C6-90 D5-09 D6-00	5.0	4.2	0.6	楕円形	土師器・陶磁器・砥石	古墳時代後期
S K 25	D6-10	3.0	1.9	0.5	楕円形		
S K 26	D6-13	1.8	1.7	0.3	円形		1号墳を切る
S K 27	D6-14	1.7	1.3	0.8	楕円形		1号墳を切る
S K 28	D6-14	2.7	2.5	0.4	楕円形		1号墳を切る
S K 29	D6-13	1.7	1.5	0.1	楕円形		1号墳を切る
S K 30	D6-14・15	3.4	2.7	0.6	楕円形		
S K 31	D6-24	1.6	1.3	0.4	楕円形		
S K 32	D6-23	1.0	1.0	0.6	正方形		
S K 33	D6-53	1.6	1.5	0.5	ほぼ円形		
S K 34	D6-01	0.8	0.6	0.2	楕円形	土師器	
S K 35	D6-54	1.5	1.1	0.3	長方形	銅銭(寛永通宝)・陶器	近世土坑墓
S K 36	D6-50	1.3	1.3	0.7	円形		
S K 37	D6-64	0.8	0.6	0.3	三角形	鉄製品	
S K 38	D6-64	0.8	0.8	0.3	円形		
S K 39	D6-75	3.5	1.5	0.3	楕円形	鎌	
S K 40	D6-64	1.8	1.8	0.4	円形	土師器・砥石	
S K 41	D6-41・42・51・52	7.9	5.7	0.5	ほぼ長方形	土師器・砥石	近代
S K 42	D6-49	2.8	2.0	1.4	楕円形		井戸
S K 43	D6-04	3.7	1.7	0.4	不整形	土師器・羽口・刀子・鉄床石	3号小鍛冶関連遺構
S K 44	C6-04	1.2	0.9	0.3	楕円形	土師器・羽口・鉄滓	3号小鍛冶関連遺構
S K 45	D6-03	0.5	0.5	0.3	ほぼ円形	土師器	3号小鍛冶関連遺構
S K 46	D6-04	0.5	0.5	0.3	ほぼ円形	炉壁・土師器	3号小鍛冶関連遺構
S K 47	D6-04	0.5	0.5	0.5	円形	焼石・土師器	3号小鍛冶関連遺構
S K 48	D6-04	1.8	1.1	0.3	楕円形	石・土師器	3号小鍛冶関連遺構
S K 49	C6-93・94D6-03・04	2.8	2.6	0.4	不整形	石	3号小鍛冶関連遺構
S K 50	C6-94	1.3	1.2	0.2	隅丸三角	石斧	3号小鍛冶関連遺構
S K 51	D6-72	2.0	1.5	0.8	楕円形	土師器・板	
S K 52	D6-62・63・72・73	4.0	2.8	0.5	楕円形	土師器・瓦・土鍾・磨石	近代洗い場より古い
S K 53	D6-09・19	1.0	0.8	0.2	楕円形	土師器・須恵器	
S K 54	D6-19	1.2	0.8	0.3	楕円形	土師器・陶器	
S K 55	D6-19・29	0.8	0.6	0.1	楕円形		
S K 56	D6-19・29	2.1	0.6	0.1	楕円形	土師器	
S K 57	D6-47~49	12.2	5.6	0.4	不整形の段	須恵器	4号小鍛冶関連遺構
S K 58	D6-47	0.7	0.7	0.5	円形	須恵器	4号小鍛冶関連遺構
S K 59	D6-47	1.1	0.7	0.5	楕円形		4号小鍛冶関連遺構
S K 60	D6-48	0.8	0.7	0.3	楕円形		4号小鍛冶関連遺構
S K 61	D6-48	1.1	0.9	0.4	楕円形		4号小鍛冶関連遺構
S K 62	D6-48	1.5	1.0	0.8	三日月形		4号小鍛冶関連遺構
S K 63	D6-48	1.1	0.7	0.3	楕円形	鉄床石	4号小鍛冶関連遺構
S K 64	D6-48	4.0	2.1	0.5	楕円形の段	羽口	4号小鍛冶関連遺構
S K 65	D6-49	0.9	0.7	0.3	楕円形		4号小鍛冶関連遺構
S K 66	D6-49	3.0	1.8	0.1	楕円形		4号小鍛冶関連遺構
S K 67	D6-59	3.5	1.8	0.3	三日月形の段	土師器・須恵器・羽口	4号小鍛冶関連遺構
S K 68	C6-88・98	2.3	2.1	0.4	正方形		
S K 69	D6-07	2.3	0.8	0.3	楕円形	土師器	
S K 70	D6-08	1.0	1.0	0.4	円形	土師器	
S K 71	C7-62・63・72・73	4.3	3.5	0.4	不整楕円形	土師器	古墳時代前期
S K 72	C7-82・93	8.3	1.2	0.3	長円形	土師器	小ピットを伴う
S K 73	C6-99	0.8	0.7	0.1	ほぼ円形	土師器・須恵器	小鍛冶
S K 74	C7-90	0.9	0.9	0.5	ほぼ円形	土師器	小鍛冶
S K 75	D7-00	1.2	0.5	0.1	楕円形		
S K 76	C7-94	1.6	0.8	0.1	楕円形		
S K 77	D7-07	1.5	0.9	0.2	楕円形	土師器	

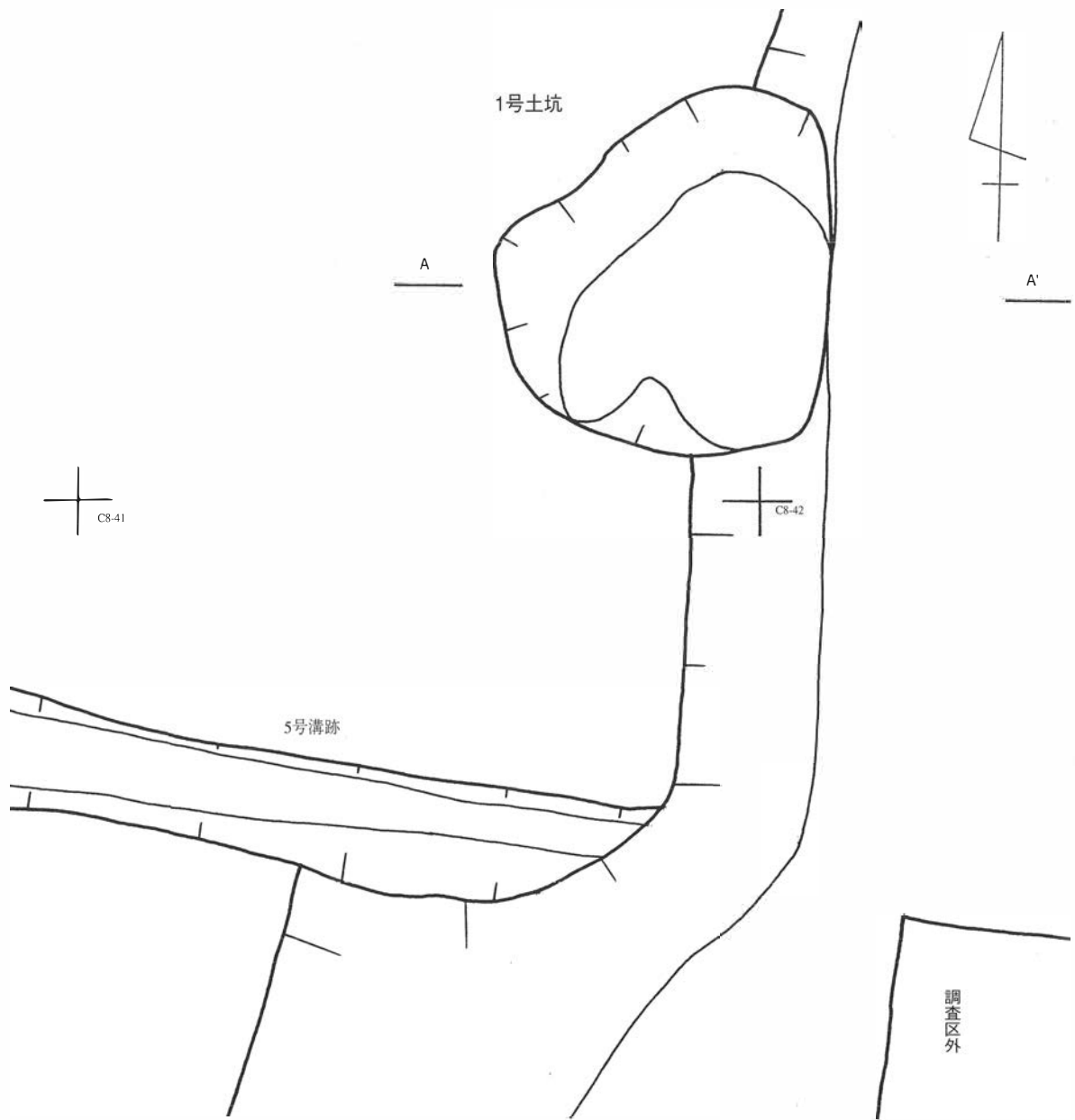
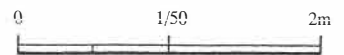
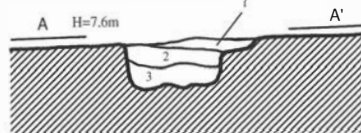
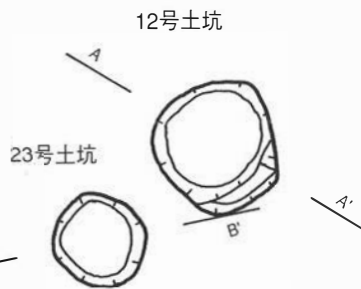
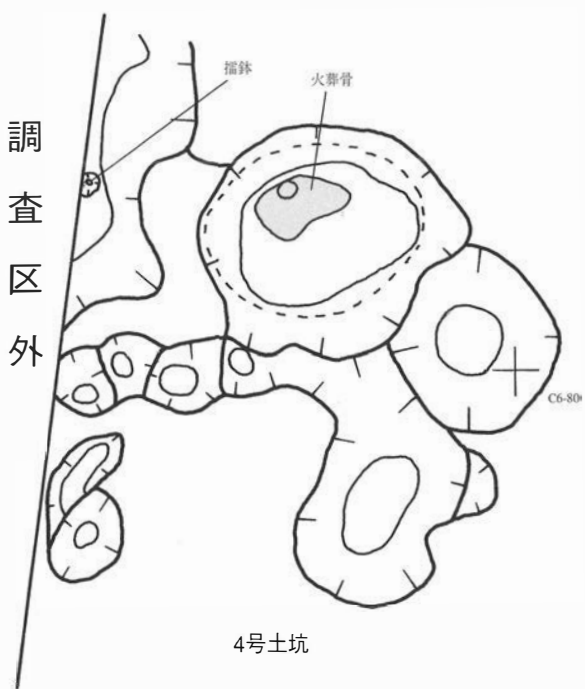


图46 1号土坑



調査区外



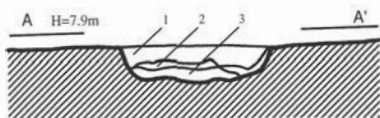
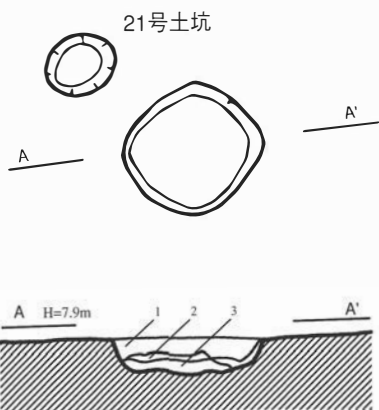
SK 1 2

- | | |
|--------|--------------------|
| 1 暗褐色 | 黄褐色土粒を含む。木炭粒を少量含む。 |
| 2 黄褐色土 | 暗褐色土を含む。 |
| 3 黒褐色土 | 黄褐色土粒を含む。 |



SK 2 3

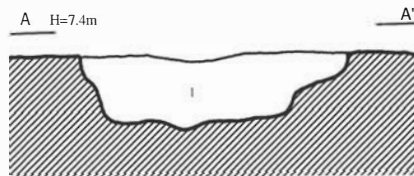
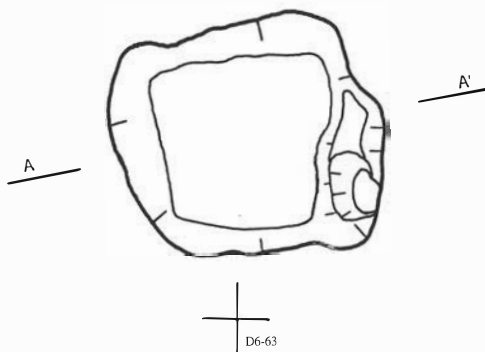
- | | |
|--------|-----------------|
| 1 黄褐色土 | 黒褐色土を斑状に含む。 |
| 2 黒褐色土 | 黄褐色土粒を木炭状に少量含む。 |
| 3 黒色土 | 木炭粒を少量含む。 |



SK 2 1

- | | |
|----------|-----------------|
| 1 黒色土 | 黄褐色砂質土を斑状に多く含む。 |
| 2 黄褐色砂質土 | 黒色土を含む。 |
| 3 黒色土 | 黄褐色砂質土を少量含む。 |

33号土坑



SK 3 3

- | | |
|--------|------------------|
| 1 暗褐色土 | 木炭粒を少量含む。やや粘性あり。 |
|--------|------------------|

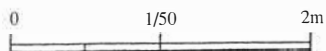


図47 4・12・21・23・33号土坑

+

B6-53



調查區外

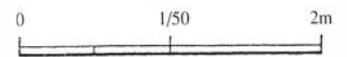
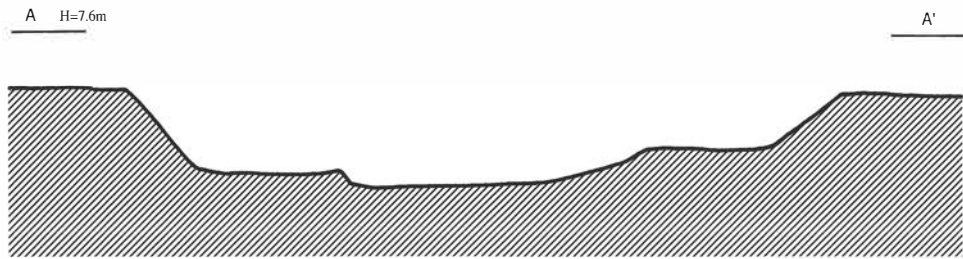
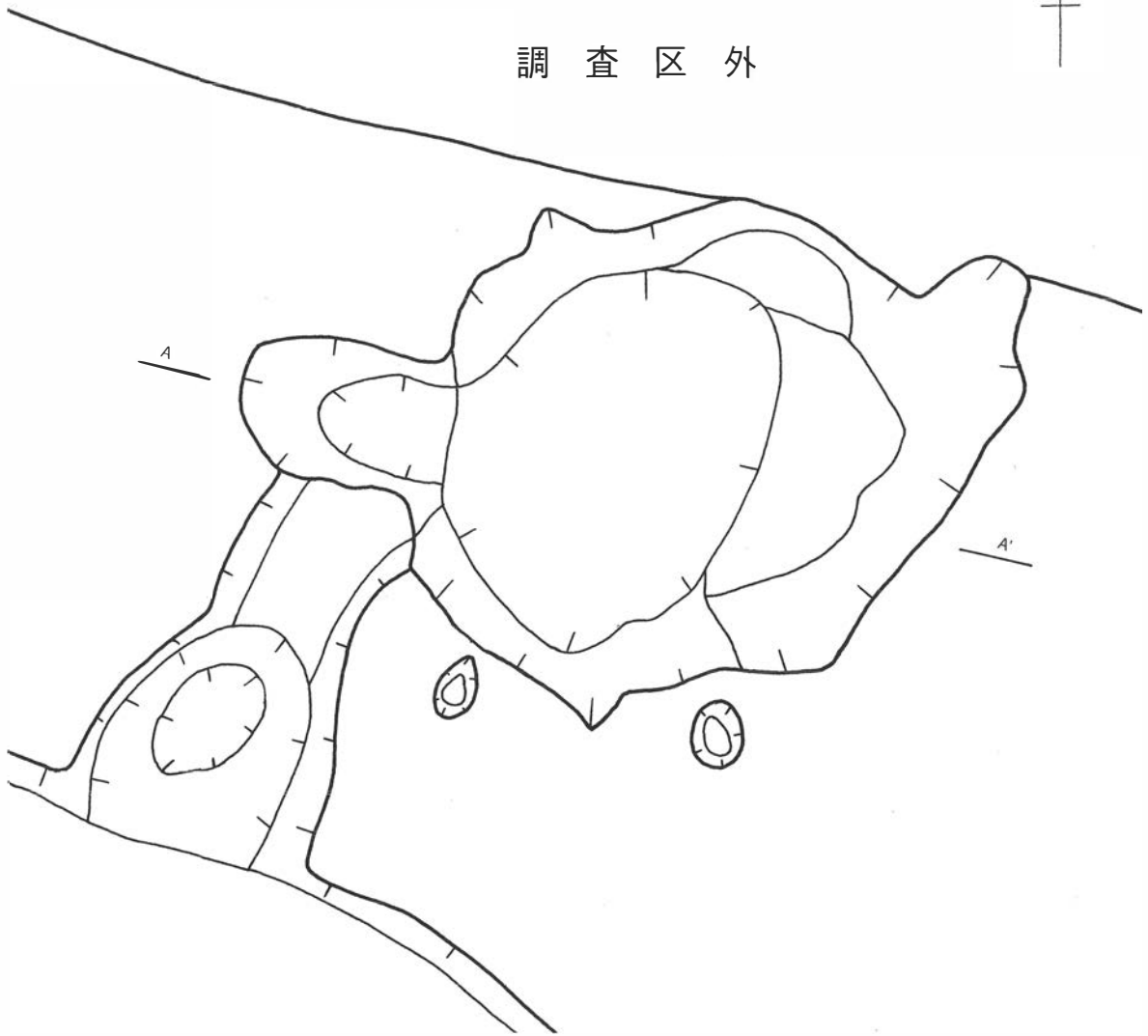


图48 7号土坑

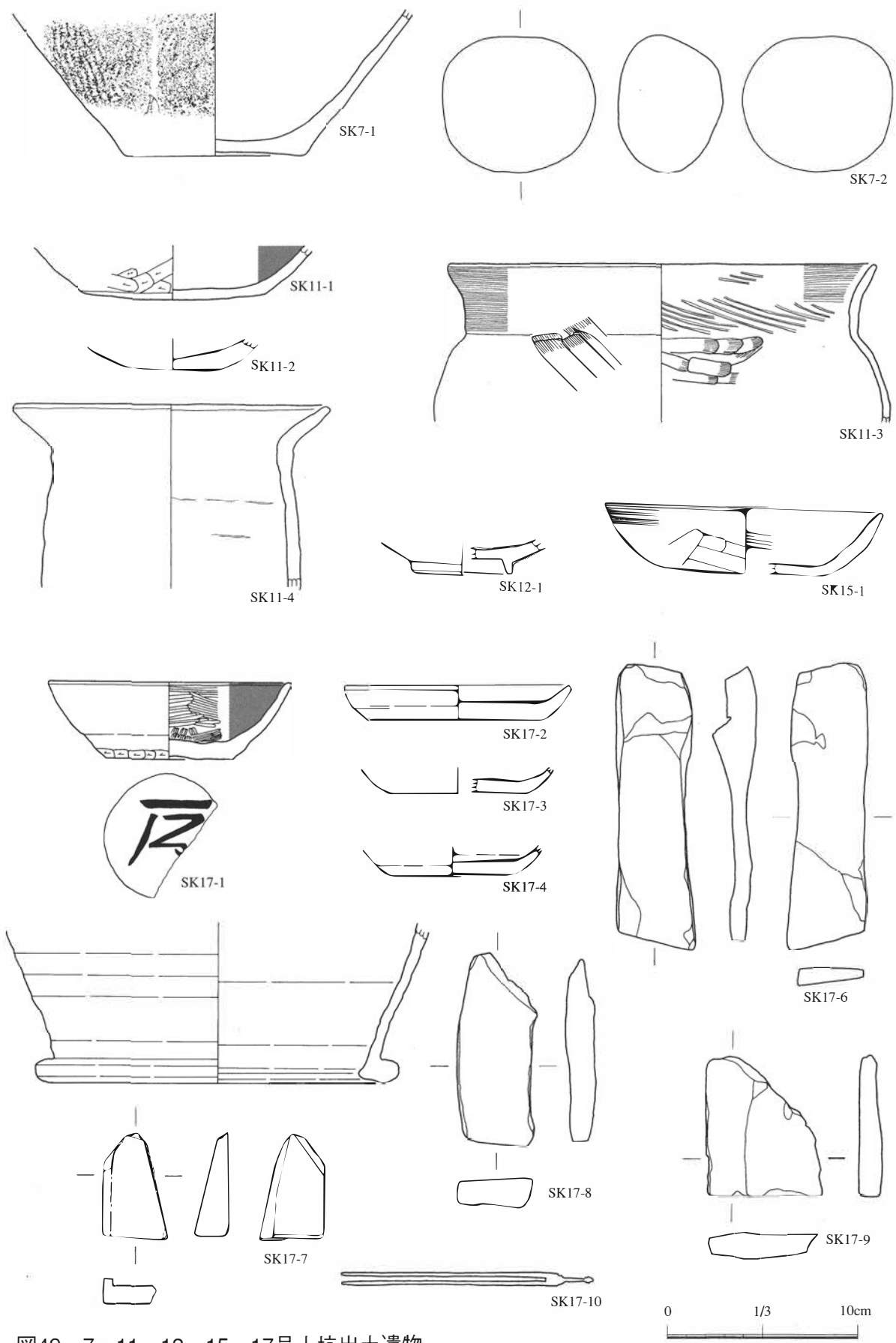
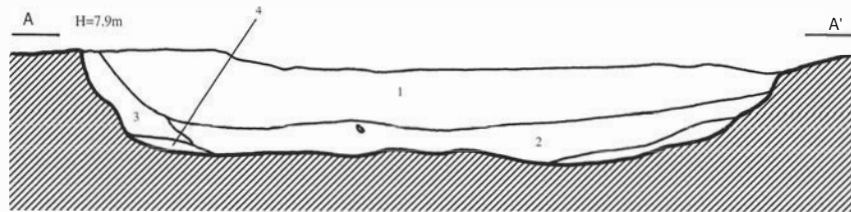
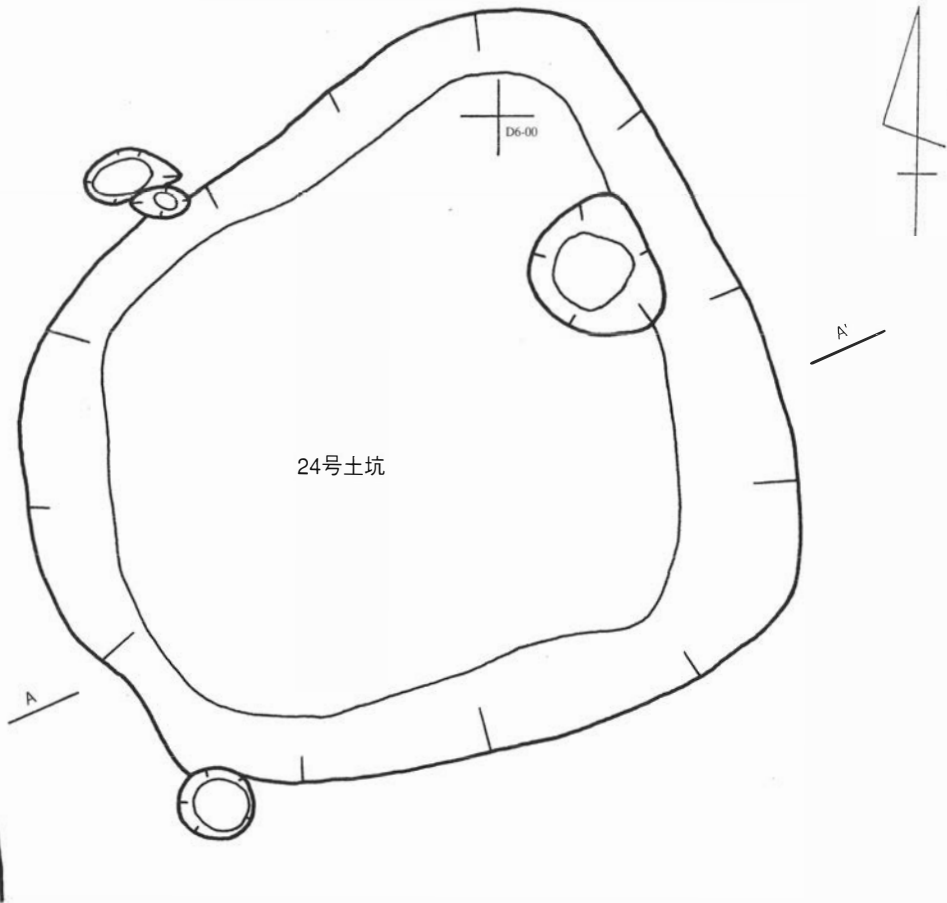
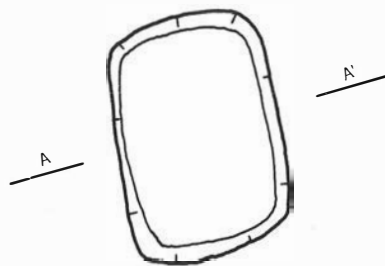


图49 7·11·12·15·17号土坑出土遺物

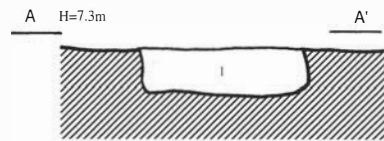
調査区外



- SK 24
- 1 暗褐色土 黄褐色砂質土を含む。
 - 2 黒褐色土 灰褐色粘土粒・黄褐色土粒・木炭粒を含む。
 - 3 黄褐色砂質土 暗褐色土を含む。
 - 4 黒褐色土
 - 5 黄褐色土 暗褐色土を含む



35号土坑



- SK 35
- 1 暗褐色土 木炭粒を少量含む。
- ※ 底部に木炭粒が多量に付着している。

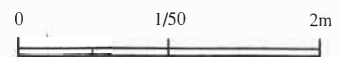


図50 24・35号土坑

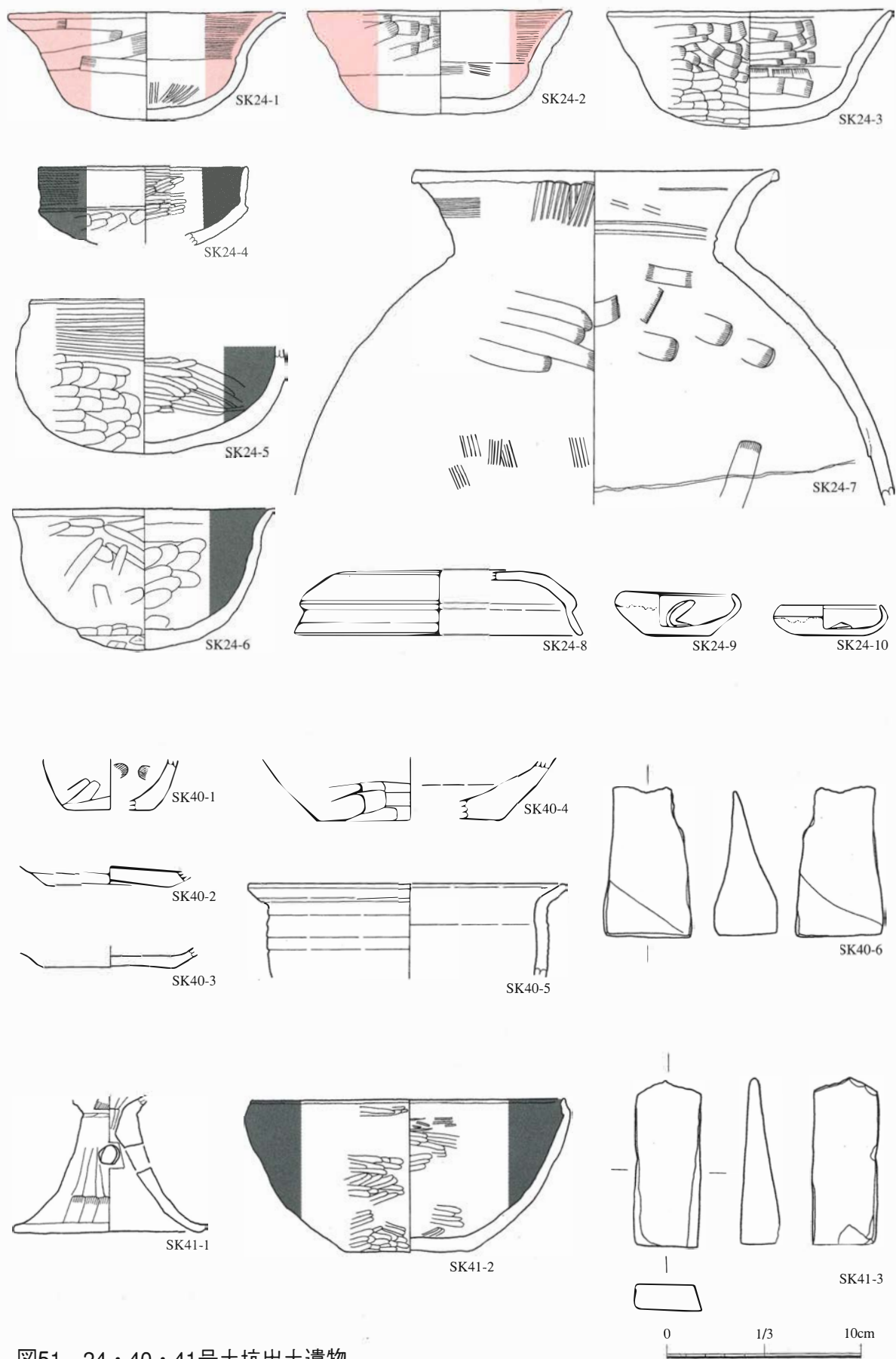


图51 24·40·41号土坑出土遗物

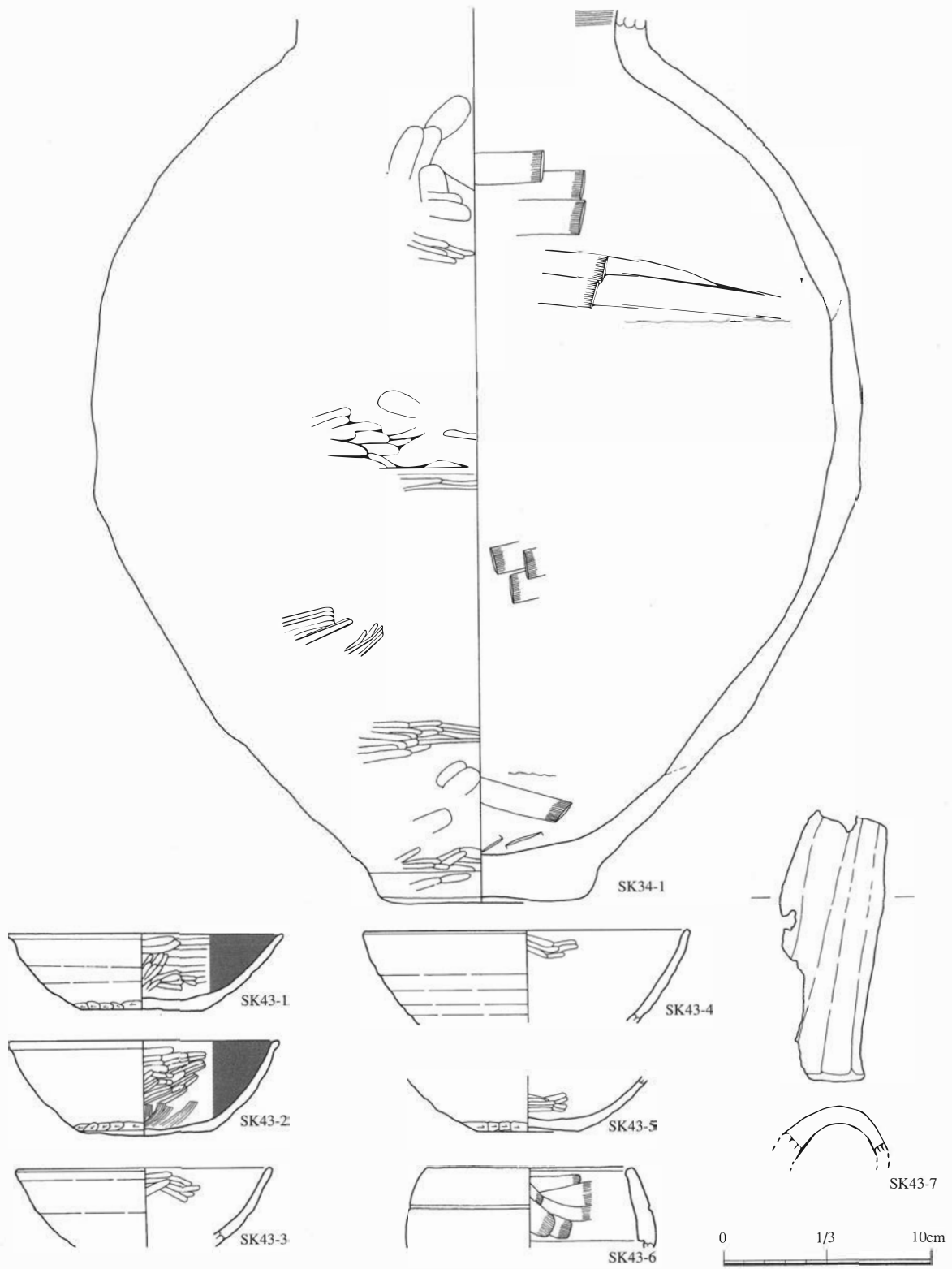


图52 34·43号土坑出土遺物



图53 35号土坑出土遺物

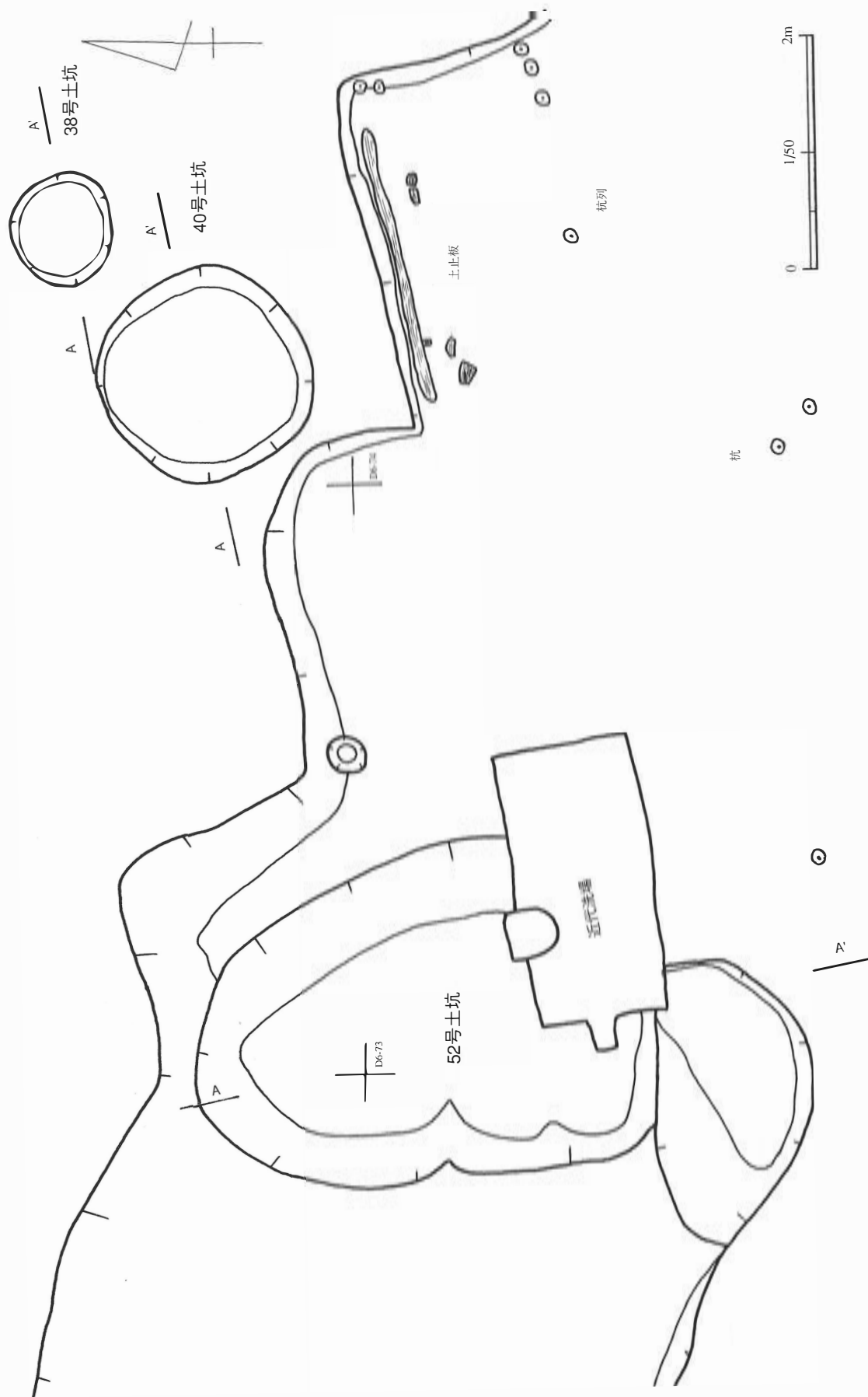


图54 38·40·52号土坑、近代洗場

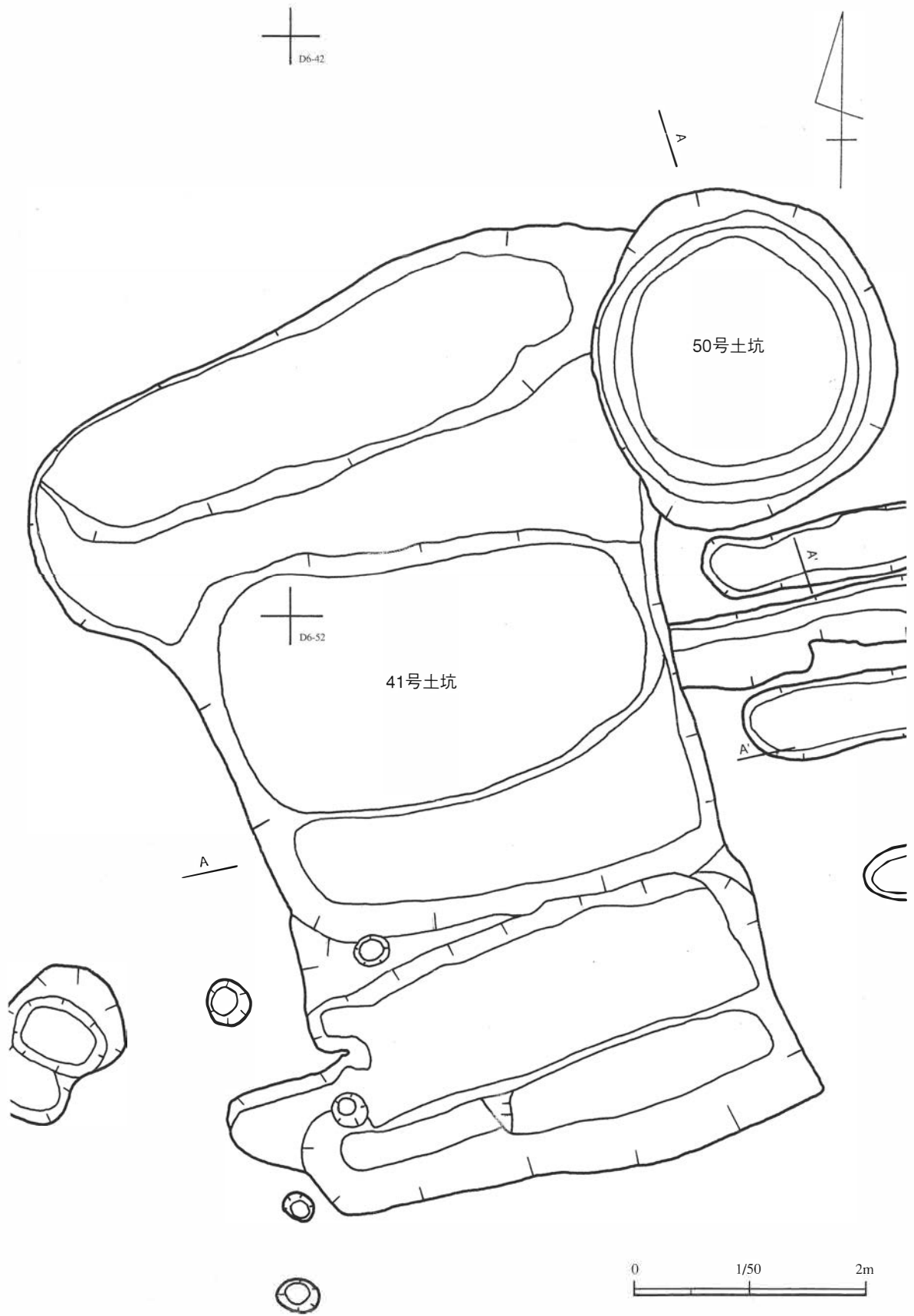
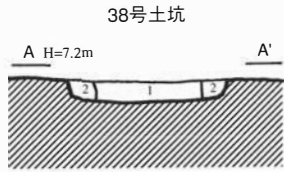
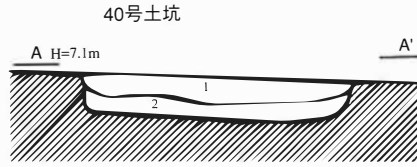


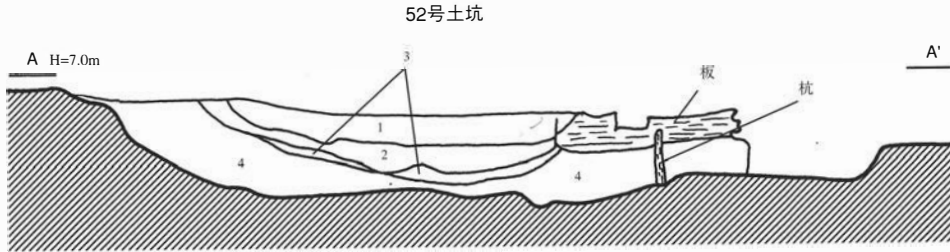
图55 41·50号土坑



- SK 38
- 1 暗褐色土
 - 2 黄褐色土 黄褐色ブロックと暗褐色土の混合土。
- ※ 壁面に黄褐色土を貼り付けている。



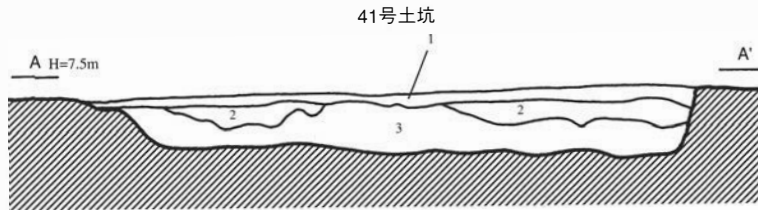
- SK 40
- 1 暗褐色土
 - 2 黒褐色土



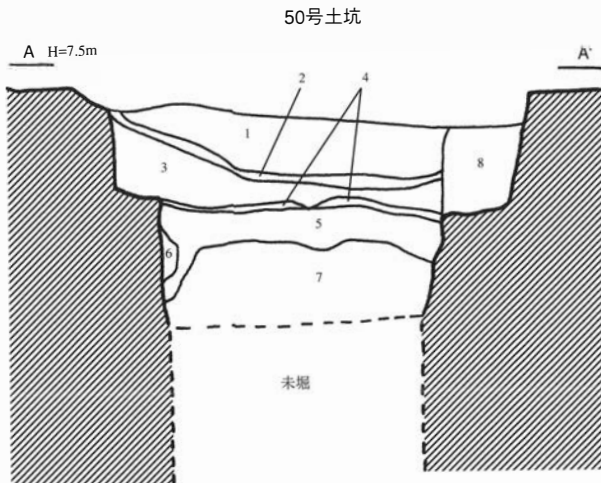
- SK 52
- 1 灰褐色粘質土
 - 2 灰色粘質土
 - 3 黄白色粘質土
 - 4 暗灰色粘質土 φ10~20 cmの石を多く含む。

(旧) (新)
SK 52 → SK 53

SK 53は近代の流し場。1.2m×2.5mの範囲を幅10cm、厚さ1cmの杉板で囲っている。また、クルミ等の種子が出土する。



- SK 41
- 1 褐色土
 - 2 暗黄褐色土
 - 3 暗褐色土 木炭粒を微量含む。



- SK 50
- 1 暗褐色砂質土 黄褐色土粒を含む。
 - 2 黄褐色砂質土 黄褐色土を多く含む。
 - 3 暗褐色砂質土 黄褐色土粒を含む。
 - 4 黄褐色砂質土
 - 5 褐色砂質土 黄褐色土粒を含む。
 - 6 黄褐色粘土
 - 7 暗灰色粘土 φ2~10 cmの小石を多く含む。
 - 8 暗黄褐色土 暗褐色土と黄褐色砂質土が斑状に混じる。

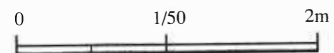


図56 38・40・41・50・52号土坑

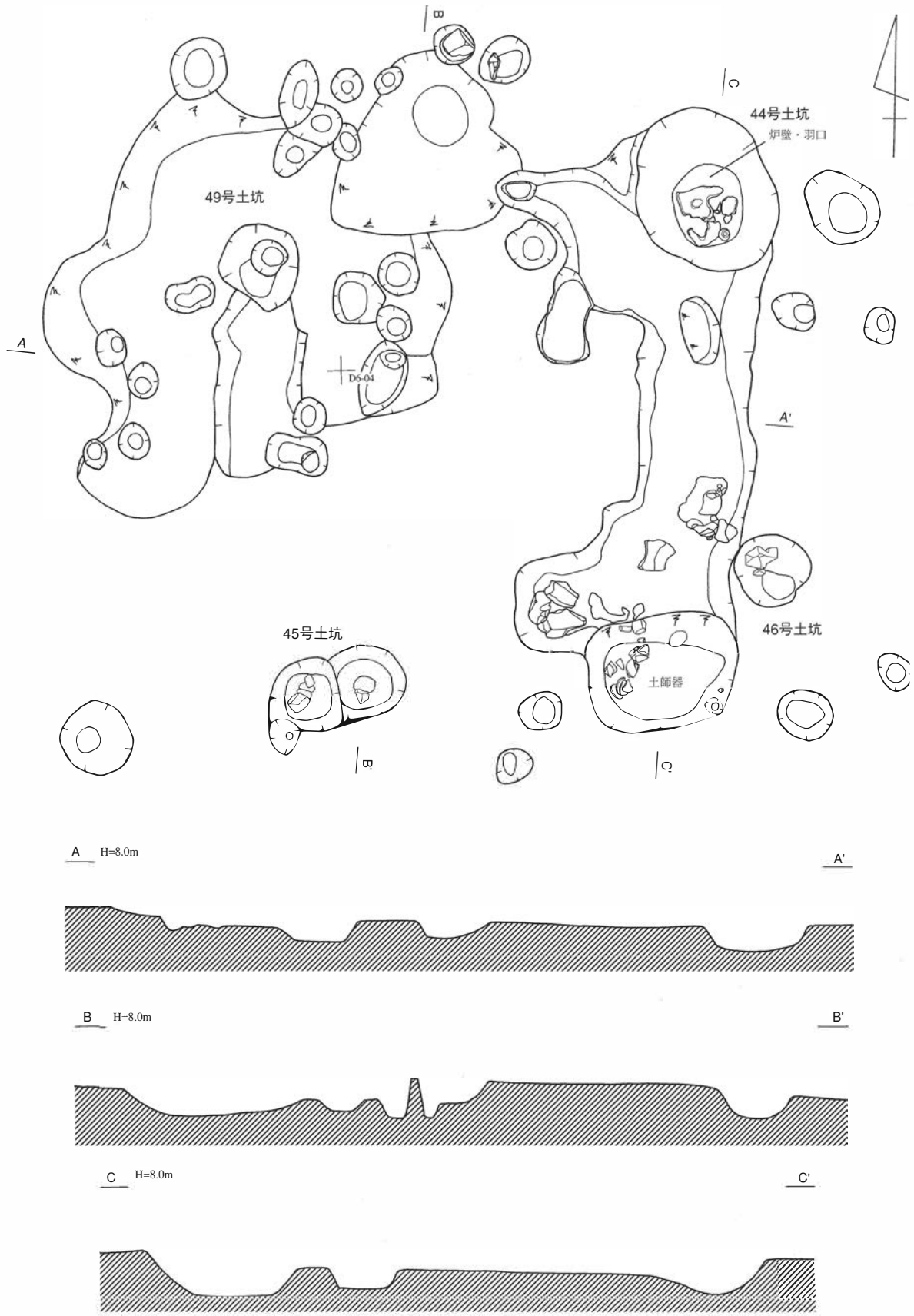


図57 43・44・45・49号土坑（3号小鍛冶関連遺構）

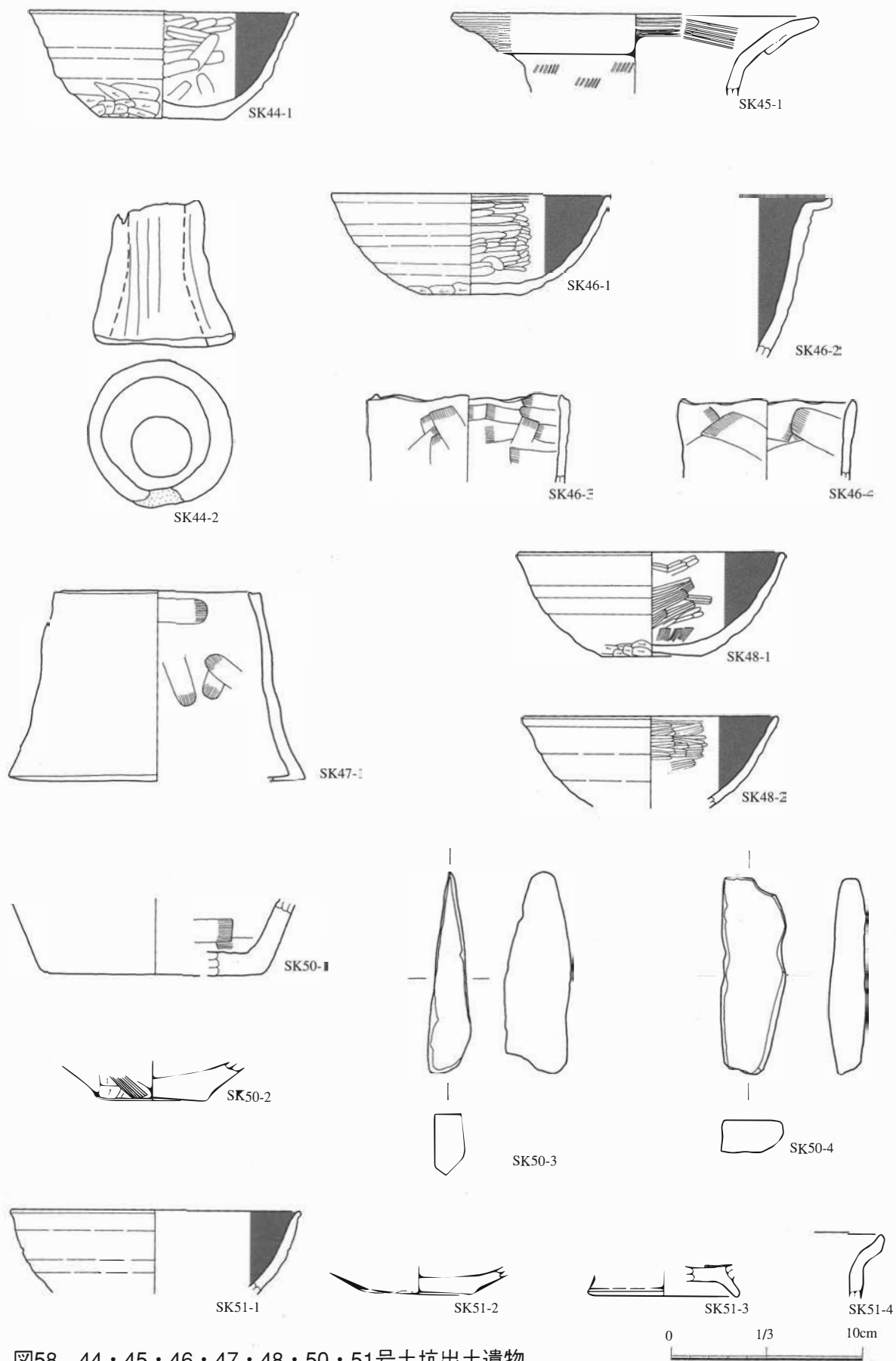
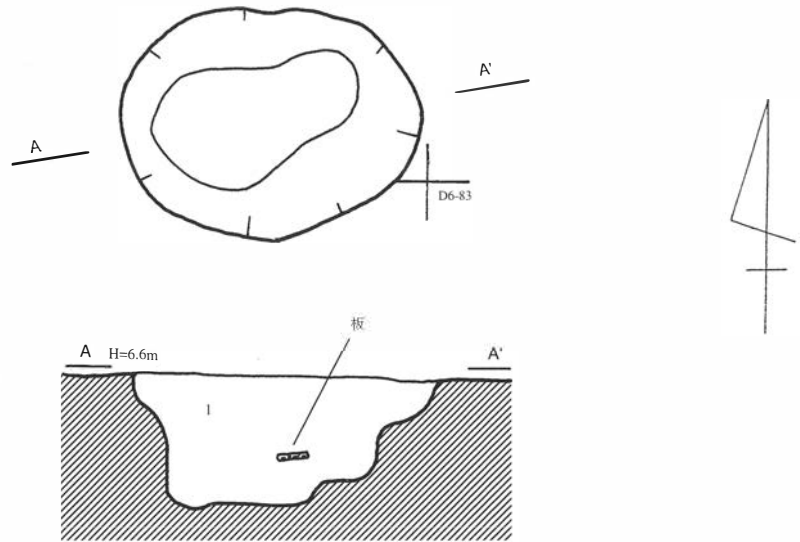


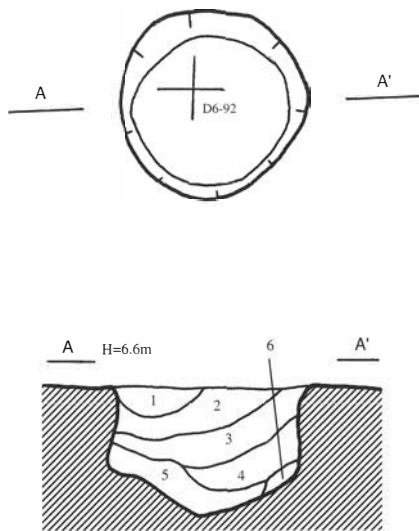
图58 44·45·46·47·48·50·51号土坑出土遗物

51号土坑



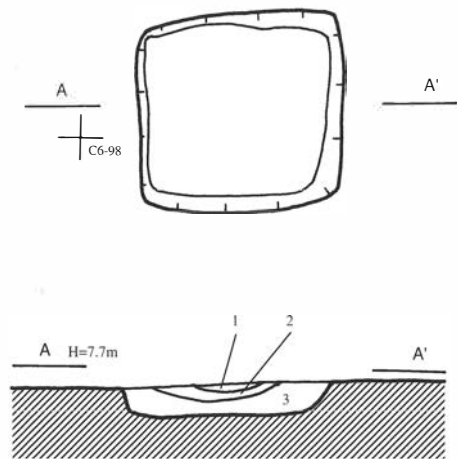
1 黒褐色土 灰色粘土粒、木炭粒を含む。

62号土坑



- 1 暗黄褐色粘質土 暗褐色土を含む。
- 2 暗褐色土 暗黄褐色土粒を含む。
- 3 暗黄褐色粘質土 暗褐色土粒を含む。
- 4 暗褐色砂質土
- 5 黒褐色粘質土
- 6 暗灰褐色粘質土

68号土坑



- 1 暗赤褐色土 木炭龍を少量含む。
- 2 暗褐色土 木炭龍を少量含む。
- 3 暗黄褐色土 黄色粘土粒・焼土粒を少量含む。



図59 51・62・68号土坑

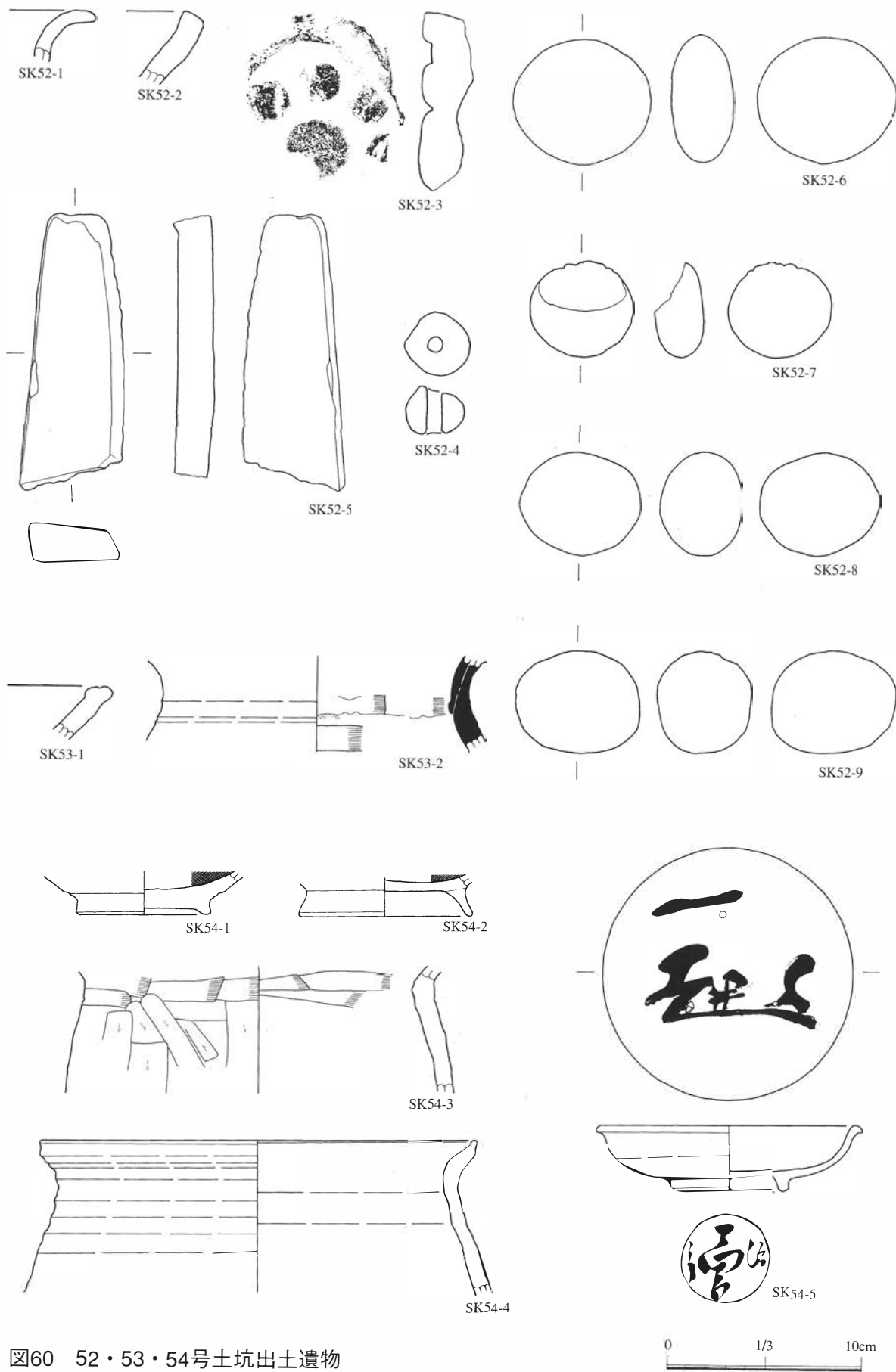


图60 52·53·54号土坑出土遗物

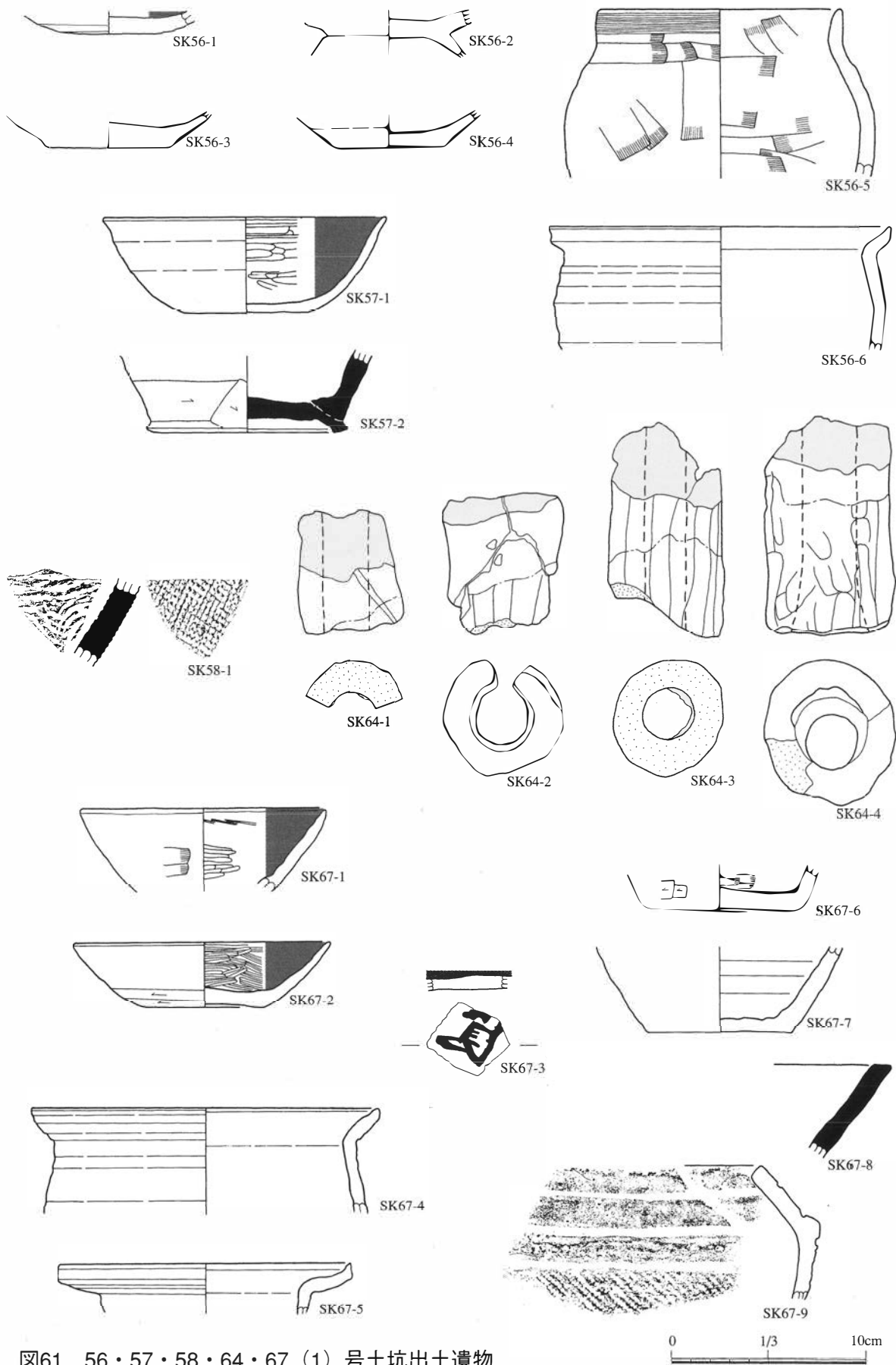


図61 56・57・58・64・67 (1) 号土坑出土遺物

赤アミは鉄の融着範囲

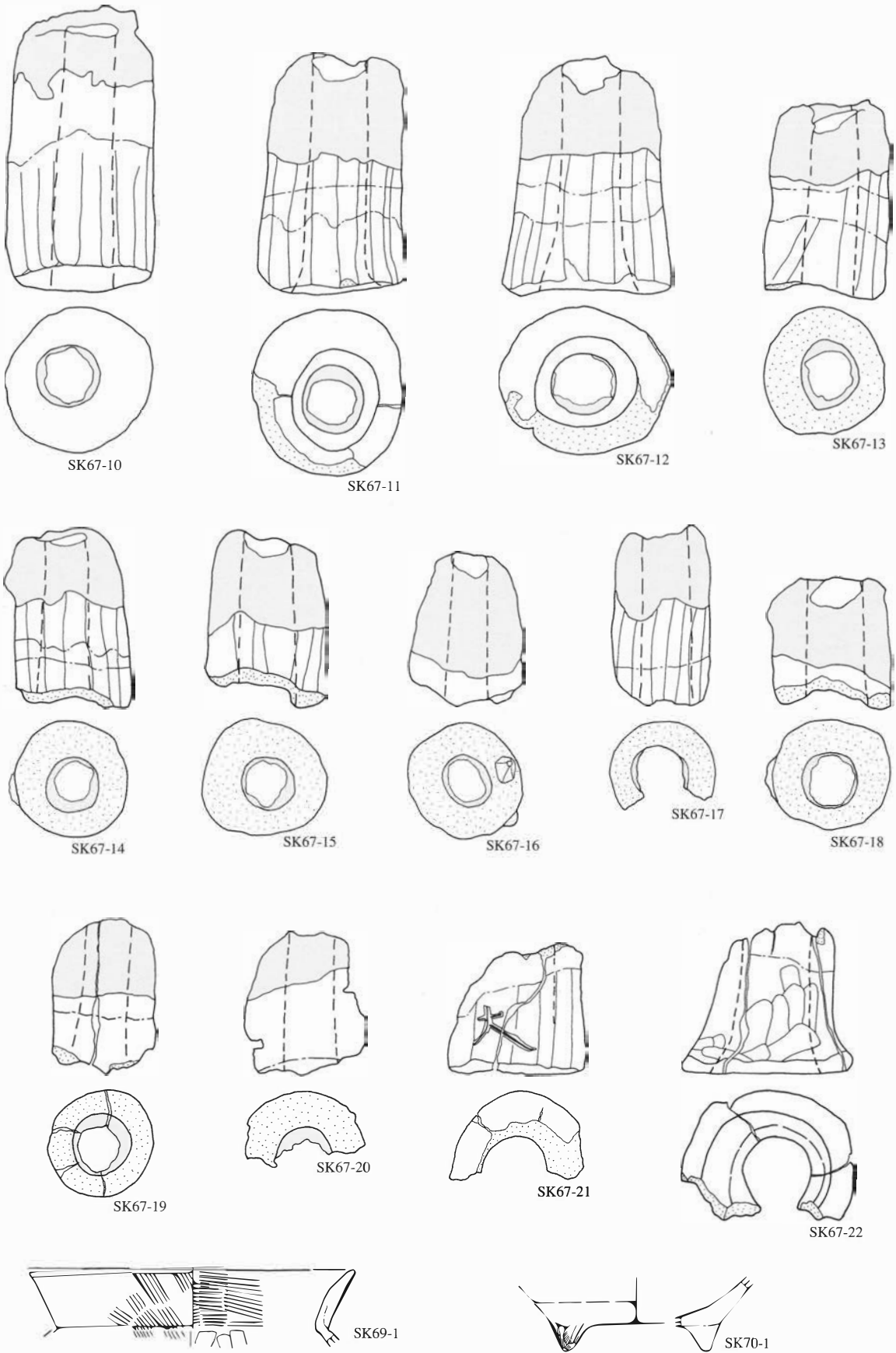
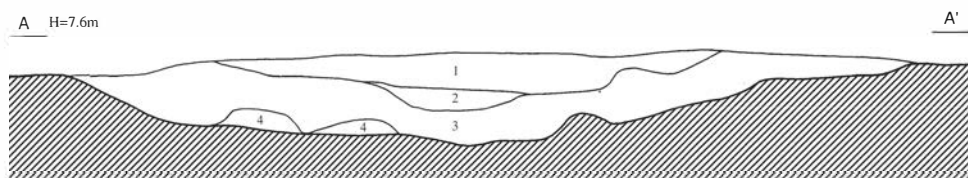
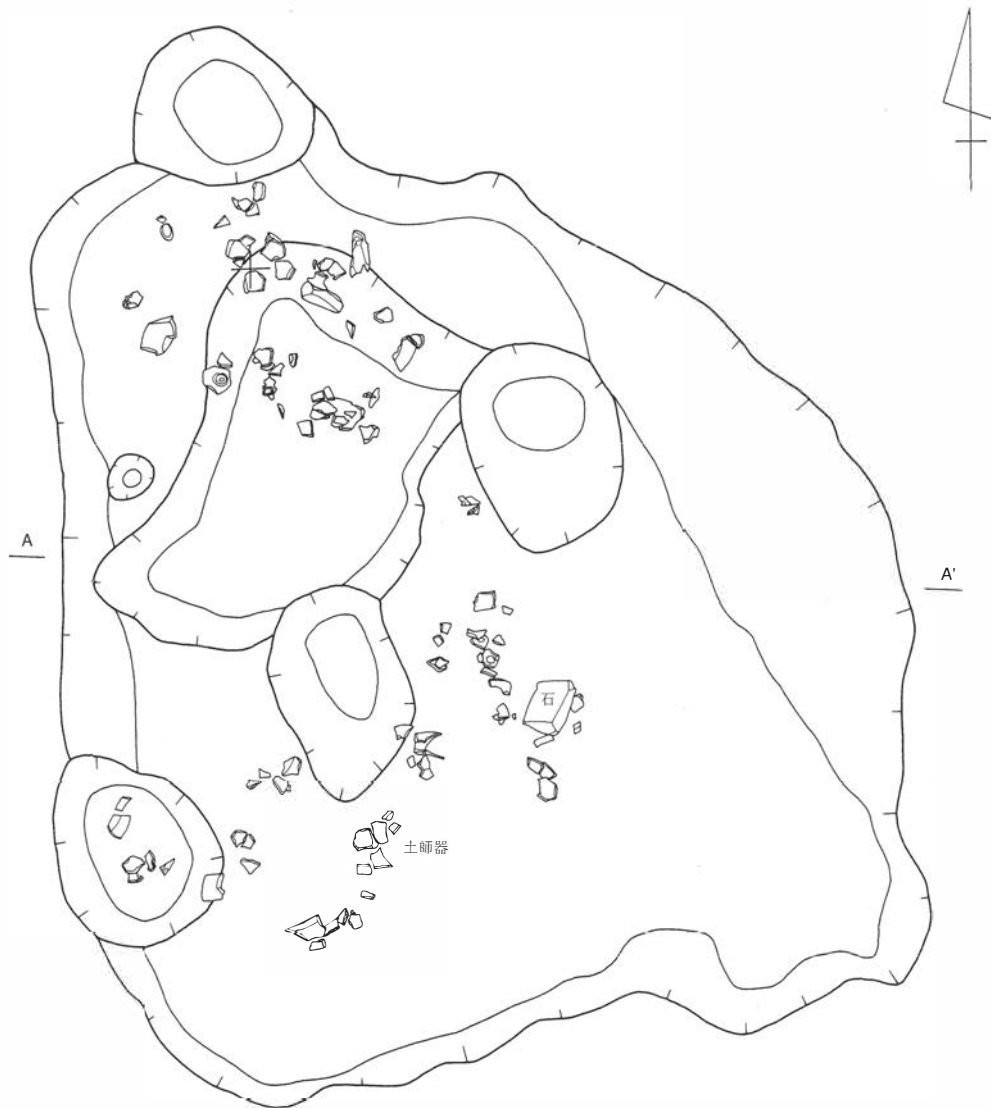


図62 67(2)・69・70号土坑出土遺物



- 1 黒褐色土 木炭粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 暗黄褐色土粒を含む。
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土 暗黄褐色土粒を含む。



図63 71号土坑

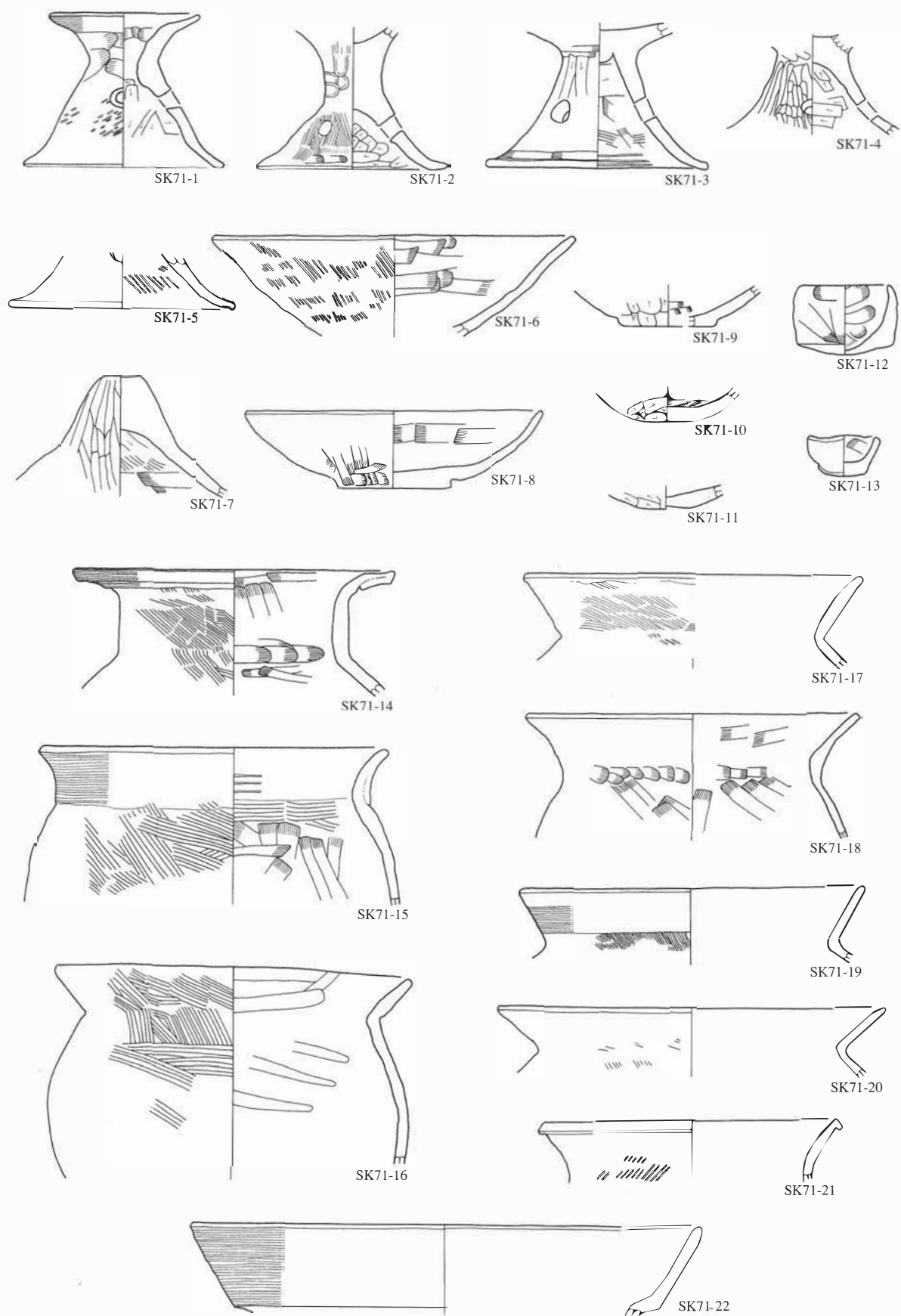


图64 71号土坑出土遗物 (1)

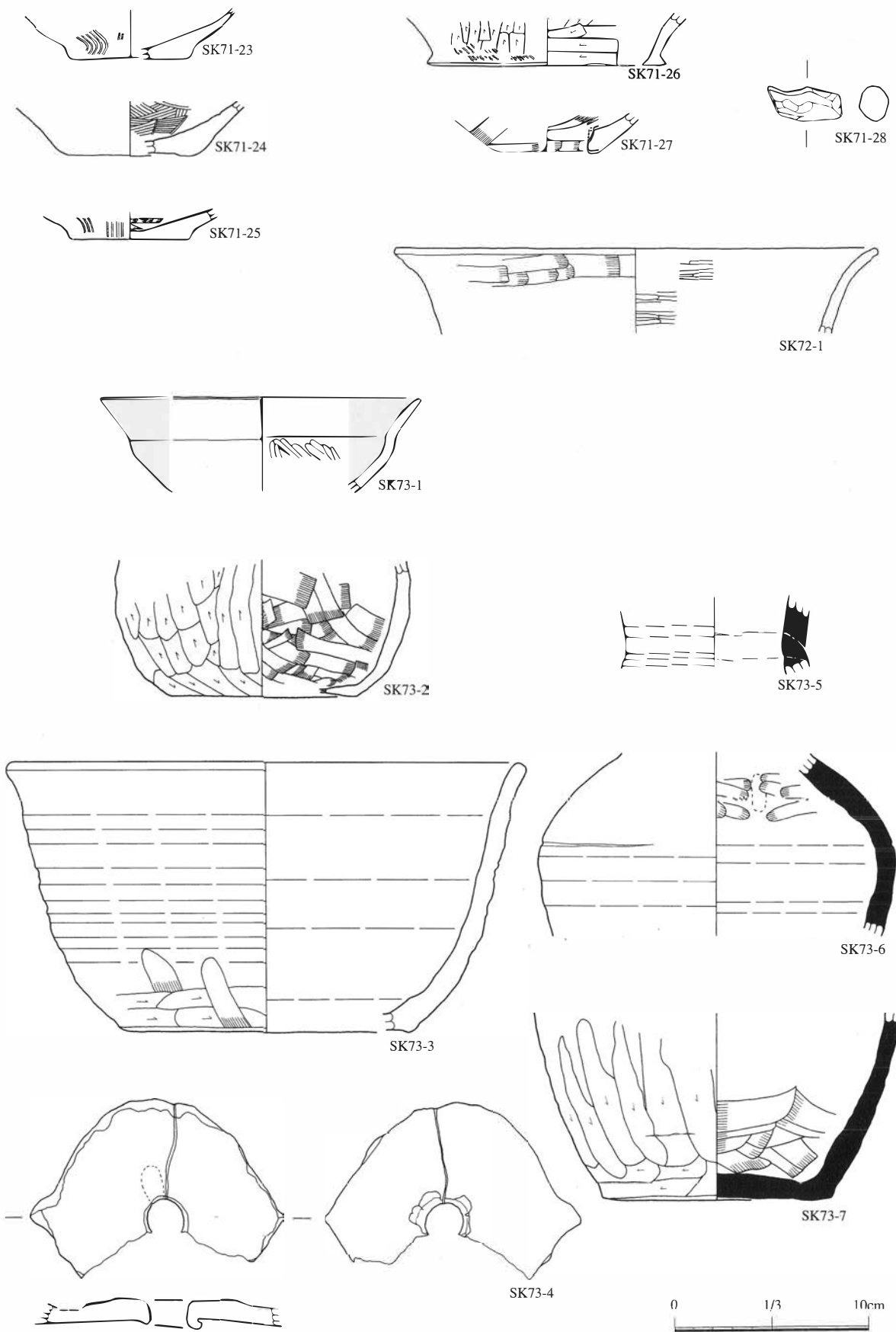


图65 71(2)·72·73号土坑出土遗物

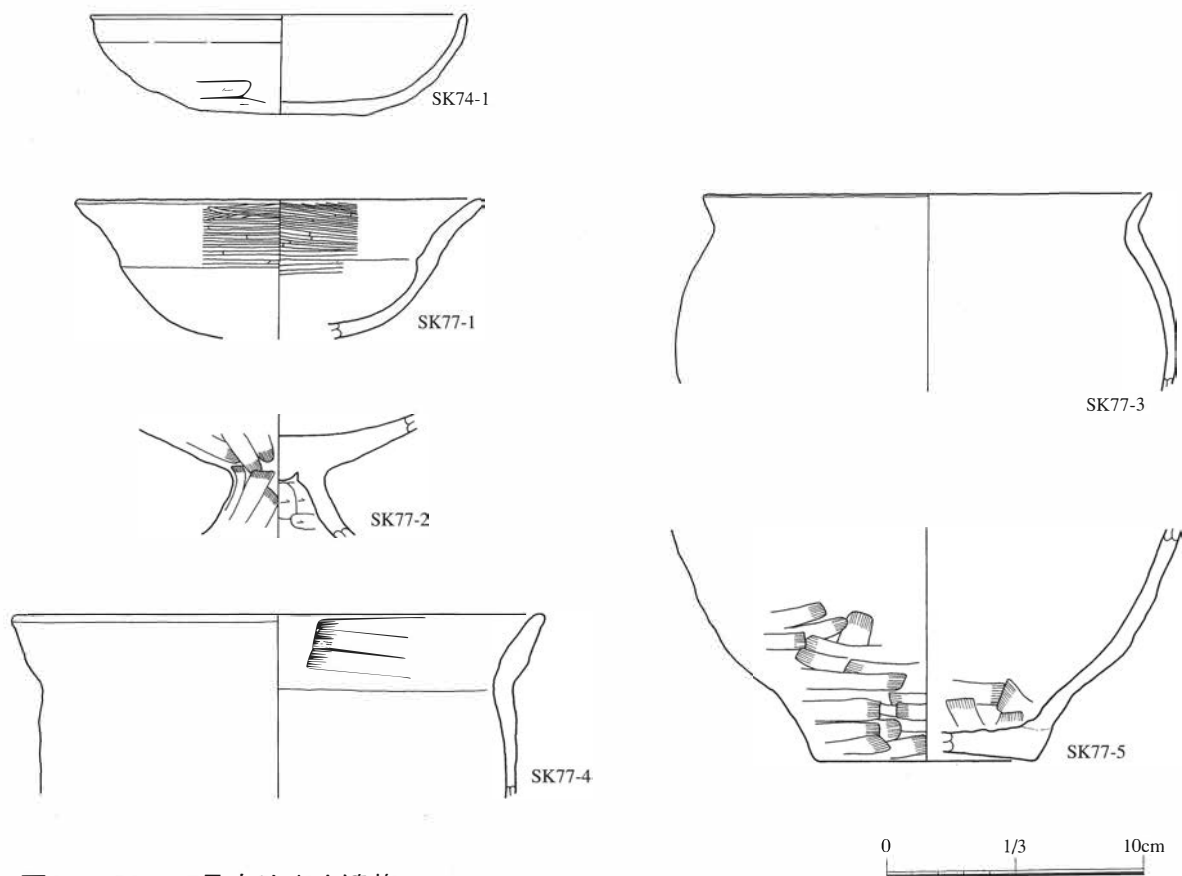


図66 74・77号土坑出土遺物

第5節 近代井戸跡

1号井戸跡 (SE 1) 図 67

位置 C 6-20 グリッド **規模** 径 2.2m×深さ 1.6m **形状** 円形 **出土遺物** 桶 **備考** 1号墳を切る。近代。底部に直径約 85cm・高さ 56 cmの桶を据えている。側板は厚さ 3 cmの松板で 21 枚廻している。桶の上部には直径 20~30 cmの平石を高さ 1 mに石組みしている。

2号井戸跡 (SE 2) 図 67

位置 D 6-12・22 グリッド **規模** 3.2×2.8m 深さ 1.3m **形状** 楕円形 **出土遺物** なし **備考** 内部は円形だが、上面で北に張り出す。張り出しに直径約 0.5m・深さ約 0.2mの小ピット 3基が巡る。崩落の恐れがあるため、底部は未掘。上部は直径 20~30 cmの平石で高さ 1.3m以上石組みしている。

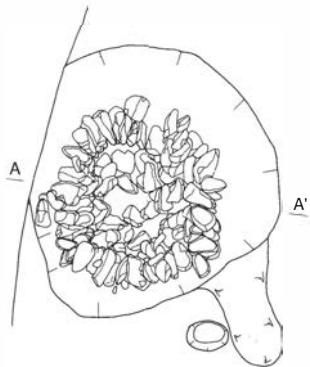
3号井戸跡 (SE 3) 図 8

位置 D 6-42 グリッド **規模** 2.9×2.6m 深さ 2.3m以上。1.3m掘ったが、さらに 1 m以上深い。**形状** 円形 **出土遺物** なし

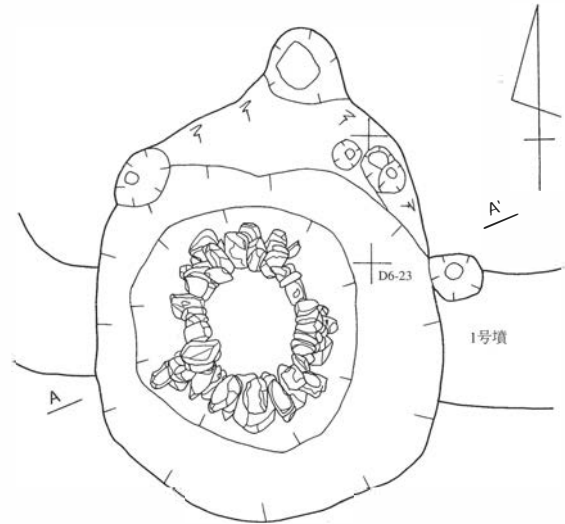
4号井戸跡 (SE 4)

位置 D 6-21 グリッド **規模** 2.2m×深さ 1.1m **形状** 円形 **出土遺物** なし **備考** 近代。崩落した石組みが詰まっているため、底部は未掘。上部は直径 20~30 cmの平石で高さ 1.3m以上石組みしている。

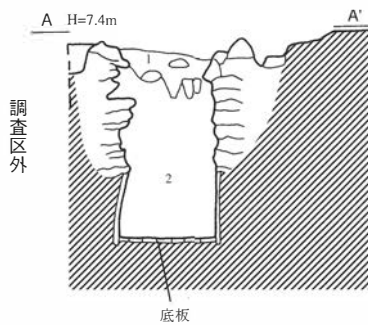
調査区外



1号井戸跡

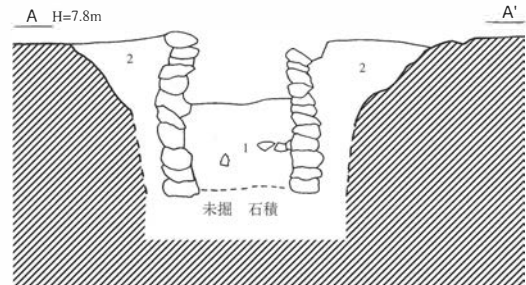


2号井戸跡



SE 1

- 1 暗褐色土 崩れた積石が混入している。
- 2 黒褐色土 黄褐色砂質土粒を多く含む。裏込め土。
- ※ 底部には桶が残存している。側板は厚さ3cm・幅12cmの板材21枚。
- ※ 近代井戸跡。周囲にφ0.2~0.3mの石を積んでいる。



SE 2

- 1 暗褐色土 崩れた積石が混入している。
- 2 暗黄褐色土 φ3~5cmの黄褐色土粒を多量に含む。裏込め土。
- ※ 崩落の危険があるため、完掘できなかった。
- ※ 近代井戸跡。周囲にφ0.2~0.3mの石を積んでいる。

図67 1・2号井戸跡



第6節 遺構外出土遺物

B 8-92 グリッド

位置 本調査区北東隅、微高地の斜面下。**出土遺物** 1.0×0.8mの不整形に地面が焼け、焼土に骨片が混じる。その南側から石製模造品（双孔円板）と土師器杯が出土。**備考** 遺物は斜面上から投棄されたものと思われる。

C 8-02 グリッド

位置 本調査区北東隅。B 8-92 グリッドの南隣。**出土遺物** 斜面上に土師器甕の破片がまとまって出土。**備考** 本グリッド出土の土師器甕も斜面上から投棄されたものと思われる。

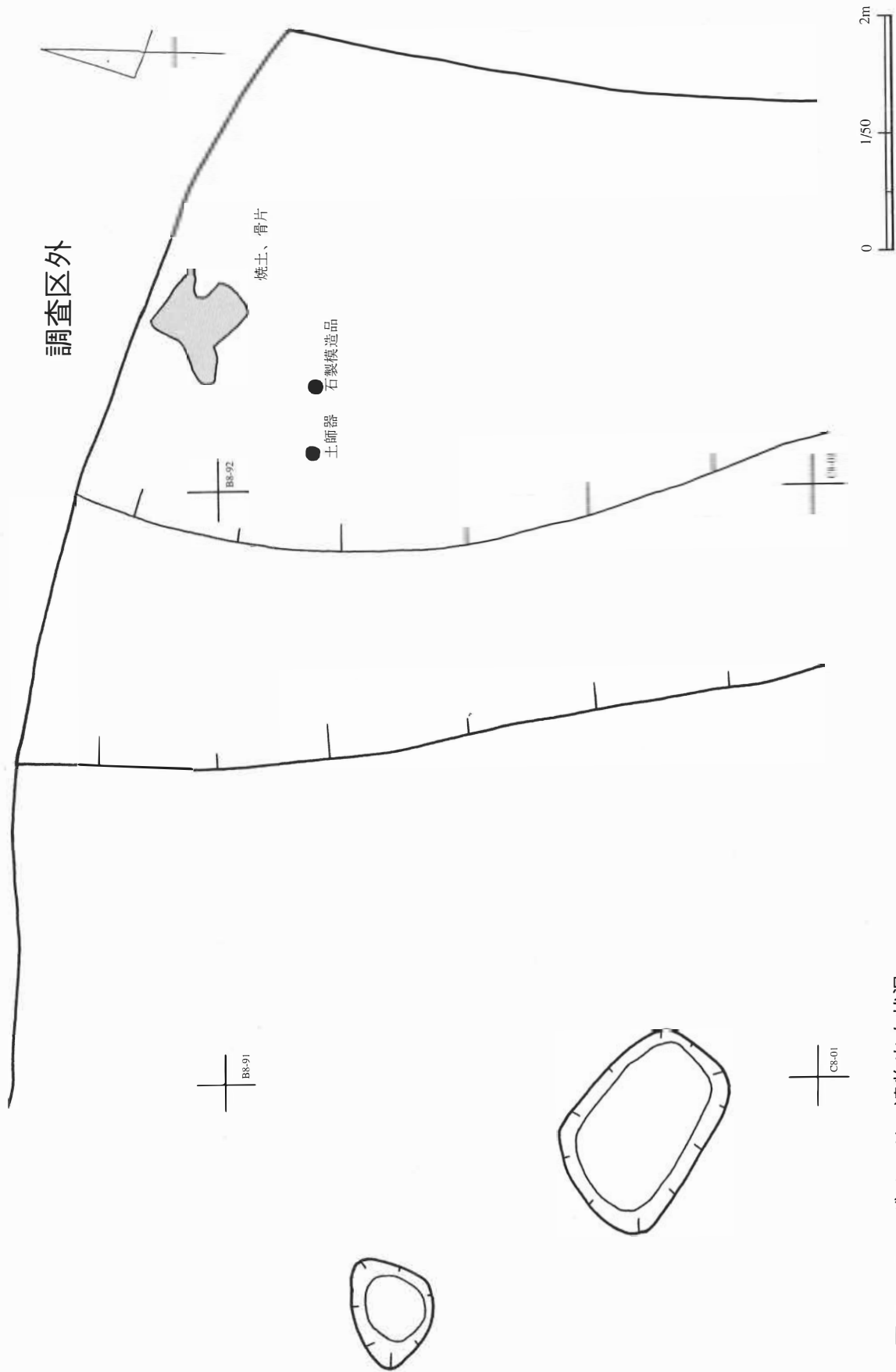


図68 B8-92グリッド 遺物出土状況

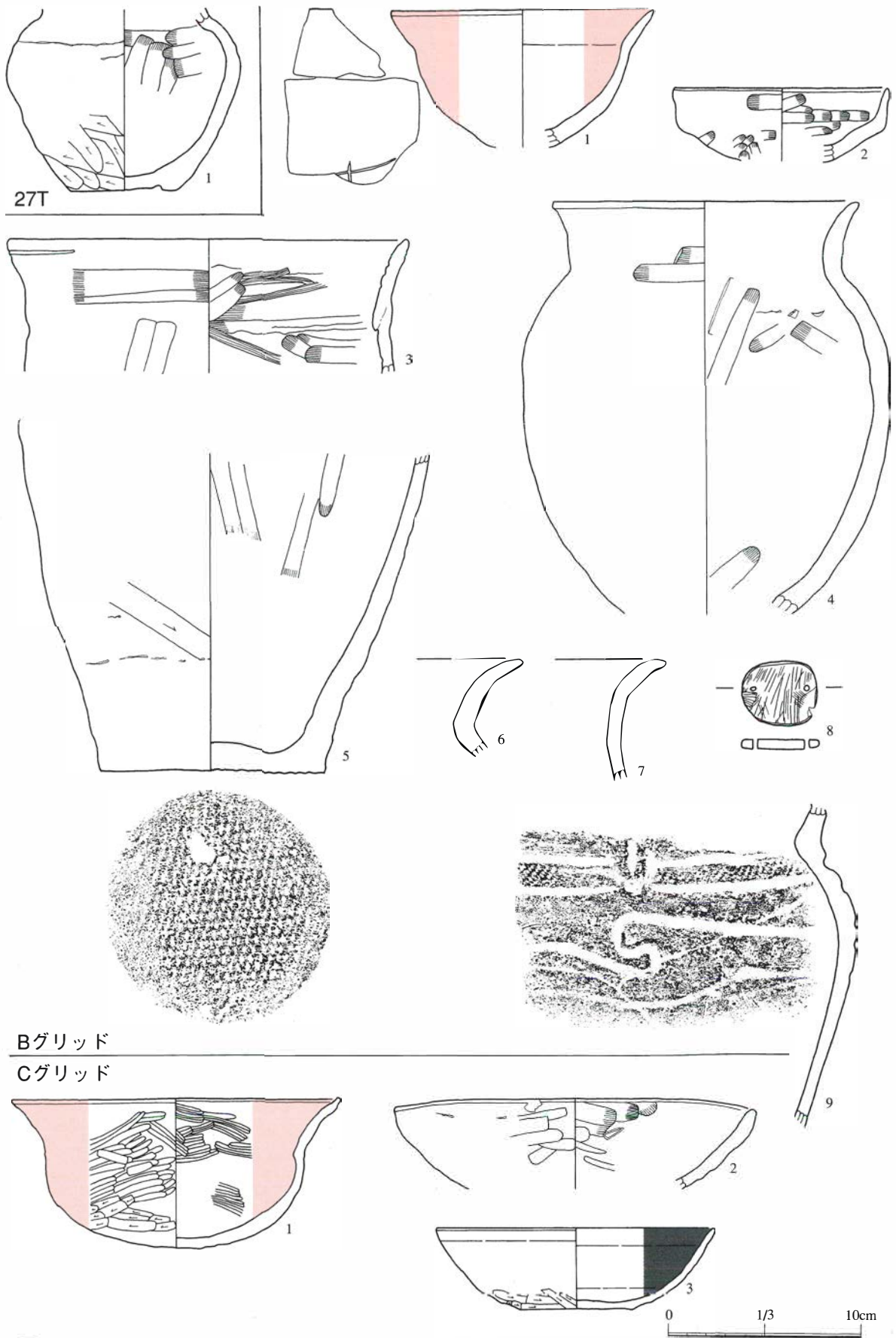


図69 27号トレンチ、B・Cグリッド出土遺物 (1)

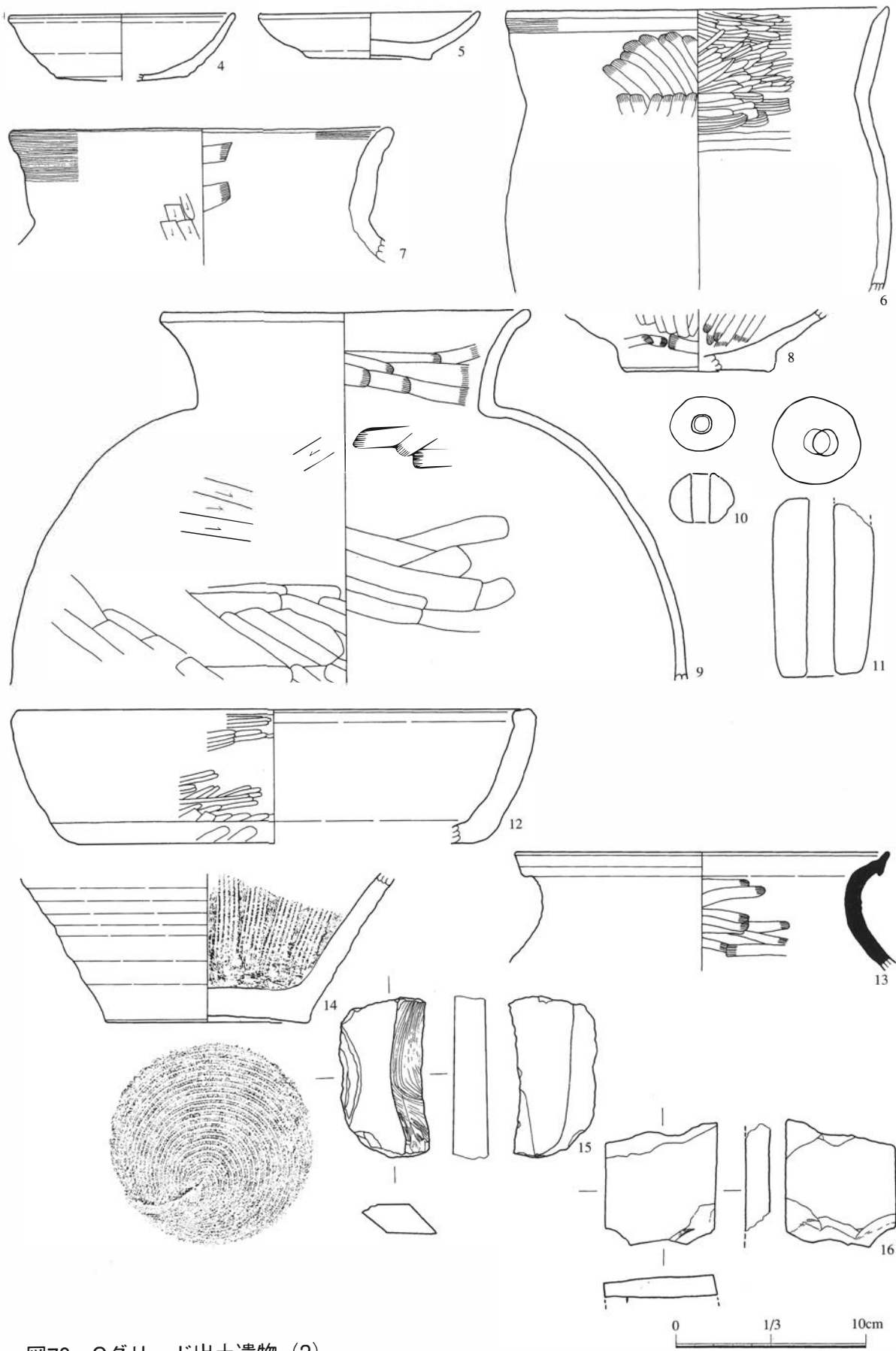


図70 Cグリッド出土遺物 (2)

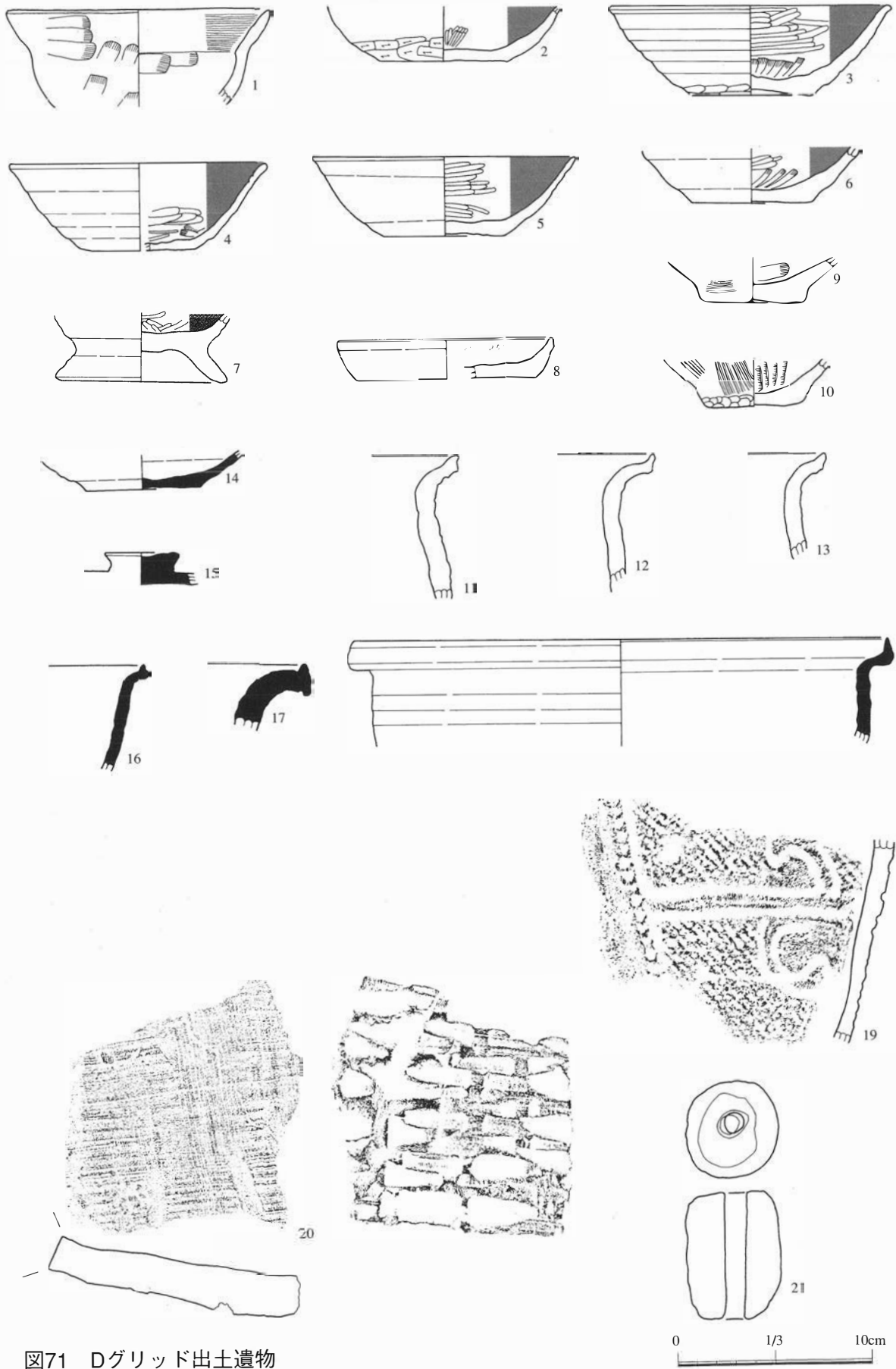


図71 Dグリッド出土遺物

第4章 まとめ

(古墳時代)

今回の調査では古墳時代に位置付けられる主な遺構は1号墳・2号墳とした2基の方形規格の墳墓群と1号竪穴住居跡、71号土坑などが代表的な遺構として取り上げることができる。

まず1号墳・2号墳として位置付けた方形規格の墳墓群は、墳丘部や周囲の溝の掘り込み面は後世の削平によって失われており、遺構の遺存状況は決して良いと言える状況ではない。しかし、方形に巡る溝の存在は当遺構が周辺地と確実に区画された場所であることを示しており、これらの方形に巡る溝に区画された内部には、いわゆる古墳のような施設が存在していたと考えても大きな誤りではないと思われる。このような方形に巡る古墳時代の溝跡は、いわゆる「方形周溝墓」として位置付けられることが多い。しかし、これらの方形周溝墓として扱われている墳墓については、本来周溝の内部に墳丘に相当する盛土が存在していたかについては判明していない場合が多く、本来区画の内部に墳丘が存在していたものが、後世の削平によって周囲に巡っていた周溝部がいわば「古墳の跡」のように検出された可能性も残されている。今回、荒井前遺跡で検出された2基の方形に巡る溝についても「方形周溝墓」であるか、削平された「古墳の跡」であるかについては意見が分かれるところであろう(註4)。

しかし、今回の荒井前遺跡の調査では1号墳の調査において周溝内堆積土で墳丘部から周溝部へ流出したと思われる堆積土が認められ、周溝に区画された内部にはある程度の盛土状の遺構が存在していたものと想定されることから、墳丘を有する古墳として扱っている。

さて、この1号墳の周溝からは比較的まとまった量の土師器が出土している。出土した土師器の中で特に特徴的なのが図10-9に図示した複合口縁部を有する大型の壺型土器である。この壺型土器は体部外面の調整がハケメ調整後にミガキ調整を施しており、塩釜式の中でも比較的古い様相をもつものと評価される。また、この壺型土器とともに出土した器台においても非常に精製された作りを有しており、また出土量も多いことから1号墳が築かれた時期は、古墳時代前期の中でも比較的古い時期である可能性が高い。

一方、隣接して築かれた2号墳は、1号墳よりも遺構の遺存状況は良くなかったが、かろうじて削平を免れた周溝部から土師器が出土している。2号墳から出土した土器は1号墳よりも少ないが、やはり器面に明瞭なミガキが施された壺型土器が出土しているのをみると、1号墳とほぼ同時期か前後する時期に築かれたものと評価しておきたい。

さて、現在までの原町市で、古墳時代の墳墓の調査例については、荒井前遺跡の対岸に位置する桜井古墳群で大きな成果が上がっている。桜井古墳群は古墳時代前期と後期に集中的に墳墓が築かれた東北地方を代表する古墳群であることで知られている。古墳群は上渋佐、高見町の2支群に分けられ、現在までに総数44基の墳墓が確認されている。特に桜井古墳(上渋佐支群1号墳・前方後方墳)(註5)や同支群7号墳(方墳)は古墳時代前期に築かれた墳墓であることが判明しており(註5)、今回の荒井前遺跡で検出された2基の墳墓群との関係が注目される。

桜井古墳からは墳丘に供献された底部穿孔二重口縁壺が出土している。桜井古墳から出土した底部穿孔二重口縁壺は器面調整がハケ調整で終了しており、荒井前遺跡1号墳から出土した壺型土器から見ると後出的な様相が強い。一方7号墳からは良好な出土遺物に恵まれなかったことから、年代的な位置付けは困難であると言わざるを得ないが、桜井古墳に先行する可能性が高いと考えられている。従って、新田川流域では4世紀代に築かれた前方後方墳である桜井古墳以前に築造された墳墓は方墳である可能性が高い。

荒井前遺跡の2基の墳墓と7号墳については直接、築造時期を比較することはできないため、墳墓の新旧関係については言及を控えておくが、いずれの墳墓も古墳時代の中でも古い時期に築かれた可能性が高い墳墓群であると評価しておきたい。

また、他地域で調査され「方形周溝墓」として報告された墳墓群については何れも前方後円墳集成1期もしくは2期に位置付けられていることを考慮すれば、荒井前遺跡で検出された2基の墳墓群も集成編年1期～2期にかけた時期に築かれた可能性は高い(註7)。

また、荒井前遺跡の調査では非常に良好な竪穴住居跡が検出されている。1号住居跡とされた竪穴住居跡は一辺10mを測る大型の住居跡である。遺構の上面は後世の削平によって削られていたが、壁周溝や壁柱穴などが確認されている。この住居跡にはカマド施設は存在せず、住居跡中央に炉が設けられている。また住居跡からは器台・高杯・甕・壺などの土師器が出土しており、何れの土師器も古墳時代前期である塩釜式に位置付けられるものである。また当該住居跡には間仕切りと考えられる溝状遺構と、住居跡の出入り口に設けられた梯子を受けるための柱穴、並びに出入り口の延長線上に設けられた炉跡の存在などを考慮すれば、典型的な塩釜式期の住居跡であると評価することができる。

このように、新田川の両岸には古墳時代前期の塩釜式期に位置付けることができる住居跡や墳墓が確認され、(註8・9)新田川流域に営まれた古墳時代前期の遺構の広がりには広範囲に及んでいることが確認されたことになる。

このことは北岸に営まれた集落・墳墓群と、南岸に営まれた集落・墳墓群という立地的な相違が時期的なものであるのか、集団的な相違を示しているのかという新たな問題が提示されたことになり、今後桜井古墳群・高見町遺跡群を含め、この地における古墳時代の様相について検討する必要があると考えられる。

(古代)

古代の遺構で注目されるのは、小鍛冶遺構と2号溝跡から出土した多量の土師器である。荒井前遺跡の北東約2.5kmには7世紀後半から10世紀初頭にかけて築かれた東日本最大規模の金沢地区製鉄遺跡群があるが、製鉄炉・木炭窯のほかに8世紀の鍛冶炉も7例ほど発見されている(註10)。原町市内には金沢地区製鉄遺跡群や蛭沢遺跡群(註11)の他にも海岸近くの低位丘陵に製鉄炉が分布するが、鉄を加工する小鍛冶は遺構自体が確認しにくいこともあり、発見例は数少ない。製鉄炉(大鍛冶)の鉄の生産量からすれば、鍛冶炉(小鍛冶)の数が少ないのは、生産された鉄の大半は運搬に適した鉄延などに加工し、多賀城や東北各地の城柵など中央

政府における東北経営の拠点に運ばれて、農工具や武器に加工されたと考えられる。荒井前遺跡で確認された小鍛冶とその関連遺構は金沢製鉄遺跡群の操業時期に重なることから、金沢製鉄遺跡群で生産された鉄を加工していたことが考えられる。

2号溝跡には多量の土師器・須恵器が投棄されていたが、小鍛冶遺構が操業していた時期のものと考えられる。遺跡を東西に区画する2号溝の両側に小鍛冶関連遺構があることから、今回未調査であった2号溝跡の西側部分付近にも小鍛冶等の遺構が分布すると考えられる。

(中世)

「調査に至る経緯」でもふれたが、遺跡西端の畑の一角には嘉元二年(1304)銘の板碑を含む中世の板碑群がある。今回の調査範囲外であったため板碑周辺の状況は不明だが、市内に点在する他の板碑も、地表に現れた部分にとどまらず、地下遺構も含めて調査する必要があるだろう。(二本松)

《参考文献・引用文献》

- 註 1 『原町市史』 1995年 原町市
- 註 2 鈴木文雄「相馬胤平居館跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書』1 1997年 原町市教育委員会
- 註 3 安田 稔ほか「大船迫A遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告』V
- 註 4 菊地芳朗・青山博樹「東北地方における前方後方墳の動向」『前方後方墳を考える』 1995年 東海考古学フォーラム
- 註 5 荒淑人ほか『国史跡桜井古墳』 2002年 原町市教育委員会
- 註 6 鈴木文雄ほか『桜井古墳群上洪佐支群7号墳発掘調査報告書』 2001年 原町市教育委員会
- 註 7 辻 秀人・藤沢 敦「陸奥」『前方後円墳集成』東北関東編 1994年 山川出版
- 註 8 竹島國基編『桜井』竹島コレクション考古図録第3冊
- 註 9 『高見町古墳群』
- 註 10 前掲註3に同じ。
- 註 11 堀 耕平ほか『蛭沢遺跡群C・D地区—古代製鉄遺跡の調査—』2000年 原町市教育委員会・山武考古学研究所

表 10 1号墳出土土器観察表

挿 番 号	No.	種 別	器 種	法 量	調 整	備 考
				口径/器高/底径		
10	1	土師器	器台	8.4/(4.9)/—	杯部：内指押ナデ 外面ヘラナデ 脚部：内ヘラナデ 外ミガキ	
10	2	土師器	器台	8.4/(4.1)/—	杯部：内面ヘラナデ 外面ヘラミガキ? 脚部：内外面不明	
10	3	土師器	高杯	15.0/4.6/8.4	内面：口底ミガキ黒色 外面：口体部ナデ 底部糸切り	
10	4	土師器	高杯	—/(4.9)/—	杯部：不明 脚部：内面ヘラナデ 外面摩滅のため不明	
10	5	土師器	高杯	—/(1.4)/10.6	脚部：内面ヘラナデ 外面ヘラナデ	
10	6	土師器	壺	—/(2.9)/5.8	内面：体～底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体～底部ヘラナデ	
10	7	土師器	手捏	—/(3.7)/4.0	内面：体～底部ヘラナデ、指ナデ 外面：体～底部ヘラナデ	
10	8	土師器	杯	14.8/(4.2)/—	杯部：内面ヘラミガキ黒色 外面ヘラミガキ	
10	9	土師器	壺	21.0/42.3/7.6	口：ヨコナデ 体底部：内ヘラナデケズリ外ヘラナデ、ハケ目	複合口縁
11	10	土師器	壺	22.8/(4.0)/—	内面：口縁部ヨコナデ 外面：口縁部ヨコナデ	
11	11	土師器	壺	20.4/(5.0)/—	内面：口体部ヘラナデ赤彩 外面：口ヨコナデ、赤彩 体部ヘラナデ	
11	12	土師器	壺	19.4/(4.2)/—	内面：口～体部ヘラナデ 外面：口縁部剥離 体部ヘラケズリ	
11	13	土師器	壺	20.2/(5.3)/—	内面：口縁部ハケ目、ヘラナデ 外面：口縁部ハケ目	
11	14	土師器	壺	13.0/(3.8)/—	内面：口体部ミガキ黒色処理 外面：口～体部ヘラミガキ、黒色処理	
11	15	土師器	壺	—/(5.7)/4.6	内面：体～底部ヘラナデ 外面：体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ	
11	16	土師器	壺	—/(2.7)/3.2	内面：体～底部ヘラナデ 外面：体部ハケ目 底部ヘラケズリ	
11	17	土師器	壺	—/(3.4)/6.2	内面：体～底部摩滅のため不明 外面：体～底部ヘラナデ	
11	18	土師器	壺	—/(1.9)/6.6	内面：体～底部摩滅のため不明 外面：体～底部ヘラナデ	

表 11 2号墳出土土器観察表

挿 番 号	No.	種 別	器 種	法 量	調 整	備 考
				口径/器高/底径		
11	1	土師器	高杯	—/(5.3)/—	杯部 内ミガキ、黒色処理 脚部：内面ヘラナデ 外面ヘラナデ	
11	2	土師器	杯	—/(1.6)/5.4	内面 体底部ミガキ黒色 外面 体部ナデ、ケズリ 底部糸切り	
11	3	赤焼土器	杯	12.8/4.2/5.4	内面：口底部ロクロナデ後ナデ 外面：口～底部ロクロナデ後ナデ	
11	4	赤焼土器	皿	11.6/(1.3)/—	内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ	
11	5	土師器	壺	19.2/(9.0)/—	内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ	
11	6	土師器	壺	—/(6.5)/7.7	内面：体～底部ヘラナデ 外面：体部ハケ目、ヘラミガキ 底部不明	
11	7	土師器	壺?	—/(8.0)/21.9	内面 体部ヘラナデ・ミガキ 外面 体部ヘラナデ後ミガキ	底部形成せず
11	8	土師器	壺	—/(11.7)/—	内面 体部ヘラナデミガキ 外面 体部ハケ目、ヘラミガキ	
11	9	土製品	土 錘	長4.6 径3.1		

表 12 1号住居跡出土土器観察表

挿図号	No.	種別	器種	法量	調	査	備考
				口径/器高/底径			
14	1	土師器	器台	8.2/(8.7)/-	内面	不明 脚部ナデか? 外面 杯部ヘラケズリ 脚部摩擦で不明	
14	2	土師器	器台	8.2/(5.6)/-	内面	脚部指ナデ 外面 脚部ヘラミガキ、ヘラケズリ	
14	3	土師器	器台	-/(6.1)/12.6	内面	脚部指ナデ、ハケ目 外面 脚部ヘラケズリ、指ナデ、ハケ目	透かし4
14	4	土師器	器台	-/(4.9)/-	内面	脚部ヘラケズリ、ハケ目 外面 脚部ヘラミガキ、赤彩	
14	5	土師器	高杯	-/(7.5)/17.3	内面	脚部指ナデ、ハケ目 外面 脚部指ナデ、ヘラミガキ	
14	6	土師器	高杯	-/(5.0)/-	内面	脚部ヘラケズリ 外面 杯部ヘラミガキ 脚部ヘラケズリ	透かし3
14	7	土師器	高杯	-/(4.5)/-	内面	脚部ヘラケズリ 外面 脚部ヘラミガキ、赤彩	
14	8	土師器	杯	16.4/(4.8)/-	内面	口体部ミガキ赤彩 外面 口体部ミガキ、赤彩、ヘラケズリ	
14	9	土師器	杯	-/(4.0)/2.8	内面	体底部ヘラナデ 外面 体底部ヘラケズリ	
14	10	土師器	杯	9.2/3.9/4.2	内面	口底部ヘラナデ 外面 口体部ヘラナデ 体底部ヘラケズリ	
14	11	土師器	手捏土器	-/(3.4)/-	内面	体部指ナデ、ヘラナデ 外面 体部ヘラナデ	
14	12	土師器	埴	8.6/(5.4)/-	内面	口頸部ヘラミガキ、ヘラケズリ 外面 口頸部ヘラミガキ	
14	13	土師器	甕	20.4/(7.2)/-	内面	口頸部ヘラナデ、ハケ目 外面 口頸部ヨコナデ、ハケ目	
14	14	土師器	甕	17.1/(5.8)/-	内面	口ハケ 体部ヘラナデ 外面 口縁部指ナデ 体部ハケケズリ	
14	15	土師器	甕	21.7/(4.8)/-	内面	口~頸部ヘラナデ、ハケ目 外面 口~頸部ヨコナデ、ハケ目	
14	16	土師器	甕	10.0/(9.8)/-	内面	口縁部指ナデ 体部ハケヘラナデ 外面 口ヘラナデ 体部ハケ	
14	17	土師器	甕	13.2/(8.6)/-	内面	口縁部不明 体部ヘラナデ 外面 口~体部ハケ目	
14	18	土師器	甕	11.0/(4.3)/-	内面	口縁部ハケミガキ 体部ヘラナデ 外面 口体部ハケミガキ	
14	19	土師器	甕	20.2/(4.4)/-	内面	口~体部ヘラナデ 外面 体部ハケ目	
14	20	土師器	甕	20.6/(6.9)/-	内面	口~体部ヘラミガキ、赤彩 外面 口縁部ヨコナデ 体部ハケ目	
14	21	土師器	甕	16.5/(3.8)/-	内面	口~体部ヘラナデ 外面 口縁部ヨコナデ 体部ハケ目	
15	22	土師器	甕	22.0/(7.8)/-	内面	口縁部ハケ目 体部指ナデ、ヘラナデ 外面 口体部不明	
15	23	土師器	甕	-/(12.0)/-	内面	体部ヘラナデ 外面 体部ハケ目	
15	24	土師器	甕	16.0/(8.4)/-	内面	体部ヘラナデ 外面 ハケ目	
15	25	土師器	甕	14.8/(9.0)/-	内面	口ハケ 体部ヘラナデ、ケズリ 外面 口ハケ 体部ハケケズリ	
15	26	土師器	甕	14.5/(4.4)/-	内面	口~体部指ナデ、ヘラナデ 外面 口縁部ヨコナデ 体部ハケ目	
15	27	土師器	甕	35.0/(5.4)/-	内面	口ハケ 体部ヘラナデ 外面 口ハケ 体部ヘラナデ、ケズリ	
15	28	土師器	甕	36.4/(4.5)/-	内面	口~体部ヘラナデ 外面 口縁部ヨコナデ 体部指ナデ	
15	29	土師器	手捏土器	5.2/4.4/3.4	内面	口~底部指ナデ 外面 指ナデか?	
15	30	土師器	甕	-/(1.9)/4.4	内面	体~底部ナデ 外面 体~底部ヘラナデ	
15	31	土師器	甕	-/(2.0)/5.4	内面	体~底部ヘラナデ 外面 体部ハケ目、ヘラナデ 不明	
15	32	土師器	甕	-/(3.0)/4.0	内面	体~底部ヘラナデ 外面 体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ	
15	33	土師器	甕	-/(5.6)/8.2	内面	体部ヘラケズリ 底部ヘラナデか? 外面 体部ヘラケズリ	
15	34	土師器	壺	-/(1.6)/-	内面	底部摩擦のため不明 外面 体~底部ハケ目	底部穿孔
15	35	土師器	杯	-/(1.1)/6.0	内面	体~底部黒色処理 外面 体部回転削り 底部ヘラナデか?	
15	36	土製品	土玉	径3.2高2.8穴径0.7			
15	37	土製品	土玉	径4.0高4.2穴径0.6			
15	38	土製品	土玉	径2.2高2.1穴径0.5			
15	39	土製品	土玉	径4.1高4.5穴径0.7			
15	40	土製品	土玉	径2.3高2.5穴径0.5			
15	41	石製品	砥石	長14.8幅9.1厚2.7			

表 13 3号住居跡出土土器観察表

挿図号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
19	1	土師器	鉢	16.4/(7.6)/-	内面 口~体部ヘラミガキ、黒色処理 外面 口縁部ヘラナデ 体部ヘラケズリ
19	2	土師器	鉢	17.6/(10.6)/-	内面 口~体部ヘラナデ 外面 口~体部ヘラナデ
19	3	土師器	甕	20.6/(8.5)/-	内面 口~体部ヘラナデ 外面 口~体部指ナデか?
19	4	石製品	擦り石	長11.1幅9.6厚7.9	

表 14 4号住居跡出土土器観察表

挿図号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
19	1	土師器	杯	15.4/5.0/-	内面 口~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面 口~体部ロクロナデ
19	2	土師器	杯	13.8/5.2/6.2	内面 体底部ミガキ、黒色 外面 口体部ロクロナデ 体部ヘラケズリ底部系切り
19	3	土師器	高台杯	-/(1.9)/8.2	内面 体~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面 体部ロクロナデ 底部不明
19	4	赤焼土器	杯	10.4/3.0/5.4	内面 口~底部ロクロナデ 外面 口~体部ロクロナデ
19	5	土師器	甕	21.0/(4.8)/-	内面 口~体部ヘラナデ 外面 口~体部指ナデ、指押さえ
19	6	土師器	甕	17.6/(8.3)/-	内面 口~底部ロクロナデ 外面 口~体部ロクロナデ 底部系切り
19	7	土師器	甕	17.8/(3.8)/-	内面 口~体部ロクロナデ 外面 口~体部ロクロナデ
19	8	須恵器	甕	19.2/(8.0)/-	内面 口~体部ロクロナデ 外面 口~体部ロクロナデ
19	9	石製品	擦り石	長8.7幅7.4厚5.7	

表 15 2号溝跡出土土器観察表

挿図号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
28	1	土師器	杯	15.0/4.4/5.0	内面 口底部ヘラミガキ、黒色処理 外面 体部ヘラケズリ 底部系切り
28	2	土師器	杯	15.0/4.7/5.0	内面 口底部ミガキ、黒色 外面 口体部ロクロナデ 体底部ヘラケズリ
28	3	土師器	杯	14.0/4.5/6.0	内面 口底部ミガキ、黒色 外面 体部ヘラケズリ 底部系切り 墨書
28	4	土師器	杯	13.8/4.0/6.8	内面 口底部ミガキ、黒色 外面 口体部ロクロナデ 体部ケズリ
28	5	土師器	杯	14.0/5.0/6.0	内面 口~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面 体部ヘラケズリ 底部系切り
28	6	土師器	杯	12.8/(4.2)/-	内面 口~体部ヘラミガキ、黒色処理 外面 口~体部ヘラミガキ
28	7	土師器	杯	-/(2.8)/7.0	内面 体~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面 体部ヘラケズリ 底部系切り後ヘラケズリ
28	8	土師器	杯	12.8/4.2/6.4	内面 口~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面 体部ヘラケズリ 底部系切り後ヘラケズリ
28	9	土師器	杯	12.2/4.0/4.8	内外面 口~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面 底部ヘラケズリ
28	10	土師器	杯	17.0/(4.2)/-	内面 口体部ミガキ、黒色処理 外面 口~体部ミガキ 体部ヘラ描き
28	11	土師器	杯	-/(2.4)/6.5	内面 体底部ミガキ、黒色処理 外面 体部ロクロナデ 底部ケズリ 底部に墨書
28	12	土師器	杯	-/(1.3)/6.2	内面 体底部ミガキ、黒色処理 外面 体部ヘラケズリ 底部系切り底部ヘラ描き
28	13	土師器	杯	-/(0.9)/8.6	内面 体~底部ヘラミガキ 外面 体~底部ヘラケズリ、赤彩 底ヘラ描「十」

28	14	土師器	杯	—/(2.4)/—	内面：口～体部ヘラミガキ、黒色処理 外面：口～体部ロクロナデ	体中半に墨書
28	15	土師器	杯	—/(2.6)/—	内面：口～体部ヘラミガキ、黒色処理 外面：口～体部ロクロナデ	体中半に墨書
28	16	土師器	杯	—/(0.9)/—	内面：底部ヘラナデ 外面：底部ヘラケズリ	底ヘラ描「十」
28	17	土師器	高台杯	12.6/5.3/7.0	内面：口～底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：口～底部ロクロナデ	
28	18	土師器	高台杯	14.8/7.9/8.4	内面：口底部ミガキ、黒色 外面：口～体部ロクロナデ 底部系切り	
28	19	土師器	高台杯	—/(4.5)/9.0	内面：体底部ミガキ、黒色 外面：体部ロクロナデ 底部ヘラナデ	
28	20	土師器	高台杯	—/(7.5)/9.8	内面：体底部ミガキ、黒色 外面：体～底部ヘラミガキ、黒色処理	
28	21	土師器	高台杯	—/(2.8)/7.8	内面：体底部ミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ 底部不明	
28	22	土師器	高台杯	—/(3.4)/7.0	内面：体底部ミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ 底部系切り	
28	23	土師器	高台杯	—/(1.2)/5.8	内面：体底部ミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ 底部菊絞り？	
28	24	土師器	高台杯	—/(3.2)/7.2	内面：体底部ミガキ、黒色 外面：体～底部ロクロナデ、黒色処理	
28	25	土師器	高台杯	—/(2.7)/6.6	内面：体底部ミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ 底部系切り	
29	26	赤焼土器	杯	12.4/4.2/7.0	内面：口底部ロクロナデ 外面：口体部ナデ 体部ケズリ 底部系切り	
29	27	赤焼土器	杯	—/(1.1)/5.4	内面：体～底部ロクロナデ 外面：体部ヘラケズリ 底部系切り	
29	28	赤焼土器	杯	—/(1.6)/6.6	内面：体～底部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ 底部系切り	
29	29	赤焼土器	杯	13.2/2.8/6.8	内面：口～底部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ 底部系切り	
29	30	赤焼土器	杯	12.1/4.1/5.8	内面：口～底部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ 底部系切り	
29	31	赤焼土器	杯	14.0/3.8/6.4	内面：口～底部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ 底部系切り	
29	32	赤焼土器	杯	13.5/4.0/5.6	内面：口～底部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ 底部系切り	
29	33	赤焼土器	杯	—/(1.8)/5.4	内面：体底部煤付着不明 外面：体部ロクロナデ 底部ヘラケズリ？	
29	34	赤焼土器	杯	16.4/3.6/—	内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ	
29	35	赤焼土器	杯	102.7/4.0/4.2	内面：口ナデ 体部ヘラナデ 外面：口～体部ロクロナデ 底部系切り	
29	36	赤焼土器	皿	11.8/1.9/4.4	内面：口～底部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ 底部系切り	
29	37	赤焼土器	高台杯	14.2/(4.7)/—	内面：口～底部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ 底部系切り	
29	38	赤焼土器	高台杯	—/(3.4)/8.4	内面：体～底部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ 底部系切り	
29	39	土師器	甕	22.6/(17.4)/—	内面：口ヨコナデ 体部ヘラナデ 外面：口縁部ナデ 体部ヘラナデ	
29	40	土師器	甕	18.3/18.3/—	内面：口～体部指ナデ 外面：口縁部指押さえ 体部指ナデ	
29	41	土師器	甕	16.4/(12.9)/—	内面：口ナデ 体部ヘラナデ 外面：口縁部ナデ 体部ヘラナデ	輪積み痕あり
29	42	土師器	甕	16.6/(8.2)/—	内面：体～底部ロクロナデ 外面：体～底部ロクロナデ	
29	43	土師器	甕	16.0/(6.0)/—	内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ	
29	44	土師器	甕	12.8/(4.8)/—	内面：口体部ナデ 外面：口ロクロナデ 体部ロクロナデケズリ	
30	45	土師器	鉢	13.7/(6.5)/—	内面：口体部ナデ 外面：口縁部ナデ 体部ロクロナデ、ヘラナデ	
30	46	土師器	鉢	—/(9.8)/—	内面：体～底部ロクロナデ 外面：体～底部ロクロナデ	
30	47	土師器	甕	—/(3.4)/9.2	内面：体底部指ナデ 外面：体部ヘラナデ、ヘラケズリ 底部指ナデ	
30	48	土師器	甕	—/(3.4)/6.0	内面：体～底部ヘラミガキ、赤彩 外面：体部指押さえ 底部ナデ	
30	49	縄文土器	甕	19.4/(7.1)/—	内面：口～体部ヘラナデ 外面：口縁部ナデ 体部縄目	
30	50	土師器	不明	径3.9 高6.8	内面：体底部ミガキ 外面：体部ミガキ 底部ヘラナデ、ヘラケズリ	
30	51	土製品	土鐘	長4.7 径3.0		
30	52	土製品	不明	長3.1/幅2.1/厚0.6		
30	53	土製品		径2.2 厚1.1		おはじき状
30	54	土製品	円盤状	直径9.6 厚0.7	内外面指ナデ	
30	55	須恵器	杯	11.8/3.8/7.0	内面：口底部ロクロナデ 外面：口体部ロクロナデ 底部回転ヘラ切	溶着滓
30	56	須恵器	杯	13.4/3.1/7.0	内面：口～底部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ 底部系切り	内面に溶着滓
30	57	須恵器	長頸瓶	9.8/(2.1)/—	内面：口～頸部ロクロナデ 外面：口～頸部ロクロナデ	
30	58	須恵器	長頸瓶	12.6/(7.1)/—	内面：口縁部ロクロナデ 外面：口縁部ロクロナデ	
30	59	須恵器	長頸瓶	—/(8.0)/—	内面：頸部ロクロナデ 外面：頸部ロクロナデ	
30	60	須恵器	甕	19.0/(3.6)/—	内面：口～頸部ロクロナデ 外面：口～頸部ロクロナデ	
30	61	須恵器	甕	20.8/(5.2)/—	内面：口頸部ロクロナデ、ヘラナデ 外面：平行タタキ後ロクロナデ	
30	62	須恵器	甕	17.0/(6.0)/—	内面：口体部摩滅不明 外面：口縁部ロクロナデ 体部ヘラナデ	
30	63	須恵器	瓶	—/(7.1)/7.0	内面：体底部ロクロナデ 外面：体底部ロクロナデ 体部ヘラケズリ	
30	64	須恵器	瓶	—/(6.6)/10.0	内面：体～底部ロクロナデ 外面：体～底部ロクロナデ	
30	65	須恵器	瓶	—/(4.3)/6.1	内面：体～底部ロクロナデ 外面：体～底部ロクロナデ	
30	66	須恵器	瓶	—/(6.9)/10.0	内面：体～底部ロクロナデ 外面：体～底部ロクロナデ	
31	67	須恵器	甕	—/(5.7)/11.7	内面：体～底部ヘラナデ 外面：体部平行タタキ	
31	68	須恵器	甕	—/(3.6)/16.0	内面：体～底部ハケ目 外面：体～底部ヘラナデ	
31	69	須恵器	甕	—/(6.9)/10.4	内面：体～底部ヘラナデ 外面：体～底部ヘラナデ	
31	70	須恵器	甕	—/(3.6)/13.6	内面：体～底部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ 底部系切り	
31	71	須恵器	甕	—/(6.7)/—	内面：口～頸部ロクロナデ 外面：頸部タタキ目	
31	72	須恵器	甕	—/(7.4)/—	内面：口～頸部ロクロナデ 外面：口～頸部ロクロナデ	
31	73	須恵器	甕	—/(5.2)/—	内面：口～頸部ロクロナデ 外面：口～頸部ロクロナデ	
31	74	須恵器	甕	—/(3.5)/—	内面：口～頸部ロクロナデ 外面：口～頸部ロクロナデ	
31	75	須恵器	長頸瓶	—/(3.5)/—	内面：口～頸部ロクロナデ 外面：口～頸部ロクロナデ	
31	76	須恵器	甕	—/(5.0)/—	内面：口～頸部ロクロナデ 外面：口～頸部ロクロナデ	砥石に再利用
31	77	須恵器	甕	—/(7.2)/—	内面：口～頸部ロクロナデ 外面：頸部ロクロナデ、櫛描文	
31	78	須恵器	甕	厚1.3	内面：頸部ロクロナデ 外面：頸部櫛描文	
31	79	陶磁器	碗	—/(4.0)/4.5	内面：体～底部ロクロナデ 外面：体～底部ロクロナデ	薄黄茶色の釉
31	80	石製品	模造品	長3.2/幅2.1/厚0.6		
31	81	鉄製品	刀子	長5.8/幅1.2/厚0.5		岩盤に付着
31	82	石製品	鍬	長14.6/幅9.7/厚1.5		

表 16 3号溝跡出土土器観察表

挿入 番号	No.	種別	器種	法量	調整	備考
				口径/器高/底径		
33	1	土師器	杯	12.2/5.8/—	内面：口底部ミガキ、黒色 外面：口ヨコナデ 体～底部ヘラケズリ	
33	2	土師器	杯	13.6/5.6/—	内面：口ヨコナデ 体底部ミガキ 外面：口ヨコナデ 体底部ケズリ	
33	3	土師器	杯	12.6/7.0/—	内面：口ナデ 体底部ミガキ 外面：口縁部ヨコナデ 体底部ケズリ	内外面赤彩
33	4	土師器	杯	11.2/6.7/—	内面：口底部ミガキ、赤彩 外面：口縁部ヘラミガキ、体底部ケズリ	底部線刻「十」
33	5	土師器	杯	12.5/4.3/—	内面：口～底部ヘラナデ 外面：口～底部ヘラナデ	
33	6	土師器	杯	—/(3.6)/—	内面：体～底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体～底部ヘラケズリ	
33	7	土師器	杯	14.0/(4.2)/—	内面：口体部ミガキ、黒色 外面：口ヨコナデ 体部ハケケズリ	
33	8	土師器	甕	14.9/16.4/7.4	内面：口ナデ 体底部ヘラナデ 外面：口ヨコナデ 体底部ヘラナデ	
33	9	土師器	甕	20.6/(4.4)/—	内面：口縁部ハケ目 外面：口縁部ハケ目	
33	10	土師器	甕	25.6/(10.6)/—	内面：口ナデ 体部ヘラナデ 外面：ヨコナデ 体部ヘラナデ	
33	11	土師器	甕	—/(3.1)/6.2	内面：体底部ヘラナデ、指ナデ 外面：体部ヘラケズリ 底部木葉痕	
33	12	土師器	甕	24.8/(20.1)/—	内面：口ナデ 体部ミガキ 外面：口縁部ヘラナデ 体部ヘラミガキ	
33	13	土製品	羽口	6.2/(10.6)/—		

表 17 4号溝跡出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
38	1	土師器	杯	11.8/(3.7)/-	内面:口~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:体~底部ヘラミガキ、黒色処理
38	2	土師器	鉢	18.2/13.4/12.8	内面:口~底部ヘラナデ 外面:口縁部ヘラナデ 体部ヘラケズリ 底部木葉痕
38	3	土師器	甕	-/(3.3)/9.6	内面:体~底部摩滅のため不明 外面:体部ヘラナデ、ヘラケズリ 底部ヘラナデ

表 18 8号溝跡出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
44	1	土師器	杯	12.6/4.0/7.4	内面:口縁部ヘラミガキ、黒色処理 外面:体部ヘラケズリ 底部糸切りヘラケズリ
44	2	土師器	杯	-/(1.7)/5.8	内面:体~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:体部ロクロナデ 底部回転ヘラ削り
44	3	土師器	杯	-/(1.7)/8.0	内面:体~底部体~底部ロクロナデ 外面:体部ロクロナデ 底部糸切り
44	4	土師器	高台杯	-/(2.6)/-	内面:体~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:体部ロクロナデ 底部糸切り
44	5	土師器	甕	-/(2.3)/8.2	内面:体~底部ヘラミガキ 外面:体~底部ヘラナデ
44	6	土師器	甕	-/(4.8)/10.0	内面:体~底部摩滅のため不明 外面:体~底部ヘラナデ
44	7	須恵器	瓶	8.9/(2.4)/-	内面:頸部ロクロナデ 外面:頸部ロクロナデ
44	8	須恵器	甕	-/(3.3)/13.2	内面:体~底部ヘラナデ 外面:体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ
44	9	須恵器	甕	-/(7.4)/-	内面:体部青海波文 外面:体部格子目状タタキ

表 19 1号ピット群出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
42	1	土師器	杯	14.6/3.4/-	内面:口~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:口~底部ヘラナデ、ヘラケズリ
42	2	土師器	杯	12.8/(4.7)/-	内面:口~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ
42	3	土師器	杯	16.2/5.4/-	内面:ヘラミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ 体~底部ヘラケズリ、ヘラミガキ
42	4	土師器	杯	13.4/4.1/7.4	内面:口~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ 体~底部ヘラケズリ
42	5	土師器	杯	14.6/(5.8)/-	内面:口~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ
42	6	土師器	杯	13.0/(5.4)/7.2	内面:口~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ 体~底部ヘラケズリ
42	7	土師器	椀	16.8/(6.4)/-	内面:口~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ、ヘラケズリ
42	8	土師器	杯	-/(0.7)/-	内面:底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:底部ヘラケズリ
42	9	土師器	椀	18.6/8.9/10.8	内面:口~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:口~底部ヘラミガキ 体~底部ヘラケズリ
42	10	土師器	杯	17.6/4.8/-	内面:口~底部ヘラミガキ 外面:口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ
42	11	土師器	台杯	12.2/5.1/6.8	内面:口~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:口~底部ロクロナデ 体部ヘラケズリ
42	12	土師器	甕	11.1/11.6/2.8	内面:口縁部ヘラナデ、ヘラ押さえ 外面:口~底部ヘラナデ 体~底部ヘラケズリ
42	13	土師器	甕	15.4/(19.0)/-	内面:口ヨコナデ 体部ヘラナデ 外面:口ヨコナデ 体部ヘラケズリ、ヘラナデ
42	14	土師器	甕	-/(1.5)/10.5	内面:底部指頭圧痕 外面:底部木葉痕
42	15	土製品	土玉	径3.1 長2.5	
42	16	土製品	土錘	径3.1 長5.0	
43	17	土製品	土鈴	高4.1 残存径6.1	
43	18	土製品	土鈴	径3.8 高3.6	
43	19	須恵器	甕	22.4/(7.6)/-	内面:口~頸部ロクロナデ 外面:口~頸部ロクロナデ
43	20	須恵器	甕	長14.3 厚1.6	内面:体部指押さえ、指ナデ 外面:体部ハケ目、網目状タタキ

表 20 2号ピット群出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
43	1	土師器	甕	-/(2.3)/7.6	内面:体~底部ヘラナデ 外面:体部ヘラナデ 底部木葉痕

表 21 3号ピット群出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
43	1	土師器	甕	14.0/4.4/-	内面:口ヨコナデ 体部ヘラナデ 外面:口ヨコナデ、ヘラナデ 体部ヘラナデ

表 22 7号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
49	1	縄文土器	甕	-/(7.6)/9.2	内面:体~底部ナデ 外面:体部縄文 底部ナデか?
49	2	石	摺石	長8.0 幅7.1 厚5.4	

表 23 11号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
49	1	土師器	杯	-/(2.8)/-	内面:体~底部ヘラミガキ、黒色処理 外面:体~底部ヘラケズリ
49	2	土師器	甕	-/(2.6)/4.4	内面:体~底部指ナデ 外面:体~底部ヘラナデ
49	3	土師器	甕	22.5/(8.3)/-	内面:口ヨコナデ 体部ハケ、ヘラナデ 外面:口ヨコナデ 体部ヘラナデ
49	4	土師器	甕	16.4/(9.7)/-	内外面:摩滅のため不明

表 24 12号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
49	1	陶磁器	碗	-/(1.9)/5.0	内面:体~底部ロクロナデ 外面:体~底部ロクロナデ

表 25 15号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量		調整
				口径/器高/底径		
49	1	土師器	杯	14.4/(3.5)/—		内面：口～底部ヘラミガキ 外面：口縁部ヨコナデ 体部ナデか？

表 26 17号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量		調整
				口径/器高/底径		
49	1	土師器	杯	12.6/4.1/6.6		内面：口底部ミガキ、黒色 外面：口体部ナデ底部ケズリ底部に墨書「厨」
49	2	赤焼土器	血	11.6/1.9/9.0		内面：口～底部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ 底部系切り
49	3	赤焼土器	血	—/(1.4)/7.2		内面：口～体部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ 底部系切り
49	4	赤焼土器	血	—/1.5/6.4		内面：口～体部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ 底部系切り
49	5	土師器	甌	14.8/(8.5)/—		内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ
49	6	石製品	砥石	長14.5/幅4.0/厚2.3		
49	7	石製品	硯	長5.5/幅3.4/厚1.7		
49	8	石製品	砥石	10.0/4.0/1.5		
49	9	石製品	砥石	7.3/6.1/1.4		
49	10	金属製品	簪	長13.4 幅0.7		

表 27 24号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量		調整
				口径/器高/底径		
51	1	土師器	杯	14.2/5.7/—		内面：口ヨコナデ、赤彩 体底部ヘラミガキ赤彩 外面：口ヘラナデ、赤彩
51	2	土師器	杯	13.6/5.4/—		内面：口ヨコナデ 体～底部ヘラナデ、赤彩 外面：口縁部ヨコナデ、赤彩
51	3	土師器	杯	14.8/6.2/—		内面：口～底部ヘラナデ 外面：口～体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ
51	4	土師器	杯	10.6/(4.1)/—		内面：口体部ヘラミガキ、黒色処理 外面：口～体部ヘラミガキ、黒色処理
51	5	土師器	椀	11.6/8.2/—		内面：口底部ミガキ、黒色処理 外面：口縁部ヘラナデ 体～底部ケズリ
51	6	土師器	椀	13.6/7.4/6.4		内面：口～底部指ナデ、黒色処理 外面：口～底部指ナデ
51	7	土師器	甕	19.1/(17.5)/—		内面：口ヘラナデ体部ナデヘラナデ 外面：口ヨコナデ体部ハケヘラナデ
51	8	土師器	蓋	14.8/3.4/9.8		内面：体部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ 頂部回転ヘラケズリ
51	9	陶磁器	灯明皿	5.9/2.3/3.5		内外面：ロクロナデ 底部系切り 外面口縁部～内面に鉄軸芯立ても完存
51	10	陶磁器	灯明皿	5.3/1.7/3.6		内外面：ロクロナデ 底部系切り 外面口縁部～内面に鉄軸芯立て欠損

表 28 34号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量		調整
				口径/器高/底径		
52	1	土師器	甕	—/(42.3)/10.0		内面：体底部ヨコナデ、ヘラナデ 外面：体部指ナデミガキ 底部ヘラナデ

表 29 40号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量		調整
				口径/器高/底径		
51	1	土師器	小形杯	—/(1.7)/5.7		内面：体～底部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ 底部系切り
51	2	土師器	杯	—/(0.9)/6.6		内面：体～底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ 底部系切り
51	3	土師器	杯	—/(1.1)/6.8		内面：体～底部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ 底部系切り
51	4	土師器	甕	—/(3.3)/9.6		内面：摩滅のため不明 外面：体部ナデか？ 底部ヘラナデ
51	5	土師器	甕	16.0/(5.0)/—		内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ
51	6	石製品	砥石	長8.7/幅3.4/厚2.0		

表 30 41号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量		調整
				口径/器高/底径		
51	1	土師器	器台	—/(7.1)/9.8		内面：脚部ヘラナデか？ 外面：脚部ヘラケズリ、ヘラナデ
51	2	土師器	鉢	16.2/8.0/6.4		内面：口底部ミガキ、黒色 外面：口底部ヘラケズリ後ヘラミガキ、黒色
51	3	石製品	砥石	長8.7/幅3.4/厚3.0		

表 31 43号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量		調整
				口径/器高/底径		
52	1	土師器	杯	13.4/3.8/6.0		内面：口～底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体～底部ヘラケズリ 底部ヘラ切り
52	2	土師器	杯	13.0/4.7/6.4		内面：口底部ミガキ、黒色 外面：口体部ロクロナデ 体部ケズリ 底部系切り
52	3	土師器	杯	12.2/(3.8)/—		内面：口～底部ヘラミガキ 体部口～底部ロクロナデ
52	4	土師器	杯	15.6/(4.5)/—		内面：口～底部ヘラミガキ 体部口～底部ロクロナデ
52	5	土師器	杯	—/(2.7)/5.0		内面：体～底部ヘラミガキ 外面：体部ロクロナデ 底部ヘラケズリ
52	6	土師器	蓋	12.2/(3.9)/—		内面：口～体部ヘラナデ 外面：不明
52	7	土製品	不明	長12.8/厚0.8		外面：ヘラケズリ円筒状

表 32 44号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量		調整
				口径/器高/底径		
58	1	土師器	杯	14.0/5.8/6.4		内面：口底部ミガキ、黒色 外面：口体部ロクロナデ 体底部ヘラケズリ

表 33 45号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量		調整
				口径/器高/底径		
58	1	土師器	壺	19.0/(4.2)/—		内面：口～頸部ハケ目 外面：口～頸部ヨコナデ、ハケ目

表 34 46号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量	調 整
				口径/器高/底径	
59	1	土師器	杯	14.6/5.4/5.0	内面：口底部ミガキ黒色 外面：口体部ロクロナデ体部ケズリ底部ヘラ切り
59	2	土師器	甕	—/(8.5)/—	内面：体部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ
59	3	土師器		9.6/(4.6)/—	内面：口～体部ヘラナデ 外面：口～体部ヘラナデ
59	4	土師器	筒型土器	8.8/(4.2)/—	内面：口～体部ヘラナデ 外面：口～体部ヘラナデ

表 35 47号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量	調 整
				口径/器高/底径	
58	1	土師器	筒型土器	9.6/10.0/15.6	内面：口～体部指ナデ 底部不明 外面：口～底部不明

表 36 48号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量	調 整
				口径/器高/底径	
58	1	土師器	杯	13.8/5.5/5.2	内面：口底部ミガキ、黒色処理 外面：口体部ロクロナデ 底部ヘラケズリ
58	2	土師器	杯	13.2/(4.9)/—	内面：口体部ミガキ、黒色処理 外面：口体部ロクロナデ 体部ヘラケズリ

表 37 50号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量	調 整
				口径/器高/底径	
58	1	土師器	鉢	—/(4.0)/10.8	内面：体～底部ヘラナデ 外面：体～底部摩滅のため不明
58	2	土師器	甕	—/(2.0)/5.3	内面：体～底部ヘラナデ 外面：体部ヘラケズリ、ハケ目 底部ヘラケズリ

表 38 51号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量	調 整
				口径/器高/底径	
58	1	土師器	杯	—/4.4/(10.7)	内面：口～体部ヘラミガキ、黒色処理 外面：口～体部ロクロナデ
58	2	土師器	杯	—/(1.4)/5.5	内面：体～底部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ 底部系切り
58	3	土師器	高台杯	—/(1.55)/7.5	内面：体～底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体～底部ロクロナデ
58	4	土師器	甕	25.6/(3.2)/—	内面：口～頸部ヘラナデ 外面：口～頸部ロクロナデ

表 39 52号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量	調 整
				口径/器高/底径	
60	1	土師器	甕	—/2.7/—	内面：体部ヘラナデ 外面：体部ヘラナデ
60	2	瓦質土器	不 明	—/3.8/—	
60	3	軒丸瓦	九 曜 文		
60	4	土製品	土 玉	径3.4 高2.5	
60	5	石製品	砥 石	長14.0/幅5.1/厚1.9	
60	6	石製品	摺 石	長7.3/幅6.6/厚3.2	
60	7	石製品	摺 石	長5.3/幅4.9/厚2.5	
60	8	石製品	摺 石	長6.3/幅5.3/厚4.2	
60	9	石製品	摺 石	長6.5/幅5.3/厚4.3	

表 40 53号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量	調 整
				口径/器高/底径	
60	1	土師器		—/2.2/—	内面：体部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ
60	2	須恵器	甕	—/(4.0)/—	内面：体部ヘラナデ 外面：体部ヘラナデ

表 41 54号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量	調 整
				口径/器高/底径	
60	1	土師器	杯	—/2.3/6.7	内面：体～底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ 底部系切り
60	2	土師器	高台杯	—/(2.1)/8.7	内面：体～底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ 底部系切り
60	3	土師器	甕	—/(6.6)/—	内面：体部ヘラナデ 外面：体部ヘラナデ、ヘラケズリ
60	4	土師器	甕	—/(7.9)/—	内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ
60	5	陶磁器	皿	13.2/3.4/5.5	内面：口底部ロクロナデ、絵 外面：口体部ロクロナデ 体底部回転ケズリ墨書

表 42 56号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量	調 整
				口径/器高/底径	
61	1	土師器	杯	—/(1.2)/4.5	内面：体底部ミガキ黒色 外面：体部ケズリ 底部ヘラ切り後ケズリ
61	2	土師器	高台杯	—/(2.5)/—	内面：体部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ
61	3	赤焼土器	杯	—/(1.8)/6.3	内面：体～底部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ 底部系切り
61	4	赤焼土器	杯	—/(1.9)/6.0	内面：体～底部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ 底部系切り
61	5	土師器	甕	12.4/(8.8)/—	内面：口～体部ヘラナデ 外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ
61	6	土師器	甕	17.5/(6.4)/—	内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ

表 43 57号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量	調 整
				口径/器高/底径	
61	1	土師器	杯	14.5/5.0/6.0	内面：口底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：口体部ロクロナデ 底部系切り
61	2	須恵器	瓶	—/(4.0)/9.0	内面：体底部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ、ヘラケズリ 底部指ナデ

表 44 58号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量		調 整
				口径/器高/底径		
61	1	須恵器	甕	長(4.9)厚1.2		内面: 体部青海波文 外面: 体部縄目タタキ

表 45 67号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量		調 整
				口径/器高/底径		
61	1	土師器	杯	12.6/(4.3)/—		内面: 口~体部ヘラミガキ、黒色処理 外面: 口~体部ヘラナデ
61	2	土師器	杯	13.2/3.4/6.0		内面: 口底部ミガキ、黒色 外面: 口体部ロクロナデ 体底部回転ケズリ
61	3	土師器	杯	長3.5厚0.7		内面: 底部ミガキ、黒色処理 外面: 底部ヘラケズリ底部に墨書
61	4	土師器	甕	18.0/(5.5)/—		内面: 口~体部ロクロナデ 外面: 口~体部ロクロナデ
61	5	土師器	甕	15.2/(2.6)/—		内面: 口~体部ロクロナデ 外面: 口縁部ロクロナデ 体部カキ目?
61	6	土師器	甕	—/(2.5)/8.8		内面: 体~底部ヘラナデ、指ナデ 外面: 体~底部ヘラケズリ
61	7	土師器	甕	—/(4.5)/7.4		内面: 体~底部ロクロナデ 外面: 体~底部ロクロナデ
61	8	須恵器	鉢	長5.9 厚●		内面: 体部降灰のため不明 外面: 体部ヘラナデ、指ナデ
61	9	縄文土器	甕	長7.0 厚●		内面: 体部ナデか?

表 46 69号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量		調 整
				口径/器高/底径		
62	1	土師器	甕	16.4/(3.9)/—		内面: 口縁部ハケ目 体部ヘラナデ 外面: 口~体部ハケ目

表 47 70号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量		調 整
				口径/器高/底径		
62	1	土師器		—/(3.6)/7.2		内面: 体~底部ロクロナデ 外面: 体部ロクロナデ、指ナデ 底部系切り

表 48 71号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量		調 整
				口径/器高/底径		
64	1	土師器	器台	7.5/8.1/9.6		内面: 杯部指ナデ 脚部ヘラケズリ 外面: 杯部ヨコナデ 脚部指ナデ、ハケ目
64	2	土師器	高杯	—/(7.4)/9.6		内面: 脚部ヘラケズリ 外面: 脚部ハケ目、ヘラケズリ、ヘラナデ
64	3	土師器	高杯	—/(7.2)/11.2		内面: 脚部ヘラケズリ、ヘラナデ、ハケ目 外面: 脚部ヘラナデ、ヘラケズリ
64	4	土師器	高杯	—/(5.3)/—		内面: 脚部ヘラケズリ 外面: 脚部ヘラミガキ
64	5	土師器	高杯	—/(2.9)/11.5		内面: 脚部ハケ目 外面: 脚部摩滅のため不明
64	6	土師器	高杯	18.5/(5.3)/—		内面: 口~体部ヘラナデ 外面: 口~体部ハケ目
64	7	土師器	蓋	2.2/(4.6)/—		内面: 体部ヘラケズリ、ハケ目、ヘラナデ 外面: 体部ヘラミガキ
64	8	土師器	杯	15.2/4.0/5.8		内面: 口~底部ヘラナデ 外面: 口~底部ヘラナデ 体部ハケ目
64	9	土師器	杯	—/(2.1)/4.7		内面: 体~底部ヘラナデ 外面: 体~底部ヘラケズリ
64	10	土師器	杯	—/(1.8)/3.3		内面: 体~底部ヘラナデ 外面: 体~底部ヘラケズリ
64	11	土師器	杯	—/(1.2)/2.4		内面: 体~底部ヘラナデか? 外面: 体~底部ヘラケズリ
64	12	土師器	手捏土器	4.4/3.6/4.8		内面: 口~底部指ナデ 外面: 口~底部指ナデ
64	13	土師器	手捏土器	3.4/2.0/2.2		内面: 口~底部指ナデ 外面: 口~底部指ナデ
64	14	土師器	甕	16.4/(6.5)/—		内面: 口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 外面: ヨコナデ 体部ハケ目
64	15	土師器	甕	17.7/(8.2)/—		内面: 口縁部ヨコナデ 体部ハケ目、ヘラナデ 外面: 口縁部ヨコナデ 体部ハケ
64	16	土師器	甕	18.2/11.0/—		内面: 口~体部ヘラナデ 外面: 口~体部ハケ目
64	17	土師器	甕	17.1/(4.9)/—		内面: 口~体部摩滅のため不明 外面: 口~体部ハケ目
64	18	土師器	甕	17.0/(6.6)/—		内面: 口~体部ヘラナデ 外面: 体部ヘラナデ
64	19	土師器	甕	17.7/(4.0)/—		内面: 口~体部摩滅のため不明 外面: 口縁部ヨコナデ 体部ハケ目
64	20	土師器	甕	20.0/(3.7)/—		内面: 口~体部摩滅のため不明 外面: 口~体部ハケ目
64	21	土師器	甕	15.1/(3.3)/—		内面: 口縁部ロクロナデ 外面: 口~頸部ロクロナデ後ハケ目
64	22	土師器	甕	26.7/(4.6)/—		内面: 口~体部摩滅のため不明 外面: 口縁部ヨコナデ 体部ハケ目
65	23	土師器	甕	—/(2.4)/6.0		内面: 体~底部ヘラナデか? 外面: 体部ハケ目 底部ヘラケズリ
65	24	土師器	甕	—/(2.8)/6.1		内面: 体~底部ハケ目 外面: 体~底部摩滅のため不明
65	25	土師器	甕	—/(1.6)/6.0		内面: 体~底部ヘラナデ 外面: 体部ハケ目 底部ヘラケズリ
65	26	土師器	甕	—/(2.5)/10.6		内面: 体~底部ヘラナデ 外面: 体部ハケ目 底部ヘラケズリ
65	27	土師器	不	—/(2.0)/4.5		内面: 体~底部ヘラケズリ 外面: 体部ヘラケズリ、ハケ目

表 49 72号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量		調 整
				口径/器高/底径		
65	1	土師器	甕	25.0/(4.4)/—		内面: 口~頸部ヘラミガキ 外面: 口~頸部ヘラナデ

表 50 73号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量		調 整
				口径/器高/底径		
65	1	土師器	杯	16.4/(4.9)/—		内面: 口~底部ヘラミガキ、赤彩 外面: 体~底部ヘラミガキ、赤彩
65	2	土師器	鉢	—/(7.0)/9.1		内面: 体~底部ヘラナデ 外面: 体~底部ヘラケズリ
65	3	土師器	鉢	26.4/14.0/14.6		内面: 口~底部ロクロナデ 外面: 体部ヘラナデ、ヘラケズリ 底部ヘラケズリ
65	4	土師器	甕	厚1.5		内面: 底部指ナデ、指押さえ 外面: 底部指ナデ、指押さえ中央に指で穿穴
65	5	須恵器	瓶	—/(4.1)/—		内面: 体部ロクロナデ 外面: 体部ロクロナデ
65	6	須恵器	瓶	—/(9.5)/—		内面: 体部ロクロナデ、指ナデ 外面: 体部ロクロナデ
65	7	須恵器	瓶	—/(9.7)/11.8		

表 51 74号土坑出土土器観察表

挿図 番号	No.	種 別	器 種	法 量		調 整
				口径/器高/底径		
66	1	土師器	杯	15.0/4.2/6.5		内面: 口底部ロクロナデ 外面: 口体部ロクロナデ 体部ヘラケズリ 底部系切り

表 52 77号土坑出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
66	1	土師器	杯	15.6/(5.4)/—	内面：口～底部ヘラミガキ、赤彩 外面：口～底部ヘラミガキ、赤彩
66	2	土師器	高杯	—/(4.9)/—	内面：脚部ヘラケズリ 外面：杯～脚部ヘラナデ
66	3	土師器	甕	17.6/(7.8)/—	内面：口～体部摩滅のため不明 外面：口～体部摩滅のため不明
66	4	土師器	甕	20.7/(7.2)/—	内面：口～体部ヘラナデ 外面：口～体部摩滅のため不明
66	5	土師器	甕	—/9.1/8.5	内面：体～底部ヘラナデ 外面：体部ヘラナデ 底部ヘラケズリ

表 53 27号トレンチ出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
69	1	土師器	壺	—/(9.7)/5.6	内面：体～底部ヘラナデ、指ナデ 外面：体部ヘラケズリ 底部木葉痕

表 54 Bグリッド出土土器観察表

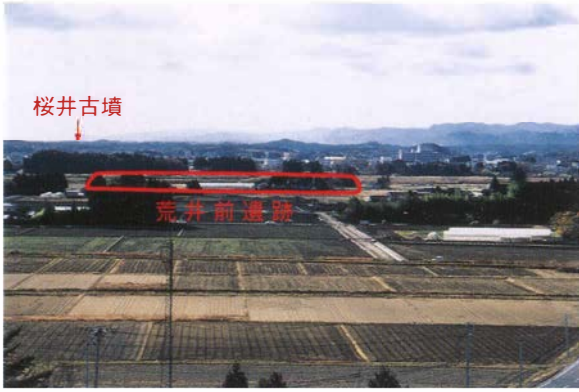
挿図番号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
69	1	土師器	杯	13.8/(7.2)/—	内外面：口～底部摩滅のため不明、赤彩
69	2	土師器	杯	11.2/(3.9)/—	内外面：口～底部ヘラナデ
69	3	土師器	甕	21.0/(7.2)/—	内面：口～体部ヘラナデ 外面：口縁部ヘラナデ 体部ヘラケズリ？
69	4	土師器	甕	16.2/(21.7)/—	内面：体部ヘラナデ、指ナデ 外面：口～体部ヘラナデ
69	5	土師器	甕	—/(18.6)/12.0	内面：体～底部ヘラナデ 外面：体部ヘラケズリ 底部布目痕
69	6	土師器	甕	—/(5.1)/—	内面：口縁部ロクロナデ 体部ヘラナデ 外面：口～体部ロクロナデ
69	7	土師器	甕	—/(6.5)/—	内面：口～体部ヘラナデ 外面：口～体部ヘラナデ

表 55 Cグリッド出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
69	1	土師器	杯	17.2/7.9/—	内面：口底部ミガキ、赤彩 外面：口体部ヘラミガキ赤彩 体底部ヘラケズリ赤彩
69	2	土師器	杯	19.0/(4.8)/—	内面：口～体部指ナデ 外面：口縁部ヘラナデ？ 体部指ナデ
69	3	土師器	杯	14.6/4.3/6.1	内面：口底部ロクロナデ、黒色処理 外面：口体部ロクロナデ、体底部ヘラケズリ
70	4	赤褐色土器	杯	11.8/(3.6)/7.0	内面：口～底部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ 底部系切り
70	5	土師器	甕	11.5/2.5/6.2	内面：口～底部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ 底部系切り
70	6	土師器	甕	20.2/(14.9)/—	内面：口～体部ヘラミガキ 外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ
70	7	土師器	甕	19.8/(7.2)/—	内面：口縁部ヨコナデ、ヘラナデ 外面：口縁部ヨコナデ、赤彩 体部ヘラケズリ
70	8	土師器	甕	—/(3.3)/7.4	内面：体～底部ヘラナデ 外面：体～底部ヘラナデ
70	9	土師器	甕	19.6/(19.5)/—	内面：口～体部ヘラナデ 外面：体部ヘラナデ、ヘラケズリ
70	10	土製品	土玉	径3.4 長2.6	
70	11	土製品	土鐘	径4.6 長9.5	
70	12	土師器	不明	27.0/7.0/20.6	内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ヘラミガキ
70	13	須恵器	甕	19.8/(6.2)/—	内面：口縁部ロクロナデ 体部ヘラナデ 外面：口～体部ロクロナデ
70	14	陶磁器	すり鉢	—/(7.9)/10.6	内面：体～底部ハケ目 外面：体部ロクロナデ 底部系切り
70	15	石製品	砥石？	長8.3/幅4.3/厚1.9	
70	16	石製品	砥石	長5.9/幅5.8/厚1.3	

表 56 Dグリッド出土土器観察表

挿図番号	No.	種別	器種	法量	調整
				口径/器高/底径	
71	1	土師器	杯	13.6/(5.0)/—	内面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 外面：口～体部ヘラナデ
71	2	土師器	杯	—/(2.9)/6.6	内面：体底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ 体～底部ヘラケズリ
71	3	土師器	杯	14.3/4.8/6.1	内面：口底部ミガキ、黒色処理 外面：口体部ロクロナデ 体部ケズリ底部系切り
71	4	土師器	杯	13.3/4.6/5.4	内面：口～底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：口～体部ロクロナデ 底部系切り
71	5	土師器	杯	13.8/4.1/6.2	内面：口～底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：口～体部ロクロナデ 底部系切り
71	6	土師器	杯	—/(2.9)/6.2	内面：体～底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ 底部系切り
71	7	土師器	台杯	—/(3.6)/8.5	内面：体～底部ヘラミガキ、黒色処理 外面：体部ロクロナデ 底部不明
71	8	土師器	皿	11.0/2.6/9.2	内面：口～底部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ 底部系切り
71	9	土師器	甕	—/(2.3)/5.4	内面：体～底部ヘラナデ 外面：体部ヘラナデ 底部不明
71	10	土師器	甕	—/(2.5)/5.0	内面：体～底部ヘラナデ 外面：体部ヘラケズリ 底部ヘラナデ
71	11	土師器	甕	—/(7.5)/—	内面：口縁部ロクロナデ 外面：口縁部ロクロナデ
71	12	土師器	甕	—/(7.2)/—	内面：口縁部ロクロナデ 外面：口縁部ロクロナデ
71	13	土師器	甕	—/(5.5)/—	内面：口縁部ロクロナデ 外面：口縁部ロクロナデ
71	14	須恵器	杯	—/(1.8)/3.0	内面：体～底部ロクロナデ 外面：体部ロクロナデ 底部系切り
71	15	須恵器	蓋	—/(1.7)/—	内面：つまみ～体部ロクロナデ 外面：つまみ～体部ロクロナデ
71	16	須恵器	甕	—/(5.6)/—	内面：体部ロクロナデ 外面：体部力キ目
71	17	須恵器	甕	—/(3.5)/—	内面：口縁部ロクロナデ 外面：口縁部ロクロナデ
71	18	須恵器	甕	28.1/(5.6)/—	内面：口～体部ロクロナデ 外面：口～体部ロクロナデ
71	19	縄文土器	甕	厚さ1.0	内面：体部指ナデ 外面：体部????
71	20	瓦	平瓦	厚2.0 重460g	凹面：布目痕、稜骨痕 凸面：雨垂れ状タタキ
71	21	土製品	土鐘	長6.7 径4.8	



1 遺跡遠景 (北から)



2 1号溝跡(縦)・2号溝跡(斜)
検出状況(南から)



3 2号溝跡検出状況(南から)



4 2号溝跡検出状況(北から)



5 3号溝跡(縦)・4号溝跡(斜)
検出状況(東から)



6 1号住居跡検出状況



7 微高地南辺検出状況(東から)



8 微高地南辺検出状況(南西から)



9 2号溝跡 西側部分検出状況(東から)



10 2号溝跡 西側部分検出状況(西から)



11 2号溝跡 西側部分、土層断面(西から)



12 2号溝跡 西側部分、土層断面(東から)



13 38号トレンチ拡張区(北から)



14 38号トレンチ 遺物出土状況(南から)



15 27号トレンチ(南西から)



16 28号トレンチ(板碑群の南西隣)(南西から)



17 本調査範囲（西側）（南から）



18 本調査範囲（中央、2号溝付近）（南から）



19 本調査範囲 (中央、1号住居付近) (南から)



20 本調査範囲 (東側) (南から)



21 本調査範囲（西側、ピットグループ1付近）（西から）



22 本調査範囲（西側、1号墳・3号溝跡付近）（西から）



23 本調査範囲（中央、1号掘立柱建物跡付近）（北から）



24 本調査範囲（中央、2号溝跡付近）（北から）



25 1号墳 (南から)



26 1号墳 遺物出土状況 (南から)



27 1号墳 遺物出土状況 (南東から)



28 1号墳 遺物出土状況 (北から)



29 1号墳 遺物出土状況 (北から)



30 1号墳 土層断面(A-A)(南から)



31 2号墳 (南から)



32 2号墳 遺物出土状況 (南から)



33 1号住居跡 検出状況 (南西から)



34 1号住居跡 精査状況 (南から)



35 1号住居跡 遺物出土状況 (南東から)



36 1号住居跡 遺物出土状況 (南から)



37 1号住居跡 床面精査状況 (南東から)



38 1号住居跡 完掘状況 (南東から)



39 1号住居跡 炉跡 (南東から)



40 1号住居跡 周溝と壁柱穴 (南西から)



41 3号住居跡 (東から)



42 3号住居跡 (南から)



43 4号住居跡 (南から)



44 1・2(上)・3(下)号掘立柱建物跡 (南から)



45 1(左)・2(右)号掘立柱建物跡 (南から)



46 3号掘立柱建物跡 (南から)



47 1号溝跡 (南から)



48 1(右)・2(左)号溝跡 土層断面 (南から)



49 2号溝跡 (南から)



50 2号溝跡 土層断面 (南から)



51 2号溝跡 1号ピット



52 2号溝跡 2号ピット



53 2号溝跡 E区 遺物出土状況 (南から)



54 2号溝跡 E区 遺物出土状況 (南から)



55 2号溝跡 E区 遺物出土状況 (南から)



56 2号溝跡 南端 遺物出土状況 (西から)



57 3(斜)・4(縦)号溝跡 検出状況(南東から)



58 3号溝跡(東から)



59 4号溝跡(斜) 検出状況(南から)



60 4号溝跡(南東から)



61 5号溝跡(東から)



62 ピットグループ1(南から)



63 ピットグループ1 遺物出土状況(南から)



64 ピットグループ1 土鈴出土状況(南から)



65 遺跡南端 鎌出土状況 (東から)



66 2号土坑 礫出土状況 (南から)



67 4号土坑 骨片・木炭出土状況 (南から)



68 4号土坑の西側 播鉢出土状況 (南から)



69 5号土坑 土層断面 (南から)



70 8号土坑 遺物出土状況 (南から)



71 12号土坑 土層断面 (南から)



72 17号土坑 土層断面 (南から)



73 23号土坑 検出状況(西から)



74 34号土坑 遺物出土状況(南から)



75 35号土坑 遺物出土状況(南から)



76 37号土坑 遺物出土状況(南から)



77 39号土坑 鎌出土状況(南から)



78 42号土坑 土層断面(南から)



79 44(右)・46(左)号土坑付近(東から)



80 44号土坑 遺物出土状況(南から)



81 46号土坑(右)・1号墳(左)(南から)



82 46号土坑 遺物出土状況(南から)



83 3号(西から)



84 63号土坑 鉄床石出土状況(南から)



85 64号土坑 羽口出土状況(南から)



86 67号土坑 遺物出土状況(南から)



87 67号土坑 羽口出土状況(南から)



88 71号土坑 遺物出土状況(南から)



89 73号土坑 遺物出土状況 (南から)



90 74号土坑 (西から)



91 1号近代井戸跡 (西から)



92 2号近代井戸跡 (南から)



93 近代洗い場跡 (西から)



94 53号土坑(左)・近代洗い場(右) (西から)



95 C8-02グリッド 土器捨場 (南から)



96 C8-02グリッド 遺物出土状況



97 1号墳出土、土師器



98 1号墳出土、土師器手捏土器・器台・高杯



99 1号墳出土、土師器壺



100 2号墳出土、土師器壺



101 1号住居跡出土、土師器・石器



102 1号住居跡出土、土師器碗



103 1号住居跡出土、土師器(赤彩)



104 1号住居跡出土、器台



105 1号住居跡出土、手捏土器・底部穿孔壺・土錘



106 1号住居跡出土、土師器壺



107 1号住居跡出土、砥石・磨石



108 3号住居跡出土、土師器甕



109 4号住居跡出土、土師器杯・甕、須恵器壺



110 2号溝跡出土、土師器・須恵器



111 2号溝跡出土、土師器杯



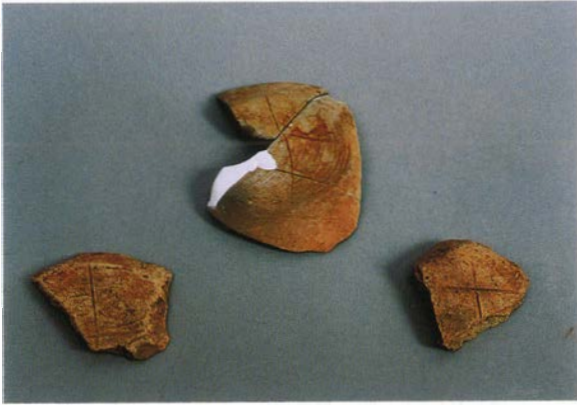
112 2号溝跡出土、土師器杯



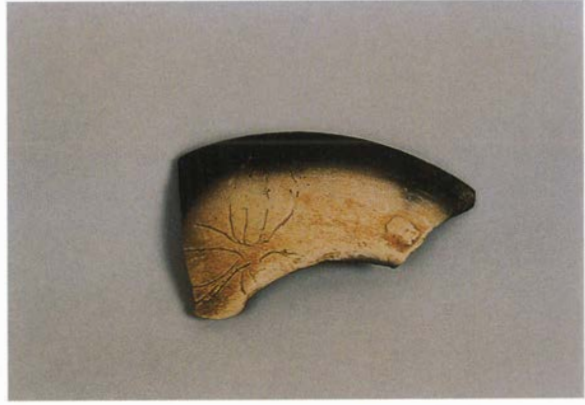
113 2号溝跡出土、土師器杯・墨書「吉」



114 2号溝跡出土、土師器杯・不明墨書



115 2号溝跡出土、土師器杯・線刻「十」



116 2号溝跡出土、土師器杯・線刻花



117 2号溝跡出土、土師器杯



118 2号溝跡出土、土師器杯



119 2号溝跡出土、土師器甕



120 2号溝跡出土、土師器甕



121 2号溝跡出土、須恵器壺



122 2号溝跡出土、須恵器壺



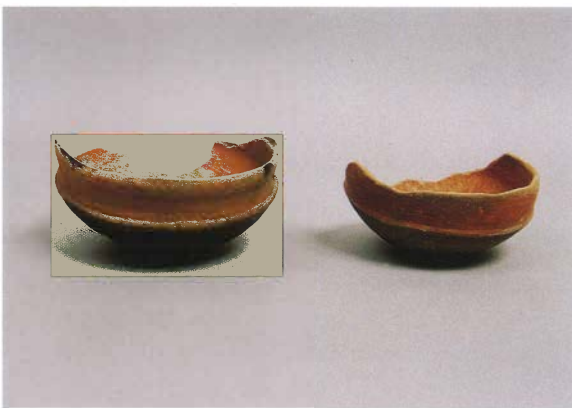
123 2号溝跡出土、土師器杯・底部成形痕



124 2号溝跡出土、不明土製品、石製模造品



125 3号溝跡出土、土師器



126 3号溝跡出土、土師器杯



127 3号溝跡出土、土師器甕



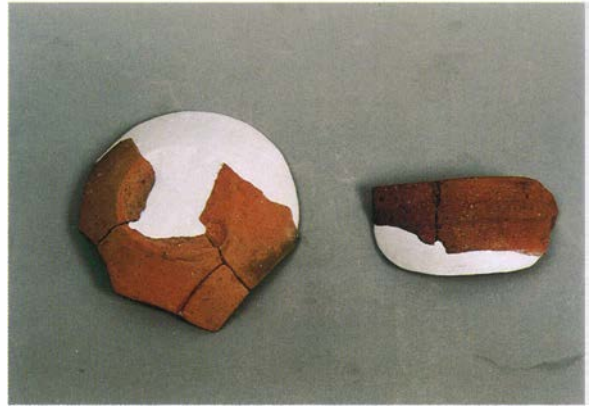
128 4号溝跡出土、土師器筒形土器



129 5号溝跡出土、土師器甕



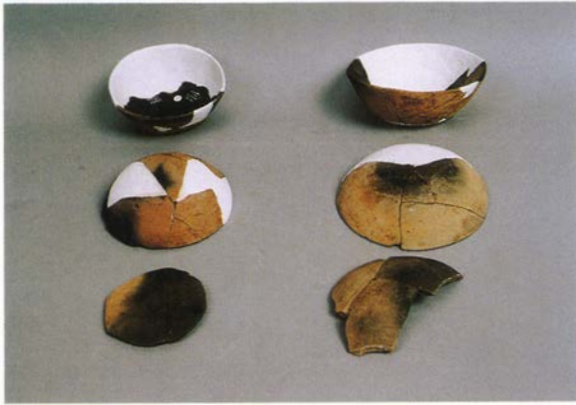
130 8号溝跡出土、土師器杯・須恵器壺・甕



131 3号ピット群出土、土師器杯・甕



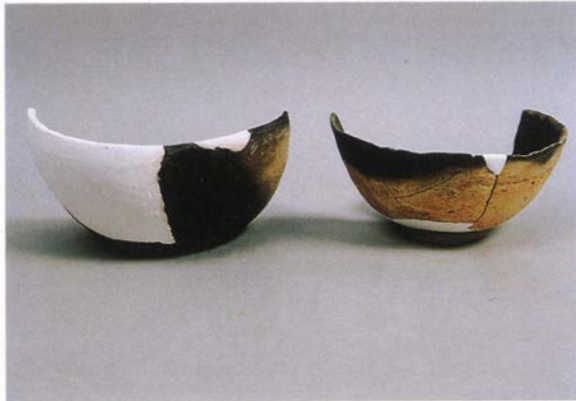
132 1号ピット群出土、土師器・須恵器・土製品



133 1号ピット群出土、土師器杯・碗



134 1号ピット群出土、土師器杯線刻「十」



135 1号ピット群出土、土師器碗



136 1号ピット群出土、土師器甕



137 1号ピット群出土、土師器甕指頭圧痕



138 1号ピット群出土、須恵質土器甕



139 1号ピット群出土、土鈴



140 1号ピット群出土、土錘



141 7号土坑出土、縄文土器鉢



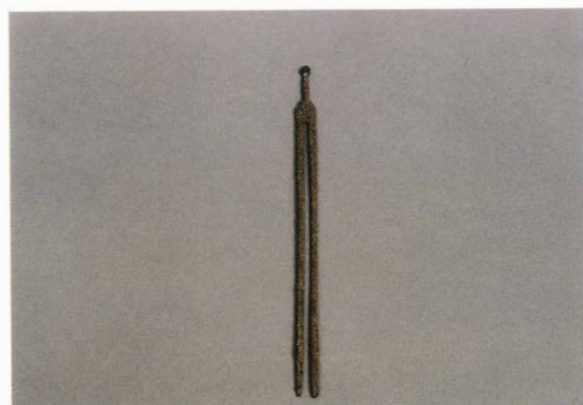
142 11号土坑出土、土師器杯・甕



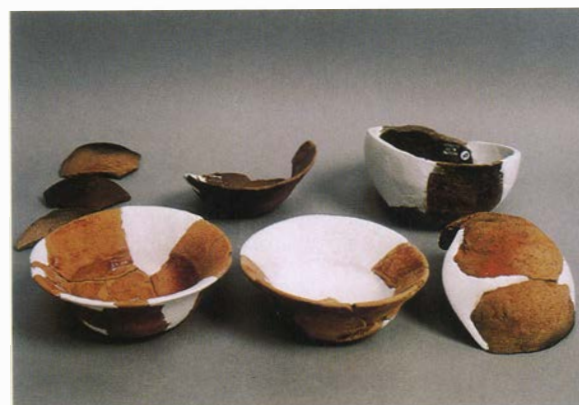
143 17号土坑出土、土師器杯・甕、カワラケ、砥石



144 17号土坑出土、土師器杯墨書「厨」



145 17号土坑出土、カンザシ



146 24号土坑出土、土師器杯



147 24号土坑出土、土師器甕



148 24号土坑出土、陶器灯明皿



149 34号土坑出土、土師器壺



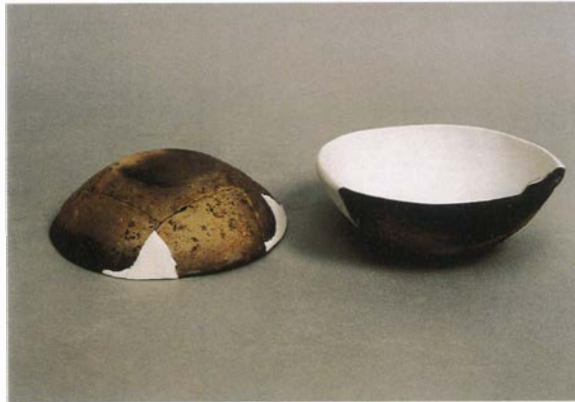
150 39号土坑出土、鎌



151 40号土坑出土、土師器



152 41号土坑出土、土師器器台・鉢、砥石



153 43号土坑出土、土師器杯



154 44号土坑出土、土師器杯



155 46号土坑出土、土師器杯・甕



156 50号土坑出土、土師器杯、砥石



157 52号土坑出土、土錘



158 52号土坑出土、土師器杯・甕、瓦、磨石、砥石



159 54号土坑出土、土師器杯・甕、陶器皿、磨石



160 56号土坑出土、土師器杯・甕



161 57号土坑出土、土師器杯不明墨書、須恵器甕



162 64号土坑出土、羽口



163 67号土坑出土、土師器不明墨書



164 67号土坑出土、羽口



165 70号土坑出土、縄文土器、土師器杯



166 70号土坑出土、中世土器



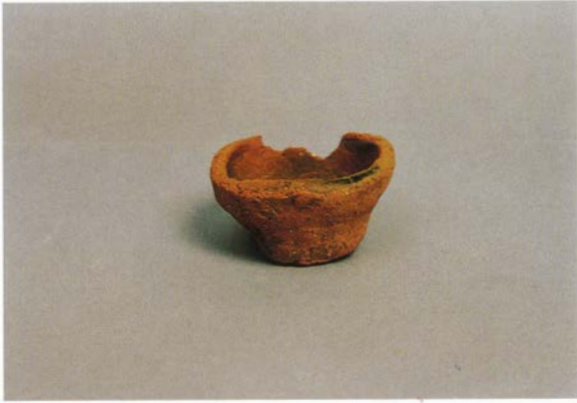
167 71号土坑出土、土師器



168 71号土坑出土、土師器異形土器



169 71号土坑出土、土師器器台



170 71号土坑出土、土師器手捏土器



171 71号土坑出土、土師器甕



172 73号土坑出土、土師器甕・甌、須恵器甕



173 77号土坑出土、土師器杯・甕



174 B4-02グリッド出土、縄文土器深鉢



175 B8-92グリッド出土、土師器杯・甕、石製模造品



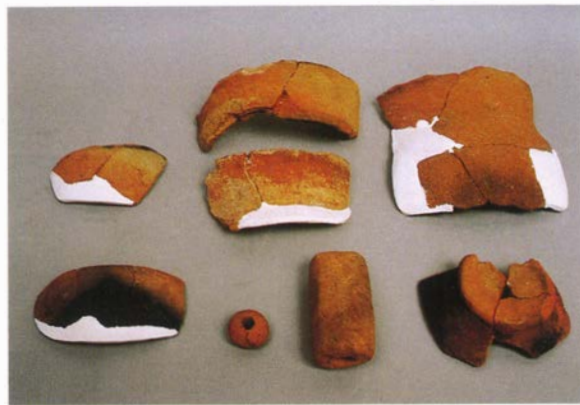
176 B8-92グリッド出土、石製模造品



177 C5-79グリッド出土、陶器挿鉢



178 C7グリッド出土、土師器杯・甕



179 C8-02グリッド出土、土師器杯・甕、土錘



180 C8-02グリッド出土、土師器、甕



181 C8-02グリッド出土、土師器甕



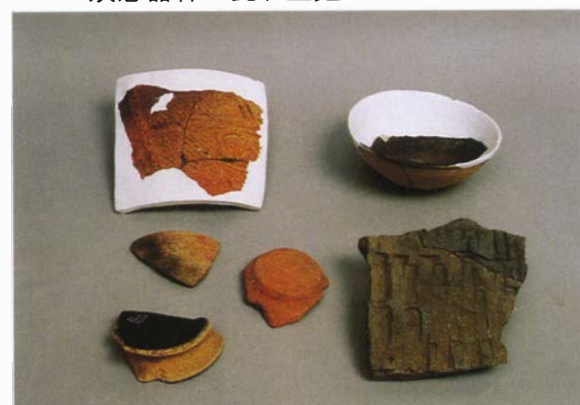
182 C6グリッド出土、土師器杯、砥石



183 Dグリッド出土、土師器杯・甕、
 須恵器杯・甕、土錘



184 D6-46グリッド出土、砥石



185 D7グリッド出土、縄文土器深鉢、
 土師器杯・甕、平瓦

第3編 荷渡遺跡

第1章 調査に至る経過

第1節 調査経過

荷渡遺跡は、弥生時代の石斧・石鍬が採集されたことから周知の遺跡に登録されている。(図1)。今般、高平地区ほ場整備事業に伴い、遺物の採集地点付近で造成工事が行われるため、事前に遺構・遺物の有無を確認するために試掘調査を行った。

第2節 調査要項

- 1 遺跡名 荷渡遺跡(遺跡番号 20600026)
- 2 所在地 福島県原町市下北高平字荷渡
- 3 遺跡の性格 弥生時代・散布地
- 4 調査期間 平成7年11月13日～平成7年11月22日
- 5 調査面積 400 m²
- 6 調査体制
調査主体 原町市教育委員会
調査担当 生涯学習部文化課 鈴木文雄
事務局体制(平成7年度)
教 育 長 渡部秀夫
教 育 次 長 横山英夫
総 括 参 事 木幡一男
参事兼文化課長 佐藤一男
文化振興係長 高田 毅
副 主 査 木幡雅巳
文化財主事 堀 耕平
事 務 補 助 館岡るみ
- 7 整理補助員 寺内美智子・古谷洋子・遠藤和子・太田正子・山本恵子
- 8 発掘補助員 白石正男・青田 翠・遠藤 明・遠藤キミ子・大石房子・木幡春江・杉浦桂子・
玉木 清・玉木セツ子・新妻順子・八木米子・高井孝子・佐藤フクイ・北山富子

第2章 遺跡の概要

第1節 位置と地形

過去に石器が発見された箇所は新田川北岸の沖積地に位置する水田の畦道であった。今回の調査範囲はその周辺の標高9～10mの水田である。

第2節 周辺の遺跡

荷渡遺跡北側の丘陵上に弥生土器の散布地である北山遺跡・広平遺跡と荷渡古墳群がある。荷渡古墳群からは平成8年の発掘調査で古墳時代後期の円墳3基の他に弥生土器や石器群が出土しており、この丘陵上の広範囲に弥生時代の集落遺跡が存在する可能性がある。

荷渡遺跡の北東約0.6kmの、丘陵裾部に法幢寺跡がある。平成8年度の調査で弥生時代中期の土器棺墓1基（壺1個体）の他、江戸時代の土壌（墓穴）163基、平安時代の竪穴住居跡7軒・掘立柱建物跡5棟・溝跡17条が検出されている。

新田川を挟んだ対岸には高見町遺跡群がある。高見町A遺跡・高見町B遺跡・桜井A遺跡・桜井B遺跡・桜井C遺跡・桜井D遺跡からは、弥生時代中期の土器が出土し、また石包丁・石鍬・石ノミなどの石器が多く出土する。

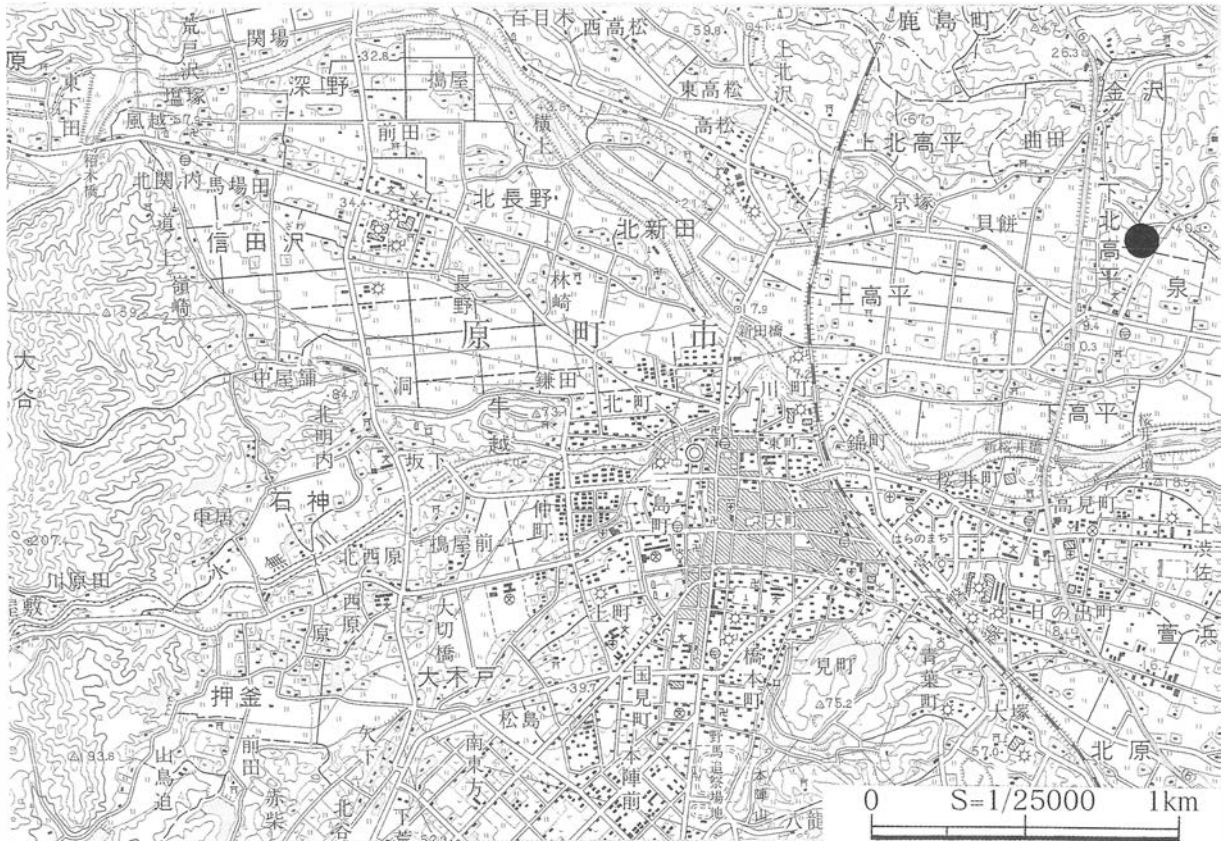
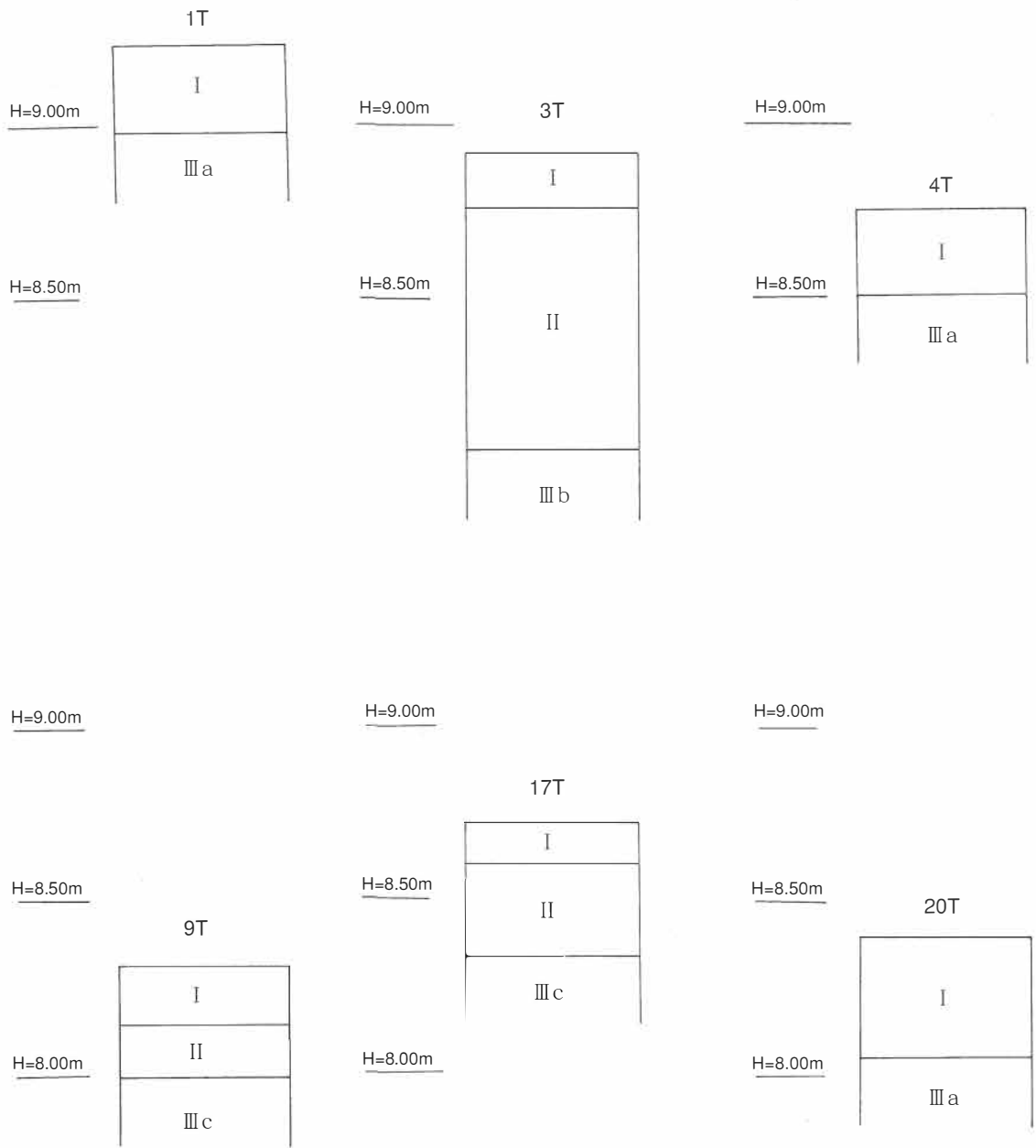


図1 荷渡遺跡 位置図



- I : 暗褐色土 表土。耕作土。
- II : 黒色粘土
- IIIa : 黄褐色粘土 IIIbと土質は同じだが、酸化して黄褐色に変色したものと思われる。
- IIIb : 灰白色粘土
- IIIc : 灰白色粘土 $\phi 2\sim 3\text{cm}$ の原石が多く混入する。旧川床部と考えられる。

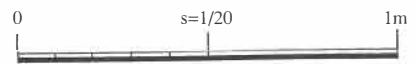


図3 荷渡遺跡 基本層序

第3章 調査の方法

遺跡の範囲約 16,000㎡に対し、幅 2 m・長さ 10m の試掘トレンチ (20 ㎡) をほぼ等間隔で 20 箇所、計 400 ㎡設定した。遺跡範囲に対する試掘面積は 2.5% である。

トレンチの深さは、Ⅰ層：水田耕作の表土層（暗褐色粘質土）とその下のⅡ層：黒色粘土層を掘り抜いて、地山のⅢ a 層：黄褐色粘土層、またはⅢ b 層：灰白色粘土層上面まで掘り下げ、遺構の検出に努めた。トレンチの深さは場所により地山までの深さが違い、25～85 cm であった。

第4章 調査成果

人為的な遺構・遺物は存在しなかった。

自然地形としては、8・9・13 トレンチの北側部分と 17 トレンチの西半分では、地山の灰白色粘土に直径 2～3 cm の川原石が多く混入していたことから、新田川の支流である武須川の旧河床部と考えられる。

第5章 まとめ

かつて、(昭和 30 年頃に行われたほ場整備の時期か)、竹島国基氏がこの地点で弥生時代の石斧・石鍬を採集しているが、今回の調査では遺構・遺物は確認されなかった。トレンチの土層観察の結果、この地点は武須川の氾濫原で、低湿地であったことが確認された。

この地点の北側の台地上には広平遺跡・北山遺跡などの弥生土器の散布地があり、弥生時代の集落跡が広がっている可能性がある。今回調査を行った荷渡遺跡は弥生時代の水田があった可能性も否定できないが、今回の調査では水田跡・水路跡等の遺構や石庖丁等の遺物も出土しなかったことから、本調査は不要と判断される。(二本松)

《参考文献・引用文献》

- 原町市教育委員会『荷渡古墳群』 2000 年
- 原町市教育委員会「法幢寺跡」『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』Ⅱ 2001 年
- 竹島国基編『桜井』竹島コレクション考古図録第 3 集 1992 年
- 竹島国基編『天神沢』竹島コレクション考古図録第 1 集 1983 年
- 原町市教育委員会『原町市高見町 1 号墳・与太郎内 1 号墳』 1969 年
- 辻秀人他『桜井高見町 A 遺跡発掘調査報告』東北学院大学考古学ゼミナール 1996 年
- 原町市教育委員会「高見町 A 遺跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書』1 1996 年
- 原町市教育委員会「高見町 A 遺跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書』2 1996 年
- 原町市教育委員会「桜井古墳群」『原町市内遺跡発掘調査報告書』3 1998 年
- 原町市教育委員会「高見町 A 遺跡 (第 6 次)」『原町市内遺跡発掘調査報告書』5 2000 年
- 原町市教育委員会『福島県緊急雇用対策事業関連遺跡発掘調査報告書 高見町 A 遺跡 第 7 次調査』 2000 年
- 原町市教育委員会『桜井古墳群上洪佐支群 7 号墳発掘調査報告書』 2001 年



1 荷渡遺跡遠景（北から）



2 荷渡遺跡近景（南から）



3 1号トレンチ（東から）



4 2号トレンチ（南から）



5 6号トレンチ（南から）



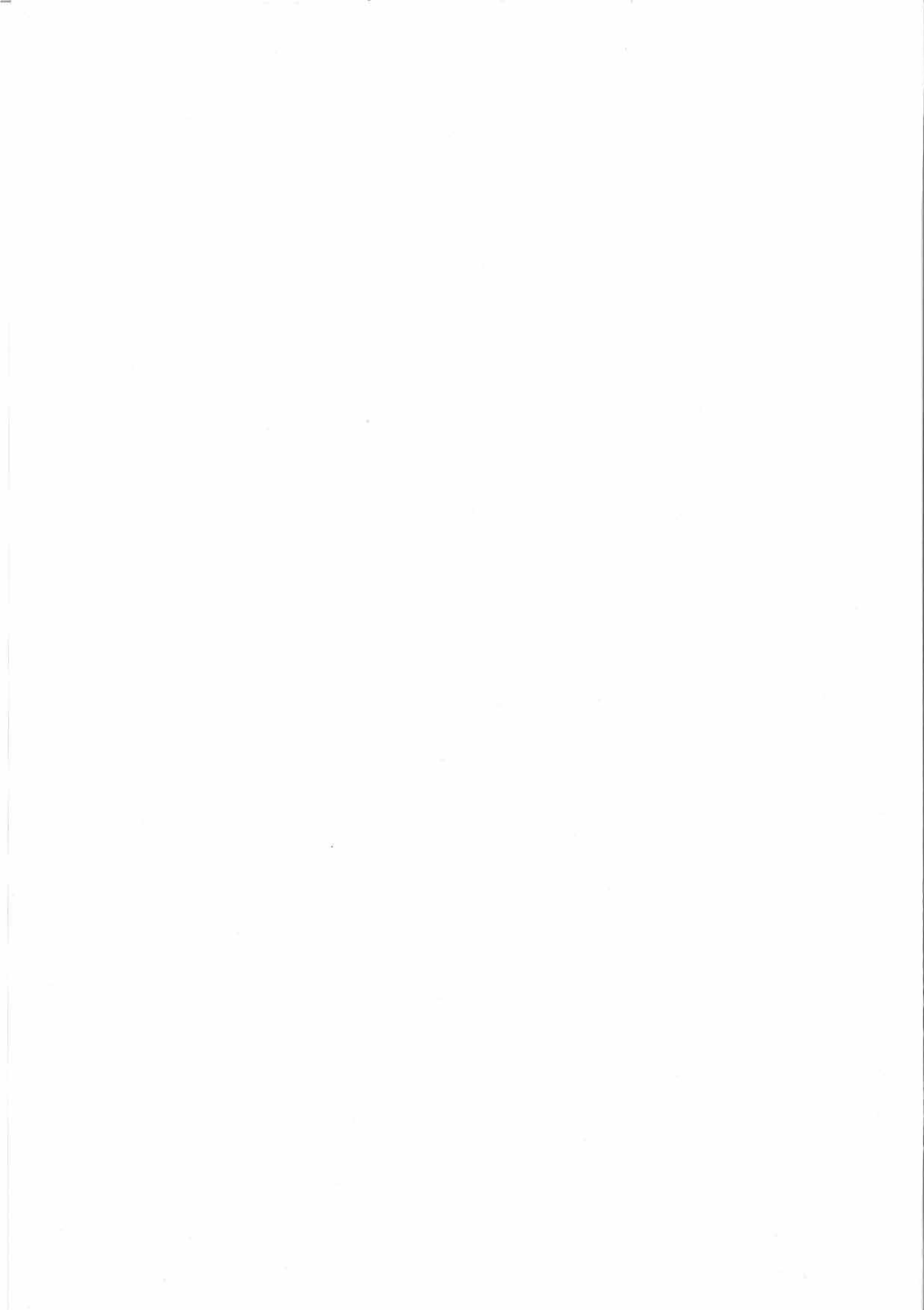
6 9号トレンチ西壁セクション（東から）



7 13号トレンチ（南から）



8 16号トレンチ（南から）



付編 自然科学分析

付章 1 下北高平館跡・泉廃寺跡・泉平館跡から出土した木材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

下北高平館跡は、新田川左岸に位置する。中世の金沢氏の館跡とされ、東西 50 間、南北 60 間の館回り堤形が現存している。発掘調査により、漆椀などが出土している。

泉廃寺跡は、新田川河口付近の左岸段丘上から沖積地にかけて位置する。古代行方郡衙跡に比定され、建物跡などの遺構が検出されている。また、柱材、曲物、折敷等の木質遺物も出土している。

泉平館跡は、新田川左岸に位置し、泉廃寺跡に近い。慶長 2 年 (1597 年) から慶長 16 年 (1611 年) に岡田氏の居住した館跡とされる。発掘調査により、曲物や桶等の木質遺物が多数出土している。

本報告では、これらの遺跡から出土した木質遺物の樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、下北高平館跡、泉廃寺跡 3 次、6 次、9 次、泉平館跡から出土した木質遺物 11 点 (試料番号 1, 2, 6~8, 18, 20, 22, 24, 27, 35) である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表 1 に記した。

2. 方法

剃刀の刃を用いて木口 (横断面)・柁目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル (抱水クロラル, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液) で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表 1 に示す。木質遺物は、針葉樹 5 種類 (カラマツ・マツ属複雑管束亜属・モミ属・ヒノキ・カヤ) と、広葉樹 3 種類 (ブナ属・クリ・ヤマグワ) に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

遺跡名	番号	器種	樹種
下北高平館跡	1	漆椀	ブナ属
泉廃寺跡 3 次	2	柱材	クリ
泉廃寺跡 9 次	6	柱材	カヤ
	7	柱材	クリ
泉廃寺跡 6 次	8	柱材	ヤマグワ
泉平館跡	18	曲物底板	モミ属
	20	曲物底板	ヒノキ
	22	小刀の柄か	カラマツ
	24	曲物底板	モミ属
	27	桶側板	モミ属

・カラマツ (*Larix kaempferi* (Lamb.) Carriere) マツ科カラマツ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射組織の細胞壁は滑らかで、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に3～5個。放射仮道管の有縁壁孔はカラマツ型を主とする。放射組織は単列、1～20細胞高。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus subgen. Diploxyton*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道及び水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が早材部のやや晩材部寄りに認められ、接線方向に配列する。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

試料は小片で保存が悪い。散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は1～3列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

4. 考察

(1) 下北高平館跡の用材選択

漆椀は、落葉広葉樹のブナ属であった。民俗事例では、漆器木地としてよく利用される木材として、ブナ、トチノキ、クリ、ケヤキなどが挙げられている（農商務省山林局，1912；橋本，1979）。これらの木材は、遺跡からの出土した漆器にも多数認められており（島地・伊東，1988；伊東，1990）、福島県内でもいわき市久世原館・番匠地遺跡等で報告例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社，1993）。これらの報告例から、民俗事例と同様の用材選択が古くから行われていたことがうかがえる。

漆器木地は、木地屋により伐採と加工が行われていたことが指摘されている（中川，1985）。本地域でも、木地屋の活動により、漆器木地の伐採と加工が行われていた可能性がある。しかし、生産と流通に関しては不明な点が多く、今後文献史料の検討も含めて検証したい。

(2) 泉廃寺跡の用材選択

柱材は、針葉樹のカヤ、落葉広葉樹のクリ、ヤマグワが認められた。これらの種類は、これまでも柱材や住居構築材などに認められている種類である（島地・伊東，1988；伊東，1990）。カヤは、針葉樹材としては比較的硬で、耐水性も高い。また、クリは強度や耐朽性に優れた材質を有し、ヤマグワも比較的強度が高い。これらのことから、柱材は強度や耐水・耐朽性などを考慮した用材選択が行われていた可能性がある。樹種の違いは、建物の性格や使用箇所の違い等を反映している可能性がある。検出遺構や地点、時代時期などを含めて検討することが望まれる。

(3) 泉平館跡の用材選択

曲物および桶の側板・底板は、全て針葉樹材で、モミ属が最も多く、他にヒノキと複雑管束亜属が認められる。これまでの調査例（島地・伊東，1988）では、ヒノキやスギの利用例が多く見られる。いわき市久世原館・番匠地遺跡で行った調査では、曲物や蓋などにヒノキ属とモミ属がほぼ同数利用される結果が得られている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1993）。これらの事例から、福島県内の浜通地域では、他地域に比較してモミ属も多く利用されていた可能性がある。久世原館・番匠地遺跡では、モミ属花粉が多産し、周辺にモミ属が生育していたことがモミ属の木材が大量に利用された背景と考えられている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1993）。今回の結果についても、同様の可能性がある。今後、周辺地域の古植生に関する資料を含めてさらに資料を蓄積し、検討したい。

《引用文献》

橋本鉄男（1979）ろくろ．444p.，法政大学出版局．

伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ．木材研究・資料，26，p.91-189，京都大学木材研究所．

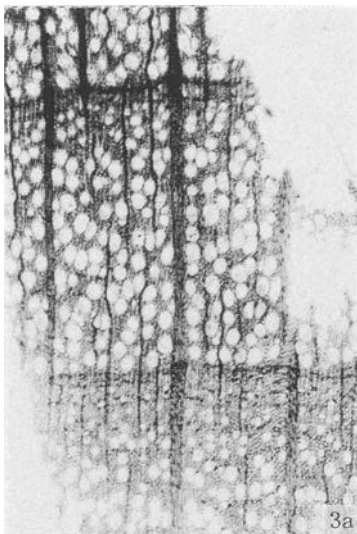
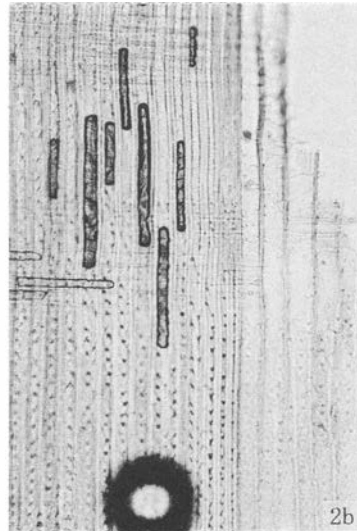
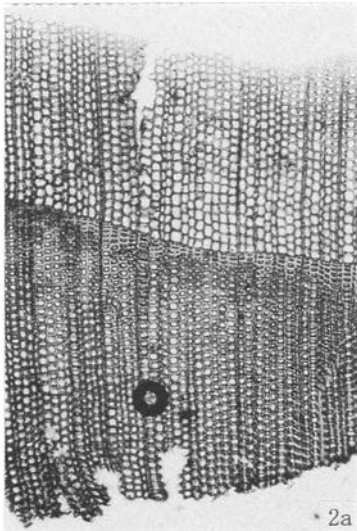
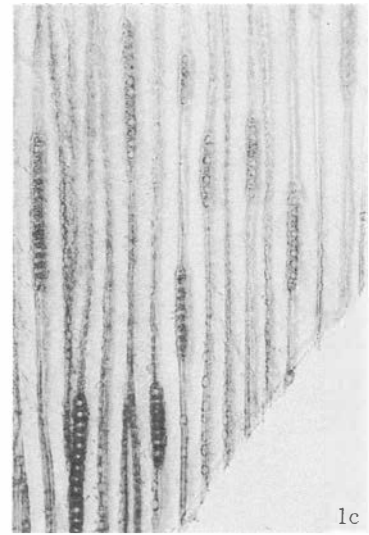
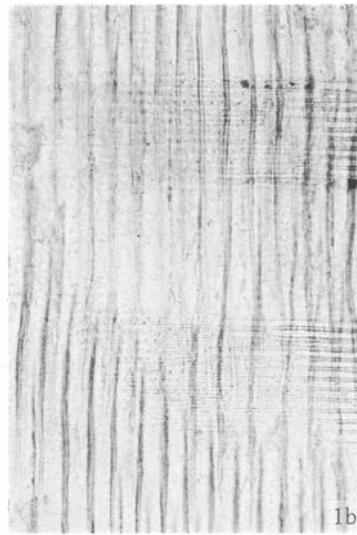
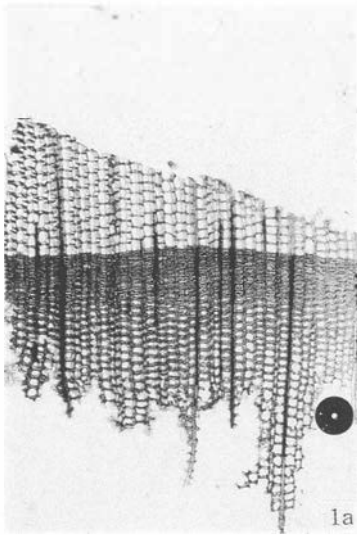
中川重年（1985）木地屋の世界 その移動と森林の変化．「ブナ帯文化」，p.165-184，思索社．

農商務省山林局編（1912）木材ノ工藝的利用．1308p.，大日本山林會．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）自然科学分析（花粉・材）．「いわき市埋蔵文化財調査報告第33冊 久世原館・番匠地遺跡 第Ⅰ篇 一概要・附篇一」，p.74-88，福島県いわき市・福島県いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団．

島地 謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．296p.，雄山閣．

図版1 木材 (1)



1. モミ属 (試料番号 15)

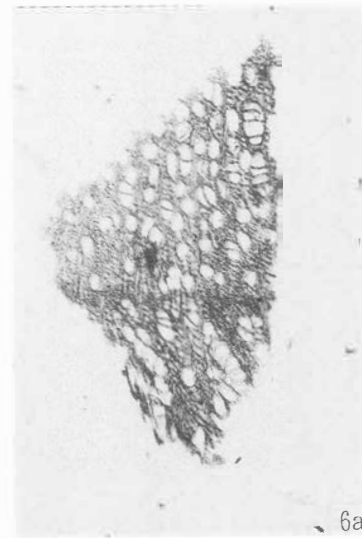
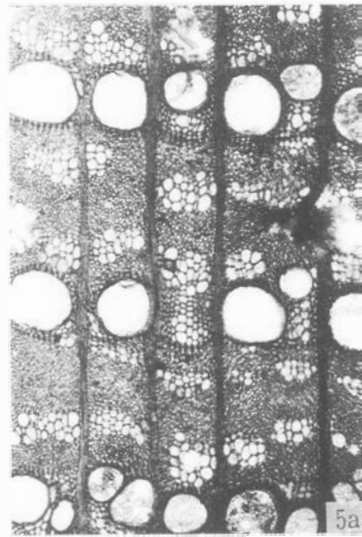
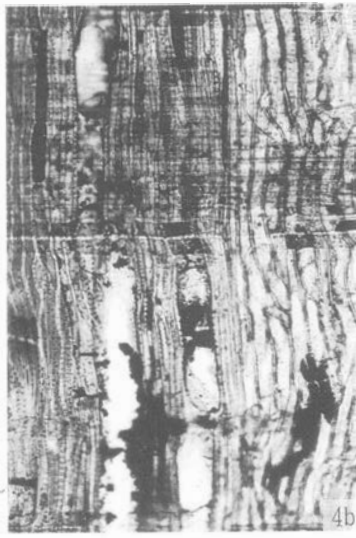
2. カヤ (試料番号 13)

3. ブナ属 (試料番号 5)

a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

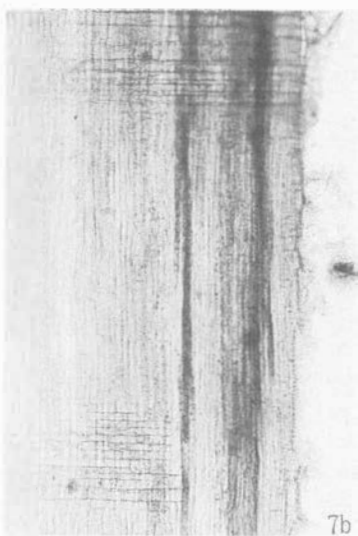
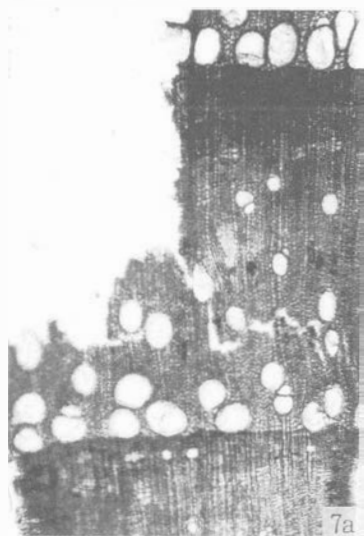
図版2 木材 (2)



- 4. クリ (試料番号3)
- 5. ケヤキ (試料番号12)
- 6. モクレン属 (試料番号11)
- a : 木口, b : 柁目, c : 板目

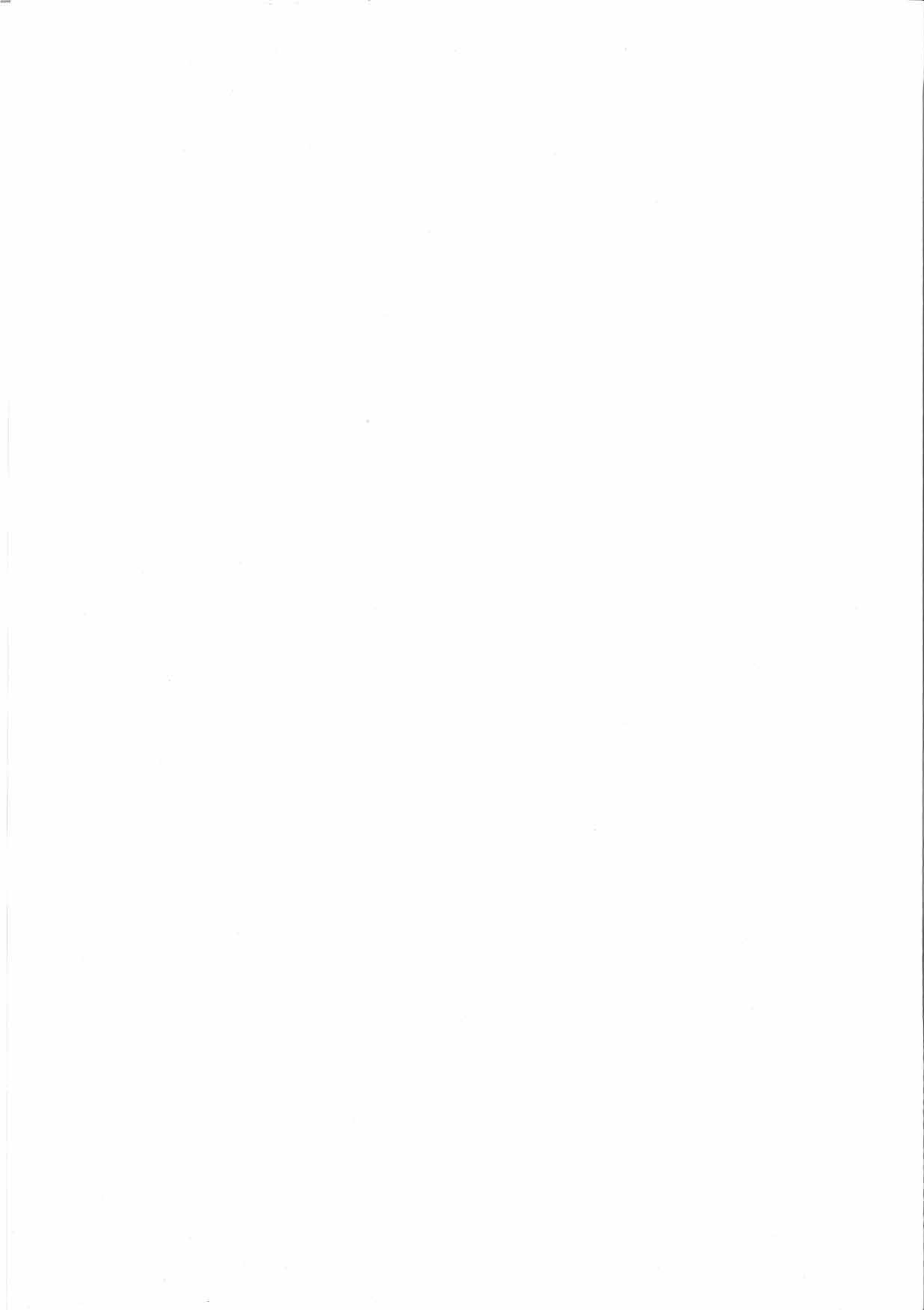
200 μ m : a
 200 μ m : b, c

図版3 木材 (3)



7. ヤマウルシ (試料番号 16)
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c



付章2 泉廃寺跡1号溝跡最下層の珪藻分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

泉廃寺跡第15次調査で確認された、南北に走る幅5mの大溝(1号溝跡)は、周辺の発掘調査の成果などから官衙に物資を搬入するための運河と考えられている。

本報告では、大溝の最下層から採取された土壌試料の珪藻分析を行い、大溝が機能していた当時の溝内の環境に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、1号溝(大溝)跡の最下層から採取された土壌試料1点(試料番号7)である。

2. 分析方法

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、Krammer (1992)、Krammer and Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)などを参照する。また、現生の珪藻の生態性は、海水～汽水生種は小杉(1988)、淡水生種は安藤(1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性は、Asai and Watanabe (1995)を参考にする。

3. 結果

結果を表1および図1に示す。試料番号7からは、18属70種類の珪藻化石が産出した。このうち、淡水域に生育する水生珪藻が約70%を占め、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好氣的環境に耐性のある陸生珪藻が残りの約30%を占める。種類別に見ると、*Achnanthes lanceolata*、*Meridion circularae* var. *constrictum*、*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Gomphonema parvulum*、*Navicula mutica*等が比較的多いが、特に優占する種類は認められない。

淡水性種の生態性をみると、塩分濃度では、貧塩不定性種(少量の塩分には耐えられる種)が多い。水素イオン濃度では、真+好酸性種(pH7.0以下の酸性水域に最もよく生育する種)～真+好アルカリ性種(pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種)が多い。流水に対する適応能では、流水不定性種(流水域にも止水域にも普通に生育する種)が多い。

4. 考察

1号溝は、幅約5mで南北方向に走っており、南に隣接する第5・7次調査区でもほぼ同じ幅で続いているのが確認されている。遺跡の南方約400mには新田川が東流して太平洋に注いで

いることから、新田川あるいは新田川の支流等から運河が引かれていた可能性があると考えられている。

溝跡の最下層から採取した土壌試料の珪藻化石群集をみると、18属70種類が産出している。これらの珪藻化石は、流水～汽水生種、流水性種、流水不定性種、止水性種、陸生珪藻など、多種多様な環境に生育する種類が混在し、とくに優占する種類も認められない。このように、本来は生活環境を異にする種類が混在し、特定の種が優占しない群集は、混合群集と呼ばれる。混合群集は、氾濫堆積物中によくみられるほか、河川の流水中に含まれる遺骸・生体にもみられる（堀内ほか、1996）。

1号溝の最下層は、堆積物が比較的細粒で、植物遺体も多く含まれている。このことと珪藻化石群集が混合群集となることを考慮すると、溝内は水の流れが穏やかで、砂泥や珪藻化石などが堆積しやすい環境であったことが推定される。検出された珪藻化石は、新田川水系の氾濫時の砂泥や普段の流水中に混入していた遺骸等に由来すると考えられる。また、陸生珪藻については、溝跡の周囲から風塵等と共に溝内に混入した可能性もある。以上のことにより、大溝には新田川あるいは新田川の支流等から水が引かれていたと考えられる。

今後、溝内最下層よりも上位の堆積物についても珪藻分析を行って、溝の廃絶と埋積の各過程の環境についても検討したい。また、同一の溝跡内の他地点でも層位変化を捉え、本地点と同様の変化が見られるか検討したい。

《引用文献》

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p.73- 88.
- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophyllous and saproxenoustaxa. *Diatom*, 10, p.35-47.
- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫（1996）珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について —混合群集の認定と堆積環境の解釈—. 日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集，p.62-63.
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27，p.1-20.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353., BERLIN · STUTTGART.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

表1 1号溝最下層の珪藻分析結果(1)

種 類	生態性			環境 指標種	7
	塩分	pH	流水		
<i>Nitzschia obtusa</i> var. <i>scalpelliformis</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	S	1
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	6
<i>Achnanthes convergens</i> H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	T	1
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	16
<i>Achnanthes minutissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	3
<i>Achnanthes rupestoides</i> Hohn	Ogh-unk	unk	unk	T	4
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	1
<i>Caloneis largerstedtii</i> (Lagerst.)Cholnoky	Ogh-ind	al-il	ind	S	1
<i>Cocconeis placentula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	1
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	2
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		7
<i>Eunotia duplicoraphis</i> H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1
<i>Eunotia fallax</i> A.Cleve	Ogh-hob	ac-bi	ind	RA	1
<i>Eunotia muscicola</i> var. <i>tridentula</i> Noerpel & Lange-B.	Ogh-hob	ac-il	ind		1
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	14
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1
<i>Fragilaria exigua</i> Grunow	Ogh-ind	ind	l-ph		1
<i>Fragilaria virescens</i> Ralfs	Ogh-ind	ac-il	l-ph	U	6
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	1
<i>Frustulia vulgaris</i> var. <i>capitata</i> Krasske	Ogh-ind	al-il	ind		1
<i>Gomphonema angustatum</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	unk		1
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O, U	5
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	27
<i>Gomphonema pumilum</i> (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		3
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	1
<i>Meridion circulae</i> var. <i>constrictum</i> (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K, T	10
<i>Navicula angusta</i> Grunow	Ogh-ind	ac-il	ind	T	1
<i>Navicula bryophila</i> Boye-Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	RI	1
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	1
<i>Navicula contenta</i> fo. <i>biceps</i> (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	9
<i>Navicula elginensis</i> (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O, U	4
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	14
<i>Navicula rhynchocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1
<i>Navicula seminulum</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB, S	4
<i>Navicula subcostulata</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		4
<i>Navicula tantula</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI, U	1
<i>Navicula viridula</i> (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, U	3
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	1
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		2
<i>Neidium bisulcatum</i> (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	RI	2
<i>Nitzschia</i> cf. <i>aerophila</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	unk		2
<i>Nitzschia angustata</i> (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	al-il	l-bi		2
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB, U	2
<i>Nitzschia dissipata</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1
<i>Nitzschia nana</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB, S	1
<i>Nitzschia</i> cf. <i>perminuta</i> (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	RI	2
<i>Nitzschia terrestris</i> (Pet.)Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	1
<i>Orthoseira roeseana</i> (Rabh.)O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	1
<i>Pinnularia appendiculata</i> (Ag.)Cleve	Ogh-hob	ind	ind	RB	1
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	1
<i>Pinnularia brebissonii</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	1
<i>Pinnularia intermedia</i> (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RA	1
<i>Pinnularia krookii</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RI	1
<i>Pinnularia lenticuloides</i> H.Kobayasi	Ogh-ind	ac-il	l-ph		4
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	1
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	1
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		2
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	6

表1 1号溝最下層の珪藻分析結果(2)

種 類	生態性			環境 指標種	7
	塩分	pH	流水		
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S	8
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1
<i>Sellaphora laevisissima</i> (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind		1
<i>Sellaphora pseudopupula</i> (Krasske)Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind		2
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	1
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	1
<i>Stauroneis tenera</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	2
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	4
<i>Surirella linearis</i> W. Smith	Ogh-ind	ind	ind		1
<i>Surirella ovata</i> var. <i>pinnata</i> (W. Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1
海水生種合計					0
海水～汽水生種合計					0
汽水生種合計					0
淡水～汽水生種合計					7
淡水生種合計					215
珪藻化石総数					222

凡例

H. R. : 塩分濃度に対する適応性	pH : 水素イオン濃度に対する適応性	C. R. : 流水に対する適応性
Ogh-Meh : 淡水-汽水生種	al-il : 好アルカリ性種	l-bi : 真止水性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種	ind : pH不定性種	l-ph : 好止水性種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種	ac-il : 好酸性種	ind : 流水不定性種
Ogh-unk : 貧塩不明種	ac-bi : 真酸性種	r-ph : 好流水性種
	unk : pH不明種	r-bi : 真流水性種
		unk : 流水不明種

環境指標種群

K: 中～下流性河川指標種, 0: 沼沢湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)

S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上は Asai, K. & Watanabe, T., 1986)

R: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI群、伊藤・堀内, 1991)

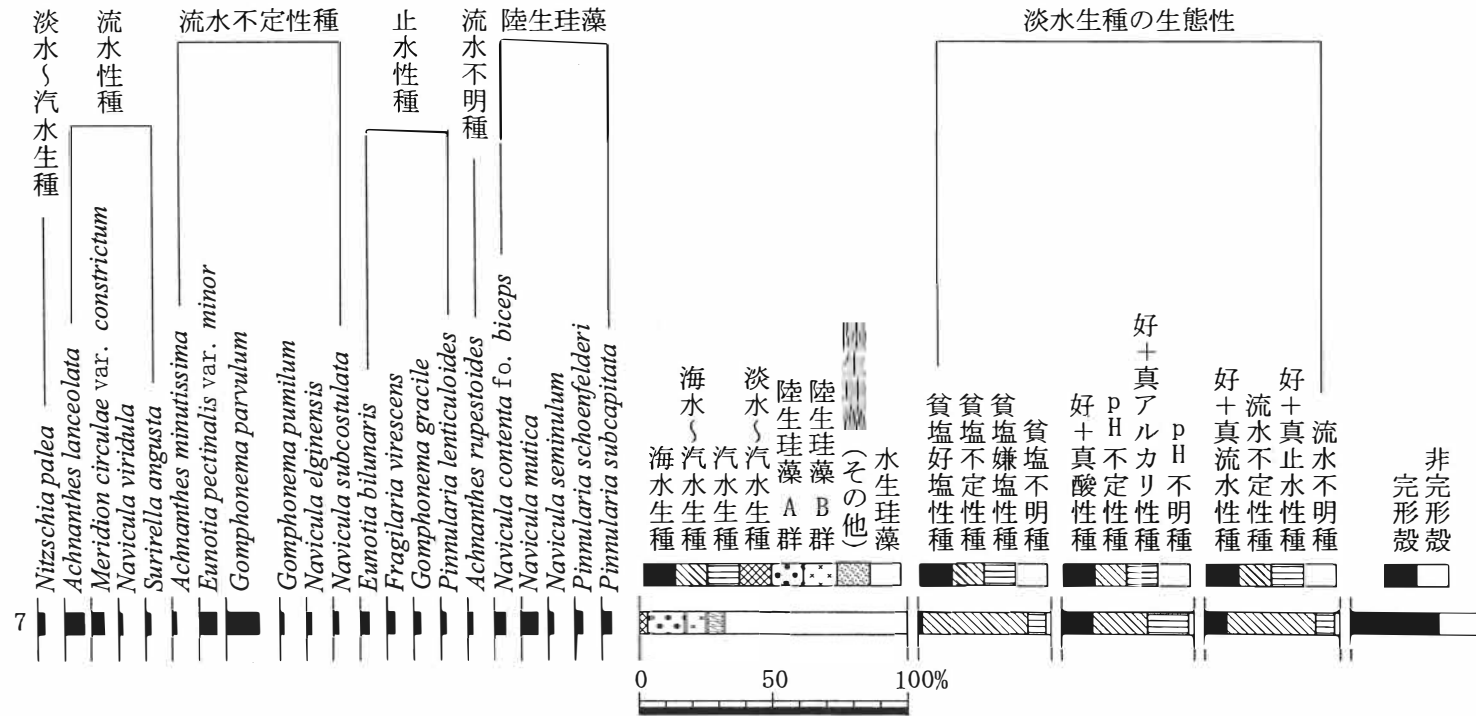
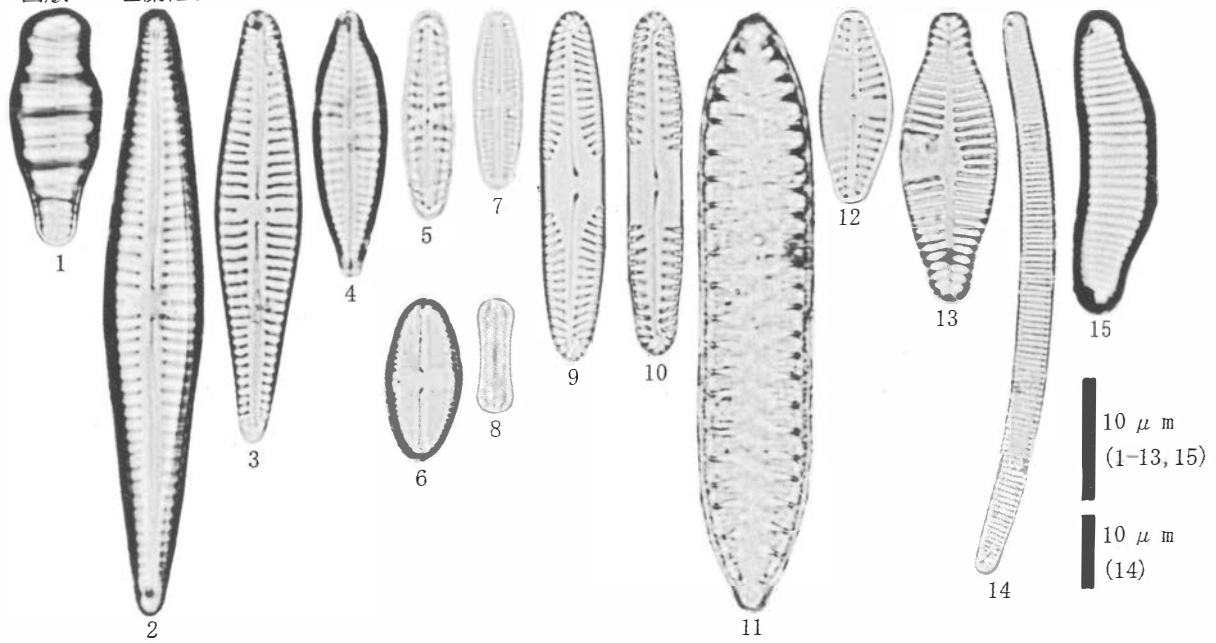


図1 1号溝最下層の主要珪藻化石群集

汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。

図版1 珪藻化石



1. *Meridion circularae* var. *constrictum* (Ralfs) V. Heurck (試料番号7)
2. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (試料番号7)
3. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (試料番号7)
4. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (試料番号7)
5. *Navicula subcostulata* Hustedt (試料番号7)
6. *Navicula mutica* Kuetzing (試料番号7)
7. *Navicula seminulum* Grunow (試料番号7)
8. *Navicula contenta* fo. *biceps* (Arnott) Hustedt (試料番号7)
9. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer (試料番号7)
10. *Pinnularia subcapitata* Gregory (試料番号7)
11. *Surirella angusta* Kuetzing (試料番号7)
12. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (試料番号7)
13. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (試料番号7)
14. *Eunotia bilunaris* (Ehr.) Mills (試料番号7)
15. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (試料番号7)

報告書抄録

ふりがな	けんえいたかひらちくほじょうせいびじぎょうかんれんいせきはっくちょうさほうこくしょ							
書名	県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書							
副書名	泉廃寺跡・荒井前遺跡・荷渡遺跡							
巻次	III							
シリーズ名	原町市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第29集							
編著者名	堀 耕平・二本松文雄・荒 淑人・藤木 海							
編集機関	福島県原町市教育委員会文化財課							
所在地	〒975-0012 福島県原町市三島町二丁目45 Tel 0244-24-5284							
発行年月日	西暦 2002 (平成14年) 年3月29日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	福島県原町市	市町村	遺跡番号					
泉 廃 寺 跡	第1次調査 泉字町・寺家前	07206	00097	37° 39′ 50″	141° 00′ 50″	19941201～ 19950703	4,640 m ²	県 営 ほ 場 整 備
	第3次調査 泉字町					19960422～ 19961023	1,034 m ²	
	第5次調査 泉字町					19961028～ 19970220	2,500 m ²	
	第7次調査 泉字町					19970818～ 19980309	17,000 m ²	
	第7次調査糠塚 泉字町					19980202～ 19980313 19980409～ 19980601	6,400 m ²	
	第9次調査 泉字町					19980420～ 19980522	2,100 m ²	
	第15次調査 泉字町					20001005～ 20001116	250 m ²	
荒井前遺跡	下高平字 荒井前	07206	00272	37° 38′ 40″	140° 59′ 40″	19960410～ 19961220	19,297 m ²	県 営 ほ 場 整 備
荷渡遺跡	下北高平字 荷渡	07206	00026	37° 39′ 10″	140° 59′ 40″	19951113～ 19951122	400 m ²	県 営 ほ 場 整 備
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
泉廃寺跡	官衙跡	奈良・平安 中世	掘立柱建物跡 柵列跡	土師器・須恵器・瓦 柱根・礎板			行方郡家跡	
荒井前遺跡	古墳 集落跡	古墳 奈良・平安	方墳・竪穴住居跡 掘立柱建物跡・溝跡	土師器・須恵器・ 土鈴・羽口・鉄滓				
荷渡遺跡	散布地	弥生	なし	なし				

原町市埋蔵文化財調査報告書第 29 集
県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ
泉廃寺跡・荒井前遺跡・荷渡遺跡
平成 14 年 3 月 29 日発行
発行 福島県原町市教育委員会
〒975-0012 福島県原町市本町二丁目 27 番地
印刷 有限会社ライト印刷